
秋桜

七地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋桜

【Nコード】

N1227R

【作者名】

七地

【あらすじ】

- 目覚める時に瞼の裏に浮かんだ秋桜が咲き乱れる光景。

これを見せたのは貴方ですか？私は目覚めていいのですか？ -

5年ぶりに戻ってきたこの街で、新しい私が始まる。

登場人物

↓登場人物紹介です。お話が進むにつれて人物・紹介項目が増えていく予定です。↓

東堂 梨桜：

16歳 12月14日生れ 私立 紫苑学院高等部1年生 身長：
163センチ 葵とは双子（姉）両親の離婚で父に引取られ北海道で暮らしていたが父の海外赴任を機に葵が暮す東京へ引越してきた。母は昨年病死。事故で大怪我を負い長期間入院した為留年。

宮野 葵：

16歳 12月14日生れ 私立 東青学院高校2年生 東青学院生徒会会長 身長：182センチ 梨桜とは双子（弟）両親の離婚で母に引取られた。母は昨年病死。チーム「青龍」トップ

三浦 愁：

17歳 私立 東青学院高校2年生 東青学院生徒会副会長 身長：
179センチ 葵の親友 チーム「青龍」幹部（ナンバー2）

小嶋 雅之：

16歳 私立 東青学院高校1年生 東青学院生徒会役員 身長：
174センチ チーム「青龍」幹部（ナンバー3）

藤島 寛貴：
ふじしま ひろき

17歳 私立 紫苑学院高等部2年生 紫苑学院生徒会会長 身長：
182センチ
チーム「朱雀」 トップ

大橋 拓弥：
おおはし たくや

17歳 私立 紫苑学院高等部2年生 紫苑学院生徒会副会長 身
長：180センチ
チーム「朱雀」 幹部（ナンバー2）

海堂 悠：
かいどう はるか

16歳 私立 紫苑学院高等部1年生 紫苑学院生徒会会計 身長：
175センチ
チーム「朱雀」 幹部（ナンバー3）

小橋 恵美：16歳 紫苑学院高等部1年生

笠原 麗香：16歳 紫苑学院高等部 1年生 梨桜が転校して
きた時は登校拒否だった。

宮野 慧：31歳 身長：180センチ 双子の叔父。大学の研究員

三浦 涼：27歳 身長：178センチ 愁の兄。梨桜の主治医

矢野 敬彦（タカちゃん）：梨桜と中学の同級生。

堀井^{ほりい}
円香^{まどか}・梨桜の親友。
敬彦の彼女

プロローグ

「愁、このデータは極秘だ。漏らすなよ、絶対に梨桜の素性を知られるな」

「もう対策済み。葵、それより早く行ってやれよ。待ってるぜ」

「悪いな」

「何言ってるんだよ、梨桜ちゃんはオレ達にとってはお姫様みたいなもんだろ？梨桜ちゃんを守るのは当然のことだ」

「・・・手え出すなよ？出したらクロス。チームの奴らにも言っておけよ」

「誰もおまえに逆らわねえよ・・・オレだってまだ死にたくないし・・・いいから早く行けよ」

「ああ、行ってくる」

.....

大好きなパパのお見送り、涙が出てしまいそうだけれど我慢した。日本に残るって決めたのは私だから。

「パパ、ちゃんとご飯食べてね？」

パパは笑いながら頷き、私と葵の頭を撫でた。

急な辞令でパパはイギリスへ赴任することになった。パパは私と一緒にイギリスへ行くか日本に残るか選ぶように話し、私は日本に残ることを選んだ。

「大丈夫、わかってるよ。葵、梨桜の事頼んだぞ？」

そう言ってパパは私と葵の頭を撫でた。

「ああ・・・任せといて、オヤジも体につけるよな」

「お前もヤンチャは程々にな。学校から呼び出されてもイギリスからは行けないんだからな」

「そんなへまはしないから大丈夫だよ」

パパは遠いロンドンへ旅立った。

「行っちゃったね」

パパが乗った飛行機を見送ると急に寂しさがこみ上げて来た。

「寂しい？」

葵に聞かれて眩しさに少し目を細めながら見ると、葵が私の顔を覗き込んだ。

サラサラの髪が風になびいている。

「葵がいるから平気だよ？葵は寂しい？」

フツと優しく笑った。その表情に少しだけ見とれてしまった。

いつの間にこんなに素敵な男の子になってしまったんだろう？身長も昔は変わらなかったのに今では見上げなければいけない程だ。

「梨桜がいるから平気」

二人でもう一度空を見上げた。

「帰ろう、梨桜」

葵が差し出した手を握った。

「うん、帰る」

温かい葵の手。この手は昔から変わらない、私の大切な分身。

5年ぶりに帰ってきたこの街で新しい生活が始まる。

やんちゃ集団 (1)

私が電車に乗るために出口へ向かおうとすると

「梨桜、こっち」

「葵？」

「迎えが来てる」

葵に手を引かれて空港を出た。

葵が連れてきてくれた場所に白いBMWが停まっていた、それを見て後ずさってしまった。

どうして高校生の葵のお迎えがBMW？しかもフルスモーク！？

「・葵？」

これって、この車って・怪しさ満点なんですけど！？
離れて暮らしていた5年間で葵に何があったの！？

「チームの車だから。早く乗れよ」

「チームってなに？」

「何言ってるんだよ、前に言っただろ？チームに入ったって」

私はブンブンと首を横に振った。

葵は眉根を寄せて訝しげに私の顔を覗き込む

「私が思ってるのと違うよ？葵」

「梨桜、どんなの想像してたんだよ？チームって言っただろ」

チームって暴走族みたいなものの事だったの！？バイクが好きだから、走るだけのチームに入ったんだと思ってた！

「訳わかんない事言ってるので早く乗れ」

葵は私を乗せると自分も乗った。

怪しさ満点のフルスモークのBMWは乗り心地はとても良かった。

「久しぶり、梨桜ちゃん」

助手席には栗色の髪の毛をした葵のお友達、三浦愁君がいた。

愁君とは私が北海道に住んでいた時から知っている葵のお友達で東京に遊びに来るたびに私も一緒に遊んでくれたりして仲良くしてくれている

「愁君久しぶり！元気だった？」

知っている人が乗っていて一気に安心してしまった単純な私を見て葵はバカにしたような笑みを私に向けた。

「オレは元気だよ。梨桜ちゃんも元気そう良かった」

かっこいい愁君はにっこりと笑った。

「愁君、お見舞いに花をたくさん送ってくれてありがとう」

「どう致しまして、葵から聞いてるけどあまり無理しちゃ駄目だからね？」

少し眉をひそめて私に教え聞かせるように言った。同い年なお兄さんみたい。

「ありがとう」

パパと北海道に住んでいた私は、半年前に事故にあった。

店で買い物していたら暴走した車が店に突っ込んできた

2人亡くなって私はショーカーのガラスが背中のおちこちに刺さり、ろつ骨を何本か骨折した。

医師には奇跡的に助かったと言われた。

背中に突き刺さったガラスは私の神経を傷付け、時々事故の後遺症に苦しむ。

「梨桜、横になっていいぞ」

長期間の入院で学校に通えなかった私は、高校1年生をもう一度やることになった。

「うん、そうさせてもらっね」

今の私は長時間、車や電車に揺られることは苦手だ。背中が痛くなってしまう。

葵に膝枕をしてもらい目を閉じた。

やんちゃ集団 (2)

私は、自分がどこへ向かっているか、葵と愁君が何を話しているか知らずに眠り込んでいた。

車中

「莉桜ちゃん眠った？」

「ああ ハウスに行って」

「梨桜ちゃん綺麗になったな」

「」

「弟も大変だな」

「愁、弟って言うな。梨桜がほんの数分先に生まれたただけだ」

目が覚めると、ベッドに寝かされていた。

「葵？」

葵を呼ぶと、ベッドの脇にあるソファから声がした。

「梨桜、起きた？」

「うん、ごめんね。熟睡しちゃったみたいだね」

ここはどこだろう？自分の部屋じゃない。

広いベッドで壁紙も部屋の内装も初めて見た。

「葵、ここどこ？」

「青龍の総長室」

「え？」

「青龍っていうのはオレが入っているチームの名前。ここはそのトップである総長しか入れない部屋」

ガバツと起きあがるとツキンと背中に痛みが走った。

「いたっ」

蹲ることもできず、痛みが走ったその姿勢のまま動けずに呼吸を止めて痛みをやり過ごした。

「梨桜！」

葵が駆け寄り支えてくれた。

「梨桜、大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

葵は背中をさすってくれた。
無理な姿勢になると背中が痛くなる。それは背中から全身に広がる息をすることもできなくなってしまつような痛みで、入院していたころよりは痛みが走る回数は減つたけれど不意に姿勢を変えたりすると背中が痛くなる。

「葵、ここは青龍の溜り場なの？」

「ああ チームハウスだよ」

葵は私の背中をさすりながら答えた。

「葵は暴走族の幹部なの？」

「暴走族とはちよつと違う」

葵 双子の弟がチームに入った事は聞かされていた。
パパの仕事の都合で住んでいた札幌からたまたま葵のところに遊びに来るとバイクに乗せてくれた。走ることが好きだけだと思つてた。

「梨桜ちゃん、葵は青龍のトップ。総長だよ」

「え？」

トップ？総長？

「宮野葵は青龍の総長、ちなみにオレは副総長」

「葵 葵が通っているのは東青学院だよな？有名進学校だよな」

涼しい顔をして葵は言う

「そうだよ」

いいの？そんなことしていいの！？勉強についていけるの？
葵もあの特攻服とか着ちゃうの？ 私、あれ好きになれないんだけど

「梨桜ちゃんが編入する学校も有名進学校だよね」

突然愁君が話を変えてきて少し不思議だったけど、私は頷いた。
私が編入試験を受けた学校は有名な進学校だと聞いていた。

「だってパパが制服が可愛いねって」

本当はそれだけが理由じゃないけれど、制服に惹かれたのも事実。
可愛いセーラー服だったんだもん

「バカオヤジ そんな理由かよ」

チツと舌打ちする葵は黒いオーラを纏っていた。これが総長のブラ
ツクオーラか？

「梨桜、もう平気か？」

私を気遣う葵はいつもの優しい葵で中身は変わっていないことに少し安心した。

「うん、大丈夫。ありがとう」

「話があるからここにきた」

葵と愁君がにっこり笑った。その笑みが黒い？

…愁君と葵が怖い。何か企んでいる！

残念なワタシ

紫苑学院 1年2組 これが私が編入するクラス

「転校生、自己紹介しなさい」

「東堂梨桜です。札幌から来ました。よろしく願います」

昨日、愁君は恐ろしい話しをした。

『紫苑学院は昔から東青学院のライバル校なんだ。去年まで男子校で今年から女子生徒を受け入れた。女子の人数が極端に少ない学校でもある。その学校に宮野葵の双子の姉がいる事を知られたら梨桜ちゃんの身が危険だ。絶対に素性を知られないように。いいね?』

時期外れの転入に加えて、体育の授業が受けられない私を快く受け入れてくれたこの学校。
なんていい学校なんだ!と思っていたらこんなところに落とし穴があっただ

『梨桜、学校にいる間はこれをかける』

葵から渡されたのは銀縁メガネ

『学校の帰りはオレか愁が迎えに行く。絶対に紫苑学院の生徒とは深く関わるな。特に生徒会は駄目だ。いいな?』

おさげの銀縁メガネの地味な女子高生になっちゃった私。せっかく

可愛いセーラー服なのに

葵のばか！弟のくせに生意気！しかも、極端に女子が少ないと聞いていた通り、私が編入した1年2組には2人だけ。

しかも！貴重な女子生徒は担任曰わく『登校拒否』らしい

クラスメイトはみんな男子。

しかも私が地味すぎるからか、周囲は声をかけてこない

遠巻きに私を眺めていてたまに溜め息が聞こえる。期待外れの転校生。そんなところだろうか？

私は地味な女子高生、友達になれそうな女の子はいない 帰りは葵か愁君の強制お迎えで放課後の自由はほぼ皆無！

私の楽しい女子高生ライフはどこへ行ったんだ！私も周りに気付かれないように溜め息をついた。

放課後、私を迎えに来てくれた葵に不満をぶつけた。

「葵、メガネとりたい」

「いいよ」

あっさりと言い葵は私からメガネをとり、結んでいた髪の毛を解いて手櫛で整えてくれた。

「着替える」

葵に紙袋を手渡された。念には念をいれるんだそうだ。

私は公園のトイレで着替えた

どこの制服かは知らないが、どこにでもあるようなブレザータイプの制服

葵と愁君の力のいれようは相当なもので私は学校、放課後、プライベートと3段階の格好にならなければいけない羽目になった。

着替えを終えてトイレから出ると葵は私にメガネを渡した

銀縁メガネから替えてセルフフレームのメガネをかける。髪はおろしたままでいいらしい

迎いの車に乗り込み、不満を爆発させた

「こんな面倒なのイヤ！葵の学校に転校したい」

こんな生活は不便で面倒くさい！私の楽しい女子高生ライフを返せ！

「無理言うなよ。男子校だ」

「だって、女子がクラスで私1人なんだよ！？しかもあんなに地味な女子高生今時いないよ！」

「梨桜の身を守るためだ。我慢しろ」

偉そつに上から視線で冷たく言い捨てた。

何よ生意気！

「・弟のくせに勝手に大きくなって偉そつに生意気！」

そう言つと、ゴン！と頭突きをされた

「いったあゝい」

運転手とルームミラー越しに目が合つと彼は驚いていた。

「葵、横暴！」

「うるさい ・ 買い物行くんだろ？」

私は頷いた。

買い物に連れて行けと昨日私が駄々をこねたのを思い出した。

車が繁華街で止まり、葵が先に車から降りた。

「行くぞ」

葵が差し出したの手をつかんで車を降りた

「夕飯の買い物もしたい」

「うん」

街中を歩いていると視線が痛い。女の子から視線を向けられ、目があうと睨まれる

“何であんな女が隣にいるの？”皆の目がそう言っている。

「葵って有名人なんだね」

「いちいち気にしていたらキリがない。変装して正解だったろ？」

頷いて葵を見上げた。葵も伊達メガネをかけているけどあまり意味がないような気がする。

葵と買い物をして最後にスーパーで夕飯の材料を買ったが葵はスーパーでも注目されていておば様達の熱い視線を浴びていた。

「学校帰りに梨桜と買い物するの久しぶりだな」

葵は買い物袋を持ってくれた。事故にあってから重い物を持たせないように気を使ってくれる。口は悪いけど優しい弟だ。

「そうだねえ…前はほとんど毎日一緒に帰ってたもんね」

葵と2人の買い物も懐かしくて、またこうして生活できることが幸せだった

私達はいつも2人一緒だったもんね、これからも一緒だよね…

お兄さんの言いつけ(1)

地味子に徹して1週間

徹底した変装の効果か最初に葵や愁君が心配していたような事も起こらずにいた。

今日は学校が午前中で終わる土曜日、迎えの車を待っていたけれど連絡が来ない…

何時も図書室で葵か愁君からの連絡を待っているけれど今日はなかなか連絡がこない

お腹すいた ・先にウチに帰ってもいいよね

図書室を出て葵の携帯に“ お腹すいたから先にかえるね ”とメールを送った

靴入れがある校舎を目指して歩いてみると、向かいから上級生らしい生徒が数人こちらに向かって歩いてきた。私は思わず上級生も驚いて振り返るくらいの地味子だから下を向いて通り過ぎた。かえって目立っているような気がするのはいのせいだろっか？

手に持っていた携帯が震えた。電話の着信だったけど上級生とすれ違ってから通話ボタンを押した

「もしも『梨桜!! 勝手に帰るな!』

耳がキーンと痛くなった。

『梨桜! 聞いているのか? 梨桜!』

思わず後ろを振り返るとすれ違った上級生が振り返ってこちらを見ていた。聞こえたんだ…

「聞いている…まだ学校にいるよ？一人で帰ってもいいでしょ」
歩くスピードを速めた

『今愁が迎えに行ったからいつもの場所で待ってる！』

「わかった。じゃあね」

電話を切るとすぐに愁君から電話がかかってきた

「もしもし…梨桜です」

『梨桜ちゃん？ごめんね』

申し訳なさそうに言った。愁君が気を使う事じゃないのに かえってこちらが申し訳ないよ？

「ううん、こちらこそごめんなさい。だよ？ごめんねバカ弟で、愁君、仲良くしてくれてありがとう」

くっくっとして電話の向こうで笑っていた

『梨桜ちゃん、学校の前につくから早くおいで』

「はっ」

校舎を出て髪を解いて歩くと校門から少し離れたところに車が停まっていた。

前のようなBMWではなく普通の乗用車だった

「梨桜ちゃん」

窓が少し開き愁君の顔が見えて車に乗るとすぐに走り出した

「葵が委員会の仕事が入ってさ 連絡が遅くなったんだ。ごめんね」

私はメガネを外して首を横にふった

「迎えに来てくれてありがとう、愁君」

「おばさんのお墓参りに行きたかったんだよね。これから行くのか」

私と視線を合わせてにっこりとほほ笑む

「うん、ありがとう」

本当は葵と一緒に墓参りをしたかったが仕方ない。また一緒に来ればいい

お寺の近くに来ると愁君は私にロングパーカーを渡した

「このエリアは朱雀の縄張りだからね その制服を着てオレと一緒にいるところを見られると面倒な事になるから」

「朱雀？」

それも不良のチームなの？

「梨桜ちゃんの高校に朱雀のトップと幹部がいるんだよ、ウチに青龍のトップと幹部がいるようにね。だから用心に用心を重ねてるんだよ？」

そういうことは先に教えて欲しいよ愁君　じーっと愁君を見ると、私の言いたいことが分かったのか苦笑いを返してきた。

「この話をしたら梨桜ちゃんが怖がると思って」

「仲悪いの？」

愁君が渡したパーカーに袖を通しながら聞いた。

「ライバルだからね　ごめんね、怖い思いをさせて。梨桜ちゃん、花を買いたいんだけど向かいのコンビニに朱雀がいるんだ」

申し訳なさそうに言う愁君に笑いかけた。

「大丈夫、一人で買って来るから」

そう言っつて車のドアを開けると愁君は申し訳なさそうに笑った。

「ごめんね　梨桜ちゃん」

葵も愁君も心配しすぎだよ。札幌では普通に過ごしていたんだから

花屋に入ってお墓参り用に花束を作ってもらい店の外に出た。

花屋の向かいには愁君の言うとおりにコンビニの駐車場に何台かバ

イクが止まっていて思わず凝視してしまった。髪の毛がカラフルだ
ヤンキーっていうかんじ

オレンジとかピンクとかすごいなあ

札幌にいた時は女子高だったから見たことなかった。葵のチームに
もあまり派手な頭はいなかったような気がする

「梨桜ちゃん！早く」

車の窓が開いて愁君から呼ばれた

「ごめんね愁君」

「ダメだよ。あんな風にじっとみちゃ、危ないよ？」

愁君に諭された。愁君は本当にお兄さんみたい…

「うん」

お兄さんの言いつけ(2)

お墓参りを終えて、青龍のチームハウスにやってくると、愁君は葵と自分が通っている学校と私が通っている学校の関係について教えてくれた。

私が通っている学校は葵のチーム“青龍”とライバル関係にあるチーム“朱雀”に所属している生徒が多くて幹部もいるらしい。

そうは言っても私の通う学校も有名進学校。不良と言われても見かけは普通の真面目な高校生と変わらない。

普段学校にいる時もママのお墓参りに見かけたようなオレンジやピンの頭をしたカラフルな人は見かけなかった。

週が明けて学校に来たけれどやっぱり、誰が朱雀に所属している生徒で誰が一般の生徒なのか私には見分けがつかない。

週末に愁君から教わったこと。

- 1．男子生徒と必要以上に会話をしてはいけません。
- 2．男子生徒と目を合わせてはいけません。
- 3．男子生徒を下から見上げてはいけません。

愁君から教わった事を実践して昼休みと放課後はなるべく図書室にいるようにした

放課後は葵か愁君から連絡が来るまで課題を済ませるのが日課になり、今日も図書室にいと男子生徒の声が聞こえた。

『なあ、聞いたか？』

『青龍の頭の事か？』

『ああ、俺も聞いた』

『送り迎えしてる女がいるらしいじゃん、あの宮野がだぜ？』

宮野って葵の事？

『ウチの総長も顔いいけど、宮野もいい顔してるよな。あいつが送り迎えする女なんてどんだけ可愛いんだよって思わねーか？』

『宮野って本命彼女は作らないんだろ？』

『ウチのトップだって本命は作らねーだろ』

『見てみてーよな、宮野が入れ込んでる女』

そっと教科書をしまつて図書室を出た。朱雀関連には関わらない方が身のためだ

廊下を歩いていると携帯が鳴った

「もしもし」

『梨桜、今どこ？』

周りに誰もいないのを確認して口にした

「学校 ねえ 噂になっているみたいよ？大丈夫なの？」

『噂なんか関係ないだろ？一人で帰るのは許さないぞ。早く来い』
下駄箱まできて安心したのかつい、いつもの調子が出てしまった

「横暴だよ、いつからそうなったの？」

『梨桜のくせに』

「何よ弟のくせに」

『いいから早く来い！』

電話が切られた

「もう」

視線を感じて後ろを振り返ると男子生徒がこちらを見ていた

「東堂さんていつも図書室にいるよな」

クラスメイトの海堂悠がにこにここと笑いながら私に声をかけた

「課題を済ませていたの」

愁君が教えてくれた

『梨桜ちゃんのクラスメイトの海堂悠は朱雀の幹部だから気をつけて。彼は朱雀のナンバー3だよ』

「真面目だな、東堂さん」

彼の事を愁君から聞いていなければ彼が朱雀の幹部だとはわからなかっただろう。

外見は普通の明るい生徒でどちらかというところ可愛い顔立ちをしていて女の子に人気がありそうだった。

「そんなことないよ」

早速、愁君の言いつけを破ってしまった。

「悠、学校でナンパは良くないよ」

後ろから聞こえた声に振り返ると男子生徒が2人いた

「あんと一緒にされたくないよ、拓弥さん」

「悠、生意気」

拓弥と呼ばれた人とその隣に立つ人は2年生の襟章をつけていた学年は一つ上だけど同じ年か

「悠、この子誰？」

「オレのクラスに転入してきた東堂梨桜ちゃん。真面目なんだから拓弥さんちよつかいだすなよ」

「うるせ。梨桜ちゃん、て呼んでいい？オレは大橋拓弥こっちは知っているだろ？」

隣を差してにつこり笑うけど私は首を傾げた

「え！東堂さん、この人知らないの？」

女好きする顔だよね　と思いつながら大橋拓弥を見た。長めの前髪を無造作にかき上げる仕草に色気がある。少しだけ垂れた目が人懐こそうな雰囲気を出している。一見チャラそうな雰囲気をだしているけれどにこにこしながらも私を値踏みするように見ている。

「ごめんなさい」

実際に顔を見るのは初めてだけど、大橋拓弥の事も愁君から聞いていた。朱雀のナンバー2副総長

という事は残るこの人は朱雀のトップ？

「こいつは藤島寛貴、生徒会長」

私はぺこりと頭を下げた

藤島寛貴は私をじっと見ていた。そんなにメガネをかけたおさげ髪の女が珍しいのだろうか？

それにしてもこの男の顔も整っている。落ち着いた雰囲気を出していて、ああこの男がトップなんだろうな　と納得してしまった
同じ不良のリーダーだけど、葵とは両極にいるように感じた。

それにしても、葵と愁君から言われていた。接触してはいけない人達に接触してしまった

きつと葵から怒られるんだろうな　愁君からもお小言言われちゃう
んだろうな

朱雀（1）

早く解放してくれないかなあ　　と思いながら海堂悠を見ると

「今日も図書室にいたんだろ？いつも何してるの？」

海堂悠がにこりと笑いながら聞いた。さっきも私が図書室にいるって話してたけど、さりげなく誰がどこにいるかチェックしているんだ

「課題とか…かな。教科書が違うから戸惑っちゃって、学校なら先生にすぐ聞きにいけるし…ね？」

口から出任せを言ってみた。

私は本当なら高校2年生。去年この教科書を終わらせている　人を待つための時間つぶしとは気づかれたくない。

「やっぱ真面目だなっ今度ノート写させて？」

私に笑いかける彼はどうみたって、かつこいい男子高校生だ。彼に愛想笑いを返しながら心の中でため息をついた。

不良とか普通の生徒とか考えて接するのが面倒くさくなってきた。朱雀に所属しているからなんだというんだ、ここの学校の生徒には違いない。愁君や葵が言うように接触しないで過ごすなんて無理だ。要は私が葵の双子の姉っていうことがバレなければいいわけだし、2段階も変装しているんだからバレないんじゃない？

やーめた。と決めて海堂悠に『それじゃあ』と言おうとしたら、ま

るで私の考えを見透かしたかのように携帯が震えた。

サブディスプレイをチラリと見ると葵だ
今出られない。

「電話鳴ってるよ？出なよ」

大橋拓弥はにっこり笑った
放っておいてくれていいのに

「すみません。失礼します」

またぺこりと頭を下げて電話をとった。こつなったら話ながら彼らの前から消えよう

「はい」

『梨桜？』

双子だからだろうか？声のトーンで何を言いたいのか分かってしま
う。

「うん 今から帰るから」

『わかった』

「じゃあね」

『走るなよ』

「はいはい」

電話を切った。3人の視線が痛い。

「梨桜ちゃんの彼氏？」

大橋拓弥が聞いた。笑っているけどやはり目は笑っていない。

「いえ、違います」

何でだろ？さつきから藤島寛貴が私を見ている。目を逸らしてくれない

どんなに見られても私は葵とは似てないからばれないよね？

「途中まで一緒に帰ろうか」

お断りします。と心の中で言ってみた

「拓弥さん、オレナンパするなって言っただよね？」

ナイス！海堂悠

「すみません、夕飯の買い物があるので失礼します」

私は3人を置いて校舎をあとにした
また電話

「はい」

言われなくても帰るってば

『梨桜ちゃん？』

愁君だ。葵だと思って思いっきり無愛想に電話に出てしまった

「ごめんなさい、葵かと思った。どうしたの？」

『待ち合わせ場所変えようか 梨桜ちゃんは振り返らないで欲しいけど、後ろから朱雀の総長達が歩いてくる』

「そう 私駅前のスーパーに行くね」

『わかった。迎えに行くから、重いもの持ったらダメだよ』

けがをしてから重いものを持つのが苦手になった。葵は買い物に付き合ってくれて荷物を持ってくれる。

図書室での噂はきくとそれを紫苑学院の生徒に見かけられたのだろう

「うん、ありがとう愁君」

朱雀（2）

レジで会計を済ませて食材を買い物袋に移してカートに乗せて屋上駐車場に行くと葵が待っていた。

「着替えてこい」

ダミーの制服に着替えて車に乗り先程の出来事を話すと2人とも渋い顔をした。

この渋い顔を見ると、朱雀でも一般生徒でも変わらずに接しようと思った私の考えは甘すぎるのだろうかと不安になってしまう。

「表の通りに朱雀の車がいるんだよ」

葵が面白くなさそうに言うと

「オレと葵が乗っているのを知っていると思う」

愁君が面倒臭そうに言った

「学校で葵の事噂されてたよ？迎えに来ている女がいるとかなんか」

「ああ 気を付けてただんだけど朱雀のシマに出入りしたのが見られたみたいなんだ。特に何かあるわけじゃないんだけど、警戒するために朱雀の幹部も張っているんだろうな」

不良もいろいろ大変だね、普通にしていればそんなこと考えなくて

いいのに。わざわざ面倒事に首を突っ込むなんて。そんなことを考えていると愁君が真面目な顔をして言った。

「梨桜ちゃん、オレがいいって言うまで顔が見えないように葵にもたれてくれる？」

葵の腕が私の肩にまわり、引き寄せた。そこまでする必要があるのでだろうか

「この体制で背中つらくないか？」

「うん、大丈夫だよ」

スーパーの駐車場から出て表通りを通った時に

「朱雀の車が前にいますね」

運転手の人が言った

「トップからナンバー3まで揃ってるんだろっな」

愁君はおかしそうに言い葵は黙っていた

「後をつけてきました」

「無視しろ。こっちからは何もするな」

葵の冷たい声になんだか私までときどきしてきた

「梨桜、絶対に顔をあげるなよ。あっちはフルスモークだけどこっ

「ちは普通車だ」

「こくん、と頷いて葵の胸に顔をうずめていたけど、背中が辛くなってきた。少しだけ身じろぎすると、葵が背中をさすってくれた。」

「きついか？」

「うん、ちょっと」

斜めになっている体制が苦しくなってきた

「身体を持ち上げるから顔上げるなよ」

「ん」

膝の下に腕をかけられると強い力で身体が持ち上げられ葵の膝の上に乗せられると、身体がまっすぐになり少し体が楽になった

「これでいいか？」

「うん。ありがとう」

背中をさすってくれたから葵の首筋に顔をうずめた

「梨桜ちゃん、左側を並走してるから絶対に顔あげないで」

愁君が言つと葵の手が私の頭にまわり自分にぐっと引き寄せた

「桜庭、そこ右に曲がれ」

愁君が低い声で言い運転手の人、桜庭さんという名前なの初めて知った

「はい」

と返事をした桜庭さんの声は強張っていて、そんなに不良とは恐ろしいのかと思って少しだけ顔を上げたかったけれど葵の手がそれを許してくれなかった。

「離れました」

桜庭さんの声があると愁君がクスリと笑った。

「梨桜ちゃん、いいよ」

その声で葵の手の力が緩んだので、ふわあつと顔を上げてぶるぶると顔を振ると葵が呆れたような顔をして見ていた。

「葵がぎゅーってするんだもん、苦しかったよ」

「女を膝に抱いていてそうしなかったら変だろうが」

なるほど 小さいころの膝抱っことは違うんだね

それからマンションまで送ってもらい夕飯を作って食べた。

葵は『戸締りして寝てるよ』と言って出かけてしまった。夕飯は一緒に食べるけれど、食べた後は愁君たちのところ、青龍のチーム八

ウスへ出かけてしまう。
帰ってくるのは夜中頃で、どうやったら学校で成績を落とさずにい
らるのかが不思議だ
私には理解できない世界。その世界に葵が入ってしまい取り残され
たような気持になってしまう

朱雀（3）

次の日私は熱が出てしまい学校を休んだ。怪我をしてからよく熱を出してしまう。

今回はそんなにひどくならなかったので夕方方には熱も下がってリビングで休んでいた

葵が帰ってくる時間が近づいたので夕飯の支度をしようと思って冷蔵庫を開けたら

「おかずになるような食材ないじゃん！」

財布と携帯を持って近くのスーパーに行くことにした

Tシャツに細身のコットンパンツを合わせて、ソファにおいてあった葵のパーカーを羽織って外に出た
ずっと寝ていて乱れた髪は緩くサイドで結ぶだけ おしゃれとは程遠い恰好をしてスーパーで買い物をした

今日の夕飯は手抜きをさせてもらおう。葵、ごめんね？明日はちゃんとおいしいごはん作るからね

スーパーを出て家の近くのコンビニに寄って雑誌を選んでいるとガラス越しの駐車場に黒い高級車が止まった。

ガラス越しの正面に停まった車の助手席に座っていた男を見て思わず俯いた。

“海堂 悠”なんで彼がここにいるの？

後ろの座席に2人乗っているのが見えた。海堂悠は車のドアを開けコンビニに入ってきた。私の後ろを通り飲み物が入っているガラスケースの前で立ち止まった

私はしゃがんで下の棚に置いてある棚から本を探すふりをした。

彼の視界から消えたかった。ガラスの扉が開く音がしてカシャンと缶を取り出す音がした。

“ボタン”と扉が閉められ彼がレジの方へ歩いて行くと、運悪くポケットに入った携帯が鳴った。

この音は葵専用の着信メロディだ。

背中を痛めないように慎重に立ち上がり、足早にコンビニを出て車が駐車されている反対側へ歩き通話ボタンを押した。

『おい、今どこにいる』

おもいつきり不機嫌な声だった

「コンビニ」

『熱出したのにふらふら出歩いてんな。迎えに行くから待ってる』

「こないで。今来ちゃダメ」

信号待ちをしていると、背後で車のドアが閉まる音がした

『バカなこと言うな。動かないで待ってるよ』

目の前で朱雀の幹部を乗せた車が反対車線へ右折した

「来ないで、今日の前に昨日の車がいるの」

『梨桜？』

窓が少しだけ開いていた。

フルスモークでこちらからは窺い知れないけれどきつと藤島寛貴と大橋拓弥も乗っている。私は自分の爪先を見ながら話した

「大丈夫だから。少しだけ遠回りして帰るから」

信号が変わり私は歩き出した。

助手席に海堂悠を乗せた車は信号待ちをしている。私は左手で携帯電話を持ち、左耳にあてたまま前だけを向いて歩いた

「葵、大丈夫だよ。普段あんなに変装してるんだから」

車の前を通り過ぎると、私は車が入ってこれない一方通行の道を通り、少し遠回りをしてマンションへ帰った。部屋につくと葵はものすごく怒っていた

「…何がそんなにあぶなっかしいの？私だって北海道では一人でなんでもできてたんだよ？」

つい、言ってしまったその言葉に葵は更に怒った

「オレの双子の姉で、その容姿は敵チームに狙われるんだよ。おまえはオレの唯一の弱みだ。わかってるか？」

容姿云々はわからないけれど葵にとって私が唯一の弱みだということならそれは私にとっても同じことだ

「私だって葵が唯一の弱みだよ？本当は危ないことはやめてほしいと思ってるよ？」

そう言ったら苦しそうに葵は眉を寄せた

「今、それはできない」

今までなぜチームに入ったのか聞いたことはなかったけれど、その苦しそうな顔を見て聞いてはいけなかったのかなと思った

「葵？」

葵は私をぎゅっと抱きしめた

「梨桜、ごめん。オレがチームに入ってなければもっと自由にできるし危険なことだって減る。わかってるけど今はどうしようもないんだ。ちゃんと守るから」

どうしてそんなに苦しそうに言うの？

私は葵の背中をポンポンと叩いた

「葵、ちゃんと守ってね？私はまだ身体が本調子じゃないけど面倒見てね？」

私の背中に回った腕に一瞬力がこもった

「当たり前だろ。一生だって面倒見てやる」

「仕方ないから葵が結婚できなかつたら私も面倒見てあげるよ」

くすくす笑うと葵の手が私のお尻をびしっと叩いた

「生意気な口だな」

「だってお姉ちゃんだもん」

「たった数分しか変わらないだろーが」

「でもお姉ちゃんだもん」

二人でくすくす笑ってスーパーで買ったお惣菜でご飯を食べた

朱雀（4）

翌日、登校した私は小さくため息をついた。女の子がいなくてつまらない。

地味な私は「おはよう」の挨拶に同じ「おはよう」返事が返ってくるだけで、特にクラスメイトと会話があるわけでもなく、いてもいなくてもあまり変わらない存在だった。

休み時間も特に会話があるわけではなく、お昼休みは、担任が私が一人で窮屈な思いをしているからと開けてくれる家庭科室でのんびりとお弁当を食べ、少しだけお昼寝をしたりして時間を過ごした

長い間入院していた私はすっかり体力が落ちていた。

事故に会う前までは水泳部に所属していつまでも泳いでいられるんじゃないかと思うくらい元気だったのに、今ではお昼寝しないと体力が持たない身体になってしまった。

留年したことは仕方のないことだけど、休みが多くなってまた留年なんていうことにだけはなりたくないから、なるべく体力を温存しておこうと思った。

予鈴が鳴り自分の教室に戻っていると、後ろから声をかけられた。

「東堂さん、どこで昼飯食ってんだ？」

海堂悠だった。

「空き教室だよ」

男だらけの食堂に行く勇氣もないし、自分から面倒事に首をつっこみたくはない。

「今度一緒にお昼食べようぜ」

「ありがとう」

一応そう言っておいた。

放課後図書室にしていると葵からメールがきた。今日は随分早いなと思
い携帯を開くと

“ 駅で待ってる ”

急いで後片付けをして学校を出た

駅のコインロッカーに入れておいた制服をとりトイレで着替えて外
へ出ると

今日はフルスモークの高級車が止まっていた。

私が車に近寄ると運転席から桜庭さんが出てきて後部座席のドアを
開けてくれた

「おかえりなさい、梨桜さん」

「桜庭さんいつもありがとう」

ぺこりと頭を下げて車に乗るとドアを閉めてくれた。中には葵が乗っっていて、制服ではなく私服を着ていた。

「葵、どしたの？」

「梨桜、これに着替えて」

髪袋を渡されて中を見ると私の私服が入っていた

「梨桜も放課後に街歩いたり買い物したりしたいだろ？」

葵に抱きついた

「ありがとう葵！うれしい」

私の事を考えてくれていることが嬉しかった。

トイレで変装を解いていつもの私に戻って車に戻ると葵も車から降りた。

「葵の服も見たいな」

「オレのより自分の見ろよ」

私は葵の服を選ぶのが好き

「二人のを見ようね」

そう言って葵の腕に自分の腕をからめた。葵大好き

「いっぱい買ったね」

「オレのはいいって言ったのに」

シヨップの紙袋を持ってきている葵は少し眉をひそめて私を見る

「いいじゃない、葵はかっこいいんだからいろんなのが似合ってるやましいよ」

それにしても私の服を選ぶときの葵は父親のようだった。パパはあまりうるさくないからパパ以上か 丈が短すぎるとか露出が激しいとか

「梨桜、もつと食べる」

久しぶりに外でご飯を食べた。葵はハンバーグで私はオムライス。

「おなかいっぱい。もう入らない」

食べきれなくて残したオムライスを葵は食べてくれた。男の子って良く食べるよね だからこんなに大きくなったんだらうか？

「葵、今身長いくつ？」

私が残したオムライスをあつというまに食べた葵は残っていた自分

のハンバーグを食べていた。

「180くらいかな」

「それ以上大きくならないでね？」

『は？』と葵は目を少し開いて私を見る

「それ以上差がつくのはなんか悔しい」

葵はすっかり大きくなっちゃって、中学くらいまでは同じだったのに

「バカかおまえは。男と女なんだから当たり前だろ。親父だってでかいだろ」

確かにそうだけどさ

「パパと同じくらい？」

「この前会った時に目線が同じだったな」

やっぱり悔しい

「だったら食べ。ほら」

フォークにハンバーグを刺して私の口元に持ってきた

「でかくなりたいんだろ？食べ」

口を開けるとハンバーグが入れられた

「おいひい」

「もつと食べて体力つけなきゃだめだ」

頷いた。

わかってるんだけど、なかなかうまくいかないんだよ
心配ばかりかけてごめんね

「おなかが苦しい」

お店から出て満腹になったお腹をさすっていると葵はイヤそうな顔
で私を見ていた。

「梨桜、オヤジ臭いことするなよ。ほら、帰るぞ」

「少し歩きたい。散歩して帰ろう?」

いつもならすぐにタクシーに乗るけど今日の葵は私のわがママをき
いてくれた。

歩いていると“チツと”葵が小さく舌打ちをした。

どうしたんだろう?と思つて葵を見ると通りの横を見ている。私も
そちらをみると…喧嘩?

このまま歩いていくと喧嘩している横を通らなければいけない。

「めんどくせえ」

一人に対して四人が殴り掛かったりしている。

「一人に四人て卑怯じゃない？」

「お前は見るな」

葵は低い声で言った。

「ねえ葵、あれは卑怯だよ」

私がじーっと葵を見ると黙っていた

「」

「葵？あれは卑怯だよな？」

無言になっている葵の袖を引いた

「はあ」

すごく大きいため息をついて私にシヨップの紙袋を持たせると私に言い聞かせるように顔を覗き込んで言った。

「すぐに戻ってくるからここにいろ。動くなよ？」

私が頷くと葵は走って行った。

そうして一人に対してなぐったりしている四人に声をかけると、四人のうち、一人が葵に殴りかかると葵の足が空を切り、男を蹴りと

ばした。

あっという間に四人を殴り飛ばすと男たちは逃げて行った。
もう大丈夫だと思つて葵に近寄つていくと殴られていた人は口の脇から血を流していた。

「大丈夫？」

私がしゃがんでハンカチを出して男の子の口にあてると葵が低い声で聞いた。

「おまえどこのチームだ？」

殴られていた人は顔をしかめながら葵を見上げて、驚いていた。

「朱雀 っていうかあんた」

「上にはオレのこと黙ってるよ？」

葵が私の腕をつかんで立たせた。

「帰るぞ」

「うん。あ、そのハンカチは返さなくていいらね？ちゃんと手当してね？」

男の子はじーっと私を見ていた。この人も同じ学校の人なんだろうか？

「ほら、帰るぞ。こいつの仲間が来ると面倒だ」

葵に手を引かれながら彼に手を振ると、手を上げて答えてくれた。

「お大事にね！」

葵は小さく舌打ちをした。

「思ったより早く来たな」

「誰が？」

葵の視線の先を見ると、反対車線からバイクが数台きた。

「朱雀だよ」

葵がタクシーに手を上げて止めたとき、大型バイクはUターンをした
2人かあ

「梨桜、乗れ！」

タクシーに乗せられるとき、バイクにまたがった男と目があつたよ
うな気がした。

・青龍のトップが紫苑の近辺で目撃されています。女を迎えに来ているようです。

その報告を受けてオレ達は驚いた。

拓弥さんは飲んでいたコーラを吹き出しそうになりむせていた。

「その情報は確かか」

朱雀トップの寛貴さんは表情を崩すことなく言った。

「はい。いつもの車ではなく普通車に乗っているようです。隣には女が乗っている事があるそうです」

「学生か？」

“朱雀”と互角の実力を持つ“青龍”チームのトップ、宮野は本命の女を作らないことで有名だった。驚いているオレ達に情報担当は更に驚かせるようなことを言った。

「はい。こちらあたりではみない制服です。頻繁に見られているので送り迎えをしているんじゃないっすかね」

あの氷のように冷たい青龍のトップが女の送り迎え!?

嘘だろ…

「念の為に調べておけ」

数日後

- 宮野がいます -

そう報告を受けたオレ達はそこへ向かった。

そこはスーパードで、青龍の車は立体駐車場に入っていたというから、出口のそばでしばらく待っていると宮野を乗せた車は出てきた。

「後をつける」

寛貴さんが言い乗用車の後ろを走った。

「助手席に三浦がいる。後部座席には…女か？」

少し走った時に

「並べ」

寛貴さんが言い乗用車に並んだとき自分の目が信じられなかった。

“ヒュッ”と拓弥さんが口笛を吹いた。

宮野が女を膝に乗せて抱きよせていて、背中を撫でながら、自分の首筋に顔をうずめた女に何か話している。

三浦は携帯をいじっていて気にしている様子はない。

「あの宮野がねえ、ブレザータイプの制服か…どんな女だろうな」

拓弥さんが楽しそうに言った。

「寛貴、楽しくなってきたな」

寛貴さんに声をかけたが返ってきた言葉は

「関係ない。もういい 行くぞ」

素っ気ない言葉だった。

数日後、オレ達がチームの溜まり場にいるとき、下の奴らが襲われたと連絡が入った。

「悠、行くぞ」

寛貴さんはそう言い、幹部しか入れない部屋から下におりた。下の奴が襲われてもチームの総長自ら動く事はあまりない。でも最近チームの仲間が襲われる事が続いている
寛貴さんと2人で襲われたという現場に向かった

そこにつくとタクシーが走り去った。

どうして何も無いこんなところにタクシー？と思いながらバイクを止めて仲間のところに駆け寄ると

そいつは電柱にもたれて座り込んでいた。酷く殴られたようだ

「おい、誰にやられた？」

寛貴さんがしゃがみ込んだ聞いた

「…わかりません。いきなり4人できて…」

そいつの手にはハンカチが握られていた。女ものだ

「おまえそのハンカチどうした？」

オレが聞くと小さく笑ったが傷が痛むのかすぐに顔をしかめた

「青龍のトップが…助けてくれて…これは一緒にいた女の子に
痛そうに顔を歪めた

「女の顔を見たのか」

「はつきりとは見れなかったけど、可愛かった…」

とりあえず倉庫に運び事情を詳しく聞いた

4人がかりで襲われているところに宮野が現れて襲ってきた奴らを
ボコボコにしてそいつらは逃げたらしい。

どこのチームか聞かれて朱雀の人間だと知ると上には黙ってると言
われて女の子の声がしてハンカチを差し出されたそうだ。

“返さなくていい” そう言われて見た女の子は可愛く笑っていて、
宮野に手を引かれてタクシーで帰った。

オレ達が到着したときにいたあのタクシーは宮野達が乗り込んだタク
クシーだったということか

「宮野が人助けなんて珍しいな」

拓弥さんが言っつて煙草に火をつけた

「益々どういう女が興味が湧くな。な、悠？」

数日後、宮野が通う東青学院の生徒会が紫苑にきた。定期的に会を

開いて互いを牽制しあう。
頭脳とケンカの実力が互角なオレ達は代々こうして抗争にならないように均衡を保ってきた

「ウチの下が世話になった」

寛貴さんが宮野に言うと宮野は舌打ちした

「まったく、黙ってるって言ったのに。 おまえんこの奴だって知らなかったんだよ。余計なコトして悪かったな」

宮野が言った

「いや、助かった。最近闇討ちが続いているから」

拓弥さんが言うと三浦が

「掴めてんのか？」

「おまえんここはどうなんだよ、青龍だつてあるんだろ」

互角のチームは同じように敵も多い。ウチが闇討ちされるなら青龍だつて同じはずだ

「まだはつきりとはわからないが…西の方だと思つ」

三浦が言うと寛貴さんと拓弥さんが頷いた

「へえ、オレ達の見解と同じか。ところで、ハンカチの彼女にお礼したいんだけど？」

茶化すように拓弥さんが言つと宮野の刺すように冷たい視線が突き刺さった

「返さなくていい。礼を言われるような事もない」

「ウチの姫は箱入り娘で逢わせられないから。助けられた奴にも言っておいて ・諦めろってね」

三浦が茶化し返した

「宮野、お前の女か？」

拓弥さんが言つと宮野は口角をあげた。綺麗な妖しい笑みで思わず男のオレでもみとれそうだった ・

話しが終わり、東青が帰るときに三浦が窓から外を眺めていた。そこからは別棟にある図書室が見えて、辺りが薄暗くなってきた今は明るい図書室の中が良く見えていた。オレも見るとそこには机に向かつて書き物をしている東堂梨桜がいた。

「なんだよ、東堂か」

オレが言つと東堂は顔をあげた。隣を見ると三浦の隣に青龍幹部の小嶋が立っていて、図書室に向かつて手を振っている。

東堂は驚いた顔をしていたがこちらに手を振り返した。

「愁さん、オレ先に帰っていいですか？」

小嶋が言い出した。

「ああ……」

失礼します！と小嶋は生徒会室を出て行った。

「なんだあいつ」

東堂に興味でもあるのか？

以心伝心 ? side : 梨桜

生徒会室から図書室が丸見えだったなんて知らなかった。だから顔をあげて愁君が見えたときは本当に驚いた。

隣でコジ君が手を振っていて思わず振り返した後にしまったと思っ
た。隣に海堂悠が立っていたから ・明日からは背中を向けて座ろ
う。

携帯が震えて画面を見ると愁君からで『コジと駅で待ってて』と書
いてあった

帰り支度をして学校を出て校門を出るとコジ君こと小嶋将之君がいた

「暗い道は危ないですよ？」

「ありがとう」

駅までたわいない話をして帰り駅のトイレで着替えた
梨桜バージョン？だ

駅から出ると車が近づいてきた白いBMW、葵の車だ
後部座席のドアが開いて愁君が降りてきた

「ありがとう、愁君」

「姫、お待たせしました」

おどけて言い私を車に乗せた。中には葵が乗っていて私が乗り、愁
君も乗ると車が走り出した

「梨桜ちゃん待たせてごめんね」

愁君が笑った。王子様スマイルだ

青龍のチームハウスに行き私は私服に着替えてやっと梨桜に戻った

「お腹すいたな」

ポツリと言うと

「お好み焼き食いたい」

と葵が言うから

「それ、私もそれがいい！」

「コジも行く？」

「オレもいいんすか？」

葵が聞くとコジ君が遠慮がちに言うからコジ君を誘った。

「コジ君、一緒に食べよう？」

そう言って4人でお好み焼きを食べに行くことにした。

お店について、私の右隣に愁君、向が葵、その隣がコジ君だった

「一枚は多いかも」

「残したらオレが食うからいいよ」

葵が言ってくれたので私は豚玉を注文して、葵が私の分も焼いてくれて美味しく食べていると

「ちょうだい」

葵が言い、私は七味を渡した。

「とって」

また葵が言うので、マヨネーズを渡すと愁君とコジ君が笑っていた。

「どうしたの？」

私が聞くと

「梨桜ちゃん、今ので通じるの？」

愁君が聞いてきたから

「わかるよ…なんで？」

コジ君が笑いながら聞いた

「ちょうだい」が七味で、「とって」がマヨネーズなんですか？」

今度は私が笑った

「決まってるわけじゃないよ？葵の行動パターンはわかりやすいもん」

葵はコテにお好み焼きを乗せてそのまま食べた。通っばい食べ方に興味を湧いて

「私も！」

と言つと

「お前は無理」

「なんで？出来るよ」

「火傷するからやめとけ」

また愁君が笑つた

「今のだつてそうだよ」

「コイツの行動パターンもわかりやすい」

葵が言つと2人は笑つた

「やっぱり2人は繋がってるんだな」

そういうコトなのだろうか？私は首をひねりながら箸をおいて水を飲んだ

「もう少し食べる」

そう言われてまた箸を持った

「葵の少しちょうだい」

皿を葵に出すと葵は焼きそばを盛りつけてくれた

「そつえばさ、梨桜ちゃんは葵が助けた朱雀の奴覚えてる？」

葵から皿を受け取り愁君を見た。

「隣のクラスの子でしょ？顔は忘れたけど学校に行ったら顔が腫れてる人がいた

からわかったよ」

焼きそばを一口食べて葵に手を伸ばすとソースを渡された

「お前には辛いから少しにしろよ」

少しのつもりが結構かかってしまった。口に入れて予想以上の辛さに

「からっ！」

眉を潜めると愁君が水のグラスを渡してくれた

「だから言っただろ」

葵は呆れ顔で言った。

「梨桜ちゃん、もう少し水飲んだら？」

「愁君優しい。お兄ちゃんみたい」

そう言つと葵はむつとしていた

「…梨桜、今まで以上に気をつけるよ」

「なんで？何に気を付けるの？」

唐突に葵に言われて聞き返すと愁君が笑つた。

「純情不良少年の心に火をつけたから」

愁君 ごめん、意味が分からない

「誰が純情不良少年？」

「わからない？」

にっこりと笑う愁君の笑顔をたまに怖いと思う。黒い笑みだ

「ハンカチだよ。ハンカチ！」

葵がイライラしながら言つた

「？」

もしかして、あの時葵が助けた男の子？

「まさか、あれはどつちかと言えば助けてくれた葵に憧れるっつてい
うのが王道でしょ？」

「バーカ、おまえ鈍すぎ」

「葵に言われたくないよ」

私たちはバチバチと睨みあった。

遭遇 (1)

「東堂さん、ノート見せて！」

最近、何故か海堂悠に懐かれているような気がする。クラスメイトほぼ全員が、私をいてもいなくても同じ扱いをするのに彼はクラスメイトとして私に気軽に親しく接する。

「はい」

「サンキュー！東堂さんのノートって見易くていいんだよ」

陰で私は『がり勉メガネ』と呼ばれている。

彼等にとって外見がいただけならしい。このクラスにだけ女子がいなかったから、せっかく女子が転入してきたのに、メガネにおさげ姿のオシャレとか可愛いとはかけ離れた容姿の私にみんな心底がっかりしているようだ。

でも偏差値の高いこの学校ではイジメに費やす時間も惜しいらしく、無関心という態度をとる。

みんな必死なんだね ・ 成績を落とさないように、有名大学に入る為に ・ なりふり構わず勉強している彼らを見ると可哀想になる。

「東堂さん、今度お礼になんか奢るよ！」

この人は例外だね、自由人だ ・ 海堂悠は私の容姿に関係なく声をかける。この人もだけれど ・ なんとなくだけど、朱雀に入っている人達は自由人のような気がする。

海堂悠に「気を使わないで」と言い図書室に向かった
怪我のせいで体育の授業に出れない私は他の教科で結果を残すこと
を求められた
だから人よりも勉強をしなければいけない。

次の日、一度家に帰って病院へ行くために学校を午前中で早退した。

私に通っているのは愁君のお父さんが経営している総合病院。東京
に来てから定期的な検査はこのお世話になっている。
ママもここに入院していた。

主治医は愁君のお兄さん。厳しいけど優しい人だと思う

「もう少し体力つけて欲しいんだけどな」

「食べているつもりなんですけど」

「もう少し食べてね」

「はい」

診察と会計を終わらせて中庭にあるベンチで休んだ。ママが入院し
ていたときにここに座って話したことを思い出していた。ママとは
パパや葵のコトを沢山話した

携帯が鳴り、画面を見ると葵からの着信だった。

「はい」

『何してんの？病院終わった？』

「うん、中庭で日向ぼっこしてた」

『今日の帰り少し遅くなる。一人で帰れるか？』

また子供扱いして…

「大丈夫だよ。タクシーで帰るから」

心配性の葵をなだめてベンチを立って正面ホールへ向かった
夕飯もいらなみみたいだからデパ地下もいいかな？メニューを考えていると突然声をかけられた

「あの一！」

呼ばれた方を振り返ると男の子だった。

髪の毛をワックスで遊ばせていたから一瞬わからなかったけど、隣のクラスの朱雀メンバー“飛澤 章吾”この前葵が助けた人だ。

正面から私を見ても“がり勉メガネ 東堂梨桜”とは気づかないよう
うで少しほっとした。

「はい？」

呼びかけに問い返すと、飛澤章吾は近づいてきて頭を下げた。

「この前はありがとうございました一！」

その勢いに驚いた。

「…助けたのは私じゃないし」

頭を下げたのと同じ勢いで顔を上げて顔を覗き込まれた。

「でもっ」

顔が近い

「あ、ハンカチのことなら返さなくていいです。あげますから」

一歩引いて彼を見ると何となく顔が赤くなっている？

「あの、青龍のトップとは」

『どっという関係ですか？』っていう質問ですか？

「ごめんなさい、行かなくちゃ」

そう言いその場を離れようとする

「飛澤、何してんのおまえ」

大橋拓弥と藤島寛貴がこちらに歩いてきている

なんでこんなところで会つもの！？中庭で日光浴なんかしないで帰ればよかった！！

「じゃあ」

「あの！名前教えてください！」

言えないよね

モタモタしていると朱雀の二人が来てしまう

「名前は 次に出会ったという事で。私、急ぐから！」

早くタクシーに乗るために急ぎ足で玄関に向かった

「ちょっと待て！」

その言葉に驚いて振り返ると大橋拓弥と藤島寛貴が走って追いかけてきていたから、私は走り出した。

いつもは走るなど言われているけど、今は別だ

「おい！」

待てと言われて待つバカはいないよ！こんなところで正体がバレるのは嫌だ！

正面玄関を抜けてタクシー乗り場に向かい、ドアが開いているタクシーに駆け込んだ

「早く出してください！」

ボタン！とドアが閉じて車が走り出した時、藤島寛貴と目があった。

危なかった。もう少しで捕まるところだった

遭遇 (2)

昨日、葵には病院での出来事は話せなかった。話したら葵と愁君が大騒ぎするだろうから
藤島寛貴と目が合つて まっすぐな瞳だな と思った。

「梨桜、放課後またな」

「ん。またね」

車から降りて学校まで歩く。

一体いつになったらラッシュの電車に耐えられるようになるのかな

「お、東堂さんおはよう！」

海堂悠だった

「おはよう、海堂君」

「おはようございます！悠さん」

海堂悠の後ろから飛澤章吾が来た。なるべく顔を会わせないように
彼の方を見なかった。

「はよ、章吾。 東堂さん、こいつ飛澤章吾。隣のクラスだよ」

昨日の今日で今は会いたくなかったな

「飛澤君、おはよう」

声が少し強張ってしまったのは仕方がないと思う

「おはよう、東堂さん。ってそれより悠さん！オレ昨日会ったんですよ」

飛澤章吾は興奮気味に海堂悠に話し出した

「なに？」

少し面倒くさそうに彼は聞いた

「ハンカチの彼女に会いました！」

私の話ですか？

「ああ！？マジで！？」

「寛貴さんと拓弥さんが一緒にいたんです。二人とも追いかけたんですけど少しのところで逃げられてしまって」

海堂悠が食いついている。 やっぱり、私って追われる身なの？

私はさりげなく海堂悠に手を振って彼らから離れた

「すっげー美少女でした！かわいかった」

その眼、節穴なんじゃないの？

突っ込みどころ満載の飛澤章吾を少し哀れに思いながら教室へ向かった。

1時限目は体育。私は授業に出られないから自習。

なんとなく教室にいたくなくて英単語帳を持って屋上へと向かった。この進学校で1時限目からサボる人はいないだろう！そう見込んで屋上へ来た。

葵にはバカにされるけど私は高いところが好き。少し日陰になっているところで青空の下で英単語帳を広げた。

真面目に単語を覚えていると、風によって香水の香りとタバコの香りが流れてきた。

私は今風下にいる　という事は風上に誰がいるんだ。それも2人

「だりいゝ　帰りてえ」

不良発言だ

「　　帰れば？」

生徒会長と副会長　いや、今は総長と副総長と言った方が正しいかもしれない。

「章吾、今日も探すつてさ。悠も興味あるみたいだから一緒に見回りするみたいだぜ」

勉強する気無くなった。私は単語帳を閉じたついでに目も閉じた。

「寛貴は興味ないわけ？」

「おまえはあんのか？」

「ある。あの宮野が溺愛する女ってどんだけいい女だよ」

「」

馬鹿らしくて寝ていられない。あれは“溺愛”じゃなくて“過保護”っていうんです。

私は立ち上がってその場を後にすることにした。

「おい、出てこいよ」

風上から声をかけられた。気が付いてたのか

「出ていくタイミングを逃してしまいました。すみません」

声のする方に出ると、藤島寛貴と大橋拓弥がいた。

「悠のクラスメイトだったよね。さぼり？」

大橋拓弥が首を傾げて聞いた

「半分さぼりです」

ウソじゃない、自習だもん。場所が違うだけで

「どついつ意味だ」

藤島寛貴が聞いてきた。

この男、すごく近寄りがたいオーラを持っている。

「自習だったんです。教室より屋上の方が気持ちよさそうだったんで」

「ね、オレ達の事怖くないの？1年の男たちなんてびびりまくるんだけど」

私はあなた達と同年ですから。それに葵のところで慣れてるし早く帰りたくて、素っ気ない態度をとった。

「怖がった方が良かったですか？」

ふっと大橋拓弥が笑った。少し冷たく、黒く。きっとこちらの方が彼の本質なのだろう。

「“がり勉メガネ”は仮の姿？」

「図書室にいただけで“がり勉メガネ”ですか？ただの見た目じゃないですか 私、がり勉じゃないと思いますけどね」

図書室にいる間中勉強をしているわけじゃない。時間をつぶしているだけなのだから

「面白いね君」

「そうですか？ ・失礼してもいいですか？」

藤島寛貴は話に入らずに、ただ私を見ていた。

返事はもらえないらしい

「失礼します」

ぺこりと頭をさげて屋上を後にした。

昨日といい今日といい 関わりたくないと思えば思っほど出会って
しまっ。

遭遇 (3)

だからさ 見たくないのよ。
会いたくないのよ、生徒会の皆さん いや、朱雀のみなさん。

何故私は生徒会室に呼ばれたのか

お昼休みに私の手を掴んで、強引に生徒会室へ引つ張り込んだ海堂
悠…

「梨桜ちゃん、元気ないね」

勝手に名前で呼びにつこりと笑う大橋拓弥

「いえ 緊張しているんです。大橋先輩」

朝の屋上でのやり取りがまずかったの？やっぱり女の子らしく怖が
った方が良かったかのかな

「『拓弥くん』て呼んで？」

パチリとウィンクした。

「
」

チャライよ副会長。いや 副総長？

同じ副総長でも愁君とはずいぶん違うんだね、黒いところは似てる
と思っただけだなあ

「拓弥さん！悪ふざけも大概にしろ！東堂さんが固まってんだろ」

私は小さく深呼吸して彼らを見た。

「私は何故ここに呼ばれたのでしょうか？」

改めてじっくりと見るとやっぱり3人ともイケメンだ。

愁君もそうだけど、東京ってカッコいい男の子が多いのかな

「梨桜、お前生徒会に入れ」

「…」

いきなり呼び捨てですか？藤島寛貴総長

「藤島先輩？冗談は「冗談じゃない、本気だ。それに寛貴でいい」

人の話を遮ったよ。総長　しかも名前で呼べって？

この人横暴だ。

「梨桜ちゃんは書記ね」

勝手に大橋拓弥が私の役職を決めた。

別に不良とかチームに入っていることが恐いわけではないけれど、私が葵と姉弟ということがばれて、いらぬ争いを招くのは嫌だ。巻き込まれるのだって嫌だし葵に危険が及ぶのはもつと嫌だ

「嫌です、無理です！」

即答した。

「梨桜ちゃん、事情を話すよね　うちの高校は今年から共学になって生徒会にも女の子を入れなきゃいけないんだけどさ　みんなに断られて」

断る子いるの？こんなにイイ男に囲まれるなんて普通なら美味しい話だよな？

私はやりたいとはこれっぽっちも思えませんが

私が大橋拓弥に疑いの目を向けると海棠悠が小さくため息をついた。

「正直に言いなよ拓弥さん、寛貴さんが女達を気に入らなかつたつて」

そついう理由ならあり得そう。この人つてオレ様だ、きっと女の好みもつるさいのだろう

「私に務まるとは思えません、無理です。できません」

きつぱりと断ってみた。曖昧に断ると後々つけ込まれたら困る。

「大変な仕事はやらせない。ただ毎日雑用を手伝ってくれればいいよっ」

相手も食い下がる

「拓弥先輩」

私がそういうとにつこりと笑った

「あ、なんかそれもいいね〜！でも拓弥くんて言うてみて？梨桜ちゃんのかわいい声で“拓弥くん”て呼ばれてみたい」

ぐいっと顔を近づけて首を傾げる

「ほら、言うて？」

きつとこれだけで女の子は落ちるだろう。

ただどあいにく私は綺麗な男とかっこいい男を見慣れていて免疫が
できている。仕方なく私は名前を呼んだ

「拓弥くん」

彼は不満そうに私を見た

「いつものカワイイ声でもう一回！」

「拓弥、黙れ」

ボスが低い声で言った

「怖いよ寛貴、梨桜ちゃんが怯えちゃうだろ」

別に怯えませんが、もう帰らせてください

「とにかくお断りします」

「梨桜、今日から生徒会だ。いいな？悠、毎日連れてこいよ」

人の話は聞く気がないらしい。
何を言ってもムダな気がしてきた

教室に戻ると海堂悠は私を見て言った。

「オレも梨桜ちゃんと呼んでいい？オレのことは悠君と呼んでよ」
もう、どうしても呼べばいいじゃない

「好きに呼んで」

疲れた。オレ様とチャラ男の相手は疲れる

「梨桜ちゃん、寛貴さんに気に入られたな！良かったな」

それ、すごく困るんですよ。

「何で私なの？自分で言うのもなんだけど、私って地味じゃない？気に入るとか意味がわからない」

私の顔を見てにこっと笑った。かわいいね 絶対私より彼の方が可愛いと思う。

「梨桜ちゃんの声が可愛いから、とか？とにかく今日から早速生徒会だから」

気に入った理由が『声が可愛いから』だって？私ってどれだけ外見

が残念な女子高生なんだ…

「無理」

もうキャパオーバー。

逃げてやる…！

「逃げた」

信じらんねえ

オレはちよつと呆然としながら、何も無い彼女の机を見た。

朱雀のトップ2人に声をかけられて生徒会に誘われるってことだけで普通の女は舞い上がるくらい喜ぶのに。

北海道から転校してきてこっちの事情に疎いのはわかる。でもオレ達に誘われて断るって

「あり得ねーよな」

「どうしたんすか？悠さん」

クラスにいた朱雀のメンバーがオレに声をかけた。

「いや、独り言」

『がり勉メガネ』彼女がクラスの奴、いや、学年中の男からそう呼ばれているのは知っている。彼女の容姿と行動がそう呼ばせているんだ。

下手に偏差値が高いこの学校はイジメなんてやっている暇はない。模試の点数と順位が一番の関心事だ。競い合い、蹴落とすことに執着している。

下らないコトにこだわる生徒は誰かを蔑むコトで心の均衡を保って

いる。

東堂梨桜はそんな下らないカスみたいな奴らの標的になっていた。

それに対極の立場にある生徒会に誘われている。それをコイツらが知ったらどんな顔をするか見てみたい。

寛貴さんが言い出したことに一番はじめに思ったことだ。

人を外見だけで判断するのは愚かなこと。この世界に入ってわかったこと。

だから彼女の外見とは違う中身を見て見たかったんだけどな

生徒会室の扉を開けた。

「悠、遅い。　　つてお前1人？メガネちゃんはどうした」

拓弥さんが聞いてきた。

「　　逃げられた」

「はあ？」

拓弥さんが驚いていた。寛貴さんは少しだけ眉をひそめた

「油断した。この学校で朱雀から逃げるバカはいないと思ってた」

寛貴さんは口角をあげた。この人がこんな笑いを浮かべるなんて珍しい

「明日は必ず連れて来い。逃げられるなよ？」

こんなコト言う寛貴さん初めてだ。

「寛貴、メガネ好き？お前はセーラー服におさげって
だ」 萌えるん

拓弥さんが言うつとすげえ厭らしく聞こえる。

「拓弥さん、エロDVD見過ぎ」

「いや、オレ実践派だからあんま見ねえし」

「意味わかんねえよ」

チャライな

まあ、この人にも外見だけで判断するのは愚かなことだって経験させてもらったけど

SHRが始まる前に学校から逃げてきた。

さて 葵が来るまで時間を潰さなきゃいけない。

制服を着替えて、女の子が沢山いるカフェに入った私はのんびりとお茶をする事にした。

東京に来てからはいつも葵とべったりだったから久しぶりの1人時間満喫した。

『ねえ、藤島先輩見ちゃった』

『かつこ良かったねーっ』

『あんたら紫苑に受かるなんて超ラッキーだよ！写メとってうちらにまわしてよ』

場所変わりたい

隣には紫苑の制服を着た女子生徒が2人とブレザータイプの制服を着た女の子2人が座っていた。

『私は絶対に宮野君派！』

『私もどっちかというと宮野君派かな』

葵、良かったね。人気者だよ？

『でもさ、宮野君で最近彼女できたらしいじゃん？』

彼女たちの『宮野君』の話は止まらない。

『あ、私も男子が話してるの聞いた〜女の子と車乗ってたって』

『私は洋服買いに行ったって聞いたよ』

へえ　葵ってばどこかのアイドルみたいだね、そんなに注目されたら窮屈で大変そうだね。

『美人じゃなきゃ許せない』

え〜　姉としては美人より性格いい子がいいな

それよりもオレ様な葵についてきてくれる子はいるんだろうか？結構束縛すると思うんだよね。
彼女は苦労すると思うよ？

『だよね、私も藤島先輩の彼女は美人じゃなきゃ納得できないな』

あなた達の価値観可笑しいでしょ？

『でもさ、宮野君と藤島先輩でタイムンはったらどっちが強いかな』

『互角って思いたいな　大橋先輩と三浦君も強いけど、更にも上を行く2人だもんね』

『顔良し、頭良し、ケンカ強い！男にも人気！最高』

葵、さっき思ったこと撤回する。あんたも軽い女に人気で大変だね

テーブルに置いていた携帯が震えた。着信は葵

「待ち合わせ場所を変えていい？」

『なんで』

「駅前のカフェにいたから」

『桜庭、止める。何勝手にふらふらしてんだよ？ばか』

総長様はご立腹だ。

「たまには市場調査してもいいでしょ」

電話の向こうでボタンとドアの閉まる音がした。

『何のリサーチだよ？』

「女子高生リサーチ。ってなんでお店に入ってくるのよ」

『すぐ近くにいたんだよ』

葵はお店に入ってきた。ただでさえ目立ってるんだから 自覚して行動しなさい。

お互い同時に通話を切り携帯をポケットに入れた。

『ねえ、あれ宮野君じゃない？』

私は席を立った。

『うわ　こんな近くで見たの初めて』

外野がうるさい

「リサーチは終わったか」

「んゝ　続きはまた今度」

「一人はダメだぞ」

葵に手を引かれて店を出た。

桜庭さんがドアを開けてくれて葵に続いて車に乗り込んだ

「梨桜ちゃん、今度オレとお茶飲みにいこうよ」

愁君が後ろを振り返ってにっこり笑った

「うん！」

表と裏 (1)

次の日の放課後、いつものように図書室へ向かおうとすると廊下に海堂悠が立っていた。

今日、彼は学校を休んでいると思っていたから油断した。

「オレが言いたいことわかるよね？」

目の前で小首を傾げて問う彼の脇をチラリと見た。

この廊下を走ったら逃げられないかな

「今日は逃げられないよ？」

放課後に登校してきたのは私をつかまえるためらしい。

「逃げたわけじゃないよ？」

口角を上げて笑った。

「そお？」

うん 可愛い。

「じゃあ、昨日のあれは何？」

「無言の抵抗？」

自分で答えて問いかけてしまった

「なんで？」

「強引に話しを進めようとするから抵抗してみたの。勢いで言ったことなら一晩たてば落ち着いて撤回するかなって思ったから」

にっこり笑った。けれど瞳は笑っていない

「残念。逆効果だよ　　っていうかオレ、君を連れて行かないとマズいんだよ」

「あの先輩達に言われたから？」

「ん　　寛貴さんの言い付けだから、かな」

そう言うと私の腕を引いた。痛めている背中が気になって本気で抵抗できない私をいいことにくぐいぐい引つ張る海堂悠。

何事かと私達を見るクラスメイト達。すぐく注目を浴びていた。

引きずられるように歩きながらも、抵抗する私に海堂悠は私を振り返った。

「梨桜ちゃん、諦めなよ。寛貴さんなら悪いようにしないよ」

「やだよ」

一瞬、事情を話したら解放されるんじゃないかと思い、階段を登るところで私はしゃがみこんだ

「海堂くん、あのね」

ため息をついて私を見下ろす。ちょっとうんざりしているように見えた。

「なに」

声が低くなった

「実はね」

「オレ、宮野の女のコトも調べなきゃいけないんだ。手間かけさせないでくんない？」

出かかった言葉が喉の奥で固まった。

「なんで調べるの？」

彼が私の事を調べているの？

「そんなの宮野の弱味になるからに決まってるだろ？普通、チームのトップの女は狙われる。女を盾にとられたら最悪だからな」

「彼女じゃなかったら？妹とか 従兄妹とか」

「同じだよ。むしろ血縁の方がタチが悪いだろ？女を盾にとられたら身動きができなくなつて、男も女もサイアクだな」

頭を抱えてうずくまってしまうたかった。

愁君からあんなに説明されていたのに、ライバルチームの幹部から直接聞いた言葉は、初めて聞いた言葉のように私を揺さぶった。

「マジで時間ないから。悪いな」

「やだっ」

荷物のように小脇に抱えられた。

「梨桜ちゃん、ちゃんと飯食ってる？」

そのまま生徒会室に連れて行かれて椅子に座らせられると、目の前に藤島寛貴と大橋拓弥が座っていた。

「梨桜ちゃん、こんにちは。悠が手荒なこととしてごめんね」

黙って頭を下げた。

もしも朱雀と青龍が争うことになったら 目の前の二人は葵に危害を加えるのだろうか？

「君は普通の子と違うから楽しみだよ」

「私は普通です」

動揺を悟られないように言つと

「顔色が悪い。気分でも悪いか」

藤島寛貴が言った

「少し」

「ごめん！抱えた時か？」

違うと言おうと思ったけど、やめた。
そう思わせておけばいい

「隣の部屋で休め」

「今日は帰らせて下さい」

「車で送る」

その言葉に首を横に振った。

「風に当たって歩きたいです」

帰りたい。と頭を下げるとあっさり許してくれた

「明日の昼休みおいだよ」

笑って大橋拓弥が言い、私は曖昧な笑みを返してごまかした

表と裏 (2)

駅までの帰り道で、後を付けられているんじゃないかと思った。

宮野葵の彼女を捜しているならブレザーの制服に着替えなほうが
いいような気がしたから、そのまま電車に乗り、自宅がある駅を1
つ通り越して降りてホームから葵に電話した。

『梨桜？どうした』

「今日駅にいるの。誰か迎えに来てほしい」

『わかった 駅前の公園まで来れるか？』

「うん」

『今からコジを公園に向かわせる。公園の奥に行かないで手前の広
場のところで待ってる』

「うん、ごめんね」

駅前の公園は広くて奥に行くと噴水やベンチがあった。

手前の広場には子供を連れだ若い母親達が出たけれど奥にいくにつ
れて人が少なくなっているようだった。

葵に言われたとおりに広場で待つことにした。

「ねえ、紫苑の子がなんでこんなところにいるの？」

声をかけられて振り返ると葵と同じ制服を着た男達がいた
3人の男たちは少し制服を着崩していて、何となく不良かな、と思
えた。

「彼氏と待ち合わせ？」

「彼氏、びびって近寄れないんじゃないかね？」

語尾を伸ばしながら話す、その話し方と笑い方が厭らしく見える。
葵のチームにはこういう人もいるんだろうか？

「メガネちゃんも朱雀に憧れて入学したの？」

3人に取り囲まれてニヤニヤと笑いながら私を見下ろしている
この人達、怖い

「うちにも青龍ってチームの幹部いるの知らない？」

「知ってる」

「んじやなんでこんなとこ来ちゃうかな？青龍の傘下チームの溜
まり場なのに」

ニヤリと笑った顔に涙が出そうだった。怖くて気持ち悪い

「紫苑の子ってレアなんだよな、一緒に遊ぼうよ」

「待ち合わせしてるからいい」

手を掴まれて抵抗していると

「んだよっいいから来いよ！勿体つけてんじゃねえよ！」
怒鳴りつけられた。

「やめろ！」

大きい声が響いて、驚いてその方を向くと良く知っている顔がこちらに走ってきていた

「コジ君」

「小嶋さん、なんで？」

「その人から手を離せ！」

コジ君のいつもと違う低い声にビクツと震えてしまった
もうやだ、不良の世界なんてわからない！

「その人から手を離せ！聞こえないのか！」

ジワツと涙が浮かんできてしまい、メガネを外して涙を拭った。

「コジ君、大丈夫だから」

大丈夫だからそんなに大きい声で怒鳴らないで、怖い

「コイツらに何もされませんでしたか？」

振り返り私に声を掛ける彼はいつもの優しいコジ君だった。
男達は急に態度が変わったコジ君に呆然としている。

「うん」

「すみません、怖い思いさせて」

私の顔を覗き込むのはやっぱりいつもの優しいコジ君だった。

「私が悪いの、葵の迎えを待ってなかったから 勝手に帰ってきたから
コジ君ごめんね」

本当にごちゃごちゃしてきた。

「梨桜さん、怖がらせてすみません。今、葵さんが来ますからね？
ベンチに座って待ちましょう？」

少し哀しそうに笑う彼の顔を見て、私を心配してくれているコジ君を、安易に怖かったなんて思っではいけないんじゃないかと思えた。目の前で心配そうな顔をしている彼もさっきのドスがきいていた彼も両方コジ君だ。

表と裏 (3)

「あの、小嶋さん その人は」

放置されていた2人が恐る恐る聞くとコジ君は舌打ちして彼らを振り返った。

「葵さんの名前を呼び捨てにできるのって」

「お前等は一般の人に手を出そうとしたんだ。わかってんだろ？ 葵さんが一番嫌ってることをやったんだ。系列から外されても文句は言えないよな」

3人は青ざめていた

葵達の世界で、系列から外されるということがどういう意味を持つのかわからないけれど、きっと彼等にとってはとても大変なこと何だろうと思った。

「すみません、この事は愁さんと葵さんに報告して処分を決めてもらいます」

手を膝につけて頭を下げようとするコジ君の手を慌ててつかんで止めさせた

「こんなことしてほしくない。ここに来るように言ったのは葵だし、葵に言わせたのは私だよ？」

彼が謝る必要はない。

「でも、オレは葵さんからここに来るように言われたのに、梨桜さんに怖い思いをさせました」

引き下がろうとしない彼の顔を見上げた。

「じゃあ、コジ君は愁君に報告して？私が愁君にちゃんと話すから。謝るようなことはしていないのに謝らないで？」

私が言うと、彼は困ったように眉尻を下げて私を見た。

「オレが何？」

愁君だった

「ふ、副総長っ」

急に焦りだした、系列らしい3人組を無視して、愁君は私をじっと見て口を開いた。

「もしかして、泣いた？」

鋭い愁君になんて答えたらいいか迷っている

「梨桜」

名前を呼ばれたと思ったなら葵の腕の中にいた。

「葵い」

胸元に顔を埋めると安心した。

「どうした？何があった？」

背中を撫でながら優しく聞いてくる

今は理由言いたくなくて、ぎゅうっと顔を埋めると、察してくれたのか、ぽんぽんと頭を撫でた。

「メガネ外すなって言っただろ？」

「ん」

葵は小さく息を吐いた。

「制服のままだし」

「ん」

「愁、後の事頼んだ」

「了解。お姫様についていてあげて」

「コジ、サンキューな」

「いえ」

車に乗ると私は葵にもたれて座った。

「桜庭、マンションに行つて」

「はい」

車は静かに走り出して、葵は背中を撫でながら聞いた。

「何に動揺したんだ？」

「私、捜されていて、調べられているんでしょう？」

葵が小さく息を吐いた

「誰がそんなこと言った？」

「クラスの人 宮野葵の女は宮野の弱みだから調べているって言うていた」

葵が舌打ちした

「愁君と葵から言われてわかってるつもりだったけど、学校で言われて怖くなった 私がいると葵のお荷物になってる」

「それは違うだろ？」

背中を撫でながらきっぱりと言った

「おまえはオレの事を考えるのは重荷？」

「そんなことない。当たり前的事だよ」

「同じだよ。梨桜の事を考えるのも梨桜の為に行動するのも当たり前

前の事。違つか？」

顔を上げて葵の顔を見た

「私は葵の負担になってない？葵がロンドンに行けって言えば行くよ」

「梨桜は行きたいの？」

心の中でパパに謝った

「ここがいい」

「同じだよ。オレも梨桜がここにいるのがいい」

いつも一緒だった。私たちは、互いの欠片

「堂々としてろ、動揺することなんかない」

マンションについて私が落ち着いた頃、葵は静かに聞いた

「梨桜を怖がらせるようなこと言ったクラスメイトって誰？」

「海堂悠」

そう言ったら言葉にはしないで頷いていた
もう一つの事を話したら葵は怒るだろうか？

「梨桜、メガネ外すなよ？」

「うん」

葵は心配性

「一人で歩き回るな」

「うん、反省してる」

葵は過保護

「やっぱり朱雀の幹部と同じクラスなんて 腹が立つ」

「ん」

やっぱり葵は独占欲が強い

「他の2人にも会った？」

「偶然 会った」

小さく舌打ちしたよ 怒ってる

「なんか言われた？」

「面白いねって言われた」

「なんで？」

「朱雀の幹部を怖がらなかったからだと思う」

また舌打ちした

「他には？」

「生徒会に誘われた」

「誰に」

「藤島寛貴」

大きくため息をついた

「却下だ」

「昨日の放課後に生徒会室に連れて行かれそうだったから逃げた」

「それでカフェにいたのか？」

「ん」

眉をしかめたまま、ソファに背を預けて天井を仰いでいる。

怒るのも無理はないよね

「今日は？」

「つかまって生徒会室に無理矢理連れて行かれたの。その途中で海堂悠から聞かされて」

「
」

天井を仰いだまま、何も言わない。それが一番怖いよ

「葵？」

「生徒会に入ったとしても絶対に朱雀には入るな、近づくな。いいな？」

「うん」

やっと私の方を見たと思ったら、葵の目はいつもの優しい目じゃなく、冷たく光る目だった

生徒会 (1)

「今日は顔色いいね」

朝から海堂悠と『生徒会に入れ』『無理』のやりとりを何回も繰り返し、昼休みに連れてこられた生徒会室で私の顔を見ながらニコニコ笑う大橋拓弥を前に私は疲れ果てていた。

「梨桜ちゃんて門限あるの？」

「はい」

葵に“門限は6時って言うっておけ”と朝に言われた。

「一応、聞いていい？」

「6時です」

「え？」

目が点になる海堂悠。

気持ちに分かるよ、私も本当に門限が6時だったら暴れちゃうかもしれないもん。

「梨桜ちゃん、君って高校生だよな」

「うん」

「本当に6時？」

「はい」

大橋拓弥の問いに頷く

「そう、箱入り娘なんだ」

そうだね箱入り。

箱の中には真綿が敷き詰められていて私はそこに入れられている。たまにふざけた葵に締め付けられて苦しめられる

葵という空間、愁君とコジ君との関係は心地よい

「門限までに帰せばいいんだろ」

あっさりと言う横暴総長に続いてやたらと軽い副総長がにっこり笑った。

「梨桜ちゃん、今日の放課後は資料作りだから。頑張ろっね」

「え？私、了承してませんよ!?!」

「学校側にはもう届を出した」

藤島寛貴の言葉に気が遠くなった。

勝手に届けを出さないでよっ!?!?!

放課後

“パチン” “パチン” “パチン” さっきからずっと書類をまわめていている私。

単調な作業に眠たくなってくる。

3人は何やら族用語を駆使して難しい話をしている。

今日はお昼寝してないから本当に眠い。今日の迎えの車では寝かせてもらおう。

いつもお迎えに来てくれる桜庭さんの運転は心地良くてうとうとと眠ってしまう。

「あ」

桜庭さんの事を思い出したら、昨日の事を思い出してホチキス留めしていた手を止めた。

忘れてた、愁君にお願いしなきゃ！

視線に気がつくとも3人が私を見ている

「どっしたの？」

悠が聞いてきた

「電話する用事があったの」

胸ポケットから携帯を出して立ち上がった。

「ここで電話すればいいよ」

悠が言ったけれど私は首を横に振った

「ちょっと恥ずかしい話だから」

　　と置いていたら手の中の携帯が震えた
サブディスプレイの表示は愁君だった。通話ボタンを押して耳に当てると

『梨桜ちゃん、今大丈夫？』

優しい愁君の声

「うん、私も今電話しようと思ったの」

『梨桜ちゃんの話って？先にどうぞ？』

「私の話は　　お願いの電話」

私は背中に視線を感じながら部屋の扉を開いた。

『ああ、コジに聞いた。オレの話もそれ』

「　　ふふっ、同じ事考えて行動してるね」

後ろ手に扉を閉めると階段を下りて空き教室に入った。

「昨日のことは私も悪いからあんまり厳しい処分はしないであげて？」

『庇いたい気持ちはわかるよ。でもオレ達の決まりは一般人には手を出さない。それを破ったことの処分は別だからね』

厳しい副総長だ

「葵はなんて言ってるの？」

『オレに任せるってさ 何にしても梨桜ちゃんを怖がらせたんだ』

「それは違うの！別な事で不安になっていたからだけだから」

愁君が小さく息を吐いた

『ちゃんと葵にその話、した？』

「うん」

『不安は取り除けた？』

「多分大丈夫」

少し口ごもる私に愁君は受話器の向こうで小さく笑った。

『葵には言えない事があった？ ってそりゃ、あるよな』

愁君には何でもお見通し。すごいね、愁君

「愁君はすごいね」

『デートしよっか、梨桜ちゃん』

私に気を使わせないように軽い口調で言う愁君に感謝しながら、私も軽い口調で返した。

「美味しいケーキがあるお店がいいな」

『わかった。昨日降りた駅で待ってるから』

「うん」

生徒会室に戻ると大橋拓弥が食いついてきた

「彼氏？」

ニヤニヤ笑っている。“からかいたくて仕方がない”っていう顔をしている

「違います。友達です」

「ふうん、お願いは成功？」

「半分失敗しました」

海堂悠も口を挟む

「友達って、東京？札幌？」

嘘をついた

「札幌の友達」

生徒会 (2)

時計を見ると5時を過ぎていた。

「私、帰っていいですか？」

「ああ」

生徒会長の許可をもらい帰り支度をした。

「送る」

「申し訳ないです」

“朱雀”に送られるなんて、とんでもないことだ。葵が知ったら牙を剥いて怒るよ

「梨桜ちゃん気にしないで、寛貴がいいって言っているんだから送られなよ」

「でも」

「いいから乗れ」

逆らうことを許さないような雰囲気と言う藤島寛貴の迫力に押されて車に乗ってしまった

黒いベンツの助手席に悠、後部座席の運転席の後ろから藤島寛貴、私、大橋拓弥。

大男に挟まれて精神的には窮屈だけどシートはゆったりしていた。

「梨桜ちゃんて、声可愛いね」

「そうですね？」

声ですか、前にも言われたな

「オレ好みに変身させてみたいな」

こっちが変身なんです。と心の中で舌を出した。

「大橋先輩、顔が近いです」

大橋拓弥が私の顔を覗き込んだ

「名前、教えたよね？」

おさげにしている髪を弄びながら顔を近づける

「ほら、呼んでよ」

「」

「呼ばなきゃキスする」

じりじりと近づいてくるから体を下げるけど、隣には藤島寛貴がいてこれ以上逃げられない。

「梨桜ちゃん？」

「たくや くん」

そう呼んだとき

「止まれ！」

助手席の悠が声を荒げブレーキが踏まれた

「うわっ」「えっ!？」

バランスを崩した私は藤島寛貴が座っている方へ体が倒れ、大橋拓弥は私の上に被さるように倒れてきた

大男がぶつかってくる衝撃を想像してぎゅっと目を瞑ると、ドン！と音がした

「いつてえ」

驚いて目を開けると大橋拓弥は後部座席のドアに頭をぶつけたのか顔をしかめていた。

私は

「うわっすみません！」

藤島寛貴に体を預けていて、しかも落ちないように支えられていた

「拓弥、いい加減にしろ」

私が体制を戻そうとすると藤島寛貴が体を起こしてくれた。

「ありがとうございます」

彼は私に倒れてきた彼を押し退けてくれたらしい

「悠！お前なんなんだよ！？」

大橋拓哉はぶつけたところが痛かったのか苛立ちを助手席にぶつけていた

「あれ、黒鬼の奴らじゃないか？」

その一言で車内の空気が張りつめたものへと変わった。

「悠、行くぞ」

助手席と後部座席のドアが開いた。

「梨桜ちゃん、気をつけて帰れよ」

「悠君も気を付けてね」

後部座席に藤島寛貴と2人だけになってしまい緊張した

「家まで送る」

「駅、駅までお願いします！」

じっと私を見る。

その目で見られるのは苦手だ

「梨桜」

「はい」

病院で会ったよな？とか言わないよね

「敬語はやめる」

予想と違う話でホツとした。

「 上級生ですし」

「関係ない」

会話が続かない。

「わかったな？」

「はい」

そう言うと、車の窓の方を向いてしまった。

相変わらず彼は窓の外を見ていた。

会話はないけれど、沈黙が苦痛じゃない感じ。
威圧的なオーラを醸し出しているのに不思議な人

「この時間で門限に間に合うのか？」

門限に遅れないように心配してくれているのだろうか？そうだとしたら嘘をついているのが心苦しい。

「多分間に合うと思うけど、夕飯の買い物をするときは少し遅れることもあるから」

車は駅について運転手の人ドアを開けてくれた

「先輩、ありがとうございます　ありがとう」

「　名前で呼べ」

こだわるなあ　　このチームの人

「次からにしますね。さようなら」

「ああ」

運転手さんにお礼を言った

「ありがとうございます」

「運転手の牧原です。お気をつけて」

明らかに年上と思われる運転手は丁寧に言い頭を下げてくれた。

「はい。さようなら」

車に手を振って駅に入った

メールで愁君に“これから電車に乗るね”と送ったら“駅で待ってる”と返事がきた。

生徒会 (3)

「お帰りなさい、梨桜さん」

「桜庭さんただいま！」

桜庭さんが後部座席のドアを開けてくれて車に乗った。

「ただいま、愁君」

そう言うと愁君は笑って迎えてくれる。

「おかえり」

後部座席には愁君しかない。葵は用事でもあるのだろう

愁君はモンブランが美味しいお店に連れてきてくれた

「葵はこの手の店は苦手だから、たまにはいいでしょ？」

「ありがとう愁君。美味しい」

葵は甘い物が嫌い。こんなに美味しいものを味わえないなんて可哀な弟だ。

「愁君、葵を泣かせるには口の中にチョコレートを入れるといいよ？喧嘩したらやってみて」

「梨桜ちゃん、やったことあるの？」

「うん。喧嘩した時にやった」

胸を張って言うと、愁君は信じられないものを見るような目で私を見て首を横に振った。

「それを行った後のアイツの反撃が恐ろしいよ」

「そお？」

やってみればいいのに、と思いつながらクリームを口に入れると美味しく顔がにやけてしまった。

「梨桜ちゃん、帰りが遅かったね」

「ん〜 報告しなきゃいけない事ができちゃった」

愁君はクスリと笑った。

「聞くのが怖いな」

嘘ばかり、いつも余裕な愁君のくせに

「何があったの？」

「紫苑の生徒会役員になりました ゴメンナサイ」

「このこと葵は？」

「なるかも。っていう段階のことは昨日話した」

「誰に勧誘された？」

目の前の席にいた愁王子は消えて鬼愁が君臨していた

「藤島会長が入れって 無言の抵抗で逃げてみたけど逆効果だよ
って言われた」

「そういう話はすぐに教えて」

「はい」

愁君、すごく怖いです。絶対葵より愁君の方が怖いよ

「紫苑と東青は定期的に生徒会が会合を開いて、表向きは温厚な情報交換が行われるのは知ってる？」

「知らない」

お互い族なのにそんなことしてるんだ。真面目っていうか、回りくどいっていうか 良くわからない関係だ。

「絶対にその席に一緒に出るな。いいね？」

鬼愁に逆らうことはできるわけがなく、こくこくと頷いた。

「努力します」

「ところで、言えなかったことは何かな？」

鬼愁から愁王子に戻ってくれて私は心底ほっとした

「うん 怒らない？」

紅茶のカップを口に運びながら愁君を窺い見ると、何とも言えないような妖しい笑みを浮かべながら私を見ていた。

「朱雀がらみだと怒るかも」

艶妖な鬼王子だ。話したくなくなってきたな

「嘘だよ、話して？」

私は昨日海堂悠から言われたことを話し、そのあと公園での出来事と感じたことを話した。

「表も裏も あるのが普通なんじゃない？今の梨桜ちゃんは裏の裏まで作り出してるしね？」

重たくならないように軽く話してくれる

「オレたちは裏の顔をさらけ出してもいい環境を手に入れているだけだよ」

愁君の言葉が、ストン、と心に落ちてくる。

裏表のない人なんかいない、いい人ぶって裏では汚いことをする人達はたくさんいる。

「裏の顔でいる時でもオレ達は信念を曲げたくない。だから、梨桜ちゃんを怖がらせた奴らの処分はする。それは梨桜ちゃんのお願いで譲れないんだ」

彼等は裏の顔であつても真つ直ぐで潔い。

私は頷いて愁君を見た。

「王子様の愁君もこわーい副総長の愁君も。大切な友達の愁君だよ
ね」

私が言うところ“そういうこと”と笑って言うてくれた

「でも、そういう二面性を否定する人達が多いことも事実だから、梨桜ちゃんが受け入れようとしてくれているのは嬉しいよ」

王子様スマイルで微笑んでくれたから私も笑みを返して二人で笑っている
と愁君の携帯が震えた。

「はい　まだデート中。・・・心が狭い男は嫌わるぞ」

声に出さないで“あおい？”と聞くと笑って頷く愁君

「あゝ　そうだな。おまえに報告ある」

はい、と愁君は私に携帯を渡した。

「愁君？」

「自分で報告してね？オレの口から言ったらあいつキレるから」

愁君に言われて携帯を耳にあてた。

『梨桜？』

「あのね 葵」

『なんだ？』

「生徒会に入っちゃった」

聞こえてきたのは大きな大きなため息。

『素顔はバレてないんだよな』

「うん」

『万が一顔を見られてもオレとの事はバレてないから大丈夫だとは思っけど』

あー まだ言っていないだった。

「いやあ あのさ？」

『なんだよ』

「実はね この前病院に検査に行ったときなんだけど」

『うん』

愁君の眉が顰められた。これは、鬼になる前兆

『早く言え』

「廊下を歩いていたらばったり、この前葵が助けた朱雀の人と会ったの」

ああ、愁君が鬼に変貌していく

『それで？』

「そこにさ、なぜか総長さんと副総長さんがいてね、あわてて逃げただけど追いかけられたの。タクシーに飛び乗ったんだけど、総長と一瞬目があつた。見られたかも？」

『梨桜！今すぐこっちに来い！』

ぶちつと電話が切れた。

愁君に携帯を返すと、愁君は通り過ぎたウェイトレスに伝票とお金を渡した

「釣りはいいから」

そう言うと私の手をつかんでテーブルを立たせた。

生徒会 (4)

強制送還された青龍のチームハウスで、鬼となった二人に凄まれた。

「どうしておまえは言わないんだよ？」

「生徒会に誘われるなんて思ってもいなかったし、逃げ切れたからいいかな？なんて思ったりして」

「いい加減自分の立場をわかれよ！」

「昨日嫌っていうほどわかったから話したんじゃない！」

「口答えするな！」

とつてもとつてもオレ様ご立腹な葵にもう言葉が続かなかった。

「ごめんなさい」

私が涙目で謝ると愁君がため息をついた

「葵、もういいだろ？梨桜ちゃん泣くぞ」

「愁君もごめんなさい」

愁君は腕を組んで考え込みながら口を開いた

「偶然出会ってしまったものは仕方ないよ。逃げてくれて良かった
それにしてもあの2人が追いかけてくるとは思わなかったな」

それは私も意外だった

「手遅れだったりして？」

「なにが？」

「こつちの話」

愁君がぼそつと言い、それに葵は目を剥いて怒っていた。

「葵、帰ろうよ。今日お昼寝してないから眠い」

「昼休みに生徒会室行かないの？」

「悠君」

午前中の授業が終わりお昼寝セットを持った私は悠君に呼び止められた

「お弁当食べた後にお昼寝したいから」

さり気なく断ったつもりだったけれど、

「寝る場所くらいあるよ。おいでよ」

今日も強制連行

「梨桜ちゃん、それだけで足りるのか？」

拓弥君が聞いてきたけれど、男の人の食べる量が多過ぎだと思う。

「足りますよ？」

いつもの習慣で、歯を磨いた後に、お昼寝セットが入ったバツクから葵のパーカーを取り出して羽織った。

「そのパーカー、大き過ぎない？」

確かに大きい。

180センチを超す葵が着ていたパーカーだから大きいのは当たり前だ。

「お昼寝にはちょうどいいんです」

「それ、男物だよね」

「はい。もらったんです」

「え？」

この肌触りが好きで葵から強引に奪い取ったパーカーだ。これを着てフードをかぶると葵と一緒にいるみたいで安眠できる。

トップ3人をソファのある部屋へ追い出し、会議用の大テーブルの端を陣取り眠った。

おやすみなさい

携帯でタイマーをかけてフードをすっぽりとかぶり机に顔を伏せた。

アラームと違うメロディが鳴る。
これは葵

「はい」

『今日は昼寝できたか?』

「ん 今起きた」

あくびをすると電話の向こうで笑っていた

『寝れたならいい。今日も駅で待ってるからな』

「ん。ありがとう」

『今晚のおかずなんだけごと』

「なに?」

『ロールキャベツ食べたい』

葵は手のかかるものが好きだな 学校から帰ってから作るの分かってる？

「梨桜ちゃん、授業始まるぞ〜」

扉が開いて3人が入ってきた

『今の声って海堂？』

「うん、そうだよ」

『寝起きでメガネかけてるだろうな』

顔に触れて確かめた。

「大丈夫だよ。 ねえ？」

『ん？』

圧力鍋はどこにしまっただろうかと考えながら希望を聞いた。

「トマトとコンソメ。どっち？」

私はコンソメのスープで煮込んだのが好き。

『』

黙り込んだよ

「あのさ、そんなに悩むことじゃないと思っけど」

『どっちも捨てがたいんだよ』

「今日は一つしか作らないからね」

『』

「授業始まるから。決まったらメールして？」

『コンソメ』

「わかった。材料買って帰るから。じゃあね？」

『ああ。またな』

パーカーを脱ぎ、畳んでバックに入れた。

ロールキャベツが、少し多めに作って冷凍しておこう

教室に戻り、教科書を取ろうと机の中に手を入れたら、手に紙が触れた。

取り出してみると一枚のルーズリーフだった。

とうとうきたか、そう思い広げると想像通りの言葉が書いてあった。

“幹部に取り入って調子にのるな。朱雀とつりあわないんだよ。”
男が書いたような文字が走り書きされていた

その文章を見て笑いが込み上げた。
ら離れようとしているのに。

皮肉だよね？なんとか彼等か

小さな弁当にびっくりした。あれだけで十分だという。この前、階段で抱えた時に感じた彼女の軽さに納得した。

しかも、昼を食べた後には昼寝がしたいと言い出した。

昼寝をしないと夕方眠くなるからとか言っていたが、おまえはいくつだ？と聞きたくなった

それは寛貴さんも拓弥さんも同感だったらしい。

「そのパーカー、大きすぎじゃない？」

オレがつっこむと

「お昼寝にはちょうどいいんです」

納得できるようなできないような回答が返ってきた。

「それ、男物だよね」

拓弥さんが聞いていた。

聞かなくても間違いない男物だろう？

しかも少し着古した感じがある。わざわざ昼寝用に買ったものではないことが見ただけでわかる。

「はい。もらっただけです」

「え？」

何かを思い出したのか、ふふつと笑い、携帯でタイマーをセットして机におくとフードをかぶり机につっぱした。

眠りの邪魔になると悪いからオレ達は隣の部屋に移動した。

「なんだよあの男物のパーカー　メガネちゃんに彼氏いるのか？」

「いないって言ってたと思うけど？家族の服とか」

寛貴さんもソファに座って腕を組んで目を閉じていた。

「午後の授業、かつたるいな」

「副会長がそんなこと言ったらだめなんじゃねーの？」

隣の部屋から着信メロディが流れた

「梨桜ちゃんも起きたか？」

オレは扉を開けて梨桜ちゃんを呼んだ

「梨桜ちゃん、授業始まるぞ」

彼女は誰かと携帯で話していた。

「うん、そうだよ。だいじょうぶだよ。　　ねえ？」

机に頬杖をついてボソボソと話をしている。砕けた話し方は親しい人と話をしているんだろくな、と思えた。

「トマトとコンソメ。どっち？」

何の話だ？料理か？

「あのさ、そんなに悩むことじゃないと思うけど。　　1つしか作らないからね」

電話の相手に忠告しているようだ。

「授業始まるから。決まったらメールして？　　わかった。材料買って帰るから。じゃあね？」

梨桜ちゃんと廊下を歩きながら彼女を盗み見た。

メガネと長い前髪でどういふ顔をしているのかいまいちわからないけれど、この外見は、お世辞でも可愛いとは言えない。とオレは思う。

この外見から、性格は暗くて真面目なのかと思ったが、話してみるとさっぱりとしていて明るい。

可愛い声をしていて、たまに女の子らしく“ふふっ”と笑いながら

電話をしているときがあり、“女の子がいるな”なんて思ったりする。

彼女からノートを借りて思うけれど、頭もいいんだと思う。綺麗にわかりやすくまとめられたノート。

ノートを差し出す時に見た手が綺麗だった。爪は短く切りそろえられていて、ネイルをしているわけでもなさそうなのに綺麗なピンク色をした爪でつやつやとしていた。

何気なくネイルとかしないの？と聞いたら“料理するときにじゃまだからしない”と笑いながら言っていた。

彼女は不思議な子だと思う。

いつかあのおさげ髪を解いてメガネを外してみたい

嫉妬 (1)

最初は机に入った紙一枚だった。

あれから1週間経って、私が生徒会に入ったという話が広まれば広まるほど嫌がらせを受けた。

通りすがりに『ダサメガネ、調子づくなよ?』とか『藤島さんの隣に立つんじゃないよ』と言われたり、机には毎日紙が入っている。

朱雀の人間か、ただのファンか…私が自分から生徒会に入ったと思っ
っているあたりでイタイ

今まで、葵の事が大好きな女からの嫉妬をぶつけられたことは何度もある。だけど、男からというのは初めてと同じでどう扱ったらいいのかわからない。

いい加減にしてくれないかな、と思うけど、どう対処したらいいんだろうか…

「…何してるのかなー?」

「さぼり…」

放課後の生徒会をサボろうと思って屋上にいたら見つかった。

「早く行かないと寛責が怒るよ?」

いつものチャラチャラした“拓弥くん”ではなかった。

「議事録ならもう終わりましたよね？」

ポケットから煙草を取り出して火をつけて私を見る目が鋭い。

「連れて来いってさ 何でか君がお気に入りみたいだね？」

疑問に思っなら反対しなさいよね。

「良くわからないんですけど」

お気に入りとか、目立つからやめてほしい

「オレも良くわからない。悠が懐いているのも良くわからない」

そう言っって煙を吐き出した。

「悠君はいつもノートを見せてあげてるからじゃないですか？」

「なるほど。つつーかさ、オレ達といる感想は？」

感想？

生徒会から抜けさせてくれませんか？というのは感想じゃなくて希望だよね？

「感想は、…ちゃんと生徒会の仕事しているのが意外でした」

フツと笑われた

「そこは普通さ？『朱雀の幹部って聞いてたから怖いと思ってたけどみんな優しいから嬉しい』とかじゃない？」

なるほど。

私は青龍のメンバーといつも一緒にいるから感覚が麻痺しているらしい。

「そうですね」

「本当に怖くないの？」

その言葉に頷いた。

「だって怖い顔を見てないし。怖い方の一面を見たとしたらその時はそう思うかもしれないけど、それはそうならざるを得ない状況だと思っし」

笑わないでじっと見ていた
常に裏の顔を見せて牙を剥いて周囲を威嚇し続けるのも違う気がする。

そんなのただ粹がっているだけ自分を理解していないだけ。葵と愁君がそう教えてくれた。

「梨桜ちゃんはやっぱり面白いね。生徒会室に行こうか」

行き着く先はやっぱりそこなんだ…

嫉妬 (2)

「悠君は？」

生徒会室に悠君の姿はなかった。

「用事があつて帰った」

拓弥君が言い、私をソファに座らせた。

私には生徒会に来るように言つくせにしょっちゅういないような気がするのはいのせい？

「梨桜ちゃん、オレンジとりんごとグレープフルーツ、どれがいい？」

「りんごがいいです」

拓弥君は私の前にペットボトルを置き、自分は水を飲んだ

「何をしていた？」

藤島寛貴が聞いてきたから

「屋上でぼーっとしてた」

正直に答えたら

「授業が終わったらすぐに来い」

オレ様生徒会長怒られた。

返事をしないでペットボトルを手に取り蓋をあけようとした…あれ？あかない。

蓋ってこんなに固かった？

力いっぱいひねるけど開かなくて、手が赤くなってきてしまった。

この蓋、不良品じゃない？開かないっておかしいでしょ！

「貸せ」

彼がペットボトルを受け取り蓋をひねるとあっさり開いた。

「ほら」

「ありがとう、ふじ…」

睨まれてしまった

「何度言えばわかる？」

名前で呼べ。そう迫られて、ペットボトルを取ろうとしたら遠ざけられた

「呼べ」

「ありがとう、寛貴…呼び捨てにするのって、慣れないんだもん」

「いい加減馴れる」

ペットボトルを受け取り口をつけて飲んだ。

「駅まで送る」

「ありがとう」

帰る前に、教室に忘れものをした事を思い出した。

それを2人に言い教室に戻ろうと廊下を歩いていると、上級生とすれ違った。

また何か言われるのかなと思いつつ、またすれ違ったとき、背中をドン！と押された。

突き飛ばされた私はバランスを崩して床に倒れこんでしまった。

ドスンという衝撃の後、背中に激痛が走った。

「うっ」

その場でうずくまり痛みを耐えていると上から声が降ってきた。

「早く生徒会から抜ける」

声が出た方を確認できなかったけれどできなかった。背中を嫌な汗が伝っていった。

悔しい……

「はあ……」

なんとか痛みをやり過ごして息を吐いて、立ち上がるうとして左手を壁伝いに這わせると

「いったくいつ！」

痛みが走るなんて想像してなかっただけに、突然走った痛み思わず声を出してしまった。

本当についてない。右手で窓の棧に手をかけて立ち上がった

教室に入って忘れ物をとると机にまた紙が入っていた

“朱雀の隣を歩くな”

「あほくさ……だったらあんたが隣を歩けばいいじゃない」

嫉妬 (3)

紙を鞆に入れて教室を出た。左手首と背中が痛い

・・・今日は着替えて帰るのは無理だな

カバンを小脇に抱えて携帯を取り出し、葵に電話しようとする

「遅い」

寛貴と拓弥君がこっちに向かってきていた。

ムツとした私は寛貴を見返した。誰のせいでこんなことになったと思ってるんだ！

ぎゅっとこぶしを握るとズキンと痛んだ

「いつ…」

痛い…

顔をしかめると

「左手がどうかしたのか」

寛貴が左腕を掴んで上に持ち上げた

「いつ！痛い！」

痛みで涙がぶわっと浮かんだ

「どうした？」

「つまずいて転んだの。痛い！離してっ」

保健室に連れていかれて湿布を貼り包帯で固定された。

「いたっ」

「我慢しろよ」

意外に上手いんだ。なんて思いながら手当てされた腕を眺めていると

「今日は家まで送る。行くぞ」

私の鞆を持って歩き出した。

「大丈夫！」

「何が大丈夫なんだよ梨桜ちゃん、その手でどうやって鞆持って帰るんだよ？」

いいから私を放っておいてくれないかな

さっきから携帯が震えている。

絶対、葵だ　　まずい

「出たら？」

拓弥君に言われて通話ボタンを押すと

『遅い。何してんだ』

“もしもし”と言う前に話し始めた。

「実は…転んでしまいました」

『怪我は？』

「手首をひねった」

『学校まで迎えに行く』

想像通りの言葉に慌てて返事をした。

「あ、大丈夫。学校の先輩が送ってくれるらしいから。先にご飯食べててね？じゃあね！」

通話を切った

帰ったら怒られるだろうなあ…

ベンツに揺られて、私はドアにもたれて目を閉じていた
熱が出てきたのがわかる

「次はどこに向かえばいいんだ？」

寛貴の声で目を開けると家の傍だった

「そのコンビニで降ります」

「家を教える。前まで行ってやる」

ダメに決まってるでしょ…

「フルスモークのベンツで帰ってきたら家族が驚くからコンビニにしてください」

寛貴からは舌打ちが帰ってきた

「そりゃそうだな」

拓弥君が、ははっと笑い、車はコンビニの駐車場に止まった

「ありがとう」

「お大事にね、梨桜ちゃん」

「腫れがひかなかつたら病院にいけよ」

2人の言葉に頷いて車から降りて信号待ちをしていると、隣に人が立った。

背の高い男だ。チラリと見ると帽子をかぶっていてメガネをかけていた

「フラついてるけど？」

「ん…あの車が通り過ぎるまで待って」

こちらからは見えないけどあちらからは見えているはずだから目の

前をUターンしたベントツに軽く手をふった。
歩行者用の信号が変わったとき、鞆をとられてフラつく体を支えられた。

「熱が出てきたな」

「うん」

「湿布を貼るから腕出せ」

シャワーを浴びて軽くご飯を食べさせられると薬を飲み、湿布を交換してもらいベッドに横になった

「鞆から弁当箱出して洗うからな」

「ん…お願い」

次の日は熱が下がらずに学校を休んだ。
葵は紫苑生徒会との定期交流だから休んで丁度いい。なんて言っていた

嫉妬 (4) side: 悠

午後から学校に来たオレは放課後、生徒会室に入るなり聞かれた。

「梨桜ちゃん？休みだけど」

寛貴さんと拓弥さんが揃って聞くなんて珍しい。

「なんで？」

「昨日の帰りに転んだんだよ」

拓弥さんがタバコを銜えながら言った。

「え！？大丈夫だったの」

「手首を捻挫してた」

ドジだな梨桜ちゃん、しっかりしてるように見えるのに

扉が開いて東青の生徒会が来た。

表向きだけ穏やかな会合が開かれた。

最近、互いのシマに黒鬼という卑怯なチームが出没していることがわかり、話し合いが一段落すると三浦が言った。

「そつえば、生徒会に女子生徒が入ったんだって？」

「ああ、今日は休んでるけどな」

拓弥さんが答えると宮野がフツと笑った。

この男が笑うなんて珍しい。そう思い綺麗な顔を見ると、口角が上がっているが目は笑っていないかった。

鋭い目をしてこちらを睨んでいた。

「紫苑も物騒な学校だよな？」

「なに？」

寛貴さんがそれに答えた。寛貴さんも宮野を睨み返している。

「そのまんまだよ」

宮野が寛貴さんに丸められた紙を投げつけた。

片手でキャッチした寛貴さんが紙を広げて書かれていた文字を見ると舌打ちした。

それを拓弥さんに渡しオレも文字を見た“朱雀の隣を歩くな”

「これをどこで？」

拓弥さんが紙の裏と表を見ながら聞いた。

「さつき拾ったんだよ」

宮野はまだ寛貴さんを睨んでいた。

それを真正面から受け止めて睨み返す寛貴さん。幹部のオレでもゾクツとする睨みあいだ

「生徒会に入った彼女は怖い思いをしてるだろうな、可哀想に…」

三浦が言った

「拓弥さん。昨日、梨桜ちゃんは転んだって言ったよな？どこで転んだんだ？」

オレが聞くと拓弥さんが舌打ちした。

「中途半端にするならその女解放しろよ。お前らの誰かの女なのか？」

宮野が言い三浦も畳み掛けるように言った。

「そうだな、守らないのに傍に置いておくのはきつとその女子生徒も迷惑している」

東青が帰ったあと

「ふざけた真似しやがって」

拓弥さんが壁を蹴った。

「拓弥さん、昨日梨桜ちゃんは誰かに突き飛ばされたとか、そういう理由で転んだんじゃないのか？」

「そういう事かもな…悠、梨桜ちゃんの連絡先聞いてるか？」

「聞いてない」

オレ達は彼女の連絡先すら知らないんだよな。

「悠、これからは梨桜から目を離すな」

寛貴さんの言葉に頷いた。梨桜ちゃんを守らなくちゃいけない。

嫉妬 (5) side:悠

次の日、梨桜ちゃんは午後から登校してきた。

「おはよう、悠君。ってもう午後だけど…」

「大丈夫か？」

きよとん、としながらオレに聞いてきた。

「何が？」

何がつて転んで手首を捻挫したんだろ！？

「体だよ。捻挫！」

「ああ…」

フツと柔らかく笑った。

「手首は腫れもひいてきたから大丈夫だよ」

今日はいつもと印象が違う。

何が違うんだろうと考えてみたら髪型が違った。

いつも2つにわけているのに緩くサイドに纏めていて毛先がふんわりとカールしていた。

それだけで可愛らしく見えた

「今日は生徒会に出ないで帰らせてね」

「顔だけでも出してっつよ。2人とも心配してるから」

少し迷っていたが

「迷惑かけちゃったからね…そうだね、挨拶だけして帰ろうかな」

何だか今日はいつもよりゆっくりと話すな…それが今日の雰囲気とあっていた。

「梨桜ちゃん、携帯の番号とアドレス教えてくれない？」

少し考えていたけれど頷いた。

「うん、いいよ」

赤外線で情報を交換した。

「寛貴さん達にも教えていいか？」

「…いいよ」

ぼーっとしている。

梨桜ちゃんは授業が始まってぼーっとしていた。

「小テストの答案返すぞー」

授業が始まってからも頬杖をついて窓の外を眺めていた。ウチの学校は試験の答案を返すときに、まず先に上位5人が名前を呼ばれて、その後は出席番号順に呼ばれるという残酷な決まりがある。

「東堂」

担任が呼びクラスがざわついた。
まさか…梨桜ちゃんがトップ？

梨桜ちゃんは担任に呼ばれてもぼんやりと外を眺めていた。

「おーい、と・う・ど・う・り・お〜！聞こえてるか？テストの答案返すぞ」

梨桜ちゃんはようやく反応した。

「え？」

クラスに失笑が起こった『あいつがトップなわけないよな』『ガリ
勉強でも成績悪かったら可哀想だな』

「だからな？答案返すぞ」

「…はい」

梨桜ちゃんは返事をしてまた窓の外を見ていた。

「あのなあ、東堂？」

梨桜ちゃんは教卓を向いた

「はい？」

クラスに、ぎやははと笑いがおこった。

下品な、下卑た笑いだ。相手を蔑むような笑い。

オレはその笑いに苛立った

こいつらは梨桜ちゃんの事を何も知りもしないくせに、変なあだ名をつけて陰でバカにしている。

こんな奴らに彼女をバカにされたくない。

「東堂梨桜！名前呼んだらさっさと答案を取りに来いっ！」

途端に静まり返る教室。

梨桜ちゃんが席から立ち上がって教卓に向かいそれをクラスの奴らの反応は様々だった。

呆然とする奴、悔しそうにしている奴：梨桜ちゃんに負けるのがそんなに悔しいのか？

「東堂、熱が上がって来てるんじゃないのか？」

担任が梨桜ちゃんの顔を覗き込んだ。

「…そうかも…」

担任が梨桜ちゃんのおでこに手をあてた

「熱があるじゃないか！保健室に行きなさい」

オレは立ち上がった

「先生、オレが連れて行きますよ」

「海堂、おまえにはまだテストの答案返してないぞ？」

「いいよ。梨桜ちゃんに解説してもらおうから」

「まあそつだな。後で渡すから職員室に來い」

あっさり納得する教師に驚いたが、それほど梨桜ちゃんの成績が良かったということだろう。

担任は次の順位の奴に答案を返すことにしたらしい

「続き配るぞ〜」

2番目に答案を受け取った奴が悔しそうに机を叩いた。

「先生！東堂さんは何点だったんですか？」

「…お前より上ってことは一つしかないんじゃないのか？配点見てもみれば分かるだろ」

オレは笑った

「梨桜ちゃん！君って最高だな！」

「そお？」

反応が鈍いのが心配になって額に手を当てた。

本当に熱い
痛めていない方の腕をとり支えて歩かせた

「梨桜ちゃん、保健室まで歩けるか？」

「大丈夫だよ」

保健室につき体温を測らせると38度近く熱があった

「家に帰る？」

「うん…病院に行く」

そう言うと携帯を取り出し番号を押していた。

「梨桜です。一昨日の夜から熱が下がらないんです。今から行ってもいいですか？」

病院に電話してるのか オレは寛貴さんにメールを送った。

“午後から梨桜ちゃんが学校に来たけど熱があるみたいなので帰らせませます”

「いいの？迎えに来てくれるの？ありがとう、先生」

迎えに来るって医者か？ 知り合いなのか？

電話を切ると梨桜ちゃんは

「いつも見てくれてる先生が用事でこの近くにいるから迎えに来てくれるって」

「良かったな、じゃあ荷物持ってきてやるよ」

「ありがとう、悠君」

「いいから、迎えがくるまで休んでろよ」

ベッドに彼女を寝かせて保健室を出ると寛貴さんから着信があった。

「はい」

『車を用意させる』

「これから知り合いの医者が迎えに来るらしいです。今保健室に寝かせてます」

『医者？』

「はい。一昨日の夜から熱が下がらないとか言っていました」

『昨日、宮野が持ってきた紙の事は何か言っていたか？』

「今日は熱のせいかぼーっとしていてまともな話はできないと思いますよ」

『わかった』

寛貴さんの電話を切り、教室に急いだ。

嫉妬 (6)

「もしもし、梨桜です」

涼先生と診察中でもつながる携帯に電話を掛けるとすぐに出てくれた。

『どうした？珍しいね』

「一昨日の夜から熱が下がらないんです。今から行ってもいいですか？」

頭がつまく働かない…

熱を出すのにもいい加減飽きた。こんな自分は大嫌い。

『今学校？迎えに行つてあげるよ』

「迎えに来てくれるの？ありがとう、先生」

先生の声に安心した。涼先生にお願いすれば、明日には熱も下がるはず。

保健室で寝ていると誰かが枕元に立つ気配がした。涼先生が来てくれたの？

「涼先生？」

目を開けないで聞いてみた。
額に手を当てている手が少し冷たくて心地良かった。

呼びかけても返事がないということは涼先生じゃないの？
この手は誰？

「嫌がらせをされていることに気が付けなくて悪かった」

藤島寛貴…

「どうしてそのことを知ってるの？」

目を閉じたまま寛貴に聞いた。悠君は何も言っていなかったよね？

「宮野が拾った紙を見た」

葵が拾った紙？

「それには何が書いてあるの？」

「“朱雀の隣を歩くな” 転んで手首を捻挫したのは誰かに突き飛ばされたからじゃないのか？」

机に入れてあった紙を処分しなかった事を思い出した。葵が“お弁当を洗う”って言った時に見つけたんだ。

失敗したなあ…

額に触れていた手がすつと頬を撫でた時にメガネを外していたことを思い出して手の甲を目に当てて顔を隠した。

「男の嫉妬も怖いね。一般の生徒なのかわからないけれど 生徒会から抜けるように言われたの」

「危険が及ばないようにする。悪かった」

解放してくれるのが一番手っ取り早いのに

“もういいでしょう？生徒会を辞めさせて” そう言おうとしたら、パタパタとサンダルで歩く音がした。

「東堂さん！お迎えの人が来てくれたわよ」

「はい」

涼先生が来てくれたんだ。

「私、これから病院に行くね」

「ああ」

心配が消えて慌ててメガネをかけた。彼に寝顔を見られてしまった

「梨桜ちゃん？」

涼先生が顔を覗かせた。目を細めて笑うと愁君と似てるなっと思う。

「先生、ごめんなさい」

涼先生は額と首筋に手を当てると眉を顰めた。

「熱が出たことに心当たりは？」

「転んだ時に背中がすごく痛くなった」

「了解。病院で点滴してあげるから帰るよ」

ほら、と言われて腕を差し出すと抱えられた。

「相変わらず軽いな。食べなきゃだめだって言ってるよな？」

涼先生は「葵にもっと食べさせるように言わないとな」そう呟きながら私を抱えて歩いた。

初夏の休日

熱も下がって元気になった週末、青龍のチームハウスでぼんやりしていた。

「つまらない」

コジ君は試験の成績が悪かったらしく、愁君と葵に怒られて一生懸命勉強している。
ヤンキーなのに勉強なんて可哀想に…

「葵、お買い物に行ってきたもいい？」

ソファで眠っている葵に問いかけるとチラッと私を見て冷たく言った。

「ダメ」

「じゃあ、葵も一緒に行こう？それならいいでしょ？」

「朱雀に探されてんだろ？欲しいものがあるなら買ってきてやるから言え」

また目を閉じてしまった。

本当につまらない。

「下に行ってる」

寛貴から聞いた「葵が拾った紙」の事は葵が何も言わないから私も黙っていた。

「敷地から出るなよ」

「うん」

知っていて葵が言わないのは『聞いて欲しくない』から。寛貴の言葉から葵が何か言ったんだろうなって想像できたから私も黙っていることにした。

1階では男の子たちが集まって楽しそうにわいわいやっていて、それを横目で見ながら外に出ると何も植えられていない荒れ果てた花壇の前に立った。

暇すぎるし 土いじりでもしようかな…

雑草だらけの小さな花壇を前にして腕まくりをした。

2つある花壇のうち、1つを花で一杯にして、もう1つは食べられるものを植えよう！

やる気が出てきた私は、男の子達に声をかけた。

「あの、ちょっといい？」

「はい！」

そんなに構えられると傷つくな

「軍手がゴム手袋があったら借りてもいいかな？」

「もちろんですっ」

葵と愁君をちよつと恨みたくなった。

このチームで私の事をなんて言ってるの？私、彼等にすつごく怯えられちゃってるんだけど！？」

赤い髪の毛をした男の子は私に新しい軍手を出してくれた。

「ありがと。借りるね？」

軍手もらい2階にいる葵のところに向かった

「葵！汚れてもいいシャツ貸して」

「…何する気だ？」

「花壇の草むしり」

クローゼットから1枚のシャツを取り出すと、私に投げた。

「これ？」

「昔着てたやつ。今は小さいからやる」

濃いグレーの半そでシャツをもらい、Tシャツの上に来ていたチュ

ニツクを脱いで葵のシャツを着た。小さいっていうけど、私が着てもお尻がすっぽりと隠れる長さで十分大きい。

葵はまたソファに座って眠りに入った。今日の葵は寝太郎だ。軍手をはめて、張り切って花壇に戻ると雑草をむしりだした

ブチブチと雑草とりに熱中していると

「梨桜さん、何してるんですか？」

私に声をかけたのは桜庭さんだった。年上なのに私に丁寧に話をしてくれる

「桜庭さん！草むしりしてました」

ちよつと驚いた顔をしていた。

不良の溜り場で草むしりって 意外だよね。

「草むしり？何か植えるんですか」

「桜庭さんはトウモロコシとかぼちゃどっちがいいですか？」

「え？」

突然聞かれて驚いている。

いつも運転席と後部座席ではかり会話をしているから、こんな風に正面を向いて話すのは新鮮だ。

「どうせなら食べられた方がいいかな」と思って」

「かぼちゃとかがいいんじゃないですか？あまり育たなくても加工しやすいと思いますけどね」

そうだね、かぼちゃのプリンとか、タルトとか、パイとか 美味しいもんね！

「じゃあそうします！」

「手伝いますよ」

「ありがとうございます」

二人で草むしりをしていると

「梨桜さ〜ん！オレもやります」

コジ君が来た

「愁君のお勉強は終わったの？」

「やっと解放されました」

3人でぶちぶちと草むしりしていると視線を感じた
幹部と総長の女（みんなそう思い込んでいる）と幹部の運転手が草むしりをしているのが珍しいらしい

「肥料を足して花の種と野菜の苗を買いに行きたいな」

「葵さんに外出の許可をとってきます!」

私は首を横に振ってコジ君を見た。

「コジ君、さっき駄目って言われたの」

そうなんですか、と残念そうなコジ君
私はいいいことを思いついた

「私、変装していけばいいんじゃない?」

「何にですか?」

「男の子とか」

「そんな可愛い男いませんよ」

「葵だつて男のくせに美人じゃない」

「あの人は別格です」

別格。つて言い切られちゃう葵が羨ましいな。と思いつながら、何とか
か買い物に行ける方法を考えていると

「…おまえらごちゃごちゃうるさい」

葵が腕を組んで立っていた。

「梨桜、土いじりしたらすぐに洗え。また手がかゆくなるぞ」

「うん。ねえ葵、ホームセンターに行きたい」

「…何を買った？」

「花の種と野菜の苗と肥料」

「桜庭、コジと一緒に連れて行ってやれ。それから誰かつけさせるから」

「やった！」

服を着替えて桜庭さんの運転する車で買い物に出た

コジ君と何の花を植えるか相談して、向日葵とコスモスとかぼちやの苗を買い、ホームセンターを後にした。

帰ってから皆でお昼を食べた後に種まきをして、私はお昼寝をした。

目が覚めたら隣で葵が寝ていた。

今日の葵は良く寝るな 昨日寝てなかったんだろうか？

愁君は葵に呆れていたけれど、私は葵がいてくれたおかげでぐっすりと眠ることができた。

定例会 (1)

日課になった朝の挨拶

「じゃあな、放課後」

「うん、またね。桜庭さん、行ってきます」

「行ってらっしゃい。梨桜さん」

葵と桜庭さんに手を振って駅に向かった。
手には新しいダミーの制服

手首を捻挫してからおさげをやめてサイドで緩く纏めている。
くせ毛で何もしないと毛先が自然に巻いてしまう私の髪を、学校の
男達は陰で『ガリ勉メガネが色気づいた』と言っている。

しょうがないでしょ？生まれつきなんだから！私だって葵みたいな
サラサラなトレートが良かった。

悠君が心配してくれて傍にいてくれるから、危険はないけれど陰口
は止められないらしい。

- - -
- - -
- - -

「梨桜ちゃん、休憩にしよう?」

「このページが終わったらね」

試験対策で悠君に勉強を教えている私。

「りーおちゃーん」

葵のところでコジ君にも勉強を教えている。

葵と愁君はスパルタで、間違うごとに拳が飛んでくるらしく、泣きつかれて家庭教師を引き受けた。

私といえば、復習をしながら、学校に行けなくなった辺りから勉強をしていた。

習っていないところは葵に聞いたり愁君に聞いたりしながらやっと去年の冬あたりまで進んできた。

悠君が机に突っ伏してわめいた。

「数学なんて必要ねーじゃん！」

匙を投げているのか、本人の自主性に任せているのか、寛責と拓弥君は悠君の事は見て見ぬ振り。

「数学はね、考える事を学ぶ為の教科なんだよ？答えを導く為の過程を勉強するの。ね？」

わかった？と聞くと悠君は目だけをこちらに向けた。

「それ、梨桜ちゃんの持論？」

「そんなわけないでしょ。札幌でお世話になった人の持論だよ？」
入院しているときにボランティアで勉強を教えに来ていた大学生が
言っていた言葉を思い出しただけ。

「世話になったのって、男？」

「うん」

「独身？」

「うん」

いいから早くプリントやろつよ？

「若い？」

それって関係ないよね？

「…なんで？」

「気になったから」

彼は見捨てて帰ろう。

私はもう一人の、可哀想な子の勉強を見に行かなければいけないの
だから

「ふ〜ん…私そろそろ帰るから、明日までにこのプリントやって
ね？」

「梨桜、送る」

「はい」

最近“送る”“いい”の言い合いに疲れて駅まで送ってもらっていた。

一駅だけ電車に乗り、駅につくと新しい制服に着替えて桜庭さんの車に向かった。

今度の制服はワンピース型のどこかのお嬢様学校の制服らしい。

いったいどこから手に入れてくるのか気になったけど、もしも愁君の趣味だったら困るので黙っていた。

駅のロータリーの隅で男達の言い合う声が聞こえて、通りすがりに見ると悠君がいて、数人の男に絡まれていた同じ紫苑の生徒を庇っているようだった。

思わず立ち止まって見ていると、

「そんなところにいたらダメだよ」

「愁君」

肩を抱かれるようにしてその場から離されて車に乗った。

「梨桜さん、危ないからやめて下さいね？」

桜庭さんに言われて頷いた。車の中から外を見ると、まだ喧嘩をしているようだった。

悠君の裏の顔を初めて見た。

「愁さん、朱雀の車がありますけど、どうしますか？」

「構わない。そのまま行け」

今日はこちらにもフルスモーク仕様だから私が乗っているのは見えな
いはず。

さっきまで乗ってきた車を横目に見て、私を乗せた車はすれ違った。

「昨日な、あの後ケンカしてた奴の助けに入ったんだ。そのチーム
潰してきたからプリント出来なかった」

次の日、悠君は「ごめんな？」と首を傾げて可愛く言った。

見てたから知ってるけど……チーム潰してきた。とか可愛らしく言わ
ないでほしい。

「怪我しなかった？」

「オレは大丈夫！ 1年のヤツが病院に送りにされたけどな」

“病院送り”その言葉に思わず眉根が寄ってしまったのがわかった。
どうしてそんなに危険なことをするの？

「昨日、青龍の車がいたんだよね」

拓弥君が言った

「梨桜ちゃんの家がある辺りって青龍のシマなんだけどさ、噂とか聞いたことない？」

悠君がプリントから顔をあげて聞いてきた。

「噂？」

「東青のトップの彼女がどんな女なのか全然情報が入らないんだよ。溺愛してるらしくてガードが固すぎるんだ」

溺愛って…それ違うから。彼女でもないし。

「引越してきたばかりだからわからないなあ。女の子の友達もいないし」

「そつだよな、ごめんな」

二人に気付かれないようにそつと息を吐いた

「梨桜、何か飲むか」

「あ、うん。リンゴがいい」

寛貴は冷蔵庫からペットボトルを取り出し蓋を外して目の前に置いてくれた。

悠君はプリントの問題が進まずに「ごちゃごちゃと何か言っている。」

「梨桜ちゃんが倉庫に来てくれたら勉強はかどるんだけどな」

彼の戯言を横目で見て、ペットボトルに口をつけて一口飲んだ。

「梨桜ちゃん、倉庫に来ないか？」

目をキラキラさせて言われても無理。絶対にそれだけではできません。

「悠君が家に帰って真面目にやればいいんじゃない？」

「じゃあ、オレんちに来るか？大歓迎だぞ！」

「悠、口を動かす前に頭と手を動かせ！」

拓弥君にはこつと教科書で叩かれていた。

定例会 (2)

次の日のお昼休みに生徒会室に顔を出すと、午前中は学校にいなかった悠君がいた。

「東青と定例会があるんだ！梨桜ちゃんも一緒だからな」

「え？」

悠君が笑いながら言った。

「東青学院だよ、梨桜ちゃんは知らないかもしれないけどあそこは男子校なんだ」

知ってるよ。共学だったら迷わずに東青に通ってるもの。

そんなことより、葵の学校に行ったらものすごく怒られるんですけど！？

「ふーん ライバル同士じゃなかったの？私はそう聞いていたけど」

悠君は頷いた。

「ここら一带の縄張りを守る為に情報交換をしている。ここいらを狙っている卑怯なチームが多いからな、基本的に仲は悪いけど定期的に情報交換をして治安を守っているんだ」

チームが治安を守る？…この前聞いたときはそんなこと言っていなかったような気がする。

「梨桜ちゃんは紫苑が始まって以来の女性生徒会メンバーだな！東青の生徒会長は無愛想で怖いけどオレ達がいるから大丈夫だからな！」

この学校でその名前を聞くと頭が痛くなってくる。

「悠君、勉強するために残った方がいいんじゃない？私も残って一緒に勉強しようか」

行かなくて済むように口実をつくってみただけれど

「梨桜は連れて行くから悠は自分で勉強しろ」

「でも、試験で赤点とつたら大変だよ？」

「赤点を取る方が悪い」

寛貴の一言で呆気なく終了した。

「梨桜、乗れ」

「……」

今更なんだけどさ。高校生が車で移動とかおかしいでしょ？しかもまた、車はベントツ、運転手付き。

お約束のフルスモーク！

強引に車に乗せられてついた先は東青学院高等部

紫苑学院とは違ってブレザータイプの制服で頭の良さそうな人達が歩いている。

いや、紫苑学院にも頭の良さそうな人が多いけどなんとというかこの学校の人は“クール”そんな感じの人が多い

「お待ちしていました」

校舎に入ると知っている顔が私達を出迎えた。

コジ君

彼は私を見て目を見開いた

「
」

気づかれないように苦笑いを向けた

私達は生徒会長の寛貴を先頭に、私が一番後ろを歩いている。

コジ君は小さくため息をついて私達を案内しだした

どうか私を見た葵が暴れませんかように

「会長、紫苑学院生徒会の皆さんをお連れしました」

コジ君は生徒会室に入るなり言い、私は俯いたまま部屋に入った。

「彼女が紫苑学院の生徒会に入った女子生徒？」

聞き覚えのある優しいげな声に顔をあげると
絶句している葵と、冷たくて黒い笑みを浮かべる愁君がいた。

走って逃げたい 背中の傷があるから走れないけど、でも気分は廊下を走って校舎から出ていた

拓弥君が言った

「梨桜ちゃん、初めてだろうから紹介させてね。この人達は東青学院生徒会。彼が生徒会長の宮野葵、副会長の三浦愁、会計の小嶋雅之。彼女は東堂梨桜、書記に任命した」

「梨桜ちゃんだね？宜しく。愁って呼んで欲しい」

うーん 愁君、相変わらず王子様スマイルだ。今日の笑顔は一段と黒いですが…

「宮野葵 葵でいい」

素っ気なく、クールに言った。

そうだよね、今更“宮野さん”とか“葵君”なんて呼べない。

葵は私が言葉を話せるようになった時から“葵”だ。

それは彼にしても同じだろう、今更“東堂さん”なんて呼べるわけがない。両親が離婚するまでは自分も東堂葵だったのだから…

「コジ、紫苑学院の皆さんにお茶をお出しして。梨桜ちゃんウチは男子校なんだ もし良かったら先に案内しておきたい場所があるんだけど」

愁君が暗に“外に出る”と言っていた。

「はい、私も知っておきたいのでお願いします」

愁君について廊下へ出た。

「あ、コジ！梨桜ちゃんには紅茶を出して」

そつのない副総長、いや、副会長だ。

「はい！」

生徒会室が見えなくなったところで愁君は立ち止った。

「一応ね 女子用トイレは職員室の近くにしかないから」

「ありがとう愁君」

愁君は腕を組んで私を見下ろした。

「葵、キレそうだったね？」

そうでしたね、キレる寸前だったね。冷ややかなあなたも相当怖い
ですよ？

「今日の昼休みに生徒会室に呼ばれて突然言われたの」

愁君はため息をついた。

「オレも甘かったよ。まさか藤島がね……」

「え？私と葵の事がばれたの？」

「いや、そっちじゃなくて」

はい？意味が良くわかりません

「これ以上深入りしないように。いいね？梨桜ちゃん。チームに入
れって言われても絶対に駄目だよ？君はウチの大切な姫なんだから」

コクンと頷いた。

姫とか言われても困るけど、とりあえずチームに入ったらいけない
ことはよく理解できる

定例会 (3)

「今日の議題に入ります」

愁君が言った。

葵はさつきから、凍りつきそうな冷たい視線を私に容赦なく浴びせてくる。

その目が何を言っているのか痛いほど良くわかる。互いの事が良く解るってこういう時不便だな…

『オレがあれば「来るな」って言ったよな？なにになんておまえはこいつらに連れて来られてここに座ってたんだ？このバカ』

葵の鋭すぎる視線。それに対抗するように寛貴が葵を見ている。

誰にもわからないようにため息をついた

早く帰りたい。

会議は続き、一度休憩になった。

葵が外に出ると目で訴えているけれど、恐ろしくて席から離れたくなかった。そんな葵を見て愁君はため息をついて私を見ている。

「梨桜さん、紅茶のお代わり持ってきてきましょうか」

コジ君が気を使って聞いてくれた。

今は君だけが私の癒しだよ。かわいいコジ君

「大丈夫、ありがとうコジ君」

その時、机に置いた消しゴムに手が当たって床に落ちた。
拾おうとして椅子の上で体をひねりながら腰をあげたとき、ツキン
！と背中に痛みが走った。

「いつ！」

バランスを崩して床に落ちた

「梨桜さん！？」

うずくまって痛みが過ぎるのをこらえた。

油断してしまった。

うう 痛い

“少し我慢しろ” 小さい声が聞こえて、頷いたら体がフワリと浮いた。

「愁、ドア開けて」

葵に抱き上げられていた。

生徒会室の隣の部屋に入ると葵は私をソファに下ろし、私の額に滲んだ汗を自分のハンカチで押さえるようにして拭ってくれた。

“おさまったか？” 小さい声で聞き、私は頷いた。

「少し休んでろ」

頷いて顔を上げると、葵の後ろに朱雀のメンバーがいた。

「梨桜ちゃん、大丈夫か？」

悠君が心配そうに聞いた。

「うん 大丈夫。」

「まだ辛そうだよ？」

拓弥君が聞いた

「少し休めば大丈夫。心配かけてごめんなさい」

まだ心配そうなる3人に笑いかけた。

「背中を怪我したときの後遺症なんです。少しじつとしていれば痛みは引くので大丈夫。悠くん、そんな顔しないで？」

悠くんは泣きそうな顔をしていた。

優しいんだね？心配してくれてありがとう。

定例会 (4)

「どうだ？」

しばらく、一人でぼんやりしていると葵の声がした。

「大丈夫」

葵が一人で部屋に入ってきたから体を起こそうとすると、葵が支えて起こしてくれた。

「葵、ありがとう」

カシャンとメガネが床に落ちると葵がメガネをかけてくれた。髪がもつれていたので結わえていた髪を解いた。

「愁、病院に連絡してくれないか？コジ、車ませ」

葵の声が少し冷たくなったので、顔をあげると、朱雀の3人が部屋に入ってきていた。

「梨桜ちゃん、オレの家病院だから診察受けた方がいいよ？今連絡するから」

愁君の言葉に頷いた。

「ありがとう愁君、葵もありがとう」

「別に。愁、病院に付き添ってやれよ。この女どんくさそうだ」

ムッ

愁君が付き添う口実をつくるのはわかるけど、どんくさいって何よ？

「1人で行けます！」

「梨桜、一緒に行ってもらえ」

その言葉は葵ではなく寛貴だった。その言葉が意外で、寛貴を見上げてしまった。

「三浦、梨桜ちゃんは朱雀の人間だけど頼んだぞ」

拓弥君の言葉に耳を疑った。どこをどうしたらそういつ考えにいきつくのだろうか

「何を言ってるの！？私がいつ！」

拓弥君がにこにここと笑った

「やだな、梨桜ちゃん。寛貴が気に入って生徒会に入れたんだ。君も幹部っていうことだよ」

笑いながら葵と愁君を見ていたけれど、拓弥君の眼は笑っていないかった。

「勝手に決めないで！」

「不服か」

低い声で寛貴が聞いた。

そんな声で聞いたって怖くなんかないんだから！

「何が不服だ」

チラリと葵を見ると、史上最悪に不機嫌そう

「チームに入るなんて、弟が泣く」

葵に殺される。とは本人を目の前にして言えない。

「梨桜ちゃん弟がいるんだ」

悠君が言った

「そんなもんほうっておけ。男だろ？それに梨桜ちゃんに何かをしるって言っているわけじゃない。寛貴の隣にいればいいんだ」

拓弥君が言った。

それが一番ダメじゃない！？

「ダメ！」

冗談じゃない！

「なんでだよ 弟は姉ちゃんべつたりなのか？」

悠君が聞くけれど、本当の事は言えない！ けど阻止しなきゃ

「なあ、梨桜ちゃん教えて？紫苑に来て朱雀を拒否るってどうしてだ？朱雀の上層部を構成しているメンバーはほとんどが紫苑の生徒だ。朱雀に入りたくて紫苑に進学してくる生徒だって多いんだ」

そんなこと知っていたら入らなかつた。

「紫苑に編入したのは時期的に受け入れてくれるのがそこだけだったのと、私の父が何も知らないで選んだから！それに 弟がべつたりなんじゃなくて 私が」

葵の姉だから。とは言えない。でも阻止しなければ、キレた葵が何を言い出すかわからない。

私が危険云々より、今以上の窮屈な生活になることは間違いない。

「え、と ぶ、ブラコンだから？」

これしか思いつかなかった。

「ブラコン！？ ハハハ！」

愁君が吹き出した。

「ブラコン！？梨桜ちゃんブラコンなのか！？」

拓弥君が聞き返した。

葵はうつむいて肩を揺らして笑っている。

「そう！私ブラコンだからっ！ウチに帰って弟の世話しなきゃいけないの！」

呆れて何も言えない朱雀メンバーに私はもう消えてしまったかった。
恥ずかしい…

「梨桜ちゃん、車が来たから行こうか」

愁君が言ってくれて少しほっとした

「うん」

「コジ、梨桜ちゃんの荷物持ってきて」

ソファから立ち上がろうとすると葵が私を抱き上げた

「歩けるよ？下ろして！」

「うるさい。黙れ」

怖い 葵はそのまま私を運び、廊下に出ると小さな声で言った。

“先に家に帰れ”

その言葉に小さく頷いた。

背中を痛めた後は熱が出ることが多い。

もう熱は出たくないと思うけれど、出てしまう。

こんな時、どうしても私は助かったのだろうかと思ってしまう時がある。

「梨桜、おかゆ作ったから食べる」

何も食べたくない。体中がだるい。

また高熱を出した私は葵に看病されていた。

「後で…」

熱を出さない体に戻りたい。

そう思っても仕方のないことだけれど、こつも頻繁に熱を出すといふ愚痴を言いたくなってしまふ。

「ダメだ。食べないと薬も飲めないだろ」

体を起こされてレンゲが口元に運ばれる。

「ほら、口開ける」

口を開けるとレンゲを口に入れられて食べさせられた

「午後から学校に顔出してくるから寝てろよ」

「ごめんね葵」

定例会 (5)

“目が覚めたら電話しろ”

葵のメモがテーブルに置いてあって、携帯にかけるとすぐに出た。

「葵？」

『どうした？』

「今起きたよ」

『熱は？』

さつき計った体温を伝えた。

「37度だった。ねえ葵、シャワー浴びたい。いい？」

『まだダメだ。我慢しろ』

「もう大丈夫だよ？」

『ダメだ。お前たまに髪の毛乾かさないうで寝るだろ』

良く覚えてるな

「過保護すぎだよ？」

『いいんだよ。それより何か食べたいものあるか』

「プリン」

『わかった。なるべく急いで帰る』

「うん、ごめんね葵」

『謝るな。おとなしく寝てろよ』

うたた寝をしているとドアの閉まる音がした。

「お帰りなさい」

ゆっくりと起き上がると葵が部屋に顔を出した。

「ただいま」

葵にシャワーを浴びたいと訴えてなんとか許してもらい、汗を流すと葵が髪を乾かしてくれた

「伸びたな」

東京に行く。と決まってからドタバタしていて美容室に行けてなかった。

「私も葵みたいなサラサラのストレートに憧れる」

私の髪は何もしないと巻き毛になる。コテいらずだ。

風にサラサラなびくというのを一度やってみたい。

「やってみたら？オレもストレートロングの梨桜を見てみたい」

今度、ヘアサロン予約しよ

「今日朱雀が来たよ」

寛貴が言い出したことを思い出した

「何を考えているんだろうね」

「藤島には近づくな。いいな」

「うん」

私はそう思っているんだけどね、うまくいかないんだよ。

「お前、ブラコン宣言してどうすんだよ」

ああ、そうだった

勢いというか、仕方なく言ってしまったんだ。

「どうしよ？勢いで言っちゃった。葵、なんか考えて？」

嫌そうに眉をひそめる。

「上級生の弟なんて考えつかないだろ。オレ達似てないしな 名字も違うし」

確かにそうだね。仕方がないから“ブラコン梨桜”のキャラを通すしかないか。

たくさん寝すぎて眠れない！と訴えると葵の部屋でDVDを見た感動する映画だったけれど葵は自分のベッドで眠ってしまっていた。

「葵、風邪ひいちゃうよ」

毛布をかけてあげて続きを見た。

「…おまえ、DVD見てそのまま寝たな？」

目が覚めると起きてベッドに座っている葵が腕組みをして私を見ていた。

「うん」

いつの間にか葵の布団にもぐりこんで一緒に眠っていたらしい。

「熱は下がったか？」

私の額に手を当てた

「多分。今何時？」

「4時 もう少し寝る。おまえも寝ろ」

一緒に寝るとよく眠れる。葵もそう言っ

私達は昏過ぎまで眠っていた。

定例会 (6)

…寝すぎた。

久しぶりに葵と一緒に眠ったら、気持ちよく眠れすぎてしまった。熱は下がったけど、頭がぼーっとしている。

葵も寝すぎてぼけっとしていたな あれで総長と生徒会長が務まるのだから不思議だ。

「梨桜ちゃん、生徒会行くぞ?」

目の前で悠君が首を傾げている。

男の子のくせに相変わらず可愛いじゃないか

「生徒会?」

なんだっけそれ

「…?」

悠君の真似をして首を傾げて考えた。

頭がうまく働かない

「梨桜ちゃん、なんか今日変だぞ? 寛貴さんに怒られるから行くぞ」

悠君に手を引かれて教室を出た

寛貴　？ああ、思い出した。朱雀の総長だ

「梨桜ちゃん、体調はもういいの？」

「ご心配をおかけしました」

二人に頭を下げた。

「梨桜ちゃん？」

「拓弥さん、梨桜ちゃん今日変なんですよ。ぼーとしちゃって悠君が私に苦笑いを向けた。」

「寝すぎて頭がぼーっとしているだけです」

「かわいいーね、梨桜ちゃん」

相変わらずチャラ男だ。チャラ男
拓弥君がにこにここと答えた

「これからチームの溜り場に行くから」

「行ってらっしゃい」

「梨桜ちゃんも倉庫に来るか？」

倉庫つていかにもヤンキーって感じ。葵のところも呼び名が違うだけで似たようなものかな？

「私は夕飯の用意があるので失礼しますね」

「梨桜ちゃんが家事するのか？」

悠君が言った

「そつだよ？」

「おうちの人は？」

「母は亡くなっているし、父は仕事の都合で外国にいるから弟と二人暮らしなの。弟はクラブ活動が忙しいから料理は私がやってるの」

総長の仕事〓クラブ活動みたいなものでしょ。間違いではないよね

「それじゃ、失礼します」

帰ろうと立ち上がると

「梨桜」

寛貴が声をかけてきた

「はい？」

「土曜日にチームに来い」

私はすみません。と頭を下げた

「土曜日は病院で検査なんです」

これはウソじゃない、本当の事だ

「検査？」

寛貴は問いかけた。

「結構大きな怪我だったので、定期的に検査を受けているんです。」

「梨桜ちゃんがこの前みたいになったらオレ達はどうしてあげたらいい？」

拓弥君の顔はチャラ男ではなくなっていた

「自分でもどうすることができないので痛みをやり過ぎすしかないんです。去年、事故にあった時に背中の神経を傷つけてしまったみたいで負担がある姿勢をとったりすると、背中から全身に痛みが走る時があるんです」

「事故？」

悠君が眉を顰めながら聞き返し、私は頷いた。

「前よりは頻度が少なくなってきたんですけど、たまにひどく傷む時があつてその後に熱が出てしまうことがあるんです」

「それは辛かったね」

私は拓弥君に笑いかけた

「でも命が助かったのでいいんです。時間はかかりますけど、少しずつ回復してきているみたいなので」

あの事故で亡くなった人もいる。命がある私は恵まれている。

「弟は背中が痛いときにどうしてるんだ」

寛貴が聞いた

「背中をさすってくださいます」

「優しいな」

悠君が言った

「はい。生意気だけど優しいんです」

これも本当の事だ

「送る」

寛貴が言った

「いつも悪いし」

私が言つと

「あゝ　そういう他人行儀、嫌だな。そういえば梨桜ちゃん東青の奴らに懐いてなかった？オレ、シヨックだったな。三浦の事“愁君”て呼んでたしな。オレなんか何回もお願いしてやっと名前で呼んでくれたのに」

拓弥君が恨めしそうに言った。

「おまけに小嶋を“コジ君”て　梨桜ちゃんは紫苑の生徒でしょ。青龍の幹部と仲良くしてどうすんのさ」

悠君がとどめをさした。

だって彼らといるのが私の日常なんだもの！
おまけに“葵”はそれ以外に呼びようがない。

「梨桜ちゃん、オレの名前は？」

悠君が言った

「悠くん」

「オレの名前、可愛く呼んで？」

いつの間にかチャラ男に戻ってる

「拓弥くん？」

オレ様男が睨む

「呼べ」

「ひろき…」

「それでいい。梨桜、帰るぞ」

なんだかドツポにはまっていきそうで怖いな
大丈夫かな私…

「梨桜ちゃん、今は体調が整わなくて無理かもしれないけどいつかはおれらのチームに顔だしてよ」

助手席から振り返って悠君が言った。

「」

返事に困っていると

「怖い奴らじゃないよ?」

残念ながらそういうことは心配してないんですけど。倉庫に行くことだけはまずいです

「弟が心配するようなことはしないし、させない。だから落ち着いたら顔出せ」

寛貴がそう言い切った

「はい」

この場合はそう言っしかないだろう

私は青龍でトップを張っている男の姉です。あなたたちと馴れ合うとイロイロと支障がでると思っんです。

こう言ってしまいたいけど絶対に言っなくなって言われているし…

寛貴がチームに來いといった土曜日は葵に付き添われて病院にきた。私の背中の中にまだガラス片が入っていると思っから、細かく調べ取り除いた方がいいのではないかという話をされた。

「検査は夏休みでいいよな」

「うん。ねえ葵、手術のときに居てくれる？」

「当たり前だろ」

手術は怖い。

あの時の痛みと恐怖を思い出してしまっから

「大丈夫だよ。傍にいる」

葵が私の頭をぎゅっ胸に抱きしめてくれた

「うん」

空席の子（1）

男ばかりの教室はむさ苦しい。

雨が降っている今日はいつも以上にそう感じてしまう。

私は空席の机を眺めた。

「梨桜ちゃん、何見てるの」

私の前の席に座った悠君が後ろを振り返りながら私の視線の先を探しているようだった

「悠君、あの席の子ってどついう子？」

「記憶にない」

そつえば、入学してすぐに学校に来ていないって言ってたね。私はあることを決めて立ち上がった。

「梨桜ちゃん？どこ行くんた」

「職員室」

「先生」

担任の先生は私を見て笑った

「どうした？東堂」

私の身体の事情を知っている先生は、私のためにいろいろと骨を折ってくれていた。

「クラスのもう1人の女子生徒ってどんな子ですか？」

私が聞くと先生は驚いていた。

「私、会ってみたいんです」

「どうしてだ？」

「クラスが男だらけだから、女の子と話したいと思って」

「仕方ないだろ、元男子校なんだから」

「でも、梅雨時に男だらけってむさ苦しいし…」

「…」

先生が絶句しちゃった。

私、そんなに変な事言った？

「東堂、オレはあいつと双子なのか半信半疑だったが」

そう言って私を観察している。

担任の先生だけは私と葵の関係を知っている。緊急連絡とか父兄連絡の為に

葵と姉弟だと知った時の先生は、物凄く驚いていた。

「やっぱり姉弟だよな　今実感した」

生徒会顧問もしている先生は葵とも面識があるらしい。

「今の会話のどこで実感したんですか」

「いや、こつちの話しだから気にするな。それより、今日の午後に笠原の家に行くけど一緒に行ってみるか？」

「はい、連れて行って下さい」

不登校の生徒は、笠原　麗香という名前だった。

先生に連れられて来た笠原邸は豪邸だった。お嬢様なんだ

「先生、いつも申し訳ありません」

「いいえ、今日は麗香さんのクラスに編入してきた子を連れてきました。麗香さんに会いたいそうです」

突然のクラスメイト登場でお母さんが私を見て驚いていた。

「こんにちは東堂梨桜です」

とても立派な応接室に通されて、私はクラスメイトと初めて会った。

「はじめまして、東堂梨桜です」

「笠原麗香です」

彼女は普通の女子生徒という感じだ。

「笠原さん、東堂は北海道から編入してきたんだ」

先生が私の事を話すと、先生から目を逸らすわけでもなく話を聞いていた。

「そうですか」

家で引きこもりかと思っただらそういうわけじゃないらしい。担任が家に行けば顔を見せる、私の前にも顔を出す。

何が嫌で学校に来ないんだろうか？

「東堂さんは札幌では共学だったの？」

笠原さんのお母さんが聞いた。わざわざ元男子校に編入したのが不思議なのだろうか

「いえ、札幌では女子高に通っていました。紫苑学院に決めたのは制服が父の趣味だったから。ですかね」

「東堂、先生は初めて聞いたぞ。その理由」

先生は本当に驚いているというか少し呆れているようだった。

まあ、娘と息子も呆れてるんだけど

「そうでしたっけ？でも、父は海外赴任でロンドンにいるんですよ。私がこの制服を着ていても意味ないと思うんですよ」

私が言うとお母さんは笑った。彼女も少し笑った。笑えるんじゃない

「編入して驚いたのが男だらけ　むさ苦しいんです」

「仕方ないだろ？男子校なんだから。先生だって嫌だ」

先生はムキになっていう。案外子供っぽいところのある先生だ。

帰りの車で先生に聞いてみた。

「彼女は何が嫌で学校に来ないんですか？」

先生は難しい顔をしながら答えた。

「わからん。親が聞いても答えない」

自分で志望して受けた高校に来ないなんて何だか変だ。イジメかと思っただけれどそれも違うような気がする。

「明日からプリント持って行きます」

「やってくれるか？」

先生は私を見て言った

「先生、前見て運転してください！生徒会役員でも私は朱雀のメンバーじゃないから放課後の活動に意味はないし、有意義でしょ？」

そう言うと、先生は恐る恐るといった感じで聞いてきた。

「青龍のメンバーなのか？」

「先生までそんなこと言うのやめてください。葵が迎えに来るので帰りに青龍のチームに行くこともありますが、メンバーじゃありません」

「そうか。先生は、生徒会に青龍のメンバーがいるのかと思って焦ったぞ」

先生は心底ホツとしたように笑った。

空席の子 (2)

放課後、私は3人に宣言した。

「明日から、登校拒否をしているクラスメイトの家にプリントを届ける事にしたから放課後にここにきません」

悠君が怪訝な顔をして聞いた。

「梨桜ちゃん、午後の授業にいなかったのって」

「担任の先生と笠原さんのおうちに行ってきたの」

「オレ、具合悪くなったのかと思って保健室まで探しに行ったんですけど」

「言わないで行って悪いことしちゃったな」

「ごめんね、悠君。急に行くことになったから」

「今度からせめてメールしてよ」

私が頷くと、拓弥君が悠君に

「登校拒否？ウチの学校にそんなやついたのか」

悠君は腕組みをして考え込みながら言った。

「入学して一週間は来てたけどそのあと来なくなったはず。あん

「まり覚えてない」

「梨桜、あんまり深入りするなよ。何か不審な事があつたら言え」

寛貴がそう言ったけど、不審なことってなんだろう？

笠原さんもどこかのチームに入ってるのか？…まさかね。きっと寛貴の考えすぎだよ。

「うん、ありがとう」

葵に話したら、寛貴と同じようなことを言った。

「無理するなよ？体調を考えて行動しろよ」

「うん、わかってる」

-.
-.
-.
-

「笠原さん、今日のプリントだよ」

私が笠原さんの家に行っても、嫌な顔をしないでニコニコしながら出迎えてくれるから、迷惑がられているわけではないみたい。

「ありがとう、東堂さん」

彼女は一人で勉強しているらしい。授業を受けないで勉強できるな

んで頭がいいんだな

「笠原さん、今日の宿題を一緒にやってもいい?」

私がそう言つと、少しはにかみながら頷いてくれた。

彼女はやっぱり普通の女子高生だと思つんだけど 寛貴と葵が言うような不審なところなんか何も無いよ?

「東堂さん、聞いてもいい?」

問題を解いていると、笠原さんが遠慮がちに言った。

「なあに?」

「今の生徒会つて誰がやっているの?」

美味しい紅茶を頂きながら私は答えた。

「藤島寛貴と大橋拓弥と海堂悠と私 無理やり入れられたんだよね」

彼女は驚いていた。

「東堂さんつて朱雀なの?」

「みんなそう聞くな 違うよ。チームには入ってないよ」

やっぱり、紫苑というか、生徒会〓朱雀なんだなあ

「そうなんだ。紫苑学院を志望する女の子は朱雀に憧れている人がほとんどだから」

という事は、笠原さんもあのオレ様とチャラ男に憧れているの？

「会ってみる？授業に出なくても生徒会室でお茶を飲むとか。少しなら会長と副会長とも話せると思うよ」

学校に来たくなるなら寛貴にお願いしてもいいな。と思ってそう言うのと彼女は「違う違う」と首を横に振った。

彼女が「違う」と言ったことが少し嬉しかった。

「私は朱雀目当てで受験したわけじゃないから。憧れてないといえは嘘になるけど」

「ふうん 私に言わせるとみんな目がおかしいよ？オレ様会長にチャラ男副会長だよ？確かに口を開かなければカッコイイけどさ。まだ東青の副会長の方がフェミニストだよ」

「会長は？東青の宮野会長とは話したことある？」

葵ねえ

「あゝ 彼はオレ様で、たまに意地悪」

笠原さんは目を丸くして驚いていた。

「東堂さんて面白いね」

「内緒だよ？」

私がそう言つと、彼女は笑い出した。

「笠原さんさえ良ければ、生徒会室でお茶を飲みながらおしゃべりしたりしない？あ、無理に学校に来て言つて言つてるわけじゃないよ？男ばかりでつまらないから言つてるだけだからね？」

彼女の重荷にならないように訂正すると、少しだけ顔を強張らせて小さく頷いた。

学校に来るのはまだ無理なのかな…

「気を遣わせてごめんね」

申し訳なさそうに言う彼女に私の方が申し訳なくなつてしまった。

「私こそごめんね」

そう言つと首を横に振つてもう一度小さく「ごめんね」と言つていた。

「自分でもわかつてるの。学校に行けなくなつた理由もくだらないことだつてわかつてるの。でも…」

「笠原さん！ゆっくりでいいと思うよ？私が勝手に会いに来てるんだから、自分を責めないで。ね？私は笠原さんと一緒におしゃべりをしながら宿題をしたりするのが楽しいの」

「東堂さんは優しいね」

彼女の言葉に今度は私が首を横に振つた。

「そんなことはないよ。今だって笠原さんに嫌な思いさせたし…」

少しの間沈黙が続いてしまった。

黙っていると、何故だか可笑しい気分になってしまい、私達は顔を見合わせると同時に笑い出した。

「お互いにフォローするのやめよう?」

「うん、そうだね。生徒会室に行きたくなったら東堂さんをお願いするね」

笠原さん、早く心の傷が治るといいね…

水底に沈む…(1) side:悠

今日はクラスが…否、学年中の野郎共が浮き足立っていた。

元男子校の紫苑学院が浮き足立ってしまう理由は…水泳
今日の女子の体育授業は水泳だ！

女子8名の水着姿が見たい野郎共は燃えている。(オレ的には梨桜
ちゃんが授業を見学している時点で興味はない)

元男子校のこの学校で初の女子生徒の水泳に教師達はピリピリして
いる。室内プールは暗幕まで張られる嚴重さだ。

……バカばかり……生徒も教師もマジでバカ。

たった8名の授業で暗幕なんて大袈裟だ。

中学までは共学で水泳の授業だって普通にあったらろーが。

「よお悠、おまえも次水泳？」

更衣室の入口に拓弥さんがいた。

「拓弥さんも？」

「まったく 野郎とプールとかキモい」

ここにもバカが一人。「キモい」はこっちのセリフだ。

女子の水泳の授業が終わるタイミングでここにいることで何を考え
ているのがわかる。

「…」

「拓弥、おまえもな」

心の中で寛貴さんに拍手を送った。

「『『キヤアア〜!!』』」

オレと寛貴さんが拓弥さんに冷たい視線を送っていると、屋内プールから悲鳴が聞こえた。

「何だ？」

「悲鳴 だよな？」

周囲にいた男子生徒達も悲鳴が聞こえたことに騒ぎ出した。何があったのかと思っていると、女子生徒が数人走ってきた。

水着姿のままの女子は焦った様子でオレ達に訴えた。

「助けて下さい！先生がっ！」

「どうしたんだよ？」

「先生が！！助けて下さい！！！」

彼女たちは焦るばかりで同じ言葉を繰り返し、要領を得ない。

彼女達に、訳も分からないまま急かされてプールに行くと

「東堂さん！危ないからやめて！」

「待つてられない！救急車呼んでっ」

梨桜ちゃんの切羽詰まったような声が聞こえて水に飛び込んだ音が聞こえた。

「何があつた？」

寛貴さんが傍にいた女子生徒を捕まえて問いただした。

「先生が高飛びこみ用のプールに消毒薬を入れていたら、足を滑らせて転んだんです。頭を打って水に落ちて、先生が浮かんで来ないから東堂さんが助けに……」

「教師を呼んで来い」

寛貴さんが後をついてきた男子生徒達に向かって言うと、携帯で救急車の手配をした。

梨桜ちゃんは体育の授業には出席できないはずだ。それなのに助けに飛び込んだっていうのか！？

オレが水に飛び込もうとしたら拓弥さんに止められた。

「おまえまで飛び込んでどうするんだよ！」

拓弥さんの腕を振り払おうとすると、水面に梨桜ちゃんが浮かんで

きた

「梨桜ちゃん！」

オレの呼び掛けには答えずに、梨桜ちゃんは深く息を吸い込むと水の中に潜っていった。

「制服で飛び込むなんて無茶だ」

拓弥さんが呟いたとき水面に黒いものが浮かび上がり、梨桜ちゃんが顔を出した。

彼女は自分の腕に教師を抱えていた。

水底に沈む…(2) side:悠

「梨桜！」

寛貴さんが呼ぶと梨桜ちゃんが

「救急車！頭から出血してるの！」

「今呼んでる！」

梨桜ちゃんがプールサイドまで泳ぎつくと、寛貴さんと拓弥さんが教師を引き上げた。

オレが彼女の手を掴んでプールサイドに引き上げると、梨桜ちゃんは教師のもとに駆けつけて体を横向きにして背中を強く叩いた。

「タオルで頭を押さえて」

寛貴さんがタオルで頭を押さえると、梨桜ちゃんは変化を見せない教師の体を仰向けに戻した。

「このまま傷口を押さえててね？」

「ああ」

寛貴さんにそう言うと、梨桜ちゃんは教師の顔を上に向けて、顎を上に向けた。

まさか？

梨桜ちゃんは、何の躊躇いもなく唇をあてて人口呼吸を始めた。

「先生！高谷先生！」

呼びかけながら心臓マッサージを始めたけれど、教師はぐったりと意識をなくしたままだった。

根気強く人口呼吸とマッサージを続ける梨桜ちゃんを、その場にした全員が遠巻きに見ていた。

オレと拓弥さんは生徒達をプールから出して梨桜ちゃんと教師から遠ざけた。

いつも陰で彼女の事を悪く言っている男達に、教師を助けようとしている梨桜ちゃんを見せたくなかった。

こんなカツコイイ女の子いない。

梨桜ちゃんの良さが分からないこいつらに、命を助けようとしている彼女を見せるなんて勿体ないよ

他の教師が駆け付けて、寛貴さんが梨桜ちゃんを教師から離れたとき、意識を失っていた教師が水を吐き出した。

「良かったあ」

苦しそうに肩で息をしていた梨桜ちゃんは、そう言うと、コンクリートの地面に座り込んだ。

「梨桜、頑張ったな」

タンカに乗せられて教師が運ばれて行くと、寛貴さんは救急隊員から渡された毛布で梨桜ちゃんをくるんだ

「梨桜？」

梨桜ちゃんは、泣いていた。

「怖かった…このまま…」

そう言うと、両手で顔を覆って深く息をついた。寛貴さんは梨桜ちゃんの背中を撫でて宥めていた。

「梨桜ちゃん、風邪ひいちゃうから着替えようか？」

拓弥さんが声をかけると涙で濡れた顔をこちらに向けた。

「…」

その場にいたオレ達は言葉が出なかった。

水底に沈む… (3) side…悠

「梨桜ちゃん、君って…。」

拓弥さんも絶句している。

「え？…。」

オレが梨桜ちゃんの顔を指差すと

「あゝっ！！」

ぱっと手で顔を覆ってしまった。

梨桜ちゃん、君ってすっげー美少女なんですけど？…

腰を浮かしてプールに手を伸ばした梨桜ちゃんを寛貴さんが押し止めた。

「無理だ。底に沈んでる」

「…あれがないと」

梨桜ちゃんは青ざめていた。今まで隠してたってことか？

「梨桜、とりあえず着替える」

「どっしりよう、あれがないと私…。」

ブツブツと何か言っていたが、梨桜ちゃんは立ち上がろうとして途

中で動きが固まった。

「どうした？背中が痛むのか」

困ったような顔をして寛貴さんを見上げている。

「寛貴、安心したら 腰が…」

「腰？痛いのか？」

寛貴さんが聞き返すと、梨桜ちゃんは首を横に振った。

「腰が抜けたみたい 立てない」

寛貴さんは梨桜ちゃんを毛布で包んで抱き上げると、彼女の顔が周囲に見えないように自分に引き寄せた。

可愛い…梨桜ちゃん。

すっげー可愛い！！！！

切羽詰まった状況を切り抜けて梨桜ちゃんの格好を改めて見ると、頭の前からずぶ濡れで、セーラー服の白い布地が肌に張り付いていて下着の線も浮き出していた。

寛貴さんが毛布で包んでしまっただけで今どんな表情をしているのかは見れないけれど、さっき見た涙で濡れた彼女の瞳はとても綺麗だった。

寛貴さんは梨桜ちゃんを抱いたまま歩きだし、後をついて行った才

レと拓弥さんは互いの顔を見合わせてニヤリと笑った。

プールの入口でこちらを窺っていた生徒たちの前で立ち止まると、男達は一步後ろに下がった。

「なあ、おまえらさ。おまえらだったらあの先生を見捨てたよな？助けようなんて考えもしないだろ」

そこには散々陰口を言って来たクラスの連中と2年生がいた。

「今まで、自分達が彼女にしてきたことわかってんのか？」

拓弥さんが言うとオレは続けた。

「梨桜ちゃんは、おまえらと違って勉強しかできない奴じゃねえからな」

オレ達の言葉に何も言い返さないクラスメイト達。

お前等は、プライドばかり高くて大切なことが何も見えていないんだ。

「勉強しか取り柄のないおまえらってマジでダセエな…いいか？今度梨桜に何かしたらオレ達が黙っていない。わかったな！？」

拓弥さんが凄むと、そこにいた連中はひるんだ。

あゝすつきりした！

生徒会室に行くと梨桜ちゃんは濡れた服を脱いで毛布にくるまって

いた。

Tシャツとジャージを寛貴さんに借りたらしい。美少女が男物のTシャツを着てるってどうしてこんなに可愛いんだ？

梨桜ちゃんをまじまじと見ると、いつも眉を覆っていた前髪は捻りを加えて纏められていて、綺麗な形の額が見えていた。

形良く整えられていた眉と、少し勝気そうなアーモンド形の目が露わになっていた。

通った鼻筋と少し口角の上がつている形のいい唇。

しかし…反則だろ？この可愛さ

「梨桜ちゃん、どうしてメガネかけてたの？あれは伊達？」

拓弥さんが聞くと、梨桜ちゃんは頷いた。

「うん。弟が学校ではメガネをかけるように言ったから」

「心配性な弟だね。気持ちはわかるけど」

拓弥さんが苦笑いを浮かべていた。

確かに心配性だけど、元男子校のここでは、梨桜ちゃんにあのメガネをかけさせるのは正しい選択だ。

素顔の梨桜ちゃんを生徒会室の外に出したら、男達が群がってきてそっだ。

「梨桜、学校ではメガネをかけてる」

寛貴さんが言いだし、梨桜ちゃんは驚いていた。

「え？」

「いいからかける。生徒会室以外では外すなよ」

「そうだな、その方がいいよ。スペアとかないの？ないなら用意させるけど」

拓弥さんも同調し、梨桜ちゃんは首を傾げながら「スペアなら鞆に入っている」と返事をした。

確かに。今まで通りの外見の方が安全かもしれない。

「悠、取ってこい」

寛貴さんに言われて梨桜ちゃんの鞆を取って生徒会室に戻り、鞆を梨桜ちゃんに鞆を渡すと、中からメガネを取り出してかけた。

今までかけていた地味メガネとは少し違うメガネで、それをかけると見るからに頭が良さそうに見えた。

「これでいい？」

「ああ ここ以外では外すなよ？」

「そうだぞ、梨桜ちゃん。外すな」

寛貴さんと拓弥さんに言われて、梨桜ちゃんはコクコクと頷いていた。

梨桜ちゃんに着替えが届いて着替え終わった時、救急で搬送された教師の様態が伝えられた。

「入院するらしいけど命の危険はないらしい。良かったな、梨桜ちゃん」

拓弥さんが言い、オレはミルクティーが入ったカップを差し出した。

「良かった…」

ほっと笑う梨桜ちゃんは、めっちゃくちゃ可愛かった。

放課後、梨桜ちゃんを駅まで送った後に寛貴さんがオレに言った。

「悠、宮野の女を調べるのはもういい」

その言葉にオレも拓弥さんも驚いた。

「いいのかよ寛貴、何の情報もつかめてないんだぜ？」

「寛貴さん、どうしてですか？」

「宮野の女より、梨桜の素顔が周りの高校やチームに知られないようにしろ」

「あゝ、紫苑生徒会唯一の女子が美少女でした。ってというのがわかったら梨桜ちゃんは狙われるかもしれないな。…おまえやけに梨桜ちゃんに拘ってたけど、素顔を見抜いていたのか？」

拓弥さんが、「おまえってすごいな!」と言つと、寛貴さんは密に顔を向けて目を閉じてしまった。

水底に沈む…（４）

大きな水音と同時に悲鳴が聞こえて振り返り、同級生に何があったのか聞くと「先生が落ちた」と言っていた。

先生が落ちたのは高飛び込み用のプールで、消毒薬を入れている最中に生徒と話をしていたら足を滑らせて落ちたという。

「どうしよう？浮かんでこないね」

水に落ちた先生は、浮かんで来なかった。水中でもがいているような感じもしない。

溺れてる？その考えが頭に浮かんだ。

「さっき、頭を打ったように見えたよ？」

その言葉を聞いて、同級生が止める声を振り切って水に飛び込んだ。

水に飛び込んだ瞬間、“また葵に怒られるなあ”って思った

プールの水は冷たかったけれど、久しぶりに感じる水の感触が懐かしかった。

視界の先に沈んでいく先生を見つけた。

さっき、頭を打っていたと言っていたのを思い出し、注意深く見ると、先生の顔の周りに赤い縞が浮かんでいた。

意識がないと思える先生の様子に、心臓が大きく跳ねた。

一度水面に浮かび上がり、大きく息を吸い、深く潜り目的の場所まで進んだ。

先生の手を手繰り寄せ、顎に腕をかけて水面へ浮かび上がった。

「せんせっ！しっかりして！」

呼んでも反応がない。呼吸もしていない

プールサイドを目指して泳いだ。

目の前には私に向かって手を差し伸べている悠君と拓弥君。怖い顔をしながら携帯で話している寛貴。

ギャラリィは動けないのか固まったままこちらを見ている。

プールサイドまで泳ぎ着き先生を2人に託すと目の前に手が差し出されて、その手をつかむと体が引き上げられた。

プールサイドに上がり先生を見たけれど、ぐったりしたままだった。

「先生！」

水を吐かせるために先生の体を横向きにして背中を叩いたけれど、先生の様子は変わらなかった。

出血し続けている頭の傷をタオルで押さえるように言うと、先生を仰向けに戻して首に手をかけて気道を確保した。

前に部活で習った人工呼吸。人形相手にしかやったことがないけれど、上手くいって先生が呼吸を取り戻しますように。

そう願いながら、鼻をつまんで息を吹き込んだ。

息を吹き込んで、心臓をマッサージする。

どれくらい繰り返したのだろうか？私自身が息切れしてきた頃、頭の上で寛貴の声がした。

「梨桜、後は教師と救急隊に任せるんだ」

寛貴に腕を引かれて先生から離され、彼の顔を見上げた時にゴボツと音がした。

振り返ると、先生が水を吐き出していた。

良かった…

安心したら力が抜けてしまった。

「梨桜、頑張ったな」

このまま息を吹き返さなかったら　また、目の前で人が死んでしまったらどうしようと思った。

怖かった

安心して、放心している私の頭の上で誰かが何かを言っていた。

なに？

今なんて言ったの？そう聞こうとしたら拓弥君と悠君が目を見開いて私を見ていた。

「梨桜ちゃん、君って」

「え？」

なに？と思っていると、悠君が私に向かって指を向けた。

ふと、顔に手を当てていた指にメガネのフレームがあたらない事に気がついた。

「あゝっ！！」

メガネ！！

どうしよう！？泳いでいるときに邪魔だったから、水中で外した！！

プールに身を乗り出すと肩を抑えられて止められた。

「無理だ。底に沈んでるだろ」

耳元で声がして、そちらを見れば寛貴の顔があった

どうしようっ！？

終わった…私の素顔がばれた。

彼らの前から消えよう！そう思って立ち上がろうとしたら足に力が入らなかった。

安心したら腰が抜けたらしい

「どうした？背中が痛むのか」

そう聞いてきた寛貴に何と言ったらいいものかと迷った。
いつまでもここにいてギャラリイが戻ってくるのは余計に困るから
正直に言おうと

「寛貴、安心したら 腰が…」

最後まで言い終わらないうちに毛布で私の頭からすっぽりと包まれ
て寛貴に抱えられた。

小さな声で「顔を伏せてろ」そう言つと寛貴に抱えられたまま屋内
プールを出ると、私を呼ぶ声がした。

「東堂！」

担任に呼ばれて私は顔を上げて手を振った。

「無茶な事をしてくれるなよ。おまえまで溺れたらどうするつもり
だったんだ？」

可哀想に先生は泣きそうになっていた。

「先生、ごめんね？」

教師用の更衣室でシャワーを浴び、保健の先生から渡された下着を
つけた。

それは、恐ろしいほど素っ気ないスポーツブラとショーツだった。

体育の授業を受けないから、体操着を持ってきていなかった。
着替えがなくて困っていると寛貴がTシャツとジャージを貸してく
れた。

「でか…」

葵のTシャツを着たときと同じ位の余り具合だった。ドライヤーが無かったので念入りにタオルドライをして、ブラシで髪をとかし、長くて邪魔な前髪をねじってまとめた。鏡を見ると、そこには普段の私がいた。

更衣室を出ると担任と寛貴が待っていた。

担任の先生が濡れた制服をクリーニングに出してやると言うので制服の入っている袋を渡した。

「先生、プールの底に私のメガネがあると思います」

「…どーやってとるんだよ」

先生は凄く嫌そうな顔をして言った。

「高飛び込みの台から入れれば潜れますよ？」

先生はギョツとした顔をした。

「お前、オレにやらせんのか？」

「…怖いなら私が自分でとってきます」

「怖くて悪かったな！ったく。着替えが届くまで休んでろ」

「生徒会室に連れて行きます」

「藤島、頼んだぞ」

担任は私の事を寛貴に任せてしまい、寛貴に連れて行かれた生徒会室でソファに座って温かいお茶を飲んだ。

「寛貴、Tシャツ貸してくれてありがとう」

「ああ、寒くないか？」

「ちょっと寒い」

「羽織ってる」

寛貴が毛布を肩にかけてくれると、私の隣に座った。

「先生大丈夫かな…意識なかったけど」

「大丈夫だといいな。それより、無茶な事はするな。水に入っている時に背中が痛くなったらどうするつもりだったんだ？」

寛貴の言葉が耳に痛かった。

プールの中で背中が痛くなったら私は溺れていた。でも、目の前の事しか考えられなかった。

「考えなかった」

「今度から、何かあったらすぐにオレを呼べ。いいな？」

怒ったような声で言われて、私は頷いた。

どうして今、総長モードになるのよ。私そんなに悪い事した？

私の顔を見ている寛貴を見て、前に病院で鉢合わせした時の事を思い出した。

あの時は、一瞬だったけど、目があったように思う。あの時、彼は私の顔をしっかりと見たのだろうか？

「梨桜」

「なに？」

名前を呼ばれて、彼が何を言い出すのか、ドキドキしながら返事をした。

『おまえ、病院にいたよな』とか？『宮野の女なのか』とか？

寛貴が話すのを構えて待っているけど、何も言わない。

「寛貴？」

「…いや、何でもない。髪が濡れたままで風邪ひかないか？」

寛貴の手が伸びて、私の髪の毛を一筋すくった。

「多分 大丈夫」

そう言うと、私の頬を撫でた。

寛貴はまた何かを言おうとして唇を開きかけたけれど、何も言わずに口を噤んだ。

水底に沈む… (5)

私の着替えが届くまでの間、何故か寛貴と拓弥君に「メガネをかける」と言われて、変装用のメガネをかけた。

学校が終わって、いつも通りに迎えに来てくれた桜庭さんはドアを開けてくれた。

「どうしたんですか？ 梨桜さん、乗って下さい」

不思議そうに私を見る桜庭さんを見上げて、強張った笑みを向けた。私を見た葵が一瞬にして顔を強張らせ、眉をひそめて怖い顔をして私を見ている。

私、まだ何も言っていないのにどうしてこんなに一瞬にして不機嫌になるの？

このまま踵を返して電車で帰ろうかなあ

私が電車で帰ろうか、車に乗ろうかと迷っていると

「梨桜ちゃん。まさかこのまま駅に戻ろうかと思ってないよね？」

わざわざ助手席から降りた愁君に笑顔を向けられて、心の中で泣きながら車に乗り込んだ。

「何があつた？」

運転をしている桜庭さんに申し訳ないくらいに車内は最悪な空気が

漂っている。

「あのね」

「どうして朝と髪型が違うんだ？」

そこか、そこですか。

「梨桜ちゃん、前髪を上げちゃダメだよ。それにその荷物は何？」

寛貴から借りたTシャツを洗って返そうと思って持ち帰ってきた荷物を愁君に指摘されてしまった。

愁君、目ざといよ！？お局さまみたいだよ！！

「なんだこれ」

葵に紙袋を取り上げられてしまった。

「メンズサイズのTシャツとジャージ おまえ、学校で何をしていた？」

「えっと 生徒会のメンバーに素顔がバレた」

恐る恐る言いながら葵を見上げると更に不機嫌になってしまった。

「おまえは オレに監禁されたいのか？」

真顔で言う葵が怖くて首を横に振った。

「そんなのやだっ」

「梨桜ちゃん、葵に監禁されるか、男装してウチの高校に転校するのとどっちがいい？」

不機嫌な顔をしたまま凄む葵と対照的に、王子様スマイルでとんでもなく恐ろしいことを言う愁君。

「梨桜、早く選べ。っつーかおまえ、男の恰好して転校して来い。それが一番手っ取り早くて楽だ」

「そんなの無理に決まってるでしょ!？」

私が半泣きで言うと、愁君がニッコリと笑った。

「オレ達が納得できるように、最初から説明してくれる？内容によつては本当に転校してきてもらうからね？」

二人とも怖いよ…

黒い王子様に半ば脅されながら、チームハウスで水泳の時間に行った事の顛末を話すと葵は天井を仰ぎ見たまま動かなくなってしまった。

「葵、人命救助だよ？」

「…」

「あそこで飛び込まなかったら、先生がどうなっていたか分からないよ?？」

「…わかってる」

顔がバレてしまったものは仕方がない！生徒会以外ではメガネをかけ続けるし。

寛貴も何も言わなかったし、葵が考えているような影響は出ないんじゃない？

気持ちを切り替えている私とは対照的に動かない葵。

「でもさ、梨桜ちゃんの素顔を見られちゃったんだよね？藤島に何か言われた？」

「無茶はするなって言われただけ。あと、寛貴と拓弥君に生徒会室以外ではメガネを外すなって言われた」

「はあ！？」

急に葵が復活した。

「藤島がそんなことを言い出したの？」

「うん」

さっき、隣のクラスにいる葵が助けた朱雀のメンバー飛澤章吾の存在を思い出した。

彼は葵と一緒にいるときに会い、私の素顔を知っている。だからメガネは必要なんだよね。寛貴達がメガネをかけると言ってくれて良かったのかもしれない。

「梨桜」

葵に呼ばれて、顔を向けるとまだ難しい顔をしている葵がいた。

「なに？」

「何回も言うけど、わかってるな？」

「わかってるよ『朱雀のメンバーにはなるな』でしょ？でも、私は青龍のメンバーになっっているつもりもないからね？」

私が言うと、葵と愁君の眉が顰められた。

そんな怖い顔したって駄目だからね、私はチームには入らない。

本当はこうやって学校帰りにたまり場に入ることだってチームの人達は良く思っていないかもしれない。

私は部外者だから遠慮するべきだと思ってる。

休み時間に悠君に宿題のノートを書かせてあげていると、悠君が泣き言を言って来た。

「梨桜ちゃん、試験の範囲広すぎだよな！？」

「そお？こんなもんじゃない？」

さすが進学校だけあって試験が多い。それに期末試験も控えている。

「あのお、東堂さん」

隣のクラスの女子生徒が教室の外から私を呼んだ。

私がプールに飛び込んで先生を助けてから、女子が声を掛けてくることが多くなった。男子生徒からは聞えよがしな陰口を聞くことはなくなったけれど、やっぱり私を遠巻きに見ている。

「なに？」

廊下に出ると、隣の1組の子だった。彼女は確か、小橋 恵美ちゃん

「明日は調理実習でしょう？一緒に準備をしない？」

その申し出に笑みが浮かんだ。

「うん。誘ってくれてありがとう」

「この前の実習で東堂さんが作ったお料理美味しそうだったよね。お料理が趣味なの？」

「私が家族の食事を作っているの。趣味まではいかないけど、料理をつくるの好きだよ」

女子が少ないこの学校の調理実習は少し変わっている。担当教諭の他にサポートの先生がつくのだけれど、人数が少なすぎるから手の込んだ料理を作っても良いことになっている。

「お料理を教えてください？」

「うん」

小橋さんは「放課後に一緒に行こうね」と言い教室に帰って行った。

「何の話？」

悠君がノートを書き写しながら聞いてきた。

「明日の調理実習の準備を一緒にする約束」

「ふうん、明日は何を作るの？」

「明日のテーマは根菜料理なの」

業務用オープンがセットされている調理台を一人一台使える。

テーマと予算を言われて、自分で献立を考えて先生の許可が出ればそれを作ってよい。

作る時は先生と助手の人がサポートしてくれる。

「根菜ってなんだ？」

そこから説明するの？

「根菜はごぼうとか、じゃがいもだよ。明日はじゃがいも餅とごぼうのサラダとかぶと手羽肉のスペアリブ」

根菜類について、ものすごく大雑把な説明をしてから明日の献立を言っと、悠君は私をじっと見る。

「どうしたの？」

「美味そうだな。いいな」

いいな。そう言いながら私をじっと見る。
訴えているその眼について、

「食べる？」

そう言うと、ぱあっと明るく笑った。か、かわいい…

「いいのか!？」

「美味しいかどうかはわからないよ？」

「梨桜ちゃんが作るなら美味いって!」

その根拠はどこからくるんだ？

首を捻りながら悠君を見ると、「ニコニコしながら私を見ていた。

放課後デート (1)

私は、登校拒否を続けている笠原さんの家に通い続けていた。

先生には申し訳ないけど、笠原さんを学校に来させようとは考えていなくて、女の子と話をしているのが楽しい。それだけの理由で訪問していた。

彼女のお母さんを交えて紅茶とケーキを頂いていたとき、私はずっと思っていたことを彼女に切り出した。

「ねえ、笠原さん」

警戒されないようににっこりと笑った。

「なに？」

「放課後デートしない？」

突然そんなことを言われて、彼女は驚いているようだった。

「デート？」

私は頷いて力説した。

「制服のまま放課後にお茶したり買い物したりして、女子高生らしいことしない？」

いつも学校帰りはまっすぐ帰るか、葵に用事があったらチームのどこ

るに連れて行かれるか

コジ君や愁君と過ごすのも楽しいけれど私は女の子と話がしたい！
拓弥君じゃないけど女の子に飢えているんだと思う。

「あら、いいじゃない。楽しそう」

笠原さんのお母さんは賛成してくれた。

「でも」

彼女は迷っているようだった。

「教室に行かなくてもいいと思う。午後の時間を生徒会室で過ごし
て放課後にデートしよう！」

私が、拳を握りしめて力説すると、笠原さんは少し笑った。

「行ってみようかな　でも生徒会長は了承してくれるかな」

寛貴？了承させるわよ、させてみせる！

「今電話して聞いてみるね！」

彼女の気の変わらないうちに！と思い、笠原さんの前で電話をかけた。

『どづしたっ。』

相変わらず素っ気ないというか、愛想がない。

「今話しても大丈夫？」

『ああ、何かあったか？』

後ろで「梨桜ちゃん？」と聞いている悠君の声が聞こえた。

「明日の午後に生徒会室を借りてもいい？」

私が言うと、寛貴は少し考えているようだった。

『理由は？』

「放課後デートしたいから！」

『は？デート？』

寛貴でもこんな風に驚くんだ。面白い発見だ。

「そう、放課後デート！笠原さんと放課後に制服のままお茶してガールズトークしたいの。その待ち合わせに生徒会室を使わせて下さい」

後ろで今度は拓弥君が「梨桜ちゃんデートなのか？」って聞いている声がする。

「ダメ？」

時間をつぶしたいっていう理由じゃダメ？動機が不純すぎる？

『わかった。鍵はオレが持つてるから明日の昼に生徒会室で渡す』

「寛貴、ありがとう」

『梨桜、大丈夫なのか？』

そう言われて、何かあった？と考えた。

「何が？」

『門限』

そつえば私は“門限6時の箱入り娘”になってるんだ。

「理由を言えば大丈夫だと思う」

葵に言ったら監視をつけられそうだな いや、絶対監視をつける。

『ならいい。困った事があれば言え』

寛貴って意外に優しいよね、オレ様総長だけど。

「うん、ありがとう」

『ああ、じゃあな』

電話を切った。

「笠原さん、大丈夫だったよ。生徒会室を使っていいって」

笠原さんはポカン。と私を見ていた。

「今のって 藤島寛貴さん？」

「うん、寛貴」

そんなに驚くこと？

「東堂さんすごいね、藤島さんの事名前で呼べるんだ」

だって名前で呼べって迫ったし

あんなに怖い顔をしてせまられて名前で呼んでしまっているけど、基本的に、男の人の名前は呼び捨てしないことにしていた。

名前で呼ぶのは葵と憎たらしい幼馴染だけ。

迎えに来た葵に明日の事を話すと案の定、

「終わったら迎えに行く。それから近くに人をつける」

やっぱりね…そう言っと思ったよ。

放課後デート (2) side:悠

「梨桜ちゃん、オレも放課後デートしたい」

拓弥さんが言った。

生徒会室にいる梨桜ちゃんは拓弥さんのリクエストでメガネを外している。

うん、梨桜ちゃんは今日も可愛い。

「拓弥君は何もしなくても女の子が沢山寄ってきそうだから私とデートする必要ないでしょ？」

まったくもってその通り。

梨桜ちゃんはグサリと事実を言い当てた。

「登校拒否の理由はわかったのか？」

寛貴さんが梨桜ちゃんに生徒会室の鍵を渡しながら聞いた

「まだわからない。でもね、前に生徒会メンバーの事を聞かれたの。クラスの事なんか聞かれたことないのに、生徒会の事は聞いてきたから朱雀が好きなのかと思ったんだけど…朱雀に憧れてこの学校に入ったわけじゃないって言ってた」

「女子で朱雀に憧れてないけどこの学校にいるのって貴重だなあ、新鮮だ」

拓弥さんの言葉に頷いた。

共学になったんだから生徒会にも女子を入れる。と生徒会顧問に言われたときに、全女子生徒10名のうち8人から朱雀に入りたいと言われた。

結局8名については寛貴さんが嫌だと言ったから生徒会に入れなかったんだ。

NO!と言ったのは梨桜ちゃんで、あとの一人は不登校の彼女だから聞いてすらいけないけれど

はつきり言って梨桜ちゃん言葉は意外だった。それ以外にも彼女には驚かされることばかりだ

女を寄せ付けない寛貴さんが梨桜ちゃんを傍に置きたがっている。

それは、素顔を知らなかった時からだ。でも彼女はそれをスルリとかわしているように見える。

こんな寛貴さんを見るのは初めてだ。

「どこでお茶するの?」

オレが聞くと

「まだ決めてないけど、ケーキがおいしいお店がいいな」

「紫苑学院の学生って他校生から見るとレアみたいだから声かけられたら連絡しろよ?」

拓弥さんが言った。

「そつだよね また絡まれたら連絡します」

「また?」

梨桜ちゃんは眉をひそめた。そのときのことを思い出しているみたいだ

「梨桜、絡まれた事があるのか？」

寛貴さんが不機嫌そうに言う

「声をかけられて でも、知り合いが通りかかって助かった」

危なっかしくて1人で歩かせたくない。

メガネを外したら美少女なんだから、もっと自覚を持って行動して欲しいと思ってしまう。

寛貴さんは“護衛をつけろ”とオレに目で合図した。言われなくてもそうするつもりだったオレはすぐに頷いた。

放課後デート (3)

「笠原さん、ここで待っててね?」

彼女に手を振ると一緒についてきた悠君も手を振っていた。

残る授業は一つだけ

終わったら女子高生を満喫するんだ!

授業が終わって生徒会室に行くと拓弥君と寛貴がいて笠原さんはしきりに恐縮している。

ちよつと良かったので寛貴に鍵を返した。

「梨桜ちゃんオレも一緒に行きたい」

甘えた声を出す拓弥君に

「ダメ!拓弥君がいたらガールズトークできないでしょ」

「じゃあ今度デートしよ?」

「拓弥・・・」

寛貴が低い声で拓弥君を呼ぶと「怖え」といい首をすくめた
彼を黙らせるには寛貴の一言が一番効果的だと最近わかってきた。

笠原さんにケーキが美味しいカフェを教えてもらいそこでお茶を飲むことにした。

「美味しい」

「東堂さん、今日は誘ってくれてありがとう」

そう言っ頭を下げた。

「私も楽しみたかったの、東京に来てからこういのに遠ざかっていたから」

たわいない女の子の話は楽しかった。

やっと女子高生らしいことをしている！

「東堂さん、笑うかもしれないけど、呆れないで聞いてくれる？」

「もちろん。笑わないよ？」

居住まいを正して彼女に向き合った。

「あのね、中学の時に付き合ってる人がいたの」

勇気を持って話してくれたけれど、そこで途切れてしまった。

「うん・・・彼の事、大好きだった？」

勇気を出して話してほしい。話して楽になつて？

「うん・彼は、圭吾っていうんだけど、圭吾は朱雀に憧れてたの。いつも朱雀の話をしている、目をキラキラさせて、一緒の高校に行こうって約束したの」

なんとなく、話は分かった。

「うん」

「私、一生懸命勉強して偏差値の高い紫苑に合格したんだけど」
俯いてしまった。

「彼はダメだったの？」

分かってはいたけれど、彼女に聞いてみると、コクンと頷いた。

『よくある話』その一言で片付けるには悲しすぎる・・・

「笠原さんは彼が好きだったんだよね？」

またコクンと頷く。

「でも、圭吾に言われちゃった裏切り者って」

「裏切り者？」

どうして裏切り者なの？

「圭吾に、滑り止めに受けていた学校に一緒に行こうって言われて

いたんだけど、紫苑に受かった事をパパとママがすごく喜んでくれて、私、違う学校に行けなかった」

彼が私の想像よりも根性がなかったことに腹が立つのと同時に、彼女が紫苑を諦めなかった事に安心した

「笠原さんは間違えてないと思うよ」

「ありがとう」

ありえないとは思ったけど聞いてみた。

「圭吾君とは、まだ付き合ってるの？」

首を横に振った。

付き合っていないくてホツとした。

「紫苑に入学して、少しは学校に行っていたんだけど、学校の帰りに偶然会って『裏切り者』って言われて・・・学校に通っている間中、裏切り者って呼んでやる』って言われたの。それ以来、連絡が来なくなっただ・・・」

私は彼女に気づかれないうにため息をついた。

なんて懐の小さな、くだらない男なんだ！！受験に失敗したのは誰のせいでもない自分のせいじゃない！！

どうして合格した彼女を責めなければいけないの！？そんな器の小さな男は、葵に一発殴られちゃえばいいんだ！！いや、私が殴ってやりたい。

「東堂さん、呆れたでしょ？」

哀しそうな目で私を見る彼女を見て、首を横に振った。

彼女にではなく、男に対して呆れてしまったけれど、それは彼女には気づかれたくない。まだ彼の事を思っているのかもしれない。

『そんなくだらない男の為に泣かないで、彼の言ったことなんか気にしないで』そう言いたかったけれど、彼女は学校に来ることが出来ないくらい傷ついたのだから、そう考えると躊躇われた。

「話してくれてありがとう。笠原さんは裏切り者じゃないよ。私は笠原さん自身を大切にしてほしいと思う」

上手い言葉が出てこない自分が齒痒い。

「ありがとう・・・また、放課後デートしてくれる？」

私にはっこり笑った

「もちろん」

笠原さんの家の車でマンションの近くのコンビニまで送ってもらい、家に帰った。

ソファに座って笠原さんから聞いた話を思い出してムカムカしている。

「さつきから何に怒ってんだよ」

葵が隣に座ると、私の頬をむにむにとつまんで引っ張った。

「だって」

「話してみるよ」

葵に言われてさつき笠原さんに聞いた事を話した。

「くだらねえ・・いつまでくだらない男引きずってんだよ？その女。その女も大概バカじゃないのか」

容赦ない一言に眉をひそめて葵を見た。

確かにそうだけれど、好きなら引きずっちゃうよ

「それだけ好きだったの！」

確かにくだらない男だけど、笠原さんは、彼の事が好きだったんだよ。

「それで？その女は学校来るのか」

葵に体重を預けて寄りかかると「重い」と文句を言いながら支えてくれていた。

「わからないけど、また放課後に会う約束はした」

「学校に来ただけでも一步前進てどこか・・お疲れさん」

葵はくしゃくしゃと頭をなでた

次の日の昼休みに生徒会室で高校の偏差値基準表を見ていたら

「梨桜ちゃん、難しい顔してどうした？」

拓弥君が言った

「拓弥君、紫苑の滑り止めに受験する共学ってどこだろうっ？」

「・・・なんで？」

拓弥君は私の手から基準表を取り高校の名前を見ていた

「ちょっと気になったの」

昨日、葵が笠原さんの彼の事はこれ以上深入りするなと釘をさしてきたから気になった

「オレは滑り止め受けなかったからわからないけど、同級生では北陵とか受けてたな」

北陵高校？

「どんな学校？」

「人数が多くて、良いのも悪いのもいる学校だ。北陵がどうかしたのか」

寛貴が聞いてきたけど、笠原さんの元彼氏がその学校かどうか、分からない。

「何もないよ」

「北陵とは関わるなよ。いいな？」

その言葉に少し驚いた。寛貴も葵と同じことを言う。

どろろして？

定例会かお茶会か (1) side:悠

放課後、生徒会室に来た梨桜ちゃんは、持ってきた紙袋を大事そうに机の上に置いた。

生徒会室にいるから伊達メガネを外している。

今日も可愛い。

「何？それ」

「パウンドケーキ。今日は東青の皆が来る日でしょう？お茶の時に出そうと思って焼いて来たの」

につこり笑った梨桜ちゃん。

彼女が作ったケーキを食べられるなんて今日はツイてる。

「愁君にはお世話になっているし、ケーキが好きだって言っていたから」

爆弾投下したよこの子。

青龍の副総長のためにケーキ焼いてきたのかよ？

拓弥さんも寛貴さんもしかめっ面をしている

「梨桜ちゃん、オレがパイが好きって言ったら作ってくれろ？」

拓弥さんが女を口説くときに使う極上の笑みを浮かべながら聞いた

「いいよ、何のパイがいい？」

拓弥さんの顔が明るくなった。

あっさりと笑顔をかわされて、代わりに拓弥さんが笑顔になる。
梨桜ちゃんはなかなか手強いぞ

「アップルパイとか」

「今度作ってくるね。今日はミートパイも作って来たの。お口に合うといいんだけど…」

その笑顔の破壊力ハンパねえ　タラシの拓弥さんも赤面してるし、寛貴さんも少しの間固まっていた。

「合うに決まってるだろ？この前の調理実習の料理だってすげー美味かった」

「は？」

寛貴さんと拓弥さんがオレを見た。

「調理実習？」

二人の視線が痛かった。

そういえば、この前梨桜ちゃんの作った料理を食べたことをこの二人に言っていなかった。

やべえ…寛貴さんがすげー睨んでる。

オレ、視線だけで殺されそう…

なのにこの男は

「梨桜、甘い」

梨桜ちゃんが男のオレ達用にかなり甘さ控えめでケーキを作ってきたのに、宮野は台無しな一言を放った。もちろん、ケーキは美味い。

「無理に食べなくてもいいのに」

普通、そんな事を言われたらへこみそうなのに、宮野の言葉を梨桜ちゃんはさらっと流した。

「ミートパイとって」

自分でとりやがれ宮野！

「はい、どうぞ」

甲斐甲斐しく宮野にミートパイを取り分けてやる梨桜ちゃん。そんなことしてやらなくてもいいのに、梨桜ちゃんは優しい。

「梨桜さん、超美味いです！」

「ありがとう、コジ君」

小嶋に向けられた笑顔がメガネで隠されていることに安心した。東青の奴らが来るから梨桜ちゃんは拓弥さんからメガネをかけるように言われて今は眼鏡っ子になっている。

「梨桜ちゃんの弟は羨ましいな！旨い飯が食えて」

オレが言っていると梨桜ちゃんは笑った。

「そんなことないよ」

「いや！感謝するべきだね。姉ちゃんありがとうって」

三浦が笑い出した。ツボにはまったのかやたらと笑っている。

「オレ、梨桜さんみたいな姉ちゃん欲しいです」

小嶋が言いだすと宮野の眉が顰められた。

「私もコジ君みたいな可愛い弟欲しいな」

オレは梨桜ちゃんみたいな彼女が欲しい。

「梨桜、美味かった」

寛貴さんがそう言って席を立った

「寛貴、煙草？オレも行く」

拓弥さんも行ってしまった。

オレも行きたかったけど、こいつらの中に梨桜ちゃんを置いていけないから、小嶋と梨桜ちゃんがきゃいきゃいと話しているのを見ていた

しかし、なんで小嶋は梨桜ちゃんに敬語なんだ？

「後片付けするね」

「手伝います」

梨桜ちゃんの美少女っぷりを尊敬してんのか？イヤイヤ、あの顔はメガネに隠れて見えないはずだ。

そんなことを思っていると

「葵、ついてる」

梨桜ちゃんが宮野の顔に指を持っていった。

これは、あの 禁断の、口元についたご飯粒を取ってパクッと食べるあれか！？

定例会かお茶会か (2) side:悠

「動かないで」

梨桜ちゃんはそう言って、宮野の目元に細くてキレイな指を近づけた。

「とれたよ」

「ああ」

「睫毛が目に入りそうだった」

梨桜ちゃんが笑った。

「梨桜ちゃん、葵の睫毛を裏オークションに出したら高くさばけるよ」

三浦が言った。

「愁・・・」

「へえ、そうなんだ。いいこと聞いちゃった、ありがとう愁君」

梨桜ちゃんは宮野の睫毛をマジマジと見てにっこりと宮野に微笑んだ。

「捨てる」

冷たく低い声で睨みをきかせているのに梨桜ちゃんはにっこりと笑い返した。

「やだ」

彼女は彼女で宮野のこの迫力にまったく動じない。

「梨桜、捨てる」

梨桜ちゃんは悪戯っぽく笑った。

彼女は間違いなく大物だな

「梨桜！」

宮野は立ち上がり、梨桜ちゃんの中から羽交い締めするようにして梨桜ちゃんの右腕を掴んで梨桜ちゃんが握りしめた手を自分に引き寄せると、握られた指を一本ずつ開いた。

「あーあ」

梨桜ちゃんが残念そうに言う

宮野が梨桜ちゃんの手をパンパンと自分の手で払うのを三浦と小嶋は笑って見ていた。

「お前ら・・・何やってんだよ」

拓弥さんと寛貴さんが戻ってきて部屋の入口で腕を組んで2人を見ていた。

二人とも不機嫌そうな顔をしていた。

「私のお小遣い稼ぎ・・・大切なアイテムだったのに」

三浦が爆笑し、宮野は梨桜ちゃんを睨んだ。

この男が爆笑するなんて、珍しいな。

そう思っていると、宮野がニヤリと口角を上げて笑った。

「なに？」

梨桜ちゃんが宮野に問いかけると、奴の手が素早く動いて梨桜ちゃんの顔に触れたように見えた

「ちよつと、葵!？」

「宮野？」

梨桜ちゃんの顔からメガネを取り上げていた。

「へえ、おまえってこういう顔してたんだ？」

「勝手にとらないで!」

梨桜ちゃんが怒っているけれど、宮野は平然として彼女を見下ろしている。

「梨桜ちゃん、可愛いね。美少女だったんだね」

三浦が言つと梨桜ちゃんが宮野からメガネを取り返していた。

寛貴さんと拓弥さんは宮野を睨んでいる。彼女の素顔を隠しておきたかったのに、宮野にアツサリと知られてしまうなんて・・・

「コジ君、片付けよう」

梨桜ちゃんと小嶋が出て行くと宮野が

「愁、梨桜に余計なこと教えるな」

「梨桜ちゃんは期待を裏切らないよね。・・・早く座れよ、梨桜ちゃん
んが来る前にさっさと終わらせようぜ」

「なんだ」

寛貴さんと拓弥さんが座ると三浦は封筒をオレ達の前に置いた

拓弥さんが封筒を開けると、隠し撮りらしい梨桜ちゃんの写真が出てきた。

朱雀のメンバーだと思われる狙われている。そういうことなのだろう

「青龍の傘下にいるチームの人間がたまたま手に入れた。北方面で
出回っているらしいぜ？」

北方面「北陵か・・・あそこにはオレ達を闇討ちしてきた卑怯なチー
ム黒鬼を傘下に納めるチームの幹部がいたはずだ。」

「北もかよ」

拓弥さんが言い、三浦が眉を顰めた。

「西でも出回ってる。そっちは潰してきたんだけどな」

メガネをかけている地味な姿の梨桜ちゃんなのに隠し撮りされているなんて・・・

これで素顔が知られたら・・・危険すぎる。

「拓弥、出所を探れ」

寛貴さんが言うつと拓弥さんは低く「ああ」と返事をして携帯を持って部屋を出た。

「そうしてくれるとオレもありがたいんだよね、梨桜ちゃんの作ったケーキまた食べたいし」

「梨桜の身はオレ達が守る」

寛貴さんが毅然と言い放つと、宮野が冷たい視線を寛貴さんに向けた。

「なんだよ宮野・・・」

「別に」

こいつは寛貴さんとは正反対でクールで冷徹でわかりにくい奴なんだけど、寛貴さんに向けた視線はハッキリと意志がこもっていた・・・でも、青龍には大切にされている姫がいるんだろ？
宮野の心変わりか？

会議が終わり帰り際に

「梨桜ちゃん、今日はご馳走さま。また土曜日にね」

土曜日だと？

会うのか？まさかデートとかいうんじゃないだろうな！？

「うん・・・」

三浦は梨桜ちゃんの顔を覗き込んだ

「大丈夫だよ。あの先生優しいから、そんなに心配しないで？」

くしゃくしゃと髪を撫でた

「検査が終わったら教えて？」

こくと頷いていた。

「梨桜ちゃん、病院なんだ？」

宮野達が帰り、オレが聞くと頷いた

「三浦とは・・・連絡とってるの？」

「愁君とは友達だからメールとかするよ」

「宮野は？」

「メールも電話もしないよ・・・」

目を伏せがちに言って俯いた。

「梨桜ちゃん？」

少し様子が変だと思って呼びかけた

「ん？」

顔を上げた梨桜ちゃんはにっこりと笑っていた。

・・・気のせいかな？

強引な招待 (1)

土曜日、『病院が終わったら、一緒にママのお墓参りに行こうね』
って約束していたのに、チームの事で急用が出来てしまった葵は出
かけてしまった。

『一人で行くな』そう言われていたけど、そこまで子供じゃないし、
どうしてもお墓参りに行きたかったから一人でお寺に来てしまった。

ママが眠っているお墓に、ママが好きだったお花とお菓子を供えて
手を合わせた。

もう、ママがいないなんてまだ実感がわかない。

2年前に調子が悪いといって病院に行ったママはそのまま入院した。
その時は知らなかったけれど、後から教えてもらった病名は肺癌だ
った。

手術をしたけれど、転移して病状が進んでしまい、去年私が事故に
遭って、意識を失くしている間にママは逝ってしまった。

私が知らされたときには、お葬式も、埋葬もすべて終わっていた。

だから、まだママがこの世にいないという実感がわかない。どこか
遠くの病院に入院しているのではないか？そんなふうに思っていま
う事がある。

お墓参りを終えて、タクシーを拾おうと思っていると、遠くから声をかけられた。

「梨桜ちゃん!？」

「悠君？」

吃驚した反面、メガネをかけてきて良かった。と思った前に愁君がこのお寺の近くに朱雀の溜り場があるって言っていたから、誰かに遭うかもしれないと思って、地味な梨桜にしてきた。

「こんなところに1人でどうしたの？」

「お墓参り」

「弟は？」

少し考えて「クラブ活動」と答えておいた。

「オレ達の拠点にしてる倉庫が近くにあるんだ。家まで送るから寄っていきなよ」

いや、それはまずいでしょ。

「でも」

どう考えてもそれはまずいよ。葵に知られたら本気で監禁されるから…

「急に行ったら悪いから」

「遊びにいくだけだから大丈夫。寛貴さんもいるし」

断るつもりで口を開いたら、すぐ目の前に車が停まった。
え！？手配が早すぎない！？

「ほら、乗って」

「ちょっと、悠君？困るよっ」

「オレのこと、嫌い？」

「え？」

どうしてその質問に結びつくの？

「嫌い？」

その、可愛い顔で首を傾げて「嫌い？」そう言われると、とっっても困る。

「嫌いじゃないよ。でも、急には困るよ」

「嫌いじゃないなら、乗って？」

強引に乗せられてしまった。

どっしどっしー！？

強引な招待 (2)

車に乗せられて倉庫につくと、想像通りのヤンキーの溜まり場って
いう雰囲気の中で驚いた。

「うわぁ」

男の達がバイクをいじっていたり集まって話していたり。

葵のハウスとは正反対。葵はごちゃごちゃしているの嫌いだからな

「梨桜ちゃん？」

「やんちゃだねえ」

つい、本音を言うと悠君は苦笑いを返してきた。

「そっ？」

「うん」

倉庫の中に入り、歩いていると、男の子たちは私と悠君を見ていた。

うわ、男の子がいじってるバイクって改造バイクだよ！寛貴と拓弥
君も改造バイクに乗ったりするの？

「梨桜」「梨桜ちゃん」

名前を呼ばれた方を見ると寛貴と拓弥君が階段を降りてきた。

「梨桜ちゃん、いらっしやい」

ヤンキーっていつも特攻服着ているんだと思ってたけど違うんだ。
二人とも普通の私服だった。

そう言えば葵達も普通か

「おじやまします」

「梨桜ちゃん、紅茶でいい？」

幹部室に通されると、そこからは1階の様子が見える造りになっていて、下で遊んでいる男の子達が見えた。

「うん、みんないろんな色の髪の毛だねえ」

私が見ていると、下でも気になるのかチームの男の子達がチラチラと上を見上げていた。

「梨桜、怖くないか？」

寛貴が聞いた

「怖くはない。でもちよつとびっくりしてる」

また本音を言ってしまった。

ここは、『怖い』って言うべきだった？…でも、今更か

お茶を買ってきた子にありがとうと言うと“いえ”と言って部屋を出て行ってしまった

男の子だらけのところ急にきて悪かったかな。

葵のところとは勝手が違うんだなあと思いつながら持ってきてくれたお茶を飲んだ。

「梨桜ちゃん、メガネ外してもいいよ」

幹部室で拓弥君に言われてメガネを外して髪も解いた。

「一人でこの近くまで来たのか？」

寛貴に聞かれて曖昧に頷いた。

「うん。ママのお墓参りに来たの」

そう答えると拓弥君が「なんか食べるか？」って聞いてきた。

「ううん、気を使わないで」

すぐ帰るし。そう思っただけ

「遠慮しなくていいよ。ちょっと待ってて」

そう言うのと、悠君を連れて部屋を出て行ってしまい、部屋に寛貴と2人で残された。

壁には真っ黒な服がかけられていた。さっきから気になって近くに寄って見てみた。

「ねえ寛貴、これが特攻服？」

聞くと、寛貴は私の隣に立ち壁から特攻服を外して見せてくれた。

「ああ 今は走らないけどな。初めて見たか？」

頷いて、服の背中を見ると刺繍が綺麗だった。

「寛貴も走ったことあるの？」

「ないな。走らなくなってからしばらくたつ」

葵のところも走らないって言うてた。

「梨桜、お袋さんの墓参りには頻繁に来るのか？」

「うん」

できれば月命日には行きたいと思ってる。

私の中でママがいけないということが消化できるまで せめて、1年が経つまでは

「1人で来るのは危ないだろ？背中が痛くなったらどうする」

「うん。でも、少しずつ良くなってきてるんだよ？」

答えに困ってしまって、曖昧に笑った。

葵と一緒に行く約束だったけど、葵は本当はあんまりお墓参りに来

たくないんじゃないかなって思う。

葵にとつて、去年の秋は辛い事ばかりがあったから

「どんな事故だったか、聞いてもいいか？」

頷いて、ソファに座ると寛貴が隣に座った。

「学校帰りに夕飯の材料を買うために寄ったお店で買い物をしているときに、スピードを出し過ぎてカーブを曲がりきれなかった車がお店に突っ込んできたの」

あの時は、一瞬何が起こったのかわからなかった。

「ガラスを突き破っても車は止まらなくて、お店の中にあつたショーケースに幾つもぶつかつてやっと止まったの」

寛貴は眉を顰めて話を聞いていた。

「巻き込まれたのか」

「うん。車が衝突したショーケースが私の方に飛んできたの。私はショーケースと壁の間に挟まれて肋骨を3本折って 背中にガラスが突き刺さつたの」

寛貴に向かって、骨折した場所を1か所ずつ指差した。

「ここと、ここ。それから ここ、だったかな？出血した量が多くて危険な状態だったんだって」

「辛かったな」

私は首を横に振った。

本当に辛かったのは葵なんだよ。

事故に遭って意識が戻らない私を心配して北海道に来ている時に、ママの容態が急変したことを知らされたそうさ。

私の事を心配させたまま、葵一人にママを看取らせてしまった。本当なら、私も一緒にママを看取りたかった。葵にだけ辛い思いをさせてしまった。

「私は 命が助かったからいいの。それだけでも感謝しなきゃ」

そう言うと、寛貴が「ごめん」と言っただけで私が指を指していた手を握った。

「寛貴が謝ることじゃないよ？あの事故では二人の人が亡くなって

」

その時、ドアがノックされて大きな声が響いた。

「寛貴さん！章吾です。入ります！」

章吾？

飛澤章吾！？どうしよう！

強引な招待 (3)

飛澤章吾がこの部屋に入ってこようとしていて、さっき外したメガネは離れた場所にある。

素性がバレる！バレたらどうしよう!？

焦っていると、ぐいっと肩が引かれて、目の前が暗くなった。

え？

「何かあったのか」

「寛貴さん！ うわっ、すみません!」

焦る飛澤章吾と同じように私も焦っていた。

どうして?どうして寛貴に抱き締められているの!？

「いいから早く要件を言え」

寛貴は、私を抱き締めたまま少し不機嫌そうに答えていた。

「あのっ
」

寛貴と飛澤章吾が何か話していたけど、耳に入らなかった。頬に広い胸を感じて 心臓がドキドキと早い鼓動を打ち、顔に血が集まってくるのが分かった。

落ち着け、私！

葵にいつも“ぎゅっ”てされるのと一緒に。同じ！

「失礼しましたっ」

パタン、と扉が閉まる音がすると腕を解かれて解放された。

「……」

今のは何だったの…

「どうした？苦しかったか？」

何も言葉に出来ずに寛貴の顔を見上げるしかできなかった。

「背中が痛んだか？」

首を横に振った。

良くわからないけど、私一人が焦って、バカみたい。

「ううん、何でもない」

扉が開いて、拓弥君と悠君が帰ってきた。

「梨桜ちゃん、ケーキ食べるだろ？」

悠君がニコニコしながら手にしていた箱を私の前に出した。

「ありがとう」

もう、疲れたよ。

どうしよう、ママのお墓に行くこと葵に黙ってきちゃった。そろそろ帰らなきゃ

「青龍の倉庫に行ったことあるの？」

ふいに拓弥君に聞かれて「ないよ」と答えた

心配しているかな 今は怖くて携帯を見られない。

「私、夕飯の用意をしなきゃいけないから帰るね。弟にも黙ってきちゃったし」

「送るから、弟に電話しなよ。心配しているかもしれないよ？」

悠君が言った。しまった、墓穴ほった！

「うん」

どうしよう？

「ここで電話していいよ。気を使わないで」

悠君に言われてしまった。
バックから携帯を取り出すと、着信を知らせるライトが点滅していた。

画面を開くと着信20件

ひえっ！怖い！

無情にも携帯が新しい着信を知らせた。

「もしもし」

なるべく彼らから離れて部屋の隅で電話に出た。

『梨桜、今どこにいる？』

すごく怒ってる！

「ママのお墓参り」

『勝手に1人で出歩くなって言ってるよな！？携帯に出ろ！何のために携帯持ってたんだよ』

「ごめんなさい」

電話の向こうでため息をついた

『今すぐタクシーで駅に来い。わかったな？』

「うん」

絶対にお説教だ。

電話を切ると3人がこちらを見ていた

「タクシーで帰ります」

「送ると言ってるだろ」

寛貴が怖い顔をして言ったけれど
ここは引き下がっちゃいけない！

「男の子に送ってもらってるのを見られたら 今でさえ凄く怒っているのに お説教が2時間コースになっちゃう」

葵だけじゃなく愁君にもお説教される

「すげえな 弟。オヤジかよ」

悠君は呆れているようだ。

「パパ以上に厳しいから 私帰ります。ご馳走さまでした」

流しのタクシーを捕まえて帰った

駅につくと白いBMWが停まっていた。

「梨桜、乗れ」

やっぱり怒ってる。

車に乗せられて葵のチームに連れてこられた

「このバカ！」

「ごめんなさいっ」

車を降りるときぎゅっつと抱きしめられた

「心配かけるな」

「うん、ごめん」

「皆で探しに出るところだったんだぞ」

「ごめんなさい」

葵の肩越しに愁君と目があった

「無事で良かったよ、梨桜ちゃん」

「ごめんね愁君」

愁君は笑ってくれた

「梨桜、お前の髪の毛に煙草の匂いついてんだけど どういう事
？」

ああ、拓弥君が幹部室で吸ってたな

「梨桜ちゃん？ どういう事？」

愁君の笑顔が冷たい笑いに変わった

「…」

「来い」

「やっ！」

葵の肩に担がれた

「葵っ下ろしてっ！愁君！コジ君！助けて」

2人は私から目を反らした。
見捨てないで、助けてっ

強引な招待 (4)

コトの経緯を全部言わされて、私はめちゃくちゃ怒られた。

「いい加減にしるよ？」

「だって、お墓参りに行きたかった」

「墓参りに行っても行かなくても事實は変わらないんだぞ」

冷たく言う葵を見て、涙が出そうになったけれど何とか堪えた。

酷いよ葵 そんな風に言わないで

「葵、もういいだろ？梨桜ちゃんだって反省してるし、そもそも約束を守れなかったおまえも悪い」

見かねた愁君がそう言つと、葵は私から目を逸らした。

「それに、あいつらが梨桜ちゃんを自分達の倉庫に連れて行きたがるのは想定内だろ？」

愁君の言葉に返事をせずに、葵はペットボトルの水を飲んだ。

「腹減った…」

ご飯なんかいいからもう帰りたい。

「梨桜ちゃんも食べてないんだろ？なんか食べに行こうか」

愁君が優しく笑いかけてくれるけど、食欲なんかない。

「私は帰りたい」

「梨桜？」

葵が私を呼んだけど、返事をしなかった。

今、口を開いたら葵に不満をぶつけてしまいそうだ。

「桜庭さんに送ってもらえば心配ないでしょ？」

葵と愁君が私を見ていた。

「帰る」

-
-
-
-
-

「イヤ!」

自分の叫び声で目が覚めた。

ベッドの上に半身を起し、両手で顔を覆って大きく息を吐いた。

いつも同じ。

この夢を見るのは辛い。

粉々になったガラス片の中に私が倒れていて、辺りは血の海。

目の前に人が倒れていて、虚ろな目をしているその人はピクリとも動かない…

「はあ…」

ゆっくりとベッドから降りて自分の部屋を出ると葵はまだ帰ってきていないようだった。

バスルームの床に座り込み、頭から熱めのシャワーを浴びながら、涙が流れるのをそのままに泣いた。

事故にあったときの夢を時々見る。

前は頻繁に見ていたけれど、東京に来てからはあまり見なくなっていた。

久しぶりに見た夢はやっぱり衝撃的だった。

夢の中で、夢だと分かっているのに目を開けることができない。

血の海の中にいる自分が恐ろしくて、あの時の痛みが蘇ってくるように、怖くて怖くて仕方がなくて、「助けて」って叫びたいのに金縛りにあったように体が動かなくて、声が喉に張り付いて声が出ない。

夢の中で、やっと声が出て「助けて」「って叫ぶと、血の海の中にいた私は花が咲き乱れる場所に立っている。咲いている花はいつも同じ。

野原に一人で立っただけでもう一度「助けて」「って叫ぶと目が覚める。

リビングに戻ると葵が帰ってきていた。

「おかえり」

「ただいま。シャワー浴びてたのか？」

頷いて、ソファに座る葵の前に立った。

「ねえ、葵」

「髪、乾かせよ」

「ぎゅーってして？」

葵が俯いている私に手を伸ばして前髪を持ち上げて、下から私の顔を覗き込んだ。

泣き腫らした私の目を見て葵は眉を顰めた。

「夢、見たのか？」

頷くと、すっぽりと葵の腕の中にいた。

「だから一人で墓参りに行くなって言ったんだ」

ため息まじりに呟いて私の背中を撫でた。

「落ち着いたか？」

「ん」

葵の腕の中は安心する。

落ち着いたけれども、眠れなかった

眠る事を諦めて、自分の部屋からバルコニーに出て真っ暗な空が白
んでいく様子を眺めていた

札幌で入院していた時はまともに眠れる日のほうが少なかったから、
いつも夜が明けていく様子を眺めていた。

札幌の夜明けも綺麗だったけど、東京の夜明けも悪くないね

目撃 (1)

今日は大嫌いな全校朝礼。

寝不足で校長先生の話は耳に入ってこない。立ったまま眠れるかもしれない。

子守唄のような校長先生の話がやっと終わって、生徒会長の寛貴が壇上で挨拶をするのをぼんやりしながら見ていた。

有名進学高校に通うカツコイイお兄ちゃんだ。

普段は口数が少なく、強引な総長さまだけど

寛貴は話を終わると生徒の集団には戻らずに壁際に立っていた。

生徒指導の先生の話が終わり、やっと朝礼が終わった。

一斉にざわざわと騒がしくなる講堂

クラスメイト達に続いて講堂から出るために列に続いて歩いた。

「……さん、とうとうさーん！」

「はいっ」

半分寝ていた私は慌てて返事をした。

呼ばれた方を見ると2人の男の人が私の傍に立っていた。

3年生？

今日はまだ悠君は学校に来ていない。

「ちょっと話があるんだけど」

最近、こういうのが多い。

プールでおぼれた教師を助けてから、上級生から声をかけられる。

「すみません、授業が始まるので行きません」

彼がいない時を見計らって来る男達。

興味本位での呼び出しは本当に困る。

迷惑だ。

「すぐ済むから、来てよ」

私に手を伸ばして来たから一歩下がってその手を避けた。

「やめて下さい」

触らないで！

ニヤニヤと笑いながら前に歩み寄り距離を詰めてくる。クラスメイ卜達は見て見ぬふりをしている。

「本当にすぐ終わるから」

避けたのに、さらに手を伸ばしてきて、強く腕を引かれた。

「いやっ…」

「早く来いよ。こつちだつて時間がないんだよ」

そう言うと、更に腕を引かれ、小さな痛みが走り体が強張った。もう、やだっなんなのこの男達、気持ち悪い！

「そのメガネ、外させるよ」

そう言いながら厭らしい笑みを浮かべて私を見下ろしていた。

「梨桜」

名前を呼ばれて振り向くと寛貴がいた。

寛貴が私に腕を伸ばし、私は背中を支えるように引き寄せられた。

「センパイ、ウチの梨桜に何か用ですか？」

寛貴が来て、もう絡まれなくて済むと思ひ安心した。

上級生から遮るように拓弥君が私の前に立った。

「何か用ですか？つて寛貴が聞いてるんですけどね。センパイ？」

拓弥君が凄むと

「なんだよ、大袈裟だなあ」

「そつだ。ちよつと話をしようと思つただけだ」

男達は引きつった笑いを浮かべながら言い訳を始めた。

「梨桜、痛むか？」

自分から先輩達に聞いたのに、彼らの答えを無視して、寛貴は私の顔を覗き込みながら心配そうに聞いた。

「少し。でも、大丈夫」

そう言うと、寛貴は小さく舌打ちをして上級生達を睨んだ。私に向かってニヤニヤと笑い、見下ろしていた彼らは怯えているように見えた。

「寛貴、大丈夫だよ？」

私が言うと、体が浮いた。

「拓弥、行くぞ」

寛貴はそう言うと、私を抱き上げたまま歩き出した。

「寛貴、下ろして？私、歩けるよ」

大丈夫って、歩けるって言ったのにどうして!？

「梨桜ちゃん、そのままでもいいんだよ」

拓弥君がそう言い、寛貴の隣を歩きながら私の頭を撫でた。

「でも、すぐく目立ってる」

抱き上げられたまま運ばれるなんて、恥ずかしいよ。

「梨桜ちゃん、それ、今更だから」

「え？」

拓弥君が笑い出し、何故か寛貴はため息をついていた。

抱えられたまま保健室に連れて行かれて、寛貴はソファに私を座らせた。

「オレ、ちょっと行ってくるわ」

拓弥君がそう言って私に手を振った。

「ああ、やりすぎるなよ」

2人だけにわかる会話をすると寛貴は私の隣に座り心配そうに私の顔を見ながら口を開いた。

「本当に痛まないか？」

「うん、痛くない」

いつもと比べてもそんなに大した痛みじゃないように思う。
熱が出るような感じもしない。

「そうか。…土曜日、弟に怒られたか？」

朱雀の溜り場から帰った後に、葵に凄く怒られたことを思い出した。

「うん。男の子と一緒にいたのがバレてすっごい怒られた」

「どうしてわかったんだ」

「髪の毛に煙草の匂いがついていたみたいで、何をしてきたのか白状させられたの」

自分の髪を摘まんて指に絡めて確かめてみたけれど、今は煙草の臭いはしない。

「過保護だな」

「そうだね」

あの事故以来、特に過保護だ。

「倉庫 禁煙にする」

禁煙？いつも屋上で吸ってるのに

彼等が禁煙する姿を想像して、笑うのを堪えていると、目の前に腕が回された。

「可笑しいか？」

寛貴に抱き寄せられていて、広い胸に頬が当たっていた。

驚いて何も言えずにいると

「たまには遊びに来い」

寛貴が言い、私は顔をあげた。
真っ直ぐに見つめる目を逸らしてしまった。

「朱雀のメンバーにはならないよ？」

自分の心臓を宥め賺して言うと、私に回されている腕の力が強まった。

「青龍ならいいのか？」

彼の言葉に首を横に振った。

「どっちのメンバーになるつもりはないよ。青龍と朱雀は元々ライバルチームなんでしょう？」

「ああ」

葵を傷つけるかもしれないチームにいることは出来ない。葵にも、クラスメイト達を傷つけて欲しくない。

傷つけあうのは無意味だよ。

「梨桜？」

「授業に出るね」

そう言うと、寛貴は腕を解いた。

彼に、彼等に嘘をついている。最近、そのことに後ろめたさを感じ

目撃 (2)

眠い。

昨日、一昨日とあまり寝ていなかったから今日は凄く眠い。

今日、最後の時間は会議。

生徒会と各委員会の委員長の会議に同席していたけれど、眠くて欠伸を噛み殺してばかりいる。

午後から授業に出てきた悠君は私の隣で腕を組み、難しい顔をしながら目を閉じている。

いつも見ているから分かるようになった。これは寝ている顔。

私も真似しちやおうかな。

そう思つてチラリと周りを見ると、寛貴と目が合ってしまった。

居眠りをしようと思つたのを見透かされたような気がして、笑つて

誤魔化すと、私の隣に視線を向けた寛貴が一瞬眉を顰めた。

肘で悠君を突いたけれど反応は返ってこない。

ちよつと、悠君。起きて？

寛貴の隣に座っていた拓弥君もこちらを見ている。

二人とも容赦なく鋭い視線を悠君に浴びせているけれど彼は一向に動かない。

もしかして、熟睡してる？

「解散」

会議の終わりを告げる寛貴の声がいつもよりも冷たいのは気のせい？
隣は相変わらず動かない。

各委員会の委員長達が生徒会室から出て行き、拓弥君は手に持って
いたプリントを丸めた。

あ、悠君が怒られる…

「梨桜、こっちに来てろ」

寛貴に呼ばれて席を移ると、“スパーン！”とイイ音がした。

「いつて〜!」

「悠、いい度胸じゃねえか」

会議中、ずっと居眠りをしていた悠君は拓弥君に怒られていた。ヤ
ンキーの説教は怖い。
おかげで私の眠気はすっかり覚めた。

議事録を作る手を止めて、小さく息を吐いた。

紅茶 飲みたい。ペットボトルじゃなくて、ティーポットで淹れた
美味しいお茶。

殺風景なこの生徒会室にティーカップやティーポットがあるわけが
ない。

あるのは冷蔵庫だけ。

「梨桜ちゃん？難しい顔してどうした？」

拓弥君に言われて、パソコン画面から目を離した。

「お茶、飲みたいなって思ったの」

「お茶？」

寛貴の問いに、うんうん。と頷いた。

「パパから紅茶が送られてきたの。学校でも飲みたいな……」

拓弥君はあまり興味が無さそうに「ふうん」と言い、読んでいた雑誌に目を戻した。

「オレも梨桜ちゃんが淹れてくれた紅茶が飲みたい！」

悠君がニコニコと笑いながら言った。

あんなに拓弥君から怒られたのにまったく堪えていない。彼はなかなかの強者だ。

「紅茶ね。女の子ってそういうの好きだよね」

「生徒会室にティーセットを持ってきてもいい？」

私が聞くと、拓弥君が頷いた。

「ああ。いいよな？寛貴」

「買いに行くぞ」

寛貴が急に言い出した。
これから買いに行くの？

「これから？」

「ああ。飲みたいんだろ？紅茶」

紅茶は飲みたい。でも、行動が早すぎない？

「オレも行く！」

悠君が言い、拓弥君にまた丸めたプリントで叩かれた。

「おまえは留守番してろ」

「オレも行きたい！」

「うん。一緒に行こう？」

私がそう言つと、寛貴が悠君に今日の会議資料を渡した。
それはさっきまで私がまとめていた議事録だった。

「悠、続きはおまえがやれ。会議中ずっと居眠りしていた罰だ」

「ええ！？」

「しゅちゅしゅちゅ言わないでやれ」

寛貴に言われて、悠君は渋々資料を受け取った。

悠君、頑張つてね。

「行くぞ、梨桜」

行動が早い人だ。

感心していると、荷物を持って生徒会室を出るように急かされた。

「そんなに急がなくても」

「門限、あるんだろ？」

そうでした。門限6時でした。

荷物を持って生徒会室を出ようとすると、拓弥君は「いってらっしゃい」と言い、手をヒラヒラと振った。

どんなカップを買ってもらおうか考えながら校門をくぐり駅に向かうとした。

「梨桜、どこに行くつもりだ？」

どこ。って決まってるでしょ

「駅」

寛貴に呼び止められて答えると、眉を潜めて私を見た。

「車で行くぞ」

また車？葵といい、寛貴といい、少しは自分の足で歩けばいいのに。

「ねえ、寛貴」

いい機会だから、言っておこう。
背の高い寛貴を見上げた。

「なんだ」

「前から言おうと思ったの」

そう言つと私の前に立ち見下ろされた。

「なんだ？」

「高校生らしく歩こうよ。私、歩きたい」

そう言つと、寛貴は意外だ。というような顔をしていた。

「女は送り迎えされたいんだろ？」

「そう？」

それは時と場合によるんじゃない？

「変な女だな」

そう言つと口角を上げて笑った。

「普通だよ」

私と寛貴の横に車が横付けされたけれど、寛貴は私のわがママを聞いてくれて運転手に帰りに迎えに来るように言った。

「ありがとう」

「帰りは車だぞ」

電車の中で寛貴は注目されていて、隣に立っている私には鋭い視線が突きさった。

遠巻きに、キヤアキヤア言いながら寛貴を見ている。

確かにカツコイイから女の子が騒ぐのは分かる。おまけに隣にいるのが地味な私だから彼女達が面白くなく思っ気持ちもなんとなくわかる。

「寛貴、ごめんね？居心地悪いよね」

隣に立つ寛貴に謝ると、彼は

「次からはおとなしく車に乗れよ？」

その言葉に素直に頷いた。

葵にも『歩きたい』ってわがママ言っの止めよう。

これ、欲しい。

寛貴が連れてきてくれた紅茶の専門店で見つけたのは、ガラス製のティーセット。

カップが広口になっていて、“コロン”としたデザインが可愛い。

「これがいいのか？」

熱心に見ている私の隣で寛貴が聞いた。

「うん。可愛い」

「そちらの商品は人気があるんですよ？」

にっこりと笑いかける店員は寛貴を見て頬を染めていた。

「梨桜が気に入ったのを買えばいい」

寛貴が言い、私は彼に見とれている店員に声をかけた。

「これにします」

「ありがとうございます」

私ではなく、寛貴を見て挨拶をした店員。解りやすい人だ。

ティーセットを包装してもらい店を出ると、通りの向こうに見慣れた後ろ姿がいた。

隣には制服を着ている女の子が立っている。

「あ
」

「どうした？」

立ち止まって通りの向こうを見ている私を寛貴が不思議そうに見て、私の視線の先を辿っていた。

目撃 (3)

「梨桜、やめておけ」

寛貴が止めるのを聞かないで、通りの向こうにいる彼らに気付かないように信号を渡った。

「ねえ、あの制服ってどこの学校？」

「隣の県の女子高」

私に気づかずに前を歩いている、背の高い綺麗な顔をした男。その隣にいるのは髪の毛が長くてほっそりとした女の人。

「梨桜」

寛貴に腕を引かれたけれど、彼等が気になって仕方がなかった。

だって、葵が女の子と一緒にいるんだよ？これはしっかり見ておかないとダメでしょ!?

しかも女の子が着ている制服は、私が変装用に愁君から渡された制服と同じだった。

葵と女の子は近くにある公園に入ってしまった。

見失っちゃう!

そう思って走ろうとすると、私のウエストに腕が回された。

「寛貴、離して」

寛貴に引きずられるようにして今来た道を引き返した。

「宮野と女が会ってるのを見てどうするんだよ？」

「興味があるの」

「それだけか？」

「うん」

本当は、どんな女の子なのか知りたい。

葵の外見だけに惹かれて内面を見ない女の子はたくさんいる。そういう人には葵の良さは分からないから、葵の傍にいて欲しくない。

「シヨックじゃないのか？」

「なんで？」

「…」

何かを言いたそうな顔をして私を見下ろす寛貴を見上げながら、少し考えた。

葵が『オレの彼女』そう言って恋人を家に連れてきたら少しシヨックかもしれないな、でもそれは葵も同じかな？『私の彼氏だよ』って紹介したら…

そこまで想像して止めた。

葵の場合は『シヨック』とかじゃないね、自分が認めない人だった

らきつと恐ろしいことになる。

「梨桜、おまえ」

寛貴の手が緩み、その隙に私は公園に向かって走った。

木の間から葵達を見ると、何やら揉めているように見えた。

葵は私に背中を向けているからどんな表情をしているかわからないけれど、彼女は私の方を向いているからどんな表情をしているのかわく見えた。

「ねえっ、どうして黙ってるの？」

彼女の悲しそうな声が聞こえた。

「葵君、最近私に会ってくれない」

葵って彼女いたの？

もしかして私、葵の恋の邪魔してる？

葵がどんな表情をしているのか気になって、木の陰から身を乗り出そうとすると“いい加減にしる”耳元で言われて、また寛貴につかまってしまった。

“葵って、付き合ってる人いたの？”寛貴に聞くと“んなもん、オレが知るか”と冷たい答えが返ってきた。

「葵君、好きなの！」

彼女が葵の首に腕を回して抱きついた。

うわっ！

驚いて声を上げそうになると、寛貴の手で口を塞がれて、その腕の中でもがいた。

彼女は葵に顔を近づけてキスをしようとしたけれど葵に腕を掴まれて離されていた。

修羅場だ

私が呆然としてしていると、寛貴に抱えられたまま公園から連れ出されてしまった。

いつも乗っている車が迎えに来ていて、私と寛貴を乗せると静かに走り出した。

「覗いてるのを見つかったらどうするつもりだ？」

怖い顔をして睨む寛貴に笑って誤魔化した。

「怒られる。かな？」

寛貴は腕を組み、窓から外を見ながら言った。

「宮野にしてみれば珍しい事じゃないだろ。何もしなくても女が付き纏って来る」

「寛貴もそうなの？何もしなくても付き纏われたりするの？」

「ああ」

頷いていた。やっぱり寛貴もカッコイイもんね。
でも、あれは付き纏っているような感じはしなかった。
彼女は泣きそうになっていたし、『最近会ってくれない』って言う
ていた。

「気になるか？」

「うん…まあ、それなりに」

目撃 (4)

弟の修羅場を見てしまうというのは、消化に悪いことだと知った。

家に帰ってきた葵は普段通りで何も変わらない。

あの時の葵は、すぐるようになっている彼女を冷たく突き放していた。今とは 私という時とは別人のように見えた。

「戸締りしろよ？」

「うん。今日も遅いの？」

夕飯と一緒に食べてからチームハウスに行く葵。もしかしたら彼女と一緒に夕飯を食べたい時もあるのかもしれない。

「ねえ、葵」

「ん？」

振り返って私を見る葵はいつもの葵だ。

「たまには、外でご飯食べてきても大丈夫だよ？」

そう言うと、片眉を上げて不機嫌そうに返事をした。

「誰か一緒に食べるような奴がいるのか」

違うから…

なんでも私に結びつける癖、直しなさい。

「私じゃなくて、葵だよ。友達とご飯食べたいときがあるんじゃない？」

そう言うと、私の鼻を摘んだ。
痛いよ！

「余計な気を使うな。行って来る」

鼻を抑えながら、葵に手を振った。

「行ってらっしゃい」

一人になっても、やっぱり気になる。

こういう時は、愁君に聞いてみるのがいいかもしれない。そう思っ
て愁君の携帯にかけた。

『どづしたの？』

すぐに電話に出てくれた愁君は優しく聞いてくれた。

「傍に葵いる？」

『いないけど なにかあった？』

葵が傍にいないのは都合がいい。

「愁君に聞きたいことがあるの。いい?」

『いいよ。電話で解決する?迎えに行こうか?』

愁君は優しい。

彼女がいるとしたら、彼女にはもっと優しいんだろうか?

「電話で大丈夫。あのね、前に愁君が用意した制服あるでしょ?」

『ああ、あれね。それがどうかした?』

「どうしてあの制服だったの?どうやって手配したの?」

『…突然どうしたの?』

「愁君、教えて?」

愁君の問いには答えずに聞くと、電話の向こうで愁君は戸惑っていた。

『もしかして、見た?』

素直に話したら教えてくれる?

「何を?」

愁君はきつと教えてくれないよね?優しいから私が傷ついたり、悩んだりするようなことは伏せて話してくれるよね

『オレは梨桜ちゃんと駆け引きするつもりはないよ。見たんだよね？ブレザーの制服を着た女子生徒』

「あの人、葵の彼女？」

『気になる？』

愁君も寛貴と同じことを聞くんだね。なんて答えようか。私が迷っていると、愁君が笑った。

『あの子はただの知り合い。制服は都合してもらったただだよ』

知り合い？それだけで、あんなこと言う？

「愁君の嘘つき」

そう言うと、また笑っていた。

『本当だよ、葵にとってはただの知り合い。彼女は、青龍の元総長の妹だよ。葵とオレがまだ幹部だった頃に彼女がチームに出入りしていたことがあったんだ』

元総長の妹。彼女は今の私と同じような立場だったんだ。

『その時から葵の事が好きで追いかけていたみたいだけど、葵は無関心だったよ。どちらかというと、迷惑に思っているかもしれない。ただ、総長の妹だから気を使っているんだよ』

愁君の言葉を聞いて、ソファに寝転がった。

ふうん：彼女が一方的に葵の事が好きなんだ。
寛貴が言っていた『何もしなくても女に付き纏われる』まさにそれだね。

修羅場を見たと思って心配したのに

『もしかして、嫉妬したとか？』

クスクスと笑っていた。

「違うよ。葵も恋愛したいのに私が邪魔しているんじゃないのかなって思ったの」

『そうなんだ。ところで、その時一人だったの？』

また、やってしまった。

自分から怒られるネタを振ってしまった。

「生徒会で使う備品を買いに行ったときに見かけたの」

無難な答えを探し出して言い、愁君がなんて返して来るかドキドキしていた。

『今日はそういうことにおいてあげるよ』

大目に見てくれたらしい愁君にホッとした。

「ありがと。優しいね」

「誰が優しいんだ？」

突然、頭の上から声が降ってきて、吃驚した私は飛び起きようとしてバランスを崩した。

「きゃあ!」

ソファからずり落ちそうになったところを葵に支えられた。

「何やってんだよ、バカ」

「遅くなるんじゃないの?」

「忘れ物取りに来た」

携帯からは『梨桜ちゃん?』と愁君が呼ぶ声が聞こえてきている。私は慌てて「後で電話するね」と言い、電話を切った。

「誰?」

「愁君だよ」

「愁?なんで」

「聞きたいことがあったから。葵、また出かけるの?」

「ああ、おまえも行く?」

「うん、どうしようかな。邪魔じゃない?」

「オレの部屋にいればいいだろ」

葵の言葉に頷いた。

あの部屋にいればチームの人ともあまり顔を合わせなくて済む。

「うん、行く」

私は『何もしなくても女に付き纏われる』それがどんなに面倒なところか、この時はまだ深く考えていなかった。

勝手な主張 (1)

『関わるな』って言われていたけど、遇ってしまったんだなあ

私って、葵から駄目だって言われることに限って、巻き込まれたり、関わる羽目になっているような気がする。

このことも、バレたらお説教かな…でもね、本当に偶然だったんだよ？

笠原さんと3回目の放課後デートをしていたとき、ケーキを食べていた笠原さんは急に体をこわばらせた。

「どっしたの？」

私が聞くと小さく「圭吾」とつぶやいた

彼女が見ている方に目を向けると、ブレザータイプの制服をきた男女のグループが入ってきていた。

あの中に圭吾がいるんだ？

「大丈夫？」

私が聞くと、彼女は俯いてしまった。

通路を挟んで向かい側の席にグループが座った。
笠原さんは背中を向けていてわからないけどグループのメンバーは私達をチラチラ見る。

私はテーブルに置かれた笠原さんの手を握った。

大丈夫だよ。

思いをこめて彼女を見ると不安そうな目をしていた。

どうしようか？このままお店を出た方がいいのか　でも、そうすると逃げているようで嫌だ。

「あれ？梨桜ちゃんここにいたんだ」

考えていると、意外すぎる人の声が降ってきた。

「拓弥君」

寛貴もいた

「何でここにいるの？」

「近くに用事があった」

寛貴はそっけなく言い私の隣に座り、笠原さんの隣に拓弥君が座った。

コーヒーを注文している拓弥君を見て「朱雀だ」圭吾のグループで囁かれていた

拓弥君は笠原さんに話しかけて何やら楽しそうにしている。それを見て少し安心しながら
私は寛貴の腕を少し引くと、彼は顔をこちらに向けた。

「あのね」

小さい声を出すと、寛貴は私のほうに顔を寄せた。

「どうした？」

「あそこのグループってなんていう学校？」

「北陵」

寛貴は私の目を見て言った。

「梨桜、拓弥に任せておけ」

え？

「いいから任せておけ」

声をひそめていたけれど、有無を言わせない強い口調に頷いた。

さすがチャラ男、場を和ませて笠原さんに笑顔が見られてきた。
私はまた寛貴に話しかけた。

「拓弥君すごいね」

「専門だから」

ふふつと私が笑うと拓弥君が

「梨桜ちゃん？ 寛貴と内緒話？」

えへへ、と笑い笠原さんを見ると彼女も笑顔で私に笑いかけた

「梨桜、お前がしたかった放課後デートってこれ？」

寛貴が聞いた

「うん、まあこんな感じ。笠原さん、今度はどこ行こうか？ お買い物もしたいよね」

その時、北陵のグループが席を立った

笠原さんがびくつと反応して拓弥君が何か耳元に囁いていた

どうなるのかと、ハラハラしていると、男の子が私達の脇を通った時

「麗香、裏切り者がまだその制服着てんだな。噂で学校に行つてないって聞いたんだけど？」

一気に笠原さんの表情が凍りついた。

このバカ男 許さない！

「てめえ 「あんたが圭吾？」

拓弥君の言葉に被せた

「なんだよお前」

私の頭の中で何かがはじけたような気がした

「今の言葉取り消しなさいよ」

「なに？」

「取り消せって言ったのよ」

勝手な主張 (2)

すごまれても怖くなんかない。むしろ逆効果だよ。
余計に腹が立つ。

私は圭吾になつこりと笑いかけた。

顔は笑って見せたけど、腹が立ちすぎて手が震える。

「表で話そうぜ」

圭吾の隣にいた男が言い、私は頷いた。

「東堂さん、やめて 私は大丈夫だから」

「ごめんね笠原さん、私は大丈夫じゃないんだ。この男、許せない。」

拓弥君が「あーあつ」て言いながら苦笑いを浮かべ、寛貴は何も言わずに圭吾達を見ていた。

店の外に出ると圭吾が

「なんなんだよお前」

「笠原さんは裏切り者じゃない。謝って」

「お前に何がわかんだよ」

自分の事ばかりを並べ立てる男。
こんな男、彼女にはもつたない。

「あんたの気持ちなんかわからないわよ！」

「なっ
」

「あんたと一緒の学校に行こうと思って頑張った自分の彼女に何てこと言うのよ！あんたこそ、笠原さんの何がわかってるのよ！？そんなにこだわるなら諦めなければ良かったでしょう？自分で勝手に妥協して笠原さんを引きずり落とそうとしないで！」

一気に話したら酸欠になりそうだった。

「この女
」

私を睨みつける圭吾を真っ直ぐに見た。

「笠原さんは裏切り者じゃない。自分がくじけただけでしょう？八つ当たりするのもいい加減にして！」

呼吸を整えるために深呼吸をして周りを見ると

あれ？

北陵高校の人数増えてる？

「あんた名前は？」

圭吾の隣にいた男が聞いた。
私を見て口角を上げて笑っている。何が楽しいの？私は楽しくな
かないよ

「東堂」

「へえ あんたか、例の」

例の？

「この生意気な女、殴っていいか？」

圭吾が言い、また私は腹が立った

「どこまで根性腐ってんのよ!？」

「その生意気な口塞いでやるよ」

絶対、黙らないんだから！

「塞げるものなら塞いでみなさいよ！早く取り消しなさいよ!」

“謝れ!” そう言おうとしたら、私の口が後ろから伸びた手に覆わ
れた。

「梨桜、もういいだろ」

私の口を塞いでいるのは寛貴だった。

「おい女、朱雀のメンバーだからって、でかい口叩いてんじゃねえ

ぞ？総長と副総長だけでこの人数がどうにかなると思ってるのか？」

何で邪魔するのよ！

私が寛貴から逃げようともがくと、彼は後ろから私を抱き寄せる腕に力を込めた。

「こいつは朱雀のメンバーじゃねえよ」

拓弥君が楽しそうに言った

「オレ 自分のモノに手え出されるの嫌いなんだよな。何かされたらキれるかもしれない」

寛貴が信じられない言葉を発した。

自分のモノって、なに？何かを言い間違ったの？

「えー、寛貴キレんの？やっかいだからやめて。悠いないから一人でお前止めるの面倒」

寛貴と私を見ながら笑う拓弥君は本当に楽しそうだ。

「藤島、その手を離せ」

不機嫌そうな声が響いてそちらを見ると葵と愁君がいた。

「青龍」

「どつしてここに」

圭吾達は動揺しているように見えた。ライバルチームのトップがここに現れるのが不思議なのだろう。

どうして？その答えはかんたんだよ。

過保護な葵が“必要ない”って言ったのに私に見張りをつけていたから。それ以外に葵がここにいる理由なんかない。

葵は圭吾達には見向きもせずはこちらを睨んでいる。

「オレのに手え出すな」

ちよっと、オレのモノ発言止めてよね。

私がむっとしながら葵を見ると

「梨桜ちゃん、怒りたい気持ちはわかるけど、ほどほどにね？女の子なんだから」

愁君は笑いながら私を窘めた。

笑っている愁君と対照的に葵は怒っている。

「いつまで触ってたんだよ、梨桜から手を離せ」

苛立ちのこもった声で言い、私に手を伸ばした。

「嫌だ。って言ったら？」

まるで、葵を挑発するかのようになんか笑いを含みながら言い、私を自分に引き寄せた。

勝手な主張 (3)

寛貴が私の背中から腕を回して抱き寄せている。正面には寛貴から引き離そうと腕を掴んでいる葵。

私の頭の上で睨み合う二人の大男。

いい加減にして！怒ってるのは私なの！

私は空いている方の手を使って口を覆っている大きな手を外した。

「ねえ、なに勝手な事を言いあってるの？邪魔しないでよ。私はあの男と話してるの！」

「バカだな、ああいう男が話してわかると思ってるのか？」

葵はそう言つと、後ろを振り返って圭吾達を見た。

「まだ言い足りないことがあるのか？」

寛貴が私の顔を覗き込みながら聞いてきて、頷くと

「もう十分言いたいこと言っただろ？」

葵が呆れたように言う。

「まだ謝らせてない」

「あのバカが相手じゃ無理だろ」

寛貴が言い、私は首を横に振った。

「やだ。ちゃんと謝って」

「おまえは駄々っ子か？いつまでも下らない奴らの相手してられるかよ」

葵はそう言つと、笠原さんを見た。

「あんたさあ」

急に葵に呼びかけられた笠原さんは、驚いて返事をしていた。

「はい」

ちよつと、笠原さんを怯えさせてどうするのよ？

「葵！」

「お前は黙ってる。あんた、あの男と付き合ってたって本当か？」

笠原さんが頷き、葵は口元に笑みを浮かべた。

その笑みはとても冷たい。今の葵は青龍の宮野葵。

いつもの意地悪だけど優しい葵とは別人だ。

冷たい笑みを圭吾に向けると

「もっと男を見る目を養った方がいいんじゃないかねえか？もっとマシな男選べよ」

「はいっ」

笠原さんは怯えてしまっているように見える。

ごめんね笠原さん、口が悪い弟で 悪気はないんだよ。

「笠原、今日は楽しかったか？」

顔だけを笠原さんに向けて寛貴が聞いた。

「楽しかったです」

拓弥君は隣で笑いながら笠原さんの頭をポンポン、と撫でていた。

「そうか なら学校に来い。お前のクラスにはもう1人仲間がいる。きっと楽しいぞ」

寛貴の言葉に、麗香ちゃんが涙をこぼした

「笠原、返事は？」

「うっ はい」

良かったあ、学校に来てくれるんだ。

「良かったな、梨桜」

寛貴が言い、葵は笑いながら私の頭を撫でた。

「おまえら、いい加減にしろよ？ 奴ら放置されて苛立ってるぞ」

愁君が言つと

「梨桜ちゃんも気が済んだよね？」

愁君がニツコリと黒い笑みを浮かべたから頷いた。

本当は謝らせたけれど、愁君を怒らせたくない。今、ここにいる人たちの中で一番怖いのは怒った愁君だから。

「藤島、そつちは？」

葵が寛貴に聞いていた。

「拓弥が行くしかねえだろ」

私には何の話か分からないけれど、葵は頷いていた。仲が悪いくせに通じているらしい。

「ウチは愁に行かせる。応援は？」

「なめてんのか？この程度でいらねーだろ。お前が必要なら呼べば」

「いらねーよ」

大男達に挟まれている私の手を愁君が引いた。

「愁君！」

「梨桜ちゃん、送って行くよ」

寛貴の腕が解かれて歩き出すと

「梨桜、気を付けて帰れよ」

寛貴が言い、私は頷いた。

葵は何も言わなかったけれど、目が『愁と帰れ』そう言っていた。

「麗香ちゃん、また明日ね！」

「梨桜ちゃん、ありがとう」

麗香ちゃんに手を振ると、拓弥君も手を振ってきたから笑いながら振り返した。

あのバカ男には腹が立つけど、彼女が学校に来る気持ちになったのなら、今日の再会は無駄じゃなかったのかもしれない。

「愁君、怒らないの？」

車の中で愁君は笑った

「怒らないよ。梨桜ちゃんが腹を立てる気持ちはわかったし、やっぱり葵と双子なんだなって思ったよ。素の葵と怒り方が同じだね」

「そうかな？」

今まで意識したことがなかったからわからない。首を捻っていると愁君は私の顔を見ながらクスリと笑った。

「藤島には驚いたよ あそこで宣言するとはね」

「相手を牽制したかっただけで深い意味はないんだよ。それか、何かを言い間違ったとか…」

そういうことにしておこう？これ以上ややこしくなるようなことは避けたい。

愁君はチラリと私を見てすぐに視線を窓に向けた

「 だったらいいけどね。葵も挑発に乗るし」

窓を向いていた顔をこちらに戻し、ピタリと私に視線を合わせて笑った。

「梨桜ちゃん、覚悟してね？青龍と朱雀のトップが宣言したからね。それがどういう意味か分かる？」

『宣言』 そんな大層なものじゃないんじゃない？

「葵は負けず嫌いだから、売り言葉に買い言葉でしょう？」

「まあね、半分は当たってる。でも、ああ言えばウチの人間を梨桜ちゃんの護衛につけていてもおかしく思われない。オレとしても堂々とできるから楽だけどね」

愁君、これ以上チームに迷惑をかけるのは嫌だよ。

進路相談と大好きな人 (1)

愁君から『覚悟してね?』そう言われたけれど、別にこれといって変化のない毎日。

「梅雨って嫌い」

今日は特に湿度が高いような気がする。

首筋にまとわりつく髪の毛が気持ち悪く感じられたから、手櫛で髪の毛をまとめて高い位置で結び上げた。

変わったことといえば、登校拒否を続けていた麗香ちゃんが学校に来るようになり私は放課後に彼女の家に行かなくなった。

しばらく生徒会の仕事から遠ざかっていた私が放課後に生徒会室に行くと、雑用がたっぷりと待ち構えていた。

生徒会の顧問をしているクラスの担任から『過去の資料をデータにしてくれ』そう言われて私の目の前に大量の書類を置いて行った。

議事録を複合機でデータ化してパソコンへ送り、保存する。

気の遠くなるような作業をしていた。

悠君が手伝ってくれている。

…はずなんだけど、彼の手はさっきから止まっている。

「悠君、手が止まってるよ?」

彼の顔を覗き込むと

「セーラー服とポニーテールの組合せって なんかいいよな。女子

高生って感じがする」

私を見ながらボソリと呟いた。

突然何を言い出すのかと思えば 手伝ってくれてるんじゃないの？

「悠、おまえはその組み合わせが好きなんだ」

拓弥君は悠君の呟きに食いついていた。

「オレはサラサラの髪の毛がいいな」

二人は急に“萌える女子高生像”について語りだした。

馬鹿馬鹿しい…

彼を当てにするのはやめよう。

私は資料を手にして複合機の場所へ移動した。

資料をデータ化する作業を続けていると疲れてきた。

私の身体は高温多湿な状態についていけないようで最近疲れやすい。

「梨桜」

複合機の前でぼんやりしていると、寛貴に呼ばれた。

「なに？」

「隣の部屋に來い」

隣の部屋に行くと、寛貴はソファを指差した。

「少し休め」

「うん。ありがとう」

ソファに座り、ふう。と息をつくときと寛貴が私を見ていた。

「目を閉じているだけでも違うから休め。帰る時間になったら起す」

「え？」

『休め』ってそういう意味？

私が驚いていると寛貴は少し怒ったように眉を寄せた。

「顔色が悪いのに無理に仕事をしなくてもいい。体調が悪いのを隠す必要はない」

隠しているわけじゃなく、言わないだけなんだけど

いつも私の体調が悪いとすぐに気付く愁君でもまだ気付いていないのに、寛貴が分かったことが意外だった。

言われるままにソファに横になると、向かい側で寛貴は資料に目を通していた。

横になって目を閉じると、溜まりつつあった疲労が身体から溶け出すような感覚に襲われた。

このまま眠りたかったけれど、今眠ったら熟睡してしまいそうだったから意識を保っているために寛貴に聞きたかったことを聞くこと

にした。

「ねえ、寛貴、聞いてもいい？」

「なんだ」

目を閉じたまま聞いた。

「前に北陵の人が私の名前を聞いて『例の』て言ってた。『例の』ってなに？」

「ウチに転校生が来たのが噂になったんだよ。だからだろ」

淡々と答えるその言葉に違和感を感じた。

確信ではないけれど、“違う”そう思えた。

嘘つき

「東京の子って暇なんだね」

「そうだな」

「ありがとう」

前に、桜庭さんが迎えに着てくれた車の中で愁君にも同じ質問をしたけれど、寛貴と同じ答えだった。

葵と寛貴は何か隠している。

目を閉じて、眠りに落ちそうになるのを堪えながら寛貴が書類をめ

くる音を聞いていると携帯が鳴った。

体を起こして携帯の着信画面を見ても、見覚えのない番号だった。誰だろう？首を捻りながら電話に出た。

「もしもし」

『梨桜？』

男の人に名前を呼ばれた…

私の名前を呼び捨てするのは限られている人だけな筈。

『梨桜の携帯だろ？』

もう一度名前を呼ばれた。

私の知っている人だと思うけれど、この番号は知らないし、この声も覚えがないような気がする。

「すみません、どちら様でしょうか？」

私がそう言うと、話をしていた寛貴が顔を上げて私を見た。

『梨桜、オレの事忘れたのか？』

電話の相手はクスクス笑いながら話していた。

何となく聞き覚えがあるような気もするけれど、誰だったのかが思いつかない。

低くて耳に響く良い声。

「あの…」

『梨桜、冷たいな。昔はオレと結婚するって騒いでいたのに。本当に忘れた？』

その言葉に、一気に眠気もダルさも吹き飛んだ。結婚する？私が騒いだ！？…この人、誰！？

「えっ！？結婚する？私、そんな事言った？」

『薄情者』

少し拗ねたように言うその声を聞いて

思い出した！！

「もしかして慧君！？」

『梨桜、オレは今、すごく傷ついた』

うん。小さい頃、慧君のお嫁さんになるって本気で思ってたよ。ママや葵にダメって言われて大泣きした。

「慧君どうして？今どこにいるの！？」

そう言うのと、扉がノックされて担任が顔を出した。

「東堂、お客さんだぞ」

「？」

担任兼生徒会顧問の安達先生は、私の面倒な事情を知る人。その安達先生が私を呼んでいる。しかもお客さん？

「東堂が大好きな人だ」

こっちへ来い、と手招きをして廊下へ呼び出した。

「大好き？」

誰だろう？受話器を耳に充てながら廊下に出ると、確かに大好きな人が立っていた。

「ただいま、梨桜」

私はその人に駆け寄り、飛びつくようにして抱きついた。

「慧君！」

進路相談と大好きな人 (2)

久しぶりに会えたことが嬉しくて、涙が出た。

「梨桜、軽すぎだぞ?」

私が慧君に抱きついてしていると、抱き留めたまま背中を撫でてくれた。

「ごめんな、梨桜が大変な時に傍にいてやれなくて」

申し訳なさそうに言う慧君に首を横に振って答えた。
顔を上げて、背の高い慧君を仰ぎ見た。

「いつ日本に帰ってきたの?」

そう聞くと口角を上げて悪戯っぽく笑った。

その笑みを見て、慧君が目の前にいるって実感した。

「昨日」

昨日!? 日本に来るなんて知らなかった。

「どうして教えてくれなかったの?」

「驚かせようと思ってさ。ちゃんと帰ってきたから。泣き止め…な
? 梨桜」

慧君は「もう泣くな」そう言いながら私の涙を自分の手で拭ってニ
ニコと笑う。

大好き。
もう一度ぎゅっと首に抱きついた。

「東堂、感激の再会だと思うけど、これから3者面談をするから先生の言葉に涙が止まり、顔だけを先生に向けた。」

「どうしてですか？」

私、何も悪い事してないよね？

「生活指導室にいるから来なさい」

先生はそう言う就先に行ってしまった。
何のための3者面談？それって、私と先生と 慧君？

「慧君も行くの？」

そう聞くと、慧君は私を床に下ろした。

「当たり前だろ」

「どうして？」

「ん？オレは梨桜の保護者だから。普通、3者面談って言ったたら生徒と保護者と教師の面談だろ」

その言葉に頷いた。

そっか：実の叔父は保護者か：慧君はママの弟。
15歳離れた私と葵の叔父さん。

「ほら、行くぞ？」

慧君に手を引かれた。

「待って、鞆を取ってくる」

そう言つて生徒会室に入ると、3人が私を見ていた。

「梨桜ちゃん あの人誰？」

悠君に聞かれて慧君の名前を出さないように気を付けなければいけない。

宮野 慧 それが慧君の名前だから。

「私の叔父さんなの。ずっと外国にいたんだけど日本に帰ってきたの」

慧君は私が12歳の時に仕事でアメリカに行ったきりで会っていなかった。

去年、ママのお葬式の際に一時帰国したらしいけど、私は会えなかった。

「これから3者面談なの。終わったら真っ直ぐ帰るね」

「そうなんだ…じゃあね」

もっといろいろ聞かれるかと思つたけれど、あっさりと言われた。

3人に手を振り荷物を持って部屋を出た。

「メガネ外していいぞ」

生徒指導室に行くと担任が言い、私はメガネを外した。

「慧君、葵には帰国すること話してるの？」

慧君は口角だけを上げて笑った。
私達をからかうときの顔、変わらないな

「言っていないよ。一応、葵の保護者でもあるから午前中に東青に行ってきたよ。何も知らせないで急に呼び出したら凄く驚いてたな」

そう言つて喉の奥で笑っていた。
葵も驚いただろうな

「なんで葵が生徒会長なんだよ。梨桜、不思議だと思わないか？」

先生は吹き出した。

慧君は長い脚を組んで座りながら笑っている先生を見ていた。

「宮野葵のコトをそんなふうに見えるのは貴重な存在ですね。さすが先輩だ」

先生の言葉に驚いた。
今、先輩って言った？

「慧君、先輩って？」

先生と慧君は知り合いなの？

慧君と先生を交互に見ると、慧君は私の顔を見て驚いているようだった。

吃驚しているのは私だよ！

「梨桜は知らなかったのか？オレはこの卒業生。安達はオレの後輩」

全然知らなかった。パパも教えてくれなかったし

慧君って頭がいいのは知ってたけど、この卒業生だったんだ。しかも先生の先輩なんだ

「そんなことより、梨桜、3教科満点だったんだってな。良く頑張ったな」

私の頭をくしゃくしゃと撫でてくれた。

昔から、テストでいい点数を取ると、膝に抱いて頭を撫でてくれた。

さすがに、私も高校生になったから『抱っこして』なんて言わないけど、こうやって頭を撫でて褒められるのは嬉しい。

漸く笑いが治まった先生が真面目な顔をして私に向き直った。

「今日は、進路のコトも含めての面談だ。まだ気が早いかもしれな
いが希望する進路はあるか？」

先生の言葉に慧君と顔を見合わせた。

進路なんか考えたことない。

「今は学校に来るだけで精一杯なんです」

私が言うと、慧君も頷いた。

「義兄とも話をしたけど、今は体調を見ながら学校の授業についていければいいと思っている。まだ体調を崩して休むことも多いだろうから、単位を落とさずに進級できればいい」

「そうですね…でもこの前の試験では学年で1番だったからなく難関大学でもすんなりいけそうだな」

「それは葵にやらせればいいだろ、梨桜に無理させるなよ」

葵、可哀想 慧君も酷いよ。

「先輩、宮野は他校の生徒ですから。それはそうと、ウチの藤島とライバルだからな、競わせてみたいな。同じ大学受験させたらどうなるんだろつか」

「今度、ストレートで国立受かるように言っておくよ」

無責任なことを言う二人を横に進路の事を考えてみた。

先の事は全くと言っていいほど考えていなかった。

私の望みは、背中痛くない日常を過ごすこと。それから、水泳ができるようになればそれで良い。

「安達、3者面談なんて、形だけだろ？」

「そうですね。一応進路の事を話したって言う事実があればいいんです」

先生、有名進学校の教師がそれでいいの？

私が呆れていると慧君は椅子から立ち上がった。

「煙草吸って来る」

「ああ、あそこは昔と変わりませんから」

慧君は、安達先生の言葉に頷くと私に「すぐ戻る」そう言って部屋を出て行った。

進路相談と大好きな人 (3) side:悠

「慧君！」

廊下から梨桜ちゃんの声が聞こえてきた。

担任は生徒会室の入口に立ちながら、梨桜ちゃんが出て行った方を見て目を細めてほほ笑んでいる。

「誰？」

拓弥さんが聞くと

「東堂の親戚だ。ちょっと話があつて来てもらったんだ」

『ごめんな、梨桜が大変な時にそばにいてやれなくて』

そう言っている男の声が聞こえた。
若い男のような気がする。

梨桜ちゃんが大変だったときって去年の事故の事を言っているのか？
気になって廊下の方を見ていると、彼女が部屋に入ってきた。

「梨桜ちゃん あの人誰？」

梨桜ちゃんの顔を見て聞いてはいけなかったのかと思った。
赤くなっている目が、泣いたことを示していた。

「私の叔父さんなの。ずっと外国にいたんだけど日本に帰ってきたの」

少しだけぎこちなく笑う彼女を見て、何だか胸が痛くなった。

「これから3者面談なの。終わったたら真っ直ぐ帰るね」

「そうなんだ…じゃあね」

彼女の顔を見たら、聞こうと思っていたことが口から出てこなかった。

屋上で煙草を吸っていると、拓弥さんが煙を吐き出しながら言った。

「3者面談なんてずいぶん時期外れだな」

「ああ」

寛貴さんが言い、オレも首をひねった。

友達の為に男相手に啖呵を切って言い負かすのに、久しぶりに叔父さんと会って泣くんだ。

ホント、梨桜ちゃんて面白い子だよな。

梨桜ちゃんが北陵相手に啖呵を切った日、梨桜ちゃんの見張りについていたチームの奴が興奮気味にオレに報告してきた。

『オレ、東堂を見てカツコイって思いました。友達の為に北陵の奴に謝れって言ったんすよ』

それを聞いて、梨桜ちゃんならやりかねないかも。そう思った。

それから、寛貴さんと宮野が梨桜ちゃんを挟んで『自分のモノ』
オレのモノ』と言い合ったのを聞いた。

「悠、どうした？眉間にしわよってるぞ」

拓弥さんが笑いながら聞いた。

「別に」

寛貴さんが『自分の』なんて言うと思わなかった。

オレは寛貴さんを見た。

寛貴さんは火がついた煙草を銜えたまま拓弥さんの話を小さく頷きながら聞いている。男のオレから見てもカツコイイと思う。

寛貴さん相手じゃ勝てっこねえよ。

喧嘩が強くて、頭も良くて、口数が少ないから冷たいように見られるけど、この人は優しいんだ。

オレは寛貴さんみたいになりたいって思っているのに。よりによって…

容姿に惹かれて女が群がってきてても相手にしない寛貴さんは、本気で惚れた女を大事にするんだらうな。
梨桜ちゃんの事も本気なんだらうか

オレがため息をつくとき、後ろに人が立つ気配がした。

「屋上で煙草なんてベタだな」

振り返ると、銜えた煙草に火をつけている男がいた。

目を細めながら煙を吸い込む。その仕草に凄く色気があって、男のオレでもドキっとした。

「梨桜ちゃんの叔父さん。ですか？」

拓弥さんが言うと、言われた男の人は煙を吐き出しながらニヤリと笑った。

「ああ。…生徒会のメンバー、朱雀の幹部か」

「そうです」

寛貴さんが答えると

「梨桜が世話になってるみたいだな。一応、礼を言う」

この人、梨桜ちゃんの前と態度が違くないか？しかもオレ達を見ても平然としている。

「青龍と朱雀はライバルなんだから？」

梨桜ちゃんに聞いたんだろうか？

「はい」

一番近くにいたオレが返事をする、喉の奥で笑った。

「くだらねえな」

突然言われたその言葉にカチンときた。

この人に何が分かるって言うんだ？

「何がくだらないんですか？」

「そのままだよ。敵対していることがくだらねえって言うてんだ」

煙を吐き出すと

「梨桜ちゃんの叔父さんだからって、勝手な事言われたくないんだけど」

拓弥さんが言い返すと、叔父さんは口角だけを上げた。

オレ達を挑発するように笑うその顔もイヤミなくらい整っていて綺麗だった。

「梨桜を巻き込むな。オレが言いたいのはそれだけだ」

巻き込む、そんなことするはずがない。

それにオレ達はオレ達のやり方で彼女を守っている。

「彼女の事はオレ達が護ります」

寛貴さんがキツパリと言うと、梨桜ちゃんの叔父さんは笑ったけれど、すぐに真顔になった。

「ガキがくだらない意地の張り合いをして足元を掬われないようにな。せいぜい気をつける？」

それだけを言うと屋上から出て行った。

「なんなんだよ、あの人」

牽制された。ということなのだろうか？

それにしても、オレ達に『くだらねえ』そう言った時の雰囲気は一般人じゃないような気がする。

帰ろうと思つて廊下を歩いていると、目の前に背の高い男の腕に手をかけて歩く女子生徒がいた。

「梨桜ちゃん？」

声をかけると振り返った

「悠君。 慧君、クラスメイトの悠君だよ」

振り返った男はさつき屋上で牽制して行った梨桜ちゃんの叔父さんだ。

嫌味なくらいイイ男だ。美形の遺伝子があるに違いない。

「悠君、私の叔父さん」

さつき屋上で会ったが、彼女の手前、形だけ頭を下げると

「梨桜と仲良くしてくれてありがとう」

その言葉に驚いて顔を上げると、梨桜ちゃんにはわからぬように「ヤリと笑った。」

…やっぱり態度が違う。

彼女が下駄箱を開けると叔父さんが彼女の靴を下に置いた上履きを下駄箱に入れてやると、靴を履きかえる彼女の手を取り支えていた。

「ありがとう、慧君」

「無理はするなよ？」

「うん。大丈夫だよ」

お姫様扱いかよ

「慧君、ウチでご飯食べるでしょ？」

梨桜ちゃんが叔父さんを見上げて言うと、頭を撫でながら微笑み返している叔父さん。

「ああ、梨桜の作った手料理か。楽しみだな」

叔父さんの答えを聞いて、梨桜ちゃんは嬉しそうに笑っている。学校ではあまり見せない笑顔だ。

「泊まっていったね？」

「そうするかな」

なんだかおもしろくなかった。

叔父とはいえ、梨桜ちゃんが他の男に対してこんなに親しげに話し

ているのを見てイライラした。

進路相談と大好きな人（4）

慧君の車で買い物をして家に帰ると、玄関に大きな靴があった。

「あれ、葵がいる」

珍しく葵が先に帰っていた。

「家に居るように言っておいたんだ」

慧君が言うと、葵は出迎えてくれた。

「おかえり」

「ただいま！」

葵は私が持っていた荷物をキッチンに運んでくれた。

「凄い量の食材だな。何作るんだ？」

「今日の夕飯はちらし寿司。葵、手伝ってね？」

私が言うと慧君が笑った。

「葵、料理できるのか？」

「慧君、葵って料理が上手いんだよ？」

いつもは怖い顔で総長様してるけど、実はエプロンが似合っちゃ

うんだから。

コジ君とかが見たら吃驚するだろうな。

「慧兄はできないの？」

葵は笑いながら慧君に聞いていた。

「作る必要がない」

葵と顔を見合わせてしまった。葵もきつと同じことを考えてる。

作ってくれる人に事欠かないっていう事だよな？

「だったら結婚すれば」

やっぱり同じことを考えていた。

葵の言葉に同感。慧君はカツコイイからモテると思うんだけど、未だ独身。

アメリカでもモテたんだろうな。

背伸びをして吊り棚から寿司桶を出そうとすると、葵が取ってくれた。

「恋愛と結婚は別なんだよ」

それって

「ふ〜ん。梨桜、真に受けるなよ」

「梨桜、無理に嫁に行かなくてもいいからな？」

突然真顔になって言う慧君に吹き出してしまった。

「やだ、慧君。パパでもそんなこと言わないのに」

葵も笑っていた。

「慧兄、オヤジ臭い」

「葵、うるさい。梨桜は嫁に行かなくてもオレが養ってやる」

私はまだ16歳なのに今から何を言ってるの？

「そんなこと言ってるうちに慧兄がじーさんになるだろ」

「葵、おまえ生意気になったな。昔は女の子みたいに可愛かったのに」

お米を研ぎながら、慧君の言葉に笑ってしまった。
うん。すっごく可愛かった。

葵は隠しているつもりだけど、男の子に告白されたことがあるのを私は知ってるもん。

「オレが生意気なのは慧兄に似たんだろ」

葵は私の隣で合わせ酢を作りながら憎まれ口を叩いている。
生意気な事を言いながら葵も楽しそうに笑っていた。

「梨桜は素直に育ったのに」

拗ねたように言う慧君が可愛かった。

「仕方ねーだろ。慧兄、諦めろよ」

慧君はまだ“可愛くない”と言いながらソファに寝転がった。

「こういうの、久しぶりだね」

隣にいる葵にしか聞こえない位の小さな声で言うと、葵も頷いていた。

「二人だけだと寂しいか？」

首を横に振った。

葵がいるから寂しくないよ。

「葵は？」

葵は薄焼き卵を作りながら小さく笑った。

「おまえと同じ」

慧君、葵は生意気だけど慧君と同じで凄く優しいよ？

進路相談と大好きな人 (5) side : 悠

朝、学校に来るために乗ってきたバイクを校舎裏に停めていると、裏門の前に黒い車が停まった。

遠目でハッキリしないけれど、欧州車に見える。

近くに寄って見ると、黒いアウディだった。

朱雀の車じゃないことは確かだ。

この学校に外車で送ってもらうなんていい度胸だな。そう思いながら、一体誰が降りてくるのかと見ていると、助手席のドアが開き、スラリとした足が見えた。

え？

「梨桜ちゃん？」

声をかけると梨桜ちゃんは振り返ってオレに手を振った。

「悠君、おはよう!」

そう言うと、運転席に向かって声をかけ扉を閉めた。

走り去った車に手を振ると、オレに向き直ってニッコリと笑った。

「叔父さんに送ってもらったの？」

「うん」

「叔父さんて、若いよね」

叔父つていうともっと年上でオジサンを思い浮かべるけど、あの人はせいぜい30代前半にしか見えない。

「15歳年上なの。： パパの弟なんだ」

梨桜ちゃんの話の聞くと、本当に叔父と姪の関係らしい。やっぱり美形の遺伝子があるんだ。

「昨日の帰りといい、梨桜ちゃんの事お姫様扱いだね」

オレが言うと、少しだけ目を伏せた。

「そうだね 甘やかされてるね。怪我をしたから余計なのかもしれない」

そう言うと、顔を上げて少し悲しそうに笑った。

その顔を見て、後悔した。そんな顔をさせたいわけじゃなかったんだ。

お昼休み、梨桜ちゃんは笠原や隣のクラスの女子生徒に誘われて弁当を食べていた。

今まで、彼女と親しく話すのはオレくらいだったのに、いつの間にか学年の女子生徒は梨桜ちゃんと仲良くなりたがっていた。休み時間も女達の輪の中にいることが多くなった。

「梨桜ちゃん、行くぞ?」

オレが声をかけると、梨桜ちゃんは女達に手を振って席を立った。

「梨桜ちゃん、生徒会大変だね」

「うん、まあ……」

曖昧に言って笑う梨桜ちゃんを横目に見ながら教室を出た。
昼寝をしに生徒会室に行くことは話していないらしい。

梨桜ちゃんと並んで廊下を歩く。

今まで当たり前だったことが、自分の中で違う意味を持ち始めているような気がする。

「悠君、今日は学校が終わったら出かける約束をしたから生徒会に行けないの。ごめんね」

梨桜ちゃんは歩きながら言った。

「叔父さん？」

「うん。慧君と弟と出かけるの」

梨桜ちゃんは嬉しそうに笑っている。

その笑顔を見て胸の奥にモヤモヤとしたものが浮かんだような気がする。

「そっか 久しぶりなんだろう？生徒会の仕事は気にしないでいいよ。オレも手伝うし、楽しんでくればいいよ」

スラスラと口をついて出てきた言葉に自分でも驚いた。
オレ、最低だ。今、正反対の事を思ったくせに

生徒会室で梨桜ちゃんがいつものように寝ていると携帯が鳴り響いていた。

「はい…慧君？ん 起きるよ。 うん、わかった。ママの好きだったお花買っていこうね」

梨桜ちゃんのお母さんは亡くなったと言っていたのを思い出した。
叔父さんが言っていた“大変な時に傍にいれなくて”ってそういう意味だったのか？

「慧君、ママが好きなのはそれじゃないよ。いつも誕生日にあげてたじゃない。忘れちゃったの？ママ怒ってるよ」

そう言いながら柔らかい笑みを浮かべている。

「 うん、待ってるから。じゃあね」

その笑みをオレにも向けて欲しい。
そう言ったらキミはどんな顔をする？

進路相談と大好きな人（6）

「やっと帰って来たのに？そんなのヤダよ」

私は慧君の言葉を聞いて、首を横に振りながらその言葉を口にしていた。

『日本に帰国したのは京都にある大学の研究室に呼ばれたからなんだ。来週から京都に住むことになった』

ママのお墓参りから帰って来た夜、慧君は話がある。そう言って私達に京都に住むことを告げた。

「梨桜、慧兄だつて仕事なんだ。仕方ないだろ？親父だつて仕事でイギリスにいるだろ」

葵に諭されて、流れ落ちた涙を掌で拭った。

「梨桜、ごめんな。大学の時に世話になった教授が京都にいて、研究室に呼ばれたんだ」

「ごめんなさい」

慧君は私の顔を覗き込むと両手で私の頬を挟み、親指で涙を拭ってくれた。

「東京と京都なんて、アメリカに比べたら凄く近いだろ。これからはいつでも会いに行けるだろ？」

葵が言い、慧君も「そうだな」と頷いていた。

「梨桜と葵が京都に来るか？それでもいいぞ」

慧君が言つと、葵が「オレはここにいる」と即答した。

葵がここにいるなら私もいる。

「慧君、我儘言つてごめんなさい。京都で、お仕事頑張つてね？」

そう言つと、慧君にぎゅうっと抱きしめられた。

「葵と一緒にいるから寂しくないだろ？」

優しく背中を撫でながら言われて頷いた。

「うん。…でも、長いお休みには帰ってきてね？」

「分かつてるよ、長期休暇には帰ってくるから。梨桜と葵もいつでも遊びにおいで」

「慧兄、梨桜に甘すぎ」

葵が呆れたような声で言つと、慧君がクスクスと笑っていた。

「焼きもちか？」

「そんなわけないだろ」

葵が言つと、慧君の携帯が着信を知らせた。

慧君は私から腕を解き、電話に出るとリビングを出て行った。

「いい加減、泣き止め。おまえは幾つになったんだよ」

「そんなこと言ったって」

勝手に涙が出てくるんだもの、仕方ないじゃない。

「明日、眼が腫れてるって騒いでも知らないからな」

もう少し違う言い方があってもいいんじゃない？

「葵、冷たい」

ジトつと葵を見ると、葵は“面倒臭えな”と言いながら立ち上がり、冷蔵庫から保冷剤を出してタオルで包むと私のところに戻って来た。

「ソファに寝ろ」

言われるままにソファに横になると、目に保冷剤を当ててくれた。

「葵、京都に遊びに行こうね」

「ああ」

この返事の仕方は本気じゃない。

「絶対だよ？」

念を押すと渋々といった感じで返事をした。

「わかったよ。京都に連れて行く」

約束破ったら、チョコレート食べさせるからね。

「梨桜、泣き止んだか？」

電話を終えた慧君が戻ってきた。

「泣き止んだよ。明日、眼が腫れたって騒ぐから冷やしてる」

私が答える代わりに葵が言った。

「葵、オレよりお前の方が甘いんじゃないか？」

慧君が楽しそうに笑っていた。

上の空

週末、慧君は京都に行ってしまった。

東京駅のホームまで見送りに行つて、そこでまた泣いてしまい、慧は呆れていた。

慧君が京都に行つてしまつてから、葵の様子が少し変。

本人は、普通に過ごしているつもりみただけど、私の目を甘く見ないでほしい。

何かを考えている。

悩んでる。

日曜、私達は隣の県まで買い物に来ていた。

ゆつくり洋服を見たかつたから、『郊外のショッピングモールに行きたい』と強請つたら、あっさりと連れてきてくれた。

「行きたいところがあるんだけど、一緒に行つてくれる？」

目の前に座る葵は、長い睫毛を伏せてコーヒを飲んでいる。

「どう？」

今だって、私の話を聞いているようで聞いていない。
いつもなら『行先きを聞いてから考える』とか言うくせに

大体、葵がカフェでコーヒを飲むこと自体が珍しい。
女の子の熱い視線を『うざい』『気持ち悪い』と言って入りたがら
なくせに

今だってお店にいる女の子の視線を一身に浴びているのに、文句ひ
とつ言わないで私の話に頷きながらコーヒを飲んでいる。

「うん 反対しない？」

「ああ、言ってみるよ」

不自然だっていう事が分からないのだろうか？私の事には物凄く敏
感なくせに、自分の事は無頓着というか、鈍いというか

「水着買って一緒にプールに行こう？」

そう言うと頷いた。

ほら、聞いてない。

「ああ。いいんじゃない…あ？今なんて言った？」

反応が遅いよ、いつもなら『水着』って言っただけで反応するじゃ
ない。

何をそんなに考え込んでいるの？

「葵」

「なんだよ」

「薄情者」

「は？」

私には言えないの？

「最近、変だよ。自覚してないの？」

私から目を逸らしてテーブルに置いてあった伝票を掴んで立ち上がった。

「行くぞ」

慌てて葵を追いかけた。

「葵、待って！」

レジで会計を済ませた葵は一人で先に歩いて行ってしまい、私は一生懸命追いかけた。

普段は『走るな、ゆっくり歩け』って口うるさいくせに、今日は早足で追いかけないとついていけない速さで歩いて行く。

人込みを縫うように先を歩いて行く葵の背中を見失わないように必死に追いかけたけれど、葵との差はどんどん開いてしまった。

「待ってよ」

葵を見失ってしまった。

人込みの中にも葵を見つける自信はあるけど、今、この人込みの中で葵を見つけることは出来なかった。

人込みを抜けて、ベンチに座り携帯を開いた。

『落ち着いたら迎えに来て。ベンチで待ってるから』途中まで文章を入力していると、隣にドサリと誰かが座った。

「悪い」

「話してくれたら許してあげる」

携帯を閉じて、バッグに入れながら言うと、隣からため息が聞こえた。

「話してくれないなら一人で帰る」

「…戻れって言われた」

戻れ？

「誰に？何に戻るの」

「東堂 葵」

ああ、そう言う事が。
きつと、慧君が葵に言ったんだ 秋になるとママが亡くなって1年が経つ。

「葵はどうしたいの？」

「わからない。今更とも思う」

私は両手を伸ばすと葵の頬に触れて、綺麗な顔を自分の方に向けた。いつも真つ直ぐに私を見る瞳が揺れている。

「私は、葵の好きにしたらいいと思う」

きつと、東堂 葵から宮野 葵になった時に葵は凄く戸惑ったと思う。それと同じ思いをするのは辛いと思う。

「梨桜ならどうする？」

私なら、生まれた時の名前に戻りたいと思う。でも、今葵にそれを言うのは躊躇われた。

「悩むと思う。時間をかけて考えて？葵の望むようにすればいいと思うよ。私の事よりも、自分がどうしたいか、それを考えて」

そう言つと、いつも葵が私にするように頭をクシヤクシヤと撫でてあげた。

「いつも葵は自分よりも私を優先させてくれるよね？でもこれは葵

の気持ちを優先させて考えてね？絶対だよ」「

葵の顔を覗き込んで言うと、葵は小さく頷いた。

「ね、今日は私がぎゅーってしてあげようか」「

そう言うと、頬を摘ままれた。

「調子に乗るなよ」「

口調は怒ってるけど、いつもよりも優しく摘まんでいる。
照れなくてもいいのに。

ウチに帰ったらぎゅーってしてあげる。

均衡 (1)

東青生徒会が紫苑に来る日、私は未だにうんざりする量の過去の議事録と向き合っていた。

一つのファイルを手にしてパラパラとめくり、ため息をついた。

この作業に終わりが来る日があるのだろうか？
もう、うんざり…

何気なく開いたページを見て青ざめた。
そこには見覚えのある字でサインがされていた。

『紫苑学院生徒会 会長 宮野 慧』

慧君が生徒会役員だったなんて知らない！

これ、見られたらまずいでしょ!?

“宮野 慧” と “宮野 葵” この二人は面立ちと性格まで似ている。絶対結び付けて考えられるよ！

この前、悠君から聞かれてとっさに慧君を“パパの弟”そう言った。パパの弟なら名字は東堂だと考えると思ったからそう言ったけれど、ここに資料が残っているなんて思いもしなかった。

見られないうちに隠さなきゃ！

「梨桜？」

急に名前を呼ばれて、飛び上がりそうになった。

吃驚した！

「梨桜」

もう一度呼ばれて下を見ると、寛貴が私を見上げていた。

「いつまでそこにいるつもりだ？」

私は資料室で脚立の上に座り、天井に届きそうな位高い位置にある書棚から記録する議事録を整理していた。

「うん、降りるよ」

手にしていた慧君の名前が載っているファイルを別なファイルの中に隠した。

後でこのファイルを持ち出して隠してしまおう。

「ファイルをこっちに渡せ」

そう言われて、寛貴に慧君の名前が載っていないファイルを渡した。

「降りられるか？」

「大丈夫。私、高いところ得意だから」

今までならピョン、と脚立から飛び降りたけれど、今はそれができない。

一段ずつゆっくりと降りていると、急に体が宙に浮いた。

「え？ひゃあっ！？」

驚いて変な声が出てしまった。
なに!?

寛貴に脇を抱えられて床に降ろされた。

「寛貴!心臓に悪いからやめて」

「落ちそうになってるのを見てる方が心臓に悪い」

落ちそうになんかなくていない!

「私、そこまで運動神経鈍くないよ?」

笑っている寛貴に抗議すると益々笑われた。
何がそんなに可笑しいのか分からないけど、なんか、腹が立つんですけど?

寛貴の腕をバシッと叩こうとしたら避けられた。

「遅い。…高いところが得意って、おまえそれって、何とかと埃は
「違うから!」「」

寛貴の言葉に被せて否定した。

この男、葵と同じことを言う。可愛くない!

「梨桜ちゃん!」

資料室を出て、寛貴と生徒会室に向かっていると呼び止められた。振り返ると、私の隣を歩く寛貴も立ち止まった。

「あ…藤島先輩」

私を呼び止めたのは麗香ちゃんと隣のクラスの小橋さんだった。

「どうしたの？」

私が声をかけても二人は寛貴を見上げていた。

一年の女子にとって上級生の寛貴は滅多に会えることのない貴重な存在らしい。

「私に用事じゃなかったの？」

二人に聞くと、思い出したように小橋さんが話し始めた。

「調理室でシフォンケーキを焼いているんだけど、東堂さんに教えてもらいたかったの」

お願い、と手を握りしめて言う彼女を見て少し申し訳なく思ってしまった。

これから定例会だし、仕事も山積みで溜まっている。教えてあげたいけれど、今日は時間がない。

「お願い。上手に焼けていたら先輩にあげたいの」

頬を染めて話す彼女を見ていたら、私まで心がキュンとなりそうだった。

恋する女の子の頼みを断れないよね？

寛貴を見ると目が合った。『行って来てもいい？』と目で聞くと頷いてくれた。

「先に行く。あまり遅れるなよ」

「うん」

寛貴が行ってしまうと、二人はため息をついた。

「私、藤島先輩をこんなに近くで見るの初めて。カッコイイね、生徒会で一緒に居られる東堂さんが羨ましいな」

小橋さんが両手で頬を抑えながらつつとりとしながら言った。

「素敵だよねえ」

麗香ちゃんもため息をつきながら言う。

「こづいづのって、アレだよ。眼福！」

ちよつと、ケーキをあげたい先輩はどうしたの？
私のトキメキを返して。

均衡 (2)

「これくらいに泡立てれば上手く膨らむと思うよ?」

調理室でメレンゲを泡立てている間、小橋さんから大好きな先輩の話が聞かされた。

好きな人は2年生で、明るくて面白い先輩らしい。

彼女がどれだけ先輩を好きか。

力説されたけれど、メレンゲを作っていた私は、彼女の話が殆ど耳に入ってこなかった。

「泡を潰しすぎないように気を付けてね」

「ありがとう!東堂さん」

小橋さんと麗華ちゃんに手を振って調理室を出た。

危なっかしい手つきに思わず手を貸してしまったけれど、ケーキが美味しく焼けて彼女の片想いが実れば良しとしよう。

寛貴から『あまり遅れるな』そう言われてから結構時間が経ってしまったのが気になっていた。

携帯に表示されている時間を確認してから急ぎ足で生徒会室に向かった。

「梨桜」

急ぎ足で歩いていると、呼び止められて立ち止まった。聞きなれた声に振り返ると、葵が一人で歩いていた。

「どつしたの？」

葵はシャツのボタンを1つ開けてネクタイを緩めていた。無駄に色気が漏れているような気がする。それ、少しわけてくれたらしいのに

「走るなっっていうも言ってるだろ」

私の顔を小突く葵に「走ってない」と反論して葵と並んで歩いた。ここで制服を着て二人で歩いているのが不思議な感じた。

「さつき慧兄から電話が来た。夏休みに帰って来るってさ…」

「ホント？楽しみだね」

賑やかな夏休みになりそうだ。

「行きたいところがあったら決めておけって言った。行きたいところはあるか？」

「海、鎌倉の海！」

即答すると、葵は少し驚いていたけれど、すぐに笑いながら頷いた。

「梨桜はじーさんち好きだったもんな」

鎌倉にはママの実家がある。
慧君の実家でもあるおじいちゃんの家、夏休みになると葵と二人だけで泊まりに行った。

「鎌倉か…しばらく行ってなかったな」

葵も懐かしそうに笑って言った。

「久しぶりに行こうよ。ね？」

葵を見上げると、シャツのボタンがとれかかっていることに気がついた。

「葵、ボタンがとれそうだよ。つけてあげる」

「帰ってからでいいよ」

ダメ、失くしたら困るでしょ？

「今はそんな時間ないだろ」

「そうだね。早く生徒会室に行かないと」

私は糸をひっぱり、ボタンを外して葵の手に乗せた。

「オレが持つてると失くすから、梨桜が持つてて」

「ん」

葵からボタンを受け取ると

「梨桜ちゃん！」

悠君が私達に向かって歩いてきた。

「遅いから心配した」

「うん、ごめんね。メレンゲを作るのに時間がかかったの」

「メレンゲ？」

隣で葵が聞いた。

「友達がシフォンケーキを焼いてて、教えてって言われたの」

葵が、納得できない。というように首を傾げて私を見た。

『なんで学校でケーキを焼くんだけ？』そんな顔をしている。

説明しようと口を開きかけたら

「梨桜ちゃん、早く」

悠君が私を急かした。

「先生に頼まれた仕事も残ってるんだろ？」

いつもと違う、少し低い声で言うと葵を睨んでいた。

葵はその視線を受けて口角だけを上げると私の頭をポンと叩いた。

「海堂の機嫌が悪いみたいだから行くぞ」

挑発的に言う葵を悠君は更に睨んでいる。

「悠君？」

悠君は、葵から顔を背けて生徒会室に向かって歩き出した。

均衡 (3)

葵と一緒に生徒会室に入ると、拓弥君が出迎えてくれた。両手を広げて、ニコニコと笑っている。

「おかえり〜」

どうしてそんなにご機嫌なの？

拓弥君の後ろには呆れた顔をしている寛貴と愁君が見えた。

拓弥君の、何かを期待している顔にどう返したらいいか分からなくて、彼から目を逸らしてしまった。

私、彼と何か約束していた？

思い出してみるけれど、何も約束していないと思う…。もう一度、拓弥君を見るとニココリと笑いながら私を見た。

「あれ？梨桜ちゃん、ケーキを焼いてきたんでしょ？お土産は？」

お土産？

どうして私がケーキを焼きに行ったことになってるの？寛貴ってば拓弥君にどんな説明したの？

私が寛貴を見ると、寛貴は拓弥君にジロリと冷たい視線を投げた。

「拓弥、人の話を都合よく変換するな」

「梨桜ちゃんなら、オレにケーキ作ってきてくれると思った！」

そんなことを力説されても

大袈裟に悲嘆にくれている拓弥君に寛貴は「バカ」と突っ込んだ。

「大橋、おまえやっぱり馬鹿だな」

葵が私の後ろで呆れていた。愁君も笑いながら「バカ」と言っている。

「ごめんね、拓弥君。今度作って来るね」

皆にバカと言われている拓弥君がなんだか可哀想になってしまい、そう言つと寛貴が眉を顰めた。

「梨桜、甘やかさなくていい」

「こつという奴は甘やかすとクセになる」

葵と寛貴が拓弥君に毒舌を吐いていた。

「なんだよおまえら！」

この二人って仲が悪いけど、思考が似ているような気がする。ホントは仲良くなれるんじゃないのかな

「梨桜ちゃん、さっき寛貴さんが持ってきた資料は置いてあるから」

寛貴と葵を見ると、悠君が資料が置かれた机を指差しながら言った。

その資料を見て、一気に気が重くなった。

やりたくないけど やらなきゃ！
気を取り直して、ファイルを複合機の傍に運んだ。早く終わらせてやる！

「寛貴、資料整理の続きをしてもいい？」

席について話し合いを始めようとしている寛貴に声をかけると、彼は顔だけをこちらに向けて頷いた。

「ああ、資料を取りに行くときは声をかけるよ？」

脚立を使ってファイルを取り出すくらい、誰にでもできる簡単な作業なのに。

そんなに私が脚立から降りるのが危なっかしいんだろうか？

「わかったな？」

返事をしないでいると、低い声で念を押してきた。
こんなことで総長モードにならないで欲しい。

「わかった」

ヤンキー用語を背中聞きながら、パソコンと複合機の間を何度も往復して資料を整理した。

「休憩にしたら？」

運んできた資料の半分が終わった頃、愁君に言われて手を止めた。

「はい。梨桜ちゃんはこれが好きだったよね？」

そう言われて目の前にジャスミンティーのペットボトルが差し出された。

「愁君。ありがとう」

お礼を言うと、ペットボトルの蓋を開けてから渡してくれた。さっすが愁君！完璧。

「さっきから梨桜ちゃんは何をしてるの？」

私がパソコンを置いてある机の椅子に座ると、愁君は隣に椅子を運んで座った。

「過去の議事録をデータ化して保存してるの」

そう言うと、にっこりと笑って「お疲れ様」と言った。王子様な愁君を見ていると癒されてしまう。

いいなあ、愁君が同じクラスだったら、穏やかに過ごせそう。

「またとれた…なんだよコレ？」

その声が出た方を振り返ると、葵が着ているシャツのボタンがまた1つとれたようだった。

まだ買ったばかりのシャツなのに、不良品！？

「ボタン、つけてあげる」

「今日は帰るだけだから、いい」

良くないでしょ、だらしないよ。

お昼寝キットからパーカーを取って葵に渡した。

「ボタンが2個も外れたままなんてだらしないよ?」

そう言うと、葵は嫌そうな顔をしながらシャツのボタンを外し始めた。

「ボタンをつけるまで、それを着てて」

「女物が着られるわけないだろ?」

そう言いながら広げたパーカを見ると、葵は私を睨んだ。

「これって」

『オレの服じゃねーか!』って目が語っていた。

その視線を無視してシャツを受け取り、ソーイングセットを出してボタンをつけていると…視線が刺さっているような気がした。

チラリと視線を感じる方を向くと、悠君が睨んでいた。さっきは葵を睨んでいたけど、今度は私?

私、何か気に障るような事をしたのかな。

今日一日の事を思い返していると、葵がズボンのポケットに手を入れて私の脇に立った。

「何？」

私に希望を聞くなんて珍しい。普段なら何も言わずに買ってきて来るのに。

「りん」

葵の問いに答えると、愁君が私と葵を咎めるように目を細めた。

私、何か変な事言った？首を捻ると、愁君は『バカ葵』と小さく呟いた。

どうして『バカ葵』なの？

少し考えて、しまった！と思ったけれど、愁君にバカと言われた葵は部屋を出て行った。

愁君が小さなため息をついている横で、私は帰りの車の中で怒られることを覚悟した。

確かに、今のやりとりはまずかったと思う。『何?』に対して『何が?』って答えるべきだった!...でも、葵が近づいてきた段階でジューズを買いに行くんだってわかつちやっただもん。今となつてはもう遅いけど...

寛貴達はどんな顔をして私を見ているのだろうか?怖くてボタンを縫いつけているシャツから目を離せずにいると、頭の上から能天気な声が響いた。

「梨桜ちゃん、オレもボタンがとれそうなんだ。つけてくれる?」

拓弥君はそう言って、袖口を目の前に出した。

相変わらずの軽い口調に拍子抜けしてしまった。さっきの葵とのやりとりを聞いて、何も思わなかったの?

拓弥君で...鈍いの?

「うん、いいよ。つけてあげる」

そう言うと、拓弥君が私の目の前に腕を伸ばしてきた。

この状態で縫えっていう事?

「え?拓弥君、このままで縫うの?」

「そう。このままつけて?」

「大橋つてやっぱ、バカだな」

私の隣で愁君が呆れていた。

「梨桜、針が刺さってもいいぞ。気にするな」

酷いことを言っている寛貴を見ると、机に頬杖をついて愁君と同じように呆れた顔をして私達を見ていた。

「寛貴！オレを何だと思ってるんだよ」

すぐ近くに拓弥君の顔があつて凄くやりにくい。

「手のかかるバカだろ」

寛貴、酷い。拓弥君には容赦ないんだね…。

拓弥君は寛貴に向かつて文句を言っている。それを受けて寛貴は余裕の笑みを浮かべていた。それでもこの二人つて仲がいいんだよね？

「拓弥君、動かないで。ホントに針が刺さるよ？」

ボタンを縫い付けていると、葵が戻ってきて机の上にジュースを置いた。

「これ、着ていいの？」

ボタンをつけ終えたシャツを掴んで私に聞き、私は葵を見ずに答えた。

「うん。家に帰ったら他のボタンも確認した方がいいと思うよ」

私が確認するんだけどね…一緒に買ったシャツもチェックしておく。

ボタンをつけ終わり、プツンと糸を切ってボタンを留めてあげた。

「はい、できた」

針をしまっていると、携帯が震えた。

「梨桜ちゃん、御礼にケーキ奢るよ」

拓弥君がいつもの軽い調子で言い出し、私は携帯を見ながら軽く流した。

「ボタンつけたくらいで御礼なんていらないよ」

メールを読んで携帯をパチンと閉じた。

『このパーカー捜してたんだぞ！犯人はお前だったんだな』
葵ってば、貸してねって言ったのに忘れてるんだ。

「梨桜ちゃん。デートしよ？」

その言葉に振り返ると、目の前に拓弥君の顔があった。
近すぎるでしょ、その距離。

「デートしよ」

ソーイングセットを拓弥君の目の前に持ち上げてニッコリと笑った。

「その口も縫い付けてあげようか？」

一瞬、拓弥君の口角が上がったのを見逃さなかった。

何を企んで軽く見せているのかわからないけど、その気もないくせに女の子を誘うような事ばかり言わないでよね？

「梨桜ちゃん、怖いよ！」

すぐにチャラ男に戻った拓弥君にある意味感心してしまう。

呆れていると、また私の携帯が震えた。

着信画面を見ると、アドレス帳に登録されていないアドレスからのメールだった。

届いたメールを開くと、短い文章が入っていた。

『どうして何も言わないで東京に行った？』

均衡 (5)

登録されていないアドレスから届いたメール。

自分の言いたいことだけが書いてある。そのメールを削除して携帯をバッグの中に放り入れた。

少し乱暴な仕草だったけれど、そんな事はどうでもいい。

こんな言葉、見たくない。

考えたくない。

「梨桜ちゃん」

拓弥君に呼ばれて顔を上げると、拓弥君は自分の眉間に指を当ててトントンと叩いた。

「眉間に皺が寄ってるぞ」

葵の言葉に、我に返った。

部屋を見回すと皆が私を見ていたから、慌てて強張っていた顔を両手で覆って隠した。

「メール？」

愁君に聞かれて頷いた。

「うん、迷惑メールだった。連絡するとお金くれるんだって」

“ お金くれるとか、すごいね ” って笑いながら愁君を見た。…嘘つ

いてごめんね。

葵は私から視線を外して自分の携帯を操作している。

「そう…迷惑メールを受信しないように設定してあげようか？」

「続くようだったらお願いするね」

皆の視線から顔を逸らし、机の上に乗っている資料の数を確かめるフリをした。大丈夫かな、不自然じゃなかったかな…

「そういえば、梨桜ちゃんが葵に貸した服ってメンズサイズだよね？」

突然変わった話題に驚いて愁君の顔を見ると、「ニコニコ」といつもの笑みを浮かべている。

愁君、知ってるクセに…何を言わせたいの？

「うん、弟だよ。借りてるの」

そう答えると、葵は『貸した覚えはない』と目で語っていた。愁君はあの、黒い王子の笑みを浮かべている。

「へえ、そうなんだ。彼氏の服かと思ったよ」

「弟のだよ…」

愁君の意図が分からなくて、笑って誤魔化した。

「梨桜ちゃんは可愛いから彼がない方が不思議だよね」

東京に来てから、葵が過保護すぎると思える位に私の傍に居るのを知ってるくせに、どうしてそんな事ばかり言うの？

一度私から離れた視線は、また私に集まっていて、すごく居心地が悪い…

「やだ、愁君てば」

内心焦りながら、愁君の言葉にどう返そうかと考えていると

「さっきのメールも彼氏からだと思ったよ。迷惑メールで安心した」

突然切り込まれたその言葉に真顔になってしまった。

さっきのメール、愁君が座っていた位置から見えていたの？

一瞬そう考えたけれど、自分の携帯で起動させている機能を思い出して安心した。

「違うよ。愁君、変だよ？」

愁君は問いかけた私を見ずに、葵の方に顔を向けた。

「葵、良かったな」

その言葉に続けて愁君が葵に『暴れるなよ』と言い、葵は私を一瞥すると携帯に視線を戻した。

愁君は私を見て、またニツコリと笑った。

葵との会話を誤魔化すためにメールを利用されたことに気が付いた。

愁君、葵との会話は誤魔化せたいんだけど、視線が痛い。

…寛貴が私を怖い目で見ているんですけど。こっちもどっにかして
くれないかな

均衡（6）

……ここから逃げてしまおう。

作業が終わったファイルを資料室に戻しに行く。鬼王子と寛貴の視線から逃れる手段はそれしかない。

これ以上ここにいたら、絶対に余計なことを言ってしまうような気がする。

うん、そうしよう。雨も降りそうだし、早く終わらせて帰ろう。

「梨桜、どこに行くんだ？」

ファイルを両腕に抱えて席を立つと、寛貴に声をかけられた。

目ざとい……

「資料室にファイルを置いてくるの」

「悠、代わりに行ってこい」

寛貴に言われた悠君は少し嫌そうに眉を顰めた。

今、彼と二人で資料室に行くのは躊躇われた。あんな風に睨まれた後ではさすがに気まずい。

「一人で行けるよ、脚立に登らないから。それでいいでしょ？」

慌てて言うと、寛貴は疑わしそうに私を見た。葵は“脚立”という言葉に眉を顰めて私を見ていた。

「机に置いて来るだけだから。じゃあね！」

寛貴の返事を聞かずに部屋の扉を閉めて資料室へ向かった。

廊下を歩きながら窓を見ると、さっきよりも空が暗くなってきていた。

雷が鳴りそう…

こんな空を見ていると、昔を思い出してしまう。

ウチは両親が共働きだったから、いつも葵と留守番をしていた。

慧君と一緒に暮らしていた時期もあったけれど、それ以外は本当に葵と二人きりだった。

宿題をして、二人でご飯を作って食べて 両親の食事の用意もしていた。

ママは母親というよりも仕事に生きるタイプの人で、家事は苦手だった。

ママが入院するまで、料理は葵が作っていた。葵が料理上手なのはママに美味しいご飯を食べてもらうためだったんだよね…

資料室に入り机の上にファイルを置くと、さっきまで登っていた脚立を見上げた。

棚の奥に隠した、慧君の名前が載っているファイルを取りたい。

寛貴もいないし…登ってもバレないよね？

安易に考えて、脚立に手をかけた時、扉が開いた。

まさか…寛貴？私が脚立に登るのが分かったの？

「寛貴？」

声をかけたけれど返事はなかった。
寛貴じゃないの？

部屋に入ってきたのは悠君だった。

「悠君、どうしたの…?」

声をかけたけれど、彼は何も言わずに私を見ていた。何かを言いたそうにしているけれど、口を開こうとはしない。ただ私を見ているようにも見え、睨んでいるようにも見えた。

言いたいことがあるのなら言うて欲しいと思う反面、何を言われるのだろうか？と怖くもある。

彼が口を開かないのをいいことに、私は彼に背を向けてファイルを片付けることにした。

「危ないからやめて欲しいんだ」

やっと口を開いた彼の顔を見た。
危ない？

「寛貴に言われたから脚立には登ってないよ？」

顔を強張らせているように見える悠君に笑いかけた。いつもならニコツと笑い返してくれるのに今日は怖い顔をしたまま。

「そうじゃない」

そう言うとまた黙ってしまった。

彼の言葉を待っている、窓際で稲妻が光った。やっぱり雷が鳴り出した。

こんな日は二人で窓際に座って、稲妻が光るのをずっと見ていた。葵と一緒に見る雷は怖いと感じなかった。むしろ、好きだった。

また、昔の事を思い出していると、悠君が何かを決めたように一瞬目に力を入れたように見えた。

「東青の生徒会と親しくしないで欲しいんだ。梨桜ちゃんの住んでいるところは青龍のシマだって言ったよな？利用されたら」

彼の言葉を遮った。

「葵や愁君が私を利用するの？」

「何かのきっかけでそうなるかもしれない。だから、危険だから……」

だから…親しくしないで？そう言いたいのか？

葵が私を利用する？悠君、それだけはないよ。私も葵を利用することはない。

…もしも、葵が私を利用するのだとしたら、それはそうせざるを得ない状況だということだよ。その時は私を利用すればいい。

いっそのこと、全てを話してしまいたいけれど、今更だ。私は彼等に嘘をついているのだから…

均衡 (7)

「悠君、そんな風に考えるのは寂しいよ」

「梨桜ちゃんは何もわかってないからそんなことが言えるんだ。オレ達は…」

最初から関わらなければ良かったのかな、そうすれば悠君にこんなイヤな思いをさせることもなかった。

「もしも、逆の立場だったとしたら？私が東青の生徒だったら、悠君とは友達になれないの？」

私は葵の身内で青龍にも出入りしているけれど、悠君と友達になれて良かったと思うよ。

でもきつと、皆には私に理解できない感情があるんだよね

「悠君、私のせいでイヤな思いをさせてごめんね」

私の方を見ない彼に声をかけて、資料室を出た。

生徒会室に戻ると、定例会は終わっていた。

「すっげー雨だな」

窓に叩きつけられるような激しい雨と空に鳴り響く雷。窓際に寄って空を見ると、稲妻が光っていた。

「梨桜ちゃん、怖くないのか？」

拓弥君が隣に立ち、空を見上げながら聞いた。

「怖くないよ、綺麗だね」

「きゃー！とか言ってくれたらオレ的には嬉しいけど？」

「ごめんね、期待に応えられなくて」

いつもの軽口に付き合う気持ちにはなれなくて、まともな返事を返してしまった。冗談を言うような気分じゃないんだ。

「梨桜、帰るぞ」

帰ろうと思って窓際から離れると寛貴に呼ばれた。

「一人で帰る」

首を横に振って答えた。“一人で帰りたい”葵にも伝わるように言ったら、葵は不機嫌そうに眉を顰めた。

「見たらわかるだろ？この雨じゃ傘なんか役に立たないぞ、濡れるだけだ」

寛貴が聞き分けのない子供に言い聞かせるように言ったけれど、私はその言葉に頷いた。

「うん、別に構わない」

私が車に乗せてもらったら悠君がイヤな思いをするでしょう？
少しだけ、一人になりたい。

「構わないって、何考えてるんだ」

「冬じゃないから多少濡れても平気だよ」

この雨に濡れたら、多少じゃ済まされないことは分かっていたけれど、同じ車で帰るのは気が引けた。

「バイバイ」

鞆を持ち、扉に手をかけて寛貴や葵達に手を振った。

昇降口を出て、もう一度空を見上げるとさっきよりも雨が激しく降っているような気がした。

葵と一緒に帰る気分でもない。

きつと何があつたのかを聞かれて、言わされてしまう。そうなら葵だって嫌な気持ちになる。

悠君だって、葵に知られたと分かったら嫌な気持ちになる……

考えても仕方のないことばかりが頭の中に浮かんでくる。

溜息をついて傘を開こうとしたら、ガシッと首に腕が巻きついた。

「何するのっ」

それは、葵の腕だった。

「離して」

見上げると、私を見下ろしてバカにするように小さく笑っていた。ムツとして睨むと更に笑った。

「おまえ、バカだろ」

バカでもなんでもいいから離してよっ

「梨桜ちゃん、一緒に帰ろう?」

愁君にニツコリと微笑まれて見惚れていると、私の手から荷物を取り上げてコジ君に渡してしまった。

「ちょっと、苦しい!葵、離してってば!」

葵は私の言葉を見下ろしたまま、ズルズルと私を引きずった。もがいて巻きついて腕から逃れようとすると、葵はピタリと止まって私を見下ろした。

「ずぶ濡れになって、風邪をひいたら誰が看病するんだ?」

それを言われると弱い。看病するのは葵しかない。

「…今回は放置でいいです」

苦し紛れに言つと、葵は眉を吊り上げた。

「手間かけさせんな」

短くそう言つと私を車の中に押し込んだ。

「梨桜ちゃん、海棠と何かあった？」

車の中で愁君に聞かれて、どうしたものかと迷った。

いつも冷静で的確なアドバイスをくれる彼には全てを話してしまいたくなる。…でも、今回の事は言わないでおこうと思った。

「何もないと思うよ？機嫌が悪かったみたいだね」

「アイツにすげー睨まれた。生意気な一年だな」

「悠君は優しいから紫苑の生徒の私と葵が親しく話すと心配するのかな」

精一杯濁して言ったつもりだけれど、私の右隣にいるコレには伝わらなかった。

「なんでオレが梨桜とのコトを遠慮しなきゃいけないんだよ、部外者は奴だろ」

オレ様発言に呆れたけれど、葵らしいといえは葵らしい。

「葵、梨桜ちゃんの立場も考えるよ？大体なおまえは…」

愁君に叱られている葵は「わかってる」とか「うるせえな」とか悪態をついていたけれど、そのうち腕を組んで寝たフリをしてしまった。

「ごめんね、梨桜ちゃん。良く言っておくから」

私の顔を覗き込みながら、首を傾げて言う愁君に『とんでもない！』と首を横に振った。

「愁君、謝らないで！？いつも迷惑かけてごめんね。葵って、こんなだけど仲良くしてくれる？」

こんなやり取りが前にもあったような気がする。そう思っていると右隣から大きな舌打ちが聞こえた。

愁君はクスクスと頷きながら笑っていて、助手席にいるコジ君も笑いを堪えているようだった。

「コジ、面白そうだな」

ふてぶてしい笑みを浮かべながら葵は助手席に座るコジ君を見ている。

「いえ！すみません」

「そうだ…今度の試験で赤点取ったら、夏休み中は出入り禁止だ」

「ええ〜！？」

コジ君の悲鳴のような声が響いた。

「赤点とらなきゃいいだけの話だろ？大体、生徒会メンバーで赤点があるなんてありえない」

愁君がコジ君に憐みの目を向けた。

「コジ、災難だな。赤点はない方がいいからな。まあ、頑張れよ」
葵の意地悪…それって八つ当たりでしょ。コジ君も可哀想だけど…
…確かに赤点はない方がいいかもね。

青龍と朱雀 (1)

全校集会。

とても退屈な報告会に、何度も欠伸を噛み殺して眠気に耐えた。

何度目かの欠伸を堪えた時、壇上にいた寛貴と目が合って視線で叱られてしまったけれど、やっと終わってホッとしながら生徒会用の席を立ち、教室に戻ろうとしていた。

「東堂さ〜ん！」

名前を呼ばれて振り返ると、両手を広げながら走ってきた小橋さんに抱きつかれた。

「小橋さん!？」

一緒に歩いていた寛貴達は何事かと見ていたが、小橋さんはそんな事お構いなしで抱きついたまま私を見上げた。

「あのね!東堂さんのおかげ!！」

抱きついていたらかと思ったら、私の肩を掴んで揺さぶりながら嬉しそうに笑っている。

もしかして、先輩と上手くいった。とか？

「ユキヤ先輩がOKしてくれたの〜!!！」

キヤー！と言いなながら嬉しそうに私を見上げている姿が微笑ましくて、私も嬉しくなった。

「良かったね。でも、私は何もしてないよ」

「ううん、あのケーキすごく美味しかったって。ほとんど東堂さんが作ってくれたじゃない？だから、東堂さんのおかげ」

小橋さんを見ていると、悠君がチラリと私を見てそのまま行ってしまった。

今までなら『梨桜ちゃん、行くぞ？』って声をかけてくれていたのに。何も言わずに先に教室に帰ってしまった。

「梨桜、生徒会に遅れるなよ」

寛貴に言われて、私は伝えようと思っていたことを思い出した。

「今日は用事があるから行けないの」

『赤点とつたら夏休み中出入り禁止にするぞ』鬼総長の発した一言で、コジ君に泣きつかれて断りきれなくなった私は、つきっきりでコジ君の個人指導をすることになった。

「わかった」

寛貴はアツサリと頷き、拓弥君と一緒に2年生の校舎へ帰って行った。

教室に帰ると、悠君の姿はなかった。

やっぱり、避けられている？嫌われちゃったのかな、私。

「梨桜ちゃん、帰るの？」

麗香ちゃんに声をかけられて頷いた。

「うん」

「途中まで一緒に帰ろう？」

今まで欲しいと思っていた女子高生らしい生活。

休み時間に女友達と一緒におしゃべりしたり、駅までの道を一緒に帰ったり…

友達が視線も合わせてくれない今、楽しいはずの時間が味気なく感じる。

私、贅沢かな。

・
・
・

-
-
-

「梨桜さん？」

名前を呼ばれて顔を上げると、コジ君が私を見ていた。

「ごめんね、問題終わった？」

ノートを見ると数学の問題が解かれていた。コジ君はやればできる子、苦手意識が先に入ってしまったような気がする。

「梨桜さん、何かあったんですか？」

答案と解答集を照らし合わせているとコジ君が聞いてきた。

「どうして？いつもと変わらないよ」

「そうですか？なんだか元気がないように見えたんで…」

コジ君にまで気を遣わせて、駄目だな…

「ねえ、コジ君は友達から嘘をつかれていたらどうする？」

こんなこと、聞かれたって困る筈。わかっていたのに口をついて出ってしまった言葉に案の定、コジ君は少し眉尻を下げながら首を傾げた。

「……」

「ごめんね、気にしないで」

私が言うと、彼は言葉を選ぶようにゆっくりと話し始めた。

「シヨック、かもしれない。…でも、どうしてだろう？って考えると思います」

「ありがとう」

心配そうに私を見るコジ君に『心配しないで』と笑みを向けた。でも、彼の眼差しはやっぱり心配そうだった。

「嘘をつかれたんですか？」

採点を続けながら首を横に振った。

私が嘘をついているの。

次の日、私は試験前でピリピリとしている教室を眺めていた。

疲れたな、一人になりたい。

放課後はコジ君に教えて、学校では……

「梨桜ちゃん！この問題教えて」

ずっと学校に来ていなかった麗香ちゃんは、試験勉強に必死で取り組んでいるようで、休み時間になると参考書を持って私の席に来る。そんな中、悠君は休み時間になると教室をフラリと出て行ってしまふ。やっぱり私は避けられているらしく、目が合つと逸らされてしまふ。

「梨桜ちゃん、次はこの問題を教えて？」

「……」

私には教師は向いていないと思う。先生って大変な職業だな。

人に教える事に疲れて、自習時間に屋上へ逃げた。

連日の雨が嘘みたいに晴れていて、抜けるような青空を見上げた。特別室がある校舎の屋上。この前、担任の安達先生経由で慧君からここに通じる扉の鍵を受け取った。普段は鍵がかけられいるこの屋上には、一般の生徒は入ることが出来ないと聞いていたから、髪を解いてメガネを外した。

コンクリートの床には所々に水溜まりがあるけれど、強い日差しのおかげでほとんどが乾いていたから、床に座り足を投げ出した。

『解放感』この言葉がしっくりくる。
目を閉じて日差しを浴びるのが気持ち良い。

なんだろう…この感触。

自分の頬に当たっている固い感触。固いけど、温かいの…

あれだ、葵の膝枕みたい。

私、いつの間にか眠ってしまったんだ。それで葵に膝枕されてるんだ。

そこまで考えて納得してから、疑問が湧いた。

私、学校の屋上にいたよね？葵がこの場所にいる筈ないよね？

恐る恐る、薄く目を開けると視線の先に伸びているのは…足？

パツチリと目を開けると、そこにあるのはやっぱり足。

ズボンの色は黒。葵の制服とは違う色だった。

黒色のズボンは紫苑の制服。

それにしても、この足長いな…。

「目が覚めたか？」

その声に驚いて飛び起きて、膝枕の主の顔を見ようと振り返った。

「えっ！？いつ た」

背中を捻ったら痛みが走り、中途半端な姿勢のまま動けなくなった。痛みを堪えていると聞き慣れた声が聞こえて体を支えられた。

「落ち着けよ」

どうして寛貴がここにいるの？

青龍と朱雀 (2)

「ねえ、私、扉の鍵を締めてただけ。どうして寛貴がココにいるの？」

背中の痛みをやり過ごした私は、半ば強制的に寛貴の膝を枕にして体を横にさせられていた。

「マスターキーがあるから」

当然だ。

そんな風に言いながら、私の目の前に一本の鍵をゆらゆらと揺らして見せた。

何をそんなに偉そうに言っているの？普通じゃないでしょ。

「生徒がマスターキーを持ってるなんておかしいでしょ」

そう言ってから、もう一つの疑問が頭に浮かんだ。

どうして慧君がココの屋上に通じる鍵を持っていたんだろう？

まさか、生徒会長の権限。そんなことを言っただけで鍵を独占してたりして…？返し忘れていて、私に渡したとか…まさか、ね？

「生徒会の権限だ」

その答えに頭が痛くなった。

生徒会がマスターキーを持っても良いなんて、どんな権限よ？屋上に通じる扉の鍵を持っていた慧君がとても可愛く見えてしまう。

「女子更衣室は別なマスターキーが必要だから安心しろ」

私の沈黙に何か勘違いしたらしい寛貴が言ったけれど、私は女子更衣室を使わないから。…って、そういう問題じゃないでしょ。

「梨桜こそ、こんなところで何をしていた？どうやってここに入った？」

『叔父に鍵をもらった』なんて言ったらマズイよね？寛貴の言葉から想像すると、慧君も『生徒会の権限』でこのカギを持っていたことになるもの。

「鍵が開いてたの。天気が良くて、ブーツとしてたら寝ちゃった」

「寝ちゃった。じゃねえだろ？」

そんなこと言ったって…『一般の生徒は入ってこない』そう聞いたんだもん。そんなに不機嫌そうに言うことないじゃない？

ここに来るのはマスターキーを持っている生徒会のメンバー。それなら問題ないでしょう？

「ねえ、ここにベンチがあればいいのに　そう思わない？」

ベンチを置いてくれたらここでのんびりできる。「生徒会の権限」とやらで置いてくれないかな？

「ここで昼寝するつもりだろ」

思っていたことを言い当てられて頷いた。顔を寛貴に向けると呆れた顔で私を見下ろしている。

「入院してた時によく日光浴してたの。うたた寝するの気持ち良かったなあ」

そう言ったら、ジロリと睨まれた。

何か不味いことを言ったのだから？不安になっていると不機嫌そうに眉を顰めて言った。

「隣の校舎から見ようと思えば見れるんだぞ。その寝顔をやたらに晒すな」

その口調に思わず両手で頬を覆った。

「私の寝顔ってそんなに酷い？人様に見せられない？」

まさか！と思いつながら聞くと、寛貴は渋い顔をしながら頷いた。迷いもなく頷かれると傷つくんですケド…

「…ああ、見せられないな」

私、葵が迎えに来てくれる車の中でいつも寝てるよ？いつも愁君と桜庭さんに、見るに耐えないモノを晒してたの！？
どうしよう！？

「何を考えてる？」

葵ってば、どうして言ってくれないの？

葵の寝顔は綺麗なのに私の寝顔は見るに堪えないって、双子なのに酷いよ！不公平だよ。

「今度からどこで昼寝しよう？」

家庭科室の鍵を貸してくれるかな、その前に愁君に謝らなきゃ！
手で頬を覆ったまま言ったら

「今まで通り生徒会室でいいだろ」

その言葉に寛貴に背中を向けた。

生徒会室には行きづらくなっちゃったんだよ。

当たり前のように寛貴は言うけれど、私はあの場所においていいの
だろうか？

嘘をつき続けるというのはこんなに苦しいものだったんだ。

「梨桜？」

黙っていると、顔だけを寛貴の方に向けさせられた。

「…」

それでも黙っていると、寛貴は視線をピタリとあてた。その眼に見
つめられると、逸らせなくなってしまう。

「言いたい事があるなら言え」

言えたらどんなに楽だろう？顔を近づけると私を見据えた。

睫毛長いなあ。あ、目尻に小さなほくろがある。

整った顔を見ていたら低い声で凄まれた。

「返事位しろ」

「はい」

素直に返事をしたら、ボソリと「埒が明かねえな」と言い、私の脇に手をかけて身体を起こした。

「悠と何があった？」

至近距離でいきなり問われて、思わず視線を逸らしてしまった。

青龍と朱雀 (3)

寛貴は気がついていたんだ。って気付くよね？

「え…と、悠君は悪くないよ」

どちらかというと私が一方的に悪くて邪魔というか…どう答えたら良いのだろうか？迷いながら、寛貴を窺うと、鋭く睨まれた。

「良いとか悪いとかは聞いてない。何を言われた？」

整った顔で睨まれると怖いよ。

視線を逸らそうと思っただけ、頬を両手で押さえられて叶わなかった。

目線で『言え』と凄まれて仕方なく口を開いた。

「悠君は私の事を心配してくれたの」

心配してくれていることには感謝したいと思うの。私が悠君の望みに応えられないだけ。

彼に『心配しないで、葵は私を傷つけないから大丈夫』そう言っただけ理由を言えたらいいのに…

「わかるように言え」

要領を得ていない私の答えに寛貴は眉を顰めた。だから、その整った顔で凄まれると怖いんです。

「危険だから東青と親しくしないで欲しいって」

寛貴もそう思ってるの？そう聞こうとしたら、寛貴は後ろを振り向いた。

「梨桜、じっとしてるよ」

何が？と聞こうとしたら私は寛貴の腕の中にいた。

確か前にもこんなことがあった：あの時はバカみたいに私一人がドキドキして、寛貴は平然としていた。

きつと今回も同じ。そうだよな？

平静を保とうと、気づかれないように呼吸を整えた。

「いいな？何も話すな」

これから誰か来るのだろうかと考えていると、足音が聞こえて大きな声が響いた。

「寛貴さん！」

屋上に響いたのは悠君の声だった。

彼の視界に入らないように寛貴を盾に身を小さくしようとしたら、背中に回された腕に力がこもった。

「寛貴さん、校舎の中を捜したけど、どこにもいな…」

私を見つけたらしい悠君の言葉が途中で途切れた。

「悪い、見つけたって連絡するの忘れた」

寛貴は笑いを含んだ声で言い、私の背中を撫でた。

『捜した』『見つけた』って、私って捜されてたの？寛貴の顔を見ようとしたら頭をぎゅっと抱き寄せられた。

「悠さん、うわっ！すみません」

強く抱き込まれている状態が息苦しくて、もがいていると、とても焦った声が聞こえた。

誰だろう？と思っていると、寛貴が小さく笑った。

「またおまえか、邪魔するの好きだな」

あの時は飛澤章吾が入ってきた。また、っていう事は今日も彼が入ってきたの？

「あのっ…寛貴さん、スミマセン!!」

焦っている様子が気の毒になってしまった。彼が謝る必要はないのに…

「…3回目もあるかもな？」

こんなの、またあつたらたまらない。窒息するから！

腕の中で憤慨していると、寛貴は笑いながら言った。

「ないです！もう邪魔しません！悠さん、早く行きましょう!」

「悪かったな悠」

「寛貴さん、先に行ってる」

焦っているらしい飛澤章吾はバタバタと屋上から出て行き、その後
に悠君の足音がついていった。

「…もういいでしょ？離して」

少しだけ腕の力が緩められたけれど、解放はしてくれなかった。

「早く言え」

まだ納得してないの？

話が続いていた事にガツカリしたけれど、この際だから言う事に
した。

「私がこの学校の生徒会に所属しているだけで他のチームから狙わ
れるとか、守られるとか　そういうのは嫌なの」

「それはオレが決める事だ。生徒会に入れたオレが言ってるんだ。
大人しく守られてればいいだろ」

寛貴の腕の中で首を横に振った。
言えなくてごめんね。

「私にそんな価値はないよ。…話したんだからもういいでしょ？」

寛貴の胸に手をついて身体を離そうとしたけれど腕を解いてくれな
かった。

「寛貴、いい加減にして」

顔を見上げると、抵抗している私を見て目を細めた。

「梨桜、調べる事はできる。でも、オレはお前の口から聞きたい。そうじゃなければ意味がない」

寛貴は何を知っているの？何を考えているの？

青龍と朱雀 (4)

「寛貴？」

寛貴を見上げると、私を見つめている黒い瞳があった。

「おまえは細いな。もっと食べよ」

笑いながら私の頭に自分の頬を寄せている。

まるで、恋人同士が抱き合っているようなこの態勢が凄く恥ずかしい。

「食べてるよ」

涼先生も葵も『もっと食べる』いつもそう言うからなるべく食べるようにしている。

でも、思うように体重が増えないんだよ。

「あんまり細いと抱き心地が悪いぞ」

気にしていることを言われてカッとなって顔をあげた。

「なっ……」

失礼な！大きなお世話だよ！！

何のツボに嵌っているのか分からないけど、笑うのを止めないから脇腹を抓ってやった。

「イテエ。」

梨桜、青龍と朱雀が争うのはイヤだよな？」

突然話題を変えた寛貴の顔を見て、即答した。

「イヤ」

聞かれるまでもない。嫌に決まっている。

「オレも宮野も争うつもりはない。下が暴走しても抑える。今までもそうしてきたし、これからも変わらない」

仲が悪いのに？

だったら最初から仲良くすればいいのに。

「仲が悪いのに定例会を開いたり、衝突しないように抑えたり…良く解らない関係だね」

率直な疑問を口にしたら、寛貴は意外そうな顔をして私を見ていた。

「知らないのか？」

「何が？」

「青龍と朱雀ができた経緯」

知らない。そんなの葵から聞いたことない。

「どうして朱雀と青龍か。考えた事あるか？」

首を横に振った。

「でも、“朱雀と青龍”それは知ってる。中国の古代星座で東と南を守護する『四神獣』でしょ？」

「ああ、東方青龍、南方朱雀。天に四方があるならその中心は？」

その言葉に首を傾げた。

北方は玄武、西方は白虎：中央？

「天の北極を中心とした天帝の在所、“紫垣”」

「シエン？」

寛貴は私の掌に、“紫”と“垣”と書いた。

“垣”と書いて「エン」って読むんだ。

「他の呼び名もいくつかあるけど『紫垣』それが始まりのチームだ」

そこまで聞いて、頭の中が???だらけになった。
始まりのチーム？

「どついうこと？」

「朱雀と青龍は紫垣という一つのチームだった」

そこまで言っただけで寛貴は笑い出した。

「梨桜、そんなに驚くことか？」

目が真ん丸になってるぞ。寛貴はそう言って笑っていた。

そんなことを聞かされたら驚くよ！元々一つのチームだったなんて

考えもしなかった。

「知らなかった。どうして別れたの？」

葵も愁君も教えてくれなかった。

元が同じチームならこんな気に使って私と葵の関係を隠す必要はないんじゃないの？

どうしてダメなの？

「オレと宮野から数えて3代前に分裂した。理由は人数が多くなったことと、所属する学校の対立が目立ってきたから。それが主な理由だって聞いている。細かく言えばもっと理由はあるんだろうな……」

今でも“東青”と“紫苑”は偏差値で比べられることが多い。先生が模試の結果を話す時も『ウチと比べて今回の東青は……』そんな言葉をよく聞く。

「張り合ってるのにどうして定例会を開いているの？」

「紫垣の5代目だった人が今のルールを決めた。『争うな、衝突させるな』ギリギリのところまで均衡を保ってる」

「紫苑と東青だから張り合うの？もしもその、5代目の人が争ってもいい。って言ったらどうなるの、寛貴は喧嘩するの？」

「オレ達は、初代と5代目の言う事には逆らえない。でも……」

寛貴の携帯が鳴り響いた。

彼は私から体を離し、立ち上がると電話に出て話し始めた。

彼が教えてくれたことは凄く驚いた。
どうして葵も愁君も教えてくれなかったんだろつか？

『争うな』そう言われているのなら、葵が一言、寛貴に『梨桜はオレの双子の姉だ。手を出すな』ってそう言えば済むことじゃないの？
そこまで考えてムカムカと腹が立ってきた。

そうよ、最初から寛貴に事情を話せば済むじゃない。そうすれば、私は目も悪くないのにメガネをかけたたり、面倒な変装をしなくても済んだんじゃない？

これは、一言、キッチリと葵に文句を言わないと気が済まない！
こんなところで寝てる場合じゃない。

私も立ち上がり、スカートの汚れを払った。

「寛貴！帰るね」

そう言つと、会話を続けながら私に振り返った。

寛貴に手を振ると、彼は会話を終わらせて首を横に振った。

「送る」

「悠君に気を使わせると悪いから今日は一人で帰る」

そう言つと、腕を掴まれて寛貴の方に引き寄せられた。

「お前が、“争わないで”そう言ったら考えないでもない。そう言ったら、どうする？」

「え？」

「まあ、宮野次第だろうけどな。梨桜、気を付けて帰れよ」

寛貴の腕が離れて、屋上を後にした。

教室に戻り、荷物を取って昇降口に向かうと、意外な人が壁に寄りかかってこちらを見ていた。

「帰るの？」

「うん」

室内履きの靴を下駄箱に入れて靴に手をかけると、拓弥君は壁に寄りかかっていた身体を起こした。

「捜されてた事、分かった？」

「知らなかった。でも、寛貴と悠君の会話でなんとなくわかったよ」

ふうん、と興味が無さそうに返事をすると、私の頭の上に手をついて、自分の顔を近づけてきた。
ちよつと 近すぎる。

「逃げるんだ？」

そう言って、口角を上げて笑うと、ズボンのポケットに入れていた手を取り出し、その手も私の頭の上に手をついた。

背中に下駄箱、右と左には腕、正面には笑顔だけど、目が笑ってい

ないチャラ男。

「帰りたいの」

この距離、イヤ。近すぎる…

「悠が複雑な顔してたけど…寛貴となんかあった？」

形の良い唇がゆっくりと弧を描いた。

「特には…ない、と思う」

拓弥君は私の事をあまり良く思っていない。何故そう思うのかは自分でも分からないけど、そう思う。

「へえ、何も無い割には章吾が真っ赤な顔をしてたな。宮野といい、寛貴といい…：梨桜ちゃんって」

私の耳元に唇を寄せて「無自覚？」そう言ってクスリと笑った。

「拓弥君、帰りたいの。通してくれる？」

拓弥君は私に視線を合わせて逸らしてくれなかった。

見つめあう、そんな甘いモノじゃなかった。探るような視線に、私は睨み返すように応えた。

「…悠には荷が重いな。寛貴はオレの連れだし、悠は可愛い後輩なんだよね」

だから何？暗に『オレ達を振り回すな』とでも言いたいの？

私を強引に生徒会に入れたのは貴方の大事なお友達でしょう？

「私はいつでも生徒会を辞めてもいいと思ってるから。寛貴にそう伝えてくれて構わない」

「それは寛貴が許さないだろ。…だから困るんだよな」

困ってるのは私も同じ。

「私、約束があるから帰りたいんだけど？」

拓弥君の腕を払うように退けると、あっさりと腕を下げた。

「梨桜ちゃん、またな」

さっきまでの力才が嘘みたいにチャラ男に戻った拓弥君はニコニコ笑いながら手を振った。

「さよなら」

それだけ言って、その場を後にした。

何だったんだろう？わざわざそれだけを言ったために待ってたの？

青龍と朱雀 (5)

どんな時でも、桜庭さんは私を迎えに来てくれるとニッコリと笑って出迎えてくれる。

「お帰りなさい、梨桜さん」

今日も安心する笑顔と快適な空間で迎えに来てくれたから、私も笑みを返した。

「ただいま、桜庭さん」

安心、快適。とは正反対なオーラを醸し出して後部座席に座っている葵と目が合ったけれど、ツン！と逸らした。

どうしてこんなに大事なことを教えてくれなかったの！？私、怒ってるんだからね。

「…」

明らかに機嫌の悪い私を、愁君もコジ君もハラハラとしたように見ているけれど、葵は特に気にすることもなくいつも通りだった。

青龍のチームハウスについて、幹部室に入ると私はソファに座る葵の目の前に立った。

いつも見下ろされているから尋問する時くらい見下ろしてやる！と思うって見下ろしたのに、私を見上げる葵が格好良すぎて、思わず怯みそうになった。

「葵、私に隠してるってことあるよね？」

気を取り直して言うと、葵は一瞬目を泳がせたけれどすぐに私を見てニヤリと笑った。

「ありすぎるな」

ふてぶてしい！

キツと睨むと、私の顔を見て鼻で笑った。何よ葵のくせに！！

「何がおかしいのよ!?!」

「今更なことにムキになってるから」

腹が立ったから葵の肩に手をかけて、そのまま体重をかけるようにして押し倒して襟元に手をかけた。

「どうして教えてくれなかったの？」

片膝をソファについて、葵を真上から見下ろして問い詰めた。

葵の答えによつてはこのまま首を絞めてやる！

「何が？」

「紫垣」

一瞬だけど、葵の表情が固まった。

その表情は、私に隠してたっていうことだよな？

「話したからって、どうにかなると思うのか？お前の事だから、仲良くして」とか言い出すんだろ？」

淡々と話す葵の表情を見て襟元を握っている手の力が緩んだ。そんな顔、見たくないよ。

「どうして？」

「…きつかけなんか知らねえ。元々反りが合わないんだから仕方ないだろ。それよりも誰からその話を聞いた？」

冷たい表情。

葵だけど葵じゃない。こんなに冷めた表情をした葵は嫌だ。

「誰から聞いた。藤島か？　　- 梨桜、答える」

目を細めて私の反応を確かめている。

寛貴の言葉を思い出した『お前が、“争わないで” そう言ったら考えないでもない。　　そう言ったら、どうする？』

「梨桜」

『宮野次第』寛貴はそう言ったけれどこの顔を見る限り、歩み寄るなんて無理そうだね。

私が答えないまましていると葵は私の手首を掴み、自分の半身を起しました。

「梨桜、この前から何を引きずってんだよ」

ソファに立ち膝になっている私は、体を起こした葵に見上げられて

いる。

このまま視線を合わせていたら何を考えているか見抜かれてしまう。葵から目を逸らして、ソファから降りようとすると

「最近、様子がおかしいだろ。分からないとでも思ってるのか？」

手首を掴んでいる手に力が入り、ぐいっと引き寄せられた私は葵の膝の上にペタン、と座り込んでしまった。

「梨桜、言わないなら無理矢理聞くけど。どうする？」

いつも通り、私が葵を見上げる格好になってしまった。私を見下ろす葵は、口角だけを上げて笑っている。

自分は私に対して秘密がたくさんあるのに、私が秘密を持つのはイヤ。

そんなの狡い。

昔は何でも私に話してくれたのに、今は違う。それが寂しい。

「誰に聞けばいい？藤島か」

葵の表情は冴え冴えとしていて、見ている方がゾツとしてしまう。

寛貴の名前を出されても私は無表情を通せたと思う。そんな私に葵はまた笑いながら名前を挙げた。

「大橋。…そんなワケないよな」

クスリ、と笑いながら葵は私の顔を覗き込んだ。

きつと最初から見当がついているクセにわざとそんな言い方をして

いるんだ。

意地悪。

「海堂」

私、情けない顔をしてる。それを隠したかったから葵の肩に額をつけた。

「何を言われたんだよ」

額をつけたまま首を横に振ると、手首を掴んでいた手は私の頭を撫でた。

「苦しいんだろ？早く言え」

葵の声が柔らかくなった。それでも首を横に振ると耳元で「ぎゅっ
てしてやるから、さっさと吐いて楽になれ」そう言われて、つい口
に出してしまった。

「嘘をついているのが苦しいの」

青龍と朱雀 (6)

葵の腕の中は温かくて安心するの。

「他には何を言われた？」

それは言いたくない。『葵達が私を利用するかもしれない』悠君に
そう思われていることが悲しい。

「梨桜、黙っていたらわからない」

私が安心できるように背中を撫でながら聞く葵に答えることはでき
なかつた。

できることなら悠君に今の葵を見せてあげたい。『葵は優しいんだ
よ、悠君が心配しているようなことは絶対に起きないから大丈夫だ
よ』そう言いたい。

「海堂から、『葵やオレ達と親しくするな』とでも言われた？」

葵と私のやり取りを静観していた愁君が、突然言い当てた。

「愁君？」

顔を上げると、愁君は穏やかな笑みを浮かべていた。

どうして分かるの？愁君には何が見えているの？

答えを求めて葵を見ると、「おまえが単純で分かりやすいんだろう
な」と憎たらしいことを言った。

さっきまで凄く優しくかったのに！どうしてすぐに意地悪になるの！？

「このタルトは美味しいから、一緒に食べようと思って買って来たんだ」

愁君はそう言いながら、フルーツタルトを出してくれた。「葵の上から降りて一緒に食べよう？」そう言われて私は愁君とコジ君の前だった事を思い出して、慌てて葵の膝の上から降りた。

「梨桜ちゃんと葵の喧嘩っていつもそんな感じなの？」

愁君に笑われてしまい、笑ってごまかした。

場所を考えるべきだった。愁君とコジ君に恥ずかしいところを見せってしまった。

「愁君は？涼先生と兄弟喧嘩するの？」

「兄貴とは年が離れているから昔は喧嘩にならなかったよ。でも、怒られる時は拳が飛んできたな。兄貴、今は落ち着いたけど昔は口よりも手が早かったから」

話を逸らしたくて聞いたただけなんだけど、意外な涼先生を知ってしまった。

いつも大人で優しいのに、口より手も早い涼先生なんて意外で想像できない。

人って見かけによらないんだ。

「あの人は今もだろ…」

隣に座る葵は渋い顔をしながら、コジ君が持ってきてくれたコーヒを飲んでいた。

私が「食べる？」と聞くと「苺」と言い、フォークに苺を刺して口元に運んであげると、パクリと食べた。

「愁君、このタルト美味しい。ありがとう」

愁君が買って来てくれるケーキはいつも美味しい。どこでお店を調べてるんだろう？今度愁君とスイーツ巡りしてみたいな。

「どういたしまして。葵とはもう仲直りしたの？」

「こんなの喧嘩じゃないだろ」

葵は私の手からフォークを奪い、苺にぶすりと突き刺した。ダメだよ。私だって苺が食べたいんだから！

「それはダメ！葵はオレンジ」

葵は小さく舌打ちして、自分が持っていたフォークを私の口元に運んだ。葵に奪われそうになった苺を食べると葵が素直にオレンジを食べた。

変なところに素直で笑ってしまった。

「葵も新しいのを食べればいいだろ？」

愁君が呆れ顔で言い、葵は「下はいらない」と言った。

葵が食べられるのはケーキの上に飾り付けられているフルーツだけ。美味しいクリームとタルト生地は私が担当なの。

「おまえって、我儘だよな。梨桜ちゃんに買ったタルトなのに、一番美味しいところだけ食いやがって」

葵は聞こえないフリをして桃とクリームを取り、私の口に入れた。うん、このタルト生地が美味しい！

満足しながら口を動かしていると愁君が私を見て笑っていた。

「梨桜ちゃんに紫垣の事を教えたのは藤島？」

葵が差し出したタルト生地とクリームを口に入れた時にいきなり聞かれた。

このタイミングって愁君らしいといつかなんとといつか……。動揺がバレてしまったらしく、愁君は私の顔を見て頷いた。

「確かに朱雀と青龍は同じチームだった。だから張り合う気持ちも大きい」

慌てて口に入っていたタルトを飲み込んだ。

「争うな。そう言われているんでしょ？」

「まあね。だから梨桜ちゃんが心配しているようなコトは起こらないと思うよ。オレ達も抑えるし、藤島も抑えるハズだよ」

愁君も寛貴と同じことを言うね。だったら最初から衝突しないようにすればいいと思うのに。

「だからって馴れ合うつもりはない」

私の考えていることが分かったのか、葵はそう言つと最後の苺を食べてしまい、フォークを私に返すとソファに深く座って足を組んだ。

「梨桜ちゃんが海堂に対して罪悪感を感じてしまうのは友達として？」

頷いてカフェオレを一口飲んだ。

「悠君は私を心配してくれているの。だから」

「海堂の心配は取越苦労。いつそのこと本当の事を言ってしまったい。梨桜ちゃんはそう思ってるんだよね」

愁君の言葉に頷いた。

私が言いたかったことを的確に理解してくれている愁君でやっぱり凄いな。どうしてこんなに理解してくれるんだろっ？

「争うなって言われているんでしょう？私と葵が双子だって言えば……」

「もういいから、黙って食べ」

葵に残っていたタルトを口に入れられてしまった。

「梨桜、いいから言うとおりにしてろ」

美味しいけれど納得が行かない。相変わらず横暴なんだから……

「梨桜ちゃん、もう少し我慢して欲しいんだ。勝手なことを言っ
てごめんね」

先に愁君に謝られるとイヤって言えなくなってしまう。愁君も葵もずるいんだから……

隣に座る葵にズルズルと体重を預けて寄りかかった。何を言っても横暴な言葉が返って来るなら嫌がらせをしてやる。

「重いだろ」

文句を言う葵を無視して愁君に話しかけた。

「どうしたら悠君に分かってもらえるだろう？」

「今は感情的になっていいると思うから、落ち着いて考えられるようになるまで待った方がいいんじゃないかな？今は何を言っても聞き入れないと思うよ」

愁君の言葉に頷いた。

悠君から感じたのは、拒絶されているんじゃないかと思うような冷たい視線。

もう少し落ち着いたら前のように話してくれるといいな。

物憂い (1)

昨日は青龍のチームハウスで愁君に宿められて、それからコジ君の勉強を見てあげたら家に帰ったのがすっかり夜中になってしまった。

だから。というわけじゃないけれど久しぶりに寝坊した。

目覚ましも止めて寝ていたようで、葵に起こされて時間を見て凄く焦った。

「東堂さんが学食なんて珍しいね」

「寝坊してお弁当作れなかったの」

お昼休みに食堂に来ると、男子生徒の多さに圧倒される。

ホントに男ばかり……。この光景に食欲を無くすのは私だけ？

げんなりしながら、食券を売っている自動販売機に並ぼうとすると、隣にいる小橋さんが一生懸命に手を振っていた。

小橋さんのキラキラした視線の先には、手を振り返している男子生徒がいる。

「麗香ちゃん、あの人、誰？」

小さな声で麗香ちゃんに聞いたら笑いながら教えてくれた。

「あの人小橋さんの彼氏のユキヤ先輩だよ。ケーキ作るの手伝ったでしょう？」

もう一度小橋さんの視線の先を見ると、まだ手を振っているユキヤ先輩がいた。制服を少し着崩している彼が少しだけ軽そうに見えるのは気のせいかな？

女の子専門の拓弥君ほどじゃないけどね…

「ケーキか、そういえば手伝ったねえ」

思えばあの日の定例会から悠君とぎくしゃくし始めたんだよね。今日も悠君と会話らしい会話をしてないなあ。

愁君は落ち着いたら、って言っていたけどホントに落ち着くんかどうか？

「あのね、ユキヤ先輩が席をとっててくれるって」

ありがたい申し出に私は頷いた。こんなに混んでいる食堂で女の子だけで座れる席なんて無いに等しい。

面識の無い男の人と同じ席で食べるなら、知っている人と同じ席で食べる方がいい。

「ありがとう」

小橋さんにお礼を言った時、携帯が震えた。誰だろう？

ディスプレイを見ると電話の着信で、彼の顔を思い出したら笑みが浮かんだ。

「ごめんね、電話してくる」

「梨桜ちゃんは何を食べるの？」

通話ボタンを押して携帯を耳にあてた。

「きつねうどんをお願いしてもいい？」

麗香ちゃんと小橋さんに手を振って、食券を買う列から抜けた。

『おい、オレはきつねうどんじゃないぞ』

笑いながらそう言う相手に私も笑ってしまった。

「ごめんね、タカちゃん」

『おっ』

相変わらず元気な声だね。彼は仲が良かった中学の同級生。食堂から出て、人通りが少ない階段の踊り場で話をした。

「久しぶりだね、元気だった？」

『あつたり前だろ。おまえはどうなんだよ、調子戻ったか？』

怪我をして入院している時も頻繁にお見舞いに来てくれた。明るいタカちゃんと仲良しの彼女が励ましてくれたから、辛い入院生活を乗り切れたような気がする。

『なに笑ってんだよ』

「ん、思い出し笑い」

タカちゃんの彼女とは私も仲が良いけど、いつも彼女に押されてい

る彼が可愛くて、見ていて面白かった。

「あれ、梨桜ちゃん？」

呼ばれて振り返ると、寛貴と遙君がこちらを見ていた。悠君と目が合つと、ふいつと逸らされた。

『…？、東堂、聞いているのかよ』

タカちゃんに呼ばれて慌てて返事をした。

「ごめん、タカちゃん。なに？もう一回言ってくれろ？」

寛貴達に手を振ると、寛貴に『今日は学食か？』と聞かれ、頷いて返事をした。

『早く来ないと席が無くなるぞ』と拓弥君に言われて手を振って返事をして、タカちゃん

との会話を続けた。

『あのさ、言いたくないならいいんだけど、聞いていいか？』

急に声のトーンを落とした彼に、私の口元に浮かんでいた笑みが消えた。

「うん」

何が言いたいのかわかってしまった。

多分、あのことだよな？

『東堂、アイツに何も言っていないのか？』

予想通りの質問だけど答えられなかった。唇を噛んで、どう返せばいいか考えていると彼の方が先に話し始めた。

『黙ってる。ってことはそうなんだな？』

「うめん」

タカちゃんは優しい声で宥めるように言ってくれた。

『勘違いするなよ？オレは責めてないからな』

その言葉に救われるような気持ちになる。

「うん」

『携帯のアドレスを聞かれてさ…オレは教えなかったんだけど同じクラスだった奴が教えたらしくてさ』

そうだったんだ。

「うん、多分そうかな？っていうメールは来たよ」

自分の言いたいことだけを告げた短い文章のメール。
あれ以来メールが届いていないけど、心の中で、また来たらどうしよう？っていう気持ちはある。

『大丈夫か？』

心配そうなタカちゃんに、大丈夫だよ。と答えると心配そうに『強

がりじゃないだろうな』と言われた。

「大丈夫だよ、タカちゃん。東京と北海道だよ？…でも、何か聞かなくても教えないで欲しいな。お願いしてもいい？」

『任せとけ、お前に何かあったらオレが円香にどやされるからな』
姉御肌の円香ちゃんがタカちゃんを叱ってる姿を思い出して、笑ってしまった。

『じゃあな、東堂』

「うん。ありがとね」

笑って電話を切ったけれど、最後の言葉に気分が沈んだ。

…どうしてこんなに重なるの？
イライラする。

どうしようもなくイライラする…

「…」

急に思いついて、携帯のアドレス帳から番号を呼び出した。

『どっしたの？』

いきなり電話をしたのに王子様な愁君は、いつも通りの優しい声で聞いてくれた。

「今日の放課後に髪を切りに行きたいの。行ってきてもいい？」

『勿論いいよ。迎えに行かせるから終わったら教えて？』

「うん、ありがとう。アレにも伝えてくれると嬉しいな」

ここで葵の名前を出すのはまずいから、“アレ”で誤魔化すと愁君はクスクスと笑っていた。

『オレから葵に言うの？きつと拗ねるよ』

葵に言ったら自分の好みを押し付けてくるから、できれば内緒で行きたい。

だから、愁君だけが頼りなの。上手く葵を言いくるめられるのは愁君くらいだよ？

「お願い！だつてうるさいんだもん」

そう言ったら、電話の向こうで大笑いしていた。

笑い事じゃないんだよ、愁君！

「愁君？」

いつまでも笑っている愁君に、私にできる精一杯の威厳を込めて「ねえ？私は本気なんだけど」と言うと、やっと笑いを止めた。

『ごめん。…そうだよ。…いいよ。葵にはオレから伝えておくから。可愛くなっておいで』

少し笑いを含んだ声で言う愁君に「ありがとう」と言って電話を切った。

可愛い云々は別として、少し気分転換をしたいんだ。

物憂い (2)

電話を切って食堂に戻ると、麗香ちゃんが私を見つけて手を振った。

「何で…」

小橋さんの彼が席を取っていてくれると思ったら、麗香ちゃんは寛貴達の席についていた。肝心の小橋さんは、少し離れた席で彼と一緒にご飯を食べていた。

「梨桜ちゃんのきつねうどん持ってきたよ？」

「ありがとう」

麗香ちゃんの隣に座り、割り箸を割った。

寛貴達とご飯を食べるので、凄く注目を浴びている。麗香ちゃんは平気なのだろうか？私はとても居心地が悪い。

私の正面に寛貴が座り、斜め前に拓弥君が座っていた。悠君はその隣に座っていてこちらを見ようとしなかった。

今日のお昼は居心地が悪いだけではなく、消化にも悪い。

早く食べ終えて、教室に帰ろうと思っているのに、うどんの湯気でメガネが曇って食べ辛い。

メガネって不便！

曇りを拭きとろうとしてメガネに手をかけると、寛貴に名前を呼ばれた。

「え？」

顔を上げると、怖い顔をして私を睨んでいた。

「寛貴、怖いよ…」

そんな顔されたら食べられないでしょう？麗香ちゃんが怖がるから止めてよ。

「いつも言ってるだろ」

だから、怖いって…

寛貴の隣で拓弥君が笑いながら自分のこめかみをトントンと軽く叩いてジエスチャーをして教えてくれた。

あ、メガネを外すなっってこと？

「食べるににくい」

「文句言っな」

凄まれて、仕方なく私は眼鏡をかけたままうどんを食べ続けた。早く食べてこの席を立ちたかった。

「梨桜ちゃんの携帯じゃない？」

うどんを食べ終えて、お水を飲んでみると麗香ちゃんが教えてくれた。

葵用に設定した着信を知らせるブルーのライトが点滅していた。携帯を開くと…

『何で愁に伝言頼むんだよ？オレに言えばいいだろ』いきなり、文句のメール。

愁君の言った通り拗ねているんだろつか…大人になってもこのままだったらどうしよう？

『髪を切って来るね』

今更だと思っただけけれど、メールで送った。

「ごちそう様でした」

「梨桜ちゃん、ちょっと待っててね？」

まだ食べ終わらない麗香ちゃんが言い、食べ終わるのを待っているとまたメールが届いた。

『今更なんだよ、バカ。短く切りすぎるなよ、カラーリングもするな』

美容室に行くことは許してくれるんだ。でもやっぱり煩い。

私と葵の髪の毛の色と瞳の色は同じ色。だから、葵と双子なのを隠すならカラーリングして髪の色を変えた方がいいような気もするんだけど、葵はそうは思わないらしい。

『うん、わかった』と返信を送り、もう一口水を飲んだ。

髪をストレートにしたいんだよね。でも、この事は黙っておこう。葵を驚かせてやるんだ。

「梨桜ちゃん、どうしたの？」

「ん？」

葵や愁君達がどんな顔をするのだろうか？想像してにんまり笑っている、麗香ちゃんに顔を覗き込まれた。

「楽しそうだね」

「ふふっ、あ…弟を驚かせようと思ってね」

思わず“葵”と言いそうになって慌てて言い直して、麗香ちゃんを手招きした。

「なあに？」

耳元で『気分転換に美容室に行つて来るね』と囁くと、麗香ちゃんから『お奨めのお店を教えてあげるね』と囁き返されて、二人でクスクスと笑った。

「梨桜ちゃんの弟君ってどんな子？」

麗香ちゃんの言葉に首を捻った。

どんな子って、ホントは麗香ちゃんと会ってるんだけどね。どう言ったらいいだろう？

「…生意気。かな」

他にも葵を形容する言葉はいくつもある。

男の子なのに綺麗な顔をしていて、喧嘩が強くて、冷たく見えるけど面倒見が良くて、優しいけどオレ様で意地悪。それから…

「写メある？」

写メは…あるけど、見せられない。

視線を感じて、向かいの席を見ると拓弥君が笑っていた。

「梨桜ちゃんの弟の名前は？」

言えない、言える訳がないよ。

拓弥君に向かってニッコリと笑い返した。

「…ナイシヨ」

「なんだよ、高校に入学したら可愛がってやるのに。今、何年生？」

拓弥君の言葉に顔が引き攣りそうになった。“可愛がる”って、拓弥君のソレは想像すると怖いから。

葵を可愛がる拓弥君。…間違いなく、葵の手と足が出て喧嘩になるんだろうな。

「それもナイシヨ」

そう言うと、寛貴がフツと笑って目線だけを私に向けて言った。

「ブラコン。別におまえの弟を朱雀に入れるつもりはない」

ブラコンという言葉聞いて思い出した。私ってブラコンだと思われているんだった。そう思われているのも葵が過保護すぎるせい。

「お願いしますね、藤島センパイ。可愛い弟なんです。麗香ちゃん、教室に戻ろっか」

藤島先輩。そう呼ぶと寛貴は嫌そうに眉を顰めた。麗香ちゃんは寛貴と私を見てハラハラしていたけれど、構わずに席を立った。

「梨桜、試験が終わったら生徒会に来いよ」

急に寛貴に言われて、振り返った。

この前屋上で私が言った事を覚えていないのだろうか？

「この前、話したと思うんだけど？」

生徒会には行きにくいって言ったよね、忘れたの？

私の言葉を聞いて、寛貴は口角だけを上げて笑った。

「聞いたな。でも、『それはオレが決める事だ』そう言っただろ？

オレが来いと言っているんだから、来い」

その言葉を聞いて悠君を見ると彼は寛貴を見ていた。

寛貴の言葉を聞いて、彼はなんて思ったのだろうか？

「梨桜、返事は？」

返事を促す寛貴と彼を見ながらニヤリと笑った拓弥君。

拓弥君だって私が生徒会に関わることを良しと思っていないのに。

その事も寛貴に伝えた方がいいのだろうか？

「梨桜？」

もう一度返事を促されて、私は頷いた。

拓弥君の事を話をするとしても、一度生徒会には顔を出した方が良

いのだろつ。

「わかりました」

物憂い (3) side…「ジ

「拗ねんなよ」

愁さんが煙草を銜えながら葵さんを宥めているが、葵さんは愁さんを見て渋い顔をしている。

「葵、おまえってホント可愛いよな」

この青龍の中で誰も頭が上がらない、敵わない人に向かって“可愛い”ある意味暴言のような言葉を投げかけるなんて…傍にいる方が怖い。

オレが固まっていると、梨桜さんが『王子様みたい』という笑顔で葵さんをからかった。

案の定、愁さんに向かって足が飛んできた。

「あつぶねーな」

笑いながら避ける愁さん。この人に怖いものはないのだろうか？

「避けてんじゃねえよ」

この人の蹴りをまともに食らったら、無事じゃすまない。それを分かっている無茶なことを言う葵さん。

「梨桜ちゃんだって息抜きしたいだろ？髪を切るくらい自由にさせてやれよ」

「だからってなんでオレじゃなくて愁に許可を取るんだよ？普通は

オレだろ」

梨桜さんが愁さんに電話を掛けてきて、『美容室に行っていていい？』そう聞いたのを根に持っている。

「一人で出歩かせたら危ないだろ」

「朱雀のシマは藤島がいるから大丈夫だろ」

オレには、藤島は梨桜さんを大切にしているように見える。きつと愁さんにもそう見えているからの発言なんだろうけれど、愁さんの言葉にムツとしている葵さん。

ホントに朱雀とは仲が悪いというか…どうしても認めたくないらしい。

「それに、梨桜ちゃんが狙われる羽目になったのは誰のせいかわかって言ってるのか？」

その言葉に聞こえないフリをしてそっぽを向く葵さん。確かにこういうところは可愛いのかも知れない。

梨桜さんが注目されて狙われる原因を作ったのは葵さんと藤島だと思う。

北陵の生徒から売られたケンカを買った梨桜さん。偵察していた奴から聞いた話では、友達の為に、むさ苦しい北陵の男を相手に言い負かしたらしい。“男前な性格に惚れたっす”奴はそう言っていた。

キレて絡んできた男から梨桜さんを助けようとして、葵さんと藤島は鉢合わせて…

あろうことか、敵チームの前で互いに『梨花はオレのものだ』とぶちまけた。

とりあえずその場にいたのは雑魚だったので総長2人で軽く掃除してきたらしいが、大変だったのはその後で…

梨花さんの存在が広まり、朱雀と青龍の総長が取り合う女として梨花さんは敵チームから狙われる事になった。

梨花さんにはその事実は伏せられているけれど、彼女には見張りがつけられて護られている。

常に傍にいて、周囲に目を光らせることができればいいけど、梨花さんの通う学校は朱雀の幹部がいる学校。

葵さんがピリピリする気持ちも分からなくはないけれど…梨花さんが気分転換をしたくなる気持ちも分からないでもない。

「そつだ。コジ、今日の勉強はオレがみてやるよ」

「へっ?」

急に話を振られ、間抜けな声を出してしまった。

愁さんがオレの試験勉強をみるのか!?

「いえ、…大丈夫です」

この人に教えられたら、体がいくつあっても足りない。オレは優しい梨花さんから教わりたい!!

「オレじゃ不満か?」

煙草を銜えながら目を細めて聞く愁さんは、梨花さんが好きな王子

様から、腹が真っ黒な冷たい王子に豹変している。

「いえっ」

ここで不満そうな顔をしたら、どんな報復が待っているか分からない。この人は危険すぎる。

葵さんも危険な人だけど、タイプが違う。

「だよな？毎日梨桜ちゃんに教えてもらってるんだ。今回の成績は相当上がるはずだよな」

梨桜さんはつきつきりでオレに勉強を教えてくれていたからそれを言われると何も言えない。

「梨桜の力才を立ててやるよな？」

葵さんにまで言われて、顔が青ざめるような気がした。

「もちろん、平均点以上は大丈夫だよな」

成績が上がらなかつたら、夏休みにチームに出入り禁止になるだけじゃなく、この二人に沈められるんじゃないだろうか…

怖い、怖すぎる。

恐怖で言葉が出ないオレに、葵さんはオレを見てニヤリと笑った。

「コジ、模擬試験をやってみるよ。できなかったところを教えてやる」

梨桜さん！早く帰ってきて下さいっ！！

オレ、体がもちません！！

物憂い (4) side:「ジ

もう駄目だ。このままじゃオレの額が割れる…

数学の問題を解きながら、間違える度にどつかれている。

梨桜さん、何してるんですか？美容室ってそんなに時間がかかるんですかっ!？

「他のこと考えてんじゃねーよ」

「イデッ」

またどつかれた。葵さんの馬鹿力…

梨桜さんが勉強を聞いているときは優しく教えてやってるクセに、オレの時はスパルタすぎる。

力尽きて、床に倒れこみそうになっている時に、扉がノックされた。

「すみません、失礼します」

情報担当が部屋に入ってきた。

「何だ？」

ソイツはオレを見ていたけれど、葵さんに声をかけられてオレから葵さんへと視線を移した。

何か良くない事があったのだろうか？

「小嶋さん、葵さんに教わってるんすか？」

学校では上級生の情報担当は躊躇いがちにオレに聞いてきた。オレはチームの幹部。青龍の幹部が勉強を教わっている姿なんて本当は見られたくない。

「ああ、コジはいつも梨桜ちゃんに教わっているんだけど、今日はいないから代わりに葵が教えてるんだ」

「姫に教わってるなんて凄いつすね」

愁さんにとっても上級生のソイツは、驚いた顔をしてオレを見た。

「コジ、ここ間違ってるぞ」

痛い。

梨桜さんに向ける優しさの欠片をオレに向けてくれないだろうか…

「なんの用だ？」

葵さんに聞かれて、情報担当は慌てて二人に携帯を見せながら、幹部室に来た理由を話し出した。

「チェンメです。姫の隣を歩いているのは藤島です」

葵さんが携帯を奪い画面を凝視した。オレも画面を覗き込むと、制服を着た梨桜さんと藤島が並んで歩いている画像が映し出されていた。

画像の下に表示されている文章に目を疑った。

制裁してくれる人募集

どんな方法でも構いません。

朱雀と青龍の周りをうるつく、身の程知らずの女に自分の立場を思い知らせてくれる人募集！
勿論、謝礼します。

詳しくは***@*****まで

「葵さんと一緒に写ってるチェンメもあります」

もう一枚の画像は梨桜さんと葵さんが並んで写っている。

葵さんと梨桜さんがプライベートで出かける時は、葵さんの腕に梨桜さんが手をかけながら歩く。

この写メは、梨桜さんと葵さんが二人で廊下を歩いているところでいつもの仲の良い雰囲気は感じられない。

しかも、この背景に見覚えがある。これはウチの学校だよな？

「この写真は定例会で東青に来たときだよな」

愁さんが言うと、葵さんは携帯を取り出して操作し始めた。

東青の生徒が写メを撮ってチェーンメールを流したのか？…どういうことだよ。

「写メ撮った奴を捜して連れて来い。コジ、桜庭に車を出させろ」

そう言うと、葵さんは携帯を耳に当てながら立ち上がった。

愁さんは携帯で下の奴等とやり取りをしていた。オレは桜庭に電話を掛けて車を出すように言った。

「梨桜、まだ終わらないのか？ 店の傍に何かがある？」

そこで待ってる。…いいからカフェで待ってる、わかったな？」

そう言っつて電話を切ると、厳しい目をして愁さんを見た。

「葵、梨桜ちゃんの居場所はわかったのか？」

「ああ、後の事は頼んだぞ。コジ、お前も来い」

「はい」

オレは葵さんの後について幹部室を出て梨桜さんの元へと急いだ。

物憂い (5)

「真っ直ぐになったね」

スタイリストと鏡越しに目が合い、ニツコリと笑った。スタイリストが鋏を動かすたびに髪の毛がパラパラと床に落ちていく。

「前髪はどうする？額を見せるのも可愛いと思うわよ」

鏡に映る自分を見ながら、少し考えた。今の長さは邪魔だと思っけど、顔を隠すためには長い方が都合が良いんだよね。

「前髪は、少しだけ切ってください」

「少し？この位かな？」

スタイリストの言う長さで頷くと、前髪に鋏が入れられた。

「できた。可愛いわよ」

「ありがとう」

顔を動かすたびにサラサラと揺れる髪の毛が面白くて楽しくて、何度も横を向いたりしているとお店のスタッフに笑われた。会計を済ませてお店を出ようとすると、葵から電話がかかってきた。

「なあに？」

『梨桜、まだ終わらないのか?』

どうしたんだろう?声が強張っている。

少し不思議に思いながら、美容室から出るところだと説明すると、お店の傍に何かがあるか聞いてきた。

「うん…カフェと雑貨屋さんがあるよ」

『そこで待ってる』

夕飯のおかずを買いに行こうと思っていたのに、命令口調で言われて、反論しようと口を開きかけたら

『いいからカフェで待ってる、わかったな?』

まだ何も言っていないのに、不服に感じたことが伝わってしまった。

「うん、わかった」

強い口調で言われて、つい返事をしてしまった。

何かあったんだらうか?

疑問に思いながら美容室の隣にあるカフェに入ると、携帯が鳴った。

今度は誰?

そう思いながら画面を見て、やはり何かあったんじゃないかと思わずにいられなかった。

「もしもし」

『今どこにいる？』

「カフェにいるよ」

苛立った声で電話を掛けてきた寛貴に正直に答えてしまった。さっきの葵といい、電話を掛けてきている寛貴といい、絶対何かあったんだ。

「どうしたの？」

何かあったとしても葵は教えてくれない。でも、寛貴なら教えてくれるかもしれないと思って聞いたら、溜息をつかれてしまった。

『なんで家に居ないんだよ…』

なんでって…そんなに呆れたように言わなくてもいいじゃない！？ さっきから、なんなのよ！

『今すぐタクシーに乗って家に帰れ』

寛貴にも命令する強い口調で言われた。

「理由は？」

『いいから言うとおりにしろ。できないなら迎えに行っただけで帰るぞ』

この男達は理由も言わないで人に命令ばかり…私が大人しく言うことを聞くと思わないで欲しい。

当人なのに何も教えてもらえずに、ただ言われる通りに動かなければいけないなんて納得がいかない。

「さつき、葵からも電話が来たの。何かあったんでしよう？どうして私に教えてくれないの？」

『宮野に何を言われた？』

葵の名前を出すと、寛貴の声がさらに固くなったような気がした。

「似たような事だよ。ねえ寛貴、何があったの？」

電話の向こうで誰かと話をしている寛貴は私の問いかけに答えてくれない。もう一度「寛貴、教えて」と聞いたけれど、『落ち着いたら教える。それより早くカフェを出る』とはぐらかされてしまった。

「寛貴、教えて。教えてくれないなら帰らない」

『梨桜、今すぐに家に帰ってくれ』

聞いている方が切なくなってしまうような掠れた声で言われて、返事ができなかった。寛貴が心配している。それだけは痛いくらいに伝わった。

『聞いているのか？返事をしろ』

「うん、今日は帰るから心配しないで」

もうすぐ葵がここに迎えに来る事を思い出して、寛貴が心配しなく

ても良いように返事をした。

『家に着いたら連絡しろ。いいな?』

制服を着崩した男の子と女の子のグループが視界の隅に入った。あまり良い感じがしないグループだな…そう思いながら寛貴に返事をした。

「うん。じゃあね」

電話を切ると視線を感じたけれど、気づかないふりをして紅茶を飲んだ。

「ねえ、あれ紫苑の制服じゃない?」

「ほんとだ、紫苑の女子を見るのってレアじゃねえ?」

会話が聞こえてきて私は溜息をついた。

「ねえ、紫苑だよな?」

声をかけられた人に目を向けて、気づかれないようにもう一度溜息をついた。

“派手”そんな雰囲気ของกลุ่มだった。間近で見ても、良い感じがしないという印象は変わらなかった。

やっかいだな…葵、早く来てくれないかな。

「やっぱ朱雀に入ってるの?」

紫苑 朱雀 東青 青龍 このイメージって無くならないんだな。

この人に返事をしたくないな。そう思ったけれど、絡まれたくなかったから一言で返した。

「入ってません」

派手な化粧をした女の子が私を見た。その化粧に思わず目が釘付けになってしまった。

化粧直し、した方がいいんじゃない？そのマスカラのつけ方、汚すぎるよ…

「何で？あそこの総長って、超かっこいいデシヨ」

顔でチームに入るの？それが基準だったら、代々顔が良くないと総長は務まらなくて大変じゃない？

くだらない。早く、私の前から消えてくれないかな。

「やっぱり朱雀の幹部ってかっこいい？彼女とかいるの？」

その問いには答えずに、また紅茶を飲んだ。

煩い…。せっかく気分転換をしてきたばかりなのに、また苛立ちが募ってきた。

「青龍の総長もかっこいいよ、私なら青龍の幹部に近付きたいな。だってそうしたら、すっごいじゃない？」

もう一人、化粧の濃い女の子がチームの幹部に近付いた際のメリツトを並べ立て始めた。

なんて不愉快な発言なんだろう…それしか考えられないの？葵の事も、寛貴の事も顔だけで判断しないで欲しい。

不愉快だと思う私の方が変なのだろうか？

「ちょっと、どけてもらえる？私帰るから」

これ以上ここにいる事が耐えられなくて席から立つと、男は顔を近づけてきて煙草臭さに思わず顔をしかめた。

「あんたさあ、アレじゃねえの？」

アレ？アレってなに？

私の顔をジロジロと見る男を見返していると、男はニヤリと笑った。

物憂い (6)

「あんだ、もしかして噂の転校生？」

「なに？」

噂？なにそれ…

それって、葵がここに迎えに来る事と、寛貴が私を家に帰したい理由と関係があるの？

「その人から離れる」

ドスのきいた低い声が聞こえて振り返るとコジ君がいた。

いつもの可愛いキャラは捨てて、怖い顔をして派手な男達を相手に凄んでいる。

「青龍だ」

「この人青龍の幹部じゃない？」

バカな女は状況を読めずに黄色い声ではしゃいでいた。

コジ君が「帰りましょう」と言って私の鞆を手にすると、煙草臭い男がまたニヤリと笑って私を見た。

「何で青龍が紫苑の生徒を迎えに来てんだよ？やっぱ、この女って噂の転校生だろ」

「お前らには関係ない。退けるよ」

嫌悪感しか浮かばない笑みを向けられて、私が顔を逸らすと男達の視線から私を隠すようにコジ君が私を自分の背中で庇ってくれた。

「この人って、青龍のナ」

コジ君の事を“青龍のナンバー3” そう言おうとしていた女の顔を不快な思いで見ていると、女の目が大きく見開かれて、手で口を覆い嬉しそうに目を細めた。

「うそお…こんな近くで見るの初めて」

呆けたように私の後ろを見ている女が気になり、後ろを振り返ろうとすると、ふわりと馴染みの香りが漂って首に腕が巻き付いた。

「お前は痛い目に遭わないと分らないんだな」

仰ぎ見ると、怒った顔の葵が居た。

「さつきから電話してんのに、話し中だっただろ」

怒ってる！

理由が分からないけど、とにかく怒ってる…恐る恐る「寛貴から電話が来たの」と言うと、葵の眉尻が更に上がってしまった。

「やっば、コイツだよ。あのメー…」

途中まで言った男は、葵に睨まれて固まってしまっていた。

「こんなのに絡まれやがって…帰るぞ」

そう言い、私を歩かせて店を出ると車に乗せた。
聞きたいことはたくさんあるけれど、今は葵の言うとおりにして
いた方が身の為だ。そう感じて大人しく家に帰った。

昨日は、家に帰ってから寛貴に“家に着いた”とメールをしたけれど、私が知りたかったことは教えてもらえなかった。

葵はもちろん教えてくれる筈もなくて、私は訳が分からないまま学校へ登校した。

どうやって寛貴から昨日の事を聞き出そうか？

朝からそれを考えていたけれど、私の知りたかったことは拍子抜けするほどアツサリと知ることになった。

お昼休みにお茶を買いに行くために歩いていると、麗華ちゃんは私の髪を見ながら聞いてきた。

「弟君は驚いた？」

「失敗だったよ」

昨日は髪の毛がストレートになった私を見せて葵を驚かせようと思っただのに、家に帰った葵は私の頭を撫でながら「似合ってる」そう言われて終わってしまった。

「残念だったね」

「もういいや、男の子は無関心でダメだね」

昨日の葵は何度も愁君とやり取りをしていて、大変そうで、私に構っている時間はなさそうだった。

「東堂さん！」

学食の近くにある自販機に行くと、彼氏と食券を買うために並んでいた小橋さんが私に手を振っていた。

「あの二人って仲いいよね」

麗香ちゃんという言葉に頷いていると、小橋さんは彼氏と何かを話して私の所に駆けてくると、心配そうに眉根を寄せて私の顔を見た。

「ねえ、東青の宮野君と付き合ってるってホント？」

小さい声で囁かれて、吃驚して後ずさってしまった。
私と葵！？そんなワケないでしょ！！

「ええっ！？」

なんで！？どうしてそういう話が出てくるの！？

「なんで私と葵が！？小橋さん！どういう事？」

「ちよっ…！東堂さん、声が大きいよ！」

私の声に驚いた小橋さんが、慌てて私の腕を掴んで揺すった。

私と葵が付き合ってるわけない！どうしてそんな風に誤解されるの

!?

「梨桜ちゃん、落ち着いて?」

麗香ちゃんに宥められたけれど、納得がいかない。

誰がそんな事を言っているの? 問い詰めて、正してやりたい!

「どういう事って、噂になってるよ? だからあのメールが…」

メール?

「メールって何?」

私が聞くと小橋さんが意外そうに首を傾げた。

「知らないの?」

麗香ちゃんに「知ってる?」と聞くと、彼女は気まずそうに首を縦に振った。

小橋さんは私の顔の前に携帯を出して画面を私に見せた。

「東堂さんは当事者だから知っておいた方がいいと思うの。これ、東堂さんだよな?」

物憂い (7)

「これ、東堂さんだよな？」そう言われて差し出された携帯に写っていた画面を見ても意味が解らなかった。

私と寛貴が歩いている画像と、葵と並んで写っている画像。これが何だっというの？

「これがどうかしたの？歩いているだけじゃない」

そう言うと、小橋さんはガシツと私の肩に手を置いた。

「東堂さんは分かってない！これがどんな事を意味するのか！…あゝ…もっつ！」

「小橋さん、梨桜ちゃんは転校してきたんだから分からなくても仕方ないよ。梨桜ちゃん、後で説明するから。小橋さんも梨桜ちゃんも落ち着いて？」

麗香ちゃん言葉に頷くと、小橋さんも頷いた。

「とにかく、この写メのせいで東堂さんが危ないの。朱雀と青龍のファンに恨まれてるから気を付けてね？」

この写メとさつき小橋さんが言っていた“メール”昨日、私に絡んできた男子高校生が言っていたのはこの事なんだ…

「小橋さん、教えてくれてありがとう。麗香ちゃん、戻ろう？」

誰もいない屋上で麗香ちゃんとお弁当を食べた。

「梨桜ちゃんは藤島先輩と宮野君が男女共に人気があるのは知ってるよね？」

「知ってるよ」

朱雀ファンに嫌がらせをされていたことを思い出してしまった。

あの時は、毎日嫌がらせの手紙が入っていたな…

「二人とも、女の子を自分の傍に置こうとするのって凄い事なんだよ。梨桜ちゃん、前に言われたよね？あの事が噂になってるんだよ」

麗香ちゃんは真剣に言うけれど、いつも葵と寛貴に小言を言われている私にはいつのことを言っているのか分からなかった。

「何だっけ？」

笑って誤魔化そうとしたら、麗香ちゃんは目を見開いて驚いた顔で私を見た。

「梨桜ちゃんってば！忘れちゃったの！？北陵の生徒に絡まれたときに言われたでしょ！」

思い出した。

「ああ、あの売り言葉に買い言葉的な宣言ね」

ご飯を口に入れてうんうん、と頷くと麗香ちゃんが「あんな凄い事を言われて忘れていられるってある意味凄いよ？」と私を諭すよう

に言った。

「忘れてたわけじゃないよ。ただ、どっちも負けず嫌いだから思わず出ちゃったんじゃない？本気じゃないと思うよ。」

「梨桜ちゃんて…。」

溜息をついて首を横に振る麗香ちゃんに「私と葵が付き合ってるわけじゃないよ」そう言って笑いかけると疑わしそくに「本当？」と聞いてきた。

本当だよ。葵にだって恋愛感情があるわけないから。

「大体おかしいでしょ？制服を着て並んで立っているだけの写真で付き合ってるとか無理があるよ。寛貴だってそうだよ、一緒に歩いているだけで恨まれたら生徒会に居れないでしょ。」

もしも、この前の屋上での事を誰かに見られていたのなら…それこそ大騒ぎになるけど、今回の事は騒ぎ過ぎだよな。

「もう、梨桜ちゃんは呑気なんだから！あの二人を名前で呼んでいることだけでも凄いなだよ？…とにかく、小橋さんの話だと梨桜ちゃんには恨まれているみたいだから気を付けてね？」

あのね、名前で呼べって迫ったのは寛貴だから。言いたいけれど、その言葉を呑み込んでお茶を飲んだ。

「うん、わかった。気を付けるね。」

午後の授業は自習になり、皆は真面目に問題を解いていたけれど、私は殆ど手をつけずに窓の外を見ていた。

『梨桜ちゃん、ズルいよ!』

まだ小学生だったときに女の子から良く言われた言葉。

『梨桜ちゃんがいると、葵君とおしゃべりできない』

葵は小学生の頃から『アイツ、男と女の前だとしゃべり方が違うんだぞ!そんな奴、信じられるかよ』そう言って、自分にまわりついてくる女の子には冷たくて、いつも私と一緒にいた。

葵の気持ちも理解できるけど、文句を言われるのは私ばかりで

『葵君を一人占めしないで、梨桜ちゃんはズルい』

何度となく言われてきた。

まさか、高校生になっても葵の事で恨まれるとはね…

余りの馬鹿馬鹿しさに笑いが込み上げてきた。

席を立つて教室を出て慧君がくれた鍵を持って屋上へ向かった。

向かいながら、寛貴にメールを送った。

“変なメールが流れてるみたいだね。昨日、私の事に家に帰れって言ったのはそれが原因?”

屋上の扉を開けると、メールが届いた。

“メールを見たのか?今どこにいるんだ”

葵と寛貴はそのメールを見ているんだろうな…互いに敵チームの総長と私が写っているのを見て何を思ったんだろう?

「蒸し暑い…」

日陰を見つけてそこに座ると、返事を送った。

“メールは見えないよ。恨まれてるから気を付けてって教えてもらったの。学校にいるから、心配しないで”

葵にもメールを送ろうと思って、文章を作ったけれど途中で止めた。葵が私に教えないのは、私を不安にさせないようにする為だから…知らない事にしておこう。

大体ね、最初から無理なのよ。

双子だということも隠しても隠さなくても、葵が私に接する態度は同じなんだから。

それに葵から他人行儀な態度をとられたら、寂しくて、悲しくて泣いちゃうかもしれない。

今度、葵に言おう。私が危険な目に遭うなら、葵の双子の姉として狙われた方がいい。

葵が護ってくれるなら、大切な家族として守って欲しい。

寛貴からまたメールが届いた。

“どこにいる？答える”

寛貴って心配性なんだね。“屋上。私一人しかいないから大丈夫” 意外な一面に苦笑しながら返事を送った。

“一人になるな。今行くからそこから動くなよ”

直ぐにメールが返ってきて、吃驚した。最初にメールを送った私も悪いけど、今って授業中だよな？

寛貴も私を生徒会に入れたせいで面倒なことに巻き込まれて可哀想に…

Over (1)

普段は鍵が閉まっている屋上にいる事を見られたら面倒なことになる。

寛貴のメールを無視して屋上を後にした。

「何処に行つてたの？」

階段を降りていると声をかけられた。

悠君から声をかけられるのは久しぶりだったから、笑いかけたけれど、彼は硬い表情で私を見ているだけで、笑みを返してはくれなかった。

「屋上」

まだ、無理なんだ。

諦めて返事をするとう君は眉を顰めて私を見た。

「寛貴さんから、一人になるなつて言われなかった？」

悠君の口調は私を咎めるようだった。彼にとっては寛貴の言葉は絶対なんだろつな…

だから私の事を避けていても、こつやつて捜しに来るんだよね？

「だから教室に戻るの。寛貴に言われ…」宮野と付き合つてるのか？

『寛貴に言われて授業中なのに来てくれたの？』そう言おうとした私を遮つて悠君は言った。

「え？」

また、あのメールの話？

悠君に聞き返すと、言いにくそうにしながらも一度同じことを言おうとした。

「だから、宮野と…」どうしてそう思うの？」

今度は私が彼の言葉を遮って聞き返した。悠君にそんなことを聞かれるとは思わなかった。

「ねえ、悠君は何を見て、何を聞いてそう思うの？」

「…」

私を睨むように見て、何も答えなかった。

悠君も噂話と画像を見て信じているの？

「メールが流れているんでしょう？それを見て私と葵が付き合っていると思ったの？それとも、今までの私を見てそう思ったの？」

どっち？と聞くと目を逸らして背を向けた。

噂を信じて、私自身を見てくれていなかった。そういう事？

「答えられない？」

「わかんねえ…梨桜ちゃんがわからない。寛貴さんに抱き締められたのに、なんで宮野と親しげにするんだよ。宮野は敵だろ？梨桜ちゃんは寛貴さんや朱雀を裏切るのか！？」

“裏切り” そう言われた事が…悠君の言葉が悲しい。

もう、どうなってもいい。

その感情が急に大きく膨れ上がった。これで、前以上に気まずくなつてしまったとしても仕方がない。

「悠君にとっては敵チームかもしれないけど、私にとっては二つのチームの事はどうでもいいことだよ」

振り返つた悠君は、驚いたように目を見開いたけれど、すぐに私を鋭く見つめた。

「葵や愁君は私にとって敵じゃない」

私と葵の関係がバレて、悠君が私を敵視してもいい。嘘をついてい
るよりマシだ。

何も言わない悠君に背を向けて教室に向かった。

・
・

紫苑よりも東青の方が早く試験が始まり、コジ君の家庭教師から解放された私は家と学校を往復するだけの生活になった。

学校に来て、生徒会の活動にも参加せずに試験が終われば家に帰り、次の日の試験科目の勉強をする。

朱雀とも、葵以外の青龍のメンバーとも関わらない。この学校に転校してきたばかりのような日々を過ごしていた。

期末試験が終わった次の日の放課後、生徒会に行こうかどうか迷っている。携帯電話が鳴った。表示は麗香ちゃんからで、今日は学校を休んでいて心配だったから躊躇うことなく電話に出た。

「麗香ちゃん？どこか調子が悪いの？」

『あんだ東堂梨桜？』

麗香ちゃんとは似ても似つかない男の声に名前を呼ばれ、驚きで答えられずにいると男はまた私の名前を口にした。

『なあ、東堂梨桜本人だろ？』

どうしてこの男は麗香ちゃんの携帯から私に電話をかけてきているんだろう？私を確認するという事は、私と話をしたことのない人物。そうだよな？

視線を感じて振り返ると、悠君が私を見ていた。

朱雀を関わらせてはいけないような気がして、私は廊下に出ると声を潜めて会話を続けた。

「あなた、誰？麗香ちゃんは？」

『拉致った』

男の口からとんでもない一言が飛び出した。

「え?...なに？」

楽しそうに言う男に呆然と聞き返すと、電話の向こうではクスクスと楽しそうに笑っている。

私はからかわれているのだろうか？

『だから、拉致った』

言葉と楽しそうな口調が一致していない。その言葉に軽く眩暈がした。

『なあ、友達助けに来る？』

Over (2)

「...もう、どうなってもいい」そんな投げやりな感情を抱いてしまったことが災いしたのか...

『なあ、友達助けに来る？』軽いノリで楽しそうに言われて、すぐには言葉を返せなかった。

口調は楽しそうで、まるで“ウチに遊びにくる？”と誘っているようだ。

けれど、男から発せられる言葉は恐ろしい意味を持っている。

「無事なんでしょうね」

怖いけれど、麗香ちゃんが心配だった。『拉致した』その言葉が本当なら、彼女はどんなに怖い思いをしているのだろうか？

『今のところはね。あんたが来なかったらこの女をボロボロにする。宮野と藤島に言ったらもつとボロボロにするよ』

さっきまでの楽しげな口調から一転して、低くて恐ろしい声で言った。

どうして麗香ちゃんなの...

「あの二人と彼女は何の関係もないでしょう？」

『あんたのガードが堅いからだよ。利用できるものは何でも利用する、それだけだ。なあ、冗談じゃないぜ？あんたが来なかったらマジでこの女は可哀想な目に遭う。まあ、お友達を見捨てるのも助け

るのもあなたの自由だけだな』

卑怯者！怒鳴りつけてやりたかったけれど、廊下には人がいたから唇を噛んで堪えた。

助けなきや。

本当なら、葵をおびき出すために私が利用されるハズなんだ。それなのに関係のない麗香ちゃんが拉致されて怖い思いをしている。

辺りを見回し、朱雀のメンバーがいないことを確認して話を続けた。

「私が行ったら麗香ちゃんを返してくれるの？」

『お前が一人で来たらな。無傷で返してやるよ』

もしも、この言葉が嘘だったとしたら…？畏だったら？

男の言葉を疑っているけれど、さっきの言葉がどうしても頭から離れなかった。

『あなたが来なかったらこの女をボロボロにする』

私が行かなかつたら麗香ちゃんは一人で酷い目に遭わされる。

脅しなんかじゃない。今電話をしてきている男達は笑いながら人を蹴れるような奴等なんだろう…

「…どこに行けばいいのよ？」

『さすが進学校に通うだけあって、物分りが良くていいね。夜11時に駅のそばのコンビニに来いよ。…あいつらに言ったらどうなるか、わかってんだらうな』

脅す事を忘れずに念を押しした男は電話を切った。

どうする？

私はどうしたらいい？

何度も何度も自分に問いかけた。

葵と寛貴に黙って男達のところに行くのは危険なことは分かっている。話をしたら葵と寛貴は麗香ちゃんを助けてくれる。

：自分だけが守られて、安全な場所において見ているのは嫌。私が行かなかつたせいで彼女が傷つけられるのは絶対に嫌だ。

両手で顔を覆い、深く息を吐いた。

何度考えても答えは見つからない。

「梨桜？」

名前を呼ばれて顔を上げると皆が私を見ていた。

「梨桜ちゃん、聞いてた？」

今は各委員会との会議中。

寛貴に「来い」と言われていた生徒会は、各委員会との会議だった。何の議題だったのかすら良く分からない。何も聞いていなかった。

「ごめんなさい…」

謝ると、各委員会の委員長達が私を見ていた。

冷たい視線を投げかけられて思わず俯くと、「会長も大変ですね…」
冷笑しながら誰かが言つと「宮野も物好きだな」小さな声が聞こえた。

彼等の中にも朱雀のメンバーがいるんだろう…

私が寛貴にこの事を話したら、彼等を動かすんだろうか？

「梨桜、顔を上げる」

寛貴が席を移動して私の隣に座ると、私の頬に手を当てて自分に顔を向けさせた。

「具合が悪いのか？」

心配そうに言いながら額に手を当てて熱を測つた。熱なんかないよ…
首を横に振ると「何があつた？」そう言いながら、親指で私の頬を撫でた。

「何も無いよ」

やっぱり、言えない。『無い』と答えた私を信用していないのか、
寛貴は探るように私の目を見ていた。

「皆が見てるよ？寛貴も物好きって言われちゃうよ」

真っ直ぐな視線に嘘を見破られてしまいそう、はぐらかす為と言つと寛貴は私の頬に触れたまま、各委員会の委員長達が座っている方へ鋭い視線を向けた。

「見たい奴には見せておけばいい。梨桜、何かあつたらすぐに言え

よ
「よ」

小声で話していた彼等は、寛貴に視線を向けられるとピタリと話をやめて私達を見ていた。

「助けて。って言ったら助けてくれるの？」

「ああ。だから必ずオレを呼べ。分かったな？」

その言葉には頷かずに、「ありがとう」「とだけ言った。寛貴、ありがとう。その気持ちが嬉しい…」

Over (3)

「解散」

会議が終わり、委員会の人達は生徒会室を出て行った。皆が私を見ていた。

『どうして朱雀のトップがこんな女を構うのか？理解できない』そんな目をしている。

私だって分からない。

今日改めて、朱雀のメンバーは私の事を快く思っていない。それが良く分かった。

だから余計に寛貴には言えない。

会議に使った資料を集めていると、拓弥君と悠君の視線を感じた。気付かないふりをして後片づけを続けながら時計を見た。

男から指定された11時に葵は家にいるのだろうか？

最近は夜遅くに家に帰ってくるけど、葵が家に居たら一人では外に出られない。

「いった…」

指先に鋭い痛みが走り、そこを見ると紙で指を切っていた。

「っ！」

痛いっ！紙で切ると痛い！

「梨桜ちゃん、何やってんだよ」

切れた所をティッシュで押さえていると、拓弥君が呆れ顔で言った。ここにいるのが葵じゃなくて良かった。絶対に感づかれる

「消毒しとけよ」

寛貴に言われて、救急箱から消毒薬を指先に塗り、溜息をついた。私、凄く動揺してる…

「さつきから、考え事？」

拓弥君に聞かれて頷いた。

まあ、考え事。だよな、どちらかといえば悩み事かな？

「そうかも」

葵が家に居たらどうやって外に出よう…コンビニに行く。って言うたら、一人で行かせてくれるかな？

「そうかも。って自分の事だろ？…まあ、あんなメールを流された後じゃ悩み事も増えるよな」

コンビニに一人で行く言い訳を考えたけれど、どれも却下されてしま憂ような気がした。

葵は絶対に私を一人にはしてくれない。…どうしよう？葵を丸め込むのって凄く大変なんだよね…

「梨桜ちゃん、オレの話聞いてないだろ」

拓弥君に言われて、慌てて首を横に振った。
ごめんね、全然聞いてなかった…

「葵、出かけるの？」

夕飯を食べながら聞いたなら、逆に「一緒に来るか？」と聞かれて首を横に振った。一緒にチームに行ったら監視の目が増えるだけ。絶対に一人にさせてもらえない。

「ウチにいる」

怪しまれないように、いつも通りに返事をした。

葵がいつも通りに出かけるなら、男が指定した場所に行ける。

“麗香ちゃんを助けにいかなきゃ”

やっぱり、私だけが安全な場所にいる訳にはいかない。

「今日ね、紙で指を切っちゃったの。染みるから食器洗うのをお願いしてもいい？」

葵の様子を窺いながら聞くと、絆創膏を貼った私の指を見て頷いてくれた。

「ああ。ちゃんと消毒しておけよ？」

「うん、ありがとう」

ごめんね。葵に食器洗いをお願いする程深い傷じゃないんだ…
シンクで食器を洗ってくれている葵に見つからないように、テーブルに置いてあった葵の携帯を自分の服のポケットに入れた。

葵なら気がついてくれる。

私を捜してくれる。

「オレが出かけたら戸締まりしておけよ」

「ん。行ってらっしゃい」

そう言って葵は出掛けた。

バルコニーから葵が迎えの車に乗るのを確認して出かける準備をした。

葵の携帯は首からかけて下着の中に入れて隠し、シャツを着て上から葵のパーカーを羽織ってマンションを出た。

葵は私が一人で出歩くのを許さなかったから、こんな遅い時間に一人で出歩いたのは久しぶりだった。

どれだけ大切にされていたか、こんなところで実感している自分が情けなくなった。

駅前についてコンビニに目をやると黒塗りの車が停まっていた。

私の携帯が震えていたけれど、そのままにした。

葵の携帯はサイレントにしておいた

葵、私がないことに気がついたら、捜して。

待ってるから

Over (4)

コンビニに行くとき黒塗りの高級車から人が出てきた。きつとあの男に違いない。そう思って男を見ていると、煙草を銜えながら私に近付いてきた。

「1人か？」

電話をかけてきた男の声と同じだ。

男は私を頭の前から爪先まで眺めると鼻で笑った。

「そう言ったのはそっちでしょ？」

私も男を頭の前から爪先まで見てやった。

グレイに染められた髪の毛と瞳の色、耳には幾つもついているピアス。

見かけから、関わりたくない。そう思える格好をしている。

「乗れよ」

男は顎で車を示した。

携帯の振動を感じながら、辺りを見回すとこの男の仲間らしい車は居なかった。

「麗香ちゃんは？」

「ここにはいない。早く乗れよ」

男に背中を押されて、高級車の後部座席に乗り込み思わず顔を顰め

た。
煙草臭い

「車酔いしそうだから窓を開けてもいい？」

「ああ」

車内で男に麗香ちゃんの事を聞いても何も教えてくれなかった。それでもしつこく聞いていると「うるせえ」と凄み、目を閉じてしまった。

仕方がないから外を見ながら、男と運転手に気付かれないように胸元にある葵の携帯を服の上から握った。そつと携帯を見ると点滅している緑色の光が見えた。緑色は葵にとって親しい人からの着信を知らせる色。

「豊さん、着きました」

車が止められたのは繁華街から少し離れたところにある倉庫のようなところだった。

朱雀の倉庫に行った時も思ったけれど、イメージ通りの不良の溜り場。

そんな感じの倉庫には派手な格好をした男達が大勢いて、私が乗った車のドアが開くと皆がこちらを見た。

「ここに麗香ちゃんがいるの？」

豊と呼ばれた男を睨むと、男は意味深に笑っただけだった。

「来い」

腕を掴まれて強い力で引かれて仕方なく歩くと、男達は私を見て口笛を吹いたり、囃し立てたりして騒いだ。

このチームは感じが悪い。それだけしか思えなかった。

「豊さん、ソイツが宮野の女っすか!？」

「藤島の女じゃねーの?」

豊と呼ばれた男がまたニヤリと笑った。

「この女は哲さんが欲しがってんだ」

その言葉にカツとなった。

勝手なことばかり言わないで!私はモノじゃない!!

「離してよっ」

男の腕を振り払った。

「勝手に決めつけないで!あんたの言う通りに一人で来たんだから早く麗香ちゃんに会わせなさいよ!」

「てめえ、豊さんに生意気な口きいてんじゃねーぞ!」

豊の後ろに立っていた男が私に向かって怒鳴ったけれど、豊はフツと笑って私を見下ろした。

「お前、気が強いんだな」

「そりゃそうつすよ。オレにタンカ切った女つすから」

集団の中からこちらに歩いてきた男を見て、握った手に力が入った。

「圭吾」

麗香ちゃんが好きだった元カレ。彼女が学校に来れなくなった元凶。…彼女を拉致したのはコイツ？

「私を呼び出す為に麗香ちゃんのことを利用したの？」

麗香ちゃんはお嬢様で学校の行き帰りには送り迎えがついている。その彼女が拉致されたって聞いておかしいと思った。元カレだったこの男が呼び出せば麗香ちゃんはついて行ってしまいかもしれない。何も答えない、それは肯定と考えていいんだよね？圭吾の顔を見ていると腹が立って仕方がなかった。

「また麗香ちゃんの気持ちを踏みにじったの？」

責めるように聞くと、圭吾はニヤニヤと笑いながら答えた。

「ついてくるアイツがわりいんだろ？」

「バカにしないでよ！」

深く考える前に手が動いていて、自分の手の平に痛みを感じて我に

返った。

「てめえ、ふざけんなよ!？」

私が力一杯に叩いた圭吾の頬は赤くなっていて、それ以上に顔を赤くしながら圭吾は憤慨していた。

「それはこっちの台詞よっ！バカ男!!どこまで女バカにしてんのよ!？」

やっぱりあの時、何が何でも謝らせておけばよかった！後で絶対に麗香ちゃんの前で土下座させてやる！

「へえ、宮野と藤島が気に入るだけあるな…おまえ、ここに連れて来られても動じないんだな」

豊は私と圭吾のやり取りを見て、成り行きを楽しんでいるようだった。

この男、何を言っているの？こんなところに連れて来られて、怖いに決まってる。今は恐怖よりも腹立ちが勝っているだけ。冷静を取り戻せば、手が震えそうになるくらい怖い。

「おまえ、学校では“がり勉メガネ” そう呼ばれてんだろ？」

私の携帯が震えた。さっきからひっきりなしに震えているソレを無視して、豊に向き直った。

「だったら、何？」

「藤島も宮野も、お前みたいない地味な女の、何がいいんだろうな？」

私のメガネに向かって伸ばされた手を払い除けて豊を睨むと、「気の強い女」そう言いながらクツクツと笑った。

「私に触らないで。早く麗香ちゃんを連れてきて」

私を見て笑っている豊を見ながら、麗香ちゃんはここにいないんじゃないか 不安が浮かび上がった。

「梨桜さん！」

突然聞こえた声に驚いた。

「どっしてここに？」

「葵さんの携帯を取りに向かう途中で見かけたんです。どうしてこんな危ない真似をするんですか！」

携帯 やっぱり気がついてくれた。

自分の携帯を忘れた時には私に電話をする葵。携帯にも出ない、家に電話をしても出ない私に気付いてくれた？

「青龍の幹部とはいえ、一人で乗り込んでくるなんてバカじゃねえ？」

圭吾が言うと、コジ君は睨み据えながら私に向かって手を伸ばした。

「ウチの姫を返してもらおう」

コジ君の手が私の手を掴む前に、豊が私の腕を掴んで自分に引き寄

せた。

「帰らねーよ。お姫さんの大切なもんがここにいるからな。なあ、そっつたる？」

やっぱり麗香ちゃんはここに居るの？

問い詰めようと顔を上げると、豊が私の髪の毛を掴み、ぐいっと引き私の顔を上に向けさせた。

「梨桜さんから手を離せ」

コジ君の唸るような低い声が響き、豊はその声を無視してパチンとナイフを取り出し、刃先を私に向けた。

「宮野と藤島はどんな顔するだろうな？」

楽しそうに笑う顔を見て恐ろしかった。

この男、歪んでる…

ナイフが私の顔に近づけられ、冷たい刃が頬に当てられた。

「泣かないのかよ…つまらねえな」

この男を喜ばせるために泣くなんて嫌だ、悔しい。目を閉じてナイフを持つ手に力が籠められるのを覚悟した。

「やめろ！」

冷たい感触が頬から離れ、不思議に思っていると“ぶっつ”という音がした。

目を開けると、私の前にいるコジ君の目は見開かれていて、その視線の先にある豊の手には、切られた私の髪の毛が握られていた。

「おい、青龍と朱雀にこれを届けてきてやれよ」

その場にいた男に私の髪の毛を渡し、豊は私に向き直った。

「いい眺めだな」

「豊、いつまで遊んでんだ」

野太い声が聞こえた時、視界の隅に長い棒が見えた。

その棒はコジ君を狙っていたけれど、コジ君は気がついていないように見えた。

「哲さん 生意気な女だったんでつい遊んでました」

「早く連れて来い」

哲と呼ばれた男が豊に背を向けた時、コジ君を狙っていた棒がゆっくりと動いた。

あんなに太い角材で頭を殴られたら死んじゃう…

「来い」

私に伸ばされた手を振り払い、コジ君に向かって飛び出した。

「コジ君！」

振り下ろされる角材を見ながらコジ君に飛びついた。

彼が殴られるのを防ぐと、肩に物凄い衝撃が走った。

「梨桜さん！？梨桜さん！！！」

「……っ」

余りの痛みに声が出ない。

心配そうに私を呼ぶコジ君に返事が出来なかった。

「バカな女……」

「豊、連れて来い」

床に倒れていた私の腕を掴まれて引き上げられたとき、目の前が真っ暗になった。

あんな顔をさせたいわけじゃなかったんだ。

苛立ちに紛れてあんなことを言ってしまった事をずっと後悔していた。

目が合った際に、少し困ったような悲しそうな顔で微笑まれて…そんな顔をさせているのは自分だと思った際に辛かった。

朱雀の倉庫で雑誌を読んでいると携帯が鳴った。

見たことのない番号だった。いつもなら知らない番号からの着信は無視するけれど、何となく気になって出てみた。

「はい」

『海堂か？先生だ』

先生だ、その声はいつも教室で聞く担任の声と同じだった。

なんでオレの携帯にかけてくんだよ？オレ、何もしてないぞ

「え？マジで先生？」

そう言つと、口早に要件を言い出した。

『ああ、聞きたい事があつてな。笠原が学校から帰ってきてないそうなんだが、何か聞いてないか？』

担任の声から焦りが伝わってくる。

帰ってきてないって…今日、笠原は学校を休んでいたハズだ。梨桜ちゃんが休み時間に一人でいたから間違いない。

「オレは聞いてないけど、オレより梨桜ちゃんが知ってるんじゃないの？」

オレが言うと、担任は溜息をついた。困り果てている。そんな感じだ。

『東堂に連絡がとれないんだよ。自宅の電話も携帯も連絡がとれない』

「家族には連絡とれねーの？」

門限にうるさい弟がいた。そう思って担任に言うと、

『弟にも連絡がとれない。まったくどうなってるんだ』

なら、弟と出かけてるんだろ。そう思っているとバン！と荒々しく扉が開き、拓弥さんが入ってきた。

「寛貴！梨桜ちゃんに連絡をとれ！」

珍しく声を荒げている拓弥さんを寛貴さんも見ていたけれど、手に握られていたモノを見て、寛貴さんは顔を強張らせながら携帯を耳に当てた。

「先生、なんか分かったら連絡する」

『おい、海棠!?!』

一方的に電話を切った。

拓弥さんの手に握られていたのは、20センチ位の長さに切られた髪の毛。

ストレートで、柔らかそうなそれに見覚えがあった。

「駄目だ。留守電に切り替わる」

拓弥さんから渡された髪の毛を寛貴さんが受け取り、髪の毛を巻いていた紙を広げた。

その紙に書かれていた文字を見て、息を飲んだ。

“殺 紫垣”

“朱雀”ではなく、敢えて“紫垣”と書かれている。

まさか：梨桜ちゃんが、捕まった？

「拓弥、三浦に連絡をしる。青龍に行く」

拓弥さんが携帯を耳に当て、寛貴さんがソファから立ち上がると、部屋の外が騒がしくなった。

「どけ!」という怒鳴り声が響き、拓弥さんは苦笑しながら寛貴さんに扉を親指で指し示した。

「手間が省けたようだぜ? 向こうから来た」

「邪魔だ!」

また怒鳴り声が響き、拓弥さんが扉を開けるとそこには宮野と三浦が居た。

「梨桜はどこだ？」

宮野は部屋に入るなり、寛貴さんを睨みつけていた。

「なんだと？」

宮野の言葉に寛貴さんは奴の胸ぐらを掴みあげた。

寛貴さんがキレた…

「こつちが聞きたい。梨桜が住んでいるのはお前達のシマだろ？何やってんだよ！」

「うるせえ！」

寛貴さんの胸ぐらに掴みかかった宮野を三浦が制した。

「葵、相手を間違えるな。今は梨桜ちゃんが先だ。藤島、それ…」

三浦が言うと、宮野は寛貴さんの腕を振り払い、寛貴さんの手に握られていた髪の毛を奪った。

「学校で梨桜ちゃんの様子は普通だったか？」

髪を指先で撫でる宮野を寛貴さんが冷たい目で見ていた。

「上の空だったな」

寛貴さんが答えると三浦が頷き、宮野に「どうだった？」と聞くと宮野は首を横に振り、握りしめた手を額に当てると目を閉じたまま「梨桜」と言った。

その声と表情は辛そうで、泣いているようにも見えた。

「まだ、梨桜ちゃんと決まったわけじゃない」

拓弥さんが言うと、宮野は首を横に振った。

「これは梨桜だ」

確かに梨桜ちゃんの可能性が高いけど、どうして切り取られた髪の毛だけで梨桜ちゃんだって分かるんだ!?

「なんで分かるんだよ!?!」

オレが言うと、三浦が携帯でどこかに電話をしながらオレ達と宮野を見比べていた。

「葵がそう言うなら、それは梨桜ちゃんの髪の毛なんだろう… オレだ、まだ分からないのか? ああ… 分かった」

三浦が電話を切り、テーブルに置かれた紙切れを手に取った。

「青龍に髪の毛が投げ込まれた。ストレートで色はブラウン… 髪の毛は紙に巻かれていて、そこには“奪 龍姫”と書かれてある」

『殺 紫垣』と『奪 龍姫』それはやっぱり寛貴さんと宮野に対してのメッセージ… 梨桜ちゃんをもらった。そう言いたいのか?

「悠、さっきの電話は誰からだ?」

寛貴さんが宮野と睨み合いながらオレに聞いた。

「担任からでした。笠原が家に帰ってないらしくて、梨桜ちゃんに何か聞いていないか確認したいけど、梨桜ちゃんと家族に連絡がとれないからオレに何か知らないかって…」

寛貴さんは頷き、声にはしなかったけれど「北陵」と呟いていた。北陵にはオレ達を闇討ちしてきた卑怯なチームの幹部がいる。朱雀に憧れていた笠原の元彼は北陵に進学したって聞いている。

「笠原？」

宮野が名前を呟いた。

「「笠原 麗香」梨桜ちゃんと同じクラスの オレだ」

三浦の携帯に連絡が入った。

笠原のフルネームを聞いた宮野は、誰の事か分かったようで「そういうことか」と頷いていた。

「葵、コジとお前の携帯の場所が分かった。梨桜ちゃんの居場所はまだ分からない」

「北陵の倉庫だろ？梨桜もそこにいる」

宮野の言葉に三浦が頷いた。

どういうことだ？梨桜ちゃんが笠原とトラブルに巻き込まれているのはほぼ間違いない。でも、どうして小嶋と宮野の携帯が北陵の溜り場にあるんだ？

拓弥さんも納得がいない様子で宮野と三浦のやり取りを見て

いた。

宮野は携帯でどこかに電話した。

「オレだ。桜庭、車で北陵の倉庫に迎え。奴らに見つからんじゃねえぞ。他の奴の運転じゃ駄目だ。梨桜を不安にさせるな。オレもすぐに向かう」

何がどうなってるんだ…桜庭は幹部の運転手だったよな？どうしてソイツじゃなきゃ駄目なんだ。それって梨桜ちゃんが不安にならない位に桜庭と面識があるっていうことだろ？
分かんねえ…

部屋を出て行くこととする宮野の腕を掴んだ。

「押しかけてきたのはそっちだろ？説明しろよ！」

「梨桜がオレの携帯を持っているはずだ」

オレを振り返りもせずに答えて、部屋から出て行くこととする宮野に腹が立ち、掴んでいた手に力を込めると、宮野が振り返った。

苛立ちのせいで凄みの増した目で見下ろされ、思わずたじろぎそうになった。

拓弥さんがオレの代わりに宮野に向き合った。

「はずってなんだよ、確定じゃないんだろ？」

コイツの言う事は分からない。どうして梨桜ちゃんが宮野の携帯を持っているんだ？

苛立っていた宮野が口調を荒げた。

「うるせーな！オレには分かるんだよ！」

「わかんねーだろ！なんで梨桜ちゃんがお前の携帯持ってんだよ」

拓弥さんが宮野に食って掛かると、寛貴さんが宮野と拓弥さんの間に入った。

「悠、拓弥、やめろ。今はそんなことを言い合っている場合じゃない」

今の宮野の話を聞いて、何も疑問に思わないのか？

寛貴さん、どうしてそんなに冷静でいられるんだ？梨桜ちゃんに惚れているなら宮野との関係が気にならないのか？

「紫垣に売られた喧嘩だ。今は朱雀も青龍も関係ない、梨桜が第一優先だ。宮野、それでいいな？」

「ああ、それでいい」

宮野と寛貴さんは部屋を出て行った。

二人の総長の背中を見て、また自己嫌悪に陥りかけた。今、寛貴さんは梨桜ちゃんの事しか考えていない。

梨桜ちゃんに惚れてるなら、彼女を助け出すことが一番大事なのに、オレはくだらないことに拘ってる…

三浦の携帯が鳴り、画面を見ると嫌そうな顔をして電話に出た。

「何？兄貴」

兄貴？

「…良く知ってるな。 あのさ、コジを連れて行くと思うから
準備してくれねえかな。 あ？…面倒って、あんた医者だろ
！？仕事しろよ！ え？あの人がかつちに向かつてる？…
マジかよ」

話しながら目に手を当てて項垂れている三浦。
ますますわけが分からねエ

「…分かってるよ、梨桜ちゃんは助け出す！」

電話を切ると、大きなため息をついた。

「おまえの兄貴って医者なのか」

「ああ…今は説明をしている時間はない」

そう言うと部屋を出て行った。

「悠、おまえも行くんだろ？…売られた喧嘩は買わねえとな」

拓弥さんが楽しそうに言った。

そうだ、売られた喧嘩は倍にして返してやる。しかもオレ達の梨桜ちゃんを拉致しやがって…10倍にして返してやる。

Over (7)

顔に痛みが走った。

「った
」

もう一度頬に痛みが走る。

誰かが、意識を飛ばしていた私の頬をピシリと叩いている。

…最低

「起きろよ
」

仕方なく目を開けると、目の前に豊の顔があった。

「おまえの男はあいつなのか？」

顎で指す方を見ると、殴られて顔を腫らしたコジ君が倒れていた。ぐったりとして目を閉じている。

「コジ君！
」

起き上ろうとして手を床についたら、肩が酷く傷んだ。

「コジ君！
」

もう一度呼びかけると、うっすらと目を開けた。殴られたせいで、目が充血している。

痛々しいその顔を見て胸が痛んだ。

「梨桜さん 肩は痛みませんか？オレのせいですみません」

「私の事より自分の事でしょう!？」

こんな時も私を気遣う彼に涙が出た。

コジ君をこんなに傷つけて卑怯な真似をして…許さない!!
もう一度床に手をつけて体を起こした。

「麗香ちゃんは無事なんでしょうね」

豊を睨むと、煙草を銜えながら笑った。

「まだ何もしてねえよ？」

「まだ?…私が一人で来たら解放するっていう約束でしょう?連れて来なさいよ!」

豊は傍にいた男に顎で指示を出した。

「ホント、おまえって気が強いな。なあ、藤島と宮野どっちが本命だ？」

私の顎に指をかけ、顔を自分に向けさせた。

目の前には嫌悪感しか浮かばない顔があり、近すぎる距離と煙草の臭いに顔を背けようとしたけれど、豊は指に力を入れて、それを許さなかった。

「藤島? 宮野?」

私がおかを答えて二人に危害が加えられるのが嫌だった。答えないでいると、豊はまた歪んでいる笑みを浮かべた、

「二股かけてんのか？」

「そんなわけないでしょ！」

自由に動かすことのできる方の手で豊の頬を叩こうとすると、腕を掴まれて捻りあげられた。

「イヤッ！」

「気の強い女は嫌いじゃないぜ？…でも、刃向う女は好きじゃないな」

私を見て笑う豊を睨みつけていると扉が開く音がした。

「豊、女が目を覚ましたら教えろって言ったよな？」

野太い声をした男、豊から「哲さん」と呼ばれていた。

この男は多分、ここのトップ。この男に引き渡されたら、私はどうなるの？

こんな卑怯な手を使って来るんだから、すんなり帰してはくれない。

きっと葵は来てくれる。それまでどうやって時間を稼げばいい？

私は、どうすればいい？

「哲さん」

哲と呼ばれた男は体が大きくて、頭の悪そうな男だった。

どちらかといつとこの豊という男の方が頭が良さそうだ。

開かれた扉から、麗香ちゃんが圭吾に連れられて入ってきた。手を後ろに縛られていて、顔に涙の跡はあるけれど、殴られたような跡はない。

衣服も乱れた様子もなくほっとした。

「梨桜ちゃん」

「麗香ちゃん！」

彼女に駆け寄ろうとすると、豊に腕を引かれて肩の痛みで声を上げてしまった。

「イタツ…」

「おまえはこっちだ」

哲の前に突き出され、抗ったけれど男の力には敵わなかった。

「地味な女だよな。アイツらはこの女の何がいいんだ？」

地味で悪かったわね！

哲は私を舐めまわすように見ると鼻で笑いながら言った。

「気の強い女ですよ」

「それだけだろ？まあ、いい。青龍と朱雀がどう出るか　楽しみだな、こっちには人質が3人もいる」

哲がニヤニヤと笑いながら言い、私はその笑い顔に嫌悪感しか浮かばなかった。

不良のチーム、同じように見えるけど全然違う。
葵も、寛貴もこんな卑怯なこととはしない。

「あんた達、卑怯だね」

豊は口角だけを上げて言った。

「手段は選ばない主義なんだよ。利用できるものは利用しないと勿体無いだろ？」

その言葉に呆れたのと同時に笑いが込み上げた。

卑怯なことをして、正面からぶつかっていけないのは…

「あの二人よりも、弱いから？」

クスリと笑いながら『あの二人よりも、弱いから？』そう聞いたら、バシン！と音がして口の中に血の味が広がった。哲に殴られた。

平気で女に手を上げる卑怯な男達。

「圭吾の言う通り生意気な女だな」

豊は片眉をあげて何か言おうとしたけれど、口をつぐみ私と哲のやりとりを見ていた。

哲は眉を吊り上げて怒っている。

私の言葉に素直に反応するなんて、自分で暴露しているようなものじゃない？

「弱いつて凶星だった？」

またバシツと音がした。同じ側の頬を殴られて、メガネが飛んだ。口の中に広がる嫌な味に眉を顰めて痛みを堪えながら、床に落ちているメガネを見ていた。どうしよう…

「お前もこの男みたいになりたいか？」

顔を上げずにいると、哲はぐったりと横になっていたコジ君を足で転がした。

コジ君は痛みに顔を歪めて、苦しそうに呻き声をあげていた。

「やめて！酷いことないで！！」

苦しそうなコジ君を見て、「ごめんなさい。と何回も謝った。私のせいで彼を巻き込んでしまった。

コジ君の傍に行こうとして豊の腕を振り解こうとしていると、髪の毛を掴まれて顔を上げさせられた。

「おまえ……」

何故か間拔けな顔をして固まっている哲を睨みつけていると、豊がヒュツと口笛を吹いた。

意味が分からなくて豊を見ると、私を見てニヤリと笑った。

「今まで、どんなに調べてもおまえの情報は拳がってこなかった。藤島も宮野も隠したがる訳だ」

豊の言葉に頷きながら、哲は厭らしい笑みを浮かべて私を見た。

「楽しみが増えたな。この女をモノにしたらあいつらはどんな顔をするだろうな？」

この厭らしい顔を見て、寒気がする。この男達に負けたくない、屈したくない。

どうすればいいか、そんなことを考えられないくらいに腹が立っていた。

「私を傷つけてもあの二人は倒せない」

「なんだと？」

凄んで見せたって、大声を出しているだけじゃ迫力なんかないよ？

「だって、葵と寛貴よりもあんたは弱い。その事実が変わらないでしょう？どんなに卑怯な手を使ってもあの二人には勝てないって言ってるの。意味、分かる？」

「なっ…てめえ！女だと思って甘くしてやれば！！」

ダン！と床に倒されて、背中を強く打ち付けた

「うっ
」

痛い！

床に倒されたまま、背中が痛んで動けずにいると、哲が私の上に馬乗りになった。

「お前バカだな。どんだけ大事にされてるか自覚してねーなんて…
宮野と藤島に言えばこんな思いをしなくて済んだのに」

憐れむような豊の言葉に、哲は薄笑いを浮かべると、私の着ていたシャツに手をかけて引き裂いた。

布を引き裂く音が響き、私は恐怖と腹立ちを同時に感じながらはじけ飛んだボタンを見ていた。

葵、早く。

早く来て　もう時間稼ぎが出来ない。

「梨桜ちゃん！」

麗香ちゃんの悲鳴が部屋に響き、彼女を見ると泣きながら私の名前を呼び続けていた。

哲を睨みつけると、薄笑いを浮かべながら残っていたシャツのボタンを引きちぎるようにして裂いた。

「オレさあ、あんたみたいな可愛い子とヤツてみたかったんだよね。ケバい女ばっかですまんねえ」

…もうダメなのかな。

弱気な考えが頭に浮かんだ時、寛貴との会話を思い出した。

『助けて。つて言ったら助けてくれるの？』

『ああ。だから必ずオレを呼べ。分かったな？』

ねえ、呼んだら本当に助けに来てくれる？

「寛貴、助けて」

「呼んだって誰も来ねえよ。二度と威勢のいい言葉が出ないようにしてやる」

Over (9)

目の前にいる男が嫌で仕方がない。
嫌すぎて直視できない。

「生意気なその口、塞いでやる」

生暖かい息がかかり、唇が塞がれておぞましい物が私の口中を這い
回った。

イヤ！イヤだ、イヤだっ！！

男の舌を思いつきり噛み、哲を突き飛ばした。

「っ！？この女！」

哲は口を押さえて立ち上がり、力任せに私を蹴った。

「イヤ！梨桜ちゃん、梨桜ちゃん！！」

「梨桜さん！！」

蹴り続けられて哲の足が胸に当たった時に、覚えのあるイヤな感覚
が背中を走った。

肋骨やっちゃったかも

「やめて！梨桜ちゃんに酷いことしないで！！」

麗香ちゃんが狂ったように泣き叫んでいて「大丈夫」と言いたかつ
たけれど呼吸する度に胸が痛くて何も言えなかった。

「うるせえ！その女を黙らせる！！」

「私に触らないで！梨桜ちゃんに酷いことしないで！！藤島先輩と宮野君が来てくれたらあんだ達なんか潰されるんだ！」

圭吾が麗香ちゃんを部屋から連れ出そうとしたけれど、麗香ちゃんがそれに抗い、圭吾の手を振り払って噛みつくように叫ぶと、圭吾はそれに被せるように大声を上げた。

「来ねえよ。朱雀は来ない！」

まるで、自分に言い聞かせるように言う彼に悲しそうな顔で麗香ちゃん話しかけた。

「ねえ、圭吾は良く私に朱雀の話をしてくれたよね？藤島先輩は圭吾が話してた通りの人だよ。強くて、優しい人だよ。だから、絶対に来てくれる」

ホントに来てくれるかな…

胸が痛くて浅い呼吸しかできない。体のあちこちが痛い…

「へえ、泣けるんだ」

こんな奴らの前で泣き顔を見せたくなかったけれど、痛くて、苦しくて、悔しくて…涙が浮かんでくる。

「その泣き顔、ソソるな」

哲が私を見下ろしながら腕を伸ばして来た時、バァン！と鉄に何か

が当たるような物凄い音がした。

「なんだ!？」

間に合った

男達の喚き声が聞こえると、扉が開いて派手な頭をした男達が飛び込んで来た。

「青龍と朱雀がっ」

助かった、と思った時、ぐいっと腕を引かれ半身を起され、喉元に冷たいものが当たった。

「梨桜ちゃん!」

真っ青になった麗香ちゃんの様子から、ナイフが私に向けられたのを悟った。

本当に卑怯なんだね…冷めた気持ちで目だけを動かして哲の顔を見上げると、焦った様子で扉を見ていた。

「哲さん!宮野と藤島が来ます!」

「動いたら刺すからな」

そう言うと、ナイフが喉に食い込んだ。

どこまで愚かで卑怯なんだ　この男に総長を名乗る資格があるのだろうか?

「梨桜!」

葵の声が聞こえて、その声に力が抜けそうになった。たった数時間しか離れていなかったのに、物凄く長い時間会わないでいたような気がした。

「ふっ、ハハハ！」

哲の笑い声に鳥肌がたった。
おぞましい

「梨桜」

私を見た葵の目が見開かれて、動きが止まった。
ごめんね…

「ごめん、足手纏いになっちゃった」

私が言うと、ぐいっとナイフが押しつけられて、ぷっつという感触があり、痛みがじわりと広がった。

「てめえ、傷つけんじゃねえ！」

葵の顔が青ざめている。こんな顔をさせるのは2回目だね、ごめんね。

「青龍が先に来たか。おい、この男と縁を切ってオレのところ来い」

哲が私に言った。

本当にバカじゃないの？この男

「あんだ頭悪すぎでしょ」

私が言うと、豊が呆れたように言った。

「お前の方が頭悪いんじゃないの？自分が置かれている状況分かってる？」

分かってる。

だけど、腹が立って仕方がない。

「言っておくけど、葵と縁を切るとかあり得ないから。私と葵の関係で誰かに命令されたくないんだけど？」

豊を睨みつけて言うと、バタバタと足音がした。

「梨桜！」

来てくれた。

寛貴と愁君が部屋に入ってきて、その後に拓弥君と悠君が続いた。私と哲を見てみんな動けなくなってしまった。

「ねえ、こんなに集まってきちちゃったけど、どうするの？」

「だからおまえが人質なんだろ」

呼吸をすると胸が痛くて苦しいけれど、黙ってはいられない。

豊には無理かもしれないけれど、この頭が悪そうな哲が相手なら隙を作れるかもしれない。

「でも、どう考えてもあんた達が不利でしょ」

脂汗が背中を伝って行く。

この感覚は去年、肋骨を骨折した時と同じで、これからの治療の事を考えるとうんざりした。

「立て」

無理。

顎にかけられている腕がぐいつと引かれた。

「いつ、た」

痛みにぎゅっと目を閉じると葵が私を呼んだ。

「梨桜！」

喉にかかる痛みと背中痛みが一緒になって、汗と一緒に涙が流れた。

「女が刺されてもいいのか？どけよ」

無理矢理立たされて、引きずられるようにして歩いた。
誰も私達に近寄れなかった。

「あおい」

息を飲んで葵に手を伸ばした。

そっちに行きたい。葵の所に帰りたい！

「動くなっつってんだよ！…ざまあねえな！紫垣だったチームが女一人のことで総長二人が動けなくなるなんてな！」

寛貴が悔しそうに眉を顰めた。

「てめえ…」

悔しそうに言うと、哲が寛貴達にナイフを向けて笑った。

「お前等のその顔が見たかったんだよ！」

楽しそうに笑う哲の顔を見上げようとした時、葵と目が合った。咄嗟に両手で哲の腕を掴むのと同時に葵が動いた。

「梨桜、目エ閉じてろ！」

ぎゅっと目を閉じると“ガッツ”という音がして、肩を強く引かれた。

「痛っ」

「ごめん。少しだけ我慢して」

その声に目を開けると、愁君が私の肩を抱いていた。「女の子は見ちゃ駄目だよ」そう言ったけれど、愁君の肩越しに見えてしまった。哲を殴りつけている葵と、豊を殴っている寛貴。麗香ちゃんを助けている悠君と圭吾を殴っている拓弥君。

愁君が私を支えながら床に座らせてくれると「葵」と呼んだ。

葵は哲から離れて私の傍に来ると、自分が着ていたシャツを脱いで私に着せてくれた。

「コジ君が怪我をしているの。私の所為なの」

「…」

葵は何も言わずに、豊に切られた髪の毛に触れると、その手を哲に殴られた頬に当てた。

悲しそうな目で私の顔を見る葵が涙を見せずに泣いているような気がして、葵の目元を指で撫でると目を閉じた。

「ごめんなさい」

そう言うと、目を開けていつものように優しく笑った。

「ほら…」

腕を差し出されて、いつものようにぎゅっとしてもらいたかったけれど、体中が痛かったから額を葵の胸につけた。

そろそろ限界かも。葵と寛貴達が来てくれて気が抜けた…

「呼吸が不自然なのはどうしてだ？」

「哲に蹴られた。上手く呼吸が出来ないの」

そう言うと、私の背中に腕が当たらないように抱き上げてくれた。

「桜庭が迎えに来ているから 涼さんのところに行こうな」

「ん」

その言葉に安心して目を閉じた。

すぐ傍にいるのに自分が助けに行けないなんて…歯痒くて、悔しい。

梨桜ちゃんが宮野の目元を指で撫でていた。

慈しむように、触れている。

悲しそうな二人の顔を見ていたら動けなかった。

前にもあった。

宮野に対して、彼女はオレ達には見せない表情をする。

彼女は宮野の胸に自分の額をつけて、体を預けている。梨桜ちゃんの耳元で話す宮野に彼女は小さく頷いて安心したように目を閉じていた。

宮野が梨桜ちゃんを抱えて部屋を出て行き、それを見届けると三浦は床に横になっていた小嶋に歩み寄った。

小嶋は酷く殴られていて、辛そうだった。

コイツは青龍の幹部だ。喧嘩は強いハズなのに、ここまで酷く殴られているのは、きつと梨桜ちゃんを盾にとられて無抵抗で殴られたんだろう。

「コジ、大丈夫か？」

卑怯なチームに再び腹立たしさを覚えながら小嶋を見てみると、奴は申し訳なさそうに目を伏せた。

「すみません愁さん」

「謝るな」

三浦が小嶋の身体を支えて起き上げると、体の傷を確かめていた。

「私のために来てくれたの！梨桜ちゃんは私の所為で！」

オレの隣にいた笠原が泣きながら言うと、寛貴さんが笠原の前に屈み「何があつた？」と聞いた。

「梨桜ちゃんは私の所為で酷い目に遭わされたの！あの男に殴られて、無理矢理…服を破られて、キ…」

笠原は泣きじゃくり、それ以上は言葉にならなかった。

寛貴さんは、泣きじゃくる笠原から離れると、床に倒れている北陵のトップに歩み寄り胸ぐらを掴んで引きずり起こした。

「拓弥、もう一本ずつヤツておけ」

怒りで声が震えている。こんなにキレている寛貴さんは初めて見た。

「了解」

呆気なく再び床に沈んだ北陵の幹部達を見下ろしていると、小嶋が苦しそうに呻きながら自分で立ち上がるうとしていた。

自力では立てない小嶋を三浦と寛貴さんが支えると、小嶋が申し訳なさそうに眉を下げた。

「すみません」

「謝るなって言ってるんだろ？」

「でも、オレを庇って梨桜さんが怪我して」

「もう言うな。梨桜ちゃんは葵が病院に連れて行ったから安心しろ」

三浦の言葉に、さっきの梨桜ちゃんと宮野を思い出した。

「笠原も念の為に病院で見てもらえ。悠、いいな？」

寛貴さんの言葉に頷くと、拓弥さんが携帯を片手に振り返った。

「オレはこの始末をつける。梨桜ちゃんの容態がわかったら連絡くれ。終わったら病院に行く」

拓弥さんはそう言い、傘下にいるチームに連絡を取り始めていた。小嶋は三浦と寛貴さんに両脇を支えられて部屋を出て行き、オレは泣き止まない笠原を宥めながら車に乗せた。

車の中でも笠原は泣いていた。

「梨桜ちゃん…大丈夫かな」

泣き止まない笠原に少し苛立ちながら窓の外を見ていた。

「わかんねえよ。いつまで泣いてんだよ」

オレが泣きたいっつーの。
梨桜ちゃんの宮野に対する態度を見て、アイツ以上の存在にはなれないような気がして打ちのめされていた。

「だって、私の所為だっ」

心にあることを吐き出さないとコイツも辛いんだろうな。そう思っ
て笠原に声をかけた。

「何があつたか話せよ」

「朝、登校したら校門に圭吾がいて、話があるって言われて」

「ついて行ったのかよ？」

こくと頷き、オレは呆れて溜息をついた。

笠原だって梨桜ちゃんが狙われているのは知っていたんじゃないの
か？行動が軽率過ぎる。

「いくら元カレだからってやばいだろ」

「圭吾の学校の人に捕まったら梨桜ちゃんが来てくれて、梨桜ちゃ
んはっ」

また泣き出して、会話にならなくなった。

「あゝもう、好きだけ泣け。梨桜ちゃんの前では泣くなよ？」

オレは笠原の頭を撫でた。

病院に着くと、梨桜ちゃんは処置室で治療を受けていた。

先に到着していた寛貴さんと三浦が処置室の前にある待合室の椅子に座っていた。

宮野の姿が無くて周囲を見回して捜すと、少し離れたところで看護師と話をしながら、何かの書類に書き込んでいるように見えた。

何やってんだアイツ…

宮野を見ていると、処置室の扉が開いて白衣を着た男の人が出てきて「葵」と呼ぶと宮野は処置室まで来た。

「入れ」

そう言われて宮野は処置室に入って行き、オレも後に続こうと立ち上がった。

「お前等はそこで待ってる」

「なんで宮野だけなんだよ！？梨桜ちゃんの怪我はどうなんだよ？」

オレが言つと、医者らしいその人はオレを見下ろして苛立たしげに言い捨てた。

「うるせえ、ガキはそこで待ってる！」

何なんだコイツ！？

やっぱり分かんねエ！

看護師に「楽な姿勢で休んでね」そう言われて、少しだけ起こしたベッドに寄りかかるようにして休んでいると、涼先生に顔を覗きこまれた。

「痛い？」

その言葉に素直に頷いた。
殴られて切れた口の中が痛い。頬が痛い。右肩が痛い。胸と背中が痛い。

「自分が女の子だって分かってる？」

もう一度頷いた。

「あいつらに、…レイプされる位なら、怒らせて殴られて時間を稼いだ方がマシだと思ったの」

哲にキスされた事を思い出すだけでゾツとする。

そう言ったら涼先生は大きな手で私の頭を撫でた。

「それでも君は女の子なんだ。葵が間に合ったから良かったようなものの…」

私もあの時同じ事を考えていたから頷いた。

今思い返すと、あと少し遅かったら。そう考えると凄く恐ろしい。

「ごめんなさい」

謝ると涼先生は私の手をポンポンと叩いた。

「約束だぞ？…葵が心配してるよ」そう言って涼先生は処置室の扉を開けて葵を呼んだ。

「なんで宮野だけなんだよ！？梨桜ちゃんの怪我はどうなんだよ？」部屋の外から悠君の声が聞こえた。
来てくれんだ…ずっと嘘をついていたことを彼等に謝ろう。

「梨桜」

葵が枕元にある椅子に座り、湿布を貼られた頬を撫でた。

「痛いか？」

「うん。葵、黙って勝手な事してごめんね」

「…朱雀の倉庫で梨桜の髪の毛を見たときは手遅れかもしれないと思った」

もう一度、ごめんね。と謝り葵の顔に手を伸ばして頬を撫でると目を伏せた。

「二度とこんな思いはしたくない」

「うん、約束する。これからはちゃんと葵に言う」

扉が開くと数人の足音がして、私が寝かされていたベッドの前で止

まった。

葵から視線を移すと、寛貴達が居た。

「梨桜ちゃん」

悠君の隣に立っている麗香ちゃんが泣いていた。

「麗香ちゃんは大丈夫？何もされてない？」

私が聞くと、ぼろぼろと涙を流しながら頷いた。

「私は大丈夫。私の所為で…ごめんなさい」

私が勝手にやった事だから彼女が心を痛めることはないのに…

気に病まないで欲しい。そう思つて麗香ちゃんから葵に視線を移すと、『駄目だ』と首を横に振った。

葵の制止を無視して、ベッドに肘をついて身体を起こそうとすると、葵に止められた。

「駄目だ」

起こしかけた体をベッドに戻されると、

「梨桜ちゃんと宮野って何なんだよ」

悠君が不機嫌そうに言い、葵の肩越しに寛貴と目が合った。

「何で梨桜ちゃんが宮野の携帯を持つてるんだよ。どうして宮野だけがこの処置室に入れたんだよ！？二人はどういう関係なんだ？答えろよ宮野！」

前に寛貴から言われた事を思い返しながらかんしゃく問い質す悠君を見ていた。

私の口から説明しなきゃ…

「悠、やめろ」

寛貴が悠君を止めたけれど、彼が疑問に思うのも無理はない。

…全部話して、謝ろう。

悠君に向き合い決心した。

「悠君、あのね！私…」本当につるせえガキだな！」

私の言葉を遮った声に驚いた。

…どうして？

「そんなのは後だって構わないだろ！？怪我人を労われないバカは出て行け！」

私と葵の事情を知っている筈なのに、どうして止めるの？

「…涼先生？」

Confession (1) side: 悠

オレに向かってさつきから暴言を吐く医者。何なんだコイツ、すげえ腹立つ

医者が梨桜ちゃんを抱えると、梨桜ちゃんは、“イヤ”と抵抗していた。

「涼先生、ヤダッ」

「自覚してないみたいだけど、君の体はもう限界なの。続きは明日にしてもう寝なさい」

自分の腕の中に抱えた梨桜ちゃんに、駄々を捏ねる子供に言い聞かせるように説き伏せて医者は歩き出した。

「まだ平気！涼先生下ろしてっ」

身を振ろうとして痛みに顔を歪ませている。

医者は苦笑いを浮かべながら梨桜ちゃんに「じっとしてないから痛むんだぞ」と言い聞かせていた。

「大人の言う事は素直に聞きなさい。君にこれ以上何かあったら、オレは殺される…梨桜ちゃんなら分かるだろ？」

言われた当人は少し頬を引き攣らせていた。

三浦は笑いを堪えていて、宮野は無然としている。オレにはさっぱり分かんねえ…

「5代目、オレ、焦らされるのは性に合わないんですけど？」

苛立ちを抑えている寛貴さんの言葉に耳を疑った。今、5代目って言ったか？

「5代目？」

オレが繰り返すと、医者には顔だけをこちらに向けてニヤリと笑った。

「葵、愁：お前等が蒔いた種だ。自分達で始末つけるよ？」

そう言うと、梨桜ちゃんを抱えたまま部屋を出て行ってしまった。

「説明しろ」寛貴さんが苛立ちを隠さずに言うと、宮野は思い切り不満そうな顔をした。

「場所を変える。ついて来いよ」

三浦に言われて連れられて来たのは、病院から少し離れた敷地に建てられていた豪邸のリビングだった。

「なんだよこい」

「ウチの離れ。兄貴とオレしか住んでない。座れよ」

寛貴さんちもデカイけど、こいつんち金持ちだな…

リビングを見回しながら、寛貴さんの隣に座ると、向かいでは宮野がソファに座り深く息を吐いた。

テーブルに置かれていた煙草の箱から一本取り出して銜えると、冷

蔵庫を開けていた三浦がライターを投げた。

それを片手で受取り、煙草に火をつけた。その仕草に男のオレでもゾクリと背筋が粟立った。

綺麗な男…

「梨桜ちゃんにバレないようにしろよ？」

煙を吐き出しながら、自分をからかう三浦を睨んでいた。

「るせ…」

オレは我慢出来なくて口を開いた。

「5代目ってなんだよ」

「お前の兄貴は、紫垣の5代目総長、三浦涼…そうだろ？」

寛貴さんが言うのと三浦が頷いた。「5代目ってあの？」 寛貴さんに聞くと、「そうだ」と頷いた。

三浦の兄貴があ有名な紫垣5代目…

頭がキレて喧嘩が強い。初代と並んで伝説のように語られている人がさっきの医者？

チームに入っていれば誰でも憧れる人が…さっきからオレをガキ扱いしていたあの医者。

正直、シヨックを受けたけれど、今一番聞きたいのは違う。と気を取り直した。

梨桜ちゃんだ。オレが知りたいのは彼女とコイツらの関係。

「前に5代目が学校に梨桜を迎えに来たことがあったよな。どうしてだ？」

寛貴さんが聞くと三浦が頷きながら答えた。宮野は煙草の煙を眺めていた。オレ達の話聞いていいのか、いないのか…

「兄貴は彼女が東京に引越してきてから診ているから。主治医としてだけじゃなく、兄貴は梨桜ちゃんを可愛がっているからな」

三浦は、主治医の弟として出会ったのか？そこから親しくなったのか…

「どうしてだよ？お前らと梨桜ちゃんは面識があつたのかよ？」

オレが聞くと、奴は煙草を灰皿に押し当てて火を消した。

「梨桜とは面識があるとか、そういう関係じゃない」

「じゃあ、どういう関係なんだよ…梨桜はオレの女だ。とか言うわけじゃないよな
知りたい気持ちと、知りたくない気持ちが混ざり合ってぐちゃぐちゃになりそうだった。」

「先に言っておく。彼女に眼鏡を掛けさせて素顔を隠させたのはオレ達だ。オレ達との…特に、葵との繋がりを隠すように言ったのもオレ達だ」

あれは、弟が眼鏡をしろって言ったから掛けていたんじゃないのか？

「本当は朱雀との接触も避けたかった」

宮野がボソリと言い、三浦がテーブルに置いた水を口に運んだ。

「何の為にそんなに手の込んだ事をした？梨桜もそれを望んでいたのか？」

出会った頃の梨桜ちゃんを思い出していた。確かに、生徒会に入る時にはハッキリと嫌だと言われた。

あの言葉と態度が宮野に言われたから…コイツらの為に発していたモノだとしたら…

オレって、嫌われてたのか？しかも朱雀だという理由で…

「最初、梨桜は嫌がった。だけど、アイツを護る為にオレとの繋がりを隠したんだよ」

繋がりがってなんだ？

「梨桜ちゃんには弟がいるだろ？」

分かりきったことを聞いてくる三浦にイライラした。

だったら何なんだよ？梨桜ちゃんが大切にしている弟と宮野が何の関係があるんだ！？

「オレだよ」

は？ 宮野は何を言っているんだ？

「梨桜の弟はオレだ」

「ウソだっ！」

咄嗟に言葉が口をついて出ていた。
そんなの信じられるかよ!?

「信じろっていう方が無理じゃないか？」

寛貴さんが宮野を睨みつけて言いながら立ち上がった。寛貴さんの言う通りだ。

梨桜ちゃんの弟が宮野。そう言われて『ハイ、そうですか。そうだったんだ』と信じられるわけがない。

「オレは梨桜の双子の弟だ」

「…双子？梨桜とおまえが？」

三浦が苦笑いを浮かべながら寛貴さんに言った。

「信じたくない気持ちは分かる。でも葵と梨桜ちゃんは双子だ」

「梨桜に直接聞く」

そう言つと、寛貴さんは部屋を出て行った。

Confession (2)

自分の手がびくりと動くと、それに応えるように握られた。目を開くと白い天井、左を向くと点滴が吊るされているスタンド、右を向くと…なんて顔をしているの？

「葵…」

「ん」

思い詰めたような顔をしている葵の頬に触れた。

「そんな顔、しないで？」

こんな顔をさせているのは私の所為だよね？ごめんね

「梨桜」

「慧君、来てくれたの？」

葵の隣に慧君が居た。京都から来てくれたの？皆に迷惑かけちゃった…

「心配かけてごめんなさい」

「痛いだろ？話さなくていい」

慧君が私の頬を撫でてほほ笑んだ。

ああ、慧君だ…大好き。

「コジ君は？」

「見かけは派手だけど、腕を骨折したただけだ」

骨折という言葉に眉を顰めると、葵と慧君が揃って眉を吊り上げた。二人ともコワイ…

「梨桜も同じだからな」

「そうなの？」

怖い顔をしている葵に問いかけると「オレ、もうやだ」そう言っ
て項垂れてしまった。

慧君が葵の代わりに説明してくれた。

「肋骨が一本。肩を強打した打撲と全身の打撲…涼に聞かなかった
のか？」

お説教されてたから聞かなかったかも…

笑って誤魔化そうとしたら、胸が痛んだ。

「イタ…」

「2、3日大人しくしてなさい。もう少し眠りなさい」

少し眠って目を覚ますと、部屋には葵しかいなかった。

「葵、ちゃんと休んでる？」

「オレの事はいい」

葵はベッドを起こすと水を飲ませてくれた。

「慧君は？」

「寝に帰った。後でオレと交代する」

うん。と頷いた

「葵、来てくれてありがとう」

「トラブルに巻き込まれたのは分かったけど、最初は見当がつかなかった。朱雀の倉庫に行つて海堂から笠原の事で担任から電話があった事を聞いて北陵だと思った。その後にはコジとオレの携帯のGPSで居場所が分かったんだ」

仲が悪いのに寛貴達の所に行ったんだ。倉庫で喧嘩にならなかったのかな

「寛貴に迷惑かけちゃったね」

「どうしてそう思うんだ？」

どうしてって…

私は朱雀の人達に良く思われていないから。私は寛貴に釣り合わない。そう思われているのは良く分かってる。

「葵の所とは違うでしょう？朱雀としてあの倉庫に来たとしたら…
下の人達は納得しないんじゃないかなって思ったの」

きつと寛貴だつてその事は良く分かつてると思うんだよね。

「それは、本当のお前の事を誰も知らないから…紫苑と朱雀にそう
思わせているのはオレのせいだよな」

だから、そんな顔しないで？一人で考えないで。

葵の頬に指を伸ばして、軽く摘まんだ。

「悩むの禁止」

葵はフツと笑つて、私の髪の毛に触れた。豊に切られた髪の毛は、
私の頬の所で不揃いに揺れていた。

「明日、揃えてやるよ」

え、できるの？

「葵がやるの？」

そう言うと、ムツとした顔をして殴られていない方の頬を軽く摘ま
まれた。

「不満かよ」

「可愛くしてね？おかつぱにしないでね？…葵、お願い」

心を込めてお願いすると、摘まれた頬を引っ張られた。

酷いよ！

「ああ…ヤダ…」

扉がノックされて、葵が「ハイ」と返事をしてしまった。ちよつと、恥ずかしいからその手を離して！

扉が開いて、部屋に入って来たのは寛貴だった。

「ひろ…」

頬を摘ままれたままの恰好を寛貴に見られてしまった。

「…」

病室に入ってきた寛貴と葵は鋭い視線を絡み合わせたまま何も言わない。

いつも以上に緊迫した雰囲気にも言葉が出なかった。

昨日、私が涼先生に病室に連れて行かれた後に何があったんだろうか？これから聞こうと思っていたのに…

葵を見ると椅子から立ち上がって私を見下ろした。

さっきと同じ顔…考え込んでいたのはこの事？

「いつものでいいだろ？」

その言葉に頷くと葵は病室を出て行ってしまった。

寛貴は何も言わずに私を見ていて居心地が悪くなってしまふ。

葵は何を話したんだろう？

「心配かけてごめんなさい」

「ああ…」

「…」

会話が続かない。

どうしよう、と思っていると寛貴が口を開いた。

「似てないんだな」

その言葉に、葵が何を言ったのかがようやく分かった。

「葵との事…ずっとウソをついていてごめんなさい」

頭を下げて謝った。

「…頭あげる」

頭を上げようとしたらズキン！と肩と胸が痛んだ。

自分の力ではどうにもできず、頭を下げたままでしたら「梨桜？」と呼ばれた。

「ごめん。痛くて動けない…」

寛貴が支えてくれて、私の身体を起こしてくれた。

「本当にごめんなさい。許してもらえないようなコトをしたとは思っていないから…生徒会を辞めた方がいいなら抜ける」

私の表情から心を読み取ろうとしているかのように真っ直ぐに見つめられた。

「梨桜は辞めたいのか？」

分からない。

率直に、素直にそう思う。

寛貴はどう思っているんだろうか？辞めて欲しいと思っているの？

「宮野が辞めろって言ったら辞めるのか？」

その言葉には首を横に振った。目を伏せたまま「今は自分の考えで生徒会にいるんだよ」

そう言うと、寛貴が溜息をついたのを感じた。

呆れた？

「女なのにこんな怪我をして…どうして一人で行った？オレに言えって言っただろ」

呆れてないの？

顔を上げて寛貴を見ると、少し怒っているような顔をしていた。

総長モードで怒っている顔じゃないことに少し安心してもう一度「ごめんなさい」と言うと、寛貴はさっきまで葵が摘まんでいた頬に指で触れた。

「笠原から昨日の事を聞いた。怖い思いをさせたな」

哲にされたことを思い出し、昨日の嫌悪感が蘇ってきてギュッと目を閉じた。

嫌だ…気持ち悪い！

「梨桜」

名前を呼ばれて目を開けると、目の前に寛貴の顔があった。

「嫌な記憶は塗り替えればいい。…弟にはできないよな？」

なに？何の事！？

寛貴の言葉の意味が分からずに戸惑っていると唇が触れた。

「噛むなよ？」

「な…なんで？」

寛貴は唇を離すと、不機嫌そうに「他の男にされてんな」そう言い、もう一度唇を重ねた。

Confession (3)

甘い声で「梨桜」と呼ばれ舌が絡めとられた。

背筋がゾクリとした。

昨日のおぞましい震えとは違い、ゾクゾクと何かが込みあがってきて気がつくところのまま流されてしまいそうな私がいた。どうしてこうなっているの？

葵との関係を黙っていたことを謝りたかっただけなのに…

息があがってしまい、寛貴の腕を押し分けると漸く唇が離れた。

「悪い…呼吸が辛い忘れてた」

ゼイゼイと呼吸をすると、また胸が痛んだ。

息も乱さずに平然としている寛貴を見たら腹が立った。

「大丈夫か？」

首を横に振り、視線で「酷い！」と訴えた。

痛いよ…

「オレの事…呼んだんだろ？」

唐突に言われて何のことか分からなかった。「なに？」と言葉に出来なくて、視線だけを寛貴に向けるともう一度「助けてって呼んだんだろ？」と言われた。

…あの時、もう駄目かなって思った時に寛貴の言葉を思い出したんだよね。

「梨桜？」

答えを促されて、コクリと頷いた。

やっと呼吸が普通に戻り、握りしめていた手の力を抜くと寛貴がペ
ットボトルを差し出した。

「呼んだよ。来てくれてありがとう」

「宮野が倉庫に来て自分の携帯を梨桜が持つてるって言い出した時
は何のことかわからなかった」

水を一口飲んで、もう一度呼吸を整えてから寛貴を見た。

「一人で来ないと麗香ちゃんに酷いことをするって言われたの。一
人で行くのは危険だと分かっていたけど心配だったの。寛貴には迷
惑かけたよね、ごめんなさい」

そう言うと、寛貴はムツとしたように私を見た。

…気に障ること言っただかな？

「宮野は当然で、オレには迷惑をかける。どうしても思うんだ」

分かってるくせにどうして聞くの？自分で良く理解してるつもりだ
けど言いにくいよ。

答えたくなくて、俯いていると不機嫌そうな声で「梨桜」と名前を
呼ばれて顔を上げた。

「だって、私は朱雀の人達に良く思われてないでしょう？私の事を
助けに来たら、寛貴の下についている人達が反発するかもしれない。

…違つ？」

違わないでしょう？その気持ちを込めて寛貴を見ると、フツと笑った。

「そんなくだらないことを気にしていたのか。オレが決めたことに従えないなら、チームから抜ければいい。それだけだ」

「…」

返す言葉もなく、ただ寛貴の顔を見ていた。

なに？そのオレ様な考え…総長だからって強引すぎじゃない？

「宮野だつて似たようなものだろ」

そう言つて寛貴は笑つた。…否定できないのが悲しい。

「だから、生徒会を辞める必要はない。…分かつたな？」

相変わらず強引…

それは悠君の事を含めてそう言っているんだろうか？

「なあ、梨桜」

悠君にも謝らないといけないな。

水を飲みながら考えていると寛貴が私をジッと見ていた。

「なに？」

昨日から色々な事がありすぎて、何だかとても疲れた。私にとって

はキャパオーバーなのかもしれない。

「おまえ、体が熱くないか？」

「…そうかな？」

自分の額に手を当てて首を捻った。

涼先生から、熱が上がるかもしれない。と言われていたけれど、熱っぽい自覚はあまりない。

「さっきキスした時に口の中が熱かったぞ。熱があるんじゃないのか？」

その言葉に顔が熱くなるのが分かった。今ので絶対体温が上がった！それよりも、どういう熱の測り方してるのよ！？

「なっ…何でそんな…」

寛貴は、枕元にあった体温計で、体温を測らせると「やっぱりな」と言い病室を出て行った。

すぐに看護師が来てもう一度熱を確認すると、私はベッドに寝かしつけられて…

二日間、高熱にうなされた。

「はあ！？ウソだろ！！あの悪魔みたいな男と梨桜ちゃんが姉弟！？」

生徒会室に拓弥さんの声が響いた。

三浦の家から帰った次の日、生徒会室で拓弥さんに事情を話した。

「宮野が自分で言ってた」

寛貴さんは学校を早退したらしい。

もしかしたら梨桜ちゃんの所に行ったのかと思ったけれど、どんな顔をして彼女に会えばいいかわからなかったから特に詮索はしなかった。

「あの可愛い梨桜ちゃんが…宮野と双子」

拓弥さんはどこかへトリップしてしまった。

寛貴さんも言っていたけど、信じてるって言う方が無理な話だ。

「嫌だ、オレは認めたくない。梨桜ちゃんが…よりによって…」

オレだって信じたくない！

でも、双子だと聞いて、梨桜ちゃんが宮野に向ける表情が「家族だから」その理由を知って安心している自分もいた。

「拓弥さん、あのさ」

「…」

いつまでもトリップしたまま戻ってこない拓弥さんの頭をゴンと殴った。

「拓弥さん、帰ってきた？」

「いってーな悠！本当に双子なのか？あの二人全然似てないだろ」

「宮野は双子って言ってた」

でも、梨桜ちゃんて宮野より学年が下なんだよな。去年、大怪我をして入院していたって言ってよな。留年したのか？

だとしたら、余計に宮野と梨桜ちゃんが繋がっているなんて考えつかなかった。自分より学年が上の弟なんて、誰だって思いつかないよな。

「悠、さっきオレに話しかけたろ。なんだ？」

そうだ、聞きたいことがあったんだ。オレに暴言を吐いたあの医者、否、5代目…

「拓弥さんは紫垣の5代目が三浦の兄貴だって知ってた？」

そう聞くと拓弥さんは真顔になった。

「知ってた。年に一回、歴代の総長と副総長が集まる会があるだろ？その時に知った。伝説、なんて言われて大袈裟なだけだと思っただけ、器のデカイ人だと思っただけ」

器がデカイ人…認めたくない。オレは幹部になって日が浅いから、

紫垣の事とかもあまり知らないけど、5代目と初代は誰もが憧れる人だから、会えただけでもいいのか？

「悠、宮野が急に女の送り迎えを始めたのって…」

梨桜ちゃんの為って事か…

思い返せば、「ああ、だからか」そう思えることがある。

定例会で背中を痛めた時。梨桜ちゃんが朱雀のファンに嫌がらせを受けた時…

「悠、大丈夫か？」

「え？」

突然拓弥さんに聞かれて、どうしてそんなことを言われたのかが分からなかった。

「泣きそうな顔してるぞ？」

「別に、泣いてなんかない」

オレの顔を、ジッと見ていたけれどニヤツと笑った。

この人には嘘はつけないのは分かっているけど、たまには強がってもいいだろ？

「だからあの子は手がかかるって言っただろ…おまえ、寛貴の本気に勝てるか？」

拓弥さんは机に頬杖をつき、窓の外を眺めながら言った。

オレの顔を見ないでいてくれるのはこの人なりの優しさだと思う。

「長い付き合いだけど、アイツが女に対して本気になるのは初めて見たな…」

遠くを見ながら「見ものだ」とわざと茶化すように言っていた。その時、携帯が鳴り、拓弥さんは画面を見て笑った。

「なんだよ、今お前の噂話してたんだぞ」

寛貴さんか…やっぱり梨桜ちゃんの所に行っていたのか？

会って何を話したんだろう？オレはこんなところから出遅れている。

「は？…これから？…仕方ねえだろ、5代目の言う事には逆らえないからな。分かった、悠を連れて向かう。じゃあな」

拓弥さんは電話を切って立ち上がった。

「倉庫に行くぞ」

「なんで？」

「話があるから5代目が来るんだと…」

口調は面倒そうにしていたけれど、その顔は楽しそうに笑っている。どんな事も楽しみに変えてしまう拓弥さんはある意味スゴイと思う。

オレと拓弥さんが倉庫に着くと宮野と三浦が居た。

「お前等も呼ばれたのか？」

「ああ」

三浦が携帯をいじりながら返事をした。宮野はソファに足を組みながら座り、目を閉じていた。

…こいつ、もしかして寝てる？

「目元とか似てるだろ？」

宮野を見ていたオレに三浦が小声で言い、口角を上げた。似てるとか、似てないとかじゃなくて、綺麗すぎるその顔を見ていると何だか腹が立つてくる。

「わかんねえよ」

「並んで寝ているのを見比べると、良く分かるぞ」

三浦の言葉に頷きかけて、ハッと留まった。ちよつと、待て。『並んでる』ってなんだよ！？オレはよっぽど怪訝な顔をしているのか、三浦はオレを見て苦笑した。

「愁、うるせえ」

宮野が言い、閉じていた眼を開いた。

「オレの顔は見世物じゃない。双子じゃなくても姉弟なら似てるどころがあつて当たり前だろ」

それだけを言うと、また目を閉じてしまった。

見世物じゃないと言われても、つい、ヤツの顔を見て梨桜ちゃんと似ているところを探してしまう。

扉が開き、寛貴さんと5代目が入ってきた。

「お前達の方が先に着いたか」

5代目の後ろにいた人に驚いた。どうして梨桜ちゃんの叔父さんがいるんだ？

オレと拓弥さんが叔父さんを見てみると、5代目は「変わってないな」と言いながら部屋を見回して笑った。

「慧さん、どうぞ」

その行動に『待ってくれ』と言いつうになり、寛貴さんに視線で制された。

なんで？梨桜ちゃんの叔父さんだから？

総長室の一番上座に座るべき人は、その席を叔父さんに譲り、譲られた本人も当然のように座っていた。

「葵、寝てないのか？」

叔父さんが言い、宮野は頷いていた。

双子って事は、宮野にとってもこの人は叔父さんになるんだよね…

「お前等、北陵の倉庫に乗り込んだ後はどうした？」

5代目が言うと、叔父さんはオレ達を見回し煙草に火をつけた。

「勿論、潰したよな？」

そう言い、目を細めて宮野と寛貴さんを見る叔父さん。その眼光は鋭くて、前に屋上でオレ達に向けた時と同じだった。

「倉庫は潰しましたけど」

拓弥さんが、外向きの笑顔を浮かべながら言うと叔父さんは口角だけを上げて笑い、「甘いな」と言った。

潰したのに甘いって…何をさせたいんだよ？

「全部潰せよ。系列も含めてな」

5代目が苦笑しながら叔父さんを見ていた。

無関係の人に命令されたくねえんだけど…オレと拓弥さんが無然としたけれど、寛貴さんは叔父さんを見ていた。

「オレはお前達に『くだらない意地の張り合いをして足元を掬われないようにな』って言ったよな？…まんまと掬われやがって馬鹿が。梨桜まで巻き込みやがって」

やっぱりこの人の雰囲気は一般人じゃない。

この人、何者なんだよ？5代目が気を使っているのも納得がいかない。

「全部潰せ。分かったな？」

「慧さん 抗争を勧めないでくれませんか」

「どつという関係なんですか？」

拓弥さんが聞くと、叔父さんは一瞬、拓弥さんに目を向けたけれど、すぐに5代目に向かって不満をぶつけていた。

「どう考えても腹が立つだろ、梨桜にあんな怪我を負わせやがって涼、徹底的に潰させる」

「だから 慧さん」

「お二人はどつという関係なんですか？つて聞いているんですけど」

拓弥さんの問い掛けに答えなかった叔父さんは、寛貴さんが凄みを持った声で聞くと、視線をこちらに向けて笑った。

宮野も何年か経ったら、こんなにいい男になるんだらうか？

聞かれた本人が答える代りに、5代目が苦笑いを浮かべながら教えてくれた。

「慧さん、大人気ないですよ。お前達は年代が離れているから会ったことないだらうけど この人は紫垣の初代だ」

「はああ！？初代！？」

オレはまた大きな声を出して5代目に睨まれた。

「うるせえガキだな。青龍の姫だ、朱雀の姫だとか騒いでいるようだけどな、梨桜は紫垣初代総長の姪だ。おまえらのチーム総力あげて守れよ。それが出来ないなら、オレはおまえらから梨桜を取り上げる」

今まで黙って聞いていた宮野の目が鋭くなった。

「いくら慧兄でもそれは許さない」

寛貴さんも不敵な笑いを浮かべながら叔父さん：初代を見た。昨日から、思いもしなかったことが次々に起きて、知らされる事実
に頭と感情がついて行かない。

「初代の言うことでもそれは聞けませんね」

「うるせーよ。オレは梨桜の保護者なんだよ！オレが連れて行くついたら連れて行けるんだよ！」

「3人で梨桜ちゃんの取り合いすんなよ…話が進まないだろ！」

5代目が呆れ顔で言い、三浦が笑いを堪えていた。

「愁、何とかしろ」

兄貴に命令された三浦は、笑いを抑えながら頷いていた。

「慧さん、青龍の傘下に入っているチームも使って北陵の系列を全

部潰します。それでいいですか？」

初代は不満そうに三浦を見て口を開いた。

オレも三浦の言葉には不満だった。何で青龍が潰すんだよ？潰すのはオレ達だ。黙って見ていればいい。

「紫垣に売られた喧嘩だぞ？青龍と朱雀で一緒に潰せよ。どっちかが単独で潰すなんて許さないぞ」

三浦と拓弥さんが顔を見合わせていた。どちらも『面倒だ』そんな顔をしている。

オレだって、アイツらと手を組むのはイヤだ。ずっと反目してきたのに、急に言われても困る。

「紫垣として北陵を潰すなら、青龍に梨桜が出入りしているように朱雀にも出入りしないと下の奴等に示しがつかないんですけどね」

寛貴さんは、初代と宮野を見て挑戦的な笑みを浮かべた。

その言葉に露骨に嫌な顔をしたのは宮野で、初代はニヤリと笑った。

「それも一理ある。…梨桜を守れるのか？」

「守ります」

寛貴さんはキツパリと言った。

これが、拓弥さんが言っていた寛貴さんの本気…

Confession (6)

2日間続いた高熱がやっと微熱位まで下がったけど、何となく体がある。

葵と慧君が交代で見ていてくれたから心細くはなかったけれど、二人に申し訳ない気持ちで一杯になって、自分のしたことがどんなに無謀だったかが思い知らされた。

「梨桜、もう少し食べなさい」

「…後で」

慧君が食事をとりたがらない私にお粥を食べさせようとしてくれていたけど、体が受け付けてくれなかった。

「食べないと家に帰れないぞ？」

慧君に「食べなさい」と言われて口を開けた。病院はあまり好きじゃないから早く家に帰りたい。

「…ちゃんと叔父さんしてるんだ」

慧君に差し出されるままにお粥を食べると、涼先生が珍しい物を見るように慧君を見ていた。

「当たり前だろ。梨桜に飯を食わせて、風呂に入れて、寝かしつけてたんだから」

慧君の話を聞いている涼先生はとっても楽しそうだった。改めて昔

の事を言われると本当の事だけど、少し恥ずかしい…

「それって葵にも同じように世話をしてたんですよね？」

「まあな、葵もあの頃は素直で可愛かったぞ。な？梨桜」

同意を求められて、頷いて良いのか悪いのか…

「葵は今でも可愛いよ？」

疑問形になってしまったけれど、一応フォローをすると涼先生は笑っていた。

ずっと病室にいるのも飽きたし、外の空気に触れたかったから、慧君に我儘を言つて病院の中庭に連れて来てもらった。

「暑くないか？」

「大丈夫。慧君、気持ちいいね」

そう言うと、笑いながら頭を撫でてくれた。

撫でられた髪の毛は私の頬を擦った。

「短くなつたな」

葵が『取りあえず揃える』と言って切ってくれた髪の毛は、顎のラインで切り揃えられていた。肩のラインより短くしたことが無かったけれど、葵は北陵のチームに切られた長さよりも短めに髪を切った。いつも『短くするな』って煩い位に言っていたから理由を聞い

たら『あの男に切られたラインで揃えたら思い出すだろ』って言うていた。

「思い出して怖くなったりしないか？」

眼を閉じて慧君の言葉を聞いていた。

凄く怖かったけれど、同時に怒っていたから思い出してもあまり怖くはないと思う。

「夢に見てうなされたりしないか？」

「うん…」

大丈夫。と頷きかけて、急にあの言葉を思い出した。『嫌な記憶は塗り替えればいい』

寛貴とキスしたことを思い出してしまい、固まっていると慧君が私の顔を覗き込んだ。

「梨桜、顔が赤いぞ？熱がぶりかえしたんじゃないのか」

「大丈夫だよ」

違う事を考えよう、あのキスを思い出すと心臓が悪い！

平静を装って慧君の顔を見て笑いかけると、慧君は私の額に手を当てて熱を測り安心したように笑った。

昨日、ベッドの中で考えたことを慧君に相談することにした。

「あのね」

「ん？」

慧君は顔をのぞきこんで私の話を聞いてくれる。小さい時から私の目線に合わせて、ちゃんと向き合ってくれるから安心して話ができる。

「私、学校に行ったら眼鏡をかけたらしなくて普段の梨桜に戻りたいの。葵に言ったら怒るかな？」

もう葵との繋がりを隠す必要はないから、素顔で過ごしたい。嘘をつくのは性に合わない。

「オレが葵と藤島に話すから心配するな。梨桜はいつも通りに過ごせばいい」

「うん」

ありがとう、慧君。

Confession (7)

慧君に寄りかかって、外の空気を楽しんでいると、

「お姉ちゃん、ほつぺたイタイの？」

声をかけられて、思わず笑みが浮かんだ。

小さくて可愛らしい男の子が私を見て話しかけていた。

「うん、痛いの」

男の子には私の頬に貼られている湿布が大きな怪我をしているように見えるのだろう。心配してくれている様子が可愛らしくて、つい、泣き真似をしながら言つと「カワイソウだね？」と言って首を傾げながら眉をひそめた。

可愛い！！

男の子を抱き上げたくて、前屈みになって腕を伸ばしたら肩と胸が痛んだ。

「うっ…」

動きが固まってしまい、慧君に支えられてベンチの背もたれに体を預けた。

「お姉ちゃん、イタイの？」

痛みを堪えているせいで返事ができないでいると、代わりに慧君が

男の子に説明してくれた。

「お姉ちゃんは大丈夫だ。ボクは一人か？」

慧君が聞くと、男の子は「パパと一緒にママとみーちゃんのもとにきたの！」と楽しそうにおしゃべりを始めた。
可愛いなあ

「一人になったら、パパが迷子になったと思って心配するぞ？どっちから来たんだ？」

慧君はそう言うと男の子は「あっち」と指を病棟の方に向けた。
私と葵の面倒を見てきただけあって子供の扱いが上手い。感心しながら慧君を見ていた。

「名前は言えるか？」

「りゅう」

「カッコイイ名前だね、りゅう君」

私が言うと、りゅう君は嬉しそうに笑った。

「りゅう、一緒にパパのところに戻るぞ？」

慧君がりゅう君に手を伸ばすと、りゅう君は素直に慧君の手を握った。

何て素直で可愛い男の子なんだろう…。感心しながら見ていると、慧君は「すぐ戻る」と言ったりゅう君の手を引いて歩こうとしたけれど、りゅう君は立ち止って私を振り返った。

「おねえちゃん！」

私に駆け寄ってくると、手に持っていた小瓶を私に差し出した。

「それ、食べるとほっぺたイタイの治るよ？」

小さな瓶に入っているのは、淡い色をした可愛らしい金平糖だった。

「これ、ママとみーちゃんにあげるんじゃないの？」

「みーちゃんにはあげたからいいの。今日はお姉ちゃんにあげる！」

瓶を私の手の平に乗せると「バイバイ」と言っつて慧君の手を握った。

「りゅう君、ありがとう！」

慧君に連れられてパパのところに戻るりゅう君に手を振った。

金平糖の入った瓶を空にかざして見た。

まだ5才位に見える男の子でも優しい気遣いができるんだ。りゅう君の気持ちが嬉しくて温かい気持ちになれた。

空にかざした瓶の向こうから、庭の中を横切っている通路から見慣れた制服が歩いてくるのが見えた。

少し硬い表情でこちらに向かつてきている悠君と、いつも通りの拓弥君だった。

「起き上っても平気なの？」

拓弥君がニツコリと笑いながら言うと、隣では硬い表情のままの悠君が私を見ていた。

「うん、気分転換に連れてきてもらったの」

「へえ、…弟に？」

含みを持たせた言い方に、胸がぎゅっと痛んだ。やっぱり、許してはくれないかもしれない。

でも、謝らなきゃ…

「叔父に、だよ。…葵との事、ずっと嘘をついていてごめんなさい」
体が許す分だけ頭を下げた。謝った。

「寛貴には生徒会を抜けた方がいいなら辞めろって伝えてあるから…私が居ない方が生徒会にも朱雀にも良いのなら私はすぐに辞める」
頭を下げたまま言うと、拓弥君も悠君も何も言わなかった。「本当にごめんなさい」もう一度謝った。

「はあ…梨桜ちゃんさ、潔すぎ。もう少し言い訳とか、考えないの？」

拓弥君が呆れたように言い、悠君も何も言わなかったけれど、溜息をついた。

「宮野と三浦に言われて素顔と宮野の事を隠してたんだろ？アイツらの所為にして自分は悪くないって言ったら？」

金平糖の瓶を握りしめながら顔を上げた。

「でも、生徒会の皆に嘘をついたのは私だから。悠君が心配してくれていたのに、本当の事を言わないで黙っていて嫌な思いまでさせちゃったし…ごめんなさい」

悠君はもう一度溜息をついて私に紙袋を差し出した。

受け取りながら、なんだろう？と思って覗くと課題のプリントが沢山入っていた。

わざわざ持ってきてくれたの？

「ありがとう」

「明日、昼休みにここに来るから、その課題写させて？…それで、宮野と双子だって黙っていたことをチャラにする」

そう言って、ニツと笑った悠君の顔を見て涙が出そうになった。やっと、笑ってくれた…

「うん、解いておくれ」

「それと、今度の調理実習のメニューはオレが好きな献立にして」

「あ、それオレも！」

拓弥君の言葉に頷いた。

悠君、拓弥君…ありがとう。

.

Confession (8)

広くはない病室に男が5人いるのって息苦しい。しかも和やかにしている訳じゃないから余計に厄介だ。

私の所に来ているのに族用語だらけの会話をしている、私はすっかり蚊帳の外。

つまらない…定例会なら学校でやればいいのに。

「これ、どうした？」

会話から抜けたらしい葵が、枕元に置いていた金平糖が入っている瓶を見つけた。

「可愛い男の子にもらったの」

私が葵に“それ、頂戴”と手を伸ばすと、葵は瓶を私の手の平に乗せた。

瓶を軽く振ると、瓶は小さな音を立てた。

「男？」

瓶を開けて、一粒口に入れた。

甘くて、ソロソロと口の中で溶けていく触感が楽しい。

「私にね、「ほっぺたイタイ？」って聞いてきた男の子がいたの。

「痛いよ」って言ったならこれをくれたの」

金平糖を一粒摘まんで葵の目の前に持っていき、自分の口に入れる

と、眉を顰めて「知らない奴からもらうなよ」と私を窘めた。

「これを食べると、ほっぺたイタイの治るんだって。凄く可愛いと思わない？」

「…男の子って、もしかして子供か？」

怪訝な顔をして金平糖が入っている瓶を見ていた。

やだ、葵ってば…当たり前じゃない。中学生や高校生がそんなこと言うわけないでしょ？

「5才位の男の子だよ」

変な想像をした罰に、一粒を葵の唇に押し付けた。嫌そうな顔をしたけれど、そんなのは無視。

「家族の為に持ってきたのに私にくれたんだよ。優しい気持ちが嬉しいと思わない？」

渋々と金平糖を食べる葵ににんまり笑って、自分でももう一粒口に入れた。

「美味しいでしょ？」

「…砂糖の塊だろ。…甘い」

私を見ていた愁君と目が合った。『葵に勝ったよ』と目で合図すると、愁君は肩を揺らして笑っていた。

「あのさ…宮野と梨桜ちゃんていつもこんな感じな訳？」

拓弥君が呆れた顔で聞いてきて、私が答える前に愁君が「ああ、いつもこう」と答えてしまった。

「姉弟喧嘩が面白いんだよ」

愁くん、いつも面白がってたんだ…

私は真面目に葵に抗議していたりすることが多いのに…傍から見たら面白く見えるんだ…

でも、それって葵の所為だよ？いつも葵が私を丸め込むからだよね。

葵が「あれは喧嘩じゃない」と言いながら、私のお茶を勝手に飲んでいた。

「梨桜ちゃん、オレにも頂戴！」

悠君が手を出して来たから、金平糖を掌に乗せてあげて…疑問が湧いた。

反目しあってるハズなのに、いつまで一緒にこの空間にいるの？

「ねえ、何か変…」

ニツコリ笑った愁君の顔を、じーっと見た。ねえ、何か企んでない？すっごく嫌な予感がしてきたの。

「何が？」

部屋を見回すと寛貴と目が合った。私を見て、フツと笑い口を開いた。

「梨桜、これから放課後は一日おきに青龍と朱雀のチームに行くことになったからな」

…なんで？

葵を見ると、不機嫌そうな顔をしてお茶を飲んでいる。

「それは、梨桜ちゃんがウチと青龍のお姫様だから」

語尾にハートマークでもついているんじゃないかと思うような拓弥君のいつも通りの軽い口調と言葉に眉を顰めてしまった。

「困るんだけど…」

「なに？」

葵と寛貴が同時に言った。気が合うんじゃない？

それに、凄んでも怖くないからね。

葵との関係がオープンになったら、女子高生らしいことをしようと思っていたのに、これじゃ自由に行動することができないじゃない？
惘然としながら、葵が飲んでいたお茶を取り返して一口飲んだ。

「どうして、勝手に決めるの？」

抗議すると、葵はムツとしたように言葉を返して来た。

「オレが決めたんじゃない」

じゃあ、誰が決めたの？私もムツとして葵を見た。

「梨桜ちゃんの叔父さんが決めただよ」

拓弥君の言葉が信じられなくて寛貴を見ると、私を見て小さく頷いた。

慧君が言ったの？本当に？

「慧君は私には一言も言わなかった」

葵と交代で家に帰った慧君は、私に青龍と朱雀の話はしなかった。ただ、いつも通りの梨桜で過ごせばいい。って言うてくれただけ。私と葵が睨みあっていると、見かねた愁君が間に入って私を宥めてくれた。

「梨桜ちゃんはオレ達だけのお姫様でいて欲しいけど、慧さんが決めたんだ。『青龍と朱雀で梨桜ちゃんを守るように』って。また北陵みたいな卑怯なチームが梨桜ちゃんを狙わないとは限らないだろ？」

『私は葵の弱みだから狙われる』それは分かったけれど、どうして慧君が『青龍と朱雀で』そう言うのかが分からない。

「オレ達だつて、梨桜ちゃんが青龍で姫扱いされるのは面白くない。でも、初代が言った事には逆らえないだろ？」

悠君が言い、私は首を捻った。

初代つて、誰？どうしてその人が私の事を勝手に決めるの？葵に視線で聞くと、目を逸らされた。

「葵、答えて」

答えたくない時にする仕草だったけれど、しつこく「誰？」と目で訴えた。

「…」

「知らないの？梨桜ちゃんの叔父さんだろ」

悠君の言葉に葵は思い切り渋い顔をした。その顔は悠君の言葉を肯定していたけど、なんだか信じられない。

「慧君が？」

紫垣の初代が慧君？寛貴が『逆らえない』って言っていた、その人？本当に？

「梨桜ちゃん、知らなかったの？」

拓弥君の言葉に、作った笑顔で答えた。葵はやっぱり渋い顔をしている。その顔は知っていた顔だよね？しかも、できれば私には教えたくなかった。

どうして教えてくれなかったの？

「ごめんね、葵と二人にしてもらってもいい？」

葵以外の皆にニッコリと笑いかけると、愁君がいつもの王子様な笑顔を私に向けた。

「梨桜ちゃん、怪我をしている事を忘れないでね。この前みたいなのは駄目だよ？」

釘を刺されてコクリと頷いた。

大丈夫。この前と同じことをしたらきつと私は当分動けなくなるから…無茶はしません。

でも、葵を問い詰めるくらいはしてもいいでしょ？

Confession (9)

病室で二人だけになっても葵は口を開こうとしなかった。不機嫌そうな顔をしたまま部屋の外を眺めている。

「葵、話して」

話そうとしない葵に痺れを切らした私が先に口を開いた。

「…知らなくて済むならそれでいいと思ったんだよ。必要以上に巻き込む必要もないと思った」

葵は私の顔を見ないで口早に言うと言を伏せた。

矛盾しているように思えるその言葉に私は首を傾げた。

「どうして？」

私と葵の繋がりが知れたら危険なことに巻き込まれるんでしょう？それと慧君の事と関係あるの？

「ねえ、一人で悩むの禁止。って言ったでしょ？どうして話してくれないの？…“梨桜は関係ない”とか言ったら本気で怒るからね」

葵を見ていると、一瞬下唇を噛んだ。

言いたくない事を言う時の癖は昔から変わってない。

「梨桜だから。だろ？紫垣を作った慧兄の姪でオレの双子の姉だから危険だと思ったんだよ。藤島が何かをするとは思わないけど、下にいる奴等は分からない。他にもオレを潰したいと思っているチー

ムだつて多い。最初から梨桜に話をしていたら、怖いと思うだろ」
確かに狙われるのは怖い。こんな思いは二度としたくない。
でも、下唇を噛んだっていう事はそれだけじゃないよね？
葵なら私が怖い思いをしないようにしてくれてくれるでしょう？どうして
そんなことをわざわざ言い訳のように言うの？

「葵が守ってくれるんでしょ？ちゃんと教えてくれないと怒るよ。
無理しているのとか、嘘ついているのはわかるんだから。葵だつて
そうでしょ？」

クスクスと笑っていたけれど、私が葵の顔を覗き込むとフツと真面
目な顔になった。

「オレの代で、それが無理でも、近いうちに終わらせようと思
つた。終わらせようとしているのに梨桜に教えて怖い思いをさせな
くてもいいと思った」

まさか、そんな言葉が出てくるとは思わなかったから凄く驚いた。

「終わらせるって…青龍を？」

慧君が作ったチームを？分裂してしまつたけれど、葵の手で終わら
せるの？

葵の言葉にやっぱり“どうして？”という言葉が浮かんでくる。

「意味もなくチーム同士が反目しあつていて、生徒会の交流で均衡
を保っている関係なんか意味がないだろ？学校同士が比較されるか
らつて、生徒やチームまでを互いに比較して、事あるごとに睨みあ
うなんてオレはくだらないと思った」

確かに葵の言う事にも頷ける。
葵は今の状況が嫌なんだね。

「慧兄が作ったチームは学校の枠には囚われていなかった。いつからか比較して、反目しあうようになった。初めて青龍のチームに行ったときにガツカリしたんだ」

その時のことを思い出して言っているのか、眉を顰めた。

私が葵に『危ないことはやめてほしいと思ってる』そう言った時に、苦しそうに『今それは出来ない』と言っていたことを思い出した。まさか、その為に青龍の総長になったの？

「今、自分がどんな顔してるかわかってる？」

「梨桜だって自分がどんな顔してるかわかるか？」

私が聞いているのに、葵は問い掛けで返してきた。私を見ている葵の瞳の中には葵の事を心配している自分の顔が写っている。

「葵だって見えてるでしょ？」

私の瞳の中に、悲しそうな顔をして笑っている自分が写ってるでしょ？

『終わらせる』そう思いながら自分を慕ってくれるチームの人と過ごすのって辛いよね？

「それは、葵がやらなければいけない事なの？」

「オレだから。初代の甥と、五代目の弟がトップにいる今しか

出来ないと思った。：前に愁が言つたる？オレも藤島も衝突を抑えるって。抑えても2つのチームがある以上、反目し合うんだ。慧兄だって涼さんだってこんなのは望んでない」

下唇を噛んだ葵を見逃さなかった。

「でも、葵は迷っているの？本当は終わらせたくないの？」

そう聞くと、クツと笑って「双子ってこういう時に不便だな」と言つた。

「仕方ないじゃない？分かっちゃうんだから。：私は青龍の皆が好きだよ。愁君もコジ君も：葵の大切な仲間だもんね？」

私の言葉に小さく頷いた葵の表情は柔らかくて、やっといつもの葵に戻ってくれてホツとした。

本当に愁君達には感謝しているんだよ？葵の周りには大切な仲間がいて良かったって思ってるの。

青龍と朱雀が歩み寄れる日が来るといいね…

思いを告げても叶わないと分かっているけど、梨桜ちゃんの事が好きだ。

オレに笑いかけてくれる彼女を抱き締められたらいいのに…

頬に大きな湿布を貼っている彼女はとても痛々しくて、太陽の下で見ると気付かなかったけれど、病室で見る彼女は顔色が悪いように見えた。

『葵と二人にしてくれる？』につこり笑った梨桜ちゃんは怒っているように見える。

病室から出たオレ達は三浦の家に行くと、リビングで梨桜ちゃんの叔父さん…初代と5代目が酒を飲んでいた。

オレ的にはありがたくもなんともないけど、朱雀と青龍のメンバーなら誰でも憧れるこの二人を一度に見られるって、贅沢だよな。

「お前達、梨桜のところに来たのか？」

『見舞か、ご苦労さん』と5代目に言われて、オレ達が頭を下げると三浦が笑いながら初代に答えた。

「梨桜ちゃんを怒らせてしまいました」

三浦の言葉に心の中で頷いた。あの笑顔は怒ってたんだ…でも、何故怒らせたのかが分からなかった。

あそこで怒らせるような事があったか？

嫌がる宮野に金平糖を食べさせていたのは梨桜ちゃんだったよな…

「葵は？」

初代が煙草を消しながら聞くと、三浦は冷蔵庫からペットボトルを取り出しながら答えた。

「病室に残ってます」

「葵に任せておけ。梨桜が怒りだしたらオレでも無理」

叔父とは思えない台詞を吐き、初代は酒が入っているグラスを傾けた。

無理って…

「初代だったくせに、姪には頭が上がらないって…現役だった頃のメンバーに見せてやりたい」

5代目は笑っていたけれど、初代は真面目な顔で反論していた。

「仕方ねえだろ、あの目で涙ぐまれてみる！？涼、おまえは耐えられるか？」

寛貴さんが初代を見ながら、クツと笑っていた。拓弥さんは小さな声で“おまえ見たことあるのかよ？”と聞いていた。

初代の言葉に思わず想像してしまった。

あの目でうるうるされたら？…『悠くんの意地悪！』とか言われちゃったら…想像しただけでオレ、無理。鼻血が出そう。

「単に梨桜ちゃんの涙に弱い叔父バカ」

5代目毒舌…いいのか？初代に向かつてそんな毒吐いて。

「そういえば、この前のケンカも凄かった。葵の首を絞める人間なんて初めて見た」

三浦が言うのと初代と5代目が爆笑した。

実は梨桜ちゃんが最強だったりして…

「梨桜ならやりかねないな」

「でも、その後普通に二人でケーキ食べてました。そこら辺の感覚が良く分からない」

「おまえ、梨桜ちゃんと仲いいよな…懐いてるっていつか。どうやって仲良くなつたわけ？」

煙草に火をつけた拓弥さんが三浦を見ながら言うと、奴は口角だけを上げて笑い自分も煙草に火をつけた。

「梨桜ちゃんにとって、愁は王子様なんだよな？」

実の兄に『腹黒王子』と言われた三浦は余裕の笑みを浮かべていた。王子様って…梨桜ちゃんは三浦が好きなのか！？

「初代、不公平だと思いませんか？オレ達は同じ学校なのに宮野とそこの腹黒王子の所為で梨桜ちゃんとかかなり距離がある。あの学校で彼女を守っていくためにももっと打ち解けたいんですけど」

好奇心か対抗心か？

間違いない三浦に対する対抗心から出てくる言葉なんだろうけど、

初代は梨桜ちゃんの叔父さんの顔で拓弥さんを見ていた。

「変な下心はないだろうな」

「無いですよ」

下心があつたら、いくら拓弥さんでも寛貴さんに沈められるよな。北陵相手にキレた時のことを思い出してゾツとした。

「初代も心配ですよね？」

拓弥さんがオレに向かつて、一瞬目を細めた。それが合図だと気づき、オレはとっさに思いついたことを言葉にした。

「オレ、同じクラスだから言えるんですけど、梨桜ちゃんと信頼関係を作らないとフォローしようにも野郎が多すぎて……」

オレは梨桜ちゃんを避けて傷つけたんだよな。一瞬、その思いが頭を過ると、言葉に詰まってしまい焦った。

「ウチは去年まで男子校で女子生徒は1年に10名しかいない。周りは全部男ですから……初代もご存知ですよ？男子校がどういうところか」

最後の方を強調しながら寛貴さんは不敵に笑った。

高校生の男なんて、エロい事ばかり考えている。そう言っても言い過ぎじゃないよな。

ただでさえ、女子生徒は注目されているんだ。

梨桜ちゃんが実は美少女だった。なんてバレたらどうなることか……

「お前等、何が言いたい？」

初代が目を細めて訝しげにオレ達を見ると拓弥さんが見つても女に向ける笑顔を浮かべた。

「取りあえず、梨桜ちゃんの家にお見舞いに行きたいですね」

拓弥さんがもう一度ニツコリと笑うと笑い声が響いた。

「青龍に差をつけられたくねえよな。きっとオレがおまえらの立場でもそう言ったな」

兄貴とは対照的に三浦は嫌そうにオレ達を見ていて、拓弥さんは挑戦的な目で見返していた。

初代はそれを見比べながら小さな溜息をついた。

「北陵を潰した報告に來い。愁、おまえが案内しろ。いいな？」

眠り姫と攻略法 (1) side:悠

まだ建てられて年数が経っていないように見える綺麗なマンションを見上げた。

「ここが梨桜ちゃんの家…」

好きな女の子の家に行くのって結構ドキドキするものなんだな。

「これから見ることにショックを受けるなよ?」

オレ達をここまで連れて来た三浦の言うことが分からなくて、言われるまま頷いた。寛貴さんと拓弥さんも不思議そうにしながら小さく頷いている。

「なんだよ、家では梨桜ちゃんが別人、とか?」

拓弥さんが言うと、三浦は笑って首を振った。

「彼女は普通、あのままだよ。まあ、見ればわかる」

三浦がインターホンを押すと『今開ける』と宮野の声が返ってきた。今日は余計なものもあるけど、今回は見て見ぬふりをしよう。

『愁、頼んだヤツ』

「買ってきた」

『悪いな』

短いやり取りの後に、オートロックの扉が開き、エントランスの奥へ入った。

10階の角部屋

三浦が扉を開くと、フワリといい香りが漂った。梨桜ちゃんて趣味が良いよな、家の中も可愛らしく整えてたりするんだらうか？

可愛い梨桜ちゃんと可愛い部屋。

梨桜ちゃんが出迎えてくれるのを期待していると

「お、来たな」

梨桜ちゃんじゃない…

オレの期待を裏切って初代が出迎えた。

「おはようございます」

寛貴さんが挨拶をすると「入れよ」と言われてリビングに入ると、宮野がいた。

三浦は当たり前のように中に入って行き頼まれて買って来たらしい物を宮野に渡すと初代に挨拶をしていた。

可愛らしいリビングを想像していたけれど、綺麗に片づけられていて、無駄なものが置かれていない部屋で意外だった。

「ホントに来たんだな…」

宮野はオレ達を見ると、失礼なことを言いやがった。

「初代に呼ばれたからな、それに梨桜はうちの生徒会だし」

寛貴さんの言葉に宮野が露骨に嫌そうな顔をしていた。

本当は呼ばれたというよりも、梨桜ちゃんに甘い初代を脅したというか、丸め込んだというか…この事を宮野が知ったら怒るんだろうな。

「あれ、梨桜ちゃんは？」

三浦が言うと初代が笑いながら、視線をソファに向けた。

そこには、ブランケットに包まれて眠っている梨桜ちゃんがいた。

「ここで寝るのが楽しいんだ。行儀が悪いけど許してやってくれ」

初代の言葉に首を横に振った。

この寝顔を見ていたいから行儀が悪くても構わない。

抱き枕を抱えて寝ている梨桜ちゃんはすっげー可愛い！

三浦と拓弥さんも梨桜ちゃんの寝顔を見ていると、オレの隣から小さな舌打ちが聞こえた。…寛貴さん？

「慧兄、起こして」

三浦が買って来たものをテーブルに並べながら宮野が言うと、初代が反論していた。

「こんなにぐっすり眠ってるのに、起こすのか？」

「何時間寝てると思ってんだよ？」

厳しい宮野に初代は「ハイハイ」と返事をして梨桜ちゃんが寝ているソファの前に屈みこんだ。

「梨桜、起きろ」

「…」

呼ばれても反応しない。

幸せそうな顔をして眠っている。…熟睡してる？

「りーおー、起きろ？」

もう一度呼ばれると、瞼がピクリと動いた。

「起きなさい」

「ん」

片目だけを開き、初代を見ると抱き枕に顔を埋めてまた目を閉じてしまった。

…小動物みてえ、可愛い！

「梨桜？」

もう一度呼ぶと、抱き枕をぎゅっと抱き締めて首を軽く横に振っている。起きたくないということなんだろうか…

「オレには無理だ」

初代が梨桜ちゃんの頭を撫でてやると、梨桜ちゃんはまた眠ってしまった。

毎日こうなんだろうか？…こんな心臓に悪い。

「慧兄は梨桜に甘過ぎ。どいて」

宮野が梨桜ちゃんの前に屈むと抱き枕に手をかけた。

「梨桜、いい加減に起きろ」

抱き枕を揺らしながら言うと、梨桜ちゃんは眉を顰めている。

「…ねむ…」

「眠いなら寝ていいから、メシ食って薬を飲んでから寝ろ」

抱き枕を彼女から奪おうとするけど、梨桜ちゃんは抱き枕を放そうとはせずにコクコクと頷いていたけれどまだ目が開かない。ホントに眠いんだな。

「梨桜」

低い声で呼ばれると、また枕に顔を埋めてしまった。

「薬だけ飲む」

「何か食べ」

「お腹空いてないからいい」

そついう問題じゃないような気がするのはオレだけか？
宮野が飲めって言うてるのは食後に飲む薬なんじゃないのか？

「駄目だ、少しでいいから食べ」

宮野の強い口調に梨桜ちゃんはやっと目を開けた。

「食べたくない」

そこにいる全員が双子のやり取りを見ていた。

「何食抜いたか、自分で分かってんのか？点滴、嫌いだよ」

梨桜ちゃんは渋々といった感じで頷き、左腕を伸ばした。

宮野が腕を支えてやるんだ。と思って見ていると、伸ばされた腕は宮野の首にスルリと回された。

「…」

自分の首に腕を回された宮野は驚くこともなく、当たり前のように梨桜ちゃんの膝下に腕を回して抱き上げた。

まさか、抱き上げるとは思わなかった。

オレにも妹がいるけど、起き上がるのを介助してやるくらいしかないだろうな…

拓弥さんと寛貴さんも少し驚いたように二人を見ていて、三浦はオレ達を見て笑っていた。

宮野が梨桜ちゃんを抱き上げたまま歩き出すと、三浦が言った。

「梨桜ちゃん、お土産買ってきたから後で食べよう」

目をぱつちりと開けた梨桜ちゃんは宮野の肩越しにオレ達を見て驚いた顔をしていた。
もしかして、オレ達がいる事に気付いていなかったのか？

「おはよう梨桜ちゃん」

拓弥さんが言うとうわりと笑った。

「皆、来てたんだ。慧君が呼んだの？」

オレが頷くと梨桜ちゃんも頷き「着替えてくるね」と言い手を振ると宮野がリビングの外へと連れて行ってしまった。

眠り姫と攻略法 (2) side:悠

「適当に冷蔵庫から出して飲んでろ」リビングに戻ってきた宮野が言い、別な部屋に入って行くと手に服を持ってすぐに戻ってきた。

「慧兄、梨桜には聞かせるなよ」

「分かってる」

そう言うとテーブルに置いてあった湿布や絆創膏を持つとリビングを出て行った。

初代は宮野が扉を閉めるのを見届けると、薬が入った袋から錠剤を取り出しながらオレ達を鋭く見た。

「ところで、オレが言った事はどうなった？」

「潰しました」

寛貴さんが答えると初代は頷いた。

系列を潰しに行ったときの寛貴さんと宮野は、同じチームの奴等も怖がるぐらいにキレていた。

この二人を敵に回したくない。

オレでもそう思ったから、潰されたチームの奴等は二度と関わりたくないと思っただろう。

「梨桜をターゲットにしたチェインメールはどうなってる？」

三浦が携帯を取り出し、初代に画面を見せながら説明していた。

北陵のトップの写メを撮り、『コイツに手を出したら、同じ目に遭

わせてやる』という内容でメールが広まるように三浦と拓弥さんが手配した。

「それならいい。梨桜には来週からは素顔で学校に行くように言っている」

「そんなことしたら大変…」

初代に睨まれて口をつぐんだ。

「男子校だったんですよ？女の子は10人しかいなくて、あんな美少女が学校にいるとわかつたら…」

拓弥さんが言うのと拓弥さんも初代に睨まれて黙った。この人の睨みつつすっぱー怖い。

なんで宮野はこの人に強気でモノが言えるんだ？

「梨桜が嫌だつて言ってんだ。藤島、おまえは奴等を抑えられないのか？生徒会長の威厳はそんなもんか」

「抑えます」

寛貴さんの言葉に初代は満足気に頷いていた。

絶対、パニックになるぞ、野獣の中に小動物を放すようなもんなんだから野獣のトップが寛貴さんじゃなかったらと思つと恐ろしいかも…

「ウチの学校でも大騒ぎになるだろうな…」

三浦がボヤくとインターホンが鳴った。

「はい」

『東堂梨桜さんにクール便のお届けものです』

大きな箱を抱えてリビングに戻って来た初代は、凄く不機嫌そうだった。

テーブルに箱を置き、オレ達を睨んだ。

「矢野敬彦って誰だ？なんなんだ？このデカイ箱は」

ヤノ タカヒコ？そんな奴知らない。

初代の睨みが怖くて首を横に振ると、三浦が考えながら名前を繰り返していた。

「その荷物って札幌からですよね」

思い当たる名前が無かったのか、三浦は首を捻りながら送り状を見ている。

クール便ってことは食い物か？

「ああ。愁、調べる」

「慧兄、インターホン鳴らなかつた？」

リビングに戻って来た宮野に初代は思い切り不機嫌そうな声をぶつけた。

「札幌の矢野敬彦って誰だ？」

「矢野？」

送り状の控えを渡された宮野は、名前を見て頷いていた。

「梨桜の友達だよ。良く、“タカちゃん”って言ってるだろ」

オレは聞いたことない！

拓弥さんが「あの時の携帯の男か？」と言うと寛貴さんが「そうかもしれないな」と頷いていた。…なんで二人は知ってるんだ？オレ、その場に居た？

「友達？彼氏とかじゃないだろうな？どんな男だ」

初代は娘に近寄ってくる男を警戒している父親のようになっていて、この人って、ホントに叔父バカだ。

「どんなって、…普通。中学の同級生だよ」

宮野に「ムキになんなよ」と宥められているけれど、“叔父バカ”の初代は納得がいかないらしい。

「なんで同級生がこんなにデカイ箱を送って来るんだよ？」

オレは勝手に箱の中身を想像してにんまりと笑いそうになった。

北海道 〓 美味しい海産物

梨桜ちゃんが羨ましい。

「梨桜の好きな食べ物だろ。愁は梨桜の好きそうなものを見つけてくるけど、“タカちゃん”は愁の上をいくな」

「は？それって聞き捨てならないんだけど」

三浦が引き攣った笑いを浮かべて宮野を見ていた。

寛貴さんは三浦を冷やかな目で見ていて、怖い。一気に居心地が悪くなったりビングでハラハラしながら周囲を見ていると、相変わらず拓弥さんはこの場を楽しんでいるらしい。

「梨桜に聞いてみれば？」

宮野は三浦を見て笑うと、キッチンに入り何かを作り出した。

眠り姫と攻略法 (3)

「梨桜！」

肩に湿布を貼ってもらい、一人で着替えていると慧君に大きな声で呼ばれた。家の中でこんなに大きな声を出すなんて珍しい事だったから、急いでリビングに行きたかったけれどゆっくりとしか歩けなかった。

「梨桜！」

廊下を歩いているともう一度と呼ばれて「はい」と返事をしたけれど、不機嫌そうな慧君の声に首を捻った。

「慧君どうしたの？」

リビングに行く和不機嫌そうな声の通り、慧君が怖い顔をしていた。

「慧君、怖い」

思わず言ってしまうと、慧君はますます機嫌が悪くなってしまった。何があつたのかが分からなくて皆を見ると、葵はキッチンの中で可笑しそうに笑っていて、寛貴は何故か惘然とした顔をしていた。

拓弥君と悠君は笑いを堪えている。本当に、何があつたの？

葵は笑っているだけで、答えをくれそうにないから愁君に視線を移すと、ニッコリと笑ってテーブルを指差した。

愁君の指す方を見ると大きな段ボール箱が置いてあつた。愁君の笑

顔が…いつもと違う？

「梨桜ちゃん、矢野敬彦っていう人から荷物が届いたよ」

その名前を聞いて、慧君の不機嫌そうな顔も愁君の黒い笑顔も頭から吹き飛んだ。

「タカちゃん!？」

タカちゃん + 段ボール は美味しい物が詰まっていると決まっている。

段ボールに駆け寄ってガムテープを剥がそうとしたけれど、ガツチリと梱包されていてなかなか剥がせなかった。

「貸せ」

寛貴に言われて場所を移ると、寛貴は勢い良くテープを剥がして梱包を解いた。

何が入っているのか、考えただけでワクワクする。

「中身を出すのか？」

「うん！」

箱を開けて、中に入っていたものを見て、頬が緩むのを止められなかった。

「タカちゃん最高!!」

タカちゃん大好き!!

「すげーな」

寛貴もそう言いながらテーブルの上に並べてくれた。

ラズベリー、ブルーベリー、ブラックベリー。それからアスパラガスとメープルシロップ。

私が好きだったケーキ屋さんの焼き菓子の詰め合わせ。

「カニじゃないんだ…」

ガツカリしたように言う悠君が可愛かった。相変わらず可愛いね？

「タカちゃんの伯父さんが農園を経営していて、この季節になると野菜を送ってくれるの」

悠君に説明すると、あまり興味がなさそうに頷いていた。

毎年お願いをしてアスパラを送ってもらっているけれど、今年はたくさんのおまけがついてきた。代金を支払っている以上の品物が届いて申し訳がないくらいだ。タカちゃんと伯父さんに、ありがとうの気持ちがたくさん詰まった御礼を考えよう。

「梨桜の同級生なのか？」

「うん、クラスと部活が同じだったの。タカちゃんは面白くて優しいんだよ。葵も会ったことあるよ」

慧君がまだ不機嫌そうにしているから、「葵も知ってる人だから大丈夫だよ」と教えてあげると頷いていた。慧君は心配性だね、結婚して娘が生れたりしたら大変そう。

ラズベリーを摘まんで口に入れると慧君が眉を顰めた。“行儀が悪い”って目が怒ってる。

「まだ何か入ってる」

箱を覗き込むと、寛貴が箱の底から輪ゴムで束ねた紙を手に取り出すとしていた。

「メモがついてる」

まだ箱の中に入っているそのメモを読んで、私は慌てて紙の束を寛貴から取り返した。

これは、葵に見つかつたら厄介だよ!?

「…」

箱の底に紙の束を置いて、段ボールの蓋を閉めたら寛貴から冷たい視線を向けられた。

この顔は、寛貴もタカちゃんの書いたメモを読んだよね…

タカちゃんのメモには『東堂宛の手紙だ。渡したからな!捨てるなり連絡するなり好きにしろ』と書かれていた。

前から受け取らないでっってお願ひしていたのに!!わざわざ送らなくてもいいじゃない!?

「梨桜、挙動不審だぞ?」

「何でもないよ!」

慧君の言葉に笑ってごまかし、寛貴の隣に座りテーブルに乗せられていた紙袋を開けて中に入っていたものを取り出した。

「あ…」

中に入っていたのは、もう二度と見る事ができないと思っていた写真だった。

写真を見ると、この時の想いが蘇ってくるのと同時に、嫌でもあの時の事を思い出した。

「梨桜？」

写真を慧君に渡すと、慧君は私の顔を見て眉尻を下げた。

「この写真は、去年事故に遭った時に持っていた携帯に入っていたカードに保存されていたの。携帯が滅茶苦茶になったから諦めていたのに、タカちゃんか」

ここで泣いたら皆を困らせるとわかっているのに、涙がポロポロと流れてきて止められなかった。

「これが欲しかったの。でも、無理だって諦めてたの」

警察から返してもらった、ぐちゃぐちゃに壊れた携帯を見て『諦めるな』って言って笑っていた彼が、言葉の通りに写真にしてくれた。

この画像の中にはママがいるの。
携帯で撮った写真の中のママは、私と葵の間で楽しそうに笑っている。

どうしても、これが見たかった。

「梨桜？」

去年の夏休みに東京に行つて…それが最期になるなんて思いもしなかつた。

どうしてママは死んじゃつたの？
この時はこんなに元気だつたのに。

私の所為？

眠り姫と攻略法 (4)

ママ、ごめんなさい

・・・葵、ごめんなさい。

「ごめんなさい」

「梨桜、どうした？オレは怒ってないぞ」

慧君の言葉に首を横に振ると、さっきまでの不機嫌さが嘘のように心配そうな顔をして私を見ていた。

心配かけちゃう…泣くのは後にしよう

「大丈夫だよ、ちょっと去年の事を思い出しただけ」

慧君に心配しないでね、と笑いかけると少しだけ困ったように笑みを返してくれた。

「食べる」

葵が私の隣に座り、テーブルの上にお皿を置いた。目の前に置かれたのは、野菜スープとミルク粥

「これなら食べられるだろ？」

頷いて野菜スープが入ったカップを手にして一口飲んだ。

普通のお粥はあんまり好きじゃないけど、葵が作ってくれるコレは好き。

「美味しい」

「食べられるだけでいいから食べる」

少しずつ、ゆっくりと食べていると、皆の手を渡り歩いていた写真が葵の手に渡されて、葵は一枚一枚ゆっくりと眺めていた。

「これってアイツの彼女？」

タカちゃんの隣で笑っている円香ちゃんを見て葵が笑っていた。

「うん、円香ちゃんだよ。会ったことあるよね？」

「そうだったっけ？」

覚えてないらしい葵は写真をめくっていた。

それを横目で見ながら、保存していた画像が全部揃っていない事に気が付いた。

タカちゃん、もしかして私が見なくてもいいように？

「それにしてもすごい量だな…これ、どうするんだ？」

「ベリーのタルトとムースを作ったらすぐに無くなっちゃっよ」

葵がテーブルに並べられたラズベリーの重さを確かめながら言うと、愁君が私を見てニッコリと笑った。

「タカちゃん」はいつも梨桜ちゃんが喜ぶ物を送ってくれるの？」
ふとタカちゃんの段ボールを思い返してみた。

伯父さんの家から送ってくれる事が多い嬉しい贈り物は、果物とか野菜とか旬の物が多いな…

「うん…創作意欲が刺激されるような物？送ってくれた果物でお菓子を作ってタカちゃんと円香ちゃんに持って行ったな」

「その二人と仲がいいんだね。」

「うん」

いつも美味しいって喜んでくれたな、今は作ってあげられないのが寂しい。葵は甘い物が嫌いだから作っても食べないからつまらない。

いつも『梨桜さん！美味しいです！！』そう言ってたくさん食べてくれる可愛いコジ君を思い出した。

そうだ、ベリーのタルトを作ってコジ君のお見舞いに持って行こう！

「その肩でどうやって料理するんだよ？腕が上がらないんだろ」

また葵に考えを見透かされてしまった。

肩が痛むけれど、葵が手伝ってくれれば作れない事はないのに言い方が冷たい。

「オレは手伝わないぞ。なんで嫌いなものを、しかも男の為に作らなきゃいけないんだよ？」

「心が狭いよ」

ムツとして葵を見ると、葵に冷たい目で見られた。

「何とでも言え。完治するまでおとなしくしてろ」

いいもん、コジ君の好きそうなものを買ってお見舞いに行くから。お腹が一杯になり、食器をテーブルに置くと葵が私の手に薬を乗せた。

「勝手に出歩くのも禁止だからな」

薬を飲みながら葵を見ると、私達を見ていた拓弥君が呆れたように言った。

「宮野って過保護過ぎねえか？」

その言葉に、うん。と頷くと葵は「放っておくとオレの手間が倍になるんだよ」と腹立たしい返事をしていた。

「それ、何となくわかる」

私の隣で寛貴がボソリと言い、ムツとしながら寛貴を見た。

「梨桜ちゃんてすっかりしてるように見えるけど？」

悠君の言葉に頷いた。

しっかりするように心がけてるもん。私、お姉ちゃんだし！

「」「どこが？」

葵と慧君の言葉が重なった。
ちよつと、『どこが？』って酷いよ!？

目の前でお腹を抱えて笑っている愁君を冷めたい目でみたけれど、私をチラリと見た愁君は「ごめん」と言いながらも笑っていた。

「…もう、寝る。おやすみなさい」

クッションを葵に押し付けて、抱き枕を抱えて楽な態勢を作り、葵にもたれて目を閉じた。

「重い!」

葵なんか押し潰してやる。

眠り姫と攻略法 (5)

学校に来るのが凄く久し振りに感じる。

裏門に車を停めて貰って校舎を見て小さく息を吐いた。

ここは朱雀のメンバーが通う学校だということを変更して頭に叩き込んだ。葵と双子だという事実がどこまで広がっているんだろうか…
寛貴に迷惑にならないようにしなくちゃ

「行つてきます」

私が車から降りると、葵も降りて来た。

今までなら絶対に車からは降りなかったけれど今は私の前に立って荷物を私に渡してくれている。

「無理はするなよ、具合が悪くなったらすぐに連絡しろ」

「うん、またね」

葵と送ってくれた慧君に手を振った。

「梨桜ちゃん！」

昇降口のところで麗香ちゃんが待っていた。

手を振ると、駆け寄ってきて私の荷物を持ってくれた。

「麗香ちゃん、ありがとう」

「これくらいさせて？」

お見舞いに来てくれた病室で、泣きながら何度も謝る彼女に私が黙っていた秘密を打ち明けた。

麗香ちゃんは凄く驚いていたけれど、葵からも説明させると納得してくれた。

上履きに履き替えて教室に向かって歩いてみると、悠君に「梨桜ちゃん！」と呼び止められた。

「おはよう」

「おはよ！オレ、正門で待ってたんだぞ」

前と変わらずに接してくれる悠君に笑顔で答えながら、

「ごめんね、慧君が目立つから裏門に車を停めてもらったの」

「まあ、正門に停まったら大騒ぎになるかもね」

麗香ちゃんの手から私の荷物を受け取ると、3人で歩いた。

「梨桜ちゃん、その髪形も可愛いね」

ショートボブにしたのは初めてで、似合っているか心配だったけどそう言ってくれて嬉しかった。

慧君も“可愛い”って言うてくれたけど、慧君の“可愛い”は何をしても言うつから本当かどうか分からない。

「そう言うてくれるのは麗香ちゃんだけだよ！」

「麗香ちゃん大好き！」

「梨桜ちゃんは可愛いよ」

麗香ちゃんの腕に自分の腕を絡めた。

3人でおしゃべりをしながら歩いて教室まで来ると、悠君が私を見てニヤリと笑った。

「楽しみだな、笠原」

「ふふっ」

何が楽しみなのか…二人は顔を見合わせて笑っていた。

「何が？」

「梨桜ちゃんは分からなくていいんだよ」

言葉の意味が分からなくて首を捻ると、悠君が勢いよく扉を開けた。

皆が悠君を見ると、ざわついていた教室が一気に静かになった。

「…」

皆が私達を見ているような気がする…ちょっとだけ、怖い。

悠君を見ると、楽しそうな顔をしながら「見てんじゃねーよ」と言うのと、私達を見ていたクラスメイトは一斉に視線を逸らした。

「梨桜ちゃん、入らないの？」

悠君に促されたけれど、居心地が悪い。

どうしてこんなに注目されなくちゃいけないの？

「もしかして…」

総長モードで怒ってる寛貴が後ろにいる？だから、皆が驚いてこっちを見ていた？

そう思っただけで振り返ったけれど誰も居なかった。

「葵に送ってもらったのを見られた？」

呟くと、麗香ちゃんが両手を顔に当てて頬を染めた。

「宮野君に送ってもらったの！？宮野君がここまで来たの？」

「そんなに感激するほどの事もないと思うんだけど…」

私が言うと、麗香ちゃんは「梨桜ちゃんは、まだ分かってない！」と怒られた。

前に、葵と寛貴がどれだけ女の子から人気があるかを説明されたけど、お見舞いに来てくれた時も同じことを、懇々と説明された。

特に葵は男子校で、桜庭さんに送り迎えをしてもらうことが多いから、滅多に会えない存在らしい。

「麗香ちゃんに挨拶させれば良かったね。ごめんね」

麗香ちゃんは目を大きく見開くと、首を横に振った。

「とんでもないよ！宮野君に挨拶してもらうなんて！私から挨拶しなきゃいけないんだから！…でも、ここまで来てたんだあ、見たかったな」

そんな、大袈裟な…葵なのに

「いいなあ、梨桜ちゃんは…宮野君とも藤島先輩とも親しくできて

麗香ちゃんに「意外に大変なんだよ」と教えてあげたいけれど、言ったところでまた懇々と説明されそうだったから笑って誤魔化した。

『これから放課後は一日おきに青龍と朱雀のチームに行くことになったからな』

この言葉が実行されたら、と思うと頭痛がしそうだった。麗香ちゃんは『いいな』って言うけど、本当に大変なんだよ？放課後に女子高生らしい事ができなくなっちゃったんだから！

久しぶりの授業は楽しかったけれど、自分で考えていた以上に体力を使ったらしく、お昼休みになる頃には疲れてしまった。

「梨桜ちゃんはお弁当？」

「うん」

「寛貴さんが生徒会室に来るように言ってるから行くぞ。笠原も来ていいって言った」

悠君の言葉に素直に頷いた。

お弁当を食べたら生徒会室のソファで休みたい。

「私もいいの？」

「悠君、麗香ちゃん、早く…」

二人に「早く行こう」と促そうとしたけど、視線を移した先の異様な光景に言葉が出てこなかった。

「なに、あれ…」

廊下に面した窓と教室の前と後ろの扉が開けられていて、そこには沢山の生徒がいて教室の中を覗いていた。

私が廊下を見ていると、ザワザワと「こっち見た」とか「マジであれが？」とか話をしている声が聞こえてきた。

「やだ、気持ち悪い…」

思わず声に出してしまうと、悠君が「予想以上」と言いなが引き攣った笑顔を浮かべていた。

「さすがにこれは怖いね。梨桜ちゃん、大丈夫？」

大丈夫じゃない。

ただ学校に来ているだけなのにこんな怖い思いをするのは嫌。どうやって教室から出ようかと考えていると携帯が鳴った。

「ハイ」

『遅い。何かあったのか？』

この学校では誰も逆らえない男からの電話にホッとした。

眠り姫と攻略法 (6)

「これ、何とかして欲しい」

『これ？』

この人だかりが怖すぎるよ。教室から出られない。
生徒会長で朱雀のトップにいる寛貴なら何とかしてくれるんじゃないか、そう思っつてこの現状を訴えた。

「廊下に人が一杯いるの。皆が見ていて気持ち悪いし、怖い」

『そこにいる』

そう言っつて電話が切れた。

「寛貴さん何だっつて？」

悠君が廊下に視線を向けたまま聞いた。

「そこにいる。つて…「あー!!」「」

廊下から大きな声が聞こえて驚いた。

男子生徒が教室にバタバタと入っつてきて、私に向かっつて「え？何で!?」と騒いでいた。
今度は何!?

「アノときの姫!」

私を指差して騒いでいるのは、飛澤章吾。彼の存在をすっかり忘れていた。

どうしようかな…と考えると、彼は私の目の前に立ち、ズボンのポケットからハンカチを取り出して私の目の前で広げた。

「覚えてますか!？」

勢いに押されて頷いた。

覚えてるよ、4対1で殴られていて葵が助けた人でしょう？

「アノとき、次に会えたら名前を覚えてくれるって言いましたよね？」

そんなこともあったような気がする。確か、病院で会ったよね？寛貴達から走って逃げたっけ…

凄く前の事の出来事だったように思える

「オレ、ずっと会いたかったんです!どうしてここにいますか!？」

“会いたかった”って隣のクラスだったんだけどな…悠君を見ると、何のことか分からないのか私と彼を交互に見ていた。

瞳をキラキラとさせながら言う彼に真実を知らせていいモノかどうか迷ってしまったけれど、早く現実を見てもらおう。そう思って口を開いた。

「会ってたよ」

「はい？」

「会ってたよ、私達。だって隣のクラスだもん」

キョトン、とする彼にもう一度言うと考え込んでしまった。
まだ気づかないのかな…

「意味わかんねえ。章吾、分かるように説明しろよ」

悠君が言い、飛澤章吾が「前に話したと思うんすけど…」と事情を話し始めた。

「梨桜」

呼ばれて振り向くと、寛貴が教室に入ってきていた。
来てくれてホッとした。

「随分いるなあ」

拓弥君も来ていて、廊下に群がっている男子生徒を見ながら笑っていた。

笑い事じゃないから。早く何とかして下さい。

「章吾、梨桜に何か用か？」

寛貴に聞かれた彼は急に慌て始め、やっと分かったのか私を見て目を大きく見開き、また人を指差した。

「…梨桜って…もしかして、東堂梨桜！？え〜っ!？」

「何言ってるんだ、大丈夫かおまえ」

五月蠅そうに片目を眇めて飛澤章吾を見ている寛貴と完全に面白がつている拓弥君。

「また邪魔すんのか？」

寛貴に言われた飛澤章吾は、固まってしまい、

「邪魔つて…寛貴さんと…え？」

私と寛貴を交互に見ながら口をパクパクさせていた。
金魚みたい…

「本当に？あのガリ勉眼鏡！？そんな…あの姫と東堂が同一人物で、しかも…」

彼の中での私つてどんな存在だったんだろう？やっぱり真実を知らせない方が良かったのかな。凄くガツカリさせたみたいで悪い事したかな…

頂垂れてしまった彼を見ていると寛貴がクツと笑った。

「梨桜、行くぞ」

「あの中に行くのイヤだ。怖いよ」

寛貴に手を引かれて教室を出ると山のように集まっていた人だけがスツと引いた。

寛貴が視線を向けた先から、人が避けて道が出来ていく。
やっぱり総長つて凄いなだね、それに便利でいいね。

握られている寛貴の手をくいと引くと、立ち止まって私を見た。

「どうした？」

「さすが生徒会長で朱雀のトップだね、困ったら寛貴のこと呼んじやおつかな」

「おまえは…前から言ってるだろ」

眉根を寄せながら言う寛貴は少し怒っているように見えた。

“オレを呼べ” ってまだ有効なの？ 葵の事があつたからもう呼んじやいけないと思っていた。

「いいの？」

「同じことを何度も言わせるな」

寛貴は小さく溜め息をついて「おまえは…」と言いながら歩き始めた。

「寛貴、ありがとう」

私の少し前を歩く寛貴の背中に言うと、私の手を握る指に少しだけ力が込められた。

眠り姫と攻略法 (7)

「梨桜ちゃんて寝起き悪いの?」

お弁当を食べながら悠君に聞かれた。

「うーん…そういう時もあるかも。どうして?」

「オレ達が梨桜ちゃんの家に行ったとき、初…叔父さんが起こしても起きなかったから」

悠君の言葉に、辛かったあの日を思い出した。

あれは大反省だったなあ…二度とあんな無茶はやらないよ、うん。

「あの時は前の日に眠れなくて、やっと眠れたから凄く眠かったの…全部自分が悪いんだけどね」

「どうして?」

「葵と慧君が出掛けていなかったからこっそりお風呂に入ったの。そうしたらバスタブの中で転んじゃって、骨折したところが凄く痛くなって眠れなくなったの」

麗香ちゃんが「梨桜ちゃん、可哀想」と言ってくれたけど、寛貴は呆れたような顔で私を見ていた。

「溺れたらどうするんだ?バカだな」

「無謀だな、梨桜ちゃん」

寛貴と拓弥君の言葉に反論できなかった。
本当にアレは辛かった。転んで背中を打った時も痛かったけど、その後が滅茶苦茶痛かった。

「どうしてもお湯に浸かりたくて我慢ができなかったの。葵と慧君にもお風呂に入ったのがバレちゃって、怒られた」

お腹が一杯になってお弁当の蓋を閉じてお茶を一口飲んだ。

「宮野君で、怒ると怖い？」

さつき気が付いたんだけど、麗香ちゃんが葵の事を聞く時って少し頬を染めて、瞳がキラキラと光るんだよね。

今も頬に両手を当てて聞く仕草が可愛らしくて、瞳がキラキラしている。

恋する女の子って可愛いね？

相手が葵だと思うと少し複雑な気持ちだけど、見ていて微笑ましい。

「怖い。かなあ…でも優しいよ。怒りながらだけど、ちゃんと髪の毛を乾かしてくれたし」

麗香ちゃんは、ほんのりと染めていた頬をピンク色に染めて、眼を大きく開いて驚いた顔をした。

「え！？乾かしてもらってるの？」

「うん」

驚いた顔をされて、戸惑った。

…どうして悠君と麗香ちゃんが顔を赤くするの？

「いつもそうなの？」

この二人、もしかして変な想像してる？

怪我をする前から乾かしてもらったけど、本当の事を言っ
て変な想像が膨らんだら困るから「肩が痛いからだよ」と言つと、
二人は安心したようにホッと息をついていた。

そんなに変かな…？

眠り姫と攻略法 (8)

悠君と麗香ちゃんのおしゃべりに相槌をうつっていたら眠くなってきた。

人の話す声が耳に心地良くて、ウトウトと眠ってしまいそう。

「梨桜、来い」

寛貴に呼ばれて隣の部屋に入ると、「座れ」と言われて寛貴の手を借りながらソファに腰かけた。

「疲れたか？」

「うん、久し振りだからね。ちょっと眠くなってきた」

「熱は？」

「大丈夫…聞きたい事があるんだけど」

私の額に手を当てている寛貴を見た。

お昼寝をする前に聞いておきたかったことがある。

「なんだ」

「タカちゃんから送られた段ボールに手紙の束が入っていたでしょ？」

「…」

何故が無表情で私を見る寛貴に、少し不安になった。
あの時、タカちゃんのメモを読んだと思ったのは気のせい？

「段ボールごと無くなってるんだけど、葵が何かしてなかった？」

葵に聞いても素っ気なく“箱を捨てた”としか言わないからそれ以上聞けないでいた。

「…手紙を見つけたらどうするんだ？」

どうって…どうするか考えようと思っていたら無くなっていたから、まだ決めてない。
断る手紙を出した方がいいのかな…

「連絡先が書かれてたら「捨てた」」

「え？」

「オレが捨てちまえて言って、宮野が捨てた」

素っ気なく、言う寛貴の顔をマジマジと見てしまった。
捨てた。って…私宛の手紙だよ？

「一々返事を書くつもりか？」

「だって…」

不機嫌な声で聞かれて思わず口ごもると、寛貴は小さく笑って私に向かって手を出した。

「だったら、頭を悩ませる手間が無くなって良かっただろ」

そういう問題じゃないと思うんだけど、寛貴と葵の考えていることについていけないよ…

「そんなものが来ないようにしてやる。携帯貸せ」

「そんなこと出来るの?」

寛貴は頷くと、口角だけを上げて笑った。そんなことが出来るならもっと早く知りたかった!

寛貴に携帯を渡すと「矢野敬彦だったよな」と言いながら何か操作をして私に携帯を返した。

「どうすれば来なくなるの?」

「簡単だろ」

自分の携帯を取り出して、操作していた。
簡単なら、ますます知りたい。

「何してるの?」

「梨桜、こっち向け」

呼ばれて寛貴を見ると機嫌が良さそうに笑っていた。

「すぐに終わるから目を閉じて“5つ”数える。いいな?」

「うん」

良く分からないけど、手紙を受け取らなくて済むのは助かる。目を閉じて数を数えた。

いち、にい、…

「単純で楽だな」

何が？と聞こうとしたら、唇に柔らかいものが触れてシャッター音がした。

「！？」

寛貴にキスされてる！？

「何してるの！？」

「分からないのか？」

キスされたのは分かってるよ！

何で？ってという意味なんだけど！？言葉を覚えて、もう一度聞いた。

「どっして？」

どうしてキスするの？

「…忘れたのか？」

真剣な顔をして私の顔を見ていた。

何かあった？首を捻って思い出そうとしたけれど…えへ、と笑って

誤魔化そうとしたら凄くイヤな顔をされた。

「オレは自分のものに手え出されんの嫌いだって言っただろーが、忘れんな」

真顔で言われて吃驚した。

え、あれってこういう意味だったの？

「…その顔はきれいさっぱり忘れてたって顔だな？」

忘れてはいないけど、ううん、ほとんど忘れてたけど、意味がある言葉だとは思わなかった。

何て答えよう？

取り敢えず、『私はモノじゃないよ』って言うてもいい？

あのね、と話し始めようとしたら目の前に顔があった。

キスされる。そう思った瞬間に唇が重なって抱き寄せられた。

寛貴に抱き締められるとドキドキするんだよね…今までに感じる」とがなかった感情、これは何？

「嫌か？」

問われて、考えてしまう。

私の髪に寛貴が頬を寄せていて、不思議とそれが嫌じゃない。どうして嫌じゃないのか、自分でも分からない。

「嫌じゃないけど、分からない」

これが率直な気持ち。

分からないけど、嫌じゃないの。当たり前だけど、葵とは違う。前とも違う…

「別に急いで答えが欲しい訳じゃない」

もう一度、唇にキスをすると私を自分の胸の中に抱き込んだ。

眠り姫と攻略法 (9)

病み上がりだから？

私には刺激が強すぎたらしく、頭と体力を使い果たしてしまい、キスをされたままくたりと寛貴の腕の中で崩れてしまった。

「梨桜？」

自分の腕の中にいる私の顔を覗き込まれ、視線だけで対抗した。

「もっと体力つけるよ」

その台詞、寛貴にだけは言われたくない。むうっと寛貴を睨むと笑われた。

「体力が無いのを分かっているなら、ああいうことしないでよ。寛貴のバカ」

ソファに寝かされて眼を閉じると、軽く眩暈がした。

今更後悔しても遅いけど、葵の言う通り、もう少し回復してから学校に来れば良かった。

「午後の授業を受けるの無理みたい。保健室で休んでる」

「移動だけで大騒ぎされるぞ」

その言葉だけで、疲労感が増したような気がする。どうしてあんなに大騒ぎされなきゃいけないの？

「東堂、ここにいて聞いたぞ？」

扉が開き、担任の先生が部屋に入ってきた。

「具合が悪いのか？」

「久しぶりに授業を受けたから疲れたんだろ」

私の代わりに寛貴が答えてしまい、先生は頷いていた。誰のせいで疲れが増えたと思ってるのよ？

「そうか、起きなくていいぞ。横になってろ」

先生の言葉に甘えて横になったままでいると、先生は「騒ぐのも無理ないな」と一人で納得していた。

「でも、これなら効果はありそうだな」

ボソボソと独り言を言っている先生に私は首を傾げた。寛貴も何のことか分からないのか、腑に落ちない顔で先生を見ていた。

効果？

「先生？」

私が聞くと、先生はニツコリと笑って私と寛貴を交互に見た。その笑顔、何かを企んでいるでしょう？

先生、怪しいよ。

「東堂、実はな頼みがあるんだ」

やっぱり怪しい。

体を起こして、構えながら先生を見たけれど、変わらずにニコニコ笑っていた。

どうしてそんなに機嫌がいいの？

「何ですか？」

「夏休みにオープンキャンパスがある。生徒会役員として中学生に学校紹介と挨拶をしてくれないか？」

え、私が？

自分を指差して先生に聞くと、「そうだ」と頷いていた。

「難しくない。藤島の隣でにっこり笑って学校が楽しいってアピールしてくれ」

「無理」

私の隣に座っていた寛貴は即答していた。

先生、申し訳ないけど私も無理かも…

「おまえな、即答するなよ。仮にも生徒会長だろ！学校の為に協力しようとか思わないのか！？女子生徒が増えた方がいいだろ？」

少しだけ不純な動機が混じっているように思えたけれど、共学と言いつつ女子生徒が10名しかいない今の状況は寂しすぎる。

「別に、うるさい女が増えるのは面倒だ」

女子生徒が増えれば学校の雰囲気明るくなると思う。

そう思ったのに、寛貴は本当に面倒らしく素っ気なく切り捨てた。寛貴の外見なら騒がれるのも分かるけど、そんなに毛嫌いしなくてもいいのに…

「そんなに女の子が嫌い？」

「うるさい女は嫌いだ」

どこかで聞いたことのある理由だね。

纏わりつかれ過ぎて、嫌いになっちゃったんだね。

「藤島、オレは今回の件で大変だったんだぞ!？」

なるほど、と一人で納得していると先生の悲痛な声で訴えていた。どうして先生が大変だったの？

「女子生徒が二人も拉致されて、生徒会が他校に殴り込みに行ったなんて…前代未聞だぞ!共学になった途端にこんな騒動が起きて、PTAが大騒ぎだったんだぞ」

「先生、ごめんなさい」

学校の事は全く考えていなかったから先生にも迷惑をかけちゃった。

「“共学”を廃止しろって騒いだPTAを宥めた先生をお願いを聞いてくれ」

切々と訴える先生を見ていたら申し訳なくなってきたしまった。あのときに誰かに相談していたら結果は変わっていたのかもしれない。

「分かりました」

私が言うと、先生はにっこりと笑った。

その変わり身の早さに驚いていると寛貴が私を見て溜め息をついた。

「梨桜、なんで受けたんだよ…そもそも、代々の生徒会が朱雀の幹部なんだ。放任してきた学校とPTAにも問題があるだろ、今更ガタガタ騒ぐんじゃないよ」

そんな事言われても、先生が可哀想になっちゃったから…

迷惑もかけたし、生徒会役員としての責任感もあるかなって

「だって先生にも迷惑かけちゃったし、それに、生徒会の仕事なんでしょう？私一人でも頑張るよ」

だから寛貴は出なくてもいいよって言おうとしたら、先生は腕を組み寛貴を見ながらニツと笑い口を開いた。

「東堂、一人じゃないから大丈夫だぞ？大橋にも頼むつもりだ。あいつは目立つのが好きだから引き受けるだろ。大橋の隣に立ってくれればいいぞ」

先生がニコニコしていると、寛貴は不服そうな顔をして「オレも出ればいいんだろ」と言うと、先生はニヤツと笑った。

先生ってもしかしたら、確信犯？私ってば言いくるめられた？

渋い顔をする寛貴と、笑っている先生を見比べていると私の携帯が鳴った。

授業中に誰だろう？と思い電話に出ると

『梨桜っ！あのメールは何なの！？あの男は誰！？』

耳に当てた受話器を遠ざけてしまっくらい大きな声で私の親友は問い質してきた。

『ちよっと！何で黙ってるの！？梨桜、答えなさいよ！！』

空木 (1)

「あのね、円香ちゃん落ち着いて？」

『こんなメールを送られて落ち着けっという方が無理でしょ！このイケメンは誰なの？』

何故かとても興奮している私の親友。それより“メール”って何だろう？

私は円香ちゃんにもタカちゃんにもメールを送ってない。私の携帯をいじっていたのは寛貴だよな？

寛貴を見ると、素知らぬ顔をして先生と話をしている。

『…私になんでも相談するって言ったのは嘘？』

彼女は怒ると怖いんだからね、寛貴っては何をしたの？

「嘘じゃないよ？」

近いうちに近況を話そうとは思っていたんだよ、怒らないで…

『だったら、彼氏が出来たならどうして言ってくれないの？梨桜、酷いよ』

「え、誰が？」

“彼氏が出来た”その言葉に驚いて聞くと、電話の向こうで円香ちゃんやんは『誰って、何を言ってるの？梨桜とイケメンがキスしてるでしょ！』と言い、寛貴が何をしたのかをやっと理解した私は、手元

にあつたクッションを寛貴に投げつけた。

『それから、なんで髪の毛が短くなってるの？梨桜は絶対に切らなかつたでしょ』

クッションを軽々と片手で受け止めた寛貴は私を見ながら笑っていた。先生はもう部屋を出ていなくなっていたから、もう一つあるクッションを寛貴に投げつけてやった。

『ちよつと！質問に答えなさい！！』

短時間で彼女が納得できるように話をするのは無理だと判断して円香ちゃんに断りを入れる事にした。

「髪の毛は弟に切ってもらったの。ごめん、今は時間が無いから夜に電話してもいい？」

時間のこともあるけれど、今ここで説明するのは恥ずかしすぎるし、円香ちゃんに問い詰められる前に寛貴を問い詰めたかった。

円香ちゃんは仕方ないね、というように溜め息をついていた。

『ねえ梨桜、これだけは今教えて。…前に進んでるって思つてもいいの？』

今まで、立ち止まっていたつもりも、後ろを向いたつもりもなかったけれど、円香ちゃんとタカちゃんに凄く心配をかけていたのは確かだよ。

「うん」

『まあ、いいわ。電話待ってるから。それと、このイケメンに伝えて？“こんなの表に出したら、殺されるだけだよ”以上。分かった？』

殺されるって、円香ちゃん…

大体、誰が殺すのよ？大袈裟なんだから。

「良くわかんないけど、伝えてみる」

電話を切ると、寛貴が私の手にペットボトルを持たせ、私が投げつけたクッションをソファに戻した。

「円香ちゃんが怒ってたよ。こんなのを表に出したら殺されるよって伝えなさいって」

「誰にモノ言ってたんだよ？」

不敵に笑う寛貴に思わず、カツコイイな。とってしまったけれど、すぐに気を取り直して話を続けた。

「誰って、朱雀の総長様でしょ？でもね、円香ちゃんだって怒ったから凄く怖いんだよ」

タカちゃんなんか、いつつも頭が上がらないんだから。

そんな二人が私は大好きなんだけど…

「ヤラれる前に沈めてやるって言うっておけ。…梨桜、その女に会いたいかな？」

そりゃ…会いたいよ。

寛貴に「久しぶりに会いたいよ」と言うと曖昧に笑って水を飲んで
いた。

「東京と北海道は遠いけど、会おうと思えば会いに行けない距離じ
ゃないよ。それに、葵に“帰って来い”って言われて戻るのを決め
たのは私だから」

聞いてきたのは寛貴のクセに、私の答えを聞くと素っ気なく「あっ
そ」と言いそっぽを向いてしまった。

友達と離れるのは寂しかったけれど、北海道から離れたと思った
のも事実なの。

昼休みが終わるのに梨桜ちゃんは部屋から出てこなかった。

「様子を見てきた方がいいかな」

「今、中に入ったら寛貴に何されるか分からないぜ？」

心配そうに言う笠原に拓弥さんが笑いながら言うつと笠原は固まってしまうた。

「梨桜ちゃんなら大丈夫だろ。それより、群がってた奴等をどうするんだよ」

「さあな…寛貴がなんとかするんじゃないかね？」

投げやりな拓弥さんを睨むと「大丈夫だろ」と言いながら目を閉じてしまった。

彼女の素顔が明らかになったら、絶対に男達の態度が変わって梨桜ちゃんに近付こうとするだろう。

昼休みになった時の廊下は凄かった。

梨桜ちゃん見たさに1年はもちろん、上級生まで集まっていて、彼女を見た奴等の表情は皆同じだった。

寛貴さんだけで抑えきることができんだろうか…

そんな事を考えながら生徒会室を出ると男達が集まっていた。

普段は用が無ければ人が来る事が無い場所なのに、こんなところまで…マジかよ？

「出て来ねえじゃんか」

「朱雀と青龍にいい顔してる女だろ？そんなの、可愛くてもサイテ
ーだろ」

誰かが発した言葉にカツとなった時、鈍い音がした。

うめき声が聞こえて振り返ると、寛貴さんが上級生の胸ぐらを掴み
壁に叩きつけ、ギリギリとその手で男を締め上げていた。

「…梨桜が、何だって？」

「寛貴、程々にしとけよ？」

拓弥さんが笑いを含みながら言うと、彼女を貶めるような発言をし
た上級生は寛貴さんに睨まれ、締め上げられて竦みあがっていた。

「答えるよ、誰がサイテーなんだ？」

口元に笑みを浮かべて男を締め上げている寛貴さん。学校でこんな
表情を見せるのは珍しい。

周囲にいる生徒達は無言でその場に立ち尽していて、それに苦笑し
ながら拓弥さんは寛貴さんの腕に手をかけた。

「寛貴、もういいだろ」

スツと寛貴さんが手を離すと上級生は床に座り込み咳き込んでいた。

「梨桜ちゃんが美少女だって知って、ここまで見に来ているお前達

って何なんだよ？そっちの方がサイテーなんじゃねえの？」

拓弥さんは立ち尽している生徒の前で笑みを浮かべた。

「梨桜ちゃんは、どんな時でも、誰にでも平等に優しいんだから。外見だけで騒ぐあんた達とは違うんだから」

ポツリと笠原が呟き、オレはその頭を撫でてやった。
いい事言っじゃん、おまえ。

「梨桜を連れて宮野の所に行く」

放課後寛貴さんに言われて、朱雀の車で青龍のチームハウスに向かった。

青龍のチームに行くのは初めてだ。

『毎日行くわけじゃないよ』梨桜ちゃんはそう言っていたけれど、青龍の奴等は確実にオレ達よりも接する機会が多い。

車のドアが開くとチームの奴等が駆け寄ってきた。

慕われている梨桜ちゃん。彼女の手を取って車から降りるのを支えている寛貴さん、それを見て焦れる…オレ。

嫉妬、だよな。いつか焦れなくなるんだろうか？

「梨桜さん！」

小嶋が駆け寄って来ると、梨桜ちゃんが笑った。

「コジ君！久し振りだね」

「具合はどうですか？」

眉尻を下げて心配そうにしている小嶋にふわりと笑う。

この笑顔が反則なんだよな…集まっている奴等も、見惚れている。

「私は大丈夫だよ。心配かけてごめんね」

「絶対に無理しないで下さい！」

駆け寄ってきていた中の一人が言うと、梨桜ちゃんは頷いた。

「もう、危ない事はしないで下さいね」

本当にチームのメンバーから慕われているんだな…彼女が朱雀に来るようになったら、どうなるんだらうか？

また「うん」と頷く梨桜ちゃんの頭に寛貴さんが手を置いた。

「疲れてるんだから早く休め」

梨桜ちゃんが寛貴さんを見上げると少しだけ頬を膨らませて何かを訴えていた。訴えられている寛貴さんは苦笑しながら答えていた。

二人のやり取りをそこにいる皆が見ていた。

自分が所属しているチームの幹部が大切にしている彼女と、反目しているチームのトップが親しげに接している。

オレには仲が良さそうに見える二人だけれど、あいつ等にはどう見えるんだらうか…

「寛貴は分かかってないでしょ」

そう言いながら、梨桜ちゃんが寛貴さんが持っている自分の荷物を受け取るうとすると「いいから行くぞ」と言い、梨桜ちゃんの背中に手をやり、歩くように促していた。

オレと一緒に、あいつ等も複雑なはずだよな…

「コジ君、葵は？」

「戻って来ています」

幹部室に通されると三浦と宮野がいた。

無駄なものが置かれていないシンプルな部屋、梨桜ちゃんの家に行った時と同じだった。

「ただいま」

「おかえり」

二人に返されて梨桜ちゃんはまた笑っていた。

「葵」

梨桜ちゃんが宮野に歩みより、何かを聞いていた。

「ダメ」

素っ気なく何かを否定された梨桜ちゃんは「少しだけ。いいでしょ」と抗議していたけれど、また「しつこい。ダメ」と否定されていた。

「梨桜ちゃん、少しだけだよ」

三浦に言われた梨桜ちゃんは「愁君、いいの？」と聞き、三浦が頷いて答えると嬉しそうに笑った。

「外すのはまだ無理だろ」

「少しだけなら大丈夫だろ。梨桜ちゃんだって窮屈な状態から解放されたいよね」

宮野を見上げている梨桜ちゃんはやっぱり可愛いんだよな…

渋い顔をして宮野は頷き、梨桜ちゃんを別な部屋へ連れて行ってしまった。

「何処に行ったんだよ？」

オレが聞くと、三浦が親指を壁に向けた。

「葵専用の部屋。骨折の治療に使うバスタンドを外しに行ったんだよ」

すぐに宮野が戻って来て、これからの朱雀と青龍の関わり方や定例会の事を話し合っていると、カチャ、と音がして梨桜ちゃんが顔だけを出した。

「葵、上に羽織るの貸して？」

「あ？…そっちに行くからそこにいる！」

急に慌てだした宮野に何かと思って見ていると、宮野が部屋を出て行く時に見えてしまった。

首の後ろでリボンに結ばれているタンクトップとデニムのミニスカ

トに着替えた、すっげー可愛い梨桜ちゃん。

宮野に肩を抱かれた時に見えた、白くて綺麗な背中と右肩にうつすらと残っている痛々しい痣…

「大丈夫だ。消えるよ」

思わず眉を顰めると三浦が扉を見ながら呟いた。

「葵、これ暑いよ？違つこの貸して」

「いいから黙って着てる」

扉が開くと、宮野に文句を言いながら梨桜ちゃんが部屋に入ってきた。さつき見えていた綺麗な背中中は男物のパーカーにすっぽりと覆われていて思わず舌打ちをしそうになった。

「暑い！」

梨桜ちゃんが胸元のジッパーを下げると、宮野がそれを上げて、また梨桜ちゃんが暑いと言えば、パーカーの袖をまくってやっていた。

「文句言わないで着てる。髪の毛が濡れたら拭けよ、バカ」

そう言うと、タオルで梨桜ちゃんの髪の毛を拭きだした。梨桜ちゃんは大人しくされるままになっている。そういえば、宮野に髪の毛を乾かしてもらって言ったよな…

面倒見の良い弟っつーよりも、シスコンに見えるのはオレの気のせいか？

空木 (4)

締め付けているわけではないけれど、存在だけで息苦しく感じるコ
レが好きじゃなかったから、愁くんから許可をもらって、バストバ
ンドを外すついでにシャワーを浴びてすっきりしたかった。

「あれ？」

葵の部屋に置いていた私の着替えてこれだけ？

クロゼットのの中を見ると、デニムのスカートとタンクトップだけし
かなかった。また制服を着るのが嫌だったから、スカートとタンク
トップを手に取って着替えた。

「葵じゃなくても怒られるかも」

首の後ろでリボンを結ぶタンクトップは可愛いけれど、露出の多い
この格好で皆の前に行くのはマズイよね？

幹部室の扉を少しだけ開いて中を覗くと皆がこっちを見た。

「葵、上に羽織るの貸して？」

そう言うと、葵が眉を顰めて立ち上がり怖い顔をした。

「あ？…そっちに行くからそこにいろ！」

私を廊下に出すと扉を閉めてしまった。

「違う服無いのか？」

「葵の所には見当たらなかったよ」

自分でこれがいいって言うていたくせにチツと舌打ちをして、パーカーを私に投げた。

「着てる」

これ、今の季節に着るには生地が厚くない？
袖を通すとやっぱり、暑いよ…

「暑い」

髪の毛を乾かしてもらいながら、円香ちゃんに電話をしなければいけなかったのを思い出した。

「円香ちゃんに電話しなきゃ…ね、携帯取ってきてくれる？」

「ありがと。私、葵の部屋にいるね」

葵から携帯を受け取ると皆に手を振り、幹部室を出て円香ちゃんに電話をかけた。

彼女を怒らせると大変なのは、タカちゃんを見て良く知っている。

約束は守らないとね…

電話をかけ、コール音を聞くこと数秒…接続音がして、少々ご立腹な親友は私を問い質した。

『梨桜、早く教えて。このイケメンは誰？』

円香ちゃん、実はね…今私の周りはイケメンだらけなんだよ。見たらびっくりするよ？

こんな言葉で誤魔化されてくれないかな…って、彼女に限って誤魔化されてはくれないよね。

ベッドに仰向けになりながら覚悟を決めた。

「えーと…同じ学校の人で、藤島 寛貴先輩？」

結果は見えているんだよね、呆れるか怒るかどちらかだ。

毒舌な円香ちゃんに怒られるかもしれないけれど、ちゃんと説明しよう。

『なんで疑問系？』

鋭く突っ込まれて、“アハハ”と笑うと円香ちゃんは溜め息をついた。

『梨桜、誤魔化さないで転校してからの事、全部話しなさい』

「誤魔化してなんかないよ」

「早く」と急かされて、腹を決めた。

「えーと…あのね」

・

・

『呆れた…梨桜と不良って全然結びつかない。しかも、あの葵君が総長？信じられない』

一通り話をすると、案の定円香ちゃんは呆れていた。私だって最初は信じられなかったよ…

『しかも、そんな理由でキスされたなんて…ねえ、抵抗しなかったの？今までの梨桜なら暴れてもおかしくないよね？』

円香ちゃん言葉に頷きながら、改めて首を捻った。

「自分でも分からないけど、嫌じゃなかったんだよね。円香ちゃん、どうしてだと思っ？」

電話の向こうで「へえ」とか「なるほどね」と一人で納得してばかりで私には何も教えてくれなかった。

『…東京には梨桜の“50センチの壁”を突破する男がいたわけだ。いいんじゃない？前に進んでるようだし、安心した』

円香ちゃんは納得しているようだけど、私は納得できない。

50センチの壁って何？私にはそんなモノは無いよ！

「円香ちゃん教えて、50センチの壁ってなに？」

『いずれ分かるんじゃない？…ま、無理だと思うけど』

円香ちゃん、酷いよ。

「いいよ、タカちゃんに聞くから」

私が言つと、彼女に鼻で笑われた。

.

空木 (5)

『それより、夏休みにタカと一緒に大学の下見に行く事にしたの。会えない?』

壁つて何だろう?と考えていると円香ちゃんはいきなり話題を変えてきた。

大学進学を考える時期なんだね、私も事故に遭わなかったら同じように東京に来ていたかもしれない。

円香ちゃんに「いつ来るの?」と聞くと、うん…と考えながら「多分、夏休みに入ってすぐかな」と答えた。

ふと思いついたんだけど、円香ちゃんのお父さんて凄く厳しい人だよな?大学の下見とは言っても、男の子と一緒に東京に来るなんて許してくれないんじゃない?

「円香ちゃん、お父さんはタカちゃんと一緒に東京に行くことを許してくれたの?」

『…』

「もしかして、言っていないの?」

珍しく無言になってしまった彼女に聞くと、力の抜けた笑いが返ってきた。

『それよりも東京に行ったら写真の男に会わせてよね』

話しを逸らしたところを見ると、許してもらっていないんだね…夕

力ちゃん、頑張れ！

『絶対だからね！』

念を押されて、円香ちゃんが寛貴に会った場合の事を考えた。

…想像すると怖いから会わせたくないな。

「なんで？」

『一言、言つてやりたいからよ』

…円香ちゃんらしい答えが返ってきて苦笑してしまった。相変わらず怖いもの知らずなんだから。タカちゃんも大変だね？

「聞いてみるけど、期待しないでね」

『ねえ梨桜？』

急に声のトーンが変わり、少し低い声で優しく呼びかけられた。

「ん？」

『答えたくないなら返事はしなくてもいいよ。私の独り言だと思つて？』

優しい声で言う円香ちゃんに「うん」と答えて彼女の言葉に耳を傾けることにした。

何が言いたいのかは分かつてる。

『この前、偶然アイツに会ったの。梨桜の事聞かれたんだけど、私

「ふざけるな！」って怒鳴っちゃった。隣にタカがいたから止めてくれたんだけど、いなかっただら殴っていたかもしれない」

怒鳴りつけるなんて、円香ちゃんらしいね？

タカちゃんも必死で止めたんだろうな…焦る彼の顔が想像できて笑いそうになってしまった。

『アイツは…自業自得のクセに、梨桜の事が忘れられないみたい。散々、梨桜の事を傷つけたのに、自分が傷ついているって思ってるんだよ。…バカだよな？』

他愛無い話をしてから電話を切って部屋に戻ると、愁君がお茶を用意してくれていた。

ずっと話していたのと、暑さのせいで喉が渴いていたから一気に飲み干すとお代わりを出してくれた。

「円香ちゃんがタカちゃんと一緒に大学の下見をするために東京に来るんだって」

お皿一杯に盛られた苺を摘まんで口に入れると葵が興味無さそうに頷いていた。

今日は果物が沢山並んでいる。どうしたんだろう？

しかも、私の好きな甘夏もある。

「これ、食べてもいい？」

大きな甘夏を手にとって香りを楽しんでいると愁君がニッコリと笑った。

「梨桜ちゃんは柑橘類も好きなんだよね？」

「うん、果物は好きだよ。こんなに沢山あるなんて凄いね」

葵の手に甘夏を乗せるといつものように外皮をむいて、実を二つに分けてくれた。

「ありがとう」

円香ちゃんの独り言を思い出しながら、皮をむくことに没頭した。

梨桜の事を傷つけたのに、自分が傷ついているって思ってるんだよ。…バカだよな？

私、タカちゃんにも円香ちゃんにも話してない事がある。傷つけられと思っていたけれど、それは逆で私が傷つけていたのかもしれない。彼にあんな行動を取らせてしまったのは私の所為。

彼の事を思い出していると、唇に何かが触れた。

「何してんのお前」

口を開けると甘夏が入りこんできて、軽く噛むと酸味のある果汁と爽やかな香りが口の中に広がった。

「甘夏の皮をむくだけなのに何で眉間に皺が寄ってんだよ？」

甘夏を飲み込むと、葵がまた、口の前に持ってきたからパクリと食べた。

美味しい…

「つい…」

笑って誤魔化すと、葵は疑わしい目で私を見ていた。

「美味しいよ？」

むいていた甘夏を葵の口に持っていくとパクリと食べた。

「皮むきながら、トリップするな」

トリップしてたんじゃないよ。狡い自分の過去を思い出して自己嫌悪に陥りそうになったの。

空木 (6)

何か言いたげな葵の口に甘夏を入れて、甘夏をもう一つ葵の手に握らせた。

「コジ君、むいてあげるね？」

腕を骨折して手を使うのが不便そうなコジ君に甘夏を向いてあげるために葵の隣から移動して、コジ君の隣に座った。

「女の子が素手でむくには固いな…梨桜ちゃんていつも宮野にむいてもらうの？」

拓弥君が甘夏をむいていたけど「面倒だな」と言いながら途中で寛貴に押し付けていた。

「途中で止めんなよ」

「オレは食べる専門」

寛貴は文句を言いながら、葵は黙々と固い皮をむいていて、悠君とコジ君は呆然と見ていた。

甘夏をむいている総長二人…これって、貴重な光景かもしれない。

「梨桜、これもむけ」

「ん」

葵と寛貴から受け取った甘夏の皮をむきながらコジ君と悠君とおしやべり。葵と寛貴達はまた難しい顔をしながら話をしていた。

「コジ君、夏休みはココに来れそう？」

“赤点を取ったら出入り禁止”葵が言い出した無茶な条件。彼の試験結果をまだ聞いていなかった。

「梨桜さんのおかげで平均点以上がとれました」

ニコニコ笑いながら言うコジ君に良かった、と胸を撫で下ろすと、隣から不満の声があがった。

「弟の友達に教えるって、まさかコイツ？」

悠君が親指でコジ君を指しながら聞いた。

「うん。毎日頑張ったもんね」

「ハイ、ありがとうございます！」

「へえ……」

眉間に皺を寄せてコジ君を見ている。そういえば今回の試験結果ってまだ良く見ていなかった。

「悠君はどうだったの？」

何気なく聞いたつもりだったけれど、彼の頬がピクリと動いた。

この表情：もしかして、聞かない方が良かった？赤点をとっちゃった？

何も答えてくれない悠君にどうしよう？と思っていると、拓弥君が笑いながら私を見た。

「梨桜ちゃん、追試まで勉強教えてやって」

拓弥君に言われて、そちらを見ると寛貴と目が合いフツと笑われた。

「4教科だ。梨桜、頼んだぞ」

え、そんなに？

…短期間でできるかな

「梨桜ちゃん、頼む！」

悠君が両手を合わせて頭を下げられて頷いてしまった。責任重大だね？

「うん、いいよ」

そう言うと、悠君は顔を上げて笑顔を浮かべた。

やっぱり、可愛いね。私に笑いかけてくれる、またこの笑顔が見れて良かった。

「梨桜、携帯鳴ってる」

葵に言われたけれど、私の手は果汁でベタベタしていて電話を受け取ることができなかった。

「誰から？」

携帯のディスプレイを見ながら葵は渋い顔をした。

「矢野。…メールの着信だ」

タカちゃん？

どうしたんだろう…

「手を洗って来るね」

葵の隣に座ってタカちゃんからのメールを読んだ。

“ 円香に聞いたぞ。事情は分かったけど、あのメールにはマジで驚いた。とんでもねえ男だな”

彼のメールに返信を打った。

タカちゃん、その『とんでもない男』は今隣に座って私がむいた甘夏を食べているんだよ。『別に急いで答えが欲しい訳じゃない』って言われたんだけど、その言葉に甘えてもいいと思う？

- - - なんてね。そんなことをメールで返せるわけもなく、“私もびっくりしたよ！”と無難な文章を入力してから“東京に来るんだよね？円香ちゃんと一緒だね”と入力して送信した。

「なにニヤケてんだ」

葵に顔を覗き込まれて、さり気なく携帯の画面を葵から見えないようにずらして答えた。

「タカちゃんと円香ちゃんがこっちに来るって言ったでしょ？」円香ちゃんと一緒だね”ってメールしたの」

「意味が分かって言ってる？」

拓弥君がマジマジと私の顔を見ながら言った。

失礼な…私だつて分かるよ！むうっとしながら拓弥君を見たらニヤツと笑われた。

「いつ来るの？矢野君に会ってみたいな」

愁君に聞かれて、円香ちゃんとの会話を思い出した。

…タカちゃんを彼等に会わせるのは気が引ける。タカちゃんは普通の生徒なんだから。

「夏休みに入つてすぐって言ってたよ」

「梨桜、忘れてないよな？」

葵に言われて、涼先生から言われていたことを思い出した。
検査入院…

「日程が重なつたらどうしよう？」

葵は“オレに聞くなよ”そんな顔をしながら眉を顰めた。

「どうしよう。って、検査の日は決まってるだろ？梨桜から矢野に

検査入院があるって伝えればいいだろ」

葵に言われてタカちゃんにメールをした。

「梨桜ちゃん、入院するの？」

「うん。検査だけだから心配しないで」

心配そうな顔をした悠君に大丈夫だよ。と笑顔を向けた。

「予定が立て込みそうだな」

今のところ分かっている予定を一つずつ確認した。

「検査入院と、タカちゃんと円香ちゃん。オープンキャンパスですよ？パパもイギリスから帰って来るよね」

「慧兄と鎌倉のじーさんの家にも行くだろ」

そうだった。私が海に行きたいって言ったんだ。

…夏休みは忙しいね。それまでにしっかりと怪我を治さなきゃ。

空木 (7) side:コジ

今日はいつもの休日よりも数倍は騒がしい。理由は初代と5代目が青龍のチームハウスに来るから。

系列のチームの幹部も来ることになっていて、朱雀の幹部も呼ばれている。

“紫垣”それを強調したいからだと思うが、とにかく人数が多くて騒がしい。

「愁さん、小嶋さん、朱雀が来ました」

そう言われて門を見ると車が2台入って来た。

「朱雀と系列の幹部ツス」

愁さんが煙草を啜えたまま頷いていた。

ヤンキーなんだけど、葵さんから幹部室と総長室は禁煙と言われているから外で煙草を吸っている。

まあ、葵さんに言われなくても、梨桜さんが居る場所で煙草を吸う事はない。

愁さんだけじゃなく、系列チームの幹部も黙ってここで煙草を吸っている。

「朱雀の大橋と海堂だ」

系列のチームにいる奴等が車から降りて来た大橋と海堂を見て眉を顰めた。

「愁さん、どうして姫を朱雀と共有しなきゃいけないんですか!？」
不満そうに言う男に愁さんは

「仕方ねえだろ？梨桜ちゃんは紫苑の生徒で生徒会役員だ。それに、例の事件のせいで今まで以上に狙われる存在になったんだ」

オレは最初から知っていたけど、紫苑の生徒は衝撃的だったと思う。散々陰口を言っていた地味な生徒が、実は超絶美少女だった。

『どうして朱雀と青龍のトップがあんな地味女に執着するのか？』
今までは皆が首を捻っていたけれど梨桜さんの素顔を見て考えを変えた奴等はいくらだろう。

青龍と朱雀の弱みとしてだけじゃなく『東堂梨桜が欲しい』そう思っているチームだって出てくる筈だ。
今まで以上に梨桜さんは狙われる。

今日、初代がオレ達を集めたのは梨桜さんが二つのチームから守られる存在だという事を周囲のチームに見せつける為だろう。

「愁さん、初代がいらっしやいました」

その報告でチーム中に緊張が走った。

初代、というよりも双子の叔父さんはすげえイイ男で、梨桜さんを守りきれなかった情けないオレに『梨桜を守ってくれてありがとう』と頭を下げた。

母親から聞いた話だとわざわざウチに来て頭を下げて、オレの治療

費も入院費も全部払ったらしい。

「よお、調子はどうだ？」

車から降りてきた初代はオレを見ると声をかけてくれた。
カッコいいよな。

梨桜さんの真つ直ぐな性格は叔父さん譲りなのかな… 葵さんのオレ様なところは間違いなく叔父さん譲りだよな？

「はい、順調です」

そう答えると初代は笑いながらオレの頭をポンポンと叩いた。
その後ろで五代目と藤島が同じ車から降りてきていた。

「そうか。愁、梨桜はどうした？」

梨桜さんの姿が見えない事に少し不機嫌になっている初代。本当に梨桜さんの事が可愛いんだな…

「さっきまで夏休みの課題をしていました」

そつだ。一生懸命に何かを作っていて、何を作っているか聞いたなら『テディベアだよ』と言っていた。

家庭科の自由課題だつて言ってたけど、大変そうだよな。

「梨桜ちゃん、課題やってんの!？」

海堂が嫌そうな顔をしていた。

オレも勉強は苦手だけど、こいつもダメそうだよな？

皆で幹部室に移動したけれど、そこには梨桜さんも葵さんもいなかった。

「いないぞ」

「隣かも」

オレが言つと、愁さんから鋭い視線を向けられた。まずいこと言つたか？

「隣？」

初代が部屋を出ようとしたとき、珍しく焦りを感じさせながら愁さんが止めた。

「呼んで来ますから、慧さんはここで待ってて下さい」

「愁、オレ達が入ったらまずいことでもあるのか？」

兄である五代目が冷たい笑みを浮かべて愁さんを見ると、初代は部屋を出ていった。

「小嶋、隣になんかあるのかよ」

「梨桜さんと葵さんが…」「ロジ…」

海堂から聞かれて答えそうになると、愁さんから睨まれて口をつぐんだ。

「え…と…」

きつと二人は昼寝をしてるんだけど、見慣れないと驚くかもしれない
い…

オレも慣れないうちは凄く驚いた。でも、慣れると微笑ましくて頬
が緩んでしまう。

ソファに腰かけた葵さんに梨桜さんが凭れるようにして寝ていると
ころなんか見ていると幸せな気分になってしまう。

「勿体つげんなよ、隣に何があるんだ？」

朱雀も部屋を出て行ってしまい、愁さんに頭を叩かれた。

「他の奴等に見せるのは勿体無いだろ！」

愁さん…そういう基準？

愁さんの後に続いて部屋を出て総長室に入ろうとすると入口に人が溜まっていた。

「涼、このままセットで京都に持ち帰ってもいいか？」

無理矢理中に入ると、部屋の真ん中で皆が固まっっていて、その中央で初代が真面目な顔をして五代目に聞いた。

「ホントに叔父バカだな……」

五代目は呆れているけど、初代の気持ちは良く分かる。オレはソファに目をやり、頬が緩むのを止められなかった。

ああ、今日は葵さんの膝枕なんだ。

ソファに腰かけて腕を組みながら寝ている葵さんの膝を枕にしてスヤスヤと寝ている梨桜さん。

役割が逆のような気もするけれど、何故か梨桜さんは葵さんの膝枕で寝ている事が多い。

気配に気づいたのか葵さんが目を覚まし、オレ達を見ると眉を顰めた。

「何でこんなにいるんだよ」

愁さんとオレに向けての文句なんだろうけど、寝起きの葵さんにはいつもの鋭さが足らなくてあまり怖くない。

「ん」

梨桜さんが顔を横向きにして、寝返りを打とうとして眉を顰めた。

「い…た…」

胸が傷んだのかそう呟いてぎゅっと目を閉じてから目を開いた。

「梨桜、おはよう」

いつの間にか枕元に移動していた初代が梨桜さんの顔を覗き込みながら頭を撫でていた。

五代目が愁さんに「初代としての威厳が保てなくなるから幹部以外には絶対にこの姿を見せるなよ」と言い聞かせていて、愁さんは苦笑しながら頷いていた。

「慧君…おはよ」

起き上がるうとする梨桜さんを葵さんが後ろから支えて、梨桜さんの背中にクッションを宛がい、背中が痛まないように座らせていた。

「葵と一緒に昼寝か？」

まだ眠そうな梨桜さんは、葵さんの二の腕に額をつけて目を閉じたままコクコクと頷いていた。

葵さんが時計を見ながら「そろそろ起きろよ」と言うと、眼を閉じたまま「ヤダ」と即答している。

いつもなら梨桜さんの好きにさせている葵さんだったけれど今日だけは違かった。

「梨桜、桜庭と約束してたんじゃないのか？」そう言つと梨桜さんの頬に水の入ったペットボトルをペタリと触れさせた。

首を傾げた梨桜さんは「あ！」と言い、ペットボトルを受け取りながら立ち上がった。

「着替えてくる！」

嬉しそうに言つと梨桜さんはシャワールームに入って行つた。

今日の集まりで話されることを梨桜さんの耳に入れたくない葵さんは、さり気なく梨桜さんを自分から遠ざけた。

前に傘下にいるチームの奴に葵さんと双子だと知らずに絡まれた事があつて、その時に梨桜さん怖がらせてしまった。

だから葵さんは集まりがある時は梨桜さんをココに連れて来ないけれど、今日は特別だから仕方がない。

「桜庭つて運転手だろ？梨桜は何を約束したんだ」

初代が聞くと愁さんが笑いながら「ペンキ塗り」と答えていた。

「はあ？ペンキ塗り？」

そう、ペンキ塗り。

この前、梨桜さんが作った花壇に柵を作つてペンキを塗っていたら『私もやってみたい！』と目をキラキラさせて葵さんに訴えていた。

ペンキ塗りをしたがる女子高生。

そんなのは梨桜さんくらいじゃないだろうか？怪我をして延期され

ていたけど今日に合わせるように葵さんが許可を出した。

「行って来るね」

Tシャツとカーゴパンツに着替えた梨桜さんはオレ達に手を振った。

「梨桜ちゃん、帽子被って行けよ。それから無理な態勢を取り続けない事」

主治医らしい発言をしている五代目をフォローするように愁さんが帽子を持ってきて梨桜さんに手渡していた。

「約束できる？」

梨桜さんは帽子を被りながら頷き、部屋を出て行った。

「ペンキ塗りのどこにあんなに浮かれる要素があるんだよ」

「わかんねえ…ペンキ塗りなんてメンドイだけだろ」

海堂と大橋が首を捻っていたけれど、藤島は可笑しそうに笑っていた。

野郎とするペンキ塗りはつまんねーけど、梨桜さんとするペンキ塗りなら楽しそうだ。

初代がテーブルの上に乗せられている作りかけのテディベアを持ち上げて眺めていた。

「相変わらず変なものに興味を持つな。女の子らしくこれの続きをすればいいだろ」

梨桜さんが部屋から出て行くと、葵さんは総長の顔に戻り冷たい笑みを浮かべていた。

「慧兄、さっさと終わらせようぜ」

葵さんの言葉に藤島が反応して睨み合いが始まってしまった。

梨桜さん、この二人を止められるのは貴方だけかもしれない…

空木 (9)

見られてる。凄く視線を感じる。

今、私は穴が開くんじやないかって心配になる位に周囲からジロジロと見られている。

今まで見向きもされなかったのに、食堂にお昼を食べに来ただけでどうしてこんなに注目されるの？

お願いだから、こっちを見ないで？

「梨桜？」

隣に立っていた寛貴に声をかけられて顔を上げると「どうした？」と聞かれた。

「私、何かした？」

「心当たりでもあるのか？」

「無いから聞いているの」

私は寛貴に呼び出されて学食に連れて来られただけなんだよ！？心当たりなんかあるわけないじゃない！

「ねえ、すつごく居心地が悪いの。どうしてこんなに注目されるのかが分からない」

「考えなくても分かるだろ。鈍い奴だな」

呆れた口調で言う寛貴に文句を言ってやるつもりだと思って見上げるとまた視線を感じた。寛貴とのやり取りも皆が見ていて怖い。思わず、寛貴を盾にして視線から逃れた。

「違う場所でご飯食べる」

生徒会室か屋上に行こう。そう思って食堂を出ようとする腕を掴まれた。

「ダメだ。目の届くところにいろ」

無理だよ、こんなに注目されながらお弁当なんか食べられないよ！

「私は静かなところでお昼ご飯が食べたいのっ！離して」

「ダメだっって言ってるんだろ、今日は我慢しろ」

「さっきからお前達すげー目立ってるぞ？」

拓弥君に言われて周囲を見回すと、さっき以上に見られていることに気が付いて恥ずかしくなった。

「学食のど真ん中でイチャつくな」

イチャついてなんかない！寛貴が悪いんだよ！！

ムツとしながら寛貴を見ると、掴まれたままの腕を引かれて強引に窓際の席に座らせられた。

「…メガネを外したいって言ったのは自分だろ？早く慣れる」

「こんな事になるなんて考えてなかったもん」

「考えれば分かるだろ？」

呆れ顔で溜息をつく寛貴を軽く睨んだ。

素顔に戻るだけでこんなにジロジロ見られるなんて思う訳ないじゃない？皆がおかしいんだよ！

「見たってどうしようもない顔なのに。皆、モノ好きだね」

「梨桜ちゃん、無自覚もそこまで行くと面白いな」

私は面白くないんですけど…

笑いながら言う拓弥君と横暴な寛貴を横目で見て溜め息をついた。

「梨桜、今日だけ我慢しろ」

今日だけ、だからね？明日は絶対に静かなところでお弁当を食べるんだから。

「東堂！」

消化に悪いお昼休みを過ごして、教室に戻ろうとすると担任の安達先生に呼び止められた。

私の隣を歩いていた寛貴も立ち止まって振り返ると、先生が私に向

かって“ひらひら”と手を振りながら近づいて来た。

「先生、どうしたんですか？」

教師らしくないその仕草に少し笑いながら聞くと、先生は急に真顔になった。

「宮野先輩は京都に帰ったんだよな？」

「日曜日に帰りました」

そう答えると、あからさまにホツとしている先生に心の中でゴメンナサイと謝った。

きつと慧君が後輩でもある安達先生に無理なことを言って困らせたんだ…

「…そうか、助かった。イヤ、それよりも東堂、午後の授業は体育だから自習だったよな？」

予定を聞かれて「ハイ」と頷くと、先生は腕を組みながら私をじっと見ていた。

「先生？」

「午後の授業は家庭科室に来てくれ。手伝って欲しい事があるんだ」

先生のお手伝い…もうすぐ夏休みだから課題の準備かな？課題が多いと大変だから嫌だな。

「東堂、頼んだぞ？」

良く分からないけど頷いた。
でも、どうして家庭科室？安達先生の担当教科じゃないよね。

「ところで、東堂は洋服のサイズは何号を着るんだ？」

立ち去ろうとした先生が急に振り返りざまに聞いて来た。

「先生？」

洋服のサイズ？…突然どうしたの？
寛貴も怪訝な顔をして先生を見ている。

「7号が多いですけど…先生？」

「そうか、忘れないで来いよ」

先生はまた“ひらひら”と手を振りながら帰って行った。

午後、女子生徒達は水泳の授業、私は家庭科室で先生のお手伝い。お手伝いに洋服のサイズは関係あるの？

「失礼します」

「東堂、待ってたぞ」

家庭科室にいたのは、担任の他に教頭先生と生活指導の先生だった。もしかして、“お手伝い”じゃなくて、私に対する生徒指導？いつの間にか私も問題児になってしまったんだろうか…

教室の入り口で立ち止まっていると先生に手招きをされて、中に入ると机の上にブラウスが並べられていた。

「夏服だけだと暑いと思ったからもう1着作ってみたんだ。東堂さんに試着してもらおうと思ってね」

教頭先生が言うと、担任からブラウスを手渡された。お手伝いって、これの事？

「試着して来てくれ」

先生に言われるままに着替えた制服の試作品。セーラー服と同じ濃紺色のリボンがついていて、袖口には学年を示すであるうラインと校章が刺繍されていた。

「…これで少しは暑さから解放されますかね」

生徒指導の先生が咳くと教頭先生も頷いている。

この学校って女子生徒には甘いよね？確かにセーラー服って暑いなって思ってたけれど、ブラウスタイプの制服まで作ってくれるのって凄い。

「東堂、試着をした感じはどうだ？」

3人の先生に注目されて、笑ってしまった。今日は良く見られる日だね…

「セーラー服よりも涼しくて快適です。今日の授業はこの制服着ていてもいいですか？」

試着するなら、授業中や休み時間も過ごしてみないと快適かどうかは分からないよね。

私が聞くと、教頭先生がニコニコしながら言った。

「放課後にもう一度感想を聞かせてくれないかな？」

「ハイ、失礼してもいいですか？」

生徒指導の先生と教頭先生が満足気に笑っていたから、教室を出ようとするとうと安達先生が声をかけた。

「東堂、放課後に職員室に来いよ」

「はい」

「梨桜ちゃん？」

涼しくて快適なブラウスを着たまま教室に戻ろうと、渡り廊下を歩いていたら声をかけられて、振り返ると体育の授業を抜けてきたらしい拓弥君と寛貴がいた。

「それ、どうした？」

寛貴と拓弥君の後ろには同じクラスの生徒達が地面に座ったり壁に寄りかかりながら休憩をしているのが見えた。

「夏服を作ったから試着をしてくれって言われたの」

「へえ、可愛いじゃん。梨桜ちゃん、自習だろ？おいだよ」

拓弥君に手招きをされて辺りを見回したけれど、渡り廊下には窓枠がはめられているだけで、外に出るドアはない。

乗り越えるしかない？

「ヨイ…シヨ」

窓枠に両手をかけて、膝を窓枠に乗せて乗り越えようとした。胸と背中が痛まないように、そおっとね？

「おい、梨桜ちゃん!？」

慎重に乗り越えないとね、落ちたら痛いからね。

「梨桜！」

慌てだした二人に「平気だよ」と声をかけ、後ろを振り返り誰もいない事を確認して窓枠に膝を乗せた。

「「やめろ！！」」

二人の声に吃驚して動きを止めた。

「梨桜ちゃん、心臓に悪いから止めてくれ」

私の方が心臓に悪いよ！吃驚した！！

寛貴と同じクラスの人は勿論、先生までこっちを見ていた。

「二人が大きな声を出すからクラスの人も吃驚してるよ？」

「誰がデカイ声を出させてんだ？」

寛貴に凄まれて笑ってごまかした。

総長のくせに心配性だね？

「…骨折してるのに無茶しないでくれない？」

だから、そおっと降りようとしたんじゃない？大きな声を出したら吃驚して落ちちゃうじゃない！

「あのさ、この体制って結構キツイんだけど。降りてもいい？」

幅の狭い窓枠に片膝を乗せてバランスを取るのには難しい。腕も震えてきそうだよ

「梨桜」

寛貴に腕を差し出されて、その腕を掴むと私の脇に手をかけ、少しだけ力を込めた。

「痛むか？」

「大丈夫」

少しずつ回復してきているから今は痛くない。

寛貴の肩に手を置くと体が引き揚げられた。

「二度とやるなよ？」

地面に下ろされてギロリと睨まれた。

だって“おいで”って呼んだじゃない？そんなに睨まないでよ。理不尽だよ

「呼んだくせに」

「つつたく…」

文句を言いたげな寛貴を見上げていると、もう一人の過保護な男を思い出した。

「寛貴、葵に似てきたね」

片眉を上げて怒ってる。

小言を言ったり、怒ったりするタイミングが似てきたよ。

「一緒にするな」

案外仲良くなれるんじゃない？

一回、腹を割って話し合ってみればいいのに。

「似てるよ」

もう一度言うと、怒った顔で私を見下ろしていた。

ほら、ムキになるところも同じだよ。

「冗談じゃない」

・葵と寛貴って案外似てるトコあるよね　・

青龍のチームハウスで葵に言ったら、すっごく怖い顔で睨まれた。

「ふざけたことを言うのはこの口か？」

頬を摘まもうとする手を掴んで抵抗すると「生意気だ」と言っ
て葵の膝の上に私を抱き上げられて苛められた。

「苦しいっ」

「苦しめるためにやってるんだからいいんだよ」

訳の分からない理屈を並べると、私の首に回した手に力を入れてい
る。

葵の腕を叩いても力を緩めてはくれなかった。

「離して！葵！！」

「葵、梨桜ちゃんは怪我人なんだぞ」

愁君が言つと、腕の力は弱められたけど膝抱つこで羽交い絞めにさ
れたまま……

ゴジ君は苦笑いを浮かべて私を見ていた。

このままじゃ愁君が買ってきてくれたゼリーが食べられない。

テーブルに向かって手を伸ばすと、葵はわざとゼリーを遠ざけた。

「葵、おまえって分かりやすい奴だな」

「愁君、呑気に見てないで助けて！」

空木 (11)

「学生らしい行動を心がけるように。特に夜の繁華街…」

生徒指導の先生が熱心に夏休みの過ごし方を説いているけれど、真面目に聞いている生徒なんかいないんじゃない？

私の隣をチラリと見ると、何を考えているのか読めない顔で前を向いている。

大体、この人達に“学生らしい行動”があるのかが疑問だよな？
普段の登下校から学生らしくないんだから、夏休みの行動が学生らしい訳がない。

…あれ？それを言ったら私も同じ？
もしかして、私もいつの間にか学生らしくなくなっちゃってる？

高校生らしい生活…そんな生活はここしばらくしてない事に溜息が出た。

葵と寛貴に関係なく、あの事故から私の生活は大きく変わったんだ…
「どうした？」

小さな声で寛貴が聞いてきたけど、なんでもない。と首を横に振った。

「気分が悪くなったら言えよ」

優しいね。

寛貴を見上げて“ありがとう”と言おうとすると、少しだけ屈んで

私の口元に自分の顔を寄せてくれた。

「ありがとう。大丈夫だよ」

終業式後の定例会

互いの学校を行き来しているだけじゃなく、チームも行き来したんだから必要ないんじゃないかと思うけど続けられるらしい。

どうせ話を聞いても意味が分からないから、家庭科の課題の続きをやることにした。

「梨桜ちゃんて器用だよね」

愁君が机に頼杖をつきながら針を動かしている私を見ていた。

「小学校と中学校の時に手芸クラブに入ってたの」

「へえ。こんなにデイベアを作ってどうするの?」

ボタンを目に見立てて縫いつけながら愁君を見た。

「この子達は愁君のおうちに行くんだよ」

キョトン、としている愁君も可愛い。

「え?...? どういう意味?」

「家庭科の課題テーマは“誰かの為”なの。この子達は涼先生にお

願いで小児科に置いてもらうの」

「そういう意味か…梨桜ちゃんが作ったテディベアなら、リビングに置いてあっても可愛いかもね」

王子様な笑みを浮かべながら愁君は言った。
やっぱり愁君の微笑みは癒されるね

「愁、ぬいぐるみなんてダニの巣だぞ」

愛想のかけらもない葵の一言に愁君はガツクリと頂垂れていた。

「おまえさあ…」

「部屋にぬいぐるみがあつたら邪魔だろ」

「愁君、気にしないで？葵って昔からこうだから」

葵は昔から現実的というか、夢が無いというか…確かにウチにはぬいぐるみの類は置かれていない。

「梨桜ちゃん、これ何？」

悠君が端切れ布を寄せ集めて作った小さなテディベアを手にとって眺めていた。

「端切れ布でパッチワークのテディベアを作ったの。携帯のストラップにしようかなと思ってたの」

「オレ、これ欲しい」

可愛い悠君とテディベアのストラップって意外に似合うかも

「いいよ、あげる。可愛がってあげてね」

早速携帯にストラップの熊をつけていた。実はうさぎのストラップも作っていて、それは麗香ちゃんが持っている。

「梨桜ちゃんの携帯ストラップって何？」

拓弥君に聞かれて携帯を見せた。

「誕生日の石だよ。ピンクサファイアのチャームがついてるの」

慧君が買ってくれた私の誕生日石がはめ込まれている可愛いストラップ。

葵は12月の誕生石のストラップを付けている。

「誕生日って、宮野と同じなんだよね」

拓弥君のしみじみとした言い方に笑ってしまった。

そりゃそうだよ、だって双子だもん

「当然だろ。おまえ、馬鹿か？」

「つくづく似てねエ双子だよな？まさかおまえもピンクサファイアのストラップとか言わねえよな？」

お前には似合わねエ！と拓弥君が言つと葵は片眉を上げて睨んでいた。

「拓弥君、葵とはお揃いじゃないよ」

葵と拓弥君が睨みあっていて寛貴と愁君は呆れた顔をして二人を見ていた。

本当に、いい加減にしてよね…

「二人とも喧嘩しないで…」

大人気ないよ！そう続けたかったけれど、車が急ブレーキをかけた音が響き渡り、息を止めてしまった。

耳をつんざくようにタイヤが悲鳴を上げている音。

その先を聞くのが怖くて両手で耳を塞いだ。

怖い

イヤだ！！

ぎゅっと目を閉じて耐えていると

「梨桜」

耳元で葵の声がした。

「やだ」

耳を塞いでいた手を掴むと、私の視線に合わせて屈みゆっくりと言った。

「怖くない。大丈夫だ」

葵に大丈夫と言われても頷けなかった。

イヤ、怖い。

…あの音はあの時を思い出してしまう。鉄の車体がひしゃげていく音とガラスが次々に割れる音…

「葵、…ふえっ」

あの時の恐怖が蘇ってきて涙が溢れた。

「泣いたら痛むだろ？」

だから泣くな、と言われても涙は止まらなくて胸は痛んだ。自分でもどうしたらいいのかが分からない。混乱して益々涙が出てくる。

「…ごめんなさい」

恐怖と、事故の後の悲しい出来事が一気に思い返されてしまう。口をついて出てしまった言葉に葵は私を抱き上げた。

「悪い、外す」

葵が皆に言っと、生徒会室の隣にある部屋に私を連れて行き後ろ手に扉を閉めた。

「約束したよな？」

私をソファに下ろし、自分も隣に座ると私の目を真っ直ぐに見ながら、少し怒ったように言う葵に頷いたけれど、納得はできなかった。

「オレの言うことが信じられないのか？『ごめんなさい』なんて二度と言っな。いいな？」

私の涙を自分の指で拭いながら厳しい声で言う葵に返事をせず俯いていると「梨桜」と呼ばれて頭を撫でられた。

「梨桜に謝られたらお袋は悲しむぞ？」

葵に手を伸ばすと、優しく抱きとめてくれた。

いつものようにぎゅっうってしてくれて、子供をあやすように背中を撫でてくれた。

ああ、まただ。

前に梨桜さんがチームハウスに居た時に窓ガラスが割れたことがあって、あの時もこんな風に取り乱して葵さんが宥めていた。

「…ごめんなさい」

梨桜さんが小さな声で呟くと、葵さんの目が悲しそうに伏せられた。何に対する謝罪なのか？オレには分からないけれど、梨桜さんは泣いていて葵さんは悲しそうに梨桜さんを見ていた。

いつも優しく笑っている梨桜さんの泣き顔を見るのは切ない。

「悪い、外す」

梨桜さんを抱き上げた葵さんはそう言うのと別室に入ってしまった。愁さんは扉が閉まるのを確認すると携帯で桜庭と連絡を取り始めた。

「梨桜ちゃんはどうしたんだよ」

大橋に聞かれて、話しているものかと考えて愁さんを見ると、藤島が梨桜さんがいる部屋の扉を見ながら言った。

「急ブレーキか？」

愁さんは携帯のフリップを閉じながら頷いていた。

「今は大分落ち着いて来たけど、ガラスの割れる音や急ブレーキの

音を聞くと事故の事を思い出すらしい」

「PTSD」

藤島が呟くと愁さんが頷いていた。

葵さんが事故を連想させてしまう事から遠ざけようと思っけても避けられない事もある。

今日みたいな出来事は梨桜さんにとって辛い記憶を呼び起こしてしまふ。

「梨桜さんが苦しんでいるのを見るのは切ないです」

梨桜さんにはいつも笑っていて欲しい。泣き顔は似合わない。

「コジ、ありがとな。でも、お前が気に病むことはないぞ」

声をかけられて振り向くと葵さんが立っていた。

「梨桜を連れて帰る。愁」

「桜庭を呼んだから、もうすぐ着く」

その言葉に頷いて、梨桜さんの荷物をまとめ始めた。

「梨桜さんは大丈夫ですか？」

「ああ、少し取り乱したただけだ」

あれが少し？オレにはそう見えなかった。

きつと葵さんはオレ達に心配をかけないようにそう言っているんだ

ろう、その証拠に葵さん本人が悲しそうな顔をしている。

「梨桜は、何がダメなんだ？」

藤島の言葉に葵さんが顔を上げた。

梨桜さんが紫苑の生徒で朱雀の倉庫に出入りするなら、知っておい
てもらった方がいいと思う。

葵さんもそう思ったのか藤島に向き合って話し出した。

「…急ブレーキの音やガラスが割れる音。事故を連想させるものは
苦手だな、車に乗っている時に事故現場にあつたら見せないで欲し
い」

「分かった」

藤島が頷くと、海棠は切なそうな顔で扉を見つめていた。

あいつ、まだ梨桜さんの事が好きなんだろうな…

葵さんがまた別室に入って行くと、愁さんが腕を組んでポツリと言
った。

「秋になると一年経つんだな…」

一年前、梨桜さんが事故に遭ったという連絡が入った時の葵さんは
見ているオレも辛くなった。

見かねた愁さんが葵さんに付き添って札幌に行ったけれど、睡眠も
食事も殆どとらなかつたらしい。

「梨桜ちゃん、またね」

隣の部屋から出てきた彼女に愁さんが声をかけると、泣きはらした目をしたまま笑っていた。

「うん、また明日ね」

葵さんに支えられながら生徒会室を出ていった。
やっぱり梨桜さんには笑顔が似合うと思う。

或る夏の日 (1) side:「ジ

「小嶋さん、愁さん、草むしり終わりました！」

「「」苦労さん。梨桜ちゃんが喜ぶぞ」

ヤンキーが草むしり

笑えるけど、マジな話。

梨桜さんが暇潰しで花壇を作ってから、オレ達は当番制で花壇の世話をしている。

“喜ぶ顔が見たいから” そんな理由で花壇は面積を広げつつある。

休日には梨桜さんも手入れをするんだけど、一緒に手伝いをする権利を手にする為に裏ではくじ引きの抽選会まで開かれているから凄くと思う。

今日の当番を引き当てたコイツは葵さんから梨桜さんが今日の花壇の手入れを休むことを言われて内心ガツカリしているんだろうな…
不憫だ

もちろん、梨桜さんはこの花壇にそんな裏事情がある事は知らない。

「よお、スコップなんか持って何してんだ？」

いつの間にか近くに来ていた大橋と海堂が笑いながら見ていた。藤島は笑ってはいなかったが今日の草むしりの当番を見ていた。

夏休みに入ってすぐに梨桜さんは検査の為に入院してしまい、昨日

やっと退院してきた。梨桜さんに付き添っていた葵さんが戻って来たのに合わせて、延期されていた定例会が今日ここで開かれることになった。

「青龍では家庭菜園でも作ってるのか？」

“まさかな” そんな笑いを向けられてムツとした。

「梨桜さんの花壇だよ」

家庭菜園ナメんなよ？

オレは、梨桜さんが自分達といつも一緒にいる事を強調した。

「この花壇は梨桜さんと一緒に作ったんだよ。だから皆で手入れしてんだ。ここで収穫した野菜で料理を作ってくれる約束だってしてるんだ」

そう言うつと海堂の顔がマジになった。

嘘じゃない。どうだ、羨ましいだろ！そう思っつて海堂を見ているとゾクリと悪寒が走つた。

悪寒が走つた方を見ると、煙草を銜えながら藤島がすげえ冷たい目でオレを見ていた。

率直に、怖え…あの視線は葵さん並みだ。

「家庭菜園で梨桜ちゃんの手料理ね…悠、どう思っつ？」

腕を組んで考え込んでいた大橋が問いかけると海堂がポツリと呟いた。

「オレ、梨桜ちゃんが作った肉じゃが食いたい」

「だよな、梨桜ちゃんの料理ってマジ旨いよな」

「お前らなあ、梨桜ちゃんは家政婦じゃないんだぞ」

愁さんが大橋を睨むと、奴は睨み返した。

「そんな事言ってお前はどなんだよ？」

愁さんはニヤリと笑って藤島達を見た。この笑いは完全に挑発して
るだろ…

腹黒王子は今日も健在だ。

「こんなところで暑くないのか？」

葵さんが煙草を吸いながらしゃべっているオレ達を見ていた。

隣には梨桜さんがいる。

つつーか葵さんが一番羨ましい。朝から晩まで梨桜さんが傍にいる。
もちろん、食事だって一緒だ。

「梨桜さん、お帰りなさい！」

オレが言つと、ニッコリと笑った。会うのは夏休み前の定例会以来
だ。

今日はパフスリーブのカットソーに肩ひもがりボンになっているワ
ンピースを合わせて着ている。可愛い…

「ただいま！皆と会うのは久しぶりだね」

お見舞いに行きたかったけれど愁さんからダメだと言われて会いに行けなかった。

肋骨を骨折した怪我也殆ど治ったって聞いて本当に良かったと思う。

「梨桜、親父と何時に待ち合わせしたんだ？」

葵さんが梨桜さんのリボンを結び直しながら聞いていた。こういうのを素でやれるのって凄いやな…

「お昼に待ち合わせしたの。葵は行かないの？」

「1週間いるんだから、今日行かなくてもいいだろ？ウチに帰ったら居るんだし」

親父さんと出かけるんだ…久しぶりに会えたのにつまんねえでも、外国にいる親父さんと久しぶりに会ったんだから、そっちを優先させなきゃダメだよな。

「送ってくる」

葵さんが愁さんに告げると梨桜さんがオレ達に向かって手を振った。

葵さんの腕に梨桜さんが手をかける。いつもの仕草。

可愛いよなあ…オレもいつか彼女が出来たらあんな風に自然に歩きたい。

或る夏の日 (2) side:「ジ

愁さんと藤島達は幹部室に入ってしまった、オレと海堂が残った。

「可愛いよな」

ボソリと呟いた海堂。オレもその意見に同感だ。

「あの二人が双子だって事忘れそうになる」

切なそうに二人が出て行った門扉の方を見ていた。おまえも辛いよな

「なあ、梨桜ちゃんておまえには甘いよな」

オレ？

突然話をフラれて、チームでの日常を思い出してみる。
優しくしてもらってるのは分かるけど甘いのか？

「甘いつつーか、優しいな。梨桜さんは皆に優しいぞ、おまえに葵
さんとの事を隠してることに對して申し訳ないって悩んでたしな」

あの時の梨桜さんは悲しそうだったな。

「…んだよそれ」

一瞬、顔を歪めた海堂は何かを堪えているように見えた。

「だから、優しいんだよ。梨桜さんは」

「小嶋、おまえは梨桜ちゃんと一緒にいて何とも思わないのか」

梨桜さんは大好きだ。

でもお前の聞きたいのは、恋愛感情が起こらないのだったことか？

だとしたら、答えは「ノー」だ。

憧れているし大好きだけど、オレが手に負えるような人じゃない。

葵さんと同等、もしくはそれ以上の男にならないと梨桜さんには釣り合わないと思ってる。

「おまえ、なんつー顔してんだよ。梨桜さんのことは大好きだ。きつとチームの皆も同じ気持ちだと思う。でも、恋愛がどうこうっていう感情はねえな。大体、そんな感情を持ったらこのチームではやっていけねえよ」

梨桜さんはオレ達が尊敬する総長が大切にしている人。

それに、そんな感情を持ったら命がいくつあっても足りない。

そう言えば、コイツに言いたいことがあったんだ。

「オレ、これだけは言っておきたいんだけど」

「なんだよ」

少しだけ海堂が構えた。

いいか？良く聞けよ！

「梨桜さんが朱雀に出入りするのには不本意だ」

片眉が上がって不機嫌そうにオレを見た。お前の事だから「梨桜ち

「やんは青龍の姫だけじゃねえぞ」そんな事を言いたいんだろ

「…んだよ」

ムカついている目をオレに向けるけれど、それに怯むつもりはない。初代が決めた事だから仕方がないけど、梨桜さんはオレ達だけの姫でいて欲しいんだ。

「出入りする以上、前のような事があつたら許さない」

「あ？」

“前のような事”その言葉に怪訝な顔をしている。

「ふざけんなよ？ “覚えてねえ” とかは言わせねえぞ！」

「手紙が入っていて怪我をした事があつただろ。あんなことがあつたら許さないからな」

視線を彷徨わせていたけれど、思い出したのかオレに視線を向けた。

「当たり前だろ、あんなのは二度とねえよ。ふざけたマネをする奴は潰す」

「その言葉、忘れんなよ」

念を押すと、目を伏せて呟いた。

「…寛貴さんがそんな事させねえよ」

海堂にとってあの総長は憧れであつて、越えられない壁。それは分

かるけど、そんなに切ない顔すんなよ…

生徒会のツトメ (1)

「暑い！」

うちわでパタパタと仰ぎながら廊下を歩いていると悠君が天井を仰ぎながら言った。

確かに、暑い。

東京の夏はどうしてこんなに暑いのか？学校に來ただけでバテてしまいそう…

「おまえは毎日学校に來てんだから変わんねーだろーが」

文句を言う悠君を拓弥君がからかった。

期末試験で赤点をとってしまった悠君は追試対策の勉強を頑張ったけれど、基準点に満たない教科があった為に夏休みも補習に來ている。

「うるせーな！」

暑いんだから言い争わないで欲しい。余計に暑くなる！！

私達はオープンキャンパスに参加している中学生に学校の紹介をする為に講堂に向かっていた。

「うわ…」

講堂の扉を開いて中を覗くと、ズラリと並べられた椅子に座っている生徒達。

さまざまな制服を着た男子生徒が前を向いて座っていた。

「これ、全員が受験希望なのか？」

私の横で一緒に覗いている悠君が呟いた。

集まっている人数は1学年の生徒よりもはるかに多い人数のような気がする。

「女子生徒は？」

私の後ろから覗いている拓弥君を振り返ってみると真剣な顔をして女子生徒を探していた。

私も見回して女子生徒を探してみたら…

「拓弥君、いたよ。ほら、前の方に固まってる」

女子生徒はステージから2列目までに集まって座っていて、私が言うとうと拓弥君が「おお〜」と感動していた。

拓弥君とは違う動機で女子生徒が増えて欲しいな。

「ひびく…」

後ろから聞こえた本気で嫌そうなのその声に笑ってしまった。

生徒会役員は何故かステージ上に用意された椅子に座らされて、嫌でも中学生達の注目を浴びてしまった。

校長先生や学年主任達の退屈な話を聞き流しながら、中学生達の観察をしていると、女の子のほとんどは寛貴達を見て目をキラキラさせていて、男の子達は憧れの眼差しを向ける子、真剣に話を聞いている子反応は様々だった。

私が高校受験をするときはこんなに真剣に考えなかったな…将来の事を真剣に考えている彼等は凄いな。

生徒会長の挨拶。

不機嫌そうな顔のまま壇上で挨拶をしている寛貴を見ながら、スポットライトで照らされているこのステージの異様な暑さに参っていた。

あとどれ位ここに座っていなければいけないんだろう？

ハンカチで滲んでくる汗を拭きとりながら必死に暑さに耐えた。

「梨桜、大丈夫か？」

挨拶を終えて席に戻る寛貴に聞かれて、大丈夫。と頷いたけれど、もうすぐ限界が来そうな気がする。

ステージの袖にいる安達先生に「早く終わらせて」と視線を送ると、先生は手を振ってニコニコ笑いながら口パクで「頑張れ！」と言っていた。

そうじゃない！暑くてもうダメ！！耐えられないっ！！

キッと先生を睨むと、やっと私の言いたいことが伝わったのか顔を引き攣らせて頷いていた。

「生徒会役員退場」

待ちわびたアナウンスが流れて立ち上がるとライトの眩しさに目が眩みそうになった。

この後に校舎を案内してクラブ活動を案内する担当に引き継いだら今日の役割は終わり！

「余所見すると危ないよ」

拓弥君に声をかけられて前を見ようとしたら、脇から腕が伸びてきて体が真横に引き寄せられた。

「バカ：中学生の前で恥をかきたいのか？」

頭の上から焦った声が聞こえてきた。

「え？」

私を自分に引き寄せている寛貴の顔を見ると、顎で“自分の前を見る”と示されて、改めて自分の前を見ると目の前に黒い壁があった。

壁！？違う、暗幕だ…。

考え事をしながら歩いていたら、暗幕に向かって歩いてみたみたい…。このまま突き進んでいたら躓いて転んでいたかも。

それって、かなり恥ずかしい。

両手で頬を覆って恥ずかしさに耐えていると、ククツと笑う声が聞

こえた。

「手遅れかも。中学生達からは梨桜ちゃんが暗幕に向かって突き進もうとしていたところは見られてるよ」

悠君が苦笑いを浮かべながら私を見て、親指でステージの下を指していた。

「ついでに言うと、朱雀総長との絡みもバツチリ見られてるよ」

拓弥君が私に向かって指をピタリと当ててニヤリと笑い、自分の置かれている状況を見返してその場にしゃがみ込みそうになった。

「もうダメ」

恥ずかしすぎる!!

穴があつたら入りたい!

「行くぞ」

ウエストに回されていた腕に力が入れられ、引きずられるようにその場を後にした。

「え？寛貴、ちょっと待って」

「オレには中学生の前でその行動をとるお前の方が恥ずかしいぞ」

そう思ってるなら止めてくれればいいのに!

私は講堂を出るまで中学生の注目を浴びたままだった。

.

生徒会のツトメ (2)

「紫苑学院高等部 1年2組の東堂梨桜です」

教室での挨拶：女子中学生にすつごく見られていて恥ずかしい。

「私は4月に札幌から転校してこの学校に来ました。女子生徒が少なくて驚きましたが、授業内容も充実していて」

安達先生が作った原稿をそのまま述べてみる。

女子生徒の前でどんな話をするんだ？と聞かれて率直に語ろうとしたら『ダメだ、それだけはやめてくれ！』と泣きつかれた。

「来年は、女子生徒が多く入学して来てくれることを希望しています」

ニツコリ笑って締めくくった。

教室の後ろで腕を組んだままこちらを見ている安達先生は頷いていた。

良くできた。っていう事だろうか

「質問していいですか？」

一人の女子生徒が手を上げたので、先生をチラリと見ると頷いたので「どうぞ」と言つと目をキラキラさせながら話し始めた。

「あの、東青学院の生徒会と定期的な交流会があるって聞いたんですけど本当ですか？」

私が出席することに意味があるのか無いのか良くわからないあの“定例会”。

「本当です」

「藤島会長はもちろんですけど、宮野さんとか三浦さんも出席するんですよね？生徒会役員だと会う機会も多いですか？」

ああ、もしかして青龍と朱雀の幹部がお目当て？

「生徒会に入っていると会う機会はあると思いますよ」

そう言うと、キヤー！と小さな歓喜の聲が挙がっていた。

『そんなに期待する程いいものじゃないんだよ』そう言っても伝わらないだろうけど、彼等と会う機会が多いっていうのも大変なんだよ！…！

「普段の宮野さんと藤島会長ってどんな感じなんですか？」

心の中で拳を握りしめて力説していると突然聞かれた質問に、思わず素で答えそうになった。

普段の葵と寛貴？そんなの答えは『オレ様で横暴だよ』に決まっているじゃない。

「え？葵も寛貴も才…」東堂さん

安達先生が笑顔を浮かべながら私を呼んだ。

目が笑っていないくて“奴等の印象が悪くなるようなことは言っつな”と訴えているように見えた。

先生は女子生徒が増えて欲しいんだもんね。女子が増える事には私

も賛成だから今回は黙っていてあげよう。

「二人とも優しいですよ」

オレ様だけど優しいのは本当だから、この答えでいいよね。

「女子生徒が少なく困ったことはありませんか？」

「：特に困ったことは無いですけど、華やかさに欠けるといっつか、淋しいと思います」

私の意見とは違う事を話していることに、少しだけ良心が痛むけれど、女子生徒が多く受験してくれるなら良しとしよう。

「終わったあ！」

「明日も宜しく頼むぞ」

中学生を見送って、生徒会室で先生に買ってもらったアイスに嚙り付いていると先生がプリントを差し出した。それには明日のスケジュールが書いてある。

「生徒会が顔を出してくれたおかげで好評だったぞ」

「女子生徒は朱雀の幹部目当てだろ」

悠君が言い2つ目のアイスに手を伸ばした。冷たいのばかり食べてたらお腹壊しちゃっよう？

「東堂も目立ってたな！」

先生の言葉にステージでの事を思い出して顔が熱くなった。恥ずかしいから思い出させないで！！

「野郎達が釘付けになってたな！」

明日はあんなことにならないように気を付けよう！明日への決意をして食べ終えたアイスを片付けていると廊下から人の話し声が聞こえてきた。

「思ったより綺麗だね」

「有得ないだろ、元男子校だぞ」

暑いから、と開け放たれた扉のせいで廊下で話している声が良く聞こえる。

男の人と女の人の声？

「まあね〜よりによってあの子がねえ…パパさんも思い切った事するよね。親子揃って無頓着？」

ん？

「少し考えれば、どんな騒動になるか分かりそうなんだけどな」

「無頓着だから可愛いんだけどさ、もう少し自覚してくれると周りも楽なんだけどね〜」

あれ…？これって、もしかして？
椅子から立ち上がり扉の方に歩いて行くと、さらに会話は続けられた。

「でも、仕方ないか。あの親子だし」「」

なんか、眨されてるっていうか、呆れられてる？

この声は間違いなくあの二人。

だけど、今日来るなんて聞いてないよ？

扉の前で待ち伏せをすることにして、後ろを振り返って唇に指を当てて、静かにしてね、とお願いした。

「ねえ、ここじゃない？」

「ああ」

生徒会室の前に着いたところで、腕を組んでお出迎え。

「」「うわっ！」「」

うわ、じゃないから。

「ここは何してるのかな？敬彦君と円香さん？」

目を真ん丸にして驚いていた円香ちゃんは、私をぎゅっつと抱き締めた。

「梨桜く会いたかった！！」

「苦し…ちょっと待って円香ちゃん」

会えて嬉しいけど、これはキツイ…苦しい…!

「離れる」

頭の上で凄みを持った声が響いて、円香ちゃんから引き剥がされた。助かった…

「梨桜、胸は痛まないか」

呼吸を整えていると、寛貴が私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫みたい」

円香ちゃんは女の子だから大丈夫だよ。でも、苦しかったあ…
寛貴が私を椅子に座らせていると、怖い顔をした円香ちゃんが寛貴を睨んでいた。

「邪魔しないでくれる？」

「加減しろよ」

寛貴も円香ちゃんを見返している。

円香ちゃんてば、怖いもの知らずなんだから…

睨みあっているこの二人…円香ちゃんは寛貴に会わせろって言うだけ、会う早々これじゃどうしたらいいの？

.

ライブル (1) side: 円香

梨桜の隣に座り、私目の前にいる整った顔をした男。

親友との再会に水を差してくれたオレ様な奴は写メで見るとよりもずつとイイ男だった。

私達は学校からファミレスへと場所を移してこの男の観察をさせてもらうことにした。

「聞いていた予定と全然違うんだもん、吃驚したよ」

誰がなんと言っても梨桜は可愛い。今も敬彦を相手になっこりと笑っている。

「円香と相談して驚かせようと思ったんだよ」

本人は無頓着だけどいつも男の熱い視線を浴びていて、誰にでも優しく接するけど、実は人見知りなところもあって梨桜の“特別”になるのは難しい。

「相変わらずだね」

ニコニコと笑いながら、隣の彼に話しかけている梨桜を見て意外だった。

敬彦が気付いた梨桜にとっての50センチの壁。正確に測ったわけじゃないけど、多分その位。

アイツが50センチ以内の至近距離に近寄ると、一瞬困った顔をして笑っていた。
最初は男が嫌いなのかと思ったけれど、梨桜を見ていて分かったことがある。

自分に対して、ストレートに好意を伝えようとする人に対して引いてしまっている。きっと梨桜本人は距離を取っている事も、困った顔をする事にも気づいていないと思う。
でも、私と敬彦は梨桜から戸惑いと僅かな拒絶を感じていた。

「あ、慧君から電話だ。ごめんね」

席を立った梨桜に手を振って見送った。

さつきから見ていると、梨桜が車を降り降りする時、椅子に座る時、立ち上がる時に手を差し伸べて支えていて、梨桜も躊躇う事なく彼の手を取っている。

「なんだよ」

二人のやり取りを見ていたら藤島君に聞かれた。

彼は梨桜の事が好きなのよね？敬彦にあの写メを送りつけてきた理由を考えたら聞かなくても分かる。

いつものあの子なら気付いていないだろうけど、梨桜は彼の気持ちを知っている。

それなのに…

「…梨桜が引かないなんて信じられない」

こんなのって有得ないでしょ。今までの梨桜なら、速攻で安全な距

離に逃げていた。

「どつという意味だ？」

「梨桜の…いい、悔しいから教えない」

50センチの距離に堂々と入り込んで梨桜に躊躇させないこの男…
梨桜が取られたようで面白くない。

「訳分かんねえ」

梨桜は前に電話で“良く分からないけど嫌じゃない”って言うていた。

本当にあの子は…もう少し考えなさい、気付きなさいよ！

ああ…何だかイライラしてきた。

「そういえば、東堂宛ての手紙ってどうなったんだよ」

敬彦がイラつき始めた私を見て会話を变えてくれた。彼のこういうところには感謝してる。

敬彦に渡せば、梨桜の手元に渡るんじゃないか？そんな期待を持って梨桜宛てのラブレターが彼の所に集まってくる。

この前も溜りに溜まった手紙を梨桜の所に送ったと言っていた。

「捨てた」

「は？」

持っていたフォークを落としそうになった。
今、何て言った？

「オレが捨てろって言って宮野が捨てた」

「捨てたって梨桜はなんて言ったの？」

あの子が『捨ていい』なんて言う筈が無い。

「何も。まだ見ていないうちに捨てた」

その言葉に敬彦が驚いていた。

私だって吃驚だよ！

「そんな事をして、いいと思ってるの!？」

「梨桜が対応に困るモノを先に処理しただけだろ」

対応に困るって、そりゃそうだけど、それってかなり横暴じゃない
!？

「呆れた…」

彼を見ると平然として私達を見ていた。この男、オレ様過ぎる。総
長ってこんなモノなの？

「何の話？」

梨桜が戻ってきて、ふわりと笑っていた。

私も敬彦もこの笑顔が好きなのよね、可愛い

「ああ…梨桜は危なっかしいから、ちゃんと見ていてっってお願いたいの」

はぐらかして答えると、梨桜は頬を膨らませて抗議をしてきた。

「円香ちゃん！」

藤島君は今も椅子に座ろうとしている梨桜の肘を支えていて、梨桜は「ありがとう」と笑顔を向けていた。

「」「」「」

気付かないあたり、ホントに梨桜だわ……どうしてこの子はこんなにニブイの？

ライバル (2) side・円香

梨桜の“特別”の中で別格な男。彼には50センチの壁なんて最初から関係ない。何故って、生まれる前から一緒にいたから。

「行くぞ」

そう言うと梨桜は彼の腕に自分の手をかけて歩きだした。

隣を歩くこの男には素をさらけ出している。当然といえば仕方ないけど、少しだけ悔しい。

「似たようなの持つてるだろ？」

綺麗にディスプレイされていた雑貨屋の前で立ち止まりかけた梨桜に声をかけていた。

特に口にしなくても梨桜が何に惹かれて立ち止まったかが分かるこの男は凄く綺麗な顔をしている。

「でも、これもいいと思わない？」

「今日は時間がないからまたな」

諭すように言われて梨桜は前を向いて歩きだした。

『大学の下見が終わったら一緒にご飯食べない？』と誘われて敬彦と私、梨桜と葵君で待ち合わせをした。

待ち合わせ場所に歩いてくるこの双子は物凄く目立っていた。

「ねえ、端から見るとカップルみたい」

「いつもこうなのか？」

私の隣で敬彦も聞いていた。

去年、初めて彼と会った時に梨桜は意識が無い状態だったから双子の絡みを見るのは初めてで吃驚している。

「うん」

運ばれてきた紅茶を受け取ると梨桜の前に置いてカップに注いでいる。

さっきから見ていて思うのは『過保護』梨桜は一人で出来る子なんですけど…

「甘やかしすぎじゃない？」

こんなに甘くて不良チームのトップが務まるんだろうかと疑問を感じてしまう。昨日の藤島君も梨桜に甘いと思ったけれど、これはこれで甘い。

「円香ちゃんもそう思うでしょ？」

「うん、過保護」

私が頷くと梨桜が葵君を見て頬を膨らませた。自分が過保護にされている自覚があることに少しだけ安心した。

「ほら！やっぱり葵は過保護なんだよ」

葵君はスプーンにプリンを掬い梨桜の口の前に差し出すと、梨桜はパクリと食べた。

「…」

敬彦が固まっている。

そりゃそうだ、こんな梨桜は見たことが無い。

もう一口差し出されて素直に食べている梨桜。

流石！と言うべきなんだろうが、扱い方を心得ている。私でもこんなに上手く梨桜を黙らせることは出来ないと思う。

「美味しい！」

もう、忘れてる…単純なんだから

「良かったな」

葵君は梨桜にスプーンを持たせると平然とコーヒーを飲んでいる。梨桜はといえば、綺麗に盛り付けられた苺をフォークに刺すと葵君に向けた。

「ハイ」

葵君が差し出された苺を食べた。

「どうしたの？二人とも」

敬彦と二人で目の前にいる双子を凝視していたら梨桜が不思議そうな顔で聞いて来た。

どうしたも何も…あんだ達、本当に血の繋がった双子？実は…親が再婚した連れ子同士です。なんていうオチがあるんじゃないでしょうね!?

「なんでもない」

なんかこの双子って、見ていて恥ずかしいんですけど…

私達は付き合って3年目になるけど、こんなことしたことない。思わず自分達に置き換えて想像してしまい物凄く恥ずかしくなった。敬彦も顔を赤くしている。

「…元気そうで安心したわ」

気を取り直して言うと梨桜は笑った。この笑顔が変わってなくて良かった。

「女子校から元男子校に転校するなんてすげえよな」

敬彦が言うと梨桜は苦笑いを浮かべ、葵君はコーヒーを飲んだ。

「受け入れてくれるところが紫苑だけだったの。男の子が多過ぎて女子校が懐かしくなるよ」

元男子校に梨桜みたいな子が来たら大騒ぎなんだろうな…

「女子校に転校してもいいぞ」

葵君が言うと梨桜は「また転校するのは面倒だよ」と笑っていた。梨桜、彼が言っているのはそういう事じゃないと思うよ？

相変わらずな梨桜を眺めていると葵君の携帯が鳴った。

「愁君？」

「ああ、メール…ちょっと外す。終わったら迎えに来るから」

葵君が席を立ってしまい、梨桜は「じゃあね」と手を振っていた。

「東堂の弟ってスゲエな」

敬彦が感心しているけど、あなたは何に感心しているの？

梨桜はしきりに感心している敬彦を見て可笑しそうに笑っていた。

「梨桜、元気そうで安心したよ」

私が言うと、ふわふわと笑っている。その笑顔には無理をしているところは無くて安心した。

「あ、オレちよつと買い物」

敬彦が席を立ってしまい、梨桜と二人で残された。

「タカちゃんに気を使わせちゃったね、後で御礼言っておいてね」

「うん」

梨桜は紅茶を口に運んで笑っていた。

「ねえ梨桜。やっと二人になれたね」

少し意味深に言い梨桜に微笑みかけると、露骨にビク！と肩を震わせた。

「円香ちゃん？」

おずおずと、上目遣いに私を見上げる梨桜を見ていてちよつと意地悪な気持ちが湧きあがってきた。

「いろいろ聞かせてもらいたいことがあるのよね」

さあ、覚悟してもらいましょうか？

夏空 (1)

一日おきに朱雀と青龍に行くという決まりは夏休みも有効らしく、せつかくの休みなのに学校で見かけるのと殆ど変わらない顔をあちこちで見かける。

ただ違うのは、注目されているのがいつもの1年生ではなく上級生だという事。

寛貴と拓弥君と一緒に倉庫の1階にある大きなソファに座っていると2年生と思われる生徒がチラチラと私を見ていた。

「センパイ、見られるよりも直接言われた方が良いんですけど?」

同じ年の上級生に向かってニッコリ笑うと目の前にいるグループは私を見て固まっていた。

私、怖くないよ?大丈夫。私と話をしただけじゃ寛貴も葵も怒らな
いから

「...あのさ、あのメガネってわざと?」

私の隣で偉そうに寛いでいる男を指した

「葵と寛貴達に言われてたから」

彼等は私が指す方を見たけれど、寛貴と拓弥君に見返されてすぐに視線を私に戻した。

「い、今の顔が素顔だよな?」

変な質問に笑ってしまった。

「これが素顔、ですよ？」

何にもいじつてないよ、ほぼスツピンです。

頬をさすりながら言うと、別な人が私を見ながら口を開いた。

「5代目の彼女ってマジ？」

「オレは宮野の彼女って聞いた」

「初代の彼女だろ？あんたが北陵に拉致られて初代が駆けつけたって…」

次々と飛び交う諸説に驚いた。

凄い！どうやってたら違う情報ばかりが飛び交うんだろう？

「あのね、慧君は私と葵の叔父さん。涼先生は私の主治医」

「叔父さん!？」

その答えに驚いている。そんなに驚くことだろうか？

その驚きっぷりに笑ってしまいそうになった。

「マジ!？」

目が真ん丸になっていて面白い。

「うん。葵と慧君って似てるでしょ？私も少しだけ慧君に似てると

思っけど」

私の顔を見ている彼等がおかしくて笑っていると、一人が納得したようにうんうん、と頷いていた。

「だから青龍の姫だったんだ」

その“姫”っていうの止めようよ。あんまり好きじゃない。

「私は姫なんかじゃないよ」

「あー、オレやっとな納得した。なんで転校してきた東堂さんが青龍の姫なのか分からなかった」

「オレも納得。両方の姫っつーことだ」

「いや、あのね…姫じゃないって言うてるでしょ？」

私の言葉なんか耳に入らないようで彼等だけで納得している。

「ねえ、聞いている？」

「望もつが望むまいが姫決定。スゲーな、前代未聞だぜ？」

だから、違っつて言うてるのに、私の話は聞いてくれない。これ以上説明しても無駄だと思い、お茶を淹れるために立ち上がった。

「どこに行く？」

「お茶淹れてくる」

今まで傍観していた寛貴に言うと、二年生はおもむろに立ち上がって寛貴を見た。

「寛貴さんはコーヒーですか？」

「ああ」

「姫は？」

だから、姫じゃないって言ってるのに…

「…自分でやるから」

「姫は座っていて下さい」

「自分のお茶くらい自分で淹れます。それから、今度姫って呼んだらここには来ないから」

寛貴に向けて言うと、クツと笑いながら周囲を見た。

「おまえ達、分かったか？」

「…」

無言で頷く彼等を見ている寛貴。拓弥君は楽しそうに笑っていた。分かってるなら最初から言っておいてくれればいいのに

簡易型のキッチン、前にも思ったけれど汚くはないけど雑然としている。

男の子だけだところなっちゃうのかな…

ここに来て特にもやることもなくて暇だから整理をすることにした。

「戻ってこないと思ったたら…何をしてるんだ？」

「整理整頓」

ごそごそと片付けていると頭の上で声が出た。

振り返って答えると寛貴は壁に背を預けて私を見下ろしていた。

「ねえ、私の事を姫って呼んだらホントにここに来ないからね」

「女はお姫様扱いされたら嬉しいんじゃないのか？」

偶に愁君や桜庭さんが冗談で私の事を“姫”って呼ぶけれど、不特定多数に呼ばれても嬉しいとは思わない。それに私は姫なんていうガラじゃないよ。

「さあ、どうだろう？できた、終わり！寛貴はコーヒーだったよね、今淹れるね」

私はカフェオレにしようかな。

コーヒーマーカーもあつたけれど、抽出する時にコーヒード豆が膨らむ様子を見るのが好きだからペーパードリップにした。

「いい香りだね」

少しずつ、少しずつ…お湯を回し入れているとふわりと腕が回された。

心臓がドキつとなり、顔が熱くなったけれど気付かれないように前を向いたままお湯を入れた

「危ないよ、火傷しちゃう」

そう言つて誤魔化そうとしたけれど、火傷しそうなのは私の背中…寛貴の胸が当たつていてそこだけが異様に熱い。

「ここに来ないなんて、許さないからな」

耳元で囁かれて、私の手からポットを取り上げた。触れるところ総てが熱くてのぼせてしまいそう…

「梨桜？」

もう一度耳元で囁かれてビクツと肩が震えてしまった。

「へえ、耳が弱いんだ？」

そう言うなり、私の耳をカプリと噛んだ
カクンと膝から力が抜けてしまい、床に座り込みそうになると回されて腕を支えられた。

「寛貴!」

寛貴は片手で私を支えたままコーヒーをドリップしていて、キッと睨むと余裕の笑みを浮かべて私を見ていた。

「ねえ」

いつもこうなる。

ムツとしたまま見れば笑いながら見下ろされている私。

「なんだ？」

この前、円香ちゃんが私に言った言葉『どうして嫌じゃないか。梨桜がその理由に気付いたら一番最初に教えてね』

「この格好ってなんだか悔しい」

「腰抜かした奴が言うな」

「立てるもん!」

そう言うと、私を支えていた手を離してコーヒーカップを棚から取り出した。急に支えがなくなった私はバランスを崩してしまい、慌てて壁とシンクに手をつけて身体を支えた。

「バカだな…何を飲むんだ？」

く、悔しい!!

「…カフェオレ」

答えると見下ろしたままフツと笑われた。

「砂糖は？」

「いらない」

なんで寛貴ばかり余裕なのよ、ホントに納得がいかない！
円香ちゃん、訂正するね。“嫌じゃない”から“悔しくて、腹立たしい”に変更。

夏空 (2)

「あつちいゝ!!」

幹部室でカフェオレを飲んでいると補習帰りの悠君が部屋に入るなりソファに座った。

「自業自得だな」

拓弥君に言われて、むうっとふくれる彼は相変わらず可愛い。

「腹減った…」

「お昼ご飯食べてないの?」

私が聞くと、可愛い顔でじっとみつめられた。これは…作って、という顔だよな?

「簡単なので良ければ何か作ろうか?」

そう言うと目をキラキラさせながら頷いていた。やっぱり可愛い!今日は手の込んだモノは作れないけれど、そんな顔をされると頑張りがたくなっちゃうよ。

悠君に「簡単なのだよ?」と念を押して、倉庫の向かいにあるコンビニ行き買い物をした。

「東堂さんて料理が上手いんだろ？」

一人で平気って言ったのに、心配性な寛貴に護衛をつけられてしまった。今回の護衛は飛澤君。ハンカチの彼女に憧れていた彼だ。

「そんなことないよ、普通だよ」

飛澤君は“ハンカチの彼女”に対する幻想が壊れたショックから立ち直ったのか最近はずっと普通に話しかけてくる事が多くなった。

「悠さんが言ってた」

素麺と味がついている焼肉用のお肉と…サラダ。素麺にサラダと焼いたお肉を乗せるだけ。

本当に簡単な料理でごめんね、ミニキッチンに調理道具を揃えられたらもう少し手の込んだ料理を作るからね？

「焼肉と素麺？」

飛澤君が袋に入れられた食材を見て不思議そうに首を捻っている。

「男の子は素麺だけだと足りないでしょ？」

コンビニを出ると視線を感じた。駐車場に集まっている女の子達がこちらを見ながら何か話をしていた。

「東堂さん、行くぞ」

飛澤君に言われて信号待ちをしていると女の子達はまたこちらを見ている。

「あの女の子達は？」

「…あれは朱雀の追っかけ。朱雀のメンバーと話すチャンスを狙ってんの」

「凄いな。」

前に麗香ちゃんに朱雀の幹部がどれだけ凄いか。力説されたの思い出した。

学校にいると女子生徒が少なすぎてつい、忘れちゃうんだよね。

「週末の夜になると凄え集まってくる。って言ってもあいつらの目当ては幹部だけだな。…寛貴さんが一人で外に出るなっていう理由は彼女達でもあるからな」

「うん」

寛貴と葵から耳にタコができるんじゃないかっていう位に言われている言葉『一人で出歩くな』いつもは大袈裟だと思っけどこっやって、あからさまに敵意を向けられると納得できるかも。

「ねえ！」

急に声をかけられ、腕を掴まれた。

「なに？」

驚いて振り返ると、濃い化粧をした女の子がいて、気の強そうな子が私の腕を掴んでいた。

隣にいる飛澤君は彼女達の出方を見ているのか、何も言わずに成り

行きを見ていた。

「あんたが生徒会の女？」

『おまえなんか嫌いだ』ハッキリと分かるような睨み方に気分を害したけれど、それを表に出さないように気を付けて言葉を返した。

「そうだけど…何か用事？」

そう言うと、ますます眉を吊り上げて私を睨んでくる。

「いい気になるなよ！」

「幹部に取り入ってんじゃねーよ！」

「朱雀のトップがあんたなんか相手にするわけないっ」

女の子は集団になると強気になるという事を久しぶりに思い出した。彼女達は私に対する不満を次から次へと並べ立てた。

私の意思でここに居る訳じゃない。

彼女達を見返すと、「東堂？」と少し焦ったような飛澤君の声が聞こえた。

ハラハラしながら私を見ている彼に“ここで喧嘩なんかしないよ”と安心してもらうために笑みを向けたけれど、信用されていないのか、手にしていた携帯と私を交互に見ていた。

「聞いてんの？」

「あんた、目障りなんだよ」

彼女達に視線を戻すと、眉を吊り上げたまま凄まれた。

般若みたいで葵と寛貴に凄まれるよりちよつとだけ怖いかも。

「言いたいことはそれだけ?...なるべく考慮します」

二人に言つて目立たないようにしてもらおう。そう決めて歩き出そうとしたら、肩をドン!と押された。

「「生意気なんだよ!」」

「ふざけんな!!」

数人に突き飛ばされた私はお尻について転んでしまった。

「いつ...」

背中に走つた激痛に声も出せなくて、呼吸もできなかった。

「東堂!」

痛い、痛い!

油断した...

「...っ!」

頭の上で女の子が「ごちゃごちゃ」と言っているけれど、飛澤君の「寛貴さん、東堂が...」

寛貴という単語だけがハッキリと聞こえて、手を伸ばして飛澤君が持ってくれていた袋に手をかけた。

「呼ばないで...」

“騒ぎが大きくなるから、呼ばないで”
呼吸が苦しくて全部を言う事ができなくて、またアスファルトの地
面に蹲ってしまった。

夏空 (3)

熱い。

太陽の熱を吸収したアスファルトに肌を焼かれてしまいそう…

やっと痛みが治まり、地面に触れているところが熱いと感じるまで
余裕ができて大きく息をつき顔を上げると、数人が道路を横切って
走ってくるのが見えた。

「てめえら、何をした!？」

悠君の怒声が響いた。

やっぱり大事になっちゃった。だから呼ばないでって言ったのに…

「梨桜」

地面に膝をついて座り込んでいる私の目線に合わせて寛貴が聞いた。

「大丈夫」

「それはオレが決める」

出た、オレ様…

「久しぶりだったから油断しただけだよ。もう治まったから大丈夫」
地面に手をついて身体を支えて立ち上がるうとすると体が持ち上げ
られた。

「え？うわっ…ちょっと、下ろして！」

寛貴に子供のように抱き上げられている格好が恥ずかしくて自由になっっている両手で寛貴の肩を揺さぶった。

「歩けるから下ろして！」

「横抱きにしたら痛めている背中に負担がかかる。大人しくしてろ」

だからってこの態勢はやだっ！恥ずかしい！！

寛貴の腕の中でジタバタと暴れているとギロリと睨まれた。

「うるせえ、これ以上イラつかせんな」

凄く低い声で言われてピタリと動きを止めた。

…怖い

「寛貴さん！」

悠君の呼びかけに寛貴は「連れて来い」そう言って私を抱えたまま歩き出してしまった。

寛貴、怒ってる？凄く怒ってる？

「寛貴？」

「なんだ」

いつもよりも数段低い声で返事が返ってくる寛貴は前だけを向いていて私の方を向いてはくれなかった。

「あの女の子達をどうするの?」

「…倉庫に連れて行く」

「なんで?」

「自分達のやった事に対して落とし前をつけさせる」

それって、寛貴が言っていると洒落にならないんじゃない?

この世界の落とし前ってどんなことをするの?

「女の子だよ?」

「…」

答えない寛貴が怖い。

今までは不機嫌でも何か言葉を返してくれていたのにこの沈黙が怖いよ!

「ねえ、寛貴ってば!」

呼んでも返事をしてくれないから、寛貴の頬に手をかけて私の方を向かせると不機嫌そうなまま私を見た。

「…なんだ」

「女の子なんだよ」

「だったら何だ?朱雀の倉庫に入りたかったんだろ、願いが叶って

本望じゃねえか」

そういう問題じゃない！次元が違う！！

また、前を向いてしまい倉庫の中に入ると奥の部屋へと進んでしまった。

「だから、女の子なんだから」

「手を出したらどうなるか、流してあるにもかかわらずオレのモノに手を出したんだ。男だろうが女だろうが関係無い」

本気で怒っている寛貴に口答えできなかった。

怖かったけど…私の事でこんなに怒っている寛貴を見て少しだけ、嬉しい。なんて思った私はきつと不謹慎なんだと思う。

ドアを足で蹴り開けて幹部室の中に入ると、ソファの上に私を下ろした。

「…血が出てる」

「え、どこ？」

自分の身体を見回すと右の掌を擦りむいていて少しだけ血が出ている。

「大したことないよ。消毒しておけば大丈夫」

「そこだけじゃない」

どこ？ともう一度体を見回していると、寛貴に二の腕を掴まれて、

捻るように腕を反転させられてやっと見つけることが出来た。

「ああ…擦りむいちゃったね」

自分では見にくい肘を擦りむいていて、寛貴の言つとおり血が出
ていた。

背中が痛くて、肘と手のひらに痛みは感じていなかったから、言わ
れてから『ああ、そういうえばズキズキするかも』と思う位の擦り傷。
キャビネットから救急箱を取り出して掌の傷を消毒してくれた。

「痛いかな？」

「ううん、痛くないよ。…あのね、いつ、痛い！痛い！！沁みるっ」
肘の手当てを始めた途端、傷口に消毒液が沁みだした。
もう少し優しくしてくれてもいいでしょ！？

「逃げるな」

腕を引いて逃げようとする、逆に強く引かれて容赦なく薬を塗ら
れた。
痛いっ！…！

絆創膏を貼ってもらい、手当てが終わると寛貴は冷蔵庫から水とり
ンゴジューズを取り出して私の隣に座った。

「風呂上りも消毒しろよ」

「うん」

お風呂に入ったらまた沁みるんだろうなあ…：葵に頼むと手加減無しに薬を塗られるから自分でこっそりやろう。

「さつき何を言いかけた？」

缶ジュースのプルタブを開けてグラスに注ぎながら、言おうとしていたことを思い出した。

「うん、あのね。…慣れてるから平気、大丈夫だよ。あの女の子達にも厳しい事はしないであげて？」

そう言ったら眉を顰めて私を見た。

そんな険しい顔で見なくても…：怒りが収まったのにまた火をつけちゃった？

「どつという意味だ」

リングジュースを一口飲んで寛貴の方を向いた。

「そのまんまだよ。女の子から嫉妬されるのは慣れてる。葵と一緒にいるとああいうのが多かったんだよね。双子だって知っていても嫉妬されるの。だから、私なら平気だよ」

「宮野はそれを知ってるのか？」

「私からは話してない」

だから多分知らない。

女の子は隠れて攻撃するのが得意なんだよ、皆が寛貴達みたいに正

々堂々としていればいいのにね。

「そんな自己満足で庇われて宮野が納得すると思うのか？…オレなら嫌だ」

寛貴からそんな事を言われるとは思っていなかったから驚いた。

「嫉妬されようがされまいが関係ない。でも、大切な存在が傷つけられたら嫌じゃないのか？梨桜、おまえが逆の立場だったらどうする」

嫌だよ。

私の所為で葵が嫌な思いをするのは許せない。

「慣れてるから平気なんて言うな。怪我までさせられて平気な訳ないだろ」

「うん。今まで深く考えてなかった」

切なそうな眼で私を見るから、つい、手が動いてしまった。

寛貴の頬に手を添えると、驚いたように目を見開いた。

「寛貴、ありがとう」

少しだけ放心していたように見えただけ、私を見つめたまま、フツと笑った。

あ…優しい顔だ。この表情、好きかも。

優しく笑っている顔を見ていたら、体がグラリと揺れて視界が反転した。

「…」

押し倒された。そう気づく前に唇が重ねられていた。いつもなら抵抗するはずなのに、私は目を閉じた。

？

だって、あんなに切なそうな眼をするから。

優しい顔で笑うから…

唇が離れて目を開けると、私を見つめている寛貴がいて…また唇が降りてきて、どちらともなく目を閉じた。

「寛貴さん！」

突然、「バタバタ！」と廊下を走る音が聞こえて、もう一度「寛貴さん！」と大きな声が聞こえた。

こちらに向かっていているだろう足音を聞きながら目を開けると、目の前ではぎゅっと目を閉じたまま眉間に皺を寄せている『総長様』が居た。

「…ちっ」

至近距離で大きな舌打ちをされて、つい「ふふっ」と笑ったら睨まれた。

「寛貴さん！」

“バン！”と勢い良く扉が開かれた。

「寛貴さん！あの女た…」

勢いよく部屋の中に入ってきたものの、ソファの上で寛貴に背中を支えてもらいながら体を起こしている私を見て固まってしまった彼。

「またお前か？章吾」

飛澤君…頑張れ。

「ん…ん…っ！」

苦しそうな声と柔らかな感触で目が覚めた。

状況がつかめなくて少しだけ固まっていたら、梨桜の苦しそうな声が響いた。

「うう…」

後ろを振り返って見れば眉を顰めたまま体を丸めて寝ている梨桜。

どうやらオレは、寝返りを打とうとして梨桜を潰すところだったらしい。

……オレ、梨桜に添い寝してたか？

まだ覚醒しきらない頭で考えたけれど、一緒にベッドに入った記憶はない。

「おい…潰されたまま寝るなよ」

また夜中に人のベッドに潜り込んできていた梨桜は起きようとしな

い。
タオルケットをかけてやると、安心したように手足を伸ばした。

「仕方ない奴…」

「愁、梨桜にホラー映画見せんよ」

梨桜は昨日、愁とコジとホラー映画を見ていた。っつーか見せられていたと言った方が正しい。

一人で寝るのが怖いと言いつ出したのはいつもの事だったが、お風呂に入るのが怖いと言いつ出したのには頭を抱えた。

いくらオレだって一緒に風呂まで入れねえだろーが？

「何で？」

「オレの睡眠時間が減る」

宥めて、一人で風呂に入らせて寝かせたのに、目が覚めたらあの状態だ…

マジで梨桜にホラー映画を見せないで欲しい。

「は？」

言ってもわかんねーか…

「梨桜はホラー映画が苦手なんだよ。必ず夜中に潜り込んで来る」

寝返りを打っていたら確実に潰してたな。前は気にしなかったけど、背中のアレがある今は駄目だ。

「潜り込む…梨桜さん可愛い…」

コジが空を見ながら呟いていた。

おまえは何を想像してんだ？バカ

「今だって大して変わらないだろ」

チームの中にあるオレ用のベッドで寝ていると梨桜が潜り込む事を言っているんだろうけど、ここと家では違う。ここはダブルベッド、家はセミダブルしかない。

「ウチのベッドはここより狭いんだよ、潰す」

愁が笑っていた。

「おまえ、そういう理由？」

他に何があんだよ…

「それと、夏は止めてくれ。暑いから冬にしろ」

愁が爆笑しだした。

前に大橋から真面目な顔で梨桜に欲情しないのか？そう聞かれて意味が分からなかった。

なんで梨桜相手に欲情しなくちゃいけないんだ？梨桜だぞ？

隣にいるのが当たり前の奴になんで『…大橋、おまえはやっぱバカだな』そう言ってやるとアイツは『わかんねー！』と喚いていた。わかんねーのはお前だ、バカ男

「今日、梨桜ちゃんは朱雀か？」

「ああ」

梨桜から毎日やるうね、と言われた課題をやりながらコジがつまらなそうにしている。

愁もどことなくもの足りなさそうだ

「…なんだお前達」

「梨桜ちゃんがいないと華やかさに欠けるよな」

「そうか？」

「ハイ、淋しいです」

淋しい、ね…

「梨桜ちゃんが朱雀に行つてお前は平気なのかよ？」

愁に言われて、いつも梨桜が座っているソファを眺めた。

「なんつーか…保育所に子供を預けてる気持ち？」

「はあ？」

愁が思いつきり眉を顰めてオレを見た。

本当は嫌だ。でも、仕方ねえだろ？梨桜を欲しがるのはチームだけじゃない。青龍だけじゃ手が足りないんだ。

「まあいいか。オレ、明日は梨桜ちゃんと買い物に行く約束してるから」

「愁さん、オレも行きたいです！」

オレは梨桜からそんな事は聞いてない。買い物って何だよ？

「何を買いに行くんだよ」

得意気に笑う愁を睨むとニヤリと笑ってオレを見た。

梨桜はコイツの何を見て王子様って騒いでいるんだ？

オレには理解できねえ…

夏空 (5) side:葵

オレがムツとしたまま愁を見ると、奴はまたニヤリと笑った。

「お菓子の材料だよ、それとテディベアの材料」

テディベア？夏休みの課題は仕上がっただろ。

「梨桜ちゃんが作ったぬいぐるみが子供達に人気だったらしい。小児科から兄貴に依頼が来て梨桜ちゃんに追加を頼んだんだ」

「へえ……」

梨桜は昔から手先が器用だったからな…

そんな理由なら勿体つけないでさっさと教えろ、腹黒王子。

「葵、遅くなっただけど昼飯は何にする？」

「…何でもいい」

愁が嫌そうな顔でオレを睨んだ。

「何でもいいから言えよ。面倒な奴だな」

「わかんねえ、愁と同じでいい」

いつも梨桜が勝手に作るか誰かがリクエストを出すからあまり考えていなかった。

「おまえは梨桜ちゃんがないとどうでも良くなるんだな」

「前と変わってねエよ。オレは夕飯が充実してればそれでいいんだ」

“夕飯”で思い出した。

梨桜から食料を買いに行きたいって言われたんだ。

「どうした？」

親父と慧兄が来ているから食事の用意が大変だけど、梨桜は毎日楽しそうに料理をしていた。

「一緒に買い物に行く約束してた」

迎えに行く時間を聞こうとして携帯を手にとると着信を知らせた。

「…」

一瞬、電話に出ないで無視しようかと思ったが、仕方なくボタンを押した。

「なんだよ」

『用事があるからかけてんだよ』

絶対に自分から電話をかけたいとは思わない相手に、取り繕うつもりもなくぶっきらぼうに出れば向こうも負けてはいなかった。

「梨桜がどうかしたのか？」

梨桜の存在が無かったら絶対にコイツと連絡を取ることなんてないよな…

絶対に有り得ない光景だ。

『朱雀の追っかけの女が梨桜に…』寛貴！葵に言ったら駄目！…やだっ！』

電話口で騒いでいる梨桜の声が聞こえる。
暴れて、押さえられているのかバタバタとつるさい。

『梨桜、つるさい！』

『言わなくていいって言ってるでしょ！？寛貴っ！！』

藤島の隣で梨桜が何やら抗議している。何を騒いでんだアイツ等は…

「つるせえ…用が無いなら切るぞ？」

『用があるって言ってるんだろーが！』

藤島のイラついた声と同時に扉が閉まる音がした。

コイツに言うなって騒いだって事は梨桜に都合の悪い事…今度は何をやらかした？

「何だよ」

もう一度聞くと、電話の向こうで小さく息を吐いた。言いにくい事でもあるらしい。

『朱雀の追っかけが梨桜に怪我をさせた。悪い…』

その言葉にカツとなって「ふざけんな」と答えると愁が怪訝な顔をしてオレを見ていた。

「どついうことだよ、説明しろよ」

コンビニに買い物に行った梨桜が、言いがかりをつけてきた女達に突き飛ばされた。その時に背中を痛めて掌と肘を擦りむいた

最近では背中を痛めても熱が出なくなってきたし、怪我自体もきつと擦り傷程度で大したことは無いだろう。

でも、言いがかりって何だよ？そんな事を言われる筋合いは無い筈だ。

「その女達どつした？落とし前つけさせたんだろうな」

『梨桜が何もするなって言ってきたか。それと…女達の一人が前の女の連れだつて言い張ってる』

藤島の言っている意味が一瞬分からなくて返事をしないでいると「ウチで手を出して揉めるのは面倒だ」と言つて笑っていた。

「オレに女はいない」

『さあな、自分の連れは宮野葵の女だつて言ってる。青龍にも自由に入入り出来るらしいぞ』

それを聞いて一人の女が思い浮かんだ。

厄介だな…

「そいつの名前を教えろ」

『心当たりがあるのか？』

笑いを含んだ言い方にムツとしたけれど、対策を練る方が先だと思
いイラつきを抑え込んだ。

「思い込みの激しい女に心当たりがあるだけだ」

『名前を聞いたら連絡する』

またコイツから電話が来るのかと思ったが「頼む」とだけ言って電
話を切った。

「藤島の電話は何だったんだよ」

厄介な女の顔が浮かんだまま消えなくて、溜息をついて目を閉じた。
しつこくて自信過剰な女は嫌いなんだよ…

「愁、梨桜に男の格好をさせて転校させたらバレると思うか？」

「は？」

愁が目を丸くしてオレを見ていた。

…無理だよな。

夏の××× (1)

「夏の恋もいいと思う。」

「ちょっと背伸びをしてみるのも悪くない。」

「だって高校生の夏なんて今しか楽しめないんだから。」

「でもね、私を巻き込まないで、各自で楽しんでくれると嬉しいな……」

名前を聞いたけれど、覚えていない男子Aが私の顔を見てニッコリと笑った。

「レナちゃん、あんまり喋らないね〜」

テーブルの下で拳を握りしめて堪えた。

誰が「レナちゃん」よ、私は「梨桜ちゃん」！！

「もしかして緊張してる？」

「オシャレなお店で女の子4人に男4人がごはんを食べる。」

「これって合コンっていうんだよね？」

向かいの席に座る麗香ちゃんがオロオロしながら私の顔を見た。

「梨桜ちゃん、どうしよう？先輩に怒られるよね？」って思ってる

でしょ。

こうなったら…

・5組の女の子から『女の子でごはん食べよ!』と誘われて来てみたら合コンでした・

そう言うしかないよ。

「レナちゃん、食べてる?」

「うん、ありがとう」

そう聞かれて、愛想笑いを返してやると「レナちゃんて声可愛いね」と声がする。

食事をするときは集中したいの、味わって食べたいの! 放っておいてくれないかな…

「レナちゃん、飲み物は?」

さっきからレナ、レナ…なぜそう呼ばれているかというと、『ここは朱雀のシマだから、東堂梨桜のままだと不味いでしょ?だから今日はレナちゃんね』5組の橘さんと不破さんにメガネを渡されて“レナ”にされてしまった。

「紫苑の女子と合コンしたかったんだよ」

「貴重だもんな、紫苑の女子」

「急に合コンしようだなんて言うんだもん」

大変だったんだからね！と頬を膨らませて男の子達を見る、5組の橘さん。

とっても可愛い仕草だけど、嘘について集められた私と麗香ちゃんの立場はどうなるの…

「でも、朱雀にバレたら何か言われるんじゃないの？」

圧倒的に男子が多い学校だけど、他校の男の子と合コンしたからって問題にはならないよね。

私がそう思っていると不破さんがニコツと笑った。

「大丈夫だよ、ウチのクラスには幹部とかいないし。あ、笠原さんのクラスは幹部がいたよね。海堂君には内緒ね？」

小首をかしげる不破さんに関心していると麗香ちゃんの視線を感じた。

昨日、寛貴達に『明日の夜は1年生の女の子達でご飯食べてくるね』って言っちゃった。

それを知っている麗香ちゃんの顔が強張っている。

私、嘘をついちゃったことになるよね。

「スゲエ、クラスに幹部がいるんだ？」

「朱雀のナンバー3だよ。怒ると怖い？」

橘さんが聞くと、麗香ちゃんは真面目な顔をして言った。

「うん。幹部の人達は合コンの事を知ったら怒るかも…」

嘘ついたら怒るよね…どうやって説明しようかな。やっぱり正直に言うしかないよね。

あ、このパスタ美味しい。

メニューを手に取って名前を確認した。

しらすがたっぷり入っていて、葵もこっぴつの好きかも。

「レナちゃん」

「レ、レナちゃん呼んでるよ?」

頭の中でパスタのレシピを考えていると、麗香ちゃんが私の目の前で手を振った。

「あ、ごめんね。なに?」

男子Bが私に話しかけていたらしく、彼の方を見るとニッコリと笑われた。

「レナちゃんの好きなタイプってどんな人?」

好きなタイプ?

「私も知りたい!」

橘さんに聞かれて首を捻って考えた。
好きなタイプ…

それを考える前に、思い浮かんだのは二つの顔。

オレ様で過保護な美人と、私に激甘なフェロモン垂れ流し美人タイプ以前にこの美人な親族に負けない人。

「…強い人？」

葵と慧君の存在を忘れていた。
合コンに行ってきた。なんて言ったら…

「確かに…」

考えるの止めよう。

「レナちゃんて強い男が好きなんだ！」

「そういう訳じゃないんだけど、大前提っていうか…アレを攻略しない…」

「ね、レナちゃん。大丈夫？」

麗香ちゃんに聞かれてため息をついた。

考えるのを止めたつもりだったけれど、怒っている顔が幾つも浮かぶ。

パスタが美味しい！なんて呑気に考えている場合じゃなかった。

「ハイ！オレ、レナちゃん攻略したい！」

片手を挙げて宣言している彼を見て麗香ちゃんが力なくアハハと笑っていた。

私も気の抜けた笑いを浮かべ、麗香ちゃんと顔を見合わせた。

私達の考える事は同じ

『『見つかる前に帰ろう!!』』

夏の××× (2)

「レナちゃん、攻略しなきゃいけないモノってなあに？」

橘さんと不破さんが興味津々、といった感じで聞いてくる。

彼女達はどこまで知っているの？

朱雀に所属している生徒が多いこの学校で、普通の生徒はどの程度までチームの事を知っているんだろう？

「り…レナちゃんはお家が厳しいんだよね」

「まあ、そんな感じかな」

そうとも言えるからそういう事にしておこう、詳しく言つと余計なことまで言ってしまうそうだ。

「門限があるとか？」

うん、これもあるという事にしておこう。

「うん」

「親が厳しいんだ？それってうざいよね」

パパは細かいことは言わなくて、どちらかと言えば放任主義に近いかもしれない。

『高校生は、子供以上大人未満。自分の立場を良く考えて、責任がとれる行動を取りなさい』って良く言われていた。

「うっん、弟と叔父さんが厳しいの」

本当にあの二人はパパと真逆。

慧君と葵の私に対する思考は驚くほど似ていて、実は親子だったりして?と思うてしまう時がある。

「門限は?」

何時って言うておこつかな。

不自然にならない時間を考えていたら

「前に6時って言うてたよね」

麗香ちゃんにフォローされて頷くと「信じられない!」と声が拳が
つた。

私としては門限があるよりも、単独行動を許してもらえていない方
が信じられないよ。

「すげ…レナちゃん箱入り」

本当の箱入り娘は、不良チームの溜り場に毎日のように出入りした
りしないでしょ…

「アハハ…口うるさいのがいるから早く帰らないとね…」

笑って誤魔化し、「今すぐにでも帰らせて!」そう思いながらデー
ブルを見回して気付かれないように溜め息をついた。

「紫苑にいと女子生徒はお姫様扱いされるの?」

急に変わった話に麗香ちゃんと顔を見合わせてしまった。

「それはないよ」「

お互いを見ながら頷いた。

何と言っても私は“ダサメガネ”と言われていたんだから、お姫様扱いとは程遠いね。

真逆の扱いだよ。今は自分が珍獣を見るような目で見られている気がしてならない。

眼鏡を外して学校に行ったあの日、教室の外に出来ていた人だかりを思い出して思わず笑ってしまうと不破さんが「嘘でしょお？」と身を乗り出した。

「皆優しいよ、2組は違うの？」

「違うよね」「

麗香ちゃんに同意を求めると首を傾げて言いにくそうにしながらポツリと言った。

「ちょっと違うと思うけど…幹部がいるから下手に声をかけられないんじゃないかな」

「そっかあ…ウチのクラスって朱雀率低いからなあ」

いいなあ、と呟く橘さん。そんなにいいものじゃないよ。さつきまで美味しいと思っていたパスタを口に入れると、急に味が変わったように思えてしまった。

「あ…」

麗香ちゃんの目が真ん丸に見開かれたかと思うと、一瞬で表情が強張ってしまった。

「うそっ?」

なに?

ブロッコリーを口に入れると、私の斜め前に座っていた不破さんが口に手を当てて頬を染めていた。

「あれ…これって、合コン?」

語尾にハートがついているかのような軽い言葉が聞こえて、頭を抱えて机の下に隠れてしまいたかった。

「見れば分かんذار?」

出たよ…

「そうそう、オレ達楽しくごはん食べてるの」

「うそっ! どうしてこんなところに!」?

橘さんは後ろを振り返って「やだ、どうして?」と繰り返している。どうしてって…誰かが教えたに決まってる。

結果的に嘘をついてしまった自分を棚に上げて、今日も護衛を付けられていたことに腹が立った。

「合コンかあ…今度オレ達ともしない？」

「いいんですか!？」

急に色めき立つ女の子と、不機嫌になっていく男の子達。
温度差がハッキリと分かれていく…

「笠原さん、久しぶりだね」

「三浦さん…」

どこか逃げるところは無いかと思回したけれど、目の前に立った王子に微笑まれ、無駄だと思直し手にしていたフォークをぎゅっと握りしめた。

「なんなんだよ!？」

私はうつ向いたまま顔を挙げる事が出来なかった。

普段仲が悪いくせにこういうときだけ団結しなくてもいいと思う。
どうせ来るなら別々で来て欲しかった…

「ごめんね？怖いよね、直ぐに退かせるから」

隣に座っていた彼は、私が怖がっていると思ったのかすまなそうに謝った。

私が俯いたまま、首を横に振ると、肩に手をかけて顔を覗き込んだ。

「レナちゃん、大丈夫？」

合コン君の口を塞いでしまいましたかった！
今、その名前で呼ばないで!?

「レナ?」

頭の上で低く響いた二つの声に、ビクッと肩が震えてしまった。

終わった…

「先輩…こんな近くで嘘みたい」

「カツコイイ…」

空気を読めない彼女達が羨ましかった。

私も『あれ、皆でどうしたの?』明るくそう言ってこの場から逃げようか?

仕様もないことを考えていると後ろから手が伸びてきて、私が握りしめていたフォークを取り上げてテーブルに置いた。

「オレに送らせておいて合コンに参加するとは、いい度胸だな?」
レナちゃん『」

右側の耳元で葵に囁かれて、右半身が固まっていると左側に座っていた合コン君から「ひっ…」と怯えた声があがった。

「女だけでって聞いたのはオレの気のせいか?…こんな小細工しやがって」

左側の耳元で寛貴に囁かれて左半身も固まらせっていると、メガネを

取り上げられてしまった。

「どづいづことか、説明してもらおつか？」しす

怖くて顔があげられない

誰か助けて…

夏の××× (3)

どうやって收拾つけよう…

テーブルの上に置かれたメガネを見ながら考えていると、脇から甘い声が割って入ってきた。

「藤島先輩と大橋先輩、どうしてここにいらっしやるんですかあ？」

「宮野さんと三浦さんですよね!？」不破さんも歓喜の声をあげている。

この二人が怒っているのにピンク色のままでいられるのが凄いや、感心する。

空気読めないって最強かも。

「うるせえ…」

葵の一言に凍りついてしまった橘さんと不破さんに心の中で謝った。ごめんね、言葉を選ばない弟で…

「藤島と宮野ってまさか」

合コン君達がゴクリと息を呑んで私の両脇に立っている二人を見ている。

そのまさか、だよ？

改めて、これからどうしようかと考えていると、寛貴が財布から一万円札を何枚か出してテーブルに置いた。

「梨桜と笠原の分だ、足らなければ朱雀に取りに来い」

そんなに食べてない！と言おうとすると、

葵が私の腕を掴んで席から立たせ、引きずられるようにして席を移った。

「梨桜、説明しろ」

イライラしている葵の聲が私に刺さった。

「梨桜ちゃんは悪くないんです！嘘はついていません」

麗香ちゃん、庇ってくれてありがとう。頑張って收拾つけるからね！

「説明しろ」

左側から低い声が響いて、寛貴に睨まれたであろう麗香ちゃんはビクツと震えた。

不機嫌極まりない総長オーラを出しているにも関わらず、周りにいるお客さんはイケメン達を見ている。

益々イライラしている二人の圧迫感に耐えかねて、大きく息を吸って最初に考えていた言い訳を口にした。

「『女の子でごはん食べよ！』と誘われて来てみたら合コンでした。私も麗香ちゃんも、ここに来るまで知りませんでした。…以上です」

「だったら何ですぐに連絡を寄越さない」

右から不満が零れる。

「顔を見て、すぐに帰るのは失礼かな…」と思って

「約束と違うなら帰っても失礼じゃねえだろ」

左からも不満が零れている。

約束と違うって分かってるけど、合コンをセッティングしようとしている女の子の立場を考えたら、すぐに帰るのって酷いでしょ!?!と声を大にして言いたかったけれど、言ったところでオレ様な二人に通じる訳がない。

愁君に助けを求めようと向かいの席を見ると、麗香ちゃんを真ん中に拓弥君と愁君がメニューを広げて、パスタのソースをトマトにするかクリームにするかで揉めていて、麗香ちゃんが困った顔をしていた。

私が左右からの不機嫌オーラを一身に浴びてるのに! トマトかクリームかなんて後でやってよ!?

「おい…まさか、合コンがしたかったとかじゃないだろうな?」

チャラ男と腹黒王子に投げつけてやろうと、目の前におしぼりを握りしめた。

おしぼりが一つ足りない。

「梨桜、返事しろ」

葵の問い掛けを無視していると、寛貴から答えを催促された。

「合コンは苦手。どうしても好きになれないんだよね」

手短に答え、右側に手を伸ばして葵の前に置かれていたおしぼりを掴んで自分の手元に置いた。

よし、ぶつけてやる。最初はチャラ男から！

「おまえ、今何て言った？」

邪魔しないでよ！

「合コンは好きになれない」

二の腕を掴む寛貴の手を払い、おしぼりを掴んで標的を見ると、向かいで揉めていた二人が私を見ていた。

私の正面に座っている麗香ちゃんが、言葉には出さずに唇を動かして「ダメ！」と言いながら、小さく首を横に振っていた。

目の前にいる王子は、ぎゅっと目を閉じ眉間を指で押さえながら項垂れていて、チャラ男は『あゝあ、やつちゃった』と口パクで言いながらニヤニヤ笑っている。

なんで、ダメ？

「お前、いつの間に合コンに行ったんだ？」

葵の言葉に、自分がやらかした失言に気付いた。

バレたら怒られるから内緒にしてたのに!!

自分から合コンに行ったことがある発言しちゃった!!

「葵がずっと一緒に居るのに…行ける訳ない。でしょ…?」

動揺して、言葉がおかしくなってしまった。

麗香ちゃんは心配そうな顔で私を見ていて、両側からはさっきとは比べもにならない負のオーラが突き刺さってくる…

居心地が悪すぎる。

頑張れ、私

夏の××× (4)

「北海道か？」

寛貴の聲がさつきよりも低くなった。

どうして私が合コンに行ったからってそんなに怒られなきゃいけないの!？」

「『季節限定のケーキ食べよう』って言われて行くと、実は合コンだった。っていう事があったの。それだけ…」

「聞いてない」

葵が不満そうに私を睨むけど“ツン”と顔を逸らした。

「だって言ってるもん」

怒られるのが分かっているのに言う訳無いでしょ!？」

「もん、じゃねえ。札幌でおまえは何してたんだよ？女子校に行かせた意味がねえだろ」

いや、女子校だからこそ合コンに走るんじゃないだろうか…葵ってば分かっているようで分かってないんだから。

葵とバチバチと睨みあっていると、麗香ちゃんが「梨桜ちゃん!」と呼びかけた。

「梨桜ちゃんはケーキを食べに行ったただけだよ、合コンって知ってたら行かなかったよね？」

麗香ちゃんの言葉に救われた。

そうだよ、私はケーキが食べたかったから行っただけ！

「だから、合コンは好きじゃないって言ってるでしょ。ただの人数合わせに付き合わされたただだから！」

もう、これ以上怒られるのは嫌！理不尽だよ！？
いい加減にその総長オーラを引っ込めて！

「お前ら、その位にしておけよ」

愁君が両脇にいる二人を見据えると、葵が私の前にグラスを置いた。

いつの間にか運ばれていたグレープフルーツティー。
怒りながらも、私のお気に入りをオーダーしてくれていた葵に「ありがとう。黙っててごめんね」と言うところっぽを向かれてしまった。

可愛いのか憎たらしいのか分からない…

「オレ、腹減った…早く食おうぜ」

拓弥君の気の抜けたような声に両脇から溜め息が漏れ聞こえた。

溜め息をつきたいのは私なんですけど？

さっきまでの修羅場が嘘のようにごはんを食べていて、周囲からす

ごく注目されている。

「梨桜ちゃん、パスタは何がいい？」

愁君がいつものように私にオーダーを聞いてくれたけれど、寛貴が取り分けてくれたピザを頬張ったまま、『もう、無理』と首を横に振った。

「愁、ジエノベーゼ頼んで。あと、ボンゴレロッシン」

葵が勝手に決めると、愁君が眉をひそめた。

二人でパスタを食べに行くと、必ずと言っていいほど注文して食べ比べている“ジエノベーゼ”お腹いっぱいだけど、この味を確かめたい気持ちもある。

「またお前は勝手に決めて…梨桜ちゃんに聞けよ」

愁君、いつも気を使ってくれてありがとう。葵にお小言を言えるのは愁君だけだよ。

「うるせえな、いいんだよ」

「おまえなあ…」

愁君に小言を言われている葵を無視し、私と寛貴のお皿にサラダを取り分けた。

「このドレッシング美味しいね」

「気に入ったなら買って帰るか？」

寛貴にテイクアウトのメニューを見せてもらつと、幾つかある種類に目移りしてしまう。

「これも美味しそうだね」

今食べているのとは別なドレッシングも捨てがたい。隣の写真を指で示すと寛貴もメニューを覗き込んだ。

「それも頼めばいい」

メニューから顔を上げると、麗香ちゃんが拓弥君と楽しそうに話をしている、葵が愁君に憎まれ口を叩き、愁君は余裕の笑みを返していた。

私と寛貴はドレッシングを物色している。

私達ってバラバラ…全然纏まりがない。

でも、一つのテーブルでご飯を食べていてさっきよりも美味しく感じられてしまう。

「梨桜、ドレッシングは2つでいいのか？」

寛貴に声をかけられてメニューに視線を戻す時に、さっきまで居たテーブルが視界に入った。

さっきまでの盛り上がりはなく、普通にご飯を食べているようだった。

「どつした？」

チラチラとこちらを見ている女の子二人を視界の端で感じ取りながら、少しだけ申し訳ないな、と思ってしまうた。

「合コンを台無しにしちゃって悪かったかなって…」

寛貴も橘さん達に目を向けたけれどすぐに視線を戻し、口角を上げるとフツと笑った。

「拓弥が上手くやる。心配するな」

合コンに参加している拓弥君が容易に想像できすぎて、納得してしまふ。

妙な説得力があるよね、安心してお願いしちゃうから。

「寛貴は行った事あるの？」

拓弥君と正反対な寛貴は、女の子の前でどんな顔をするんだろう？
素朴な疑問を投げかけた。

「あるわけねえだろ。梨桜、二度と行けると思うな」

素朴な疑問を投げかけたただだったのに、恐ろしい宣言が返ってきてしまった。

どうしてそんなに横暴なの！？ムツとして睨みあったけれど…

「梨桜、分かったな？」

「…はい」

怖くて、返事をしてしまった。

.

オトナの社会見学 (1)

夏休みも残すところあと数日。

悠君に頼みこまれて、夏休みの課題を手伝ってあげていた。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまっただよね、と終わってしまっただよな、と感傷的になってみようかと思っていたら、素敵な誘いがあった。

『面白いところに連れて行ってあげるから可愛くしておいで』

珍しい人からのお誘いに「頑張つて可愛くします！」と答えると涼先生は携帯の向こうで笑っていた。

大人な涼先生が連れて行ってくれる“面白いところ”きっと素敵なところだろうと思って楽しみにしていると

『涼と面白いところに連れて行ってあげるからこの前買った服を着て、可愛くしておいで』

慧君からも同じ事を言われた。『待ち合わせ場所には葵に送ってもらおうように』とつけ足して慧君も携帯の向こうで笑っていた。

二人から可愛くしておいでって言われたから久しぶりに頑張ってみよう。

慧君ご指名の服を着て、少しだけメイクもしてみた。

「涼先生と慧君、可愛いって言うてくれるかな、もう少し濃くした

方がいい？」

グロスを塗り終えて背中ボタンを留めてくれていた葵に顔を向けると、葵は私を見てフツと笑った。

「慧兄が壊れるからそれぐらいにしておけ」

アイラインを引こうと思っていたけれど、止めることにした。慧君が壊れるのは困るからね。

待ち合わせまで時間があつたから葵と買い物をした。

相変わらずなんだけど、歩いていると凄く注目されて、学生は勿論OL風な大人の人も通り過ぎる人は葵を見ていく。

「男の視線がうぜえ」

私には女の人からの視線が突き刺さってきて痛いんですけど…

イラついて、歩く速度が速くなっていく葵に着いて行くのに一苦勞してしまう。

身長さと、足の長さを考えて歩いてよ！

こんなところで置いて行かれたくなかったから、葵の腕を強く引いた。

「待って、早いよ！」

立ち止まった時に、視界に入ったフラワーショップの軒先に置かれていた小さな鉢植え。

「これ可愛いね」

可愛い姿に、葵の手を握ったまま鉢植えの前にしゃがみ込むと、葵も隣で私の目線に合わせて鉢植えを見ていた。

一目惚れしてしまった小さな姫りんごの鉢植え。

買おうよ。と葵のシャツの手を引くと、葵は鉢を持ち上げて大きさを見ながら私を見た。

「どこに置く?」

まだ青いけれど小さな実をたくさんつけていて、冬までには可愛らしく赤く色づいてくれるだろう。

「リビング?」

「…そこしかないよな。リビングが殺風景だからいいんじゃないか?」

葵が会計してくれて、お店の人から鉢を受け取っていた。

「名前をつけて可愛がろうよ」

「却下」

上から目線で見下ろされて、「やだ、決めたの」と対抗すると

「梨桜のネーミングセンスは信用していないからダメだ」と真顔で言われてしまい、それを見ていたお店の人に笑われてしまった。

「バカにしてるでしょ」

「だってバカだろーが。恥ずかしい奴だな」

小突きあいながら待ち合わせの場所まで行くと、慧君が来ていて私達に手を振った。

「可愛くしてきたな？」

私を見て目を細めて微笑む慧君。

外で改めて見ると、我が叔父ながらとってもカッコイイね。葵と並ぶと迫力すら感じてしまう。

「あんまり変なところに連れて行くなよ」

葵から言われて慧君はニヤリと笑った。

「保護者が二人いれば大丈夫だよ」

「一番危ない保護者だろーが」

元総長二人のエスコートで連れて行ってもらえる『面白いところ』葵の一言で急に不安になってきてしまった。

「葵、夜遊びは程々にしろよ？」

諭された葵は、慧君を見ながら笑っていた。

「慧兄にだけは言われたくないね。梨桜、変なところに連れて行かれそうになったら連絡寄越せよ」

「相変わらず生意気な奴だな」

変なところってどんなところ！？具体的に教えて！？

葵は気になる言葉を残して帰ってしまい、私はこのまま帰ろうかと迷っていると、慧君に手を取られて、夜の繁華街を歩いた。

「慧君、涼先生は？」

「少し遅れてくる」

少し歩くと慧君はある店の前で立ち止まった。
ネオンが輝くこの外装って…

葵、変なところってこついうところも含まれる？

「こつ、何のお店？」

想像がついていたけど念のために聞いてみた。

「女の子と甘いトークを楽しむお店」

やっぱり…何でここに来る必要があるの？男の人は楽しめるかもし

れないけど、女の私が、しかも未成年が来ちゃイケナイ所だよね！？

「ここって男の人が楽しむお店でしょ？」

慧君を見ると、ニヤッと笑い私を中に入れた

「大人の夜の社会見学。保護者同伴だからいいんだよ」

それ、本当？

オトナの社会見学 (2)

軽いトークと甘い雰囲気。

着飾った夜の蝶と元総長の色男二人、この空間に馴染んでいます。

「憧れの人に会えて嬉しい！」

“お仕事だから”ではなくて本気で喜んでいらしい、お姉様達私は保護者二人の間に座らされて、ノンアルコールカクテルをちびちびと舐めていた。

「涼さん、慧さんを連れてきてくれてありがとう！沙理、嬉しい！」

遅れてきた涼先生が「沙理ちゃんはこのお店のNO.2だよ」とこつそり教えてくれた。

少し切れ長気味の目をした沙理さんは綺麗な人だった。

「涼さんも全然来てくれないから私達、寂しかったんですよ？」

グラスを手渡しながら可愛らしく小首を傾げるお姉様。“眺めているだけで面白い”なんて言ったら、叱られるかな…

「その割には連絡がないんじゃないか？」

手にしていたグラスを落としそうになった。

涼先生の視線が…声が甘い！

「え、ホントにしているんですかあ？」

涼先生も慧君も、キャラが違い過ぎ！
ある意味勉強になるかもしれません。

「ところで…そちらの女の子は？」

沙理さんが私をチラリと見た。

不思議だよ、イイ男二人の間にお子様が座っていてフルーツの盛り合わせをパクっているんだもん。

沙理さんが営業用の笑みを浮かべた。

「梨桜です。慧く…「オレの大切な子」

私の言葉を遮って放った言葉に沙理さんの表情が強張った。

「慧君！」

そんな事を言うと私は女の子に睨まれるんだよ。

ホラ、ヘルプについているキャラ嬢にも睨まれてる！

「梨桜、本当の事だろ？」

私の肩を抱き寄せて、こめかみにチュツとキスをした。

一気にキャラ嬢達の笑顔が凍りついた。

面白がって、わざと誤解されるような言動をとる慧君。一いついつと
ころは葵よりも子供だと思っ。

涼先生が笑っているからお姉様達もかろうじて笑みを浮かべているけれど、その笑顔の下で『何なのこの子？』って思っているはず。だって、凄く笑顔が引き攣っている。

慧君だってそういうの、分からない訳じゃないと思うんだけどなあ…

「慧君、皆が吃驚してるでしょ？」

笑みを浮かべる慧君と、クツと喉の奥で笑った涼先生。

どうやって收拾つけるの？私にはお姉様達の相手は無理だからね？

「梨桜ちゃん、ホントに困った大人だよ。家で躓けてくれないと困るよ？」

真顔で茶化す涼先生に真顔で返した。

「ごめんなさい、涼先生。慧君のご飯だけおかずを少なくしておくね？」

「いつからそんな子になったんだ、おまえは！」

脇から慧君に羽交い絞めにされて、ぎゅうぎゅうに抱き込められてしまい、涼先生に「助けて！」と訴えるとグラスを傾けながら笑うだけで助けてはくれなかった。

自分から始めたのに見捨てるなんて酷いよ涼先生！！

「梨桜、似てきたな。将来は鬼ババアになるぞ？」

私の顔を覗き込みながら真顔で言う慧君の頬を抓ってやろうと手を伸ばしたら簡単に抑え込まれてしまった。

「ママは美人だったからいいんだよ。慧君だって、不良中年になるんだから」

憎まれ口を叩く私を抱き込める力が籠り、ギブ！と腕を叩くと涼先生が手を伸ばしてくれた。

「慧さん、それくらいにしてあげて。まだ無理な態勢があるんだ」

涼先生の言葉に慧君の腕が解かれて、私は涼先生に手を引かれて体制を立て直した。

「苦しかった…」

私の背中をさすりながら呆れたように呟く涼先生。

「マジで叔父バカ。梨桜ちゃんも大変だな？」

「そう思っなら、もっと前に助けて下さい」

「叔父？」

涼先生の言葉に沙理さんが反応した。

「慧さん、どういう事？沙理に教えて？」

可愛らしく小首を傾げる沙理さんをチラリと横目で見ると、ボーイに「リングとナイフ持って来い」と言い、グラスを煽った。

「涼が言ったる？梨桜はオレの姪。オレの姉貴の娘だよ」

急に態度が変わった沙理さんと、ヘルプについている女の子達。

「そおなんだあ…慧さんの姪っ子ちゃんなら美少女なのも納得！」

さっきまでの私を胡散臭げに見ていた彼女達は「早く教えてくれればいいのに」と甘い声を出していた。

居心地悪い…

どうして慧君は私をココに連れて来たの？

オトナの社会見学 (3)

何を思ったのかリングゴを用意させて剥きだした慧君。

キャバ嬢達はその姿を見て「可愛い」とはしゃいでいる。

「慧さん、東京にはいつまでいらっしやるんですかあ？」

甘く可愛いらしく問いかける沙理さん。

「梨桜、いつまでいて欲しい？」

沙理さんを見ずにりんごの皮を剥く手を止めて私に聞いてきた。あからさまにムツとする彼女は私を軽く睨んでいるように見える。

「梨桜？」

沙理さんの視線を痛いほど感じながら俯いた。

分かっているクセに意地悪。ホントは帰らないでっつて言いたいのを我慢してるのに！

「オレと一緒に来るか？」

「葵と離れるのはイヤ」

涼先生が私の顔を覗きこんで宥めるようにポンポンと頭を撫でた。

「涼君、久しぶり」

落ち着いたトーンの女性の声がして顔をあげると美人さんが立っていた。

「よう、杏子。久しぶりだな」

慧君が艶やかな美人さんに声をかけると、杏子と呼ばれた美人さんは笑った。

「お久しぶりです、初代」

杏子さんがキャバ嬢達を一瞥すると、一瞬にして雰囲気が変わった。ピリツと締まった感じというか…お姉様達が緊張している。緊張しているキャバ嬢達をもう一度見回して、最後に私の上で視線を止めて目を細めた。

「この子が初代のお姫様？」

「そう。可愛いだろ？」

グイツと慧君に引き寄せられたと思ったら、杏子さんの前に出された。

慧君、美人の前で子供扱いは恥ずかしい!!

「はじめまして、杏子です。涼君とは古い付き合いなの」

「梨桜です。おじゃましています」

ぺこりと頭を下げると、頬に手を当てて首を横に振りながらため息をついた。

子供が大人のお店に来ちゃ行けなかったんだよね、葵の所に帰ろう

かな…

「梨桜ちゃん、可愛いわぁ…いつも人工的なものばかり見てるから、こういう天然物を見ると癒されるわ」

え？どういう意味！？

「ふっ…ハハツ杏子、おまえ相変わらずだな！」

慧君がソファから転げ落ちそうなくらい笑っていて、慧君に抱えられている私もソファから落ちる！

「涼先生！」

隣に助けを求めると、杏子さんが私の手を握った。慧君に抱えられたまま杏子さんに手を握られている凄い状態。大人のお店でこんなに騒いでいいんだらうか…

「梨桜ちゃん、たまにはお店に遊びに来てちょうだい、お金の事は涼君がいるから心配しないで、ね？」

「ええ…と」

急にそんな事を言われても困ります！

でも、取り敢えずこの態勢は苦しいんですけど…「ホントに可愛いわぁ」という杏子さんに「そうだろ！」と何故か偉そうに言っている慧君。

もう、ヤダ…訳わかんない！！

「私、帰る！」

私が宣言すると、涼先生がため息をついて慧君達を睨んだ。

「お前達、いい加減にしるよ？」

オトナの社会見学 (4)

涼先生の一言で解放された私。「帰る」とこねる私に慧君が皿を差し出した。

お皿の上に乗せられている可愛らしい“うさりんご”慧君はキャバ嬢に「可愛い」と言われながらコレを作っていたらしい。

「あら、慧さんてばこんなに可愛いのも作れたのね」

杏子さんは感心したように言い、さっきまではしゃいでいたお姉様達は静かに私達を見ていた。どうやら、杏子さんの前ではお行儀良くする事にしたようだ。

「梨桜、食べていいぞ」

ニコニコしながらリンゴを刺したフォークを持たせる慧君。

「…」

これで私の機嫌を直そうとしているらしい。

「懐かしいだろ」

「もう子供じゃないんだからね」

そうは言ったものの、懐かしくて手を出してしまった。今日の慧君は困った大人だけど、うさりんごに罪はない。

この、“耳”が可愛いんだよね。

「うちの双子ちゃんはやさぎを作ってやるとご機嫌になるんだよ」

杏子さんに説明してる慧君はさり気なく葵の過去も暴露している。葵に怒られても知らないから…

「アイツもこれでご機嫌になってたのか？」

涼先生の疑問に頷きで答えたら…涼先生、大爆笑。

葵、ごめんね。

もしかしたら、葵のイメージ壊したかも。でも、嘘はついてないからね？

あーん、と“うさりんご”を口に入れると、涼先生も“うさりんご”を食べていた。イケメント“ウサギリんご”…面白い組合せかもしれない。

「梨桜、迎えが来たら先に帰れ」

腕時計を見た慧君が唐突に言った。

今日の慧君はホントに分からない。私はココに何をしに来たの？

“連れて来られた”それだけ！？

「ふふつ、今日は念願の梨桜ちゃんに会えて嬉しかったわ。梨桜ちゃん、困った事があったら言ってみてね？可愛い子は大好きよ」

杏子さんは艶やかに笑んだ。
見惚れそうになりながら笑みを返すと「可愛いわぁ」としきりに感
激していた。

どうも調子の狂う美人だ。こんな美人に「可愛い」を連発されると、
どう反応していいのか分からなくなってしまふ。

「杏子、頼んだぞ」

「初代の頼みなんて貴重だわ」

笑みを浮かべながら「お任せ下さい」と返事をしている杏子さん。
慧君は何をお願いしたんだろう？

「梨桜ちゃん、もう大丈夫よ？」

二人のやり取りを眺めていたら、杏子さんが私の手を握った。

「え？」

何を言われているのかが良く分からなくて、涼先生に助けを求め
るとやっとここに来た理由を教えてくれた。

「今日梨桜ちゃんをこの店に連れてきたのは杏子に会わせなかった
からだよ。葵と藤島に言えないような困った事があつたら杏子に相
談すればいい」

理由は分かったけれど、納得できない。

「え、どうして？」

そう言うと涼先生は私の肘に手を当てた。

そこは朱雀のファンに突き飛ばされて転んだときに擦りむいたところ。

慧君と涼先生にあの事が伝わっていたの？だから杏子さんに私の事を頼んだの？

「ここいらで杏子に逆らうバカな女はいないからな」

慧君にぎゅっつとしがみついた。

どうしてそんなに私を甘やかすの？慧君が優しすぎるからいつまでたっても離れられないんだよ…

「大好き」

慧君から顔を上げて杏子さんに頭を下げた。

「杏子さん、ありがとうございます」

「梨桜ちゃんつたら…食べちゃいたいくらい可愛いわねえ…」

私を見ながらポツリと言った言葉に固まってしまった。

「杏子！手え出したらただじゃおかねーぞ！」

杏子さんは慧君に不敵な笑みを浮かべていた。

「…」

最後の言葉は、聞かなかったことになっておっつ…

オトナの社会見学 (5)

「梨桜ちゃん！！オレ、マジでやべえよ！」

「うるせーぞ海棠、黙ってやれ！」

右隣から葵の怒声。

「梨桜さんっ！分からないです！」

「小嶋、おまえバカだったんだな」

左隣からは寛貴の呆れた呟き。

コジ君と悠君は夏休み後に学力試験があるのを忘れていたらしく、前日に焦って私に泣きついてきて新学期早々騒がしい。

青龍のチームハウスで二人纏めて勉強を見ているんだけど、何故か寛貴と拓弥君も来て寛いでいる。

「コジ、赤点取ったら承知しねえぞ」

「そうだな。幹部が赤点なんて、前代未聞だからな」

葵と愁君の厳しい言葉に引き攣るコジ君。

コジ君、これは愛の鞭だよ。頑張れ！

「悠、おまえも同じだからな」

頬を膨らませて拓弥君を軽く睨む悠君。相変わらず可愛い…

朱雀も青龍もチームの幹部が生徒会役員を務めるのが決まりだって言っていた。東青と紫苑は有名進学校。

コジ君と悠君はこのまま行くと、生徒会とチームの事を両立させられないんじゃないかって心配になってしまう。

「おい…」

葵が気の抜けた声を出した。

コジ君と悠君が顔を上げて珍しそうに見ている。

椅子にふんぞり返るように座っている葵は腕を組みながら私をじっと見ていた。

相変わらず分りやすいね…

「手伝ってくれる？」

「…ああ。誰かに買いに行かせるから」

またすぐに人を使おうとして！

いつからこういう子になっちゃったのかな…

「私が行くから。下の子達を使わないで」

「なあ、何の話だ？」

拓弥君が睨みあっている私達を交互に見ながら愁君に聞いていた。

「お前が行ったら時間がかかるだろ」

斜めに見下ろして言う葵にムツとして言い返した。
何よ、人が鈍クサイみたいない方して！

「一番文句言うクセに」

言い返せば更に鋭く見返して凄まれた。

「なに？」

なによ、本当の事じゃない！

味にうるさいんだから一緒に買い物に行ってくれるのが一番手っ取り早いつて毎回言つても分からないんだから！

抓つてやるうと手を伸ばしたら、逆にヘッドロックをされてしまった。

「この姉弟喧嘩の意味が分かんねえ…三浦、解説しろよ」

愁君が苦笑いを浮かべながら拓弥君に説明を始めた。

「多分、だけど…葵は腹が減ったから梨桜ちゃんに何か作れって言つていて、材料を下の奴等に行かせるって言つたら……梨桜ちゃん、これで合ってる？」

頷きながら葵の腕をバシバシと叩いた。

苦しいっ！

「おい！梨桜ちゃんはオレ達に勉強を教えてくれてんだよ。邪魔す

んなよ」

悠君が葵に向かってピシッと言うと拓弥君が「正論だな」と呟いていた。

「梨桜、出歩くな」

寛貴に言われて左を向いたら、フツと笑われた。

この前と同じあの顔…

つい、見惚れそうになっていると腕の力が強くなった。

「苦し…何でダメなの？」

「何でって、梨桜ちゃんは何目立つから。この前も宮野と一緒に居た後、初代と手を繋いで歩いてたろ」

どうして知ってるの？

葵の顔を見上げると、眉根を寄せて私を見下ろした。…あれ？怒ってる？

「その日のうちに噂が回るんだよ。梨桜、変なところに連れて行かれたら連絡しろって言ったよな？」

「うん、電話しようか迷っただけけど…」

「キャバクラは面白かった？」

拓弥君が言うと、悠君が目を丸くしていた。私も目が丸くなっているかもしれない。

そんなことまで話が伝わって行くの!？

「初代が連れて歩いたから余計に目立つ存在になったんだ。梨桜に興味を持ってしている奴は大勢いる。大人しくしてる」

食材を買いに行ったら、それも噂が広まるの？ “東堂梨桜が大根と豚肉を買った”とか言われちゃうの！？
それって怖いよね…

「梨桜ちゃん、分かった？」

拓弥君に言われて頷いた。

これからは、なるべく昼間に買い物をするようにする！

「梨桜ちゃん、キャバクラに行ったのか？まさか…体験入店じゃないよな」

「海堂！梨桜さんがそんな事する訳ねーだろ！」

コジ君が顔を真っ赤にして悠君の言葉を否定している。

悠君、心配しなくても大丈夫だよ。

残念だけど、私にはあんなに器用に可愛らしく振る舞うことは出来ないよ。

Flowers (1)

暦の上では秋。

それでもまだまだ暑い…こつこつ日は女子校時代が懐かしい。

「あつつい」

新しく作ってもらった真夏用の制服。

これを一度着たらセーラー服が着られなくなってしまった。

「ホントに暑いよね…」

特別教室に移動してきた私達は家庭科の授業で女子生徒しかいないそれをいいことに、リボンを外して襟元も開いて団扇でパタパタと扇ぐ。

周りではスカートをまくって扇いでいたけど、それは控えておいた。

女子だけの教室なんて、こんなものだよね…

「東堂さん、この前はごめんね？」

パタパタ扇いでいると、5組の橘さんに謝られた。

夏休み中の合コンの事を言ってるのだろう。

うん、アレは怖かったよ。

「笠原さんもごめんね」

「私は平気だけど…」

麗香ちゃんが私をチラリと見ると小橋さんが「なに、何があったの？」と興味津々だった。

「友達に頼まれて合コンしたんだけど…ね？」

橘さんが麗香ちゃんに目配せをすると、麗香ちゃんが私を見た。

「私は大丈夫だよ。それよりも、葵は口が悪いから怖かったでしょ？ごめんね。合コン相手の男の子達にも悪い事しちゃったね」

「本当に大丈夫だったの？」

「うん」

大変だったのは席を移動したその後だよ。

口が滑って合コンに行った事を言ってしまった…

あれから葵は思い出す毎に札幌での事を聞いてきてちょっと困ってるんだよね。

「でも、すつごくカッコ良かった！宮野さんを見られたのも嬉しかったし、先輩の私服を見られてラッキーだったよ」

橘さん、前向きだね…

羨ましいよ。

「どうして東堂さんが宮野君の事で橘さんに謝るの？」

他のクラスの女子生徒が少しムツとしたように私に聞いてきた。

「え、だって」

麗香ちゃんが言葉を続けようとするのを制した。

「そつだよね、ごめんね」

麗香ちゃんは“どうして？”そんな顔をしているけれど、こういう時に私が葵の姉だからって言っても結果は同じになるんだよ。双子の私も嫉妬の対象にされちゃうの。

授業が始まるチャイムが鳴り、救われた気分で自分の席に戻った。

授業が終わってすぐに葵から電話が来た。
終わるタイミングを計ってかけてきたらしい。

「どつしたの？」

麗香ちゃんから小声で『宮野君？』と聞かれて頷いて返事をした。

『来週、学校の行事で札幌に泊することになった』

急な話だね。

でも、学校行事なら仕方ない。

「ふうん…行ってらっしゃい」

『おまえも学校休んで来るか?』

凄く真面目な声で何を言い出すんだろうか…自分の学校行事に私を付き合わせるつもり?

「自分の言っていること、ちゃんと理解してる!？」

『梨桜を東京に一人残したら危なっかしいだろーが。目の届くところに居る』

携帯を耳に当てたまま、ガツクリと頂垂れたくなった。

なんていうか…葵って頭は悪くなかったはずんだけど、どうしてこっぴつ突飛な事を思いつくんだろうか

「あのね…ねえ、愁君と換わって?」

葵を説き伏せようかと思っただけれど、無理なような気がしてきた。

『何で愁なんだよ』

麗香ちゃんに『外で話して来るね』と小声で言い、私は人気のいな
い校舎裏に向かった。

「いいから、早く」

私は紫苑の生徒。葵は東青の生徒でしょう?どうして男子校の東青
の学校行事に私がついて行かなきゃいけないの!

しかも札幌!遠すぎるでしょ!!!

『葵、換われよ』

愁君の声が聞こえてホッとした。
これでまともな話ができる。

「もしもし、愁君？」

『梨桜ちゃん、驚かせてごめんね』

愁君の一言で落ち着くことができる。彼は本当に癒しの王子様だ。

「私こそごめんなさい。私は一人でも大丈夫だから、葵がバカな事をしようとしたら止めてくれる？」

『さつきからそう言ってるんだけどね…マジで梨桜ちゃんには過保護な奴だよ。無理だと分かかっていても言わずにいられないんだと思うよ』

溜め息交じりに言う愁君にもう一度、ごめんなさいと頭を下げた。
絶対一番迷惑をかけているのは愁君だよな。

『まあ、葵の気持ちも分かるよ。オレも一緒に札幌に行くから梨桜ちゃんを置いて行くのは心配なんだよね…遊びに来る？』

どうして同じ事言うの！？愁君だけが頼りなのに！

「愁君にも葵のバカが伝染ったの！？」

電話の向こうで愁君は楽しそうに笑っていた。

『冗談だよ』

「……」

決めた。

学校が終わったなら、見張りと護衛を撒いて一人で美味しいお茶を飲みに行こう。

Flowers (2)

電話の向こうで授業が始まるチャイムが鳴ったから教室に戻った。

席に着くと、先生がまだ来ていなくて女子生徒はおしゃべりに夢中。

「ねえ、噂で聞いたんだけど、今度レディースが大きな集会するんだって！」

「レディースって怖くない!？」

「「怖いよねーっ!!」「」

…レディースが怖いなら自分の学校はどうなの？
怖い基準が間違ってると思うよ。

「東堂さんは集会とかに出るの?」

小橋さんに聞かれて、首を横に振った。

「私はメンバーじゃないからいつも部屋で大人しくしてるよ」

一度だけ、集会がどういうものか見てみたくて覗いたら、強面やイカツイお兄ちゃんの集団に吃驚して慌てて葵の部屋に逃げたことがある。

後からコジ君に聞いたたら、『あれは系列の幹部達だから大丈夫ですよ』と笑っていたけれどあのときはびっくりしたな。

一人一人と話すとは怖くないんだけど…集団でいられると迫力がありすぎて声をかけるのを躊躇ってしまう。

葵がああ集団のトップなのが未だに不思議だ。

「そのレディースって元々紫垣の追っかけしてたらしいよ」

「硬派なチームだから追っかけとか許さないでしょ」

硬派。ねえ…この前のキャバクラでの二人からはちょっと遠いかなあ

「今は朱雀と青龍の追っかけしてるんでしょ？」

「硬派なところは受け継いでいるから相手にされないのにな」

硬派なの？

寛貴と葵は煩いのが嫌いなだけのような気がする。世間ではそれを硬派と呼ぶの？

「東堂さん、どうしたの？」

「なんでもないよ」

余計な事を言ったら怒られそうだな。

教室の扉が開いて、先生が「遅れてごめんなさいね」と言いながら入ってきた。

次の調理実習のテーマを言われて、笑ってしまった。

『夏疲れを癒す』って先生は今年の夏に相当疲れちゃったんだね。

「先生、図書室に行つて調べてきてもいいですか？」

「いいわよ。5分前迄に戻つて来てね」

先生に許可をもらつて、献立の為の調べものをする為に図書室に向
かつた。

小鮎の南蛮漬けときのこの御味噌汁に玄米ご飯
ちよつと高校生らしくない？

のんびり構えていたら、授業が終わるチャイムが鳴ってしまった。

5分前に戻つて来るように言われてたのに！！

急いで家庭科室に戻ると、廊下に男子生徒が居た。

「裕子ちゃん、次は視聴覚教室に移動だろ？迎えに来た」

裕子ちゃんは5組の橘さんの名前。橘 裕子ちゃん。

「沙織も行くぞ」

沙織ちゃんは、5組の不破 沙織ちゃん。

5組つて凄い！移動教室だからってクラスの男の子が迎えに来てく
れるんだ！！

この前言っていた通りだね。お姫様扱いだ…

2人は「ありがと！」と言いながら、教室から廊下へ出てきた。女子生徒2人に対してお迎えが5名。凄いね、逆ハーだよ。

「こんなところで何してんの」

後ろからツン！と頭を突かれて振り返ると、拓弥君と寛貴がいた。

「家庭科の授業だったの」

家庭科室を指差すと、拓弥君に「調理実習？メニューは？」と聞かれて、図書室でまとめていたメニューを見せた。

「寛貴はどうしてここにいるの？」

「次の授業がその教室だから」

顎で家庭科室の隣の教室を指示した。
なるほど。

お互いに新学期になって授業の科目が変わったからね。

視線を感じて、そちらを見ると5組の男子生徒が私達を見ていた。

「梨桜ちゃん、デザートが入ってない」

「無いよ」と言ったら不満げに見つめられた。いつの間にか拓弥君のデザート担当になってる？

「何か用か？」

「いえ！なんでもないです」

慌てて寛貴と拓弥君に頭を下げる男子達。

橘さんと不破さんが私に手を振ってきたから振り返すと、男子達はこちらをチラチラと見ていた。

寛貴と拓弥君を傍で見るのが珍しいんだね…

「先輩こんにちは。梨桜ちゃん、教室に戻ろう？」

麗香ちゃんに声をかけられて「うん」と返事をして寛貴と拓弥君に「じゃあね」と手を振った。

「不破さんと橘さんにお迎えが来てたね」

麗香ちゃんに「すごいね」と言うと、苦笑いをしながら教えてくれた。

「夏休みに合コンしたでしょ？その話がクラスの子に知られちゃったらしいの。新学期になったらああいう状態なんだって」

クラスの男の子達が嫉妬したの？

「ウチのクラスには縁のない話だね」

「うん。先輩が怖いからね…」

ボソリと呟いた麗香ちゃん。「先輩？」と聞くと、少し唇を尖らせて「先輩は先輩だよ」と答えた。

麗香ちゃん、もしかして…

「麗香ちゃんも逆ハーしたいの？」

頬がほんのり赤くなつた麗香ちゃん。

「梨桜ちゃん！私そんな事考えてないよ！」

ムキになつて否定しちゃつて…

女の子はお姫様になりたいもんね？

「可愛い、麗香ちゃん」

Flowers (3)

放課後、生徒会室で担任の安達先生に捕まった。

先週末が提出期限だった進路調査の用紙を提出していないから…

「東堂、先生だけに話してくれ」

ソファに座り、膝の上に肘をつきながら私をじっと見ている先生。私が話すのを待っているらしいけど、“先生だけ”って同じ空間に生徒会のメンバーがいるんですけど？

「前に慧君が言ってたじゃないですか。あの通りです」

毎日学校に行く。それを維持していく事が今の目標。

それなのに先生達は『文系か理系か』そればかり聞いてくる。

「でもな、将来の事だぞ？先生は大事な事だと思うぞ？」

目の前で身を乗り出している先生。

すぐく真剣で切実な先生には申し訳ないけど本当に考えてなかった。

「考えなきゃダメですか？」

そう聞くと、大きく頷いた。

「来年のクラス替えがあるからな」

うん…

私が腕を組んで頭を悩ませていると、先生の隣に拓弥君が座り私の隣に寛貴が座った。

二者面談なのに、外野がいるこの状況で何をどう考えろって？

「この選択で残りの二年間が決まるからな。良く考えた方がいいぞ？」

拓弥君の、不良らしくないその台詞に笑ってしまった。ちゃんと進路の事考えているんだね。

「東堂、笑い事じゃないぞ。…よし、先生が質問する。取りあえず答えてみなさい」

「はい」

取りあえずね、取りあえず答えてみよう。

「高校卒業したら働きたい」

「うーん…それはまだ早いかな」

率直に思った事を答えた。

いつかは就職するけど、何をしたいのか良く考えて、準備をしてから就職をしたい。その為には高校卒業で就職するのは躊躇われた。

「よし。どうせ勉強するなら短大の二年間より大学で四年間勉強しようと思う」

「はい」

二年はあっという間だよ。どうせ勉強するなら四年間学びたい。

「国立と私立なら、国立がいいんじゃないかと思う」

そつだなあ…今は私立の高校に通っているけど、ウチは双子だから教育費は常に二倍かかっているんだよ。

「国立。かな」

隣から、呆れたようにため息をつかれた。

「誘導尋問だな…」

「藤島！」

寛貴の言葉にムキになっている先生…
え？これって誘導尋問だったの？

「どうせ、おっさん連中が国立の合格率を上げたいって騒いでんだろ？」

拓弥君の言葉に先生は「進路指導の先生に言われたから聞いてるんじゃないぞ！」とまたムキになっていた。

先生つてば、嘘がつけないんだから…

「上から押さえつけられて、生徒は言う事を聞かない。教師も大変だな」

クツと笑う寛貴に先生はがっくりとうなだれていた。

「藤島、おまえが言うなよ…大変だと思っならオレに協力しろ」

先生、私もそう思う。

ところで、この二人はどういう進路を希望しているんだろうか？

「ねえ、寛貴と拓弥君は？」

大学を卒業してサラリーマンになる二人を想像できない。会社勤めとか、できるんだろうか…

「東堂、コイツらの事はいい！次の質問行くぞ！」

え、まだ続きがあるの？

もういいよ、国立志望にしておく。

先生が、グイッと身を乗り出した。

「東堂、これが大事だぞ。2年生に進級したら「安達先生がここに
いるって聞いたんですけど…」

ドアが開き、麗香ちゃんが入ってきた。何故か泣きそうな顔をして
いる麗香ちゃん。

「どうしたの？」

「先生、梨桜ちゃん…どうしよう〜！？」

私に駆け寄ってきて抱きついた麗香ちゃん。いきなりすぎて、彼女の
身体を支えきれなくてよろけてしまった。

「笠原：梨桜ちゃんを押し倒すなんて、大胆だな」

麗香ちゃんに押し倒されたようにソファに倒れ込んでしまっている私。顔だけを横に向けて、向かいに座っている先生を見ると、私達を見て固まっている。

「梨桜ちゃん、どうしよう!?!」

私に抱きついたらまま取り乱している麗華ちゃん。肩を軽く揺さぶってみただけれど、「ヤダ」と興奮している。

「取りあえず、落ち着こう。ね?」

「落ち着けないよ!私、留年しちゃう!?!」

え!?!何でいきなり留年!?!

やっぱり私に抱きついたらまま「留年したくない!」と繰り返す麗香ちゃん。

「麗香ちゃん、大丈夫だから。落ち着いて」

背中を撫でながら言うと、麗香ちゃんは泣き出してしまった。

Flowers (4)

「笠原、退け。梨桜が潰れる」

寛貴の不機嫌そうな声がして、拓弥君が私から麗香ちゃんを引き剥がしてくれた。

私の進学よりも、麗香ちゃんの進級問題の方が緊急で重大。先生は焦った様子で麗香ちゃんに詰め寄った。

「笠原、何があったのか先生に説明しなさい！」

悲しそうに眉尻を下げる麗香ちゃん。

「…体育の先生が単位をやらないうって」

厳しい学校だから、単位を一つ落としても進級はできない。学校に来るようになってから、彼女は真面目に授業にも取り組んでいたのに、体育の授業で何があったの？

「出席日数はギリギリだが足りているだろう」

先生も腑に落ちないらしい。

赤点も無いし出席日数も足りている。どうして単位がもらえないの？

「泳げないと、駄目だった」

「なに？」

先生が眉を寄せて聞き返した。

私も先生と同じく心の中で聞き返した。“泳げないと”って、水泳？

「泳げないと単位はやれないって言われたんです」

「……」

無言になる先生。

単位をもらえない理由はそれだけ？

隣に座っている彼女の顔を覗き込むと悲しそうに泣いている。

「麗香ちゃん、泳ぐって何メートル？」

「25メートル。私、泳げないの！！」

そう言うともまた泣き出してしまった。

「笠原、おまえ泳げないのか！？」

「泳げません！！インストラクターについて教えてもらっても無理なんです！」

なに？この学校は泳げないと単位がもらえないの？

拓弥君を見ると麗香ちゃんを“可哀想に”そんな表情で見ている。

「あの熊オヤジ、1年の女の子にも言ってるのか」

「どういうこと？泳げないと単位もらえないの？」

「梨桜ちゃんがプールに飛び込んで助けた体育教師の代理が熊オヤ

ジだろ？アイツって夏は25メートル泳げないと単位をやらないうて言い張るんだよな」

拓弥君の説明を受けて妙に感心してしまった。裏を返せば、泳げさえすればいいっていうこと？

「泳げない生徒は毎年地獄だな」

寛貴が続けて言うと、先生は「そういえば、オレの時も熊の授業で25メートル泳げなかった奴は地獄を見た」ブツブツと言いながら頭を抱えてしまった。

体育の授業は受けていないからどうい先生か分からないけど“熊”先生の授業は厳しいんだ…

「私は出席日数もギリギリだから絶対に泳げないとダメだって言われたの！」

「先生は泳ぎ方を教えてくれないの？」

「教える訳ねえよ。熊オヤジはプールサイドで叫んでるだけだもんな」

拓弥君の言葉に先生と麗香ちゃんが頷いている。

教えもしないのに「泳げ」って酷くない？

「麗香ちゃん、大丈夫だよ」

彼女の手を取ってニッコリ笑うと訝しげに私を見ていた。

「梨桜ちゃん？」

やだな、そんな顔で見ないでよ。
人間は浮くように出来ているんだから、練習すれば泳げるようになるよ。

「25メートルでしょ？簡単だよ」

麗香ちゃんは私の手をぎゅうつと握り返した。

「だって私、泳げないんだよ！！」

また、泣き出しそうに眉尻を下げている麗香ちゃんに「教えてあげる」と言つと凄く吃驚した顔で私を見た。

「梨桜ちゃん、泳げるの？」

「私、水泳部だったんだけど…話したことなかった？」

「えーっ！？体育に出ないから運動はできないと思ってた！」

まあ、体育の授業に出ないからそう思われても仕方ない。でもね、本当に水泳部だったから泳げるんだよ！

「泳ぎは得意だよ。教えてあげる」

「私でも泳げるようになるのかな」

不安そうに言う麗香ちゃんの肩をポンポン叩いた。

「泳げるよ、水に浮けるようになれば大丈夫！毎日練習しよ！」

あ、なんだか楽しくなってきた。
また水に入れると思うとワクワクする。

「でも、許可を取らないといけないよね？勝手に梨桜ちゃんを借りたら怒ら…」

よし！頑張るぞ！と気合を入れようとしたら、真面目な顔をして変な事を言い出した麗香ちゃんの顔に手をかざして遮った。

「ちょっと待って麗香ちゃん！許可って…借りるって、何？」

誰に許可を取るの！？

「え、違うの？」

何か勘違いしてない！？

まさか、葵と寛貴に許可を取らないといけないとか思ってないよね！？

「違うから！」

放課後は強制的にチームに連れて行かれてるけど、許可はいらないから！

もし、許可を取るとしたら涼先生しかいないから！

「オレは許可しねえぞ」

説明しようとしている私の隣から聞こえた低い声に振り返って抗議した。

「何で!?!」

邪魔しないで!

寛貴を睨むと、『おまえはバカか?』そう言いたそうな顔で私を見ていた。

「何でって…水に入っている途中で背中を痛めたら溺れるだろ」

「本気で泳がないよ。麗香ちゃんが泳げるようにならなかつたら、単位を落として進級できなくなるんだよ?」

「先生、それでもいいの!?!」

水に入れるチャンスを逃してなるものか!

必死に食い下がると先生は腕を組んで難しい顔をしてしまった。

Flowers (5)

愁君の家で涼先生に頼み込む私と、不機嫌そうにそれを見ている二人の総長様。

麗香ちゃんに泳ぎを教える。それだけだったのに「許可しねえ」という寛貴の一言で大事になってしまった。

「涼先生、お願い」

安達先生が「主治医の許可をもらえ」と言い出して涼先生に連絡をしたら、そこから葵に話が伝わってしまった。

私が涼先生に許可をもらうために愁君の家に来たら葵に先回りされていて、何を言っても「ダメだ」としか返ってこない。

「涼先生」

「何回も同じことを言わせるな」

「葵に言ってるじゃない！」

「……」

白衣を着たまま、私と葵を交互に見る涼先生。

私が涼先生に「お願い」と言う毎に葵の眉間の皺が深くなっていく。

「おまえはまだ泳げないんだぞ、分かってるだろ？」

「分かってるけど……少しだけなら、だい「大丈夫じゃねえんだよ！」

「！」

いきなり怒鳴られて、ビクツと震えてしまった。

「そんな目で見たってダメなものはダメだ」

怖い…

こんな剣幕で怒鳴られた事は無かったから、驚いて涙が浮かんでしまった。

「…葵は、ダメしか言わない」

「溺れたら誰が助けるんだ？」

「…」

「万が一、助けるのが遅れて梨桜に何かあったらどうするんだ？—
緒に居た奴はどんな思いをする？」

「…」

葵の問い掛けに返す言葉が無い。

本気で泳ぐわけじゃないから溺れない。それくらいにしか考えていなかった。

「ごめんなさい」

そう言うと、隣に座る葵が私の頭をクシャクシャに撫でた。

葵に手を伸ばすと「仕方ねえ奴」と言いながら、ぎゅっつと抱き締めてくれた。

「泣く位なら最初からバカな事言うんじゃねえよ」

だって葵に怒鳴られたから怖かった。

「葵の言う事はもつともだし、まだ泳げる状態じゃない。でも、梨桜ちゃんの気持ちも分からなくもないよな。ずっといるんなことを我慢して窮屈な生活を送ってきたんだ」

涼先生の言葉を葵の腕の中で聞いた。

「要は、梨桜ちゃんが溺れなければいい。そうだろ？」

「5代目：主治医が何を言ってるんだよ。最初に無茶だって言ったのはあんただろ？」

寛貴が涼先生に言うと「今まで我慢してきたご褒美をあげてもいいかなって思ったんだよな」と呑気な声で言いながら笑った。

顔を上げて涼先生を見ようとすると、葵に頭を押さえつけられた。

「梨桜が諦めたのに余計な事言うなよ」

「ただでさえ我慢しなきゃいけない事だらけなのに、お前らの所為で余計に窮屈な生活を送ってる身にもなれよ」

「…」

顔を上げられないから見えないけれど、返す言葉が無いらしい二人。

「どつするって言うんだよ」

「オレの知り合いが支配人をしているスポーツクラブがある。そのスタッフを一人、専属でつけてもらえば問題無いだろ。背中を痛めたらすぐに水から上げる。泳ぎも梨桜ちゃんとスタッフが教えればどんなカナヅチでも泳げるようになるだろ」

舌打ちが二つ聞こえた。

葵から顔を上げると、涼先生が葵と寛貴に向かって「ガキ」と言つて鼻で笑っていた。

「縛り付けるだけなら誰にでもできんだよ。あんまり縛ると反発して逃げられんぞ？」

「水に入ってもいいの？」

涼先生に「おいで」と言われて、葵の腕から離れて涼先生の前に立つと「約束を守るか？」と聞かれた。

「守ります！涼先生、ありがとう！！」

「兄貴も甘いよな」

愁君が言つと、涼先生は片眉を上げてニヤリと笑った。

「あ？オレは厳しいぞ。梨桜ちゃん、約束が守れなかったら強制的に京都に送るぞ。それを忘れるな？」

「守らせればいいんだろ？」

そう言った寛貴を葵が睨んでいて、その視線に気が付いた寛貴が睨み返していた。

この二人、同じ行動を取るクセに仲が悪い。

「梨桜ちゃん、約束を守れなかったら昼間に電話したことを実行するから。忘れないで?」

ニツコリと笑いながら言う愁君。昼間って…北海道に行く話?冗談じゃなかったの?

「愁君、そっちの方がよっぽど無茶で無謀だよ」

「そお?まあ、梨桜ちゃん次第だよ」

今日の愁君の笑顔が一段と黒いような気がするのには気のせいじゃないような気がする。

背中合わせ (1)

麗香ちゃんが無事に25メートルを泳げるようになり、単位も落とさずに済んだ。

良かったんだけど、水に入れないのは寂しい。

つまらない…つまらない!!

生徒会室でテーブルに頬をつけてだらけていると携帯が鳴った。

「…はい」

『オレからの電話はつまらない?』

誰からの電話か、確認しないで出たら甘い声で囁かれた。顔が見えなくても、声だけでも王子様。

「つまらなくないよ」

『なら、良かった。梨桜ちゃん、デートしない?』

愁王子のお誘い 〃 美味しい

私はニッコリとしながら返事をした。

「する。どこに行く?」

『この前行きたいって言っていたカフェ』

紅茶とシフォンケーキが美味しいって聞いたカフェ。愁君、覚えていてくれたんだ！

「行きたい！」

『その後に買い物に付き合ってくれる？』

「うん。終わったら連絡するね？」

愁君と美味しいケーキを食べて買い物をして…楽しみが出来た。

『生徒会の仕事なんか適当に切り上げて帰っておいで』

「はい。後でね！」

定番のダージリンティーもいいけど、アールグレイティーも捨てがたい。

凄く楽しみになってきた。

拓弥君がテーブルに顔を横に向けて、まだテーブルに伏せたままゴロゴロしている私の顔を覗き込んだ。

「どうした？梨桜ちゃん」

生徒会室の大きなテーブルに突っ伏したまま答えた。

「愁君とデートするの」

「ああ、餌付けな」

その言い方にムツとして手元にあった輪ゴムを“ピン！”と拓弥君に向けて飛ばした。

「そういう言い方しないで！」

笑いながら輪ゴムをキャッチした拓弥君は、逆に輪ゴムを私に投げ返した。

「どんだけ手懐けられてんだよ」

「そういうんじゃないよ、カフェでお茶して買い物に行くんだもん。デートだよデート！」

笑いながら「浮気者」と楽しそうに言う拓弥君に“いっ！”としてやるとゲラゲラと笑い出した。

「いつまで笑ってるの！」

「梨桜ちゃんをからかうとおもしろえな」

余計悔しい…

もう知らない、早く終わらせて帰るんだから！

体を起こして、テーブルに積み上がっていた資料を整理し始めると勢い良く扉が開いた。

「喜べ東堂、北海道だぞ！」

部屋の入口に安達先生が立っていて、隣には寛貴が立っている。

「北海道？」

どうして北海道？

先生、何を言っているの？

「札幌に連れて行ってやる。懐かしいだろ！」

先生は私が喜ぶと思っているのか、ニコニコしながら私を見ていた。

「難しい顔をして、どうした？」

寛貴が私の顔を見ながら眉を顰めていたけれど、私の眉も顰められているかもしれない。

来週、札幌に行く男達がいる。

「何時ですか？」

「急で悪いが来週だ！」

悪いと言いつつ、胸を張って言う先生。

「…」

手で頬を覆って先生に背を向けた。

これって、偶然？

背中合わせ (2)

「札幌ってどういうこと」

私の代わりに悠君が聞いた。

札幌。それは旅行？学校の行事？

先生を見ると、一枚の紙を目の前に置いた。

そこには大きく『弁論大会 高校生の部』と書かれていた。

「弁論大会？」

先生と寛貴が私の向かいに座った。

紙の裏を見ても特に何か書かれている訳でもない。

何かの冗談かと思ったけれど、弁論大会の大会要項だった。

「高校生を対象にした全国大会が札幌である。ウチの学校から3名出場することになった。東堂が前に書いた作品が良かったからそれをエントリーしておいたぞ」

弁論大会？そんなの書いた記憶がない。

…いや、あつたかな？

「いきなり言われても 私、書いたことすら覚えてないのに」

「東堂、頑張れよ」

先生は言ったけれど、そんなの無理だよ。

弁論大会なんて、興味もなかったし、見た事も無い。作文を読むの

？何をどうするの！？

「梨桜ちゃん、札幌旅行楽しもうね」

隣を見るとニコニコと笑っていた。

「拓弥君も行くの？」

「出場者は藤島と大橋と東堂だ。オレが引率してやるから安心しろ」

族が弁論大会！？しかもこの二人が！？

…有り得ない

「なにをごちゃごちゃ考えてる？」

寛貴に言われてジーツとその顔を見てしまった。

総長が弁論大会：確かに進学校に通っていて、成績も優秀な生徒会長らしいけど、どんな顔して発表するんだろう？

「なんでもない」

言葉で論ずるよりも、視線と拳で黙らせる。そんな二人が弁論…
どう考えても、想像できない！

「今年は東青からのエントリーは？」

拓弥君が携帯で札幌のラーメン屋情報を調べながら先生に聞いていた。

気が早いよ、拓弥君。

「いつもの二人だ」

いつもの？…二人？

葵は札幌に行くことを『学校行事』って言ってたよね？

あの二人が弁論…葵は『うるせえ！黙って言うとおりにしろ！』
それで事足りるよ。

進学校とはいえ、どちらの学校も人選を間違ってるよ！

信じられなくて、首を横に振っていると拓弥君が椅子に座ったまま
天井を仰いだ。

「なんだよ、つまんねー！小舅2人かよ」

小舅って、葵と愁君？

拓弥君の凄い喩え方に啞然としてしていると先生は苦笑しながら頷いて
いた。

先生、肯定しちゃうんだ…

「来週だからな」

「先生、急すぎます」

抗議をすると、先生は腕を組みながらしみじみと言った。

「本当はな、この大会を辞退する予定だったんだよ」

どうして？寛貴と拓弥君を見ると、二人とも目を逸らした。
怪しい…

「出場する生徒が他校に殴り込みをかけたからなあ…さすがにまずいだよ」

それって私の所為だよね…
こんなところでも先生に迷惑をかけていたんだ。先生、ごめんなさい。

「でもな、同じように殴り込みをかけた東青が出場するって聞いたから教頭がウチも出場するって言い出したんだ。アイツらに賞を持っていかれたら悔しいからな」

殴り込みをかけた…葵と愁君の事だね。
そんなところで張り合わなくていいのに…相変わらずくだらない事で張り合っただね。

「梨桜ちゃんのいた高校ってどこ？」

拓弥君が大会要項をトントンと指で指した。

「え？どれ？」

小さく書かれていた会場の高校名を見て『やだ！』と声を挙げそうになり、慌てて目をぎゅっと閉じて堪えた。

嫌だ、行きたくない！！

会いたくない！

…会ってしまったら、どうしよう？

「梨桜ちゃん？」

拓弥君に呼ばれて顔を上げた。

何の話をしてた？…ああ、私が通っていた学校かどうだった。

軽く息を吐いて気持ちを落ち着かせた。

「この学校は違うよ。ここにタカちゃんが通ってるよ」

タカちゃんには札幌に行くって知らせた方がいいよね。

今日の夜に電話しようと思っていると、悠君がガタガタとテーブルを揺さぶり出した。

「オレも札幌に行きてえ！！」

「残念だな悠。いい子で留守番してるよ？」

「拓弥さん、土産買ってきて」

2人のやりとりを見て笑った。

私を取り乱しそうになったこと、気づかれてないよね…

『資料を戻して来る』

そう言って資料室に逃げてきた。

「はあ…」

書棚に額を当てて、ため息をついた。
よりによってあの学校が会場なんて…これは、逃げ出して来た事への報いなのだろうか？

「うう…」

唸ってみたところで変わらない。

懐かしい街に行くことは嬉しい。でも、会いたくない。

矛盾している思いを持って余している。

「脚立に登るなって言ったよな？」

何時の間に来ていたのか、寛貴が私を睨んでいた。
今の、見られていた？

「そんなに鈍くないって言ったでしょ」

口答えする私に手にしていた資料を机に置き、長い腕を私に伸ばした。

「降りてこい」

脚立を一段ずつ降りると、前のように途中で脇に手をかけられて床に下ろされると、そのまま引き寄せられた。

葵とは違う男の人の腕の中。

この腕の中に何時の間にか馴染んでいる私。

「行きたくないのか？」

大きくて、温かい。今はココにいるのが落ち着く。

「…なにが？」

何の事を聞いているのかわかったけれど、気付かないふりをしてしまった。

「札幌に決まってるんだろ。今もさっきと同じ表情してるぞ」

肩に手をかけて私の顔を見ようとしている寛貴から目を逸らした。きつと情けない顔をしている。こんな顔、見られたくないよ。

「…少しだけ、こうしていてもいい？」

寛貴の肩口に額をつけ、背中に手を回してぎゅっつとしがみつくと、あやすように背中を撫でられた。

背中合わせ (3)

葵じゃない人の腕の中にいるのに安心している。
今までこんなこと考えられなかった。

「札幌で何かあったのか？」

「札幌には行きたいけど、会場の学校にはあんまり行きたくない」

ごまかしても言わされるだけだから正直に言った。

「理由は？」

「ケンカをして気まずい子がいるの」

そう言い切ると「そうか」と返事が返ってきた。

嘘じゃない。気まずい子がいるだけ

ケンカじゃないけど

「気まずいのは男か？」

ストレートに聞かれて、寛貴の背中に回していた手をギュッと握ってしまった。

「男と女。人数が多い学校だから会わないかもしれないし 大丈夫」

会ったらどうしよう。

それしか考えていなかったくせに、心にも無いことを言っている私。強がりと言える位に落ち着いたらしい。

ポケットに入れていた携帯がメールの着信を知らせた。

「愁君かもしれない」

寛貴から体を離してメールを見ると、やっぱり愁君だった。遅い私を心配している。

早くおいでって言われていたのに遅くなってしまった。

「三浦？」

「うん、約束してたのに遅くなっちゃった」

もう一度、寛貴に抱き寄せられた。今日はこの腕に救われたような気がする。

「送る」

「…」

「…」

カフェで向かい合っている私と愁君。

腕を組み、長い脚を組んで私をじっと見ている。

「自分が今、どういう顔をしているか分かってる？」

「…分かってるよ。腑抜けた顔してるんでしょ？」

そう言うと、クツと笑い紅茶を一口飲んだ。

この王子様に誤魔化しは効かない。

「オレはそこまでは言っていないよ」

ティーカップに紅茶を注いでくれながら私をチラリと見た。

その長し目が凄くカッコ良くて、憂鬱だった事も忘れて見惚れてしまっそう。

「学校で何かあった？」

「ないよ」

追及を止めてくれない愁君から視線を外して紅茶を飲んだ。
美味しい…。

「…だよな、藤島が荒れてなかった」

「愁君、その判断基準おかしいよ」

フワフワのシフォンケーキを口に入れると、愁君が笑っていた。

「美味しい？」

ケーキをもう一口、口に入れた。紅茶とケーキに罪は無いから、美

味しく頂く。

「うん、連れてきてくれてありがと。…そうだ、愁君が札幌に行くのって、コレ？」

先生にもらった大会要項をテーブルの上に広げると、愁君は笑いながら頷いた。

「そつだよ。紫苑は不参加だつて聞いたけど？」

「急ぎよ出場することになったつて先生に言われたの」

「会つた時から眉間に皺が寄っていた理由はそれ？」

指で眉間を伸ばしたけれど「遅いよ」とまた笑われてしまった。

「札幌に行きたくないっていう訳じゃないよね」

「…」

「梨桜ちゃんて、今まで男と付き合つた事ある？」

今日、愁君に会つたのは間違ひだったかも。どうしてここまで私は見透かされてしまうんだろうか？

「…」

「葵には言わないよ。言つたらオレにとばつちりが来るからね」

言つまで引き下がってくれなさそうな愁君。「本当に葵に言わない

？」と聞くと、王子様は「言わないよ」と約束をした。

「一応、ある」

「一応？」

「うん。そういう事にしておいてくれる？」

ティーカップを持ちながら、愁君を窺うと「しょうがないな」と言いながら自分も紅茶を飲んでいた。

「オレ、梨桜ちゃんと札幌に行くの楽しみにしてるから」

そんな顔で言われたら“行きたくない”なんて言えないよ。

「ねえ、愁君」

頬杖をついて、改めて愁君を見た。
爽やかな笑顔と甘い雰囲気の子王様。

「なに？」

「愁君の彼女になつた人は幸せだね」

何が欲しいか、何を考えているか、常に先回りをして甘やかしてくれて…

こんな風に甘やかされたら蕩けてしまふかもしれない。

「彼女になつてみる？」

ほら、こじやって甘やかしてくれ。でもね、ちゃんと分かってるよ？

「私は愁君の好みじゃないでしょ？」

「オレも命は惜しいからね」

「愁君、そういう冗談はイヤ。笑えないから」

背中合わせ (4)

「梨桜」

寛貴に起こされてぼーっとしていると、目の前に先生の顔が出てきた。

「東堂、余裕だな」

「…」

先生の皮肉も寝起きの頭には効き目が無い。

“ 弁論大会 ” 初体験の私に『 参考になるから読みなさい 』と渡してくれた去年の大会で発表された作品を読んでいたら、お約束通り寝てしまった。

飛行機の中でも、空港から札幌までの移動中もしっかりと寝てしまった。

「先生は期待しているからな！」

やけに力のこもった言葉をかけられて、気の抜けた愛想笑いを返してしまった。

「梨桜ちゃんの荷物、それだけ？少なすぎないか？」

私が手にしている荷物は小さなバックと制服が入っている袋だけ。

「葵と一緒になの」

拓弥君に聞かれて、迎えに来ているはずの葵を捜した。
同じ飛行機に乗れなかった私は、葵に荷物を託し葵が乗った便から
数時間後のフライトで北海道へやって来た。

改札口の向こうに立っている葵を見つけた。
今までは葵がこの改札を抜けて、私があそこに立っていたのに…今日
は逆だね。

葵に駆け寄ると、「走るな」と小突きながら私の荷物を持ってくれた。
た。

「途中で気分が悪くならなかったか？」

「ずっと寝ていたから大丈夫だよ」

葵に、右へ左へと誘導されてタクシープールに向かっていると「仲
がいいな」と安達先生が感心していた。

「一度ホテルに荷物を置いて制服に着替えてレセプション会場に行
くぞ」

先生の言葉に小さく息を吐いた。

会ってしまったその時は…覚悟を決めてやってきた札幌。
…とうとうここまで来ちゃった。

目的地に着いてタクシーを降りた。
葵の隣で大きな校舎を眺めていると、先に着いていた寛貴が私の隣に立った。

「マジでデカイ学校だな」

葵の言葉に頷いた。本当に大きな学校。

タカちゃんから、1学年だけでも紫苑の倍の人数が居るって聞いた。
行きたくないな…覚悟を決めたのに、目の前にすると怖気づいてしまっ
まう。

「梨桜ちゃん、もしかして緊張してる？」

拓弥君に聞かれて慌てて首を横に振った。

葵に感付かれたくない。知られたら…きっと葵はキレてしまうから。

「ここからは学校毎の行動だ。行くぞ」

寛貴に背中を押されて一歩前に出ると「そんな顔をするな」と小さな声で言われた。気を取り直して後ろを振り返り「後でね」と葵と愁君に手を振って会場へ向かった。

会場には大会に参加する学校が集合していて賑やかで、男子生徒も、女子生徒も真面目そうな生徒ばかりだった。

指定された席に座ると、露骨に視線を向けられた。

殆どが私の両隣からイケメンに挟まれている私へと動き、いつも通

り“なんであんたが”と甘い視線から鋭い視線へと切り替えられた。

大会を主催している会社の挨拶が終わり歓談の時間に移った途端、女子高生が私達に向かって突進してきた。

「あの、紫苑学院の方達ですよね？」

あつという間に私は隅に追いやられ、寛貴と拓弥君は女子高生に取り囲まれてしまっている。

すぐ傍を見れば葵と愁君も女子高生に取り囲まれている。

ここにいる子供達はまさか彼等が不良チームの幹部だなんて思っていないだろうから強気だ。

珍しい物を見れた気分では女の子まみれになっている4人を観察することにした。

葵と寛貴が露骨に嫌な顔をしているのはいつものことだけど、女の子の許容範囲が広い拓弥君と、いつも優しい愁君が群がる女子に顔を引き攣らせている。

明らかに嫌だと顔に書いてある4人を前にしてもひるまない彼女達。…女子高生パワーって凄い。

葵と目が合って『がんばれ！』と手を振ったら、すぐに『ふざけんな、助ける』と返って来たけれど、この群れに飛び込んで行く勇氣は無い。

自力で脱出して下さい。

「東堂、東堂じゃないか!？」

急に聞こえた声に驚いて呼ばれた方を見ると、久しぶりに見る顔があった。

背中合わせ (5)

屈託のない笑顔を前にして『久しぶり』の一言が出てこなかった。

「やっぱり東堂だ！」

笑おうとしたけれど、少しだけ引き攣ってしまった。

「雄太君」

笑顔で駆け寄ってくる雄太君の後ろに誰もいない事を確認してホツとしながら、葵達も傍にいない事を確認した。

「久しぶりだな！東京から来たのか？」

彼と会うのは、中学を卒業して以来だろうか？

あの頃よりも背が伸びて男っぽくなったね。

「うん」

前と変わらずに、笑顔で話しかけてくれる中学の時のクラスメイト。久しぶりの再会に喜んでくれていた彼には悪いけど、私は早くこの場から立ち去りたかった。

「元気だったか？東堂一人なのか？」

女子高生の群れをチラリと見てから雄太君の方を向いて首を横に振った。

葵達は女の子達を振り切ろうとしている。

「同じ学校の人もいるけど、女の子に捕まってるの」

「え？」

「一緒に居ないと心配するから。中学の友達と一緒に居るって伝えてくるね」

雄太君は少し考えていたようだったけど、頷いてくれた。

ごめんね。

覚悟はしたつもりだけど、急すぎて心がついていかないの。ここにいたら会ってしまいそうだから…もう少しだけ時間が欲しい。

「雄太、急に走って行かないでよ！尚人ついたわよ！」

葵達の所に行こうとしたら、良く通る声の女の子が私の行く手を塞いだ。

ああ 私って、本当に運がないなあ…。

「…梨桜？」

私には気づかないで！そう思ったけれど、彼女は私を見つけて声をかけた。

もう少しだけ、そう思ったけれどそれが許されないなら仕方がない。覚悟を決めて声をかけた彼女の方を向いた。

「久しぶりだね、由利ちゃん。尚人君も久しぶり」

葵が見ていたら『変な顔』って言われるような気がする。自分でも

引き攣っているのが分かったけれど笑顔を作った。

「梨桜、やだ 東京に行ったって聞いて 体は大丈夫なの？」

由利ちゃんの後ろにいた尚人君が私をじつと見ていた。

雄太君程じゃないけれど、久しぶりに見た…男っぽくなったと思うけど、あまり変わってないね。

「挨拶もしないで引越してごめんね」

「梨桜」

尚人君に名前を呼ばれて顔を上げると、視線が合った。

ねえ、『どうして何も言わないで東京に行った？』今もそれを聞きたいと思ってる？

私が尚人君から目を逸らせないと、苛立ったように由利ちゃんが一步前に出てきた。

「私、梨桜にあや「由利！」」

由利ちゃん言葉を尚人君が遮った。

彼女は悔しそうに唇を噛み、私を睨んだ。それを見ていた雄太君が眉を顰めている。

「謝って欲しいなんて思っていないよ」

心から悪いと思っていない謝罪はいらない。

「都合がいいって思うかもしれないけど、ちゃんと梨桜と向き合

いたかったの」

尚人君は由利ちゃんを信じられない、そう言っているような目で見ていた。

私も信じられないよ…私がいって言っているのに

由利ちゃんが欲しい言葉をあげるから、お願いだから友達フリをするのは止めて…

「由利ちゃんが気に病むことではないんだよ？由利ちゃんと尚人君が仲良くやってくれたら私は嬉しいよ」

由利ちゃんに笑いかけたけれど、彼女の視線は私から大きく逸れていた。

相変わらずだね…溜息をついて彼女を見ると、逸れていた視線が私に戻った。

「由利ちゃん、聞いてた？」

一体何を見ているのか、目を見開いてこちらを見ているけど、私の話は耳に入っていないらしい。

がっかりする…。

「おい…」

突然聞こえた不機嫌そうな声。

カッコイイ男の子に目がない由利ちゃんと、纏わりつかれるの大嫌いなこの男…面倒な事になりそうな気がする。うっん、絶対に面倒な事になる！

どうやってこの場から離れようかと考えていたら、長い腕が首に巻き付いた。

「眺めてないで助けるよ」

「珍しい光景だったから、つい……」

「つい、じゃねーよ。梨桜のせいで酷い目に遭ったぞ」「薄情者」

葵だけじゃなく、寛貴からも責められて額を小突かれた。

「私のせいじゃないでしょ……葵、苦しいよ……」

軽く首を絞められて、苦しくて腕を叩いた。

「梨桜ちゃんの友達？」

拓弥君が由利ちゃんに笑いかけると彼女は頬を赤らめ、尚人君は冷めたい目でそれを眺めていた。

背中合わせ (6)

「梨桜ちゃん、紹介してくれる？」

困り果てている私を助けるように愁君が声をかけてくれた。

「あ、うん。この3人は中学の同級生で、遠藤 由利ちゃん、坂本 尚人君、高橋 雄太君。葵、いい加減離して！」

3人は私の周りにいるイケメン幹部を見ていた。尚人君は私を羽交い絞めに行っている葵をジッと見ていた。きっと葵も睨み返すように彼を見返しているに違いない。

「こんにちは」

にこやかに笑う彼女は外向きの顔だった。さっきまでのしおらしい顔はどこへいったの？

漸く離れた葵に絞められた首をさすりながら今度は尚人君達に彼等を紹介した。

「それで、こっちが私と同じ学校の藤島寛貴君と大橋拓弥君。こっちは違う学校だけど生徒会で交流している三浦愁君と宮野葵…」由利です。梨桜とは仲良しでいつも4人で遊んでたんです！」

葵は私の弟だよ。と説明しようとしたら由利ちゃんに遮られた。本当に、彼女は今でも変わらないね。

満面の笑みの彼女とは対照的に寛貴と葵が不機嫌そうな顔をしてる。さっきからずっとこの調子。

「梨桜、ちよつと来て！」

由利ちゃんに腕を引かれて彼等から離れた。

「どづしたの？」

「ちよつと！何なのあのイケメン達！全員友達？」

噛みつかれそうな勢いの彼女に軽く身を引きながら「そつだよ」と返事をする、興奮しながら「やっぱり東京はレベルが違うわね」と独り言のように呟いていた。

彼女に葵との関係を言っておいた方が良いのか、この興奮ぶりを見ると言わない方が良いのか…
悩みどころだね。

「アド知りたい！」

顔を近づけて力一杯、言われた。

気持は分かるけど、それをやったら私の命は危険にさらされるからできないよ、ごめんね。それに、由利ちゃんは…

「由利ちゃん、尚人君と付き合ってるんじゃないの？」

そう言った途端、意味深な顔で私を見て笑った。

「まあね。でも、秋の修学旅行で東京に行った時に遊べるかもしれないでしょ？」

そういう発想は前から変わってないね。苦笑いが浮かんでしまった。

だから、心のこもらない謝罪はいらないって言うんだよ。

「私からは言えないけど頑張ってるね」

「え、梨桜協力してくれないの？ まあいいわ、宮野君超タイプ！
彼女いるのかな、知らない？　ねえ、まさか梨桜と宮野君って付き合ってるじゃないよ？」

いきなり飛躍する彼女の話についていけなくて作り笑いが消えてしまった。

「付き合ってるじゃないよ。葵に彼女がいるかどうかは知らない」

修羅場は目撃したことあるけど。

そう言えば葵の好きなタイプってどんな子なんだろう？

「まあいいわ、明日もあるし。きっと話すチャンスもあるわよ」

明日も会わなきゃいけないんだ。がっかりした気分を顔に出さないように気を付けながら由利ちゃんを促した。

「皆のところに帰ろうよ」

会場に戻ると、さっきよりも機嫌が悪くなっている葵と寛貴が居た。何があったの？

愁君を見たけれど、小さく笑うだけで答えは教えてくれなかった。

「梨桜、行くぞ。安達が待ってる」

寛貴に腕を掴まれてその場を立ち去ろうとすると、葵が私の肩に手

を置いて引き留めた。

「待て。梨桜、矢野に連絡しろ」

どうして今タカちゃん？

「葵？」

「ああ、そうだな。梨桜、ここに呼べ」

寛貴が葵に同調した。

この二人が同じことを言い出す時って、私にとって良いことが少ないような気がするんだよね…

オレ様な大男二人に挟まれてしまい、愁君に助けを求めると「オレも矢野君に会いたいから電話して」と笑顔で言われてしまった。

由利ちゃん達が私達のやり取りをじっと見ていたけれど、二人ともその視線を無視して私に詰め寄った。

「早くしろ」

「梨桜？」

葵と寛貴に急かされてタカちゃんの番号を押すと葵に携帯を奪われた。

「ちよつと、え？」

葵は「梨桜を逃がすなよ」そう言つと携帯を持って離れた場所に行つてしまった。

何？何があったの！？『逃がすな』なんて言われれば逃げたくなくなるのが普通だと思っただけ。

……逃げてもいい？

レセプション会場の出口を探すと、がっしりと首に腕が回された。
もう！それはイヤ！！

「逃げられると思ってんのか？」

背中合わせ (7)

寛貴を見上げて抗議すると、私を見下ろして眉を顰めた。
私に怒っているの?…どうして?

「…説明してくれないなら帰る」

「いいからここでおとなしくしてろ」

腕を解こうとすると、腕に力が込められて逃げられなかった。

「寛貴! ヤダっ」

もがいても腕は解けなくて、ジタバタしていると愁君に笑われた。
助けてよ!!!

「…何してんだおまえら」

戻って来た葵から冷たい視線を浴びたけれど、そんな葵を見て由利
ちゃんが私達に近づいた。

「梨桜、一緒にご飯食べない? 良かったらお友達も一緒に」

由利ちゃんの言葉に尚人君の眉が顰められた。
そんな顔、しないでよ。私だっけ行きたくない。

「一緒に食べよう? 私、梨桜と仲直りもしたいの。わだかまりが残
ったまま梨桜が東京に行っちゃって、後悔したんだ」

今、この場でそれを言うんだ…由利ちゃんは本当に変わってないね。意味深な発言をしたせいで、皆が私を見ていた。

「東堂！」

「タカちゃん！？」

名前を呼ばれて吃驚した。

寛貴の腕の中で、目いっぱい首を捻って声のする方を向いたら、ジヤージ姿で髪の毛が濡れているタカちゃんがいた。

「東堂、コイツ何とかしてくれよ。3分で来なかったら埋めるって言いやがった！」

葵を指差しながら膝に手をつけて、荒い息を繰り返しているタカちゃん。もしかして、クラブ活動の途中だったんじゃないの？

「葵！」

「やればできんじゃないか」

「そうじゃないでしょ！何考えてるの！？」

呼吸が整ってきたタカちゃんは、顔を上げて私達を見ると顔を強張らせて私を見た。

優しいタカちゃんは『大丈夫か？』目でそう言ってくれていた。

タカちゃん、大丈夫じゃないかも。…どうしよう？

「帰るぞ」

葵が言うと、寛貴が腕を解いた。
二人の中では通じ合っているらしい。

「え？まだ途中だよ」

葵は私の腕を引きながら寛貴を見た。

「おまえ、矢野と面識あったよな」

「ああ。梨桜の事は安達に伝えておく」

大男二人が私の頭の上で会話をしている。前にも同じことがあったよな？

「頼む。愁、後の事頼んだぞ」

「了解。梨桜ちゃん、後でね」

私の分からない所で話を通じ合っているこの男達、いつもの事だけど…どうして私を無視するの…！

「梨桜ちゃん、後で抜け出して遊びに行こうね」

拓弥君に手を振られると葵の腕が私の腰に回された。

「タカちゃんに変な事したら許さないからね！」

私の言葉にギョツとした顔をするタカちゃん。「本当に許さないんだから！」と繰り返して言うと、寛貴が“早く行け”というように

手を振った。

「またね、梨桜ちゃん」

愁君にも手を振られ、葵に引きずられるようにしてレセプション会場を後にした。

「葵、携帯返して」

「今は必要無いだろ」

タクシーを待っている間、葵に携帯を返せと抗議中。

タカちゃんに連絡をした私の携帯を葵は何故か返してくれない。

「円香ちゃんから連絡が来るかもしれないでしょ？返して！」

「うるさい。没収だ」

「梨桜！」

葵に掴みかかって携帯を奪い取ろうとしていると名前を呼ばれた。その声に駆けだしたかったけれど、我慢をして振り返ると尚人君と由利ちゃんがいた。もしかして、わざわざここまで来たの？

「一緒にご飯：食べよ？」

チラリと葵を仰ぎ見ると、やっぱり不機嫌そう。私の視線に気が付いて葵も私を見下ろして『絶対ヤダ』と目が言っている。

「ごめんね、都合が悪いんだ」

「え〜…梨桜と話がしたかったのに」

嘘ばかり…葵を狙ってるんでしょ？

葵がまた尚人君を見ていた。葵の気が逸れているうちに…
胸ポケットに入っていた私の携帯を取り返すと「梨桜！」と怒ったけれど、自分の携帯を取り返して何が悪いの？

「梨桜と宮野君で友達。だよな？凄く仲がいいんだね」

由利ちゃんが上目遣いに言う様子を私も葵もシラケた気持ちで見ている。
いた。

葵は何て答える？私は葵に合わせるよ。

「オレと梨桜は友達じゃねえよ」

「梨桜は付き合っていないって」

「そんなのあなたに教える義理はねえだろ？オレに構うな、うぜえ」

葵の冷たすぎる言い方に、由利ちゃんはビクツと肩を震わせた。

そんな言い方したら女の子は泣いちゃうよ。

「泣いたからってどうなるんだよ？鬱陶しい女だな」

目に涙を浮かべている由利ちゃんに吐き捨てるように言う葵。

冷たい、酷過ぎるよ？

「葵！」

「シラケた。ホテルに行くぞ」

窘めようとする私を強引に引っ張り、漸く到着したタクシーに私を押し込んだ。

「葵、あんな言い方は酷いよ」

私に続いてシートに座った葵に言うと、私を見て鼻で笑った。

「おまえは嘘泣きかどうかも見分けがつかないのか？」

そう言われて後ろを振り返ると、タクシーを睨んでいる由利ちゃんがいた。

葵、見抜いてたの？

「梨桜」

一気に疲れを感じてしまい、シートにもたれるとピタリと私に視線を当てたまま、ニヤリと笑った。

この笑い方、すっごく嫌な感じ。タクシーから降りようかな…

「なに」

「洗いざらい、吐け」

運転手さんに『停めて下さい！』と言おうとしたら、大きな手で口を塞がれた。

「オレに隠し事ができると思つなよ。」

「……」

.

背中合わせ (8)

「…」

『吐け』って言われても、何を言えればいいのかわからなかった。尚人君と向き合う覚悟はしたけれど、葵からの追及は考えてなくて…葵の顔を窺い見ると、私から目を逸らさずにジッと見ていた。

言うまで、解放してもらえないかもしれない。

「…さっきの男と付き合ってたんだな」

葵の一言が信じられなかった。どうして知ってるの？

「誰が言ったの!？」

「本人」

尚人君が言ったの？

どうしてわざわざ言う必要があるの？今は由利ちゃんと付き合っているんだから言う必要ないでしょう？

私が由利ちゃんとあの場を離れた、ほんの少しの間に何があったの？

「嘘じゃないんだな？」

真剣な顔で念を押されて、白状せざるを得なくなった。

「うん」

愁君に“一応”って言ったけれど、私は尚人君と付き合っていた。

「オレは聞いてない」

さっきまでのドスの利いた声とは打って変わって拗ねた声を出した。聞いてないって…言っていないんだから当たり前でしょ。

「言ったら怒るでしょ」

「当たり前だ」

なにが『当たり前だ』よ、シスコンめ！

自分に彼女がいるかどうか今まで教えてくれた事なんか無いクセに。葵は本当にズルいんだから。

「長く付き合ってたのか？」

「短かったよ」

ズルズルと葵にもたれた。「重い？」と聞くと、いつもなら文句を言うのに「別に」という言葉が返ってきた。

「アイツが、別れたつもりはない。って…」

葵の肩に頭を乗せて目を閉じた。

そんなことまで言ったんだ。あんな場所であんな会話してるのよ…呆れる。尚人君も尚人君だ、何を考えてるの？

「私には尚人君への気持ちは無いよ。それは彼にも伝えた」

「何があった？」

ホテルの手前でタクシーを降りて、緑が綺麗な公園に寄った。部屋の中で話したら暗くなりそうだから、少しでも明るいところで話しかかった。

「これしかなかったから我慢しろ」

ベンチに座って木を眺めていたら渡されたのはオレンジジュース。これも好きだよ、ありがとね葵。私の隣に座った葵にもたれた。

「…尚人君とは中学3年の秋から付き合ったの。『付き合っ
て欲しい』って言われて嬉しかったな」

家の近くにもこういう公園があればいいのに。茂っている緑を眺めながらオレンジジュースを飲んだ。

「でもね、受験勉強が忙しくて、尚人君と話す機会が無くなってきて…いつの間にか尚人君と由利ちゃんが親密な関係になってた」

葵がムスツと怒ったまま私を見ていた。

正直に話したのに…

「簡潔過ぎんだよ」

「ダラダラしてるの嫌いでしょ？要約してみました」

詳しく話したら、尚人君を殴りに行きかねないからね。

東京に帰ってから話しても遅くは無いか。って思ったんだけど……
「オレに誤魔化しが効くと思ってんのか？辻褃が合わねえだろ！」
と怒られてしまった。

そんなの……辻褃の合う事ばかりじゃないよ。葵だって分かるでしょ？

「おまえ、志望校にはA判定が出てただろ。余裕だつたくせに、何が『受験勉強が忙しい』だよ？他の女と親密にするような男だって受験勉強が忙しいわけないよな？」

心の中で葵の真似をして“チッ”と舌打ちをした。

男のクセに細かい！！

「……怒らない？」

そう聞いたら思いっきり眉間に皺を寄せた。

「ああ」

「嘘だ、もう怒ってる！」

「梨桜、いい加減にしろよ？」

「……」

葵と睨み合って、同時に溜息をついてしまった。

「私、尚人君とキス以上の事ができなかったの。でも、私の志望校

が自分と違っつて知ったら尚人君は焦ったように関係を進めようとしたの」

葵の顔から表情が消えてしまった。

私からこんな話を聞かされる日が来るなんて思わなかったよね？ごめん、と思いつつ話を続けた。

「どうしても受け入れられなくて、受験勉強を言い訳にして彼から逃げていたの。由利ちゃんは今人君が好きだったみたいで、いつの間にかそういう関係になつてた。私から別れたいって伝えただけど、納得してくれなかった」

「なんだよ、それ…」

『ごめんね、悪気はなかったの』それが彼女の口癖。あの時もそう言っつて尚人君を誘惑して奪つていった。

葵にもたれたまま見上げると「どうしてオレに言わなかった？」そう言っつて私の目元を親指で撫でていた。
私、泣いてないよ。大丈夫だよ？

「葵に相談したら…別れさせてくれた？」

「何だつてしてやる」

優しいね。

葵の背中に手を回してぎゅっつと抱きついた。

「葵」

「ん？」

「私、尚人君と向き合う覚悟をして札幌に来たの」

抱きついたまま顔だけを上げて葵を見ると、不満そうな顔をしていた。

「だから、尚人君を潰そう。なんて思わないでね」

「…」

無言で目を逸らした。やっぱり潰そうって思ってたんだ？葵も充分、分りやすいよ。私の事を馬鹿にできないんじゃない？

「絶対にダメだよ。邪魔しないでね」

背中合わせ (9)

公園からホテルに戻り、葵にもう一度『尚人君に手を出さない』と約束させた。

「スパに行ってくるね」

「のぼせるまで入るなよ？」

「はいはい」

相変わらず過保護な葵に返事をして部屋を出た。

一人でゆっくり考えられる場所は最上階のスパしかなかった。

…まだ時間が早いからなのか、たまたまなのかスパには誰もいなくて貸切状態だった。

「疲れた…」

移動中にぐっすりと眠って体力を温存していたのに、使い切ってしまった気がする。

気持ちいい、お風呂大好き。

目を閉じると尚人君の顔が浮かんだ『何でだよ』尚人君の目がそう言っていた。

何で？

言いたくなかったの。私は卑怯だから逃げたんだよ。

『オレ、東堂の事が好きだ。付き合っただけだ』

中学3年の秋に告白された。尚人君の事は嫌いじゃなかったし、話をしていて楽しかったから告白を受けた。

『梨桜、って呼んでいいか？』

そう言われて頷いて、彼から『尚人』って呼んで欲しいと言われたけど、どうしても出来なくて喧嘩になってしまった事もあった。

あの時の私は唇を重ね合わせるキスをするだけで精一杯で、ゆっくりとしか進むことが出来なかった。

「…好き。だったよね…」

好きで尚人君と付き合っていたのか…今思うと分からなくなっちゃった。

お湯の中で両腕を伸ばした。

葵には言えなかった本当の事。葵だから余計に言えない…

受験生にとって冬は大切な時で遊んではかりいられない。

尚人君は私が同じ高校に進むと思っていたみただけ、私は違う学校を志望していた。

志望校が自分と違う。それを知ってからの尚人君は焦っているように見えた。

『オレの事が好きならいいだろ』そう言っただけで関係を先に進めようとしたけれど、どうしても受け入れることができなかった。

彼から伸ばされる手をどうやって拒もうか、そればかり考えるようになって、彼の近くににいるのが怖くなった私は理由を作って彼から

逃げていた。

そんなとき、尚人君と友達の会話を偶然聞いてしまった。

『尚人、おまえひでえ……』

『おまえを羨ましいと思っっている奴は大勢いるのに我慢ができないなんて、バカだな』

気分転換をしよう。そう言っついてもとは違う場所でお弁当を食べていた体育館裏。

そこには私だけじゃなく、タカちゃんと円香ちゃんもいた。

ボソボソと聞こえてきた会話に、最初は何を言っているのか分からなかったけれど、円香ちゃんとタカちゃんの表情を見ていたら私にとって良くない話なんだって分かった。

『キス以上させないなんて、東堂も固いよな』

『まあ、やらせてくれる由利に靡いたおまえの気持ちが分からなくもないけど？おまえ言っつたよな？』キス以上させない女なんて『つて』

『るせえな』

『…で？由利とやったけど東堂とはどうすんだよ』

『別れたくない』

いつも鈍いつて言われている私だけど、尚人君と友達が何を言っつていいのか理解できた。

『由利はどうすんだよ』

『…』

『由利がそんなに良かったのか？』

気がついたら、円香ちゃんに抱きしめられていて、タカちゃんは凄く怒っていた。泣いている彼女を見ていたら、泣けなかった。

あの後、しゃくりあげる円香ちゃんの声に尚人君達が気付いて、私を見た尚人君の友達は気まずそうにしていた。

『梨桜、ごめん』謝る位ならあんなこととして欲しくなかった。裏切られたと思って悲しかったし辛かった。

でも、何処かで安心して私もいたんだよね…

これで逃げ回らなくてもいい、触れられなくてもいい。って考えている自分に気がついた時に『もう、終わりにしよう』そう伝えたら、『別れたくない』その返事が返ってきた。

「あ…のぼせる」

背中合わせ (10)

スパから出て部屋に戻ると葵が「遅い！」と怒っていて、いつの間にか寛貴達が部屋にいた。

「お帰り〜。って言いたいんだけどさ、梨桜ちゃんと宮野って同じ部屋なのか!？」

「そうみたいだね」

ホテルでチェックインしようとしたら、葵からカードキーを渡されて、部屋に入るとツインルームだった。

荷物も一つに纏めてきちゃったし、一人で寝ていて夜中に目が覚めると凄く怖いから葵と一緒に部屋で良かった。

そう思うんだけど、拓弥君は“信じらんねえ”そんな顔をして私を見ている。

「どうしたの？拓弥君…いつもの事だよ？」

「宮野！おまえ」

「うるせえ、変態妄想野郎」

訳の分らない言い合いをしている二人を無視してバスルームで着替えた。

「梨桜ちゃん、夕食を食べに行こうか。何が食べたい？」

「久しぶりに来たから、私は「肉、肉だ。梨桜、案内しろ」

せつかく愁君が聞いてくれているのに葵に邪魔をされた。
今日の私は魚の気分だったのに…

「オレも肉がいい。梨桜ちゃん、美味しい店に連れてって」

男の子ってお肉が好きだよね…だからそんなに大きくなるんだね。
ツインルームに大男が4人…凄い圧迫感だよ。

見ているだけでお腹一杯を通り越して気持ち悪くなりそうだよ。

「良く食べるね」

「普通だろ」

『肉』と言われて、タカちゃん達と良く行ったお店に連れてきたんだけど、その食べっぷりに呆れた。

何時もの事と言ってしまえばそれで済むかもしれないけれど、焼か
れているお肉と、これから焼くお肉の皿、空になって積み重なって
いるお皿を見ると…気が遠くなりそうだった。

羊を一頭食べ尽しちゃいそうな勢いだよ…

「梨桜、もう少し食べる」

寛貴が皿にお肉を乗せた。自分の胃袋と私のを一緒にしないで！

「何するの…」

「野菜も食べるよ」

「葵もやめて」

両脇の葵と寛貴が食べると凄む。

食べる勢いが衰えない彼等を横目に見ながらメニュー表を取り、いつも頼んでいたメニューを探した。

あった：お肉は見えているだけでお腹一杯。私はいつもの…

「すみませーん」

店員さんと呼ぶとお兄さんが来てくれて：「鮭おにぎりとかかわさを一つずつお願いします」

メニューをパタン、と閉じると「あれ？」と頭の上でお兄さんが言った。

「東堂？」

見上げると、エプロンをした雄太君がいた。

「雄太君？」

ニコニコ笑っている雄太君。エプロンが似合っていた。

「オレここでバイトしてるんだ」

「そうなんだ、頑張ってるね」

久しぶりに普通の高校生の男の子を見たような気がする。

普通はこうだよね？」

放課後は一生懸命アルバイトして、学校にもちゃんと行って

「おにぎりとかこわさ”って…それだけか？」

「お肉はもう十分食べたから」

「裏メニューだけど魚もあるぞ」

「ホント？食べたい！」

雄太君は「お任せだけだな」と言い、厨房にオーダーを通してくれた。

「東堂、ちよつといいか？」

直ぐに戻って来た彼に手招きされ、葵達の視線を浴びながら雄太君に着いてお店の外へ出た。

「今日、もしかしたら尚人達が来るかもしれない。大丈夫か？」

尚人君達って由利ちゃんも来るの？

それは、嫌だな…

「大丈夫だよ」

そう言ってみたけれど、ちゃんと笑えてないような気がした。

「由利のこと、ごめんな あいつ東堂に嫉妬して張り合ってるんだ。中学の時から全然成長してないんだ」

雄太君が気にすることじゃないのに、優しいところも変わってないね。

「ありがとう、雄太君」

「尚人もさ ずっと後悔してる。あいつ、東堂が転校したって聞いてすげー落ち込んだ。今日会えたのも嬉しかったみたいだけど、友達の名前を呼び捨てにしてたろ？あれを見て尚人落ち込んだ」

「なんで？葵と寛貴のこと？」

「そう、それ。付き合っけていても自分には君づけだったって」

未だに気にしているんだ…葵は別として、寛貴には脅されて凄まれて、名前を呼ぶようになったのに。

「尚人の事、許せないか？やり直すことは出来ないのか？」

「雄太君、許すとかそういうんじゃないの。尚人君との事はそういう風に考えられないよ」

「そっか…呼び出してごめんな」

「ううん、雄太君は友達思いたね」

雄太君は、尚人君と由利ちゃんの事を知った時に本気で怒ってたよね。自分の事じゃないのに相手の為に悲しんだり怒ったり…尚人君は友達に恵まれてるね。

.

背中合わせ (11)

席に戻ると、お肉と野菜が追加されていた。
まだ食べるの？この人達！

「食べるか？」

葵が聞いてきて、とんでもないと首を横に振った。

「梨桜ちゃん、何か飲む？」

ドリンクメニューを眺めていた愁君が顔を上げて私に聞いてくれた。

「グレープフルーツソーダがいいな」

「デザートもあるよ」

メニューを渡されて…キャラメルアイス美味しそう、抹茶アイスも捨てがたい。

どれにしようか真剣に悩んでしまう。ゆずのシャーベットも美味しそう。

「アイスは飯を食べてからだ」

寛貴に言われて隣を見ると、通路の向こうに彼女が見えてメニューで顔を隠してしまった。

後悔しても遅いけど、タカちゃんにお店の事を聞いてから来れば良かった。雄太君がバイトしているなら、彼女達がお店に来るかもしれないよね…

…どうかこっちに来ませんように、私達に気付きませんように！

「梨桜？」

シート！と唇に指を当てると、怪訝な顔をした葵と寛貴が私の視線の先を見て眉を顰めた。

「雄太！来たわよ」

由利ちゃんの声が響いた。

彼女の隣には尚人君がいる。二人が並んでいると付き合っているようにしか見えないんだけどな…

尚人君はどうして葵にあんなことを言ったんだろう？

「堂々としてればいい」

葵に言われて頷くと寛貴にメニューを取り上げられた。

「アイスの前に飯を食え」

「梨桜」

葵に呼ばれてそちらを向くとお肉を差し出された。やだ、食べたくないよ。

「さつきから眺めてるだけで殆ど手を付けてないだろ。食べる」

「見てるだけでお腹一杯」

口を嚙んだまま首を横に振ると怖い顔をしながら「梨桜」と呼んだ。

「早く口を開ける」

仕方なく口を開けるとお肉が入ってきた。相変わらず美味しいけど、入れる量が多すぎる！

「梨桜ちゃん、何で眉間に皺寄せながら食ってんだよ」

拓弥君に笑われたけど、仕方がないの。だって、口の中一杯にお肉が入っているから噛み切れないし飲み込めないの！

「…梨桜？」

由利ちゃんに気付かれた。拓弥君が大笑いするからだよ！
彼女は自分達の席から私達の所に来ると、可愛らしく笑って「ここに来てたの？」と小首を傾げた。

由利ちゃんの席には尚人君がいて、私をジッと見ていた。

口の中のお肉が飲み込めなくて由利ちゃんの問題に答えられないでいると、寛貴に水の入ったグラスを手渡された。

「ゆっくり飲めよ」

頷いてグラスを口に運んでいると、こちらを見ていた尚人君と目が合い、挨拶の代わりにひらひらと手を振った。

「苦しかった…葵、入れ過ぎだよ」

漸くお肉を飲み込んで葵を見ると、そっぽを向いてお肉を食べてい

た。

「梨桜は何をしていたの？どうして涙目になってるの？」

由利ちゃんが聞くと愁君に笑顔を向けられ頬を赤く染めていた。

王子様スマイルは由利ちゃんにも効くんのだ…変なところで感心している、愁君が王子様の笑顔のまま私を見た。

「食の細い梨桜ちゃんを心配した葵が梨桜ちゃんに食べさせていたんだけど、口に入れる量が多くて苦しかったんだよ。…ね？梨桜ちゃん」

止めて、私に振らないで！

頬を染めていた由利ちゃんは一瞬で表情を変えて私を見ていた。その豹変ぶりが怖い…

私の両隣は彼女が見えていないかのように黙々と食べていた。

「お待たせ」

雄太君がオーダーしてくれたメニューを持ってきてくれた。「ありがと」と言えば「ホツケ、東堂好きだっただろ？」と言いながらお皿を置いてくれた。

「おにぎりじゃなくて白飯にしたからな」

雄太君の心遣いが嬉しかったのと北海道ならではのメニューに頬が緩んでしまう。札幌に来たらこういうメニューが食べたかったの。

「いただきます！…あっっ」

骨を取ろうとして魚に触ったら凄く熱かった。

「熱いに決まってるだろ、気をつけるよ」

お箸で大きな骨を取り除こうとしていると上手く出来なくて、魚に
触ろうとすると熱くて触れなかった。

熱いうちに食べたいのに骨が取れない!!

「貸せ、イライラする」

葵がお皿ごと持って行くと器用に箸で骨を取り除き始めた。
私より器用だっというのが面白くない。

「おまえ、その白飯を全部食べるのか？」

寛貴に言われて、雄太君が持ってきてくれたお茶碗を見ると、こ
もりとご飯が盛り付けられていた。：雄太君、女の子はこんなに食
べられないよ。

「無理」

「多い分を寄越せ、食べてやる」

取り皿に自分が食べられそうな量を取り分けて寛貴にお茶碗を渡す
と「これ位は食べる」とご飯を戻された。

「ええ!？」

「これを食べたならアイスを頼んでやる」

「こんなに食べたならアイスが入らない」

取り皿を寛貴の前に出すと、じろりと睨まれた。

「体力が無いんだから、まず飯を食え」

寛貴のお説教が正論過ぎて返す言葉が無かった。寛貴まで涼先生みたいな事を言う!!

仕方なくご飯を口に入れると、寛貴がご飯の上に焼けたお肉を乗せた。

だから、お肉はもういいの…どうしてお肉ばかり食べさせたがるの!?

「なんかさあ…」

由利ちゃんの言葉に顔を上げると、相変わらず不機嫌そうな顔をしていた彼女が私を見下ろしていた。

「どうしたの？由利ちゃん」

「なんか…梨桜って東京に行って変わったね。私、ショックだな」

それだけを言って席に戻って行った。

私、変わった？前と同じだと思っけど…？

「骨、取れたぞ」

「ありがと。皆も食べない？」

そう言うと、四方から箸が伸びてきて、美味しそうなホツケは皆の口に入り、私も脂の乗ったホツケを味わった。

「美味しい」

チラチラと由利ちゃんがこちらを見ている。

彼女は明らかに私に対して腹を立てているのが分かるけれど、私にはどうしようもない事だし、正直関わりたくない。

だから私は見えてないフリ、気が付いていないフリをした。

「梨桜は何も変わってない。一々気にするな」

葵に言われて頷くと、愁君が「オレも梨桜ちゃんは昔と変わってないと思うよ」と言ってくれた。

背中合わせ (12)

「アイスは何を食べるんだ？」

恨めしい気分で寛貴をジトツと睨んだ。

「お腹が一杯でもう入らない」

アイス、食べたかったよ…

椅子の背に凭れてお腹をさすった。お腹がぼっこり膨れているような気がする。

「おっさん臭いぞ」

「…おっさんじゃないもん」

葵のお腹をさすってみたけれど、ぼっこり膨れていなかった。もう一度自分のお腹をさすると、やっぱり膨れる…幼児体型みたい。お腹をさすっている私の隣で寛貴が雄太君を呼んで会計を済ませている。

「旨かった。梨桜ちゃん連れてきてくれてありがとう」

愁君が満足してくれたなら、私も嬉しいよ。

「良かった」

「今回は梨桜ちゃんがいてくれて良かったよ」

拓弥君の言葉に「どういたしまして」と答えて立ち上がった。
愁君と拓弥は本当に女の子の扱いが上手いな　感心するよ。どこ
で覚えてくるんだろうね？

「梨桜ちゃんのオトモダチ、またね」

拓弥君が何故か“お友達”を強調して由利ちゃん達に手を振ると、
葵に急かされて店を出た。

外に出るなり、煙草に火を点ける3人：私服だからバレないかもし
れないけどさ、高校生だって言う事…忘れてない？

私の風下で吸っていて一応私に気を使ってくれているらしい3人を
横目で見て葵の腕を引っ張った。

「どうした？」

「円香ちゃんに会いたい。円香ちゃんの都合が良かったら遊んで来
てもいい？」

「今日は移動で疲れてるんだから明日にしろ」

「平気だよ」

「梨桜はいつも“平気だよ”って言った後に熱出すだろ。今日は大
人しくしてろ」

私の額に手を当てて熱が出ていない事を確かめると前髪をクシヤク
シヤにした。

幾つこの時の話をしてるのよ？ホントに過保護なんだから…

「…それなら、ホテルに帰ったらアイス食べたい」

ホテルまで歩いて20分位でしょ？帰る途中でジェラート屋さんがあったと思っただよだね…お持ち帰りにして、シャワーを浴びた後に食べたら美味しいと思うの。

「それ、全然繋がってないぞ。…そんなに食べたかったのかよ」

呆れ顔で私の髪の毛をまたクシャクシャにした。

だって、ご飯をちゃんと食べたからいいでしょ？頑張って全部食べたんだよ！

「葵、これからどうする？」

愁君に聞かれると葵は「梨桜を連れて帰る」と言い、私から手を離れた。

「ここにいろよ」

そう言っただけで愁君達の傍に行くと、何やら4人でコソコソと話をしていた。

4人集まって。っていうところがイヤラシイよね。結託する時はあまり良くない事を考えているに違いないから、知らないフリをしよう。

「梨桜！」

名前を呼ばれて振り返ると、お店から尚人君が駆け出して来た。

「尚人君…」

由利ちゃんを置いてきちゃダメじゃない。きつと今頃怒ってるよ？

「話がしたい」

真剣な顔をして私を見ている尚人君。今までこんな顔を見た事無かった…

「時間を作って欲しい」

再会したら、絶対にそう言われると思っていた。そう言われたら、ちゃんと向き合ってもう一度私の気持ちを伝えよう、そう決めてここに来た。

「うん、私も尚人君に話さなきゃいけない事がある」

「これからはダメか？」

今日は無理だよ。葵がいいって言わない。

「ごめん、今日は無理」

「それなら…明日、明日時間を作って欲しい」

尚人君が泣きそうに見えるのは気のせい？

「うん…」

『尚人君、どうしたの？』そう聞きたかったけれど、こんな表情をさせているのは私の所為だったら…そう思うと言えなかった。

「帰るぞ」

不機嫌な声と共にグイッと腕を引かれてよろけた。

「葵？」

よろけて葵にぶつかると、そのまま体を支えるように自分に引き寄せ、尚人君から遠ざけた。

葵を見ると尚人君を睨んでいて、尚人君も睨み返している。

「葵、約束したよね？」小声で言うと、舌打ちをしてそっぽを向いてしまった。

葵が顔を向けた先を見ると、寛貴も尚人君を睨んでいて、それに気づいた尚人君も睨み返している。

あんなに睨んでいるっていう事は“気まずい男の子”が尚人君だって分かったよね…タカちゃんを呼び出して、何を聞いたの？

「尚人君、今日は帰る。またね」

「梨桜」

まだ何か言いたそうにしていたけれど、バイバイ、と手を振った。

「梨桜ちゃん！」

手招きされて愁君のところに行くと、「今日一日頑張ったご褒美」と小さな袋を手渡された。

袋を開けると、紫色とレモン色の塊が入っていた。

「これ…バスキューブ？」

「今日はゆっくり休んだ方がいいよ。疲れただろ？」

ラベンダーとグレープフルーツのバスキューブがコロンと入っていて可愛い。

「夢も見ないくらいぐっすりと眠れるようにね」

その言葉に愁君を見ると、ニツコリと笑っていた。愁君はどうして葵が私と同じ部屋にしたのか知ってたの…

「ありがとう」

「帰るぞ」

葵に愁君からもらったバスキューブを見せると「良かったな」と言っ
つて葵が歩き出した。3人に手を振り、振り返って尚人君にも小さ
く手を振って葵の後に続いた。

「ほら」

愁君達が見えなくなった頃、差し出された手に自分の手を重ねてホ
テルまでのんびり散歩をした。

背中合わせ (13)

現在、午前5時。

愁君のバスキューブのおかげか、葵が言う通りに疲れていたからなのか、夢を見る事も無くぐっすりと眠れた。

「葵」

隣のベッドで寝ているサラサラ頭に声をかけると、「ん」と寝ぼけたまま返事をする。

もう一度「葵くん？」と呼ぶと

「…んだよ」

掠れた声で返事をして片目だけを開いて私を見ると、すぐに目を閉じた。

色気がダダ漏れだよ…羨ましい。

「目が覚めちゃった」

「もう一回寝ろ」

寝返りを打って私に背を向けてしまった。

葵のベッドに座り込んで葵の髪の毛を指にクルクルと巻きつけるとすぐにサラサラと解けていく。
いいなあ、こつこついう髪質。

「…何がしたいんだおまえは」

「お散歩行って来るね」

「昨日の夜しただろ」

「それはそれ、公園に行つて来る。じゃあね」

そう言つて葵のベッドから降りようとすると、足を掴まれてしまつた。

危ないでしょ！？落ちたらどうするの！

「オレも行く」

「気持ちいいね！」

「そうだな　東京とは違うな」

欠伸を噛み殺していてまだ眠そうな葵はポーっとしながら歩いていった。

「ウチに帰つても散歩に行こうよ」

「危ないだろ」

「早起きの不良なんかいないよ」

「あ……」

交差点の向こうにあるお店を見つけて足を止めた。いつの間にか通りを超えてあの近くに来てしまった。

「戻るか」

葵に手を引かれたけれど、ぎゅっと握ってその場で足を止めたまま交差点を見た。

「待つて、行つてみたい」

自分でも分からないけれど、足が自然にそこへ向いた。

「綺麗に直したね」

店先のガードレールに手向けられた花に手を合わせてお店を見た。事故以来初めて来たこのお店。そこはもう前とは変わった店構えになり新しく息づいていた。

ここで事故が遭った事を覚えている人は少ないかもしれない。

「梨桜？」

葵にしがみついて目を閉じた。

もう、あの場所は無いのにないつまでも囚われている私。

解放されたい、そう思っているにも囚われているのは私が弱いから…

「梨桜、帰ろう」

ホテルに帰り朝食会場のレストランに入ると、愁君達が朝ごはんを食べていた。

おはよ、と手を振り隣の席に腰を下ろした。

「洋食と和食」

ウェイターに告げると葵はドリンクバーに行った。

「どこに行ったの？」

3人とも朝から大盛ご飯を食べていた。

昨日あんなに食べたのに朝からこんなに食べられるんだ…凄いな。

「お散歩、気持ち良かったよ」

「オレも誘ってくれば良かったのに」

拓弥君が公園を散歩するって何だか想像できないね。朝よりも夜の方が似合っている、そう思うのは気のせい？

「おまえは起こしても起きねえだろ」

寛貴に言われて拓弥君は笑っていた。

「葵、早起きしたんだ。珍しいな」

愁君が葵をからかすと、私に紅茶を、自分にコーヒーを持ってきた葵が席に着いた。

「5時に起こされた。まだ眠い…」

葵はボーっとした顔で庭を見ていた。

「5時　オレ思うんだけど葵の美肌って梨桜ちゃんのおかげだよな」

「なんで？愁君」

確かに葵の肌は私も羨ましくなるくらいスベスベだけど、葵のお肌の為に私は何もしていないよ？

「タバコ止めたし早寝早起き、梨桜ちゃんの手料理」

私は知らなかったけど、葵も愁君や寛貴達と同じように煙草を吸っていたらしい。

愁君から、去年私に輸血をした時を境に止めたって聞いた。

「大袈裟だよ愁君、私手抜き料理作るよ。この前もコロッケだったし」

「　　まだあんのかアレ」

葵は遠い目をしながらコーヒを飲んでいて「冷凍庫にあるよ」と答えたらジロリと私を見た。

「作りすぎだろ　二人しかいないんだぞ？人数を考えて作れよ」

耳が痛い言葉に聞こえないフリをしてそっぽを向いて紅茶を飲んだ。つい、作り過ぎちゃったんだよね。無理矢理食べさせたのを未だに

根に持っているなんてココロが狭いぞ。

「コロツケ位で騒ぐなよ」

愁君に窘められた葵は「モノには限度があるだろ」と反論していた。

「昨日は眠れたのか？」

隣に座っていた寛貴に聞かれて「うん」と頷くと良かったな。と返事が返ってきた。

「会場で一人になるなよ」

運ばれてきた朝ごはんに「いただきます」と言ってふわふわのオムレツをフォークで掬った。

「何かあるの？」

寛貴に聞くと拓弥君が「あつてからじゃ遅いから」と答えて、意味が良く分からなくて首を捻った。

「札幌にあるチームと喧嘩でもしてるの？」

「そついうんじゃない。…おまえ、分からないのか？」

「分からない」

遠まわしに言わないでハッキリ言ってくれなきゃ分からないよ！

「矢野から手紙の束が送られて来ただろ。送った男達はこの学校の

生徒じゃないのか？」

あ…そうだった。『手紙読んで下さい』とか『一緒に写真撮って下さい』とか言われるの苦手なんだよ。

「分かったか？」

「…気を付けます」

背中越しの温度 (1)

会場の控え室で制服のチエックをした。

うん、今日も無駄に可愛い制服。周りの女子生徒達も準備に余念がない。

葵達のところに行こうと廊下に出ると、制服の違う男子生徒と女子生徒が互いに話をしている。

昨日のような、女の子達が葵達に突進してきたような光景は流石にないけれど、皆が恋のチャンスを狙っていて、見ている分には面白い。

「東堂さん！」

声をかけられて振り返るとこの学校の制服を着た男子生徒が数人立っていた。

朝に寛貴から言われたことを思い出して、怒られるのを覚悟した。やっちゃった…絶対に「だから言っただけ」って怒られる。

「あの、僕達」

おお、“僕達”なんて久しぶりに聞いた。「何か？」と愛想笑いを浮かべると声をかけてきた彼は俯いてしまった。

純情少年なのか…それともこれが普通の男子高校生なんだろうか？日常が、非日常・非現実的な彼等と過ごしていると何が普通なのか分からなくなっている。

「…用事がないなら、失礼します」

俯いている彼の反応が無いから「それじゃ」と言いかけると、急に顔を上げて「東堂さん！」と呼ばれた。

その剣幕に吃驚していると、彼は拳を握りしめて私をジツとた。ちよつとだけ…怖いよ！

「手紙、読んでもらえましたか!?!」

「え?」

「手紙です!矢野君に渡して欲しいって頼んだ手紙を読んでくれましたか!?!」

「…」

「ごめんなさい、読んでません。目を通す前にオレ様達に処分されてしまいました。」

「本当の事は言えずに」「ごめんなさい」と言つと「ダメですか!?!」と食い下がられた。

「何が書いてあつたのかも分からないのに答えられないよ!」

「…ごめんなさい」

謝ると「そんな…」と凄くガツカリされてしまった。

「何が書かれていたの?」

「それじゃ…」

その場から立ち去ろうとすると「待ってください!」と呼び止められ

た。

「会いに行きます。…だから、会って下さい」

「え？」

何の話なの？

手紙を読んでいないから全然理解できない。…今更だけど、勝手に捨てた二人に怒りたくなつた。

「梨桜、こつち」

「尚人君？」

腕を引かれて強引にその場から離され、引きずられるように校舎の隅に連れて行かれた。

この学校の生徒だから居てもおかしくないけど、こんなに近くに尚人君の顔がある。その事に不思議な感じがした。

「相手にするな」

助けてくれたのかな…「ありがと」と言うと私を見ていた。

そういえば…八重歯、見てないな。

尚人君が笑うと八重歯が覗いて、それを見るのが好きだった。アレから彼が笑っているのを見ていない気がする。

「髪、切つたんだな」

私の髪に触れようとして伸ばされた手を見たら意識をしたつもりはなかったけれどギョツと目を閉じてしまった。

怯えているような仕草をしてしまった事にすぐに後悔して尚人君を見ると、傷ついたような顔で私を見ていた。

「ごめん…ちょっと吃驚したの」

言えば言うほど切ない目をさせてしまって…彼と目を合わせていらなかった。

「謝るなよ。…昨日一緒に帰った男と付き合ってるのか？」

それって葵の事？

尚人君にはちゃんと説明した方がいい。顔を上げて尚人君を見ると小さく笑うと私の髪に触れた。

「オレ、あの男に凄え睨まれる…梨桜の事が好きなんだな」

説明しなきゃ、そう考えていたら怯えないで普通にいられた。

「葵は違うの「梨桜！」」

大きな声で呼ばれ、私よりも先に振り返った尚人君は眉を顰めて呼んだ人を見ていた。「梨桜」ともう一度怒った声で呼ばれそちらを見ると寛貴が怒った顔でこちらに歩いて来ていた。

「ごめん、行かなきゃ」

「梨桜の発表が終わったら迎えに行く。その時に話したい」

「分かった。後でね…」

尚人君に背中を向けて寛貴を見ると、私に向かって手を伸ばした。

「行くぞ」

伸ばされた手を取ると強く引き寄せられた。

背中越しの温度 (2)

「おまえは尽く人の忠告を聞かない女だよな」

「…そんなこ、と…な…苦し」

連れて来られた誰もいない特別教室らしい部屋で、朝の言いつけを守らなかった私を懲らしめるかのようなきつ過ぎる抱擁…

「い…た」

呼吸をするのも話す事も苦痛な状態から逃れたくて寛貴の二の腕に爪を立てるとやっと腕の力を弱めてくれた。

「ふう…」

酷いよ。私はそんなに悪い事はしてないよ？

抱き寄せられているままにクタリと寛貴の肩口に額をつけた。

「苦しかった…」

「自業自得だ」

上を見ればきつく眉根を寄せて私を見下ろしていた。

何をそんなにイラついているのか…余りな言い様に二の腕を抓ってやった。

「つてえ…」

この位どうつてことないでしょ？ホントに苦しかったんだから！
それに…文句を言いたかったんだよね、思い出した。

「さつき純情高校生から『手紙、読んでもらえましたか！？』って
言われたの」

「…純情？」

そう、純情少年だよ。

頷いたら、ただでさえイラついていたのに更に眉根を寄せて私を見
下ろしていた。

そんな顔をしてダメだよ、文句を言うって決めただから。

「寛貴と葵が手紙を捨てちゃったから何の事か分からなくて『ごめ
んなさい』しか言えなかったよ。もうあんなことしないでよね」

「そいつの顔は知ってたのか？」

見下ろされて、首を横に振った。

「名前は？」

「…知らない」

ムツと寛貴を睨むと鼻で笑われた。

「だったら、仮に読んでいたとしても、誰の手紙の事を言っている
のか分からないだろ」

確かにそうかもしれないけど、でも！もしかしたら分かったかもし

れないじゃない!？」

「それとも、内容によっては受けるのか？」

それは、嫌。

首を横に振るとまた鼻で笑われた。

「何で笑うのよ」

「捨てても捨てなくても結果は同じだよ」

そういう事を言ってるんじゃないの!

寛貴の肩を押そうとしたら、またキツく抱き締められた。

「く…るし…」

意地悪!

ふいに力を緩められて深く息を吐いた。

疲れたよ…

ぺたん、と床に座り込むと寛貴も隣に座った。

「もうすぐ発表の時間だね」

携帯で時間を確認してから電源を切った。

発表を前に緊張するけれど、今はその後の事で頭が一杯になっている。

「気まずい男はアイツだよ」

前触れもなく突然聞かれて「うん」と答えてしまった。
寛貴を見ると、私を見ずに携帯を弄っていた。

「ねえ、タカちゃんに変なことしなかったよね？」

何を聞いたの？とは言わなかった。きっとタカちゃんは余計な事を
言わないと思うから。

携帯をポケットに入れて、私を見ながら口を開いた。

「矢野から大まかな話は聞いた。アイツ、心配してたぞ」

「だから、ちゃんと終わりにしようと思ったの。私が悪いんだよ…
私が逃げてきたから」

タカちゃんに前に言われた『前に進んでるって思っているのか？』
札幌に来て分かったのは…前に進めないのは私じゃなくて尚人君。

「何があつた？」

葵には簡潔すぎるって言われたけど、単純なんだよ

「尚人君との別れ話がこじれて…逃げるように東京に来たの。私が
ズルいから、尚人君がいつまでも…」

「そう追い込んだのはアイツじゃないのか？おまえが負い目に感じ
る必要がどこにある？」

物分かりが良すぎだ。そう言い私の顔を覗き込んだ。

「そうかもしれないけど…」

「けど？」

「でもね、違うんじゃないかって思ったの」

タカちゃんと円香ちゃん達には話していない。誰にも言えなかった…

「どういう意味だ？分かるように話せ」

相変わらずな言い方に笑ってしまいそうになったけれど、もしかして私が話しやすいようにそう言ってくれてる？

あの時は、キスなんかよりこんな風に手を繋ぐことも躊躇っていた。あの違和感は何だったんだろう…今考えても分からない。

「私、尚人君とこうやって手を繋いでいても、いつ手を離そうかって考えていた。尚人君と由利ちゃんの事を聞いて安心して自分の分もいたの。私が尚人君の事を責めるのはおかしいでしょ？」

自分の手を寛貴の手に重ね、指と指を搦めたその様をじっと見つめた。

「…平気なのか？」

「え？」

何が平気なの？
寛貴の顔を見ると、

「こっやっていても離す事は考えないのか？」

握られている手を目の前に持ち上げられてゆらゆらと揺らされた。

「あ、ごめんね。寛貴が嫌だったね」

絡めた指を外そうとしたらぎゅつと握られた。

「オレは嫌じゃないのか？って聞いたんだ」

指にキュツと力を入れると握り返してくれた。

うん、あつたかくて大きい手だね。

「…やっぱりいい、言うな」

嫌じゃないよ。って言うおうとしたのに遮られて唇が触れた。

少し苦い煙草の味がするキスは“このままでいて”そう強請ってしまいいそう甘い気持ちにさせられる。

寛貴の携帯電話が鳴り、唇が離れてしまった。

離れがたい思いで寛貴の唇を見ていると携帯から『おまえ、どこにいるんだよ！』と拓弥君の声が漏れ聞こえてきた。

背中越しの温度 (3)

先生から「発表前に居なくなるな！」と怒られたけれど、「えへへ」と笑って誤魔化した。

拓弥君には訳知り顔でニヤツと笑われて“いーっ”と返したら、爆笑された。拓弥君にはからかわれて遊ばれてばかり。

「しっかり頼むぞ！」先生から言われたけれど、気合の入らないままステージに立ってしまった。

頭の中は寛貴とのキスとこの発表が終わった後の事で一杯だったから。

先生、期待外れの生徒でごめんね。

発表が終わりステージから降りると尚人君がいた。

「梨桜」

彼に促されて会場を出て、背中を追うと階段を上って行った。どこまで上るの？

「屋上？」

「ああ 由利に見つかりたくないから」

そうだね、由利ちゃんは独占欲が強いから。見つかったら話が拗れるね。

扉を開けて外に出ると爽やかな風が吹いていた。気持ちいい、この風を感じられただけでココに帰ってきた。そんな感じがする。

「…怪我はもういいのか？」

「日常生活を送るのに支障が無い程度に回復したの」

当たり前障りのない私の返事に、尚人君は笑った。それを冷めた思いで見ている私は酷い女なのかもしれない。

「そっか…良かった。見舞いに行けなかったけど気になってたから」

「心配かけてたんだね、ごめんね」

ぎこちない会話に笑いたくなくなってしまった。本題に入れない私と尚人君…

そういえば、葵と寛貴に何も言わないで来てしまった事を思い出した。携帯の電源も切ったままだ。今頃、怒っているかもしれない。

「梨桜」

「なに？」

思い切ったように口を開いた尚人君をジッと見つめた。もう少し風を感じていたかったけれど、尚人君に向き合った。

「どうしてオレに何も言わないで東京に行った？」

どうして…尚人君は何て言っただけで欲しかった？事故に遭う前の私達の会話はいつも決まっていたじゃない？

『別れたい』『別れない』その繰り返しだったでしょう？

「急だったの。パパの海外赴任が決まってから、急いで編入できる学校を探して、引越の準備で忙しかったの。ごめんね、友達には事後報告になっちゃったの」

事後報告、そう言ったけれど最初から言っつもりはなかった。

人伝に私が東京に行った事を聞かされたら、尚人君も私とのことを終わりにするだろうって思ってた。

「東京に行くからでもいいから、オレには言っただけで欲しかった」

「ごめんね」

「…オレは終わりにしたくないんだ」

何を言っているの？

どうしてそんな事を言うの？今まで私が言い続けてきたことは考えなくて良かったって言うこと？

「ごめんさい、私には考えられない」

きつとどこまでも平行線。

はつきり言わなきゃ、ここで終わりにしなければ尚人君は前に進めない。

悲しそうな眼をする尚人君に畳み掛けるように言葉を繋げた。

「私は終わったと思ってる。葵に『帰って来い』って言われたときに尚人君の事は頭に浮かばなかった。東京に行く日が近づいて来た時にどうしようって思ったけど…私はズルいから逃げたんだよ」

背中越しの温度 (4)

「…梨桜じゃなきゃ駄目なんだ」

やっぱり平行線？

でも、私は尚人君とは付き合えないよ。

「由利ちゃんがいるでしょう？」

「アイツとは付き合ってない。オレのところに戻ってきて欲しい」

付き合ってないって思っているのは尚人君だけかもよ？彼女はそう思っていないかもしれない。

そのとき、風の中に煙草の匂いがした。

…この屋上には他に誰がいる？

「付き合ってる奴がいるのか？さっき『葵に』って言ってたよな、あの男は何なんだよ！？」

匂いが流れてきた方向を探していると、尚人君がすぐ近くで急に声を荒げた。

思わず顔を逸らしてしまったら「答えろよ！」と大きな声を出した。

「葵は、私の家族だよ」

「嘘だ！」

近すぎる距離に逃げたくなっただけで、我慢して尚人君に向き直った。

「嘘じゃない、葵と私は双子なの。でもね、好きな人とか関係なく尚人君と付き合うつもりはないよ。私が話したいことは同じなの。私との事を終わりにして欲しい。札幌に来て尚人君に会ったらそう言おうと思っていたの」

視界の隅にひらひらと揺らめくスカートが見えた。

尚人君に気付かれないようにチラリとそちらを見ると、由利ちゃんが覗いていた。

ドアの影に隠れているつもりらしいけど、スカートの裾が見えている。

「オレはあの時、由利に誘われて自分に負けたことを後悔してる」

由利ちゃんはとうとうつもりでココに来たの？尚人君が好きだから？……違うよね。

彼女は今ここで尚人君の言葉を聞いて、何を思っただろう。

「今更だよ、尚人君」

つい、キツイ口調で言ってしまったら尚人君は悲しそうな眼をした。

「オレはおまえとやり直したいんだ」

何度、同じやり取りをすればいいんだろう？
何を伝えれば彼は納得してくれるんだろう…

私の言葉を聞き入れてもらえない状況が情けなくて泣きたくなくて

くる。

「私には考えられない。気持ちが悪切れてしまったの。尚人君の気持ちには応えられない」

「梨桜、本当に駄目なのか」

手首を掴まれてビクツと震えてしまった。

「オレが怖いか？つきあってたのに…」

怖い。嫌だ…

腕を引いて逃げようとしたけれど、強く掴まれて叶わなかった。

「痛い…離して」

ギリギリと締め上げられる手首が痛くて「離して」と言つとますます力を込めて自分に引き寄せようとした。

「どうして怖いんだよ？」

やだ…怖い

首を横に振って拒んでも尚人君は許してくれなかった。

「梨桜！」

「イヤ！！」

私とあまり身長差が無い尚人君に抱きつかれると顔がすぐ傍にある。嫌悪感と恐怖でカタカタと体が震えた。

「尚人君、離してっ」

泣きたくなんかないのに涙が出てくる。
お願い、触らないで。私から離れて！

「待つから、梨桜がオレをもう一度好きになつてくれるまで待つ！
だから」

待つと言いながら顔を近づけて来る彼から逃れる為にもがいたけれど、力では敵わなくて尚人君の顔がどんどん近づいて来た。

「ヤダ！！止めて！！」

嫌だ！キスなんかしたくない！！

「イヤッ！！」

背中越しの温度 (5)

掴まれていない方の手で、尚人君の肩を必死に押し、唇が触れそうになるのを防いだ。

「梨桜はオレの彼女だ。そうだろ？」

「ヤダ…」

「梨桜！」

葵の声がしてホッとすると、急に尚人君が離れて“ガッツ”という音がした。急に自由になった身体は尚人君の身体を押ししていた反動でバランスを崩した。

「大丈夫か？」

コンクリートの床に尻餅をつきそうになったところを、背中から支えられてゆっくりと床に降ろされた。

「梨桜？」

寛貴に顔を覗き込まれたけれど、泣き顔を見られたくなくて、両手で頬を覆った。

「もぉ やだ」

強く掴まれた手首が痛い、唇が触れそうな距離が嫌だった…

「怖かった…」

床に座り込んだまま、震える体を自分で抱き締めながら小さく咳くと「悪い」とすまなそうな声が返ってきた。

寛貴が謝る必要はないのに、掌で涙が伝っている頬を拭っていた。

何故か涙が止まらなくて寛貴の前でボロボロと涙を流していると、呻き声が聞こえてドサツと床に倒れ込む尚人君が見えた。

葵が尚人君の襟元を掴んで体を引きずり起こして睨みつけると、怯えた顔をした彼は後ずさりをしながら逃げようとしていた。

「葵を止めて」寛貴を見上げると「三浦」と愁君を呼び、呼ばれた彼は葵の手を掴んで耳元で話をする、手を上げて何かの合図をしていた。

私の手を引いた寛貴に「立てるか？」と聞かれて、頷いて立ち上がろうとしたんだけど…

「寛貴、あのね…」

「ん？」

どうしよう？

立てない…足に力が入らない。

「私、もう少しここにいる」

じっと私を見て溜め息をついた。

「それだけ怖かったんだろ。我慢するな」

「うわ
」

寛貴は私を抱き上げると、歩き出した。
急にされると驚くよ。

寛貴に抱かれたまま階段を降りると階段の踊場に由利ちゃんと拓弥君がいた。

由利ちゃんが泣いて、拓弥君が慰めているようだった。

「拓弥」

寛貴が声をかけると拓弥君は顔をあげてニヤリと笑っていた。

…どうしてその、黒い笑み？泣いている女の子を慰めているんじゃないの？

「拓弥君っ私っ」

由利ちゃんがしゃくりあげて拓弥君を見上げていて、寛貴から抱き上げられたこの位置から見ると…

え？泣き真似…？

拓弥君が見ている方向に由利ちゃんの顔が向けられ、私と目が合った。

「梨桜
」

由利ちゃんの顔が一瞬、般若に見えた。

「梨桜ちゃんどうした？足でも捻挫したか」

拓弥君の問いに由利ちゃんの顔が変わった。さっきまでの泣きじゃくっていた女の子の顔…

「梨桜、ごめんね！尚人が私と別れたいなんて、私の自業自得だよねっ梨桜の事傷つけて尚人のこと追い詰めて　ごめんね」

何て、器用なんだろう？変なところに感心していると、寛貴が私の耳元に口を寄せて「この女演技が下手だな」そう言って、喉の奥で笑った。

拓弥君は由利ちゃんの後ろでニヤニヤ笑ったままで…この場で、私はどういふ顔をしたらいいのだろうか？

「梨桜、本当にごめんね！尚人は悪「藤島っ何やってんだ！おまえっ」

由利ちゃんは突然聞こえた葵の迫力のある声にビクツと肩を震わせた。

「梨桜、来い」

葵は私に向けて手を伸ばした。

「寛貴、もう大丈夫かも。降りして？」

床に降りしてもらうと、寛貴が支えてくれていた手を離しても立っていることが出来た。

「歩けるか？」

「うん、大丈夫みたい」

力の入らなかつた膝を擦って、歩けることを確かめていると

「梨桜つごめんね！本当にごめん！」

「うわっ」

由利ちゃんが飛びつかれて、

ゴン！ て凄い音がした。

「っ」

壁に頭を打ちつけて涙が出た。

「痛い」

「梨桜ごめんね、私の事許してっ」

すがりついて泣く真似をする由利ちゃんを直視出来なかつた。

拓弥君、良く相手ができるね。ちょっとだけ感心するよ。…そんなことよりも頭がズキズキする。

葵が怖い顔をして近寄ってきた。本気で怒ってる…

「由利ちゃん、離れて」

彼女の身を心配して言ってあげているのに、涙を溜めた目で私をジ

ツと見て声を震わせた。

「梨桜、許してくれないの？」

演技を止めようとしないう利ちゃんは、愁君に襟首を掴まれて、ベリッと音がしそうな勢いで私から引き離された。

「失せるよ」

彼の一言に私も固まった。

間近で言われた由利ちゃんは顔色を失くして怯えている。普段、こういう顔を見せない彼が不良の顔を見せると凄く怖く感じる。

「梨桜ちゃん、頭打つたる？見せて」

私の顔を覗き込む彼は、いつもの愁君に戻っていた。

「いたっ！愁君痛いつそこ、触らないで！！」

「病院に行かなくても大丈夫だとは思っけど、冷やした方がいいな」

頭に手で触れるとポコツと腫れていて、こぶになっていた。

今日はなんて散々な日なんだろう…

背中越しの温度 (6)

「葵、頭が冷たい」

「当たり前だろ、冷やしてるんだ。黙って寝てろ」

空き教室を借りて（占領して）自由気ままに寛ぐヤンキーズ
私は葵に膝枕をされてたんごぶを冷却中。

「お前も甘いこと言ってるやないであの根性が腐った女に言えばいいんだよ」

葵はブツブツと私の頭の上で文句を言う。

「なんて言うのよ？」

「性格ブス」

手を伸ばして葵の頬をむにとつまんだ。

「いい根性してんじゃねえか梨桜」

「女の子にブスって言わないのっ」

葵は私の手をつかんで頬から外し、摘まめないように手首を掴んだ
まま、私に文句を言い続ける。

「ブスはブスだろ、なんだよあの泣き真似。見ている方が気色悪くて泣きたくなるだろ」

だからブスって言わない！

「由利ちゃんはあるあいう風にしかできないんだよ」

今までそうやって男の子に接してきたんだから急には変えられないだろう。

「お前一応友達だったんだろ？根性叩き直してやれば良かったじゃねーか」

「クラスメイトだったけど、仲は良くなかったよ。それに騙される男の子だって悪いんでしょ？男が騙されるから繰り返しちゃうんだよ」

一般論をぶつけたら、ムツとして私を見下ろした。

「オレがいつ騙されたんだよ」

「そういう話じゃなくて！とにかく女の子にブスって言っちゃダメだからね」

「うるせーなブスはブスだ。本人のために言ってやった方が親切だろ」

私たちは睨み合った。

女の子はブスって言われたら傷つくんだよ！どうしてそれが分からないかな？

「バカ！」

「うるせえ双子だな。悪態つくのも八毛るのかよ」

安達先生がぼそりと言つと、葵達の引率の先生は吃驚したように私達を眺めている。

「君達は、家でもそんな感じなのか？」

「そうですね」

先生の質問に私が答えると先生は「そうか、それを聞いて先生は少し安心した」と言いながら頷いていた。

「？」

「コイツは可愛げの無い生徒だから…。先生、安心してください。双子が揃っている時は年相応ですから」

安達先生の変な解説に先生は大きく頷いていて、愁君は爆笑していて葵はムスツとしていた。

葵ってば学校ではそんなに可愛げのない生徒なの？

「ねえ葵、冷たすぎて頭が痛くなってきた。起きていい？」

葵は私の背中に手をまわして支えてくれた。

たんこぶのまわりはキンキンに冷えている感じだ

「そろそろ表彰式と閉会式だぞ」

「宮野、おまえは閉会の挨拶するんだから行けよ」

私が葵に『行つてらっしゃい』と手を振ると「他の奴にやらせるよ」とブツブツ言いながらネクタイを締め直していた。

「藤島、表彰されるらしいから行け」

安達先生が言うと、寛貴は拓弥君にひらひらと手を振っていた。

「拓弥、代わりに行ってきて」

「表彰？」

「学校全体で賞を貰うらしい」

へえ、すごいね 寛貴と拓弥君の発表を聞かなかったな…勿体無い事をした。

真面目な顔で発表する姿を見たかった。

「藤島くおまえ生徒会長だろ？」

「面倒。こつというのは拓弥が適任だろ」

「…オレ行つて来るかな。先生も一緒にステージに上がるうぜ？」

不良って、学校行事とかに参加しなくて、授業も受けなくてっていうイメージだったのに、こんなにノリが良いと調子が狂う。やっぱり超進学校のヤンキーって普通と違うんだろつか？

「そつだなあ、オレも目立つか。東堂は席で大人しく見てるんだぞ」

ウキウキとネクタイを締め直し、準備を始めた先生。
先生ってば目立つのが好きなんだ…実は誰よりも札幌を満喫してい
るんじゃない？

「オレは用事を済ませてから行く。梨桜ちゃん、一人で出歩かない
ようにね」

「はい」

愁君に釘を刺されて素直に返事をした。一人で出歩いて既に痛い目
にあっているから…ちゃんという事を聞くよ。

背中越しの温度 (7)

閉会式に参加する気分になれなくて、敷地の隅にあった四阿でポットと空を眺めていた。

寛貴は私に付き添って一緒におサボり中。私の隣で腕を組んで寝ている。

伝えたいことを何回も言葉にしたけれど、彼が納得してくれたのか分からないままになってしまった。彼はあの後どうしたんだろう？ 葵に殴られたら痛いよね。

「何を考えてる？」

寝ているとばかり思っていた寛貴が、私を見ていた。

「葵に殴られたら痛いよね？ 尚人君に悪いことをしたな……って」

「殴られて当然のことをしたアイツが悪いんだろ。梨桜、お前はお人好し過ぎるぞ」

私から謝った方がいいんだろうか？ そんな事を考えていると呆れたように言われた。

お人好しなんかじゃないよ。

「あの女にも気を遣ってるんじゃないだろうな」

関わりたくない。それが本音だから由利ちゃんに遣う“気”は持ってません。

「遣ってないよ」

眉根を寄せて私を見ている寛貴…疑ってるでしょ、私はそんなにお人好しじゃないよ。

指で眉間の皺を伸ばしてあげようかと思って手を近づけると手首を掴まれた。

「…痛そうだな」

私の手首を見ながら呟いた。

「今は痛くないよ。少し痕になっただけ」

親指で撫でていているそこには尚人君に強く掴まれた時に出来た痣があった。

「怖かったよな…」

『怖かった』口にすると思い出して涙が出そうになってしまつから、頷きで答え、目を閉じて涙を堪えた。

「今も怖いかな？」

怖くないよ。

首を横に振ると、手首に柔らかいモノが触れて…目を開けると寛貴が唇で触れていた。

「?…っ」

何してるの?そう聞こうとしたら、小さいけれどチリチリとした痛

みが走って

「な……」

薄くついていた青色の痕の上に朱い印が出来ていた。
どうして？

自分の手首にできた新しい印を見ていたら、頭を抱き締められた。

「泣くな」

髪を撫でながら言われて顔を上げると、難しい顔をして私を見ていた。

「ごめんね」

「何で梨桜が謝るんだよ」

心配かけてるってどうか…面倒な事に巻き込んでごめんなさい。そう思って謝ったらムツとされてしまった…だって…「そう言つと溜息をつかれてしまった。

ごめんね。でも、心配してくれて、来てくれて…ありがとうございます。

「謝るな」

口調は少し怒っているけれど、手は相変わらず私の髪を撫でていた。すぐ傍に、目の前にある寛貴の顔を見ていたら、唇が触れそうな距離がなんだかもどかしくて…
触れるだけの…キスをして…しまった…

「じゅっ…」

すぐに我に返ると、恥ずかしくなった。

私…何してるの？どうして今、キスしたの！？

恥ずかしくて顔を上げられない、どうしよう！？「梨桜」と呼ばれたけれど、首を横に振った。

「梨桜」

もう一度呼ばれて、フルフルと首を振り続けると両方の頬を押さえられて顔を上に向けられた。

正面に、さっきよりも近くに寛貴の顔があつて余計に恥ずかしい…

「何がごめんなんだよ…」

反らさずに見つめられて…唇が触れた。

触れるだけじゃないキスが気持ち良くて、応えて、求めていた。

背中越しの温度 (8)

キスが深くなればなる程に、胸に溜まっていくこの甘いモノはなんだろう？

芝生を踏む音がして目を開けると、寛貴は鋭い目をしながら誰かを見ていて、私と目が合うと首の後ろを抑えてキスを深くした。

誰かに見られながらなんてイヤ！

キスを止めて欲しくて身を擦って逃れようとしたけれど、抑え込まれていて動けなかった。

「っ…！」

呼吸が苦しくて、胸を強く押したらやっと止めてくれた。

寛貴は私の後ろを睨むように見ていて、恐る恐る振り返ると、立っていたのは…由利ちゃんだった。

「へえ、その人とはキス出来るんだ。梨桜って潔癖症で少しおかしいんだと思ってたけど違ったのね」

バカにしたような言い方に私が答える前に「てめえみたいな女と一緒にするな」寛貴が言うと由利ちゃんは口角を吊り上げて笑っていた。

「私、あんたが大嫌い」

そう、奇遇だね。私もあなたが嫌い。

睨んでくる彼女の視線を正面から受け止めて睨み返すと、歪んだ笑

みを浮かべた。

「何の用だ？」

「ねえ、梨桜みたいな固い子を相手にして、つまらなくないの？」

クスクスと笑いながら私を見下ろすその顔に嫌悪しか感じなくて、ムカムカと腹が立つのを堪えていた。

「可愛い、なんて騒がれているけど簡単に男を寝取られるような間抜けな女よ？」

「オレにはおまえみたいな女を抱こうと思う男に聞いてみたいな…歪んだ女を抱いて何がいいんだ？体だけなら、もっといい女がいるだろ。…おまえの周りはバカが多いのか？」

私を挟んで睨み合う二人に耐えられなくなりそう。

「ねえ、由利ちゃん、尚人君が好きなんじゃなかったの？私にそう言ったよね」

お願いだから、私が抑えきれなくなる前に『尚人君が好きだったから』そう言っただけで私の前から消えて欲しい。

これ以上、神経を逆撫でするようなことはしないで。そう思ったのに、クスクスと笑ったまま、信じられない言葉を繋げた。

「梨桜、あんたってホントにおめでたいのね。…まあ、尚人はカッコいいし、一緒に居たら自慢できるからね」

そんな理由？…人を何だと思っているの？

私が呆気にとられていると、いつもと違う雰囲気を感じて寛貴の腕を掴んだ。

「梨桜、離せ」

「嫌」

この腕を離したら由利ちゃんに手を上げてしまうような気がして、両手で力が入っている腕を抑えた。

「黙って聞いてりゃ調子にのりやがって…虚仮にされて黙ってられるかよ。離せ」

寛貴が手を上げる価値なんかない。

「離さない」

私だって我慢しているんだから、寛貴も我慢して。そう思って見上げると、寛貴は由利ちゃんを睨みつけていた。

「ねえ、昨日思ったんだけどさ…あんな風に心配してもらえるなら、事故に遭ったのも悪いことばかりじゃなかったね」

酷い…

「…あんたの周りの男達、騙されてるんじゃないの？バカだよね」

その言葉に我慢できなくて、彼女の頬を力一杯叩いた。

「何すんのよ！」

「いい加減にしてくれる？私の事が嫌いならそれはそれでいい。でもね、皆を馬鹿にするのは許せない！」

「あんだなんか！」

私を叩こうと振り上げた由利ちゃんの手を寛貴が掴み、彼女は痛みを顔に歪めていた。

「何すんのよ！痛いっ！」

「失せる…二度と梨桜の前にその面を見せるな」

本気で怒っている寛貴を見て恐怖を覚えたのか体を震わせていた。愁君に言われて大人しくしていれば良かったのに…相手が悪すぎだよ、それに今頃気付くなんて遅すぎる。

「離…して」

涙目になっている由利ちゃんの手を振り払うように離すと、彼女はぺたりと地面に座り込んだ。

「くだらねえ…行くぞ」

放心したように座り込んでいる由利ちゃんを見ていたら、寛貴に手を引かれた。

「気は済んだか？」

「…分かんない」

気は済まないけれど、二度と関わりたくない。その気持ちの方が大きい。

こんなにも誰かの事を“嫌だ”そう思う事が悲しく思えてしまう。

「梨桜！！」

突然呼ばれて顔を上げると、円香ちゃん走ってきていた。

「円香ちゃんだ…」

「梨桜っ」

円香ちゃんに向かって腕を伸ばすと、飛びつくようにぎゅっつき締められた。

「敬彦に聞いて、心配したんだからね！」

息を切らしながら私の背中をポンポン叩いて「頑張ったね」と言ってくれる彼女の背中に手を回してぎゅっつき抱きしめ返した。

円香ちゃん、大好きだよ。

敬彦から、尚人と梨桜の事を聞いて心配で駆けつけると泣いた目をした梨桜が愛しくて抱き締めた。

途端に額に怒りマークが浮かび上がりそうなの男。
ふん、あんたのモノじゃないんだからね

「頑張ったね、梨桜」

額をコツン、とつけてもう一度言つと「褒めてくれる？」と潤んだ瞳で見つめられた。

ああ、もう可愛いすぎる。

ぎゅうっと抱き締めると「えへへ」と照れ笑いが聞こえた。

「久しぶりに円香ちゃんに褒められた」

これ、同じ目線から見ても可愛いけど、上から見下ろしたらスッゴイ破壊力だろうな…

背中に視線を感じるけれど無視して久しぶりの梨桜を堪能。

「梨桜ちゃんは閉会式に出ないで女の子と抱き合っちゃうんだ」

からかうような声に顔を上げると、いつの間にか葵君と梨桜の友達がいた。

葵君の視線の先を見ると、地面に座り込んでいる由利を見ていた。

また、下らないことを企んだんだろう…本当にバカな女。

「梨桜は借りて行くから」

「あ？」

不満そうな藤島君と葵君にじゃあね、と手を振って梨桜の手を引いた。

お気に入りのカフェで、二人でよく食べていたケーキを目の前に、頑張った梨桜をねぎらった。

「梨桜、それ痛々しいね」

右手首に指の跡がついていた。よっぽど強く掴まれないとこんな痣にならない。

それだけ尚人の想いは強かったっていうこと？

葵君に殴られて、二度と梨桜に近づくなって言われたらしいけど…
自業自得だよな。

「うん、痛かった」

梨桜の頭を撫でてあげようと思ったたら青い痣の上に朱い痕があるのが見えた。

「それ、どうしたの？」

梨桜が腕を引くより早く手をつかんで自分に引き寄せて間近で見ると…

「誰につけられたの？」そう聞くと、目を反らす梨桜。

その仕草と表情がすごく可愛いんだけど、見逃してあげない。

「だーれ？」

葵君がつけるわけないよね

「尚人？」

違っつて分かりつつワザと聞くと、フルフルと首を横に振った。

「…あのね」

それ、キスマークだよな？そんなのをつけるのは…

「藤島君か」

「う…どうして分かったの!？」

分かるに決まってるでしょーが！おバカさんだね。

…しかし、純粋な梨桜を相手にやることはちゃっかりやる男だよね。

「田香ちゃん、どうしよう」

藤島君の顔を思い浮かべながらケーキを口に運んでいると、急に梨桜が困った顔をして私を見つめていた。

「どっつしたの？言っつてっらん」

「キ…スしちゃった」

そう言うなり顔を伏せてテーブルに突っ伏した梨桜
何をそんなに狼狽えているのか…前にもキスされた。って聞いてい
たから驚きもしない。

「今更でしょ」

「違うの〜」

テーブルに突っ伏したまま首を横に振っていて様子がおかしい。そ
ういえば『キスしちゃった』って言ったよね？

言葉の微妙なニュアンスの違いに、まさかと思いつながら、一応聞い
てみた。

「誰がキスしたの？」

顔を赤くしてボソリと一言

「私が…」

はい？…梨桜、が？

今のは聞き間違い？

「誰に」

「…」

固まったままの梨桜の頭をツンツンと突いたら、顔を上げて私の手

をぎゅっつと握った。

「梨桜、誰に？」

「…寛貴」

紅茶を吹き出しそうになった。

「ウソ！？」

「どっしよっ…」

顔を上げた梨桜は目を潤ませて私にすぎるように見ていた。

何なのこの子…食べちゃいたいですけど？…私が男だったら、そのまま頂いちゃうと思うよ。

梨桜からキスするなんて…何をどうするとそういう状況になるの？

「円香ちゃん、呆れた？」

「呆れてないよ」

呆れてはいないけど、気になったことがあるんだよね。

「正直に言っただけで、彼と何回キスした？」

眉根を寄せて考え始めた。

私が聞いたのは過去二回なんだけど、思い出しているってことはそれ以上のね

「もういいわ…」

梨桜も成長したのね…お姉さんは寂しいわ。

「その後はどうなった？」

「由利ちゃんが来て言い合いになったの」

梨桜が転校してくるまで自分が女王様のように振る舞っていたけれど、梨桜が来てからは見向きもされなくなった。

逆恨みも大概にすればいいのに、梨桜から尚人を奪って得意になっていた。

…本当にバカな女

「それで？尚人とは違ったんでしょ？」

「う…」

下を向いて固まった梨桜に「良かった？」と小声で聞いたら

「円香ちゃん!！」

顔を真っ赤にして抗議された。だから、可愛すぎるんだって…

「梨桜、私は正直な子が好きよ？」

ああ、可愛すぎて苛めたくなる。

「梨桜？藤島君とのキスは？好き？」

ニツコリ笑って問いかけると、両手で顔を隠してしまった。

「りーお？」

恥ずかしがっている顔を見たくて、梨桜の顔から手を外すと、想像通りの困ったような顔。

この顔が見たくて意地悪しちゃうんだよね。

「意地悪！」

「藤島君で、どんな人？」

「…怒ると恐いけど優しい」

まあ、優しいよね。梨桜しか見てないって感じがする。

「それから？」

「葵じゃないのに、一緒にいると安心できた」

それって結構大事な事だよね。

ちゃんと自覚したんだ？偉いね。

「うん、後は？」

「困ったときに助けてくれる」

「それって、梨桜だからかな…他の女の子にも同じように接していたら梨桜はどう思う？」

「…」

鈍い梨桜にも分かるように言ったら、眉を顰めてテーブルを見ていた。

「梨桜？」

「イヤ」

早く藤島君に堕ちちゃいなさいよ。
彼なら、許してあげる。

「円香ちゃん、電話だよ？」

せっかく梨桜との楽しい時間を過ごしていたのに邪魔な電話。どうせ敬彦だろうと思って無視しようとする、梨桜から「出てあげて」と言われて仕方なく電話に出た。

「なあに？」

やっぱり電話の相手は敬彦で、低めのテンションで電話に出ると『円香：』情けない声。

『オレ、持ちこたえられる自信が無い』

何を気弱な事を言っているんだか：情けない。そこで防いでくれなきゃ意味がないじゃない？

「邪魔されたくないんだけど」

『早く今いる場所を教えろ』

いつも一緒にいるんだから、今日くらい譲ってくれればいいのに…どこまで独占欲の強い男達なのよ？

「え、心が狭いぞって言って…」

不満を敬彦にぶつけると、少しだけ小声で話し出した。

『おまえな、相手が悪すぎるぞ』

情けない事を言う敬彦を叱りたくなかった。同い年の男相手に何をそんなに弱気になっているの!?

「敬彦、あんたねえ」

梨桜が「どうしたの?」と首を傾げて聞いている。敬彦と喧嘩をすると梨桜が心配するから…一度深呼吸をして気持ちを落ち着けた。

『ナンパ目的の男に付き纏われたらどうすんだ?おまえまで拉致られたらどうするんだよ』

「…」

前から美少女だった梨桜は、東京に行ってますます綺麗になった。無いとは言い切れないその可能性に仕方なく今居る場所を教えた。

「タカちゃんが迎えに来るの?」

「…どうだろ、違うと思うけど」

私の読みでは、葵君と敬彦が迎えに来るような気がする。

「ねえ、東京では男に絡まれないの?」

一瞬、キョトン、としていたけれど「そんなの、無いよ」とケラケラ笑っていた。

「なんで絡まれないのよ」

そう言つと、眉を顰めてブツブツと不満を漏らし始めた。

「だって、放課後に一人で出歩くと凄く怒られるし、麗香ちゃんと放課後デートしている時だって誰かが見てるの。この前もね…」

護衛付きって事ですか…

梨桜から夏休みにあつた合コン事件を聞いて、悪いけど笑いたくなつた。

「そう言えば、騙されて合コンに連れて行かれてたよね。新作が出る度にさ…」

梨桜と仲の良かった子達は、梨桜にとって良かれと思って連れて行っていただけ、当の本人は乗り気じゃなくて、むしろ合コンが嫌いだった筈。

「円香ちゃん、その『新作が出る度に』ってナイシヨね？」

真剣な顔をしている梨桜に「ハイハイ」と返事をして、残りのケーキを口に入れた。

「あ！」

梨桜が私の後ろを見て手を上げた。

やって来たのは、やっぱり葵君。
梨桜に紙袋を渡すと「着替えてこい」と言い、梨桜と入れ替わりで
席に座った。

「由利は？」

敬彦に聞くと、苦笑いを浮かべていた。

「藤島が凄んだら腰抜かして泣いてた」

うわ…あの、由利が泣くなんて…

相手が悪いってこういう事か…梨桜は良く平気だよね。

「東堂は大丈夫そうか？」

「大丈夫だと思う」

尚人と由利の事よりも藤島君とのキスで頭が一杯になってたもんね。
できる事なら、傍にいて今後の展開を見たいわよ。

「お待たせ」

「頭は？気分は悪くないか」

梨桜が隣に座ると頭を撫でている葵君。相変わらずだね…

「押すと痛いけど、大丈夫みたい」

葵君が持ってきた私服に着替えた梨桜は可愛い…

服は葵君と買いに行くことが多いらしいけど、彼が選ぶ服は梨桜の

可愛らしさを活かすものばかり。
何が梨桜に似合うかを完璧に把握していて…感心します。

「円香ちゃん、この後、予定はある？」

「空いてるよ」

葵君をジッと見ると、葵君は頷いていた。
嬉しそうに笑う梨桜。

「円香ちゃんとタカちゃんと一緒にご飯食べたいんだけど…いい？」

「おう」

「いいに決まってるじゃない！」

両脇に総長を従えて、ぶどう海老の握りを食べて「おいしい！」と嬉しそうな梨桜。
さつきから海老だけで5種類も続けて食べていて、6種類目は葵君に止められていた。

このイケメンに囲まれながら、海老に没頭出来る梨桜って凄いと思う。

座敷で食事をしている私達は、お店の店員さんは勿論、他のお客さんの注目を浴びている。ここは寿司屋なんだけど、この座敷だけキラキラしたオーラが出ているような気がするよ。

「円香ちゃん、もうすぐ修学旅行だね」

私も行きたかったな、と言いながら梨桜がお茶を飲んでいる。私も梨桜と一緒に行きたかったよ。

ウチの学校はオーストラリアに行く予定。

「お土産買って来るね。何がいいか考えてて」

「うん。タカちゃんは？どこに行くの」

卵焼きを口に入れて「幸せ」と笑っていて、敬彦も前と変わらない梨桜にホツとしたような顔をしてる。

「東京と横浜。オレも海外が良かった」

「時間があつたら遊ぼうね。葵達はイギリスでしょ、寛貴達はどこに行くの？」

隣に座っている藤島君が怪訝な顔をして梨桜を見返していた。

「何言ってるんだよ」

「修学旅行の話だよ」

「…無い」

「冗談は嫌い。どこに行くの？って聞いているの」

ムツとしながら言い返している梨桜。それに真顔で返す藤島君。

「紫苑に修学旅行は無い」

「梨桜ちゃん、知らなかったの？」

大橋君が笑いながら聞いていて、葵君も「おまえ、知らなかったのか」と見下ろしている。

梨桜は藤島君の腕を掴んで揺さぶっていた。

「嘘でしょ？」

「こんなことで嘘ついてどうすんだよ。昔から修学旅行は無いんだよ」

あ、梨桜が固まった。「梨桜」と正面で手を振ったら、がっかりした顔をしている。

この顔を見るのも久しぶり。

この状態から、もう少し苛めると「円香ちゃん」と言って泣きついてくるの

。それが見たくていつも苛めちゃうんだよね。

「おまえも一緒に来るか？親父の所に泊まればいいだろ」

葵君に『コラ！』と突っ込みたくなった。弟の修学旅行に着いて行く姉がどこにいるのよ！！

甘やかすのも大概にしなさいよ？

葵君の言葉に、悲しそうに呟いた。

「パスポートが無いよ」

ちよっと、梨桜！パスポートがあったら行くつもり！？

だっ
たら
ウチ
の学
校の
旅行
に来
れば
いい
でしょ
！

.

Line (1)

札幌から帰ってきて、日常に戻った私は、今日も朱雀の倉庫に来ていた。

「…まだ食べるの？」

「食べるよ。このクリームコロッケ旨い」

「そう…ありがとう」

『コロッケ』お惣菜の定番メニューが、凄い勢いで無くなって行く。葵に『オレはもう当分コロッケは見たくない！』と言われた可哀想な私のコロッケは、悠君を始めとした準幹部の男の子達にはば食べ尽くされてしまった…

見ている私が胸やけしそう。

「コンビニに行ってくる」

悠君達から目をそらして言うと「誰かに行かせる」と言葉が返ってきた。

「自分で行くよ。皆食べている途中だし…」

お財布を持って部屋を出ようとすると寛貴と一緒に部屋を出た。

「どっしたの？」

「1人じゃ危ないだろ」

夏休みにあったあの事を忘れたわけじゃないけど、あんなことは滅多にないと思うんだよね。寛貴にまで過保護になられると困る…

倉庫からコンビニまで、通りを挟んで直ぐの距離なのに…

何を言っても無駄だという事は、最近思い知ったから、寛貴と一緒にコンビニに行くことにした。

コンビニに入る時に寛貴の携帯が鳴った。

少し難しい顔をして画面を見ていたから、電話が出来るように「買い物してくるね」そう言うと寛貴は店の外で話を始めた。

飲みたかったお茶を買い、済ませたかった用事を終えてコンビニを出ると、寛貴が女の子と話をしていた。
女の子が寛貴に何かを手渡そうとしている。

寛貴を見上げて一生懸命に気持ちを伝えようとしている彼女は…可愛い

二人の傍に行つてはいけないような気がして、もう一度お店の中に入ってしまった。

ふいに、今まで考えもしなかった現実に気付く。

これ、いつもは逆なんだ…

札幌で円香ちゃんに聞かれてから、私は少しおかしい。

あの時、寛貴が私以外にあの笑顔を向けたら…そう考えて、胸が焼けそうだった。

必要の無いモノまで買ってしまい、大きな袋をぶら下げてお店を出るとまだ話をしていた。

背中を向けている寛貴の後ろを通り過ぎようかと思ったとき、女の子が「あ！」と声をあげた。

「梨桜さん！」

その声に寛貴も振り返って私を見ると、袋を持ってくれた。

「ありがとう」

きらきらした笑顔で私に笑いかける女の子…

「あの、私…梨桜さんのファンなんです…！」

『きゃ！言っちゃった！』と言いながら、私を見上げている。下から見上げられて…この子、本当に可愛いね…

「おまえのファンだから、話をさせろってうるさい」

面倒そうに言う寛貴を見上げて頬を膨らませ「私は本気なんですよ！」「と可愛らしく抗議している。

「梨桜さんとお話するには藤島さんに許可をとらなきゃって思ってたんです！」

女の子と会話するのに許可はいらないと思っただけ…寛貴を見ると「うるさい」と目で訴えていた。

「そっ…」

私の何を見て、ファンだって言うの？

「宮野さんにも許可をとらないとダメでしょうか」

おずおずと私を見上げる表情が可愛い。私も見習うべき？
にこっと笑った彼女を見て、私も微笑み返した。

…笑う時に気を緩めちゃ駄目だよ。“宮野”って言った時に、本音が顔に出ていたよ。

寛貴の名前を出した時は失敗しなかったのに、残念だったね。

「あの、今度お話してもらえないでしょうか？」

『いい』とも『悪い』とも答えずに笑みを返すと、彼女は困ったように首を傾げた。

「やっぱり…宮野さんにも許可をとらないといけませんか？」

私と仲良くなつて、葵に近づくのが目的。そういう子が少なくなかったのに、久しぶりだったから、騙されそうになった。

「寛貴は許可を出したの？」

「この女の事は…オレがとやかく言う問題か？」

「この女じゃないです！さっき名前、言ったじゃないですか」

また、頬を膨らませて口を尖らせて抗議している彼女を見下ろしている寛貴。

この光景が嫌。見たくない…

Line (2)

「あの、お口に合わないかもしれませんが、梨桜さんに食べて欲しくて作ってきました！」

差し出された袋を受け取り、お礼を言うと「たくさん作って来たので皆さんでどうぞ」と私ではなく寛貴に笑顔を向けた。

皆さんで…？葵と寛貴に、なんでしょう？

「ありがとう、皆で頂くね」

「あの…また、ここに来ます！お話してもらえませんか？」

「また、会えたら……」

それじゃ、と彼女に軽く頭を下げてその場を後にした。あなたが会いたいのは私じゃないだろうけど…

「こんなに買ってどうするんだ？」

信号待ちをしていると、寛貴が不思議そうに袋の中を覗き込んでいた。

袋に入っているのは、おにぎり、サラダ、菓子パン…後は、なんだっけ？

手当たり次第にカゴに入れたから何を買ったか自分でも覚えていない。

「梨桜はこんなに食べないだろ」

「…桜庭さんと牧原さんに食べてもらおうの」

青龍と朱雀、それぞれの運転手の名前を上げると、怪訝そうな顔をしていた。二人共ごめんなさい、名前を借りてしまいました。

「なんで桜庭と牧原なんだよ？」

何故か不機嫌になってしまった。

送り迎えをもらっている二人に差し入れをするのって変じゃないと思うんだけど…

「いつもお世話になってるから…寛貴の食べたいものがあつたら、食べて」

もしかして、寛貴の食べたいものが入ってた？
そう思っただけなら、真顔で返された。

「さっきお前が作ってきたのを食べたからいい」

「…」

だったらどうして不機嫌なのよ…

幹部室には男の子がたくさんいて騒々しいから、限られた人しか入れない事になっている総長室で寛く事にした。

「あの女と友達になりたいと思うか？」

寛貴の問いに、買い込んだモノをテーブルに出しながら答えた。

「私には声をかけないと思うよ」

私って…バカ？

いつもなら選ばないものばかり…小さい頃に買っていた駄菓子が入ってる。

「どついう意味だよ」

お菓子を一つ取り出して封を開けた。

これ、煙草を吸っていた慧君の真似をして葵と一緒に食べたよ。懐かしい…あの頃は葵もチョコレートを食べられたんだよね。

「私がないときに寛貴が声をかけられると思うから。よろしくね」

煙草に似せて作られたチョコの包み紙を剥がして口に銜えた。

唇に触れているところから、チョコが解けてきて、口の中に甘さが広がっていった。

「どついう意味だよ」

さあ、どついう意味だろうね…首を傾げたら、銜えていたチョコを取り上げられた。

眉間に皺を寄せて「梨桜」と促されたから教えてあげた。

「寛貴と葵に近付きたいから、私の友達になりたいの。…だからそのお菓子も私にじゃなくて、寛貴と葵にだよ」

名前も知らないさつきの子、ごめんね…でも、私を利用しようとするのもズルいからお相子ね？

寛貴からチョコを取り返して、パクパクと食べた。

あま…こんなに甘かった？

「おまえ…」

心配そうな顔をした寛貴に、ひらひらと手を振った。

「慣れてるから平気。…傷ついてないから大丈夫だよ」

久しぶりだったから、騙されそうになったけどね…

可愛い包装紙に包まれた箱を開けると、クッキーが入っていた。

「女の子だね。ラッピングが可愛い」

また、葵目当てに近寄って来られたことよりも、寛貴が…

考えるの止めた。消化不良になりそう…

クッキーを一つとって口に入れた。

好きな人の事を思っ作っただであるうソレは私には凄く甘く感じられた…

「食べる？」

クッキーが入った小袋を寛貴の顔の前に差し出すと、受け取ってテーブルの上に置いた。

「手作りなんて、気色悪くて食えるかよ…」

今更だけど、さっき寛貴が食べたコロッケは私が作った手作りなんですけど…

「ごめんね、今まで手作りを食べさせて…」

片眉を上げて睨まれて『おまえ、バカか？』視線でそう言われている気がした。

「梨桜は違うだろ」

ソファの上で膝を抱えて、顔を伏せた。

「梨桜？」

「ん…」

どうしてだろう？睨まれても、怒られても…その一言が嬉しい。

Line (3)

『…梨桜、顔が変だぞ』

昨日の夜、葵に言われた一言。葵の背中にクッションを叩きつけてやったけど、自分でも自覚していた事を言われると落ち込む…

考えないようにしよう、止めようと思えば思う程、浮かんでくる顔。変顔が治らなかつたら円香ちゃんのせいだよ！！責任取ってよね！？

「東堂さん、そんな顔をしなくても大丈夫よ？」

「…」

声をかけられた方を向くと、クスリと優しく笑う先生。今は授業中だった…

「心配しなくても上手に出来上がると思うから」

オーブンの前でまた変顔をしていたようで、先生が心配して声をかけてくれたらしい。

「ハハ…そうですね」

恥ずかしい…

気を取り直して後片付けをすることにした。

『もしかして…』なんだけど、気付いたことがある。そう、もしかして私…

「っ…ふえっ…」

突然聞こえてきた泣き声で考えを中断されてしまった。

「…ッ…　それでねっ、ユキヤ先輩がっ」

「」

「関係ないだろって…私好きなのにつ」

女の子の涙を見るのは苦手…ってなんだか、男の子みたいな発想だけど、悲しそうに泣いている小橋さんを見ると胸が痛くなる。

「ねえっ酷いと思わない？東堂さん！」

小橋さんと仲が良い斎藤さんに言われて曖昧な笑みを返した。ごめんなさい、全然聞いてなかったの…

焼き上がり知らせるオーブンの扉を開いて皿を取り出しながら、彼女達の会話に耳を傾けてみた。

「ひどいね、エッチしたら冷たいなんてサイテー」

麗香ちゃんが憤慨している。

そもそも、何の話？ユキヤ先輩って言うていたけど、小橋さんの彼氏だよね？

「うわ〜東堂さん美味しそう！」

話の内容が見えなくて、首を捻っている、違う女の子が隣から私の手を覗き込んで感心したように言う
ちなみに今は調理実習中で、今日のテーマは小麦粉。私はパンを作ったけれど、他はケーキを作っている子が多かった。

「焼きたてのパンの匂いっていいよね」

食パンとクロワッサンとチーズが入ったパンを作ったんだけど、最近のもやもやを粉にぶつけたら作りすぎてしまった。

食パンは明日の朝食にするからいいけれど、作りすぎたパンは… 菜に見つかるよとまた『人数を考えると』って怒られてしまうから、朱雀の倉庫に持って行けば誰かが食べてくれるかも…

「ユキヤ先輩に今作ったケーキを持って行って仲直りしてきたら？ 惚れた弱みだよ」

麗香ちゃんが言った。

何時の間にか話はまとまっているらしい。

話の内容が分かっている麗香ちゃんに後から聞けばいいや。と思い、焼き上がったパンを籠に移すことにして、手を動かしていると

「…東堂さん、一緒に来てくれる？」

「…え？」

私？

「だって2年の教室なんて1人じゃ行けない！お願い、一緒に行つて！！」

小橋さんに手を合わされてお願いされたけど、私だって男だらけの校舎なんて嫌！これ以上、むさ苦しいところに行きたくないよ！

断ろうと思っていたのに、授業が終わると同時に小橋さんに拉致された。

私の腕をがっしりと掴まれ、逃げられない。

「ユキヤ先輩のクラスは？」

仕方ないな、と小橋さんに聞くと、瞳をうるうるさせながら首を横に振った。

「やっぱり行くの止めようかな…無視されるの、怖いもん」

さっき、麗香ちゃんから小橋さんが泣いていた理由を聞いた。

彼氏のユキヤ先輩と…エッチをしたら、急に冷たくなってしまい、浮気をしているんじゃないかと疑ったら逆切れされたらしい。

そんな男、別れちゃえ！そう思ったんだけど、彼女はユキヤ先輩の事が好きらしく、仲直りをしたい。…けど、二の足を踏んでいる。

「2組…どうしよう？私やっぱり」

「ここまで来たんだから頑張って！」

急に怖じ気づいた小橋さんは帰ろうとするけれど、その手を掴んで2年のクラスがある2階を目指した

2年と3年のクラスがある校舎はいかにも男子校といった感じ。

私達が歩くのは異質そのもので皆が私達を見る。『1人じゃ行けない』という意味が良く分かった。

嫌がる小橋さんを引きずるようにして歩き、やっと2年2組の前に来た。

「あれ…姫？」

廊下から、どれがユキヤ先輩なんだろうかと考えていると、見覚えのある顔が私を見ていた。朱雀の倉庫で良く見る顔だ。

小橋さんは私の後ろに隠れてしまい、逃がさないように腕を掴んだ。

「マジ!?!…姫、何でここにいるんだ？」

だから、姫じゃないって何回言えば分るのかな…ムツとしたけれど、彼等なら顔見知りだし、ユキヤ先輩を呼んでもらうのに丁度いいと思ひ、お願いすることにした。

「ユキヤ先輩を呼んで欲しいの。いる？」

「ユキヤ？」

「そう、ユキヤ先輩」

そう言うと、私を“姫”と呼ぶ彼等は眉を顰め、首を横に振った。

「…姫、そりゃマズイよ」

「ここに来て違う男呼び出すなんて…姫、どうなってもオレは知らねーぜ？」

.

Line (4)

「姫って怖いモノ知らずなんだな」

ジタバタしている小橋さんの手を掴みながら「早く!」と言つと、朱雀のメンバーの彼等は肩をすくめて教室に向かって口を開いた。

「ユキヤ!」

「客!1年の女の子!」

大きい声で呼ぶから私達に気づいていない人まで振り向いた。一斉に注目を浴びて恥ずかしい…

「姫、これでいいか?」

不満の残る呼び方だけど、とりあえず助かった。「ありがとう」と言つと、「姫、頑張つて」と言われた。

頑張るのは私じゃなくて、小橋さんだから。

「え…君つて、…東堂梨桜ちゃん?」

声をかけられて、そちらを見るとちよつと軽そうな男の子が立っていた。

「ユキヤ先輩ですか?」

男は「あ、うん」と頬を染めて頷いた。どうして頬を染める必要があるの?

「そうだけどオレに用事？…東堂さんが来てくれるなんて嬉しいな」
照れくさそうに笑う彼が分からなくて、首を傾げると凄い力で手を振り払われた。

「やっぱりダメー!!」

「え!?!」

小橋さんが私の体を押しつけるようにして手を振り払って逃げた。よるけて尻もちをついてしまうと、ユキヤ先輩が何が起こったのか理解できないのか、呆けた顔で私を見ていた。

「追いかけて!」

床に座り込んだまま言うと、訳が分からないのか、私と、私が指差す方を交互に見ているユキヤ先輩。
何をモタモタしているの!早く行って!!

「え?」

私を見なくていいから、早く!!

「早く追いかけてっ!ほらっ」

小橋さんが逃げた方を指差して、ユキヤ先輩の膝をバシッと叩いた。

「小橋恵美ちゃん!早く追いかけて!彼女でしょ!?!」

「え?恵美!?!」

漸く走り出した彼を見て、一安心。
どうか、仲直りしてくださいように。
用事は済んだから、早く帰ろう。ココは視線が煩くて居心地が悪すぎる。

「何をしてるんだおまえは…」

頭の上から声が降ってきて、見上げると寛貴が私を見下ろしていた。
あれ、寛貴ってこのクラスなの？

「転んだのか？」

「うん、まあ…」

差し出された手を掴もうとしたら、両脇に手を掛けられて身体を持ち上げられた。

「…ありがとう」

トン、と地面に立たされると教室から拓弥君が顔を出した。

「梨桜ちゃんから、すげーいい匂いがする」

クンクン、と拓弥君が匂いの先を探し当てた。

「入りなよ」

拓弥君に腕を引かれて教室に入ってしまった。「お邪魔します」と言いながら中に入ると、クラス中から注目を浴びていて、恥ずかし

い。

高校生の男の子って1学年違つと雰囲気随分変わるんだね…

「そこに座れ」

寛貴が座つた隣に座り、手にしていた袋を机の上に置いた。

「それ何？」

「パン。さつき焼きあがつたの…食べる？」

袋から、小分けにしていたパンを出すと、拓弥君と寛貴が手に取つて口に入れた。

「旨い！梨桜ちゃん、なんでユキヤを呼び出したんだ？」

「小橋さんに彼と仲直りしたいから一緒に来てつて頼まれたの。先輩の為にケーキ焼いたんだつて」

寛貴がもう一つパンを手にした

お昼休みまでもう少しなのに…今そんなに食べたら、お昼が食べられなくなるよ？

「寛貴お腹すいたの？」

「ああ…これ、旨いな」

「梨桜ちゃんはパンでユキヤの彼女はケーキ？」

「うん、まあ…」

ケーキもいなくなって思ってたんだけど、なんか…ストレス解消に捏ねたくなつたからパンにしたんだよね。
拓弥君のせいで、また思い出してしまった。

「?…なんか意味深だな」

拓弥君に笑われて「意味なんかないよ」と言うと、「ムキになると怪しい」とからかわれた。

この男にだけは絶対に知られたくない。知つたらずーっとからかつて遊ばれて…考えるだけで恐ろしい!

予鈴が鳴り、次の授業は移動教室だったのを思い出した。

「教室に戻らなきゃ。今日、悠君は休みだけど倉庫には来るんですよ?」

「ああ」

授業はサボってもチームには来るってやっぱり不良だ。授業を受けないから赤点になっちゃうのに…

「作りすぎたからみんなで食べてくれると嬉しいんだけど…いい?」

「あいつら喜ぶよ。この前も感激してたよ」

大袈裟な…手抜きコロッケだったのに…
紙袋を寛貴に渡して立ち上がった。

「校舎まで送る」

「大丈夫だよ？」

「バカな野郎達に絡まれたら嫌だろ？寛貴に送ってもらいなよ」

さっきのむさ苦しい雰囲気思い出して頷くと、寛貴も立ち上がった。

廊下はやっぱりさつきと同じで、女子生徒一人じゃ歩けない雰囲気。良くここを通って来たな、と我ながら感心する。

「一人でここに来るなよ？用がある時はオレを呼べ」

私をじろじろと見ている人達も、少し前を歩く寛貴を見ると視線を逸らしてしまう。

この男達の頂点に立っている男…

どうしよう、背中を見ているだけなのに…胸が、ギュツとなりそう…

「おい、聞いているのか？」

振り返らないで欲しい、また変顔になるから…

「梨桜？」

私が黙っていると、立ち止まって顔を覗き込んだ。ああ、もう本当に止めて欲しい。

今の私を見ないで…

「うん、聞いてるよ」

“もしかして”の想いは確信に変わりそうだ…

・

・

夜、円香ちゃんに電話をしたら、『アハハ』と笑われた。

「笑い事じゃないよ」

他人事だと思って楽しそうに笑っている円香ちゃん。真面目に話しているのに！

「円香ちゃん！」

そう言つと、少しトーンを落とした声で『あのね、梨桜』と切り出
した。

『初めてでしょ？そういう気持ち』

「そうかもしれない」

『ドキドキするけど、離れたくないんでしょ？』

「…」

その通りかもしれませんが。

円香ちゃんという言葉は的を得ていて、曖昧にしていたかったことも八

ツキリと私に突きつけてくる。

『だったら、自分の気持ちと彼の気持ちに向き合ってみたら？今のままにしたっていい事なんか何もないでしょう？』

「……」

円香ちゃんて、凄いな。私が前に進もうと思える言葉をスルスルと紡ぎだすの。

私の気持ちと寛貴の気持ち

前、私に言ったよね？

あの言葉の裏にある寛貴の気持ちは、私と同じ？

甘い

「悠君、まだ食べるの?」

オレは絶品のパンプキンパイを口に入れた。

「旨いからまだまだ食べるよ」

梨桜ちゃんは『かぼちゃがたくさん採れたからお裾分け』そう言っ
て、大きな紙袋を二つ抱えて朱雀の倉庫にやって来た。

「本当に旨いです!ありがとうございます」

幹部室に山盛りに置かれた梨桜ちゃんお手製のスイーツ達は朱雀の
準幹部達によってほぼ食べ尽くされようとしていた。

「こちらこそ、いっぱい食べてくれてありがとう」

梨桜ちゃんは少し照れながら、あの破壊力が半端ない笑顔を見せた

また甘い

パイの事ではない。ウチの…朱雀の鬼総長の事だ。

札幌から帰ってきて、寛貴さんが柔らかい雰囲気を出すときがある。
きつと他の奴等には分らない。

気付いているのは拓弥さんくらいだろう。

「買い物に行つてきていい？」

梨桜ちゃんが寛貴さんを見るとき感じが可愛い。

「何をかうんだ」

寛貴さんは背が高いから梨桜ちゃんは見上げて、寛貴さんは少し見下ろすようになる。その2人の距離感がなんかいい。

二人を見て、こんな風に思えるなんて…まだ信じられないけど、梨桜ちゃんのこの笑顔を見るとなんだか穏やかな気持ちになるだよな。

「あのね」

内緒話のようだ。

寛貴さんが梨桜ちゃんの口元に顔を寄せて話を聞くとフツと寛貴さんが笑った。

「いいよ。オレと一緒に行く」

「梨桜ちゃん、何かうの？オレも行く！」

ついで行くつもりもないクセに…拓弥さんが言うと、寛貴さんは微かに眉を顰めた。

拓弥さんは寛貴さんで楽しんでいる。この人を相手に遊んで楽しむなんて、命知らずだ。

「お前らは留守番してる。車出せ」

案の定、速攻却下。

拓弥さんは吹き出しそうになるのを堪えていて、寛貴さんにジロリと睨まれていた。

マジ、命知らず。

「え？電車で行くつよ」

寛貴さんは梨桜ちゃんを見下ろしていて、微かにだけど、眉間に皺が寄っている。

…気持ちはわかるけど、彼女に対してはすっげー心配性。

「危ないからダメだ。お前は声をかけられるとすぐ鵜呑みにするだろ」

「 警沢者」

「梨桜さんつ総長は敵チームに狙われやすいんです！だから車なんですー！」

寛貴さんが眉を顰めたのを見て、準幹部が慌ててフォロースる。

フォローなんかかしくないのに 梨桜ちゃんが寛貴さんに意見を言うときの2人のやりとりがなんとなく好きだ。

まだこいつらは見たことがないから仕方ないか 拓弥さんなんかニヤニヤしながら見てるのに…

「 そうなの？じゃあ、私の買い物につきあわせたら危ないよね。寛貴、ごめんね。私1人で行ってくる」

危ないの基準を間違えてるから…

寛貴さんに喧嘩を売って、返り討ちにされる奴らの方が『危険だからやめろ』って言ってやりたいくらいだぜ？

「余計危ないだろ」

そうだ、梨桜ちゃんを一人で買い物になんか行かせられない。そう思っていると、何やら考え込んでいた。

「じゃあ、愁君にお願いする。一人にならなければいいんでしょ？」

「…」

またやった。

彼女の場合、地雷を踏むのではなく、オレ達に爆弾を投げて寄越す。投げた本人は自覚がなく、のほほんとして投げられたこっちは大変だ

どうしてここで“宮野”じゃなくて“三浦”なんだよ！？君はどんだけ三浦に手懐けられてんの？

「ごちゃごちゃ言っでないで行くぞ」

総長、ご立腹。

「いいの？」

「いいに決まってるだろ！行くぞ」

また笑顔。凶器だよそれ…

ウチのチームで何人やらしたと思ってんの…

「おい　　ウチの総長様がデツカイぬいぐるみ抱えてんだけど…」

寛貴さんと梨桜ちゃんが出かけてからしばらくして…拓弥さんの言葉に耳を疑った。

ぬいぐるみ？…寛貴さんが！？

「またまた　拓弥さん、ありえないって。これから傘下のチームが挨拶に来るんだぜ？」

冗談も大概に、と続けようとしたら、拓弥さんは真顔で窓の外を指差した。

「　　オレにはアレがクマのぬいぐるみにしか見えない」

窓に駆け寄ると、確かに寛貴さんはぬいぐるみを脇に抱えている。首にリボンが結ばれているクマを抱えてるってどういうことだよ！？

ここは朱雀の倉庫だぞ！？

寛貴さんは総長だぞ！？

前代未聞だ！！

『嘘だろ！！』と叫びそうになったけれど、続けて車を降りて来た梨桜ちゃんを見てホツとした。

「梨桜ちゃんのクマだろ…焦った」

「だよな。でも、寛貴が女にぬいぐるみを買って与えるっていう図もありえないだろ。あの寛貴だぞ!？」

確かに

どんな顔をしてあのぬいぐるみを買ったのか見てみたい。

オレは真相を確かめるために、幹部室から出て一階へ降りて2人を迎えた。

「おかえりなさい」

「ただいま!」

「ああ」

早めに到着していた傘下のチームの幹部達は、寛貴さんがぬいぐるみを持っている光景に驚いていた。

「梨桜ちゃんのクマ?」

梨桜ちゃんは寛貴さんからぬいぐるみを受け取るとオレの目の前に持ち上げた。

「この子はね、麗香ちゃんの誕生日プレゼントだよ。可愛いでしょ?」

ああ、笠原…納得した。

これを買っていくための買い物ね

「なんだ」

寛貴さんが梨桜ちゃんに買ってあげたのかと思った。

「悠君も内緒にしててね。この子をプレゼントして驚かせたいの」
クマを抱き締めながらすっげーニコニコしていて、こっちまで笑っ
てしまう。

「寛貴さん!」

傘下チームの幹部達が挨拶をするために駆け寄って来ると、寛貴さ
んから目線で“梨桜ちゃんを連れて行け”と言われたオレは梨桜ち
ゃんからぬいぐるみを受け取った。

「...」

寛貴さんに挨拶に来たハズなのに、その手前で立ち止まってしまっ
ている幹部達。

奴等を見て、梨桜ちゃんが頭を下げた。

「こんにちは、東堂梨桜です」

「...こんにちはっ」

一瞬にして、ヤンキーが純情少年になった。
今日もまた、凶器の笑顔に破壊された奴が数名...

「梨桜、上に行つてろ」

苛ついた声は暗にオレを急かしている。
今日の寛貴さんはいつになく心が狭い。

いつまでも呆けた顔で彼女を見ているバカ達から梨桜ちゃんを遠ざけるために総長室に連れて行った。

ベッドの上にクマのぬいぐるみを置いたんだけど 殺風景なこの部屋に、ぬいぐるみは非常にそぐわない。

「これ、いつ笠原に渡すの？」

「明日の放課後だよ。寛貴が生徒会室に運んでくれるって言うてくれたの」

寛貴さんがこれを抱えて学校の中を歩くのか？ 似合わないけど、
なんだか微笑ましい。

「悠君、これからここで何かあるの？」

「傘下に所属してるチームの幹部が挨拶しに来るんだ」

「私、ここにいていいの？」

明日の事を想像してニヤケそうになっていると、梨桜ちゃんが遠慮がちに聞いて来た。

「いいに決まつてるだろ？」

梨桜ちゃんは部外者の自分が深く関わると朱雀のメンバーが心良く

思わないと思っっているらしく、時々同じような事を聞いてくる。

実際は梨桜ちゃんと話をしてみたい奴らばかりで、寛貴さんが怖くて声をかけられないから憧れの目で見ているしかない。運良く話ができただ奴らは純情少年に早変わりしていく。

それが今の現状。

彼女は、2人の総長の弱点でありチームの弱味。それは梨桜ちゃんの身を危険に晒す事になるけれど…

それでもオレ達は君を手放したくない。

・

・

「寛貴、休憩にしようぜ」

煙草を吸いたくなったらしい拓弥さんが声をかけるとオレは総長室の冷蔵庫に何も入っていない事を思い出して、二階に上がった。

「梨桜ちゃん…何か飲む？」

「

「梨桜ちゃん？」

返事が無いと思ったら、ソファーに座ったまま眠っている梨桜ちゃん。
オレがベッドに運びたいけど、それがバレたら寛貴さんに殺される。
仕方なく下に降りて、まだ話し合いをしている寛貴さんの隣に立った。

「どうかしたか？」

「梨桜ちゃん、ソファーで寝てるけど」

寛貴さんが立ち上がって上に向かった。

「良く寝る子だよな」

拓弥さんが言い、ポケットから煙草を取りだして啜えた。

「拓弥さんオレにも一本」

チラリとオレを見て、口角を上げる拓弥さん。
それを無視して煙草に火を点けた。

「……」

ここにいる奴等が思っている事。

『寛貴さんが戻って来ない』

ソファで眠っている梨桜ちゃんをベッドに移す為に総長室に行った。
…なのにならなかつた。戻つて来ない。

『寛貴さん、ナニやってんすか？』ここにいる奴等の頭の中で、イケナイ妄想が広がっているに違いない。

でも、相手が寛貴さんだから、口に出せずにいる。

そんな中、拓弥さんだけが楽しそうに笑っていた。

「おまえら、挙動不審ですげー笑えるぞ！」

「寛貴をお前等と一緒にすんなよ」そう言いながら笑っている拓弥さんの携帯が鳴った。

画面を見て、ニヤリと笑うと楽しそうに電話に出ている。

「おまえナニしてんだよ？」

分りつつ、からかう拓弥さん。

いつか絶対、寛貴さんにシメられると思う。

「お前が送るんじゃないのか？」

仕方ねえな。ああ、

分かった。伝達しておく」

電話を切つてオレを見た。

「これから宮野が梨桜ちゃんを迎えに来る。念の為に傘下の奴等にも手出しするなって連絡入れる」

「梨桜ちゃんに何かあったのか？」

「…わかんねえけど、電話口の向こうで梨桜ちゃんが初代と話してる感じだったぜ」

「…初代って、あの初代ですか!?!」

拓弥さんの言葉に、その場に居る奴の顔色が変わった。

お前等な、初代は伝説の人かもしれないけど…

初代の正体はな……双子を（特に梨桜ちゃんを）溺愛して、五代目に呆れられてる叔父バカなんだぞ。

教えてやりてー!!

Line (7)

一緒に買い物に行けて嬉しかった。

二人で歩いて、楽しかったの

幸せな気持ちで寝ているのに……くすぐりたい。

「…ん…」

誰かが頬を撫でてる。

くすぐりたいから嫌、眠いから寝かせて欲しい。

「や…だ…」

頬に触れている手を握ってまた眠ろうとすると、クツと笑われた。

もう…悪戯するのは誰？

「…」

吃驚した…

目を開けたら、この顔があるのって…今の私には刺激が強すぎて心臓に悪いよ。

だって…やっと分かったの。

私は寛貴が好きなの。

「おい、寝るな」

この状況を落ち着いて考えようと思って目を閉じたら、頬をムニムニと摘ままれた。

こんな状態で眠れる程凶太くないから…

身体を起こそうとして、気がついた。

あれ？ソファに座ってたと思うんだけど、ベッドの上にいる。

「寛貴がベッドに運んでくれたの？」

「ああ」

そう答えると、ジロリと私を見た。

間近で睨まれて、思わず怯みそうになった。私、何かした？

「前に言ったよな？その寝顔をやたらに晒すなって」

「…」

言われた。

私の寝顔は人様に見せられないって…

「梨桜？」

どうしよう、涙が出そう。

私だって女の子だよ、好きな人から寝顔を人に見せられないって言われると悲しい。

「おい、梨桜？」

もう一度呼ばれて、涙をこらえて寛貴を見た。

「見るに堪えないんでしょ？」

「……」

フォローする言葉も出ないの？…そんなに酷いんだ。

さっきまで、一緒に買い物に行けて凄く嬉しかったのにどん底に落ちた気分。

「…勘違いしてるだろ。…つたく、おまえの思考回路を見てみたいな」

ひっどーい！！

寛貴を睨むと、可笑しそうに笑っていた。

「そついう意味じゃない」

「だったら、どついう意味よ？」

「さあな、自分で考えろ」

悔しい…バカにされてる感じがする！

むうつと寛貴を見ていると、フツと笑った。

ここで、そんな風に笑うのは反則。一瞬、息が止まったよ…

…この表情が好きなの。

目を合わせたまま、指で頬に触れた。

寛貴が、好きなの…

「梨桜？」

指で唇に触れてみた。

口数は多くないけど『梨桜』って呼ぶ唇。

触れても触れられても嫌じゃない、心地良いの

「何してる？」

「…確かめてるの」

「何を」

好き。

でも、恥ずかしくてまだ言えない。

「 ナイシヨ」

「 生意気だ」

寛貴の唇が私の唇に触れた

うん、やっぱりイヤじゃない。触れる唇は優しくて心地良い

「おまえはオレのモノだ」

嬉しい。そう思っけれど、素直に頷けない自分

「 そうなの？」

聞き返すとまた唇が重なった。

「マジで生意気な女だな」

寛貴に抱き寄せられたまま胸の中に頬を寄せた。

「さっき何を確かめていた？」

「だからナイシヨ」

『オレのモノ』発言の前に何かを忘れている。
寛貴は私を好きって言うてくれないの？

今まで、こういう場面に飛び込んでくる人がいたんだけど……今日は誰も来ない。

不思議だったけれど、まだ、こうしていたいから考えるのを止めた。

「言いたいことがあるなら言えよ」

突然言われたその言葉に、愁君だけじゃなく寛貴にまで見透かされるようになってしまったのかと思ったけれど、知らないフリを通すことにした。

「……何の事」

胸に顔を埋めたまま答えると、引き離されて顔を覗き込まれた。

「溜めこまないで言え」

いきなり言われても……困る。

言いたいんじゃないかと、聞きたいの。

「寛貴は？私に言いたいことある？」

私がさつきしたように指で私の唇を撫でると、喉の奥で笑っていた。

「……お前が言ったら言っ」

狡い。

私に言わせようっていう考えも、至近距離でのその笑顔も…狡いよ。

「…言わない」

首を横に振って、そう言ったら頭の上で舌打ちされた。

「おい」

呆れているような、怒っているような…判断がつかない声で呼ばれて顔を上げたら、私と目が合うなり大きな溜め息をついた。

「何よ」

「オレは…返事を聞きたくない訳じゃないからな。忘れるなよ？」

忘れてないよ、ちゃんと考えたよ。

答えも出た。

寛貴からそんな風に言われると、悪いことをしている気分になる。

焦らしてるわけじゃないの、気持ちを聞きたいだけ。

「聞いてもいい？」

思い切って口にしてみたけれど、顔を見る勇気が無くて俯いたままになってしまった。

「…なんだ？」

「あの、寛貴は…私の事を」

ぎゅっつて抱き締められて次の言葉が繋げられなかった。苦し…

「寛貴…くる、し…」

「お前は言われないと分からないのか？」

溜め息をつかれたけど、聞きたいものは仕方無い。
好きな人に自分がどう思われているか知りたいの。

「…言葉で聞きたい」

ダメ？

「オレが言ったら、梨桜は？言うのか」

寛貴が言ってくれたら…言う。
自分の気持ちを伝える。

「うん」

頷くと、腕を解き、正面から私の顔を見るときもう一度深く抱き寄せられて…

耳元で囁かれた。

「好きだ」

嬉しい、涙が出そう。

「……」

涙を堪えていると、また、頭の上で舌打ちが聞こえた。

「……おい、自分はだんまりかよ」

私を自分から引き離すと、ジロリと睨まれた。
違うよ、嬉しいんだよ。分かってよ、寛貴のバカ……

両手を伸ばして寛貴の首に抱きついた。

「好き。…ひゃあっ！！」

抱きついたまま押し倒されて、情けない声を出してしまった。

「…さつき、何を確かめていた？」

そこに拘るんだね……

好きだっていう事を確かめていた。なんて言えない

首を横に振ると眉根が寄せられたけれど、すぐに口角を上げて笑みの形を作った。

不敵に笑うその表情は、当事者じゃなければ見惚れてしまいそうに魅力的だけど……

当事者の私には恐怖でしかない……

「梨桜、言わねえなら力尽くで吐かせるぞ」

.

Line (9)

「早く言え」

どうしてこんなにオレ様なの？

でも、好きになっちゃったんだよね…

首にかけていた腕を外して、目の前にある寛貴の頬を両手で挟んだ。

「あのね…」

恥ずかしいけど、教えてあげようかな。

そう思ったのに鳴り響いた携帯の呼び出し音。

…しかも、この音は家族専用。

少しだけ“やっぱり邪魔が入るんだね”そう思ってポケットに入っていた携帯を取り出した。

「誰だよ？」

不機嫌そうな寛貴をチラリと見て、携帯の画面を見ると予想外の人からだった。

「パパから…」

『パパ』その単語を聞くと、寛貴が私から離れて身体を起こしてくれた。

何かあったんだろうか？少し心配に思いながら通話ボタンを押した。

「パパ？」

『梨花、寝てた？』

聞こえてきたのはいつもの優しいパパの声。

夏休みが終わったばかりなのに、次に帰国する冬が待ち遠しくなってしまう。

「起きてるよ」

さっきまでキスしていたことを思い出して、カッと顔が熱くなってしまう。

何故だか凄く恥ずかしい気分。

『元気でやってたか？』

寛貴を見ると、部屋を出て行ってしまった。気を遣わなくてもいいのに…

「…うん、元気だよ。どうしたの？」

『ママの一周忌をやるうと思ってね　梨花、葵と一緒にお寺にお願いしてくれないか？慧君とも相談して決めなさい』

もうすぐ一年が経つんだね…いろいろな事があり過ぎた一年間だった。

「日程はお寺に任せていいの？」

『ああ、いいよ。それから　葵が修学旅行でイギリスに来ている

間は三浦先生の家にお世話になりなさい。先生から申し出てくれたんだ、先生のお母さんが楽しみにしているそうだよ」

涼先生のお家にお泊り？涼先生は私の主治医だけど、男の人なんだよ！

あの大きな離れにお泊りしたら二人つきりだよ、そんなの申し訳ないよー！！

パパってば、どうして許可しちゃうの！

「葵はいいって言ったの？」

葵がいいっていう訳無いよ。そう思って聞くとパパは可笑しそうに笑っていた。

『お邪魔するのは本宅の方だよ。葵がいないんだから仕方ないだろう。梨桜いいね？』

本宅、ね…涼先生と愁君のご両親が住んでいるお屋敷なら納得できるかもしれない。

それを先に言ってくればいいのに、焦ったよ。

「うん　お寺の都合を聞いたら連絡するね」

扉が開いて寛貴が戻って来た。手にはお茶のペットボトルを持っていた。

『無理はするなよ』

「うん。また電話するね」

電話を切ると、寛貴がベッドに腰を下ろしてペットボトルを渡してくれた。

「親父さんなんだって？」

「ママの一周忌をするからお寺の予定聞いてきなさいって　それとね」

「それと？なんだよ」

「葵が修学旅行に行ってる間は涼先生のお家に泊まりなさいって」

「…あの離れにか？」

寛貴が無然とした顔をしていた。その顔があまりにも不機嫌そうだったから、慌てて「違うよ」と訂正すると「だったらどこだよ」と余計に不機嫌にさせてしまった。

もしかして、妬いてくれた？…なんて、そんな訳無いよね。涼先生だもんね…

「涼先生と愁君のご両親が住んでいる本宅にお泊りするんだって。離れで二人きりだったら、私、お詫びしに行かなきゃいけなくなっちゃうよ」

「は？なんで梨桜が詫びるんだよ」

意味が分からなそうな寛貴が意外だった。

あれ？知らないの？皆、知っているんだとばかり思ってた。

「私が離れにお泊りしたら、涼先生の婚約者に申し訳ないじゃない」
やっぱり知らなかったらしい寛貴は驚いていた。そんな顔も可愛いけれど、私には用事が出来てしまって、珍しい表情を堪能できなくなってしまうた。

「寛貴、私お寺に行かなきゃ。あ、それから連絡しなきゃ。電話してもいい？」

葵と慧君に電話して、お寺に行って挨拶をして、日程を決めて…：パ
パにもう一度連絡をして…：今日の午後が忙しくなってきた！

一体何をしていたのか… やっと部屋から出てきた寛貴さんの隣には梨桜ちゃんがいた。

「すげ…」

「やべえだろ」

初めて彼女を見る奴がいたらしく、傘下のチームの幹部達が呟いていた。

梨桜ちゃんがオレ達の所に来ると煙草を吸っていた奴等が一斉に火を消して、ポーっと思惚れている。

「やっと起きたのかよ？ 梨桜ちゃんは眠り姫だな」

拓弥さんがからかうと、真顔で「それなら、王子様の愁君に起こしてもらわなきゃ」と返されて、拓弥さんが青ざめていた。

からかって、爆弾を落とされて、寛貴さんに視線で殺されそうになつて…

拓弥さん、バカだろ。

「宮野が迎えに来るんだろ？」

仕方がないからオレが助け船を出してやると、梨桜ちゃんがニッコリと笑って頷いていた。

「うん、用事が出来たから帰るね」

「夕飯も一緒に食いたかったな」

オレが言つと「ごめんね、今度一緒に食べようね」と笑顔が返ってきた。

チームの奴等がざわつきだし、倉庫の入口に目を向けると車が入ってきた。

車から降りて来たのは宮野と三浦…二人揃って梨桜ちゃんの迎えだよ。見せつけやがって嫌味な野郎だ。

「葵！」

「走るな！」

まだ走っていないのに、宮野が梨桜ちゃんを止めると、寛貴さんが梨桜ちゃんの腕を掴んでいた。

「走るなって何回言えばわかるんだおまえは」

梨桜ちゃんの前に入った宮野が凄むと「ごめん」と言つてまたニコニコと笑っていた。

「連れて帰る」

「ああ」

梨桜ちゃんの髪をぐしゃぐしゃにしながらい、寛貴さんは頷いていた。

なんか…宮野のこういう仕草と言葉を聞くと、梨桜ちゃんはオレ達だけの姫じゃないんだな…って嫌でも思い知らされる。

宮野と一緒に歩き出すと「先に行つてて」と言い、オレ達の所に戻つて来た。

「どうした？」

寛貴さんが聞くと、梨桜ちゃんは寛貴さんの袖を掴んで見上げていた。

「寛貴、ぬいぐるみお願いね？」

「ああ、分かつてる」

オレもこんな風にお願ひされてえ…

羨ましい気持ちで見ていると、梨桜ちゃんは背伸びをして寛貴さんの耳元で何かを言っていて、話を聞きながら寛貴さんは笑みを浮かべていた。

「梨桜ちゃん、帰るよ」

三浦に言われると、梨桜ちゃんは手を振って帰ってしまった。

「あーあ、帰っちゃった」

「悠、お前は真面目に学校に行けば毎日一緒だろ」

拓弥さんの言葉が耳に痛い…

分かつてるけど、オレだってイロイロあんだよ！！悔しいから宣言してやった。

「そうだなっ！今度の課外研修も一緒だから土産買ってきてやるよ、

「梨桜ちゃんと選んだヤツ」

「悠、生意気だぞ」

「学校祭も同じだから一緒にイロイロ回れるしな」

どうだ、悔しいだろ！！そう思って笑うと、背中に冷たいモノを感じた。

「悠、その口閉じねえと埋めんぞ？」

拓弥さんにトドメをさすと、寛貴さんがスツゴク怖い顔をしてオレを脅した。拓弥さんにトドメを刺すつもりが寛貴さんに刺したらしい

傘下の奴らは笑いを堪えていて、オレが睨むと必死に顔を歪めながら笑いを我慢していた。

「悠、おまえバカだな」

Line (11)

「今年の課外学習は…」

今日のクラス委員を集めての会議の議題は、“課外研修”という名の遠足の計画について。

修学旅行が無い代わりに、秋に“課外研修”があるらしい。

「去年は一年生が美術館…」

去年の資料を見て、ちょっとがっかり。

学年毎に美術館、博物館、科学館って…悪くは無いけど、学校のクラスメイトと行くならもう少し楽しめるところを選んで欲しい。

東青と張り合うのが好きなら、修学旅行も張り合って連れて行ってくればいいのに!!

「一年生は女子がいるから楽しいよな」

三年生がボソボソ言うと、一年生の委員が笑みを浮かべていた。

「先輩方、すみませんね」

たった10人しかいない女子を相手に何を言っているのやら…

会議の書類にくるくると落書きをしていると、拓弥君が隣から覗き込んでいた。

「梨桜ちゃん、つまらなさそうだな」

だって…もう少し遠くて楽しいところに行きたいよ！

「修学旅行がないなら、もっと楽しめるところに行きたい！」

「例えば？」

寛貴に聞かれて、楽しめそうな場所を挙げてみた。

「遊園地、水族館…とか？」

「そうだ！」

「アンケート！クラス単位で行きたいところを募って学年なんか関係無しに行くの！」

両脇の彼等に力説すると、拓弥君は悠君を見た。

「悠おまえはどう思う？」

「いいんじゃない？美術館とか行ってもな」

美術館も良いと思うけど、それはプライベートでのんびり行きたい。去年一年生だった寛貴にコツソリ聞いた。

「去年はどうだった？楽しかった？」

「途中で帰ったからな…よく覚えてない」

サボったのね…やっぱり不良だわ。

「例えば、梨桜ちゃんならどこに行きたい？」

拓弥君に聞かれて幾つか頭の中に浮かんだけれど、去年までの私なら絶対にアレだよな。

「絶叫マシンのある遊園地」

でも、今は乗れないから水族館とか自然に触れ合えるようなところに行きたい。

「自然がいつぱいあるところも楽しいよね。水辺の傍でバーベキューしたり、牧場に行くのも楽しいかも」

絞り立ての牛乳でしょ、ソフトクリームでしょ…チーズも美味しそう。

「梨桜、その指を折って数えてるのは何だ？」

寛貴に聞かれて、手を彼の前に出してもう一度指を折って数えた。

「牧場に行ったら、牛乳、ソフトクリーム、チーズ…後は何が美味しいと思う？ソーセージとかジンギスカンもあるかもしれないけど、ちよつと残酷かな」

羊を見学した後にジンギスカン…食べちゃうかもしれないけど、改めて思うと、考えさせられるよね。

「おまえは…食わないクセに妄想だけは一人前以上だよな」

失礼な…妄想って何よ？

呆れ顔で言う寛貴に指を折っていた手でデコピンしてやろうとしたら、逆に小突かれた。

「妄想じゃないよ！少しずついろんな量を食べるのが好きなの」

「残りを食う身にもなれよ…」

それは反省するけど…でも、寛貴だって“美味しい”って食べてたじゃない？それに、寛貴が頼めって言ってくれたから頼んだのに。

ムツとして寛貴を見ていると「おまえらな…」と拓弥君が間に入ってきた。

「痴話喧嘩なら後でやれよ。まあ、試しに希望を募ってみようぜ、いいだろ？寛貴」

「ああ」

ハツとして周りを見ると、クラス委員達が私達を見ていて…恥ずかしい。

「絶叫マシンは駄目に決まってるだろ、何考えてんだよ」

そんなに怒らなくてもいいのに…

拓弥君と悠君が煙草を吸いに行ってしまう、生徒会室に残った私は寛貴に怒られている。

「女の子が好きそつなところを言ってみただけだよ。怒らないで…」

「怒ってない」

嘘だ、眉間に皺が寄ってた。

「梨桜」

伸ばされた左手に自分の手を置くと、右腕が私の腰に回されて…

「う…」

寛貴の膝の上に座るのってドキドキする…葵の時は何にも思わないのに。

「どっした？」

髪の中に指を入れて引き寄せられて至近距離で見つめられるとドキドキが倍になるから、ちょっと待つて欲しい。

「…」

待つて欲しいのに、頬を撫でられて指で唇をなぞられてぎゅっと目を瞑ってしまった。

「目を閉じるな。…オレを見てろ」

恥ずかしさを堪えて目を開けると、私が好きな笑みを浮かべて私を見ていた。

「今日はオレが確かめてやるよ」

甘い声で囁かれると唇が重なった。

後悔しても遅いけど、恥ずかしすぎる。やっぱり寛貴に教えなければ良かった…

足りないものは…(1) side:悠

定例会。なのに、お姫様の姿は無い…HRが終わるとパタパタとどこかへ行ってしまった。

彼女から目を離すとオレ、滅茶苦茶怒られるんだよな…

「梨桜はどこだ」

宮野に聞かれて「分かんね…」と言うと、寛貴さんがオレを見ていた。

「悠、どういうことだ」

やっぱり怒られる…

そう思ったら、拓弥さんが「丁度いい」と言い出した。

宮野と寛貴さんに鋭い視線を向けられた拓弥さんは、一瞬表情をこわばらせたけれど、すぐにいつもの笑みを浮かべた。

「梨桜ちゃんがない時にしかできねー話だ。おまえの謀った通りになったようだぜ」

三浦が口角を上げると、拓弥さんが携帯を三浦に投げた。

「へえ…単純すぎて興奮するな」

三浦は画面を見ると、拓弥さんに携帯を投げ返していた。

「拓弥、さっさと見え」

苛ついている寛貴さんが睨むと、拓弥さんは肩をすくめて携帯をしまっていた。

「札幌のバカ女からメールが来た」

拓弥さんの言葉に宮野と寛貴さんが眉を顰めていて、三浦は口角を上げて笑っている

「修学旅行で東京に行くから梨桜ちゃんに会って謝りたいけど、梨桜ちゃんはきつと怒ってるからとりなしてくれだって。…どうする？」

寛貴さんは鼻で笑った。

札幌でバカな女がいたっていうのは聞いてはいた。詳しくは教えてもらっていないけれど、梨桜ちゃんに対抗心剥き出しにして張り合うなんてバカな女もいるもんだと思った。

「拓弥、あの女が心から反省すると思うか？」

携帯を弄りながら拓弥さんは笑って言った。

「しないだろうな　　分り易すぎて笑った」

「梨桜には会わせない。お前がバカ女の相手しろよ」

宮野が言うと、拓弥さんは大袈裟に体を仰け反らせて嫌だとジェスチャーをしていた。

拓弥さん、うさぐせえ…

「え、やだ！オレああいうの駄目。嫌い」

「オレには喜んでやっているように見えたけどな」

寛貴さんから冷たい視線を浴びて、拓弥さんは口を尖らせてブツブツと言いだした。

「三浦に言われたからやったんだよ。そうじゃなきゃあんな根性が曲がったブス相手にするかよ」

「おまえが適任だろ？甘い顔をしておけばいずれ尻尾を出すと思っただよ。オレ達に相手にされなくてもお前が優しくすれば、絶対に食いついてくる」

三浦が冷たい笑みを浮かべていて、隣に座っている小嶋が怯えたように目でそれを見ていた。

マジで黒いよな、こいつ。腹ん中は真っ黒だぜ。

「オレは愁に言われたとしても嫌だ。ああいう女には虫唾が走る」

宮野が眉を顰めながら言うと、三浦は笑いながら返していた。

「梨桜ちゃんが絡んでるから過剰に反応してるんだろうけど、とにかくあの女は大橋に任せる」

冗談じゃない！と身を乗り出した拓弥さんは本気で嫌そうだ。

「オレにあの性格ブスを押し付けるなよな！」

「良く言うよ、ノリノリだったじゃねーか。屋上で盗み聞きしてる

あのブスを追いかけて慰めて…オレが指示した以上の事をしてた
る？」

「…どこまでつけあがって来んのかな、って思ったんだよ」

この二人、酷い。酷過ぎる…

オレだったら泣く。

「梨桜があの子の面を見なければどうでもいい」

どうでもいい…寛貴さんも結構冷たい。

マジで梨桜ちゃんの前から排除したいんだな…

「ところが、そうはいかないんだな」。課外研修のスケジュールと
あの子の修学旅行のスケジュールが同じなんだよ」

まさか…？

「梨桜ちゃんは水族館に行きたいって言ってたよな」

「ああ。言ってた」

梨桜ちゃんが言い出した『クラス単位で行きたいところを募って学
年なんか関係無しに行くの！』その案は上級生が強く支持して、強
引に教師達に了承を取り付けていた。

クラスで課外研修の希望を募っていた時に、梨桜ちゃんが『水族館、
いいなあ』と呟いていて、たったその一言でウチのクラスは水族館
で希望を出している。

「あのバカ女も同じ日に水族館に行くらしいぞ」

「…梨桜ちゃんに水族館を諦めてもらうか」

三浦が言つと、宮野が首を横に振って溜息をついた。

「無理だな」

何でだよ、そう聞こうとしたら廊下から「開けてー！」と声がした。オレが生徒会室の扉を開けると、大きな紙袋を抱えた梨桜ちゃんが立っていた。

「何処に行つてたんだよ！」

寛貴さんに睨まれたんだぞ！すげー怖いんだからな！

「家庭科室！教材が届いたから取りに行つてたの」

テーブルの上に紙袋と荷物を置くと、辺りを見回して「そういえば今日は定例会だったね」と笑っていた。紙袋の中をゴソゴソと探しだして「あった」と言い顔を上げると宮野を見てニツコリ笑っていた。

「葵、丁度良かった」

梨桜ちゃんは宮野に向かって手招きをした。

「何だよ」

「いいから早く！制服脱いでこっちに来て」

梨桜ちゃんの手にはメジャーとノートが握られていた。

足りないものは…(2) side:悠

「葵、体貸して」

メジャーをカチカチと伸ばすと梨桜ちゃんはにっこり笑った。『体貸して』って笑顔で言われるのも凄いな。

「今かよ」

「うん、今。早く取り掛かりたいの」

面倒臭そうに立ち上がった宮野は制服のジャケットを脱いで梨桜ちゃんの前に立った。

「シャツも脱ぐのか？」

「ネクタイだけでいいよ。届かないから椅子に座って」

何が始まるんだ？そう思っていると梨桜ちゃんは宮野の身体の寸法を測り出した。

肩幅、腕の長さ、胸囲…

「梨桜ちゃん、何をしてるの」

三浦に聞かれて、測った寸法をノートに書きとりながら答えていた。

「家庭科の課題。浴衣か編み物って言われたからセーターを編もうと思ったの」

「へえ、手編み…梨桜ちゃんは本当に器用だな」

羨ましい。オレも手編みのセーター欲しい！

そう思っていると、梨桜ちゃんは宮野を椅子から立たせると、背中に抱きついていた。

「何してんだよ…」

マジで何してんだよ！？何で抱きつく必要があんだよ！！

ここにいる全員が呆気にとられてんだけど！？

「比べてるの」

比べるって誰と比べてんだよ！？っっっかいつまで抱きついてんだ！羨まし過ぎんだろ！！

「梨桜？」

首を捻って自分に抱きついていて梨桜ちゃんを見ている宮野は振り解くわけでもなく聞いていて、梨桜ちゃんは眉根を顰めて「うーん…」と言いながら何かを考えていた。

「葵とパパってどっちが大きい？」

「オレ。…毎年作ってるのに何で測ってたよ。親父は去年と同じでいいだろ」

親父さん？

「それがね…昨日、型紙と編み図を探したんだけど無いの。札幌か

らこつちに来るときに荷物に入れたよね？葵が荷造りしてくれたんだからある筈だよな」

オレはやつと分かったかもしれない。

親父さんのセーターを作りたいけど、型紙が無いから宮野のサイズを測って比較してる。そういう事か！？

だったら、先にそう言ってくれよ！宮野に抱きつく梨桜ちゃんを見て、ドキドキしたじゃねーか！

「親父の部屋も探したのか？」

「探したけど無かった。もしかしてパパの荷物と一緒にイギリスに行っちゃったのかな」

「…そうかもな」

梨桜ちゃんはまた「うーん」と言いながら、椅子に登ると今度は背中から首に手を回して抱きついていて、

理由は分かったけど、何やってんだよ！？もしかしてイチャついてるだけなのか！？

「もう一回測る」

そう言うと、もう一度肩幅と胸囲を測っていて、メジャーが示す数字を見て梨桜ちゃんが軽く溜め息をついている。

「パパってばやっぱり太ったかも。帰ってきたらダイエット食だね。葵、ありがとね」

席に座ると、記号みたいなのがたくさん書いてある紙を広げて自分

が書いた宮野の寸法と比べて睨めっこしていた。

真剣な顔をして毛糸を編んでいる梨桜ちゃん。

「なあ、梨桜」

「ん」

「今度“課外研修”があるんだろ？」

「……ん」

宮野が話しかけても上の空で返事をしている。

「水族館は今度連れてってやるから、別な場所にしろよ」

「……」

熱中しているところに付け込んで行き先を変えさせるのか？

「そうだな、今度皆で一緒に行こう。その方が楽しいよ」

三浦も一緒に説得。上手く行くのか？

梨桜ちゃんは編み物の手を休めない。

「梨桜、聞いているのか」

「ん」

梨桜ちゃん、聞いてないだろ…上の空だろ！？宮野が「梨桜」と呼ぶと、やっと顔を上げた。

「テーマパークで絶叫系に乗ってもいいの？」

「ダメだ」

宮野と寛貴さんの声が重なった。

梨桜ちゃんは二人を見ると、フツツと笑ってまた編み物を始めた。

「私は水族館に行く」

「梨桜ちゃん」

三浦が呼びかけると、顔を上げずに「あのね」と話し始めた。

「だってタカちゃんと約束したの。水族館で円香ちゃんの誕生日プレゼントを渡すって」

それって、知ってるのか？その日、バカな女が同じ場所にいるって宮野と寛貴さんは何も言わずに梨桜ちゃんを見ていた。

「由利ちゃんに会っても私から話しかけようとは思っていないし…尚人君の事も私の中では終わった事だから、同じ話をするつもりは無いよ」

「…分かった」

寛貴さんが言うのと拓弥さんが「仕方ねえな」と言って笑っていた。

バカで性格ブスな女の相手は拓弥さんがするんだろうな…

「皆で心配してくれてありがとう」

顔を上げてニッコリ笑った梨桜ちゃん。

この笑顔を見ると、やっぱり好きだな。そう思う。

もう少しだけ、好きでいてもいいかな…

足りないものは…(3)

生徒会室に入ってから何となく感じた違和感。

皆で何か企んでるでしょう？

そう思っていたら、突然葵が課外研修の行き先を変えさせたいような発言：普段だったらそんな事言わないのにあからさまに怪しい。

思い当たることがあったから皆の優しさに感謝をしたけれど、『水族館』は譲らないからね！

ペンギンとウミガメを見るって決めてるんだから！

相変わらずの定例会の話聞き流しながら手を動かした。

去年編み物はできなかったから、編み棒を操るのは2年ぶり。

いつもの感覚を取り戻そうと思って指を動かしていると、少しだけお腹が空いた。

「ねえ、葵」

「なんだ」

「…今日の夕飯は葵が作ったハヤシライスが食べたいな」

「は？」

いきなり夕飯のリクエスト。

言ったもの勝ちだからね。

「カレーじゃないからね、ハヤシライスが食べたいな」

「なんでだよ」

「食べたいからに決まってるでしょ」

“食べたい”の他にもう一つの理由“忙しいの!”

家庭科の課題に私が選んだのは“手編みのセーター” 課題作品はパ
パ用に編むことにした。

パパのを編んだら、慧君が着るって言ったら慧君のを編んで、次に
葵。冬が来る前に編み終えようと思うと忙しい。

チラリと横を見て、寛貴は…着てもいいって思ってくれるかな？
家族以外に編んだことが無いからちょっと心配。

「オレ、これがいい」

トントン、と指差す葵の手元を見ると、手編みのカタログのページ
を指していた。

葵が“いい”って言っているのは、ニットブルゾン。

「うわ…大物だね」

「ハヤシライス作ってやるからこれにしろ」

ハヤシライスとこの大物じゃ比較対象に差があり過ぎると思っただ
けど…でも、去年は編めなかったんだよね。

「いいよ、作ってあげる。毛糸買わなきゃね」

「葵まで梨桜ちゃんの手編み？」

愁君が言つと葵は意外だというような顔をしていた。

「…何言つてんだ？オレ、ニットは買ったことないぞ」

「はあ？冗談だろ」

「冗談じゃねえよ、梨桜が作つてんだよ。下手くそな頃からオレが練習台だ」

編み棒で葵の脇腹をプスツと刺すと「痛えだろ！」と怒っていた。

一言多い！！

「本当の事だろ、最初は下手くそだったろ」

腹立つなあ…

「いいよ、葵には作らない。誰かに作ってもらえばいいよ」

「ふざけんなよ、知らない奴の手編みなんて念が籠もってそつで気持ち悪いだろ」

酷い男…好きつて言つ気持ち籠めて編むのに。

「私も念を籠めて編んであげようか」

「いや、梨桜ちゃん、考えてみるよ。見ず知らずの奴から渡された

マフラーとか使えるか？」

拓弥君が真剣な顔で私に聞いている。彼ならたくさん手作りの物をもらいそう。

マフラーね…そういえば…

「そういえば私も手編みのマフラーもらって困ったなあ」

今年の冬にもらった、真っ白い手編みのマフラー

病院から外出を許可されて、少しだけ学校に顔を出した時に渡されたチヨコと一緒に入っていた。

「……」

「梨桜、それどうしたんだよ」

そういえば…どうしたんだっけ？

「何かお返しをしようと思ったんだけど、名前も分からなかったからできなかった。彼女は先輩だと思っただけど、あれって私がある日学校に行くって分かってて用意してくれたんだよね。悪い事しちゃった」

「おまえさ…女にも？」

あれ？みんな固まっちゃった。
どうしたの？

足りないものは…(4)

朝、学校に着いてから授業が始まるまでの時間も編み物の時間。

「梨桜ちゃん一生懸命だね」

「うん」

麗香ちゃんが「そうやるんだ」と私の手元を眺めていた。昨日決めたの、早く編み終わらせて寛貴の分も編もうって…着てくれるかどうか分からないけど、寛貴の為に編みたくなったの。

「梨桜ちゃん、携帯鳴ってるよ」

教えてもらってメールを確認したら…

熱が出たから休む。帰りは拓弥に送ってもらえ

授業が始まる直前に届いたメール。

いつも心配をかける事はあっても、私が心配する事は無いに等しい寛貴が熱を出した…

“大丈夫なの？”

“病院に行った？”

高熱を出す時の辛さは誰よりも分かっているつもり。

“寛貴、大丈夫？”

休み時間に送ったメールの返事を次の休み時間に確認するけれど、返事は帰って来ない。

素っ気なくても必ず返事をくれるのに…今日の寛貴は返事をくれな
い。

すっごく心配！！家の中で倒れてたらどうしよう…

「それで一人でここまで来たのか？寛貴に一人で来るなって言われ
てるだろ？」

心配だったから…駄目だと言われていたけれど、一人で二年の教室
に来てしまった。

「おいで」と言われてまた教室の中に入ってしまったけれど、寛貴
がいないココに居ても寂しい。

「ガキじゃないんだから大丈夫だろ」

拓弥君はあまり心配していないみたいだけど、熱を出すのって辛い
んだよ？

「だって…寛貴からメールが返って来ないんだもん。家の中で倒れ
てたらどうしよう？」

突然、フハッと笑いだした拓弥君。キツと睨むと慌てて緩んだ表情
を元に戻していた。

「酷いよ、拓弥君は心配じゃないの？」

「悪い…寛貴が廊下で倒れてるのを想像したら笑えた。…梨桜ちゃん、アイツなら大丈夫だと思うぞ」

そんなの分からないじゃない！

もしかしたら、動けなくなってるかもしれないでしょ！

拓弥君は笑いながら私の頭に手を置いた。

「そんなに心配なら行くか？」

「え？」

行くって？

「寛貴の家」

「え、でもご家族が…」

寛貴の家。と言われて急に尻込みしてしまう…

だって、好きな人の家に行くなんて初めてだよ？お母さんに会ったら…緊張するでしょ！

「あ…心配しなくていいよ、寛貴は殆ど一人暮らしみたいなものだから。家政婦はいるかもしれないけどな」

殆ど一人暮らし？…どういう事？

「ホラ、行くぞ」

強引に連れて来られた…日本家屋の豪邸。
寛貴ってこんな凄い家に住んでたんだ。

「凄いお家だね」

「ああ」

呆気にとられて豪邸を眺めていると拓弥君に「そこだとカメラに映るからこつちに来て」と手を引かれて場所を移ると、インターホンを押していた。

「寝てんのかよ」

呼んでも反応のないインターホン。

「だから動けないかもしれないって言ったじゃない」

「アイツは頑丈だから…そんなに心配しなくてもいいよ」

そう言うともう一度インターホンを押していた。

『…なんだよ』

不機嫌そうな声が機械越しに聞こえた。
寛貴だ…

「見えてんだろ、早く開ける」

『…』

ピツという電子音の後にカチャリと解錠される音がした。

「何してんの、行くぞ」

急かされて門からの長いアプローチを歩いて玄関に辿り着くと、拓弥君は勝手に玄関を開けていた。
いいのかな…そう思っていると

「おい！見舞いは届けたからな！玄関に取りに来いよ」

家の中に向かって大きな声で言うと「じゃーね、梨桜ちゃん」そう
言って帰ってしまった。

「ちよつと待って！拓弥君!？」

ひらひらといつものように手を振って玄関の扉を閉めてしまった。
こんな広いお家に一人残していかないでよー！

「梨桜?」

振り返ると髪の毛が濡れている寛貴が立っていた。

「熱があるのにお風呂入っちゃ駄目だよ」

寛貴に注意しながら、そういえばいつも葵から怒られているな…そ

う思って少し反省した。

「熱なら下がった。…それより、なんでいるんだよ」

「なんでって…メールしたのに返信が来ないから、動けないくらい酷いのかと思ったの」

心配したのに『なんでいるんだ』なんて、来ちゃいけなかったんだね。

床に置いていた鞆を手にして「大丈夫みただから帰るね…」そう言って、寛貴に背を向けたら、首に腕が巻き付いた。

「見舞に来たんじゃないのか？」

葵といい、寛貴といい…毎回そうやって私の動きを止めるのやめて！

「苦し…」

「帰るなら何か作ってからにしてくれ。…腹減った」

「食べてないの？」

私の首に巻き付いているせいで背中に寛貴の胸が当たっていて、心なしかいつもより体が熱いような気がする。

「ああ…さっき目が覚めた。早く上がれよ」

リビングのソファに座ると、喉が渴いていたのかペットボトルの水

を一気に飲み干していた。

「髪の毛濡れたままじゃ駄目だよ」

寛貴の前に立って濡れている前髪を掬って寛貴の額に手を当てた。
熱いのは、お風呂上がりだから？まだ熱があるから？

「本当に熱、下がったの？」

「下がった」

寛貴は私を見上げると、ぐらりと上半身が揺らいた。
慌てて寛貴の身体を支えると、私の腰に自分の腕を回してお腹に顔を埋めていた。

「ねえ、やっぱり熱があるんじゃないの!？」

寛貴の肩を押して顔を見たら、潤んだ瞳で見つめ返されて…

「梨桜…オレ、マジで腹減った…」

「…」

不謹慎だけど、こういう寛貴って可愛いかもしれない…

足りないものは…(5)

「うわぁ…凄い！」

お腹が空いている寛貴に食事を作ろうと思ってキッチンに入ると感激した。

とつても広くて立派！！

ダイニングも広くて明るい。こんなところで毎日ごはんを作って食事ができたら幸せ！

広くて立派なダイニングキッチンにうつとりと見惚れていると、テーブルに食事が用意されているのを見つけた。

「ねえ、ご飯あるよ？これ寛貴の為に用意されたんじゃないの？」

手招きをすると、リビングからダイニングに移動してきた寛貴がテーブルに置かれた食事を見て一言

「…これを病み上がりになんて食えって？」

良く見るとお皿には唐揚げがたっぷり乗せられていた。

うん、熱を出した後にこれは重いかもしれないね。

「何が食べたい？」

「何でもいい。そっこの棚に食料品が入ってる筈だ。冷蔵庫も勝手にしていいから」

寛貴に言われた食料品が入っているらしい扉を開けたら…

「すごい…」

こつこつ食糧庫欲しい！

冷蔵庫にもたつぷり食材が入っている。このお家で家事をするのは楽しそう、気合を入れて作りたくなっちゃう！

…でも、今日は消化が良くてすぐにできるもの。

しょうとねぎがたつぷり入った雑炊にしよう。

病み上がりだけど、気持ち良いくらいの食べっぷり。本当にお腹空いてたんだね。

「うまい」

「ありがと。家政婦さんのご飯も美味しいよ」

代わりに食べてくれ、と言われた家政婦さんが作ったご飯を食べていると、私の皿からお肉を摘まんで口に入れていた。

「夕飯も作って」

「いいけど、家政婦さんのご飯は？」

「親は殆ど家に居ないしオレも拓弥達と食べる事が多いから夜は作らない」

拓弥君が『殆ど一人暮らしみたいなものだ』って言ってたよね。黙々と食べている寛貴が何を考えているか分からないけど、こんな広いお家で一人でご飯を食べるのって寂しくない？

少し遅めのお昼ご飯を食べ終えて寛貴の部屋に連れてきてもらった。葵以外の男の人の部屋って初めてで緊張しながら入ったんだけど…広い部屋に驚いてキョロキョロしてしまった。

「…広い部屋」

物があまり置かれていなくてスッキリとした雰囲気の中の部屋の中に扉があった。

もう一部屋あるの？

「ねえ、部屋の中にも扉があるよ」

「あれはシャワールーム」

その答えに驚いて寛貴の顔を見ると「下まで行くの面倒だろ」素っ気なく言い冷蔵庫から水を取り出して飲んでいた。

自分の部屋の中にシャワールームがあるなんて凄い。

「寛貴ってお坊ちゃんだったんだね」

つい、言ってしまうと、嫌そうに「それはやめろ」と言っていた。その顔が本当に嫌そうで笑ってしまったけれど『お坊ちゃん』だよ、

愁君と同じ。

「横になつてなくていいの？油断すると熱がぶり返しちゃうよ」

額と首の付け根を触れても熱は無いように思えるけど、今日はゆっくり休んだ方がいい。

「梨桜、昼寝は？今日はしないのか」

お昼寝…今日はまだ眠くない。この豪邸に吃驚して眠気もどこかに飛んで行ったのかもしれない。

「今日は眠くないかも。寛貴は寝なきやダメだよ？」

今のうちにもう少しだけ編み物をしようかな。そう思って寛貴に背中を向けて荷物から編み棒と毛糸を取り出した。

「…寝るぞ」

「寛貴だけどうぞ。…え？」

寛貴は私に手にしていた毛糸と編み棒を取り上げると近くにあったテーブルの上に置いてしまった。

「もう…返して？…やっ！」

毛糸を取ろうと思って立ち上がろうとしたら、そのまま抱え上げられて荷物のように運ばれて広いベッドの上に下ろされた。

「私は眠くないよ」

自分もベッドに腰を下ろすとお腹に手を掛けて引き寄せ「眠くないなら抱き枕になってろ」そう言って私を抱き込んで横になってしまった。

「寛貴！」

ベッドから降りようとモゾモゾと動いていたら、ギュッと抱き締められて寛貴の胸に押し付けられた。

「梨桜、うるさい。じっとしてろ」

私は眠くないし、こんなのって、こんなのって!!

「だって！」

「見舞いに来たんだろ？」

「そうだけど…」

同じ布団の中にいるんだよ！寛貴は平気なの？
私は恥ずかしいよ。
身を擦ろうとしたら背中に回されていた腕に力が籠った。

「大人しくここにいろ」

甘く囁かれて…動けなくなっていました。
そんな声…狡い。

「梨桜？」

寛貴の胸に顔を埋めて頷くと髪の毛を撫でられた。

足りないものは…(6)

…つい、人肌が気持ち良くて眠ってしまった。

「……」

目が覚めたら目の前に好きな人の胸があって、抱えられたまま腕枕をされていて…

お見舞いに来たんであって、添い寝をしに来たんじゃないの！こんなつもりじゃなかったのに！！

少し頭を冷やして落ち着きたい。

「…」

あれ？

「っ…」

寝返りが打てない…体を動かさそうと思っても首しか動かないよ。顔を上げると寛貴の寝顔。の筈なんだけど、一瞬口角が上がった。

「起きてるの？」

そう聞くとフツと笑う声が聞こえて、じっと見ていると笑いを堪えているのが分かった。

「もう！苦しいから離して」

「嫌だと言っただら？」

目を細めて意地悪な笑みを浮かべる寛貴に對抗して胸に手を当てて突っぱねた。

「同じ態勢が苦しいの。お願い」

そう言うと腕を緩めてくれて、やっと寝返りを打てた。

寛貴に背中を向けて、小さく息を吐くと緩められていた腕が私の胸の前に回された。

「背中が痛いのか？」

「痛くは無いけど、時々苦しくなるの」

今何時だろうと思って部屋の時計を見ると夕方だった。

「結構寝てたんだね」

さっき言われた夕飯を作ろうと思って、ベッドに手をついて身体を起こしたら寛貴も半身を起こした。

「寝過ぎて体が痛くなりそうだ」

背中越しに私を抱き寄せながらブツブツ言う寛貴に笑ってしまった。眠れるっていうことは、体が休息を求めているんだよ。

「今日は朱雀に行っちゃだめだからね」

胸の下に回されていた寛貴の手を取って手を重ね合わせると指を交互に絡ませて手を繋いだ。

「何だよ」

不満そうに言う寛貴の手を空いている方の手でポンポンと叩いて宥めるとその手も大きな手で包まれた。

「病み上がりだから今日は大人しくお家にいて」

「そんなにひ弱じゃない。梨桜は心配性だな、宮野にもそうなのか？」

突然出てきた名前に、首を捻って寛貴の顔を見ると私の顔を見ながら笑っていた。

「葵？…あんまり風邪とか引かないけど」

心配性なのは葵の方で熱を出して心配させるのは私。

「オレが熱を出したらあいつも熱が出るかもしれないぞ」

「どうして？一緒だったの？」

珍しい事もあるものだと思って聞いてみると本当に一緒だったらしく頷いていた。

「昨日の夜、4代目の時代に幹部をしていた人に呼び出されたら、その中に風邪を引いた奴がいた」

4代目？涼先生の前の代だ。
風邪を貰ってきちゃったんだね

「呼び出される事って、良くあるの？」

「最近は無かったな。でも、一年に1回はあるな。代々の総長と副総長が集まる」

涼先生とか、他の代の元総長が集まったら圧巻だろうな。
中に入るのは怖いけど、外から少しだけ覗いてみたいかも。

「そこに葵もいたの？」

「ああ」

今朝の葵を思い出してみたけれど、特に変わった様子はなかった。
葵が風邪を引くと喉が痛くなってその後熱が出るんだよね。いつもそうだった。

もしも葵も風邪をもらったとしたら…そろそろ？

足りないものは…(7)

寛貴の夕飯を作ってすぐにタクシーで家に帰ると葵はまだ帰っていないかった。

葵も熱を出しているかもしれない。そう思って体が温まるご飯を作って待っていると玄関のドアが開いた。

「おかえり！」

「ただいま。早かったんだな」

「うん。葵も早かったね」

葵の背中に向かって「うがいしてね」と言っと素直に頷いていた。やっぱり風邪をもらってきた？

食事を終えて葵の隣で編み物をしていると、少し辛そうに水を飲んでいるのが見えた。
喉、痛いのか？

「葵、今日は早く寝た方がいいよ」

キャビネットから風邪薬を取り出して葵の前に置くと、怪訝な顔をして私を見ていた。

「…なんで風邪気味だって分かるんだよ」

「寛貴も熱を出したから。昨日一緒だったんでしょ？」

額に手を当てて首元に手を当てるとまだ熱くは無かった。でも水を飲むのが辛いなら喉が腫れてきたんだよね？

薬のカプセルを葵の手の上に乗せて編み物を続けていると、視線を感じた。

葵が私をジーツと見ている。

「…藤島から聞いたのか？」

「うん。今日、学校を休んだけどだいぶ良くなったよ。葵も酷くならないように薬飲んで寝て？」

「梨桜、どういうことだよ」

急に声が固くなり、どうしたんだろうと顔を上げると怖い顔をして私を見ていた。

「葵？」

どうしてそんなに怖い顔をしているの？

「おまえ…藤島と付き合い始めたのか？」

いつか話さなきゃ。

そう思っていたけれど、いきなり言われて何から話そうかと考えてしまっ。

「答えるよ」

私が答えないでいるとますます不機嫌になってしまい、余計にどう話そうかと迷ってしまう。

「葵、あのね」

「…別れる」

突然言われた言葉が信じられなくて呆然としているともう一度「藤島と別れる」と言われた。

「やだよ…どうして？」

首を横に振ると鋭い目で私を睨んでいた。

仲が悪いのは知っているけど、『別れる』なんて酷過ぎる。

「アイツじゃなくてもいいだろ」

その言葉にムツとして葵を見ると、更に鋭い目で私を見た。誰でもいいような言い方しないで！

「そういう言い方しなくてもいいでしょう？どうして葵が勝手に決めるのよ」

互いに嫌っているのは分かっているけど、私まで巻き込まないで。

「ムカつくんだよ。何で梨桜がアイツと付き合っただよ！」

葵の言葉が私の神経を逆撫でしていく。…ああ、もう駄目。私も葵も止まらない。

「私が誰を好きになったっていいでしょう!？」

「仲が悪いチームだって知ってんだろ!」

「私はチームに入ってるじゃない」

「ふざけんな、最初に関わるなって言っただろ!」

お願い、誰か止めて。

「自分の都合ばかり押し付けないで!」

頭ではこんな言い合いをしても意味がないって分かっているのに、私も葵も止められなくなっていた。

「私が決める事だよ」

葵を睨み返すとテーブルをバン!と叩き立ち上がった。

「勝手にしろ!」

乱暴に玄関のドアを閉めて…出て行ってしまった。

「バカ…」

こんな筈じゃなかったのに…
チームなんてどうでもいいんだよ!どうして下らない事にこだわるの…

・

・

3日

葵が家を飛び出してからもう3日が経った。
愁君に会ってお詫びをしようと思ったたら慰められてしまった。

「ごめんね愁君」

葵が転がり込んでいるのは愁君の家。

風邪気味だった葵は案の定熱を出したらしく、昨日は学校を休んだらしい。

「オレなら気にしないで。葵も梨桜ちゃんに男が出来て拗ねて意地になっていただけだから。落ち着いたら帰ると思うよ」

私と寛貴が付き合っている事を知ったら不満を爆発させた葵。

葵は寛貴が嫌い。

寛貴も葵が嫌い。

葵が家を出て行ったことを寛貴達には言えないでいた。

言ったら騒ぎが大きくなってしまっし、双子の喧嘩なんて恥ずかしい…

「そんな顔をしないで、誰でも同じだよ。藤島だからこれで済んでいるのかもしれないしね」

「どづいづこと？」

「普通の男だったら葵に潰されてるだろ。藤島だからそれが無いんだよ」

それってあまり考えたくないけど…

「寛貴じゃなかったら、私の彼氏は葵に脅されて潰されるっていうこと？」

「葵が自分以下の男と付き合うのを許すわけないだろ？その点、藤島なら葵と互角にやり合うだろうからね」

ニツコリと笑って言われて力が抜けた。

葵、バカだよ。それじゃ、ただのシスコンだよ！

「それより、梨桜ちゃん顔色があまり良くないみたいだけど」

「風邪気味なだけだよ。葵と寛貴の風邪をもらったのかもね」

葵が出て行ってからあまり調子が良くなって、体がだるい日が続いている。

「それって性質が悪そうだな」

「愁君に移せば治るかもね」

「遠慮しておく」

愁君とのやり取りはいつも通りなのに、居て当たり前の葵がいない。
風邪は抜けきらないし葵はいないし……イライラが頂点に達しようとしていた。

足りないものは…(8)

葵の為の夕食が無駄になって4日目。
ついに私のイライラも頂点に達した。

「いい加減にしなさいよね！」

これ以上の我儘と自分勝手は許さないんだから！！引き摺ってでも
連れ戻す！！

申し訳ないと思いがらいつもお世話になっている人の携帯番号を
押した。

「こんな時間にごめんなさい」

『姫？どうしました？』

「桜庭さん、お願いがあるんです」

『葵のところに連れて行って下さい』
桜庭さんは私の家まで迎えに来てくれて、葵のいるところに連れて
来てくれた。

「どこですか？」

連れて来てくれたところは…クラブ。
熱を出したっていうから心配したのに、自分はクラブで夜遊びです
か…

「今、中に連絡しますから待って…梨桜さん！ダメですよ！」

桜庭さんの制止を聞かないで葵がいるらしいお店に入った。

「…誰のツレ？」

入り口で聞かれてその人を見るとピアスをたくさんしている男の
人が私を値踏みするように見ていた。

「葵」

「葵さん？…葵さんからは何も聞いてないから入れてあげられない
な」

愛想笑いを浮かべる受付の男に私も愛想笑いを返した。
店の入り口に群がっていた人達が私を見ていて居心地が悪い。

「そう。だったらコジ君か愁君」

「は？…幹部の名前を言えばいいと思ってる？」

「葵に話があるのよ」

「…葵さんには無いと思うけど？多いんだよね、葵さんに会いたく
て知り合いのフリをする女。ここにいる奴等も青龍に憧れていて中
に入りたいけど入れない連中」

彼が指す方を見ると男と女が店の中を覗き込むようにしながら葵達の話をしている。

「可愛いから入れてあげたいけど…入りたいなら青龍のメンバーと一緒においでよ」

ここまで来て葵に会えないなんて冗談じゃない。絶対に連れて帰って決めてるの！

「愁君をここに呼んで」

「だからさあ」

しつこいな、と受付の男は眉を顰めて私を見下ろしていて、私は彼を睨み返した。

私が『葵』と名前を呼び捨てにしている時点で気付かないんだろうか？

「梨桜さん！待って下さいって言ったのに」

私に追いついた桜庭さんに「一人で引っちゃダメですよ」と窘められた。

「桜庭さんの知り合いですか」

受付の男は桜庭さんに頭を下げると、私と彼を交互に見ていた。

「…この人はウチの姫だよ」

「え？姫って…」

呆気にとられている受付の男。

私はそれを無視して桜庭さんに向き直って抗議した。

「桜庭さん、それ嫌」

桜庭さんは優しく笑いながら「嫌でも姫は姫です」と言っていると受付の男に葵がいるか聞いていた。

「葵さんならいつもの席に…ちょっと!!」

これ以上時間を無駄にしたくなかったから、受付の男を押しつけて店の中に入った。

薄暗い店の中で、中にいる人に「葵は？」と聞くと奥の席を指して、教えられた方を見ると、奥の席にいる葵が見えた。

煙草を銜えて何を考えているのか分からない顔をしている。

両脇には女が座っていてベタベタと触られているのにそれを退かそうともしない。

あんなの葵じゃない。

葵達がいる席に近づくと女達に睨まれた。

「誰の許可でVIP席に来てるの」

女を睨み返すと倍の目力で睨み返された。

女って…怖い。でも、ここで引き下がるわけにいかない。

「梨桜ちゃん？」

私に気付いた愁君が私をソファに座らせようとしたけれど首を横に振って葵の前に立った。

私を見ようとしなない葵はグラスを口に運んで煙草を吸っている。

「いつまでそうしてるつもり？」

「うるせえな」

葵にベタベタと触り続けている女が目障り。

私には付き合う人の事で口を出すのに自分はまわりに女の子を侍らせるんだ…

自分勝手過ぎるよ。

「葵」

葵に声をかけても視線すら向けなくて私を無視していて、コジ君がハラハラした顔で私と葵を見ている。

周りまで巻き込んで情けない…

「聞こえてるんでしょう？」

それでも私を見ようとしなない葵にプツンと堪えていたものが切れた。

「いい加減にして！」

大きな声を出すとゆっくりと私を見たけれど、それでも何も言わなかった。

葵から拒絶されて、悲しくて悔しくて涙が出た。

「もういい！そんなに嫌なら私が出ていく！！！」

バックからキーホルダーをとって葵に投げつけると葵の胸に当たって落ちた。

葵が何か言いかけたけれど、葵に背中を向けて涙を拭ってVIP席を後にした。

「梨桜さん、待って下さい！！！」

コジ君が私を追いかけてきてくれたけど、立ち止まらないで店から出た。

「……っ、葵のバカ」

葵がこんなに頑固だなんて思わなかった。もう知らない！好きにすればいい！！

「梨桜さん、帰りましょう。送って行きます」

桜庭さんが待っていてくれて、車のドアを開けてくれたけど、乗りたくなくて首を横に振った。

「梨桜さん？」

「ウチには帰らない」

「わがまま言わないで…帰りましょう」

帰れないよ。…だって家の鍵を葵に投げつけちゃったもん。葵が鍵を開けてくれないと私はマンションにも入れない。

「…もういいの。私も家出する」

桜庭さんを見上げて言うと、ギョツとした顔をして「梨桜さん！？冗談は止めてください」と慌てていた。

「桜庭さん、私本気だよ」

足りないものは…(9) side…「ジ

「梨桜さんは？」

愁さんが首を横に振った。

梨桜さん、何処に行っちゃったんですか！？

クラブのVIP席で梨桜さんは葵さんにマンションの鍵を投げつけて店を出て行ってしまった。

あれから2日、葵さんは家に戻ったけれど、今度は梨桜さんが帰って来ないらしい。

「何処に行っちゃったんですかね」

梨桜さんがいつ帰ってきてもいいように家から出ない葵さん。口には出さないけど、凄く心配していると思う。

今日は臨時の定例会で梨桜さんがウチの学校に来るはず。それに合わせて学校へ来た。

「知らねえ…男のところにもいるのかもな」

軽く言いながら思いつきり眉間に皺が寄っている。葵さん、口調と表情が正反対ですよ。

「梨桜ちゃんはそんなことはしないとと思うけどな。藤島に聞いてみるよ」

「嫌だ。どっちにしてももうすぐ来るだろ。捕まえて連れて帰れば

いいだけの話だ」

梨桜さんが帰って来なくて心配しているのに…素直じゃない人だ。この二人には喧嘩して欲しくないのに…オレ、仲がいい二人を見るのが好きなんだよな。

溜め息をつくると生徒会室の扉が開いた。

やっと梨桜さんに会える！！

入って来たのはいつもの三人。一番会いたかった人がいない。

「梨桜さんは？」

オレが聞くと海堂が「は？」と目をぱちくりさせている。そんなに変な事聞いたか？

「梨桜さんはって聞いたんだよ」

もう一度言つと、海堂はムツとしながら答えた。

「風邪だろ？昨日から休みだよ」

風邪？

梨桜さん、大丈夫なのか？

「宮野、梨桜ちゃんの具合どうなんだよ？お前らの風邪がうつったんだろ？」

大橋の言葉に愁さんが顔を強張らせた。

葵さんが言つとおりに、もしも梨桜さんが藤島のところにいたら大

橋からこの発言は無いよな…
まさか……

「なんだよ、梨桜ちゃんの具合そんなに悪いのか？」

「葵さん！」

葵さんを見ると藤島と睨み合っていた。今はそれどころじゃないですよね！？

睨み合いなんか後にして下さい！！

「藤島…梨桜ちゃんはお前の所にいるよな」

愁さんが言つと藤島が怪訝な顔をした。
そうだよな、変な質問だよな。

「……梨桜に何があつた？」

険しい顔をして愁さんを睨む藤島を見て、梨桜さんは藤島の所にい
ないのを確信した。

ヤバイ…梨桜さんはどこに行った！？

「おい！答えるよ。梨桜に何があつた！？」

愁さんは携帯を操作しながら藤島を見た。

「葵と喧嘩をして…梨桜ちゃんが二日前から家に帰ってない。連絡
も取れない」

「え？…寛貴おまえ」

大橋が藤島に聞くと、藤島は携帯を取り出して画面を確認していた。

「梨桜ちゃんから学校休むってメール来たんだろ？」

「ああ。でも1回だけだ。その後は来てない」

藤島が携帯を耳に当てていたけれど、舌打ちをして携帯を胸ポケットにしまっていた。

そうなんだよな…愁さんが何回電話しても電源が入っていないアナウンスに切り替わるんだ。

オレが溜息をついている脇で海堂が携帯で誰かと話し始めた。

「オレ…海堂だけど、なあ、梨桜ちゃんてお前のトコにいる？」

電話の相手は笠原さんだろうか？

そうだ、彼女の所にいるかもしれない！期待して海堂を見ると、奴の眉が顰められた。

「………そっか、分かった。笠原、梨桜ちゃんから連絡があったらすぐに教えてくれないかな。………ああ、どこにいるかも聞いて欲しい。

………悪い、頼んでいいか？よろしく」

笠原さんの所にも居ないんだ…

「兄貴？もしかして、梨桜ちゃんそっちに行かなかった？」

愁さんが5代目と話しているのを期待を込めて見た。

「え？来た！？」

梨桜さん5代目のトコにいるのか！？

電話をしている愁さんにしがみつくようにして会話を聞いた。

『…梨桜ちゃんの具合はどうだ？昨日の様子だと熱が出ると思うんだよな』

昨日？熱！？

愁さんに押しのけられながらも必死にしがみついた。

「熱って？そんなに酷いのか？」

『なんだよ、葵から聞いてないのか？体がだるくて仕方がないって言って来たぞ。熱が下がらなかつたら連れて来いって葵に言っておけ』

この口ぶりからすると…5代目は梨桜さんが家に居て葵さんが看てると思ってるんだ。

…って誰でもそう思うよな。

「酷くなりそうな感じだった？」

『体力が無いからな…』

愁さんが眉を顰めると、それを見ていた葵さんが立ちあがった。

「葵さん！？」

愁さんが葵さんの腕を掴んで部屋から出て行くことを止めて

いた。

電話を終えた愁さんは葵さんを無理やり椅子に座らせた。

「葵、梨桜ちゃんが行きそうなところはどこだ？」

「…」

少し考えていたけれど、首を横に振った。

… 葵さん、何て顔してるんですか。オレの方が泣きたくなります。

「答えるよ」

藤島が言つと葵さんは眉根を寄せて目を閉じた。

「葵、梨桜ちゃんは熱が出て動けないのかもしれない。行きそうなところを片っ端から捜すしかないだろ」

愁さんが答えを促すと、葵さんは首を横に振った。

「無い。東京に親戚はいないし、梨桜が親しくしている友達はいない」

梨桜さん、無事なんですか！？

どこにいるんですか…

足りないものは…(10)

「……」

こんな筈じゃなかったのに…完全に読み間違った。

「うう…」

熱い。

苦しい。

頭が、体中が痛い。

葵に家の鍵を投げつけた後、家に帰らないと言って引かない私に桜庭さんは困り果てた顔で私を宥めようとしたけれど、私は首を縦に振らなかった。

「ここからは一人で大丈夫」

「ダメです。帰りますよ」

「葵の所には帰らない」

「一人でどこに行くんですか！危ないでしょう！…！」

このやり取りを何回もして、妥協した桜庭さんは一つの提案をした。

『オレの姉貴が勤めているビジネスホテルがありますから今日はそこに泊まって下さい。絶対に明日は家に帰って下さいね!』

『これは譲りません!』

強く押し切られてしまった。

寛貴に話そうかと思っただけど、それが葵に知られたら拗れるし、他に行くあてもなかったから桜庭さんの言葉に頷いた。

『明日は必ず家に帰ってくださいね。葵さんと良く話をして仲直りして下さい』

何度も念を押されたけれど、桜庭さんが予約を取ってくれた宿泊日数を変更した。

宿泊日数は一泊から三泊へ…桜庭さんには申し訳ないけど、あんなに頑なに私を拒絶した葵が家に帰って来るとは思えなかったから。

葵、分かってる？葵から拒絶されたら私には行くところが無いんだよ。

パパか慧君のところに行ったら、また離れて暮らすんだよ…

私はそんなの嫌、葵と一緒にがいい。

着替えや細々としたものを買い揃えてビジネスホテルに泊まったん

だけど…次の日の朝に異様な倦怠感に襲われて体を起こすことができなかった。

一度家に戻ろうと思っていただけだと諦めた。葵が家に帰っていたとしても、こんな状態でまともな話なんかできない。

その日は学校に休む連絡をして、寛貴にもメールで伝えて涼先生のところに行つて薬をもらった。

そこまでが限界で病院からホテルの部屋に帰るなりベッドに潜り込んで、そこから先は覚えていない。

今も、体が熱くて目が覚めた。

時間を確認したくて携帯を見ると、充電切れで電源が落ちていた。

何も食べないで、薬も飲まずに寝てしまった。

風邪を悪化させたら涼先生に怒られるんだろうな…

何かを口に入れなきゃ、そう思って無理矢理体を起こした。

「気持ち悪い…」

汗でベタついた体をシャワーで洗い流そうとして『葵に怒られる』
と思つて戸惑つたけれど、ここに葵はいないからそのままシャワーを浴びた。

そう、ここに葵はいないんだよね…

熱を出すといつも見てくれた葵がない。

葵はまだ怒ってるのかな…

ホテルの外に出ると周囲は暗かった。

「暗い…」

今って夜だったんだ。日付が変わっていないのか、変わった夜なのか…全然分らない。

私は何時間寝てたんだろう？

暗い空を見上げるとクラクラする。

溜息をついて歩き出すと、足を踏み出す毎にグラグラと体が揺れた。

車道と歩道の境目に立てられているフェンスに腰を預けるようにして寄りかかり、眩暈が治まるのを待った。

やっぱりまだ寝てなくちゃダメなのかな…部屋に戻ろうかな。

「梨桜さん！」

急に名前を呼ばれて顔を上げると、ホテルの方向から人が走って来るのが見えた。

…桜庭さん。

家に帰らなかったのがバレちゃったかな…

息を切らせて私の所まで走って来ると、想像通りの言葉を言われた。

「どうして帰らなかったんですか！」

大きな声が頭に響く…
桜庭さんは「どうしてですか」と言いながら眉尻を下げて困ったような顔をしていた。

「…帰るって約束したじゃないですか」

もしかして、葵に何か言われた？

「ごめんなさい、目が覚めたら具合が悪かったの」

そう言うと、ますます困ったような顔になってしまった。

「葵さんに連絡しなかったんですか？」

「だって…今連絡したら、また葵に看病させちゃうでしょ？」

「心配してますよ」

どうだろう？

心配してくれてるかな…

首を傾げて桜庭さんを見ると、少し屈んで私の目線に合わせて「
帰りましょう」と言った。

「今は帰れないよ。もう少し具合…きゃあ！」

急に後ろに体を引かれて、フェンスに腰を下ろしていた私は背中から地面に落ちそうになった。

でも、地面に落ちることなく反転したままの視界に映ったのは、見慣れたサラサラの髪の毛。

「…」

吃驚して声が出なかった。

どうしてここににいるの？まさか、心配して捜しに来た…なんてね。バランスが悪くて、今にもお尻から地面に落ちてしまいそうな状態を何とかしようと思って身動きしようとしたら、ぎゅっといつもとより強く抱き込められた。

「…ごめん」

聞き逃しそうになる位の小さな声を聞いて身体から力が抜けてしまった。

私もごめんね…言い過ぎた。

「梨桜？」

葵、もう一つごめんね…

「おい、梨桜!？」

葵に抱えられているのに頭と体がグラグラ揺れていて、目が回る。もう…駄目。

梨桜さんはやっぱり帰ってこないんだろうか…

『『捜せ』』

二人の総長命令から数時間…梨桜さんが見つかったという報告は上がってこない。

熱を出して苦しんでいるんじゃないか、そう思うと居ても立っても居られなかった。

クラブで見た梨桜さんの泣き顔が忘れられない。

…あれ、そういえばどうして梨桜さんは葵さんのとこに来れたんだ？
葵さんは梨桜さんをクラブに連れて行ったことは無い筈だ。

「愁さん」

チームの奴等に支持を出すのに忙しい愁さんはオレが呼びかけてもチラリと視線を投げて寄越すだけで、すぐに他の電話に出てしまった。

愁さんが葵さんの居場所を教えたのか？

…でも、クラブで梨桜さんを見た時の愁さんは驚いていて、アレが演技だとは思えない。

「小嶋、何か思い当たることでもあるのか」

藤島に聞かれて、気になることを言った。

「葵さんは今までクラブに梨桜さんを連れて行ったことが無いのに、どうしてあの場所が分かったんだろ？…愁さんが教えたんですか？」生徒会室にいた全員の視線が愁さんに集まり、愁さんは電話をしながら「違う」と首を横に振っていた。

「愁さんじゃないんですか？…どうして梨桜さんは」

葵さんは携帯でどこかに電話をしていた。

「桜庭、梨桜をオレの所に連れて来たのはおまえか？…どういう事だよ、どうしてお前がそれを知ってるんだ？」

険しい表情の葵さんは電話の向こうの桜庭に問い詰めると「…いや、悪かった。そうしてくれて助かった」桜庭に礼を言っただけで電話を切っていた。

「梨桜の居場所が分かった。連れ戻して来る」

葵さんが立ちあがると藤島も立ち上がった。

「梨桜と喧嘩中なんだろ？おまえの顔を見た梨桜が逃げたらどうするんだ」

「逃がさねえよ。…オレが迎えに行く」

「梨桜ちゃんと同じき違いになったらどうするんだ？おまえは家に居た方が…」

愁さんが言つと、葵さんは藤島に向かって何かを投げつけた。片手でキャッチした藤島は手にしたモノを見ると、葵さんを見た。

「オレが居ない間に梨桜が帰ってきてても絶対に逃がすなよ？」

睨みつけながら言つ葵さんに藤島はフツと笑いながら「逃がすかよ」と答えていた。

藤島の手に握られていたのは、梨桜さんが葵さんに投げつけたマンシヨンの鍵。

愁さんは二人のやり取りを見るとオレに向かって、視線で「葵について行け」と指示を出した。

「梨桜さんは何処にいるんですか？」

車の中で葵さんに聞くと、腕を組んで目を閉じたまま口を開いた。

「桜庭の姉が勤めているビジネスホテル。桜庭は次の日に家へ帰ると約束をさせてホテルの予約を取ったらしい」

でも、家に帰らなかつた梨桜さん。

帰りたくなかつたのか、帰れなかつたのか…後者であつて欲しいと思ひながら梨桜さんの無事を願つた。

「葵さん、あそこにあるホテルです」

目の前にホテルがあるのに、渋滞で車が進まない。
イライラしながら梨桜さんが居るだろう、ホテルを見ていると。歩
道を走って行く男が目に入った。

「あれって…」

「桜庭」

ほぼ同時にオレと葵さんが眩くと、葵さんは車のドアを開けて外へ
飛び出した。

「葵さん！」

車から降りて葵さんの後を追いかけると、梨桜さんを抱きかかえて
いる葵さんが居た。

そこには桜庭も居て心配そうに梨桜さんを見ていた。

「葵さん、梨桜さんは？」

葵さんの腕の中でぐったりとして目を閉じている梨桜さんは苦しそ
うに呼吸をしていた。

「このまま病院に連れて行く」

「分かりました。姉貴に話をして梨桜さんの部屋から荷物を取ってき
ます」

良かった。

葵さんはオレを見て

「梨桜の荷物を頼む」

そう言うと、梨桜さんを抱えたまま車に乗り込んだ。

「ハイ」

車が走り出すと、桜庭がホツとしたように息を吐いていた。

良かった、やっと梨桜さんが葵さんの所に戻って来た。

足りないものは…(12) side…コジ

数か月前までは、絶対にありえなかったこの状況。

これといって目的があるわけでもなく青龍のチームハウスに集まっているオレ達。

青龍と朱雀はいつからこんな風につるむようになったんだ？

この場に居ないから余計に実感させられる。

梨桜さんの存在が凄く大きいっていう事。

「梨桜ちゃんの熱が下がった」

愁さんが携帯を見ながら一言。

「見舞いに行く！」

立ち上がった海堂につられてオレも立ち上がった。

「オレも行きたいです！」

『今、手が離せないから勝手に上がってこい』

葵さんの言葉に二人が住む部屋に入ったんだけど…

「野郎ばかり…鬱陶しいな」

オレ達を見るなり葵さんが言い放った一言。

確かにオレもそう思うけど、そんなにハッキリ言わなくてもいいと思う。

その顔に言われると、傷つきます。

「コジ、オレは今手が離せないからコーヒー淹れる」

オレはキッチンを借りて人数分のコーヒーを淹れた。

葵さんは手にタオルとドライヤーを持って「梨桜！」と呼ぶと梨桜さんが自分の部屋から出てきた。

「皆、来てくれたんだ」

部屋着なのにすげー可愛い梨桜さん。

手触りが良さそうなモコモコしているワンピースを着ていて耳と尻尾をつけたら羊になりそうだ。

「もう大丈夫なの？」

大橋からお土産を渡されて「ありがとう！」と笑みを浮かべた梨桜さん。

この顔を見るのは久しぶりだ。

「梨桜」

もう一度葵さんに呼ばれると「ちょっと待っててね」と言い、リビングの隣の部屋に行くと葵さんの足の間にストン、と座ってしまった。

「コジ、梨桜にカフェオレ淹れてやって」

「ハイ！」

葵さんがオレに言うと、ドライヤーで梨桜さんの髪を乾かし始めた。手が離せないって、…これ？

梨桜さんの髪の毛を乾かした葵さんは梨桜さんの為の食事を作り始めた。『葵のご飯は美味しいよ』いつも聞いていたけれど、料理をするのはあまり見たことが無かった。

「何作ってた？」

愁さんが聞くと片手で卵を割りボウルに落とす。すげー！

「フレンチトースト。具合が悪いとき梨桜が文句を言わないで食う数少ないメニュー」

手際のいい葵さんに見惚れていると、後ろの方で「梨桜ちゃん！」と海棠が呼んでいた。

海棠に手招きされて、藤島の隣に座った梨桜さんを大橋が笑っていた。

何時の間にか藤島の隣が定位置で、自然に座っちゃうんだ。

拗ねた葵さんの気持ちが少しだけ分かるかも…

「課題のプリント」

「…うわ、いっぱいあるね」

捲りながら見ている梨桜さんから藤島がプリントの束を取り上げてテーブルの上に置いた。

「課題はやらなくていいから早く治せ」

「ええ?!」

藤島の言葉に思いつきり抗議している海堂。梨桜さんは吃驚してそれを見ていた。

「悠、お前の企んでる事くらいお見通しなんだよ。ココで梨桜ちゃんの答えを写すつもりだったろ」

大橋に言い当てられて拗ねたように口を尖らせている海堂を見てクスと笑っている梨桜さんは楽しそうだ。

あー…なんか、複雑。

さつきから繰り広げられている光景はいつもの二人のやり取り。オレはこれが見れて満足だ!

「食べたら寝ろよ」

「眠くない」

「いいから寝ろ。昨日みたいに編み物なんかするなよ」

「だって、課題だもん」

ぶいっと顔を背けて野菜スープを飲んでいる梨桜さん。
食事をしながら『寝ろ』『眠くない』の応酬をしている。

このやり取りを見ていると、頬が緩む。

「これ以上拗らせてどうすんだよ」

「…」

梨桜さんが渋々頷くと、葵さんがフォークを持ち、フレンチトーストを刺して梨桜さんの唇をツンツンとつついた。

「手が止まってる」

梨桜さんは口を開いてパクリと食べた。

メイプルシロップが口の端についてしまい、梨桜さんが自分で拭う前に葵さんが指で拭っていた。

「わざとでしょ」

ムツと葵さんを見ている梨桜さんにニヤリと笑って返す葵さん。

「お前の食い方が下手なんだよ」

「うそ。たこ焼きのことまだ根にもってるんだ」

「…バカかお前は、もっとデカイ口あける」

葵さんを睨んで、口を開けている梨桜さん。

「フレンチトースト美味そう」

つい、口に出してしまうと梨桜さんが「食べる？」と笑って聞いた。

「え…いいんですか？」

「うん、いいよ」

「いいから早く口を動かせ」

葵さんはオレを睨むと梨桜さんの口にフレンチトーストを運んでいった。

「雛鳥みてえ」

大橋の言葉に藤島が苦笑していた。

オレも思う。これが本当の餌付けだったりして…

お手上げです… side:悠

どうして、こうなった？

誰か、收拾つけてくれ！！

梨桜ちゃんの叔父さんが姉の一周忌の為に東京に戻って来た。

それに合わせて紫垣の代々の幹部が挨拶に来ているのはいいんだけど…

溺愛している姪に会わせて欲しいと頼み込んで、初代は渋々許可をした。

オレ達は初代から『梨桜には絶対に酒を飲ませるな！！』きつく、きつく言われていたんだけど…

「いつも思ってたんだけど、悠君で可愛いよね！」

朱雀のメンバーが溜り場のようになっているクラブで、ニコニコ笑いながらオレに抱きついていている梨桜ちゃん。

嬉しいんだけど、超困る！！

「梨桜ちゃん！水飲んで落ち着こうか」

青くなった拓弥さんが必死に宥めているけれど、ご機嫌な梨桜ちゃんはオレの首に手を回してぎゅーっと抱きついた。

「ヤダ！悠君を一人占めするんだもん」

「梨桜ちゃん、苦しい…」

華奢な腕がオレの首に巻き付いていて、きゅっと抱きつかれて…す
げーオイシイ状況なんだけど、この態勢って結構苦しいんだな…

「悠、てめえ…」

代々の幹部に睨まれているけれど、オレは負けじと睨み返した。
ふざけんなよ！

「梨桜ちゃんに酒飲ませたの誰だよ！！」

初代と宮野と寛貴さんは少し遅れてこの会場に来る事になっていた。
それまでに梨桜ちゃんの酔いを醒まさないとまずいんだよ！！！！

「初代は絶対に飲ませるなって言ったんだぞ！」

代々の幹部達はオレから視線を避けるように目を反らした。
きつたねーぞ！初代に言い訳しろよ！！

「あーあ…梨桜ちゃん、駄目だろ」

頭の上から声が聞こえて、首を逸らして見上げると5代目が笑いな
がらオレ達を見下ろしてた。

「お前達が飲ませたのか？」

「そんな訳ないじゃないですか！気がついたらこうなってたんです

よ。何とかして下さい!!!」

拓弥さんが珍しく焦った声で言い、5代目はソファに座っているオシ達の目線にあわせて屈んだ。

「梨桜ちゃんは酒が入ると、割増しで可愛いんだけど…今日は慧さんがいるから残念だな」

何でもいいから早く!

オレの理性が持たない!!!

「おい、りんごジュース用意しろ」

カウンターに向かって言うと、5代目は梨桜ちゃんに向かって両手を差し出した。

「梨桜ちゃん、おいで」

名前を呼ばれて振り返った梨桜ちゃんは5代目を見るとニッコリと笑った。

「涼先生!」

梨桜ちゃんがオレから手を離して5代目に向かって手を伸ばすと、脇から誰かが彼女の腕をとった。

「役得だったのに…残念」

5代目は抱き抱えられた梨桜ちゃんを見てクスクスと笑っていた。

「慧君！」

初代は自分の首に抱きついていている梨桜ちゃんを片手で抱えている。

「梨桜、何を飲んでたんだ？」

優しい声で聞いているその姿は表面上は“優しい叔父”でも、目が笑ってないんだよ…

「アレ」

テーブルを指差す梨桜ちゃん、周りにいる幹部は青ざめている。
あーあ、オレはどうなっても知らねー！

「涼」

初代が言うと、5代目は梨桜ちゃんが飲んでいたグラスを初代に渡し、一口飲んで眉を顰めた。

「ビッグアップルか？梨桜、誰にこのグラスをもらった？」

あくまでも梨桜ちゃんに優しく問いかける初代が怖い！！
オレと拓弥さんが息を吞んで初代と代々の幹部を見た。

青ざめるくらいなら飲ませなきゃいいのに

「あ、寛貴だ！」

初代の腕の中から身を乗り出して手を伸ばした梨桜ちゃんは、そのまま寛貴さんに抱きついた。

「梨桜、危ないだろ」

初代は梨桜ちゃんの身体を支えながら苦笑していた。梨桜ちゃんて酔っぱらうと抱きつき魔になるのか？

「梨桜、誰にもらった？」

寛貴さんに抱きついていている梨桜ちゃんは、顔をこちらに向けてグラスを渡した元幹部を見つけるとニツコリと笑った。

「あの人だよ、黒いシャツを着てる人」

初代は分かったと、頷くと梨桜ちゃんを寛貴さんに預けて真っ青になっている元幹部のところに行ってしまった。

「藤島、梨桜の酔い醒ましておけよ」

梨桜ちゃんは寛貴さんに抱きかかえられてご機嫌だな。

「梨桜、酒飲んだのか？」

「飲んでないよー」

いや、飲んだから。誰が見ても酔ってるからね。

「酔ってるだろ」

「酔ってないーい」

酔っぱらいは皆そう言うんだよ。

「…」

寛貴さんは突然、梨桜ちゃんの唇に軽く振れるとペロリと舐めた。うわっ！寛貴さん、何するんですか！！

「…これが酒じゃなかったらなんなんだよ」

眉根を寄せる寛貴さんに梨桜ちゃんはフツツと笑っている。

「リンゴジュースだったよ？」

いや、アレはカクテルだったんだよ…オレと拓弥さんが目を離れた隙に飲まされちゃったんだよ。

「てめえ！なにやってんだよ！」

寛貴さんが梨桜ちゃんをソファに座らせようとしていると、怒鳴り声が店に響いた。

ああ、うるさいのが来た！話が拗れる！！

遅れて店に入ってきた宮野は眉を吊り上げて怒っていて寛貴さんはニヤリと笑って応酬していた。

「うるせえな、見て分かんたろ？」

そうだな、これはどう見ても梨桜ちゃんが抱きついてるぞ！

「梨桜！」

宮野が言つと、梨桜ちゃんは「葵！」と今度は宮野の首に抱きついていた。

梨桜ちゃん、キミは“抱きつき魔”決定。
二度と外では酒を飲まない方がいいよ。

総長二人が翻弄されて、疲れた表情を見せている…これって凄い光景だよな。

梨桜ちゃんは宮野に凭れながら幸せそうな顔をして眠っていた。

初代と5代目が酒を飲んでいて、このVIP席は凄く穏やかな空気が流れていた。

「ああ、い…」

「ん？」

目を閉じたまま宮野を呼んだ梨桜ちゃんは、奴が返事をして目を開かなかった。

「葵……ごめん、ね」

目尻から涙が一筋流れた。

涙を拭う宮野の顔は辛そうに眉根が寄せられていて、それを初代がジッと見ていた。

「ごめんね…」

何の夢を見ているのか…梨桜ちゃんは宮野に謝りながら涙を流していた。

進路相談と大好きな人？ (1)

「…だるい」

朝、目が覚めたら頭痛がして体がだるい。

また風邪を引いた？そう思って自分の喉元に手を当てて見るけれど、風邪の調子悪さとは違う感じ。

「おはよ…」

着替えてリビングに行くと、ジーツと私を見ている二人がいた。

「どうしたの？」

「…調子が悪そうだな」

慧君に聞かれて頷いて両手で顔を覆った。
顔もむくんでいる気がする。

「朝起きたら、頭が痛くてだるいの…どうしてだろう」

「どうしてって…梨桜？」

やっぱり慧君と葵が私を見ている。今日の私ってそんなに酷い顔してるんだ…

学校に行くの嫌だな。

「覚えてない。とか言わないよな」

覚えてない?…何の事

「何が?」

そう聞いたら、慧君が笑い出した。

何がそんなにおかしいのか、ゲラゲラ笑い過ぎ!

「慧兄、うるさい。梨桜、二度と酒は飲むなよ」

葵に言われて首を捻った。

お酒なんか飲んでないよ。

「飲んでない」

「飲んだ。つつーか、飲まされたんだよ。覚えてないのか?」

昨日は慧君の後輩さん達と会って、挨拶をしてご飯を食べたんだよね……

そう言えば、途中からの記憶が無い。

あれ?どうやって帰って来たの?

「私、変なことした?」

そう言うと、今まで笑っていた慧君が眉を顰めて私を見た。

「変な事したら困るから二度と酒は飲むな。いいな?」

どうしよう、本当に何も覚えていない。

…私、何をしたんだろう?

慧君に学校まで送ってもらつと、携帯で誰かと話し始めた。

「オレだ。…今日は午後からだつたよな?…:…校長が?うるせえつて言っておけ。ぜつたいに、嫌だ!」

誰と話しているのか、相当嫌がつている。

「ふざけんなよ、勝手に決めるな!!…おい、安達!!」

切れてしまったらしい携帯を睨みながら「くっ…:…そ、あの狸!!」
元総長の片鱗を見せていた。

安達つて安達先生?狸つて?

「慧君?」

ハンドルに額を付けて「嫌だ!」と唸っている。

「どうしたの?」

「狸が梨桜の面談が終わつたら特別授業をしろつて言い出した…」

面談?…特別授業?

意味が分からなくて慧君を見ると、ハア、と溜息をつきながら教えてくれた。

「今日は梨桜の3者面談の予定だったんだけど、それが終わつたら

2年の化学の授業の講師をしろって言い出しやがった」

3者面談？そんなの聞いてないんですけど…

「安達がオレか義兄さんがいる時に面談をしたいって煩かったんだよ。まだ決めてないんだろ？」

そつえば、「理系か文系」どっちか決めてくれって先生から言われていたけどあんまり深く考えていなかった。

「面談は分かったけど、狸って誰？」

「狸は狸だよ。校長」

ああ…狸、ね…

全校集会や、朝会の時にしている校長先生を思い出してみれば、確かにあの大きなお腹が似ているかも。

「慧君が通っていた頃から知ってるの？」

「狸はオレが生徒会長だったときの顧問だよ。相変わらず人の事を使いやがって」

ブツブツ文句を言っている慧君に「午後の面談でね」と手を振って校舎に入った。

1時限目は体育で私は自習。私はまだ少しだけ痛む頭を抱えて屋上へ避難。

葵から『一日酔いだ！』って怒られたけれど、私は「リンゴジュースだよ」って言われて飲んだんだもん。
私に罪は無いと思う…

…どこからか煙草の匂いが流れてきている。

寛貴に置いてもらったベンチに座っていたら、ウトウトと眠ってしまった。

慧君からもらった鍵で屋上へ来た時に鍵は閉めた筈、ここに来ることが出来るのはマスターキーを持っている人だけ。

おまけに堂々と学校で煙草を吸うなんて心当たりは彼等しかない。

「!?!」

目を開くと、目の前に顔があって吃驚した。

「梨桜ちゃん、おいで〜!」

しかも、私に向かって両腕を伸ばしている。

どうして拓弥君が“抱っこ”のポーズ?

「あ、固まった」

私が動けないでいると、何が楽しいのか大爆笑している。
相変わらず人をからかうのが好きだよ、私は拓弥君の玩具じゃないんだから!

「悠に抱きついて、寛貴に抱きついて…オレだけ抱きつかれてないなんて不公平じゃねえ？」

え？

「あれ、その顔…もしかして覚えてない？」

今、拓弥君は『悠に抱きついて、寛貴に抱きついて』って…ええっ!？

「ウソッ!！」

「嘘じゃねーよ。正確には悠 初代 寛貴 宮野、だな」

ニッコリ笑って両腕を私に伸ばしている拓弥君。
嫌だ!!私っては何てことしたの!？

…だから、今朝葵と慧君は私を見てたんだ。

「ほら、おいでよ梨桜ちゃん」

両手で顔を覆って思いつきり首を横に振った。

「…いい加減にしろ、拓弥」

「そんなに睨むなよ。ったくおまえは…冗談だよ!やめろって!!
…オレは先に行くからな」

慧君は『変な事したら困るから二度と酒は飲むな。いいな?』って言うだけ、もう変な事をしちゃったんじゃない!!

どうしよう!!

「梨桜」

なんで覚えてないのよっ!?!?!でも、覚えてたらもつと恥ずかしいかも…

人前で寛貴に抱きついたんだ…何人が見ていたんだろう…

「落ち着け」

手を取られて、顔を上げると寛貴の顔が目の前にあった。

「…覚えてないのか?」

頷くと「本当に覚えてないのか?」と確かめられてもう一度頷くと私を抱き寄せた。

温かい。寛貴の胸に頬を寄せると、腕に込められる力が強くなった。

「寛貴、苦しいよ?」

苦しいって言ったのに、ぎゅゅと強く抱きしめられた。

本当に苦しいよ!

「…梨桜、宮野に言っておけ」

葵に?

何を言い出すんだろうと思って寛貴の顔を見上げると触れるだけのキスをして、いつもの私が大好きな表情で笑みを浮かべた。

「オレを甘く見るな」…分かったか?」

「何それ」

「そう言えば分る」

そう言つと寛貴はもう一度キスをした。

進路相談と大好きな人？ (2)

寛貴に抱き締められてキスをして…二日酔いなんてどこかに飛んで行ってしまったような気がする。
私って、ゲンキン？

梨桜、と名前を呼ばれて顔を上げると、難しい顔をしていた。

「二度と外では酒を飲むな」

「それ、慧君と葵にも言われた。…飲まないよ」

そう言うと、クツと笑って頭をポンポンと叩いていた。

寛貴に凭れてぼーっと空を眺めていると、授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

次の授業は受けなきゃいけない…サボったら今日の面談で安達先生から慧君に話されちゃう。

「今日ね、午後から慧君が来るの」

「…」

あ、今少しだけ『メンドくせえ』って思ったでしょ。

一瞬だけ強張った寛貴の頬をツン、と突くと手を掴まれてじろりと睨まれた。

「私の3者面談をした後に特別授業をするように、って言われてた

んだって」

「特別授業？」

「うん“2年の化学の授業”って言ったと思う」

「梨桜の面談は何時からだ？」

「午後って言ってたけど時間は聞いてなかった」

「凄く嫌そうな顔…もしかして？」

「午後に化学の授業があつた？」

大きな溜め息をついている寛貴。授業があるんだね…
慧君も凄く嫌がっていたけど、生徒も嫌みたい…逆らう事が許されない初代総長が講師の授業なんて、窮屈だよな。

本気で嫌そうな寛貴には悪いけれど、こんな彼も可愛いって思えたりして…

「何が可笑的なんだよ」

クスクス笑いながら寛貴を見ていたら、またジロリと睨まれてしまった。

きっと可愛い何て言ったら怒るよね？だから「何でもないよ」「そう言っただけにチュッとキスをした。」

「…」

「次の授業が始まるから行くね？」

寛貴に手を振って教室に戻った。

「梨桜ちゃんのお弁当、今日も美味しそうだね」

食堂で麗香ちゃんが感激している今日のお弁当は葵が作ってくれた。

「味見する？」

「いいの？」

どうぞ。とお弁当を差し出すと、野菜を豚肉で巻いた野菜ロールを食べていた。

「美味しい！梨桜ちゃんて本当に上手だね」

拓弥君も「美味そうだな」と言うからお弁当を差し出すと卵焼きを食べていた。

「葵の卵焼き美味しいでしょ？」

目を丸くして驚いている拓弥君。そんなに吃驚した？

「マジ？」

「本当だよ。寛貴も食べる？」

じっとお弁当を見ている寛貴に聞くと、首を横に振っていた。

「いや、いい。梨桜のおかずが無くなるだろ」

自分が食べていた定食のお皿から唐揚げを一つ、私のお弁当箱に置いて「食べる」と言った。

寛貴って私にお肉を食べさせたがるよね…

「マジかよ、あの人が？」

「すげー」

食堂がザワついて、何だろうと思いきちらを見ると安達先生がいて、誰かと一緒に会話をしながらこちらに歩いてきていた。

「梨桜ちゃんの叔父さん、相変わらず素敵だね」

いつもカッコいいけど、スーツを着ている慧君は別格でカッコイイね。

姪でも見惚れちゃう。

「げ…」

拓弥君、聞こえたら怒られると思うよ…私、フォローしてあげられないかも…

進路相談と大好きな人？ (3)

「大橋、今、オレを見て“げっ”って思っただろ」

「そんな事は…無いっす」

言い当てられた拓弥君は顔を横に向けて慧君の睨みをかわしていて、安達先生は慧君を見ながら苦笑していた。

「梨桜、二日酔いは治ったみたいだな」

私の隣に座ってニッコリ笑って聞かれたけど、慧君の前で安達先生の笑顔が固まっていた。

「慧君！」

先生の前で何てこと言うの!?

「朝は食べなかったんだからちゃんと食べないと駄目だぞ」

「東堂、おまえだけは染まらないってオレは信じてたんだぞ」

悲しそうな眼をして私を見る安達先生の前で「違います!」と慌てて訂正した。

「でも、二日酔いになったんだろ?先生は信じてたのに…」

「おまえの後輩が飲ませたんだぜ、後でシメテおけよ」

物騒な事を言い出した慧君に安達先生の眉がピクリと動いた。
おまえの後輩って…安達先生って？

「そつえば、おまえ昨日いなかったよな」

「『初代と初代の姪に会う』そんなバカげた会合に行くわけ無いじゃないですか！毎日顔を会わせてる自分の教え子ですよ！？しかも次の日は3者面談の予定なのに、クラブで会った次の日に何を指導しろっていうんですか」

熱く抗議する先生の剣幕に、慧君が「分かった分かった」と宥めていた。
もしかして、安達先生も紫垣のメンバーだったの？

「なんだ東堂…」

先生をジーツと見ていると安達先生が怪訝な顔をして私を見返していた。

「先生って…慧君の後輩ですよね？それって、学校だけじゃないんですか？」

グツと言葉に詰まってしまった先生を見て慧君はニヤニヤと笑っていた。
寛貴と拓弥君は笑いを堪えていて、私と麗香ちゃんだけが何もわからずに先生を見ていた。

「梨桜、いいこと教えてやろうか。安達はオレの2代後の後輩なんだよ」

寛貴に「知ってたの？」と聞いたら笑いながら教えてくれた。

「生徒会顧問をやるっていうことは、チームの幹部と渡り合ってる事だ。普通の教師じゃ務まらないだろ」

まあ、それはそうかも…

先生もヤンチャだったんだ、ちょっと意外。

「それより先輩、校長が待ってますよ」

「狸の事は放っておけ、用があればあっちから来る。人の都合も聞かないで無理矢理押し付けやがって」

まだ言ってる…これ以上ごねると安達先生が困るのに、それを分かってやっているんだから性質が悪い。こういう所は葵よりも子供っぽいかも？

「私は慧君の授業を受けてみたいな」

そう言つと、慧君が私を見た。

「本気か？」

訝しげな眼をしている慧君に大きく頷いて返事をした。

「うん。だって慧君で分りやすく教えてくれるから、授業も楽しそう」

安達先生の視線が『頼んだぞ東堂』と言っているような気がする。

「梨桜も見に来るか？それなら授業をしてもいい」

慧君、学年が違っつていう事を忘れてるでしょ…それに、公私混同はいけません！

「先輩、面談が終わったなら東堂はオレの授業を受けるんですよ」

「おまえの授業なんかいつでも受けられるだろ。おい、狸に言え、特別授業なんだから参加したい生徒も参加させるってな。そうじゃなかったらやらない！」

「慧君、私は1年生だから学年が違っよ」

思い留まって！そう思ったのにニヤリと不敵に笑う慧君と、ガツカリした顔の安達先生が対照的だった。

「教科書の授業なんかやってられるか！梨桜、オレの授業受けるよな？」

笑顔で言われて仕方なく頷き、心の中で安達先生に手を合わせた。授業をやる気にさせようと思ったら、やる気が違う方向に向かってしまいました。

先生、ごめんなさい。

進路相談と好きな人？ (4)

何故か生徒会室で始まった三者面談。

安達先生と慧君はソファに座って寛いでいる。

「進路相談って言ってもな…安達、自分の時何て答えた？」

「…今も昔も、この学校で生徒会に入ってる奴等の進路相談なんて
適当でしょ」

緊張感ゼロの三者面談なんですけど…

わざわざ慧君を呼ぶ意味は無いんじゃないの？

「先輩は何て答えたんですか」

「オレ？親の都合が悪くて姉貴が来たんだよな…」

ママが？

「何で喧嘩になったかは覚えてないけど、途中ですげー言い合いに
なって売り言葉に買い言葉で『だったら、1番の大学に首席で入っ
てやる！』って啖呵きつちまったんだよ…狸も吃驚してたぞ」

ハハハ！と笑って話しているけど、兄弟喧嘩で進路を決めた慧君で
本当はおバカさんなんじゃないだろうか…

先生も複雑な顔をしているからきっと同じことを考えていると思う。

「首席で入るって言っちゃったから、得意教科で勝負するしかない
だろ？だから理系を選択して、首席になれそうな学部を選んだ」

先生が買ってくれたペットボトルの温かい紅茶を一口飲んで気付かれないようにため息をついた。
…やっぱりおバカさんだ。

「葵の三者面談にも行って来たんでしょ？どんな話をしたの？」

少し考えていたけど、私を見てニッコリ笑って一言。

「『半端は許さねえぞ』以上」

え？

「それだけ？」

先生がお茶を吹きだしそうになってる。

「それだけ。終わるの早かったぞ」

慧君の三者面談で喧嘩をしたママも凄いけど、ママの息子の三者面談でそれだけしか言わない慧君て…
ママと慧君てどっちもどっちだね。

「葵は何か言ってた？」

「別に…無言だったな。生意気に溜め息ついてたぞ」

葵の気持ちがよく分かる。私もそんなこと言われたら溜め息が出るよ。

担任の先生も吃驚しただろうな、お気の毒。

「今の成績で行く大学なんて限られてるだろ。慢心して、レベルを下げた受験をしたらオレは怒るぞ」

そう思ってるなら言っておけばいいのに…

「梨桜も葵と同じ大学に行けるだろ」

「そうですね、A判定が出ると思いますよ」

葵と同じ大学…

先生は「先輩と同じ大学だぞ」と笑っていた。

昔、ママが『ウチは双子だから全部2倍かかるのね』って笑っていた事を思い出した。国公立の大学に進学したら少しは親孝行できるかな…

・

・

参加自由の特別授業は学校で一番大きな講義室で行われることになったけど、人が一杯で入りきれないくらい盛況だった。

「三者面談はどうだった？」

1年から3年まで受講希望の生徒が奔めいている講義室で、寛貴は現トップらしく窓際の一番いい席に座っていた。

「んー…結局良く分からないまま終わっちゃった」

寛貴の隣に座りながら言うと、「初代と安達だもんな」と少し呆れたように笑っていた。

志望大学を決めるのは後でいいから、理系か文系かどちらを勉強したいか考えるように言われて終わってしまった。

話が終わると、先生と慧君は昔の話で盛り上がってしまい、私は時間が来るまで慧君の隣で編み物をしていた。

「文系か理系か…寛貴は？」

「文系」

そっか、文系か。葵は理系だったような気がする。

皆、将来の事を考えて行動に移して行くのに、私は自分の身体の仕事で精一杯だった。

でも、これからの事を考えなければいけないんだね…

「…」

考え込んでいたら、手を握られた。

「自分に素直になればいい」

寛貴を見ると教卓を見ていて、いつの間にかぎゅっと握りしめていた私の指を開かせ、指を絡めて手を繋いだ。

「ありがとう」

私の将来。

私がやりたい事。

私に出来る事。

自分の気持ちと向き合う事から始めよう…

.

触れる唇（1）

「買い忘れはないかな」

葵が持つてくれている紙袋をチェックした。

「無い」

修学旅行に持つて行く物のお買物。

面倒臭いと言ってなかなか用意しようとしないうちに葵に痺れを切らした私は『一人で買い物に行く』と脅して葵を連れて来た。

「あ、胃薬と風邪薬：頭痛薬も」

「おまえと一緒にするなよ、いらない」

「でも！」

あつた方がいいよ！葵は油っこい料理は苦手でしょ？

「…保健医も同行するからいらない」

頬を両手でむにむにと摘まみながら呆れ顔の葵。

「荷物が多いのは嫌いなんだよ。知ってるだろ？」

知ってるけど、用意したほうがいいよ。使い慣れている薬だと安心するし…

「あつちには親父もいるから大丈夫だ。頼むから荷物を増やすな」
本気で嫌そうな葵に仕方なく頷いた。少ない荷物で不安にならないのか不思議だけど、葵に言わせると、使うか使わないか分からないものを持って行く事が不思議だと言う。

「買い物は終わったの？」

愁君に聞かれて頷くと、彼は私の手から荷物を受け取った。

「ありがとう、愁君はいつも優しいね」

お礼を言うと向けられる王子様の笑顔。

愁君に微笑まれてキュンとしない女の子はいないと思う。

「女の子に荷物を持たせるわけにいかないだろ？」

愁君にチラリと視線を投げられた葵は、ゾクリとするような冷たい視線を投げ返している。

「オレの手が塞がってんのが見えねえのかよ」

「ムキになるなよ」

「ったく…オレがいつ梨桜に重いもの持たせたんだよ」

愁君と葵の痴話喧嘩って…

「梨桜ちゃん、どうかした？」

「二人って、熟年夫婦みたい」

「梨桜ちゃん…それ、凄く嫌だな」

本気で嫌そうなお君は笑顔が引き攣っていた。

「梨桜さん、それってどっちがおさんですか？」

ゴジ君に聞かれて即答してしまった。

「お君がおさんに決まってるじゃない、こんな偉そうなおさん嫌だ」
深く頷いて納得しているゴジ君に運転席で笑いを堪えている桜庭さん。

二人は王子様なおさんと、偉そうなお旦那にギロリと睨まれて慌てて表情を引き締めていた。

「梨桜、そんなに苛められたいのか？」

完全に座っている葵の目を見て慌てて首を横に振ったけれど、手遅れだったらしく車の中で散々な目に遭わされた。

「今日の面談どうだった？」

いつものメンバーでご飯を食べていると、葵が聞いて来た。

「面談…っていつか、先生と慧君の昔話で盛り上がって終わったよ。葵はパパに進路の事相談した？」

レタス炒飯を頬張りながら頷いている葵。

その後の答えを待つてジーツと見ていると、お茶を飲んで私の取り皿に自分が頼んだレバニラを乗せた。

「手抜きは駄目だってさ…」

「それで葵はどうするの？」

…この食感がどうしても苦手なの。

苦手なソレをさり気なく葵の方に寄せながら聞くと「誤魔化すな」とお皿を戻されてしまった。

「今の成績で進学するなら行くべきところは1つだよな。後は学部を選ぶだけ」

愁君が代弁して、葵は他人事のように「…そういうことになりそうだな」と呟いていた。

「梨桜はどうすんだよ」

「うーん…」

悩み中。

自分にとつての『将来』が漠然としすぎていて、安易に決めてしまつていいものなのか…

でも、文系が自分に合っているような気がする。

「文系にしとけよ、理系ならオレが教えるから」

「そついうもの？」

「そつしておけばどっちも潰しがきくぞ」

合理的というか…葵の言葉に頷いた。

「私と葵が一卵性の双子だったら、試験の時に入れ替わって受験できるのよね」

「それ、中学の時に考えた。ダルくて学校に行きたくないときに梨桜が行ければいいのにな」

考えることはやっぱり同じだね。葵と笑っているとコジ君が「それ、犯罪です」と葵に真顔で訴えていた。

「愁君は？」

「オレは医学部…兄貴が手伝えって煩い」

眉を顰めて言う愁君がなんだか微笑ましかった。お父さんとお兄ちゃんの仕事を手伝うって何だか素敵。

愁君を見てニコニコしていたのに、突然目の前にレンゲが現れた。レンゲの上には苦手なレバナラ…

「誤魔化しないで早く食べる」

「…」

「そんな目で見ても駄目だ。好き嫌いしないで食べる」

甘いものが大嫌いな葵に言われたくない！

…とは、口が裂けても言えないから心の中で叫んだら、何を考えているのかお見通しだったらしく

「家に帰ったら覚えてるよ」

そう言つと不敵に笑つた。

触れる唇 (2) side:悠

「今年の学校祭は共学になって初めてだ。男達が暴走しないように抑えないといけないな」

珍しく拓弥さんがまともな発言をしている傍らで梨桜ちゃんは編み物に夢中。

ここ数日『進まなくい!』と半泣きでひたすら編み続けている。遅れている原因は女子生徒に聞かれて教えているから。

家庭科の課題は『浴衣か編み物』どちらかを選択するって聞いていたけど殆どの女子生徒が編み物を選んだらしい。

今日の昼休みも女子生徒達が生徒会室に押しかけてきて寛貴さんがキレそうになっていた。

梨桜ちゃんの昼寝を邪魔されなくなかったんだらうけど、彼女の事になるとマジで大人気なくなる。

「悠のクラスは何やるんだ？」

拓弥さんに聞かれたから「女装カフェとステージでダンス」無難に答えておいた。

オレが学校を休んだ時に勝手に決定されていた学祭での出し物。正確には『女装カフェと、アイドルにコスプレしてダンスをコピーする』ことになっている。

『オレは絶対に女装なんかしねー!!』そう叫んだのに、あっさりと梨桜ちゃんから『悠君はセンターだよ!』と宣告され、おまけに『メイクは私がやってあげるね』とご機嫌で言われてしまった。

絶対にこの人達にはギリギリまで知られたくない！
朱雀NO.3のオレが何が悲しくてアイドルの格好で歌って踊らな
きゃならねーんだよ！！

「女装カフェ？」

拓弥さんが眉を顰めながら、各クラスから報告されているリストを
捲っていた。

「女装つて、どんなんだよ？」

「メイドカフェだよ」

上の空なはずの梨桜ちゃんがちゃっかり答えていて、拓弥さんは吹
き出して笑っていた。
だから絶対に教えたくなくなかったんだよ！！

「まさか、梨桜ちゃんもメイドの恰好するの？」

梨桜ちゃんのメイド…スツゲー見たいけど、それをしたら沈められ
るのは分かっているからクラス中で回避した。

「しないよ、私と麗香ちゃんは裏方」

表向きはね…

でも、梨桜ちゃんと笠原は一緒にアイドルのコスプレをしてステ
ジに立つんだよな。

『海堂さん東堂さんのダブルセンター！』

実行委員はバカな事を言っていたけど、内容によっては寛貴さんに

メツチャクチャ怒られると思う。

「ステージ内容が未定ってなってるけど？」

「検討中。決まったら報告するって言ってた」

本当は決定しているけど、大ウソをついておく。

『完全コピーを目指す！』とか言っていたけれど、オレ的には計画倒れで終わって欲しい。

「目の奥が痛い…」

梨桜ちゃんが両手で顔を覆った。

根の詰め過ぎだと思う。課題は提出し終わったんだから、少しペー
スを緩めてもいいと思うのに『冬が来る前に仕上げたい』って言っ
て初代のセーターを編んでいた。

「少し休め」

寛貴さんがソファの肘掛けに凭れるように座っていた梨桜ちゃんの
肩を引くとそのままソファに寝かせた。

寛貴さんが膝枕！？

オレの隣で拓弥さんも絶句している。

自分の彼女だし、梨桜ちゃんはここまでしないと編み物の手を休め
ないのは分かるけど、オレ的には今更いいんだけど…

寛貴さんは自分の手で梨桜ちゃんの目を覆っていた。

その行為は彼女の目を休ませる為。それは分かるけど…朱雀の総長がこれでいいのか!?

「おまえ…甘すぎ…」

拓弥さんが小さな声で呟くと溜息をついていた。

同感。

…チームの奴らには見せられない。

触れる唇 (3)

瞼の上に置かれていている寛貴の手が温かくて気持ちいい。殆ど毎日のように睡眠時間を削って編み物をしていたら、流石に目と指が痛くなってきた。

「それって初代のだろ？」

「うん」

慧君のセーターを編み終えたら、葵と寛貴のセーターを同時進行で作ってたかった。

早く取りかからないと冬になっちゃう！

自分で指をマッサージしていると向かい側から声が聞こえた。

「自分のは編まないの？」

「気が向いた時に編むけど…今年は無理かな」

葵のリクエストが大物だから、4人分で精一杯だと思う。

「東青は明日から修学旅行だよな」

悠君の言葉に、寛貴の手を取って起き上がった。

「うん」

明日から愁君のお家に1週間お世話になる。

「明日から1週間、朱雀にも青龍にも行かないんだよな…暇になるな。…つまんねえな」

「私は忙しくなりそう…」

「何で？」

悠君の問いに、この前挨拶に行った時のおばさんの笑顔を思い出した。

「愁君のお母さんとお買い物に行つて、一緒に夕ご飯を作る約束をしたの…あ、ピアノのリサイタルにも一緒に行く約束があった」

「忙しそうだな」

拓弥君が苦笑いを浮かべていた。

「おばさんは娘が欲しかったんだけど息子しか生まれなかったから、涼先生か愁君の彼女と一緒に買い物に行ったりするのが夢だったんだって」

「5代目には婚約者がいるんだから、その人と行けばいいだろ」

何故か寛貴が眉根を寄せていた。

一人で出かける訳じゃないから怒らなくてもいいと思うんだけど…

「彩葉先生は忙しいし、お料理とかしないとと思うから…それは、無理かもしれない」

おばさんはフワフワと幾つになっても可愛らしい人だけど、涼先生の婚約者の彩菜先生はどちらかというと男勝りというか…正反對な性格で一緒にお料理とかお買物はしないと思う。

「彩菜先生って梨桜ちゃん知ってるの？」

「涼先生の病院で小児科のお医者さんをしてるんだよ」

それに、彩菜先生はとっても忙しい。愁君から小児科医は大変だって聞いた。

おばさんもそれを分かっているから私を誘ったんだと思う。

涼先生に『付き合わせてごめんな』って言われたけど、私も実は楽しみにしていたりする。

続きを編もうと、編み棒を持つと寛貴に取り上げられた。

「今日はもう止める」

返して！と寛貴に手を伸ばしたけれど「ダメだ」と言って返しても
らえなかった。

もう少しだけ編みたかったのに…

取り上げられた編み棒と毛糸を見ると、悠君の携帯が鳴っていた。

「情報担当から…」

画面を見ながら眉を顰め、電話に出ていた。
情報担当？

「…なんだよ？…はあ？いや、梨桜ちゃんならココに居る。
へえ、笠原もいるんだ」

その名前に、ピクリと反応してしまった。
麗香ちゃん、まずいよ…

「梨桜ちゃん？」

拓弥君に呼ばれて、笑って誤魔化した。

『絶対に男子には言わないでね！』念を押されたから誰にも言っていないけど、見つかったみたいだよ？

悠君は、私に視線を合わせたまま興味が無さそうに会話を続けた。
た。

実は…今日、学校の女の子達は他校の男のと合コンをしている。

“紫苑の女子”は貴重な存在で誘いが多いらしく、きっと今も楽しく女子高生を満喫中…それを朱雀の情報担当に見つかったんだね…

「…どう見ても、ただの合コンなんだろう？梨桜ちゃんはここにいるから放っておいていい。……ああ、分かった」

隣からの視線が痛い。

勇気を出して寛貴を見ると、とつても何か言いたそうな顔をしてた。

「梨桜ちゃん、合コンの事知ってたんだね」

「今回は偶然知っただけだよ」

普段なら私には声がかからないから合コン情報は耳に入っていないけれど、今日は麗香ちゃんも誘われて行っているから知っただけ。

「誘われてねえだろうな」

凄みのある声で聞かれて、コクコクと頷いた。寛貴、目が据わっていて怖い…

「誘われるわけがないよ！」

「寛貴、程々にしろよ？」

拓弥君はそう言うと、悠君を連れて生徒会室を出て行ってしまった。待って、寛貴も連れて行って！！

二人だけになると私を自分の正面に向けて座らせ、まだ少し怒っている眼で真っ直ぐに私を見つめた。

「前に言った事、忘れてないよな？」

彼女を脅してどうするの！？

「梨桜？覚えてるよな」

頷いて寛貴に手を伸ばすと腕を掴んで引き寄せられて抱き締められた。

「合コンは嫌いだし、行くわけない」

温かい。

頬をすりすりして、大好きな腕の中を満喫していると、顎に指をかけて上を向かされた。

「…予定の無い日にどこかに行くか？」

「二人で？」

それって、寛貴とデート？

「誰か一緒の方がいいか？」

目を細めて聞いた寛貴に慌てて首を横に振った。

そんな事無い！二人がいい！！

「嬉しい！」

二人だけなんて、麗香ちゃんの誕生日プレゼントの買い物に行った
時以来だよ？

寛貴の首に腕を回して抱きつくとギュッと抱き締めてくれた。

触れる唇 (4)

三浦家にお泊りして2日目、今日はおばさんと一緒に夕飯を作っていた。

今夜のメニューはおじさんの好きな和食。私の担当はぶり大根とほうれん草の胡麻和え…

胡麻をすり鉢で擦っていると、ダイニングの扉が閉まる音がした。

お鍋の味を見ていたおばさんが顔を上げて意外そうな顔をしていた。

「ヤダ、来たの？」

「自分の家だろ…」

「普段は寄り付かないクセに可愛い女子高生がいる時ばかり来るのね」

プウツと頬を膨らますおばさんに涼先生は苦笑いを浮かべていた。

「お袋、いい年して…」

「何よ、薄情息子」

元総長と現役副総長。この二人が敵わないのがこのお母さん。

とっても可愛いけど逆らえない何かがありそう…見てみたいような怖いような…

「梨桜ちゃん久しぶり!」

「彩菜先生！お久しぶりです」

涼先生の後ろから顔を出したのは婚約者の彩菜先生。
白衣を着たままで、まだお仕事中心なのが分かった。

「梨桜ちゃん、彩になんか作ってやってくれないか？今日夜勤なんだ」

「あら、彩ちゃん夜勤なの？一緒に食べて行きなさい」

「ありがとうございます！」

楽しい時間。

家族でご飯を食べるってやっぱりいいね。

葵はパパに会ってるかな…
ゆっくり二人で話す時間が無かったから親子水入らずを楽しんでくるといいな。

冬休みになったら、葵と二人でパパの所に押しかけて三人で過ごそうね。

「梨桜ちゃん？どうした」

涼先生が私の顔をジッと見ていた。

「え？どうもしないですよ」

「ボーっとしてるよ。葵が居ないと寂しい？」

その言葉に素直に頷いた。

「寂しいけど、葵とパパが二人で過ごす時間が出来たのはいいことだと思うから大丈夫です」

涼先生が「偉いな」と褒めてくれて、少し恥ずかしかっただけど嬉しかった。私の隣で「うふふ」という笑い声が聞こえて、おばさんを見ると、凄く楽しそうに私を見て笑っていた。

「お袋、気持ち悪い」

「ふふっ、葵君がなくなって寂しいけど、梨桜ちゃんには素敵な彼氏がいるじゃない？明日は…」

おばさんの口から出てくる次の言葉を遮った。

突然何を言い出すんですか！！お茶目も大概にしてくれないと心臓に悪いですっ！

「明日？」

眉を顰める涼先生の隣で、彩葉先生が何かを感付いたのかニッコリ笑って私を見ていた。

「明日なんかあるのか」

「課外研修で水族館に行くだけです！」

本当は、課外研修の後に寛貴と出かけるの…恥ずかしいから先生に

は内緒。

「お夕飯は彼と食べて来るんでしょう？」

何で言っちゃうんですか！？」

「内緒って言ったのにおばさんに酷い！」

訴えると涼先生は私を見て口角を上げて笑んだ。

「へえ、藤島とデートか…門限決めちゃおうかな」

次の瞬間“バシッ”と痛そうな音がした。

「ってーな！彩っ！！」

彩菜先生が涼先生の二の腕を思いつきり叩いていた。

「無粋な事するんじゃないわよ、馬に蹴られて死ぬわよ」

元総長相手に彩菜先生、強い…

おばさんは見慣れているようで、二人を見て微笑んでいるだけだった。

「ったくおまえは…加減しろよ」

「梨桜ちゃん、この男に意地悪されたら私に言いなさいね？」

ニツコリ笑う彩菜先生と拗ねてそっぽを向いている涼先生。意外な顔を見ちゃった…明日寛貴に教えてあげよう。

.

触れる唇 (5) side:悠

「…」

周囲を睨み付けければ、目を泳がせながら目を反らす男達。
ここで熟睡できるのが信じられない。

「…たく…」

後ろから半ば諦めたような呟きが聞こえた。

オレも寛貴さんも、何回ガン飛ばしたか分からねえ…上級生相手に
良くやる、と我ながら思うけれど、オレが座っている後ろの席では、
眠り姫が寛貴さんの肩に凭れて、無防備な顔で眠りこけているから
仕方がない。

「幸せそうな顔しちゃって…酔い止めの薬を飲ませたのは間違いだ
つたな」

オレの隣で後ろを覗き込んでいる拓弥さん。オレも後ろを見ると、
やっぱり眠り姫は眠っている。

「見んな」

ひでー！バスの中なんだから仕方ないのに…

「別にいいだろ、減るもんじゃない」

「…ん」

バスが揺れて薄く目を開けた。
トロン、と眠そうな目で自分が凭れていた隣を見上げてフワリ笑っていた。

「……寛貴だ」

寝ぼけてんのか？

「おはよ」

凶器の笑顔で微笑んで、ドリンクホルダーに入っていたペットボトルを指差していた。

「これ、飲んでいい？」

空調が効いて乾燥したバスで寝ていたから声が掠れている。

寛貴さんが飲んでいたミネラルウォーターのペットボトルの蓋を外して手渡してやると、喉をコクリと鳴らしながら飲んでいた。

「ありがとう」

腕を前に伸ばして小さく伸びをして辺りを見回していた

「梨桜ちゃん、起きたか」

拓弥さんに手を振って「おはよ」と笑っている。寝起きはいつにもましてマイペースだな…

「食べる？」

「うーん…今はいい。拓弥君、ありがとう」

差し出されたお菓子をみて首を横に振りながら言つと、その声はま
だ少し掠れていた

「熟睡しちゃった」

「呆れるくらい寝てたな」

「酔い止め飲むと寝ちゃうんだよ」

いや、飲まなくてもいつも寝てるよな…

「うわぁ…初めて来た」

水族館の大きな水槽に目を見開いて感心している。

「梨桜ちゃん、ペンギン見ない？」

笠原に誘われて水槽の前でペンギンを眺めている。

「可愛いー！」

「梨桜ちゃん、先に行っちゃうよ？」

笠原と小橋から声をかけられてもペンギンの前から動かない梨桜ちゃん。

「笠原、先に行ってもいいぞ。この分だとまだ動かないだろ」

寛貴さんに言われて笠原と小橋はペコリと頭を下げた。

「じゃあ、藤島先輩、お願いします」

「ペンギンすげーな。梨桜ちゃんの心を鷲掴みだな」

拓弥さんが笑っている。

幼稚園児に交じってペンギンの前から動かない…飛べない鳥のどこがそんなに可愛いワケ？

「おい…」

拓弥さんが低い声で寛貴さん呼んだ。拓弥さんが顎で示す方を見ると、修学旅行らしい高校生が入口から入って来ていた。

小さく舌打ちした寛貴さんは梨桜ちゃんに歩み寄り何かを言っていた。

名残惜しそうにペンギンの前から離れる梨桜ちゃん。

拓弥さんは二人を見届けると修学旅行生の群れを凝視していた。もしかしてこの高校生が…あの、札幌の？

「あー！拓弥君！」

猫撫で声が聞こえてきて気色悪い。

そう思い振り返ると制服を着た女が手を振りながら駆け寄って来た。

「拓弥君、カッコイイからすぐ分かったよ」

「そお？由利ちゃん、今日も可愛いね」

ブツと吹き出しそうになった。目の前に居るこの男は誰だ！？
久しぶりに見たけど…相変わらずタラシ全開！流石だな

「やだあ、拓弥君！冗談ばかり！」

オレこういう女、無理！

「冗談じゃないよ。制服の集団の中でもすぐに分かった」

そう言うと、女は頬に手を当てて腰をくねらせている。

マジで無理なんだけど…

拓弥さんですげーな、と変なところに感心していると拓弥さんと同じクラスの男達が近づいて来た。

「拓弥さん」

「何だ？」

声をかけられたことにホッとしているのが見て取れておかしかった。
拓弥さん、もしかして無理してる？

「姫を見ませんでした？」

コイツは梨桜ちゃんが嫌がっても『姫』と呼ぶ。親しみを込めて呼んでるらしいけど、『逆効果だぞ』そう教えてやった方がいいのかな…

「梨桜ちゃんなら寛貴と一緒にだ。何か用か？」

女が眉根を寄せて険しい顔をしている。

一瞬で変わった顔に、どういう作りをしているんだろうと不思議になってマジマジと見ていたら、キツと睨まれて慌てて目を逸らしてしまった。

女って、怖い…

「ねえ、姫って誰？」

「姫は梨桜ちゃんの事だよ。コイツら嫌がっても彼女の事をそう呼ぶんだ」

ニツコリと笑った拓弥さんに、女は表情を元に戻したけれど不服そうにこつちを見ている。

寛貴さんの命令で梨桜ちゃんからこの女を遠ざけてんのに意識を向けさせてどうすんだよ…

コイツら、後でシメテやる。そう思って女と拓弥さんのやり取りを見守った。

「拓弥君、梨桜は私の事何か言ってた？」

上目遣いに見上げる仕草にゾクツとした。これは間違いなく嫌悪の方の震えだ。

「んー…ごめん、オレが由利ちゃんと一緒に居たかったから梨桜ち

やんには伝えてない」

突然、満面の笑みになる女…

やっぱりオレももうダメ、耐えられない。

拓弥さんにこの場を任せてサボろうと体の向きを変えたら、いきなり首根っこを掴まれた。

「なにすんだよ！」

苦しいだろ！離せ！！

拓弥さんを見ると、完全に据わった眼をオレに向けて薄く笑った。

「いい度胸じゃねえか。オレを置いて行くなんて…」

ギロリと睨まれて思わず引き攣ってしまった。

結構無理してたんだ。流石！なんて思っでごめん…

触れる唇（6）

ペンギンみたいに水の中でビュンビュン泳げたら気持ちいいだろうな…

彼等の見事な泳ぎっぷりに見惚れていると、腕を引かれた。

「梨桜、また後から来ればいいだろ。行くぞ」

「うん」

寛貴に手を引かれてペンギンの水槽を後にした。後でまた来るからね！

「ペンギンみたいに泳ぎたいな」

「…無理だろ」

笑いながら言われてしまった。無理だけど、憧れるっていう意味だよ。

「一口で食べられちゃいそう」

鮫を指差すと、私の頭の上で「でかいな」と呟いていた。寛貴でも負けちゃうね。

「あ、エイだ。大きいね…」

水槽の上へと泳いでいくエイを見上げていたら、頭がコツンと寛貴の胸に当たった。

「口開けてると間抜けだぞ」

ムツと睨むと余裕の笑みを返されたから、寛貴に体重をかけて寄りかかった。

「間抜けじゃないよ」

「間抜けだろ…次に行くぞ」

歩いている人にぶつかりそうになり、寛貴に手を引かれた。

「余所見をして歩くな」

「ねえ、タカちゃんと同じ制服が増えてきたね」

叱られたばかりだったけれど、また余所見をして立ち止まった。これはタカちゃんの通う学校の制服。

「そつだな…」

眉根を寄せて制服姿の高校生を見ている寛貴の顔を覗き込んだ。もしかして、尚人君との事を心配してくれてる？そつだとしたら…素直に嬉しい。

でも同じことは繰り返さないように頑張るよ。

「寛貴、休憩しよ？」

近くにある可愛いカフェを指差すとフツと笑って私の手を取った。

「入りたいのか？」

「うん…でも、もし嫌ならベンチに座ってお茶でもいいよ」

「何で嫌なんだよ」

「寛貴が女の子達から注目されて嫌な思いをするかなって思ったの」

葵は注目されて『うぜえ』って怒ってる事が多いから寛貴もそう思うかな…

「入りたいんだろ？」

「いいの？」

「寛貴は食べないの？」

連れてきてくれたカフェで寛貴はコーヒーだけを注文した。

「今はいい。食べるよ」

「いただきます！」

熱々のアップルパイと冷たいバナアイスクリーム！この組み合わせを思いついた人って偉いと思う！！

「美味しい」

「良かったな」

「ごめんね、居心地悪いでしょ」

お店にいる女の子に注目されていて、寛貴を見た後に私を見て溜め息をつかれてしまう。それは、どういう意味の溜め息なのか…複雑。

「気にするな。おまえさ…主食もそれくらい進んで食べよ」

「これでも食べられるようになったんだよ」

デザートスプーンにパイとアイスを乗せて寛貴の前に差し出すと、ぱくりと食べた。

「甘いな…」

少し眉を顰めて言う寛貴に「でも、美味しいでしょ？」と確認するとコーヒーを飲みながら視線を向けられた。

「梨桜はこういうの好きだよな」

「うん、大好き」

「だからケーキに騙されて合コンに連れて行かれるんだな」

何を言い出すのかと思えば…過去の事を言われても、今は行かないって言っているんだから許してくれたらいいのに…。

「もう、その話はいいよ…薬にもすっごく言われたんだから」

「…シスコン」

クツ、と笑ってコーヒーを飲んでいる。

何だかこれって、デートみたい…楽しい…

触れる唇 (7)

「ウミガメとペンギンに会える海ってどこだろう」

パンフレットに書いてある生態系を読みながら、世界地図を頭の中に描いてみた。

「ホテルの部屋からウミガメが見えた。あれは…」

少し考えている寛貴に「何処!？」と聞くと「…ハワイだったよくな気がする」と首を傾げながら答えた。

ハワイでオーシャンビュー…羨ましい。私も行きたい!

「一緒に泳いだ?」

「オレが泳ぐと思うか?」

…思わない。

バルコニーで煙草を吸いながら無表情でウミガメを見下ろしてそう…

「ウミガメと泳ぎたい。とか言い出すわけじゃないよな」

怪訝な顔をしている寛貴。そんなの決まってるでしょ。

「泳ぎたいよ」

「ぶっ…」

吹き出したのは目の前にいる寛貴ではない。誰？と寛貴と笑い声がする方を見ると「わりい、聞こえた」そう言いながら笑っているタカちゃんがいた。

「タカちゃん！」

待ち合わせの時間までは早いのに、席の横に立っていて私を見て笑っていた。

「早かったな」

寛貴に手招きをされて席を移ると、タカちゃんは私が座っていた場所に腰を下ろした。

「通りから見えたから…それにしても東堂、相変わらずだな。おまえウミガメと泳ぎたいのかよ」

「さつきはペンギンみたいに泳ぎたいって言ってたぞ」

「東堂、それは無理だと思っぞ」

「気持ち良さそうだなって思ったの…ペンギンは本気じゃないよ」

真顔で正されて、言葉足らずだったさつきの発言を訂正するとタカちゃんは笑っていた。

やっぱり、いいなあ。タカちゃんって楽しい。

「梨桜、矢野に渡すモノは持ってきたのか」

寛貴に言われて持ってきたプレゼントをテーブルの上に置いた。

「タカちゃん、これ円香ちゃんに渡してね。誕生日プレゼント」

「おう。アイツ喜ぶよ」

小さな紙袋を彼に渡すと、大事そうに自分の脇にそれを置いた。喜んでくれるといいな。

「いつまでこっちにいるんだ？」

寛貴に聞かれて、コーヒーを飲みながら視線を店の入り口に向けている。誰かいるの？そう思ってタカちゃんが見ている方に目を向けると、同じ制服を着た生徒達がグループで入って来ていた。

「明後日」

明後日には札幌に帰っちゃうんだね…そうしたらまたしばらく会えないね。

「たかちゃん、ご飯食べようよ」

視線を戻してタカちゃんに言うと、腕を組んで考えていた。

「集団行動だから難しいな」

「じゃあ、自由時間は？」

「明日の昼。東堂は授業中だろ？」

授業中だけど、お昼休みにタクシーで行けば時間を作れないことは

無い。
寛貴に「行ってもいい？」と聞くとタカちゃんが「コラ」と私を叱った。

「無茶言って困らせるなよ？」

寛貴はタカちゃんをチラリと見ると、彼と比べるように私を見た。

「髪の毛…」

頬にかかっていた髪の毛を払おうと思ったら、寛貴が指で掬い耳にかけた。

「昼の一時間位しか時間がとれないぞ」

「寛貴、ありがとう！」

タカちゃんは私を見て溜め息をついた。呆れられても嬉しいものは嬉しい！

呆れた顔で私を見ているタカちゃんは寛貴に向かって「すげーな、おまえ」と言い出した。

「…まともに東堂の相手ができるのって感心するよ」

それって、どういう意味？結構失礼な発言なんですけど…

ムツとタカちゃんを見ると、寛貴が笑いを堪えていた。ちよつと、寛貴も失礼じゃない？

「昼飯を奢ってやる。何がいい考えておけ」

「マジで!?!」

寛貴に言われて笑顔になるゲンキなたかちゃん。
単純だよ、円香ちゃんに言いつけるからね。

触れる唇 (8)

友達が迎えに来たタカちゃんとは別れて、私達は展示室に戻って魚を眺めた。

「可愛いね……」

……ん？無言???

アニメの主人公と同じ魚を見て呟いても返事が返ってこない。隣を見ると、一緒にいた筈の寛貴がいなかった。

「あれ？」

順番に見てきたからはぐれる訳がないと思いながら辺りを見回したけれど、見当たらない。
どこに行っちゃったの!?

水槽から離れて探したけど、寛貴の姿は見当たらなかった。
寛貴……どこ？

トイレかも！

そう思って歩いていたら……何故か建物から出てしまった。

「通路を間違えた……あ、携帯！」

焦って携帯という存在を忘れていた自分を叱りながら寛貴の番号にかけると、呼び出し音が鳴ってホッとした。

早く出て！

『動くなつた言つたよな』

接続音と同時に聞こえてきた不機嫌な声。
動くな、なんて聞いてないよ？

「だって、隣に「梨桜？」」

重なつた声に驚いて振り返ると…

「尚人君…」

私の肩を掴んでいたのは、尚人君だった。
そうだ、タカちゃんと会えた事が楽しかったからすっかり忘れていた。同じ学校なんだから彼と会う可能性があつたんだ。きっと寛貴はその事を心配していた筈なのに…

「どうしているんだ？」

「課外研修なの。尚人君は修学旅行だったよね」

目を細めて私を見るのは、嫌悪？それとも…

「梨桜…会いたかった」

同じ事は繰り返さない。そう決めたんだ。
顔を上げて尚人君の目を見た。

「尚人君、葵が殴つてごめんなさい。それだけが気になつてたの」

「何で梨桜が謝るんだよ」

不満そうに言う彼に、だって弟がしたことだから。と言おうとしたら「姫！」と遮られた。

振り向くと…やっぱり寛貴と同じクラスの二人組。

「姫、寛貴さんが探してた」

そうだ、寛貴！電話の最中だった！

慌てて携帯を耳に当てると、“ツー、ツー、”と空しい音が繰り返されていた。

切れてる…怒って切ったのかもしれない。慌ててかけ直しても繋がらなかった。

「寛貴さんですか？竹本です。姫いましたよ…わかりました。つかまえておきます」

ガツカリしている私の横で傍にいて欲しい人の名前を呼んでいた。どうせ電話に出るなら私の電話に出て欲しかった…

電話を切ると私を見てニヤリと笑う竹本君（？）そっとういう名前だったんだ。今まで知らなかった…

「姫、はぐれちゃダメだろ。寛貴さんが怒ってたぞ」

「気がついたら寛貴がいなかったの。それより、姫は嫌って何回も言ってるのに！私は東堂梨桜！」

竹本君に言うと笑っている。私は面白くない！

「ムキになるから可愛いんだよ、姫」

可愛くないから、姫って呼ぶの止めて！！きちんと抗議をしようと思ひ、彼等に向き直ると「梨桜？」と呼ばれた。
あ、尚人君がいるの忘れてた…

「ごめんね」

「梨桜が姫ってどういうことだよ？」

「そんなの決まってる。オレ達のチームのお姫様だから。宮野と初代のお姫様でもあるしな。な？姫、いい加減慣れて」

慣れるかつ！

「チームって…梨桜、お前そんな奴じゃないだろ」

「それ、どういう意味？」

尚人君の言った『そんな奴じゃない』それが心に引っ掛かった。私をどんな人間だと思っっているの？

「どうせオレを殴ったアイツも不良なんだろ」

その言葉にカツとなったけれど、握った拳に爪を立てて言い返したくなるのを押さえた。

「そつだね…」

この反応が普通なのかもしれない。
彼等は世間一般的には不良で敬遠される存在。

やっている事は良くない事もあるけど、みんないい人だよ。尚人君に蔑みの対象で見られるような人達じゃない！

「そんな奴等との付き合いは止めるよ！」

「てめえ……」

尚人君に詰め寄る竹本君の腕を引いた。

私も皆を悪く言われた事が凄く悔しいけど、ここでは我慢してほしい。

「そんな奴って言わないで。皆、いい人なの。仲間を大切にしている、私にも良くしてくれる」

彼等は真っ直ぐで嘘はつかないよ。裏切ったりもしない。

「梨桜には似合わない。あの男達とは関わらない方がいい。それが梨桜の為だ」

どうして尚人君にそこまで言われなきゃいけないの！？

「尚人君に指図されたくない。私は寛貴の傍にいたいと思ってるし、葵との繋がりには絶対に切れないし無くならない。似合うとか似合わないとか関係ない！」

皆の事を悪く言わないで！

「なんで二人なんだよ！おまえ訳わかんねえよ！」

苛立つて声を荒げる尚人君に言い返そうとしたら、凄く聞きたかった声がした。

「それは…お前がバカだからだろ？」

後ろからお腹に回された腕と背中当たる胸が温かかった。

「竹本、悪かったな。助かった」

「いえ」

竹本君達は寛貴が来てホツとした顔をしていて、尚人君は私と、私の後ろにいる寛貴を睨みつけていた。

「あのとき屋上で梨桜が言った事、何にも頭に入っていないんだな。お前が偏見持つてるオレ達の記憶力の方が良いみたいだぞ？」

「信じられるかよ！あんなヤツと梨桜が兄弟なんて！」

「あんな奴じゃない！葵の事を悪く言ったら許さない…！」

私を宥めるように、前に回した腕に力を入れた。

「お前が信じようが信じまいが、コイツらは双子で梨桜はオレの女だ。梨桜の中にお前が入り込む余地は無い。…残念だったな」

尚人君が唇を噛んで悔しそうに寛貴を睨むと、寛貴は私の体の向きを変えさせた。

「動かないで待ってるって言ったよな？」

「…聞こえなかった。寛貴がいなくて探したの」

「…たく…目が離せねえな」

頭に手を置かれると、我慢していた涙が零れた。

「泣かなくてもいい…」

触れる唇（9）

「落ち着いたか？」

「うめ…ん」

「謝らなくてもいい。あの男が言った事は気にするな」

気にする！

寛貴と葵を悪く言われたら嫌だよ。

「泣き止め」

涙を拭われて顔を上げて寛貴を見たら…彼の後ろにあるモノが目に入った。

ミニバーのカウンター…？ここ、何処？

周りをキョロキョロと見回すと…

私と寛貴が座っているのはソファで、その後ろにはベッドが2つ。リースのカーテン越しに見えるのは、間違いなく夜景で有名なあの観覧車。

どうみても自分はホテルの部屋に居るとしか思えない。

ホテルはホテルでも、一泊数万円はするようなホテルの部屋だと思う。

「……………」

尚人君に言われた言葉が悔しくて泣き出した私を人の少ない場所に連れて行ってくれたのは覚えてる。

感情が昂ってしまい、涙が止まらなくなった私を見かねた寛貴がどこかへ電話していたのも分かる。

「ここが何処か分からないのか？」

寛貴の言葉に頷いた。

タクシーに乗せられたけど、ずっと寛貴にしがみついていたから外は見えないし、降りてからも俯いていたから何処を歩いたのか、どんな建物に入ったのかも見ていなかった。

まさか、こんなところに来ていたなんて…

「泊まるの？」

私、外を歩けないような酷い顔になった？

「泊まったら殺される。デイリーユースだから安心しろ。顔、洗って来い」

「うん」

泣きながら手で擦った頬と目の下に涙が沁みてヒリヒリする。

バスルームの扉を開けると落ち着いた雰囲気バスルームだった。大きな鏡に自分の顔を映して恥ずかしくなった。

酷い顔…

泣きはらして真っ赤な目と腫れぼったい瞼。

この顔のまま学校が手配したバスに乗って帰るのは恥ずかしい。ココに連れて来てくれた寛貴に感謝だ。

「落ち着いたな…」

「うん。ありがとう」

テーブルの上に美味しそうなグラタンが乗っていた。グラタンだけじゃなく、美味しそうな匂いをさせているパンとサラダと…美味しそうなお肉のグリルもある。

「寛貴？」

「何が食べたいか分からなかったから適当に頼んだ。…おい、やっ」と止まったんだから、泣くなよ?」

また涙ぐんだ私を見て寛貴は焦ったように言うと、私の手を引いて自分の隣に座らせた。

「もう泣かなくていい。理解して欲しいと思う人に伝わっていればいいんだ。分かるか?」

寛貴に腕を伸ばすと、抱き寄せて背中を撫でてくれた。
大好き…

「冷めるから食べるぞ」

「ごちそう様でした」

寛貴に手伝わしてもらいながらエビグラタンを食べて、美味しい紅茶を飲むとやっとな落ち着いた。

「珍しく良く食べたな」

今日は私服でニットワンピースを着てきたから、満腹で膨らんだお腹が目立つかもしれない…これは、マズイ…

「怒って泣いたから体力を使ってお腹が空いたのかもしれない」

膨らんだお腹をさすっていると、私を見ながら笑っていた。

「…子供と同じだな。食べたなら昼寝だろ？」

どうせ子供だもん。

ムツと膨れながら寛貴を見ると、上着を脱いでクローゼットのハンガーにかけて私を手招きしていた。

傍に行くと、私の足元を見て一言

「ブーツを脱げ」

「なんで？」

「お子様は昼寝するんだろ？」

ベッドが2つあるからいいか…

そう思ってブーツを脱いで素足になり、ワンピースの上に羽織っていたカーディガンをハンガーにかけた。

「おやすみ！」

壁際のベッドに行こうとすると、お腹に腕が回された。

「私、壁際がいいの」

「オレは窓際がいいんだ」

「だったら窓際で寝ればいいでしょ？私は壁際が落ち着くの」

頭の上で大きく舌打ちをされて、ズルズルと引きずられて窓際のベッドに來ると私を抱えてベッドに横になった。

寛貴が熱を出してお見舞いに行った時を思い出した。

「今日も抱き枕？」

「当たり前だ。早く寝ろ」

寝る。って言われてすぐに眠れるわけないでしょ。

そう言い返してやるうと思っただけど、寛貴に包まれているのが心地好かったから、胸に頬を寄せて目を閉じた。

寛貴は温かいね…

触れる唇 (10)

シーツが擦れる音で目が覚めた。

「…」

寛貴を起こさないようにベッドを出て、冷蔵庫からミネラルウォーターを出した。

快適な空調と凄く静かな空間。

窓から見えるこの景色…夜になったら綺麗だろうな。

デイリーユースとはいえ、高校生なのにこんな部屋を手配するなんてやっぱりお坊ちゃまだね。

起こさないように注意をしながらベッドに腰掛け、寛貴の顔を眺めた。

寝顔も整っているなんて狡いぞ。

突然泣き出して、困らせてごめんね…

閉じた瞼にキスをしようとしたら、触れる寸前で寛貴の目が開いた。

「ごめんね、起こしちゃった」

体を起こした寛貴にペットボトルを渡すと一気に飲み干した。

「寛貴もお昼寝したね」

少しだるそうに髪をかき上げて小さく欠伸をしていた。

「梨桜の寝顔につられた…」

「“お昼寝総長”可愛かったよ？」

睨まれたけど、寝起きで睨まれても怖くないもん。寛貴の頬にチュツとキスをする少し驚いたように私を見ていた。

「可愛かったからだよ」

クスクス笑いながら言つと小さく舌打ちをして私の首の後ろに手を掛け、自分に引き寄せてキスをした。

下唇を甘く噛むと促すように舐められた。

薄く唇を開くと中に入り込んできた寛貴に舌に強く吸われて、体の奥が疼いた。

「ん…」

キスから生まれる音がやけに耳に響く。

「…あ…」

吐息が漏れる毎にキスは深くなり、体が熱を帯びてくるのが分かる。

もっと…このままでいたい。

寛貴の首に腕を絡めると、手がワンピースの裾から中に入ってきた。捲れ上がった裾が恥ずかしくて手を退けようとする片腕できつく抱きしめられて身動きがとれなかった。

熱い手が素肌を撫で上げ、心地好さにぼっつとしていると背中
の傷に指が触れた。

「そこは、ダメ」

ダメだって言っているのに優しく撫でる寛貴。

イヤだ、と首を横に振って寛貴の胸に手を当てて突っぱねると、片
手で腕を掴まれた。

「どうしてダメなんだ」

そう聞きながらもまだ背中を撫でられる感触にゾクゾクと震えが走
る。体を擦って逃れようとすると腕を掴んでいた手を解き、擦れな
いように強く抱きしめた。

「そ、こは…傷痕だから…醜い…」

顔を背けると首筋に顔を埋めた。

「醜いかどうか…オレが決める」

首に唇が触れて、舌が首筋を舐めた。

「んっ…やあっ」

「梨桜」

「梨桜が見たい」耳元で囁かれてゾクリと体が震えたけれど、同時
に不安になった。

背中 of 傷痕を醜いと思われたらどうしよう…

「…」

大きな傷は手術で消したけれど、残っている傷痕…

「……ん…ダメ、イヤ」

ダメって言ったのに、寛貴は私の服を脱がせてしまった。

いつの間にか外されていたブラの肩紐が肩から浮いていて、キャミソールの肩紐に引っ掛かって留まっていた。

「……」

目の前にある寛貴の唇が動いて何か言っていたけれど、パニックを起こしそうな私の耳では聞き取ることができなかった。

「怖くない」

肩紐をずらされて、熱い手が素肌の肩と鎖骨を撫でた。

「梨桜、隠すな」

胸元を押さえていた手を取ると、スルリとキャミソールが下に落ち、それに続いてブラも下に落ちた。

恥ずかしい…

下を向くと顔を上に向けられ私を見つめる寛貴と視線を合わせた。

抱き締めて欲しい…

腕を伸ばすといつものように抱き締めてくれた。
背中に回された手は私の背中を撫でていて、少しだけ皮膚が盛り上がっているソコの上で止まった。
掌から心地好い熱が伝わってくる…

「梨桜、後ろを向け」

体の向きを変えて寛貴に背中を向けた。

「…」

何も言わない事に緊張した。

『小さい傷だから目立たないし気にならない』葵はそう言っていたけど、この傷が好きな人の目にはどう映るのか…

ふいに温かくて柔らかいものが触れた。

「…寛貴？」

彼は答えずにチクリとした痛みを傷痕に残して背中から私を抱き締めた。

「…醜くなんかない。綺麗な体だ」

…嫌われなかった。

ホツとしたら、また涙が零れていた。

「泣くな」

唇で涙を拭い、目元にキスを落とした。

触れる唇 (11)

自分にこんな感覚と感情があるなんて思わなかった。

「ん…」

額にキスを落とし、耳元で「怖くない」と囁いて頬にキスを落とす寛貴。

「…ふ…あ」

「逃げるな」

さつきから絶え間なく与えられている強すぎる快感にどうしたらいいかわからなくて、待って、と身動きをしようとするのを抑え込まれてそれ以上の刺激を与えられる。

「やつ…」

恥ずかしい水音が部屋に響いて、寛貴の指が私の中で動くたびに自分の声だと信じられないような嬌声が私の口から洩れいく…

怖い…抱き締めて…

寛貴の首に手をかけると片腕で私をキツく抱き寄せもう片方の手で開かせている足を撫でた。

「梨桜」

吐息交じりの声で呼ばれてギュッと閉じていた眼を開くと、熱がこ

もった目で見つめている寛貴がいた。

「力…抜け。…いいな」

辛そうな声で言われて頷くと、私を抱き締めていた腕を解いて身体を起こした。

「イヤ…いかないで」

手を伸ばすと、片手で私の両手首を掴みそのまま頭の上へ押し上げベッドへと押さえつけた。

「寛貴？」

違うの、抱き締めていて欲しいの。
首を横に振ると

「いつ…た…やあっ！」

躰を押し開かれ、引き裂かれるような激痛が走った。

「キツイか？」

背中から抱きしめられてお風呂に入っている私…

一人で入れるって頑張ったんだけど、ベットから降りたら、脚に力が入らなくて床に座り込みそうになり、寛貴に抱えられてお風呂に

入った。

どうしよう…寛貴とエッチしちゃった…
首を捻って後ろを見たら二の腕と肩に引っ掻いたような傷がついて
いた。

「私がやったんだよね？ごめんね」

赤く腫れている傷が痛々しかった。

「大した事ない。それより大丈夫か？」

寛貴にお腹を撫でられて頷いた。

下腹部に違和感があるけれど、それは甘くて幸せな痛みだから平気。
でも、まさかこんなことになるなんて思わなかった。

「煽ったのは梨桜、おまえだからな」

私が考えていたことが読めたのか、そうやって私の頬をぶにぶにと
摘まんでいた。

寛貴を煽るなんてそんなこと出来ないよ。

「分からないならいい。…後悔してるか？」

「してないよ。大好き」

寛貴の首に抱きつくくと、大きく溜め息をつかれてしまった。

「おまえな…」

「なに?」

「…いや、いい」

言いかけてやめるなんて、変なの。

「のぼせるから出るぞ」

寛貴の手に自分の手を重ねると、ぎゅっと握ってくれた。

・

・

『ふーん…とうとうやったか、あの男…』

計ったようなタイミングで来た円香ちゃんからの電話。

タカちゃんが私と尚人君との事を聞いて円香ちゃんに伝えたらしい。

尚人君の事は頭から抜けていて、寛貴の事で電話が来たと思ってしまった私は、彼女に動揺が伝わってしまい、吐けと脅され全部白状させられた。

『その分だと尚人の事は頭からすっぱり抜けてる感じだね』

「う…ん。でも、いきなりでびっくりしたよ」

あんなに悔しくて涙が出たのに、今は寛貴とのことで頭が一杯でど

うでもよくなりつつあった。

『あんたに考える時間を与えたら悩むだろうから、結果的には良かったんじゃない？』

流石、親友はなんでもお見通しだね。

「そうかも」

尚人君と付き合っていた時にはこんなことをするなんてどうしても考えられなかった。

寛貴と尚人君を比べた事はないけれど…こうなることを予感させるような素振をされていたら、戸惑ったと思う。

『痛かったでしょ』

思い出すと顔が赤くなる。

あんなに痛いと思わなかった。でも、一つになるって、肌を重ねるって幸せな気持ちになるんだって知った。

『藤島君で良かったよ、私も嬉しい。仲良くしなさいね』

「うん」

ありがとう、円香ちゃん。

私は今、凄く幸せな気持ちです。

触れる唇 (12) side:悠

水族館の敷地から出て、時間を潰せそうなカフェで粘ってみたけど…

・「へえ、由利ちゃんは東京の大学に進学したいんだ」

引き攣ってる。…スッゲー引き攣ってる！

拓弥さんの限界が近づいてきている。

「拓弥君は？」

「オレ？入れそうなところを適当にね」

嘘をつけ。拓弥さんの頭ならどこでも行けるクセに。

さっきから自称“梨桜ちゃんの親友”はいかに自分が可愛らしいかをアピールする事で一生懸命だ。

その為にはさり気なく梨桜ちゃんを貶める発言をしている。

ふざけんなよ、彼女は絶対に友達を悪く言うことは無い。

オレ、いい加減うんざりなんだけど…寛貴さん、まだ解放してもらえないんですか！？

「悪い、吸っていいかな」

この状況に耐えきれなくなった拓弥さんが胸ポケットに入れた煙草に手を伸ばすと、オレも手を伸ばした。

「拓弥君、煙草が似合うんだね。カッコイイ」

火を点けた煙草の煙を思いっきり吸い込んでしまったらしく、苦しそうにむせていた。
そこへ待ちに待った電話。

「もしもし！」

『オレだ。そっちはどうだ？』

どうだ？じゃないです！！早く解放してくんねーとオレも拓弥さんもキレル！！

「どうもこうもないです……」

『……拓弥に変わってくれ』

拓弥さんの目の前に携帯を出すと、奪うように取り耳に当てていた。

「寛貴、てめえ…… は？マジかよ……」

きつと拓弥さんの心の声は『てめえ、いつまでオレにこんな事させんだよ！』だと思いが、突然、顔がマジになった。

「……あの子らしいな。ああ、分かった……店で待ってる」

梨桜ちゃんか？らしいってどういうことだ？

電話を切って携帯をオレに返すと、拓弥さんは晴れ晴れとした顔をしてオレを見て笑った。

もしかして、許可が出たのか！？

「由利ちゃん、オレ達のトップから呼び出しがあったんだ。悪いけど、これで…」

「え？トップって？」

もういいよな…

「オレ達の学校の生徒会長でチームの頭が寛貴さんなんだよ。梨桜ちゃんの彼氏」

オレが言つとサツと顔色が変わる自称親友。

「あれ？知らなかったんだ。同じ高校の矢野君は知ってるのに」

拓弥さんに言われて慌てて愛想笑いを浮かべていた。
白々しいんだよ、バカ女。

「拓弥さん、梨桜ちゃんに何かあったのか？」

「…元カレのナントカ君と言い合いになって泣いてるらしい」

は！？言い合った？しかも元カレ？

「尚人と梨桜が？拓弥君、どういうこと？」

目の前の女がキツとオレ達を睨んだ。

「詳しくは知らねーよ。それより、梨桜ちゃんを泣かせて寛貴の逆鱗に触れてないってすげーな。…そういえば、あんたが寝取った男

だつたよな？」

「拓弥君？」

冷めた目で見下ろされて由利つて女は表情を変えた。何で知ってるの？つて顔だな。

あんたのやって来たことは筒抜けなんだよ。バーカ！

「なあ、マジで寛貴さんにヤラれてねーのその男」

「ああ。梨桜ちゃんの事で手一杯なんだろ。…あの寛貴がねえ…」

クツクと笑う拓弥さん。

そつえば前に初代が言つてたよな『梨桜が怒り出したらオレでも無理』つて。泣きだしたらどういふ状態になるのか見て見たいな…

「そついう事だから、じゃあな」

「拓弥君！？」

ヒラヒラと手を振り店を後にした。

「あゝ苦痛だつた！寛貴にメシを奢らせてやる！つたく、やってらんねーよ」

「お疲れさんでした。拓弥さんでも無理な女つていたんだな」

ギロリと睨まれて肩を竦めて朱雀の倉庫に向かった。

朱雀が溜り場になっているクラブに寛貴さんが姿を現したのは日付が変わる少し前。

何故か疲れた顔をしていた。

「なんだ？どうしたんだよおまえ」

「梨桜の泣き腫らした目を見たら代目と婚約者に問い詰められた…」

VIP席に来るなりドサリとソファに座って天井を仰いでいた。

「それで？」

拓弥さんが聞くと、何かを思い出したのか遠くを見ながら溜め息をついていた。

「梨桜から泣いた理由を聞いた2人がアイツを殴りに行くって言い出して、梨桜と二人で止めるのが大変だった…」

「梨桜ちゃんを宥めて、頭に血が上った5代目を宥めて…寛貴さんも大変だったんですね」

オレがグラスをテーブルに乗せると、酒を口にした寛貴さんがフツと柔らかい笑みを漏らした。

寛貴さん？…なんかいい事あったんですか？

おかえり

葵が帰って来た土曜日、学校からチームハウスに来ると葵と愁君は軽い時差ボケで仮眠中。

二人が起きるまでタカちゃんが沢山送ってくれた「胡桃」でデザートを作ろうと思い、地面にレジャーシートを広げてせっせとくるみを割っていた。

いいお天気で、日差しが温かくて気持ち良い！

葵も帰って来たし、ココと朱雀に通う日々がまた始まるんだね。

最初は違和感を感じていたけれど、今はココに居るのが楽しいと思うようになった。それは朱雀の倉庫も同じだけれど、葵の傍はやっぱり少し違う。

“一緒”の安心感。

「……話なら早くしてくれ」

突然聞こえた声に胡桃を割る手を止めた。

葵、寝てたんじゃないの？

「私、宮野さんにずっと憧れていました！」

おおー告白だ。相変わらず女の子に人気だね。でも、次にくる言葉は決まっていたも

「オレの何を知ってるんだよ」

やっぱりね…。

「知りません！でも、知ってる事もあります！双子のお姉さんと仲がいいことや、冷たそうに見せているけど、本当は優しいところとか…そういう宮野さんを見て憧れました！」

「…」

葵が黙っている。

葵の何を知っているのか。それをこんな風に切り返してくる女の子っていないんだと思う。

大抵、容姿や成績がいい事を理由に『憧れてる』とか『好き』って言われてきたことが多いから

葵がどんな言葉を返すんだろうと思っていたら

「ストーカーかよ」

違うからね…葵。

好きな人の事は目で追っちゃうの。いつも探しちゃうんだよ！でも、知らない人から『見てました』そう言われて引いちゃう気持ちも分かる。

「違います！ただ、宮野さんの事が好きなんです」

勇気を出して告白している女の子が少しだけ気の毒だ。

「付き合っして下さい。なんて言いません！ただ、憧れていて好きだって伝えたかっただけなんです！」

走り去る足音。

これは、言い逃げという奴だろうか…『好きでいること』それは自由。でも、こんな風に自分の気持ちをぶつけられる葵の事を考えたことはあるのだろうか？

足を伸ばしている私の膝に影が差しかかった。

「盗み聞きか？」

「私が先に居たの。別に今更でしょ？」

「まあな。…眠い、膝」

膝の上に乗せていたポールを避けて太ももをポンポンと叩いた。

「どうぞ」

レジャーシートの上にゴロンと横になり私の膝上に頭を乗せた。

「おかえり」

上から見下ろして言うと、少し眩しそうに目を細めながら笑った。

「ただいま」

片膝を立てて、長い脚をそこに乗せている。

何をしてもサマになる男だ。

「イギリスは寒かった？」

「ここよりは」

「パパにセーター渡してくれた？」

「ああ、すげー喜んでた」

サラサラの髪の毛を指で掬うと目を閉じてされるままになっていた。

「ねえ、冬休みに二人でパパの所に押しかけちゃおうか」

「…驚くぞ」

クリスマスプレゼントを持って、内緒で押しかけたら驚くだろうな…
家族でご飯を食べたい。それだけなんだけど…

「梨桜」

目を閉じていた葵が目を開いて私を見た。

「ん？」

「オレ、決めた」

何を決めたの？

髪の毛を掬う手を止めて葵を見ると、フッと笑って私の髪を撫でた。

「東堂に戻る」

「…」

突然言われて言葉が出なかった。

「戻るって…」

葵は体を起こして私の顔を覗き込んだ。

「梨桜はオレが東堂葵に戻ったら嫌か？」

首を横に振った。

「嫌な訳無いでしょ！…でも、本当にいいの？」

「梨桜が名字で呼ばれる度に反応してる自分がいたんだよ。オレも東堂なんだよなって思ってた。慧兄に言われて、考えたことを親父と話しあっただ。『東堂葵』に戻りたいって」

葵の首に腕を回して抱きついた。

私と呼ばれる度…そんな風に思ってたんだ。

複雑な気持ちだったね…気付いてあげられなくてごめん。

「パパは？」

「そうか。しか言わなかったけど笑ってた」

きつとパパも葵が言いだすのを待ってたんだね…パパも嬉しかったんだと思う。

「…ぎゅっつてしてくれるのか？」

葵に抱きついたままでしたら、頭の上でクスクスと笑いながら私の背中を撫でていた。

「うん。だから葵もぎゅっつてして？」

葵の腕に力がこもり、私もそれに負けじと力を籠めた。

「梨桜、体重かけるな！」

立ち膝で抱きついていていた私は寄りかかり過ぎてしまい、バランスを崩した葵は仰向けに倒れてしまった。

それでも離れない私に、苦笑しながら背中をポンポンと叩いていた。

「葵」

「ん」

「今日は私が葵の髪の毛乾かしてあげる」

「頭にドライヤーぶつけるなよ」

「がんばる」

「…道路から丸見えなんだけど。分かってる？」

首を捻って見れば、腕を組んで仁王立ちの愁君がいた。

私を抱えたまま体を起こした葵は、自分の足の間に私を座らせた。私達を見て難しい顔をしている愁君に、エへへ、と笑ってみただけだ。

「笑って誤魔化しても駄目」

ピシヤリと返されてしまった。…厳しいよ！

「別にいいじゃねーか」

葵が言うと冷めた視線を投げられて、ハア…と大きなため息をつかれてしまった。

「おまえらがじゃれてると下の奴等の目の毒になるんだよ。…それくらい解れよ」

昨日よりも… (1)

「愁君とデートするの久しぶりだね」

放課後に青龍のチームハウスに行く前に愁君とケーキ屋さんに寄り道。

目の前の王子様は頬杖をついてニコニコしながら私を見ている。

「藤島は何も言わないの？」

「どうして？」

いつも『愁君とケーキ食べてくるね』って言うと拓弥君が『餌付けデートな』ってからかうけど寛貴は何も言わない。

ムツとすると眉が寄せられるけど、それもなく『分かった。遅くなるな』ってそれだけしか言わない。だから、愁君とのデザートデートは麗香ちゃんとの放課後デートと同じくくりで許してくれているんだと思っている。

「余裕、って事か…ムカつくな」

一瞬黒い笑みが見えたような気がするけど、気付かなかった事にしよう。

「愁君、お願いがあるの」

ケーキを食べる手を止めて愁君の目を見るとニコリと笑みを返してくれる。

「改まってどうしたの？」

今日のお願いは『嫌だ。ダメ』って言われたら困るから慎重に切り出すことにした。

「私が変装してた時に制服を用意してくれたのは愁君だよな？」

素顔と素性がばれないようにしていたあの頃、登下校の度に違う制服に着替えて変装していた。

「そつだよ」

後になってあの時の制服は専用のお店で売られている物だと聞いて驚いたことを思い出して、今困っている問題は愁君に頼るしかない！って考えてお願いすることにした。

「学校祭の衣装を揃えたいからお店を教えてくださいの」

お願いします。と頭を下げた。

学校祭にメイドとアイドルにコスプレをする男子生徒。

『せっかくだから本格的に変身しようよ』そんな軽い言葉で始まった学校祭の準備だったけれど、衣装が揃わなくて苦労していた。

ここで愁君の力を借りることが出来れば助かる。そう思ったけれど返って来たのは意外な言葉。

「…内容によるな」

内容は当日まで秘密。

だけど、ここで愁君の力を借りられないのはとってもイタイ。

「内緒にしてくれる?」

「葵に?」

「寛貴と拓弥君にも。誰にも言わないで欲しいの」

お願い。

そう言つと、僅かに口角が上がつたような気がした。

「へえ…」

クラスの出し物の1つはメイドカフェで男子生徒が女装してメイドさんになるの。

私と麗香ちゃんはギャルソンの格好でメイドさんのサポート

もう1つは女装して、アイドルのコスプレをしてステージで踊るんだけど、なかなか思うようなのが揃わない

「梨桜ちゃんがメイドになるって言ったら協力しないつもりだったけど…面白そうだな。いいよ、これからそこに行く?」

「ほんと?ありがとうございます!」

「藤島にも内緒にっていうのがいいね」

うん。

聞かなかつた事にしよう…

思った通りの衣装を見つけることができなくてホッとした。
悠君用の衣装を見本として1着だけ持ち帰り、残りの分は後日サイ
ズを連絡することにした。

「ありがとう！イメージ通りの衣装だった」

愁君のおかげ。とお礼を言うとやっぱり王子様な笑みを向けてくれ
た。

「そう、良かったよ。……梨桜ちゃん、今度これを着てみてくれな
いかな。今日のお礼と口止め料はこれでいいよ」

愁君が取り出した衣装に絶句した……

「これ？」

「そう、これ。今どきいないから見てみたいんだよね。今度の定例
会でいいよ」

お願いする人を間違えたかもしれない。

愁君の趣味って分からない……

昨日よりも… (2)

「梨桜ちゃん、海堂君は？」

マスカラを塗ってあげながら聞いてきた麗香ちゃんに、グロスを塗ってあげながら答える。

「逃げられたよ。メイクしてないの悠君だけになっちゃった」

「昨日も『絶対ヤダ！』って叫んでたもんね…。あ、まだ動いちゃダメ」

今日最後の授業はLHRで学校祭の準備。

「明日は絶対に悠君を捕まえるから麗香ちゃんも手伝ってね」

「うん」

授業が終わった後も準備に勤しんでいるクラスメイト達。険悪だったクラスの雰囲気も大分変わり皆で和気あいあいと準備を楽しんでいた。

「目を閉じてね」

「東堂さん、すげーくすぐりたいんだけど」

「ダメだよ。じっとしてて」

「出来た！可愛いよ」

麗香ちゃんと二人で男の子達をメイク中。力作が出来上がるたびに教室の中は異様に盛り上がっている。

ただのガリ勉が集まったクラスだと思っていたけれど、紫苑学院だけあって素質は十分あったらしく、弾けっぷりが凄い。みんな、勉強してるるときよりイイ顔してる。

女装中ってというのが…笑えるけどね。

「東堂さんギャルソン用のコスチューム届いたよ。笠原さんのは遅れてるみたいだな」

その言葉にグループから外れて麗香ちゃんとコスチュームを受け取った。

「着替えてみようか？」

麗香ちゃんに付き添ってもらって女子更衣室で着替えることにした。胸にサラシ巻いて平にしてウィッグを被り、眉毛を少し足して…凛々しく見えるように少しだけメイクをして…

男装って初めてだけど、ちゃんと男の子に見えるか心配。

手鏡に自分の顔を映しながら葵の真似をして眉を顰めてみるけれど

上手く行かない。

「うーん…男の子に見える？」

「イケメンガールだあ…梨桜ちゃんカッコいい！！」

私の手を握ってブンブンと振る麗香ちゃんが可愛い。

「葵みたい？」

「あ、ちょっと似てるかも！！宮野君に弟がいたらこんな感じ？」

やっぱり私達って基本は似てるんだね。

男装して、葵にかけ離れてたら立ち直れなかったよ…

「先生と一緒に写真撮ろうよ」

麗香ちゃんがデジカメを取り出してニコニコ笑っていた。

「うん！」

二人できゃいきゃい騒ぎながら廊下を歩いていると、通りすがりの生徒が皆振り返って見ていくけれど、誰も私だとは分らないらしい。

今度学生服を着て紛れてみようかな？

「安達セーセンス！」

「センス！」

職員室の入口で呼びかけると振り返った先生は固まっていた。

「…オレに話しかけるってことはオレの生徒だよな？」

麗香ちゃんが私の腕に自分の腕を絡めて「やったね！」と喜んでい
る。

「先生！」

私が聞くと私を指差して「あぁっ!？」と驚いていた。

「おまえ、もしかして!！」

唇に指をあててナイショだよ、とジェスチャーすると先生は口に手
を当てて頷いていた。

「先生、一緒に写真とろう!！」

「おお」

職員室から中庭に出て撮影会。

「どうして最近の若い子は女の子どうしでキスすんだよ?。」

麗香ちゃんが私の頬に唇を寄せている。

「だってカツコイなんだもーん!先生もしてほしい?。」

「おお、チュウしろ!！」

ふざけた先生といろんなポーズで写真を撮った。
こういうのも楽しい。普通の高校生みたい！

「笠原、これで何か買って来い」

「ハ―イ、先生ありがとー」

麗香ちゃんは先生からお金をもらってパタパタと走って行った。
先生は煙草を取り出して銜えると私をマジマジと見ていた。

「マジで東堂が男に見えるな」

「これなら学校祭も成功するかな」

「そうなるといいな」

目を伏せながら煙草に火を点けていた。

こつこつ仕草を見ると慧君の後輩って本当だったんだなあって納得できる。

「東堂」

「はい」

「お前が転校してきたときはどうなるかと思ったけど…東堂の親父さんに感謝だな。笠原も元気に登校してくるようになったし…いいがみ合いを見なくて済む」

煙が私に来ないように、横を向きながら煙を吐き出した先生の横顔が笑っているように見えた。

「私は何もしてないと思います。…でも、先生には迷惑かけてばかりでごめんなさい」

麗香ちゃんの事は『友達になりたかったから』それが理由だったけれど、“北陵”の件では彼女を危険な目に遭わせて、最終的には先生にもたくさん迷惑をかけてしまった。

「オレはおまえのセンセイだからな。手のかかる生徒程カワイイだろ?」

「先生、本当?」

本当にそう思ってくれてる?

ジッと先生の目を見つめると、フィツと顔を横に逸らした。

「…多分」

酷い!

ちよつとだけ感動したのに!!

ムツと先生を睨むとケラケラ笑いながら煙草を吸っていた。

「先生の意地悪!」

定例会で来た紫苑学院はいつもの放課後なら人もまばらなのに今日は多くの生徒が残っていた。

「さすがに学祭の準備期間中は浮足立ってる感じだな」

愁さんが辺りを見回しながら言うと葵さんは興味無さそうにしていた。

「梨桜さんも準備で忙しそうですよね」

そう言うとチツと舌打ちする葵さん。

「藤島から生徒会役員は参加しなくてもいいって聞いたのに…」

梨桜さんが学祭に参加するのが面白くないらしい。

この前はドラッグストアからクラスの野郎達用のメイク道具を買い込んでいた。梨桜さんがメイクするって聞いて葵さんの顔が引き攣っていたのが忘れられない。

生徒会室に入ると誰もいなかった。

「いないのか?…ああ、あそこか…」

生徒会室の窓から見える隣の校舎の屋上に藤島と大橋がいるのが見えた。

フェンスに寄りかかりながら煙草を吸っているように見える。

そこに海堂の姿は無い。奴も梨桜さんと一緒に学祭の準備か?

「愁、オレ達も行くか？」

「今はいい」

椅子に座り足を組んで寛いでいる葵さんと愁さん。二人の荷物をテーブルの隅に置きながら生徒会室を見回した。梨桜さんもないんだな…つまんねえ。

ふと、隣の部屋に目がいった。

いつもは開放たれている隣の部屋の扉が閉まっている。ドアを見ていたら、“カタン”と小さな物音がしたような気がした。

誰がいるのか？

扉の前まで行くと…

『逃げちゃダメ』

扉の向こうから楽しそうな声が聞こえる。

『…っ！こん、なの…やだ…』

途切れ途切れで良く聞こえないが、嫌がっているのは男の声。

『だから、逃げちゃだーめ』

これは梨桜さんの声に似ていると思う。

いや、この学校でココの部屋に入れる女子生徒って梨桜さんしかないと思う。

『フフツ…ねえ、くすぐりたい?』

楽しそうだな。何やってんだ?

『や…める』

『恥ずかしがらないで、見せて?』

嫌がっている相手に何やら強要しているらしい梨桜さん。

『私以外に誰も見ていないから。ね?見せて…』

その声色がとても楽しそうで、何故か艶っぽく聞こえる。

『…っ!』

楽しそうにしながら、一体何を強要してるんですか?

その声を聞くと赤面する!…すっげー気になる!!

「何してんだお前」

「!?!」

突然隣に大橋の顔があって吃驚した。

さっきまで屋上にいた筈なのにオレの隣に立っていた…やめろよ、心臓に悪い!

後ろを振り返ればそこにいるのは二人の総長。否、今は生徒会長か…

『可愛い…』

『やめ…』

「なに赤くなったり青くなったりしてんだよ、気持ち悪い奴だな」

梨桜さん、この密室で彼氏じゃない男と何をしてるんですか!?
オレが青ざめていると、大橋は楽しそうに笑っている。

『どうして隠すの?こんなに可愛いのに』

大橋は中から聞こえてくる梨桜さんの声をニヤニヤ笑いながら聞いていた。

「おい、コジ?」

こ、これは見つかったらヤバイんじゃないだろうか…
葵さんの問にまともに答えられなかった。

「いや、あの…」

笑い事じゃねーぞ!? 梨桜さん! 早く出てきて!
大橋が手招きすると、面倒そうにこちらへ来た藤島。

面倒なら来るな! それがおまえの為かもしれない!

口を開こうとする藤島に自分の人差し指を唇に当てて『静かにしろ』
とジェスチャーしていた。

「?」

大橋が唇に指をあてたまま、親指を扉に向けると訝しげにしながら藤島が扉に耳を当てた。

『もう、やめ…』

『ダメ！最後までするの』

梨桜さん、ナニを最後までスルんですか！？

いくら梨桜さんといえども、藤島は許さないと思う！…：…：現に思いつきり眉間に皺が寄ってるぞ！？

『…こんなの』

『約束でしょ？今日、するって。もう逃がさないんだから』

「アイツ…」

低い声にビクツと肩を竦めると、葵さんと愁さんまで扉に貼り付いていた。

藤島は…恐くて見れない。

『これが最後だよ』

最後？

『もう…』

『動かないで。…ね？』

『…ヤダ』

『ダメ。私の事見てて?…いい?』

『オレ、怖い』

『最初は違和感があるけど慣れれば大丈夫だよ。いい?入れるよ?』

バーン!!

葵さんが凄い勢いで扉を開けた。

「梨桜!!」

うわっ葵さん!!

アアレもないカツコの梨桜さんがいたらどうすんですか!?

昨日よりも… (4) side:コジ

「梨桜！おまえは何やってんだ！！」

オレ達がなだれ込んだ生徒会準備室のソファの上で、梨桜さんがキョトン。としてこちらを見ていた。

服が乱れた様子もなく、むしろ制服の上にパーカーを着こんでいる。今日も可愛い梨桜さんは、人差し指を立てたまま振り返ってオレ達を見ていた。

「葵？びっくりしたあ…って、ああ！！落としちゃった！！」

床を見ながら「どうしよう！」と慌てていて、梨桜さんの隣で誰かが立ち上がった。

「うわあ！」

え？…ええっ！？

「待って！逃げないで！！」

美少女が走って逃げていった。

美少女？

「葵のせいで逃げられちゃったじゃない！」

何故、美少女？さっきまで聞こえていたのは男の声と梨桜さんの声…だよな？

「こんなところでナニをやつてんだよ!? バカ!」

勢いが治まらない葵さんに梨桜さんがキツと睨み返していた。

「ナニって…あーん、もう!! やつと捕まえたのに! カラコンも落としちゃったじゃない!」

藤島が床に落ちていたカラーコンタクトレンズを拾い上げ梨桜さんの手に乗せた。

「ここで何をしていたんだ?」

「学校祭の準備だよ。テストメイクしてたのにつ!」

ソファーに座り、テーブルに並べられていたメイク道具を片付け始めた。

メイクとカラコン… やつと話の流れがつかめて一人で納得した。だから、『可愛い』『動かないで』なんだな… 焦ったぜ

「今逃げて行つたのって…」

大橋が言つと梨桜さんはフツツと笑つた。

「可愛かつたでしょ? 拓弥君の好みだと思つんだよね」

でも、さっきは男の声が…

「まさか、あれ男!?!」

オレが言うのと嬉しそうにニッコリと笑う梨桜さん。
あの美少女は男……

「最後の仕上げだったのに、皆が乱入してくるから恥ずかしくて逃げちゃったじゃない」

「さっきの美少女、誰だ？」

大橋が首をひねって考えている。

「さあ、誰だろう？当日までお楽しみにね」

ニッコリ笑った梨桜さんが立ち上がると、葵さんが声をあげた。

「おまえ、なんだその格好は！？」

ハツとした顔をした梨桜さんは、慌てて羽織っていたパーカーの前面を合わせて隠した。
チラリと見えたその格好は……

「見ちゃダメ！」

藤島と葵さんに睨まれた梨桜さんは笑って誤魔化しながら逃げようとしたけれど、藤島が伸ばした腕にアッサリと捕まっていた。

「ヤダ！！」

さっきとまるつきり立場が逆ですね……。藤島に羽交い絞めにされて葵さんにパーカーを脱がされて……

「おまえ……」

呆然とする藤島に目をキラキラさせている大橋。

「梨桜ちゃん、それヤバイよ」

「梨桜！何を考えてんだ！！」

怒っている葵さんに何故か無言で笑みを浮かべている愁さん。…愁さん？

「……………」

愁さんが不思議だったけれど、梨桜さんをもう一度見て頷いた。

その恰好はオレもヤバイと思う…

だって…どうみてもソレって『スケバン』ですよ？

改造されたセーラー服。

胸元を隠している当て布は外されていて襟が大きく開かれ、着丈が短くチラチラと白い肌が見えていて、袖はお約束で捲られていた。

スカートはミニで腰には細いチェーンが回されていて細い腰が強調されている。

「梨桜ちゃん、似合うね」

ニッコリと笑う愁さんに涙目になっている梨桜さんが何かを訴えるように見えていた。

今時、こんなヤンキーはいないと思うけど、こんなに可愛いヤンキ

「なら大歓迎だ!!!」

「つーかチームにこんな姫がいたら大変だ！」

「そんな申請はなかったよな」

大橋が書類を取り出して調べ始めると、ジタバタと暴れる梨桜さんを藤島が抑え込んでいた。

「やだっ!!! 離して!!!」

「おまえのクラスは何をしでかすつもりなんだ？」

「なにもしないよ、これは!」

藤島に問い詰められて焦っている梨桜さん。

「これは？」

愁さんに微笑まれてグツと口を噤んだ梨桜さん。…愁さん、さっきからアヤシイんですけど？

「梨桜？」

葵さんに凄まれて口をつぐんだままフルフルと首を横に振る梨桜さん。

このスケバン、メチャクチャ可愛い…

「じゃあ、おまえのその格好はなんだ」

「…着てみてって言われたから着ただけ」

「ステージ用じゃないだろうな」

「く、詳しい事は教えてもらってないから知らない」

何となく苦し紛れな気がするのは気のせいじゃないような…

「丈が短かすぎる」

「見えても大丈夫なショートパンツ履いてる」

「ヘソが見えてんだろーが！」

「葵、細かすぎるよ！」

藤島の腕の中にいながら葵さんと言い合う梨桜さん…梨桜さんの男になるには相当寛大じゃないといけないんだな。

「梨桜……」

耳元で話す藤島の言葉に梨桜さんの頬が染まった。

「っ！っ！ヤダッ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1227r/>

秋桜

2011年11月29日23時55分発行